

2023

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第293集

第293集

藤
ヶ
城
跡

藤ヶ城跡

長野県佐久市岩村田 藤ヶ城跡発掘調査報告書

佐
久
市
教
育
委
員
会

2023. 3

佐久市教育委員会

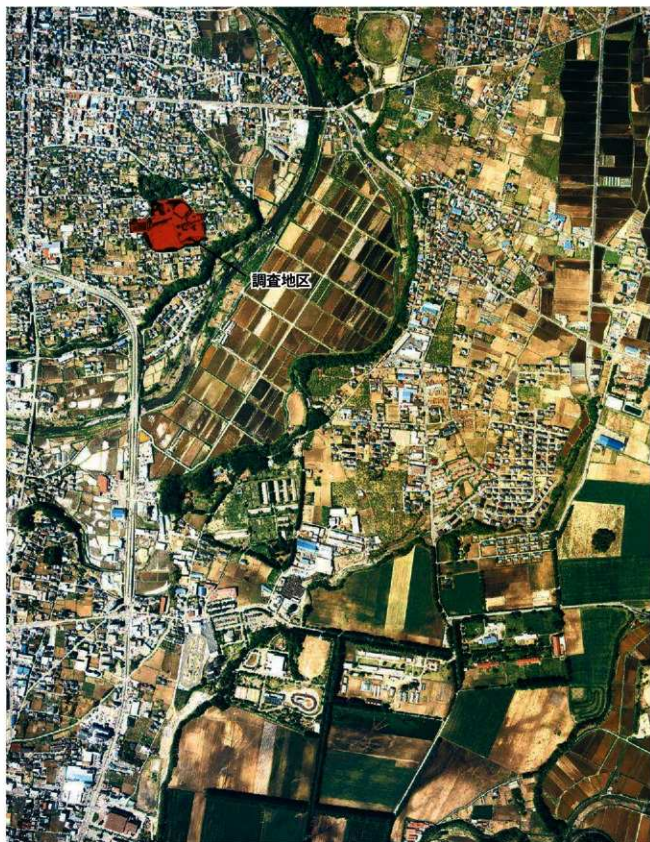
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第293集

藤ヶ城跡

長野県佐久市岩村田 藤ヶ城跡発掘調査報告書

2023. 3

佐久市教育委員会



遺跡付近の航空写真 (株式会社こうそく 撮影 1994)



遺跡より浅間山を望む (有限会社イー・ティー・シー企画撮影 2017)



遺跡より湯川を望む (株式会社 共同測量社撮影 2002)



1区調査区全景(北より)



H46号住居跡カマド全景



Ⅲ区 M9号溝状遺構調査状況(北より)



Ⅲ区 M9号溝状遺構土層堆積状況



OT20号火葬墓



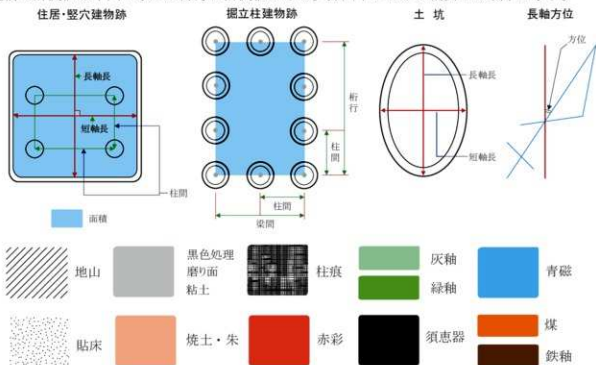
OT19号火葬墓

例 言

1. 本書は、佐久市が行う市立岩村田小学校改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 佐久市教育委員会 教育施設課
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名・調査面積 藤ヶ城跡Ⅰ～Ⅴ (I F U I ~ V) 6,324㎡
5. 所在地 佐久市岩村田字上ノ城2641-2 他
6. 調査期間 平成27年4月24日～令和元年11月29日(現場発掘作業)
令和元年12月～令和5年3月(報告書作成作業)
7. 調査担当者 小林真寿(平成27年度) 富沢一明
8. 本書の整理作業は富沢が行った。また、石材鑑定は羽毛田が行い、原稿は文頭か文末に文責を記載した。その他記載の無いものは執筆を富沢が行った。なお、陶磁器類の鑑定は(財)長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏に、城郭については(財)長野県埋蔵文化財センター 河西克造氏にそれぞれ御教示を頂いた。記して感謝申し上げる。
9. 本書及び出土遺物は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略記号は、住居跡(H)・掘立柱建物跡(F)・土坑(D)・溝状遺構(M)・火葬墓(OT)である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。()は推定値、< >は残存値である。
6. 測量座標は世界測地系を用い、調査区グリッドは公共座標の区割りに従い、間隔は4×4mに設定した。
7. 遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。挿図中における網掛けは以下を示す。



目次

巻頭カラー図版
例言・凡例・目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	
第1節 自然的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の方法	
第1節 調査の方法	8
第2節 遺構・遺物の概要	9
第3節 基本層序	9
第Ⅳ章 調査の成果	
第1節 竪穴住居跡	12
第2節 掘立柱建物跡	110
第3節 土坑	134
第4節 溝状遺構	148
第5節 火葬墓・土壙墓	161
第6節 ビット	179
第7節 土壘	196
第8節 遺構外出土遺物	196
第Ⅴ章 自然科学分析	
第1節 藤ヶ城跡出土遺物自然科学分析	210
第2節 藤ヶ城跡出土人骨鑑定	224
第Ⅵ章 調査の総括	
第1節 墨書「西」について	245
第2節 中世堀跡と小字「上の城」について	246
第3節 藤ヶ城跡関連遺構について	249
第4節 まとめ	252
抄録	
写真図版 遺構図版 図版1～81	
遺物図版 図版82～134	
遺構計測表 (掘立柱建物跡、火葬墓・土壙墓、ビット)	第1表～15表
出土遺物観察表	第16表～46表
人骨検出状況表	第47表～62表

挿図目次

第1図	藤ヶ城跡I～V位置図(1:50000)	第44図	H23号住居跡及び出土遺物実測図
第2図	佐久市地質図	第45図	H25号住居跡及び出土遺物実測図
第3図	周辺遺跡位置図	第46図	H26号住居跡及び出土遺物実測図
第4図	岩村田周辺の調査遺跡位置図	第47図	H27号住居跡実測図
第5図	藤ヶ城跡調査全体図(1:1000)	第48図	H27号住居跡出土遺物実測図(1)
第6図	H1号住居跡及び出土遺物実測図	第49図	H27号住居跡出土遺物実測図(2)
第7図	H2号住居跡実測図	第50図	H28号住居跡及び出土遺物実測図
第8図	H2号住居跡出土遺物実測図(1)	第51図	H29号住居跡及び出土遺物実測図
第9図	H2号住居跡出土遺物実測図(2)	第52図	H30号住居跡及び出土遺物実測図
第10図	H3号住居跡及び出土遺物実測図	第53図	H30号住居跡出土遺物実測図
第11図	H4号住居跡及び出土遺物実測図	第54図	H31号住居跡及び出土遺物実測図
第12図	H4号住居跡出土遺物実測図	第55図	H32号住居跡及び出土遺物実測図
第13図	H5号住居跡及び出土遺物実測図	第56図	H33号住居跡実測図
第14図	H5号住居跡出土遺物実測図	第57図	H33号住居跡出土遺物実測図
第15図	H6号住居跡実測図	第58図	H34号住居跡及び出土遺物実測図
第16図	H6号住居跡出土遺物実測図	第59図	H35号住居跡出土遺物実測図
第17図	H7号住居跡及び出土遺物実測図	第60図	H35号住居跡実測図
第18図	H7号住居跡出土遺物実測図	第61図	H36号住居跡及び出土遺物実測図
第19図	H8号住居跡及び出土遺物実測図	第62図	H37号住居跡及び出土遺物実測図
第20図	H8号住居跡出土遺物実測図	第63図	H37号住居跡出土遺物実測図
第21図	H9号住居跡及び出土遺物実測図	第64図	H38号住居跡及び出土遺物実測図
第22図	H10号住居跡及び出土遺物実測図	第65図	H39号住居跡及び出土遺物実測図
第23図	H10号住居跡出土遺物実測図	第66図	H40号住居跡及び出土遺物実測図
第24図	H11号住居跡及び出土遺物実測図	第67図	H41号住居跡実測図
第25図	H12号住居跡実測図	第68図	H41号住居跡出土遺物実測図
第26図	H13号住居跡及び出土遺物実測図	第69図	H42号住居跡及び出土遺物実測図
第27図	H14号住居跡及び出土遺物実測図	第70図	H43号住居跡及び出土遺物実測図
第28図	H15号住居跡及び出土遺物実測図	第71図	H44号住居跡実測図
第29図	H16号住居跡及び出土遺物実測図	第72図	H45号住居跡及び出土遺物実測図
第30図	H17号住居跡及び出土遺物実測図	第73図	H45号住居跡出土遺物実測図
第31図	H18号住居跡出土遺物実測図(1)	第74図	H46号住居跡実測図
第32図	H18号住居跡出土遺物実測図(2)	第75図	H46号住居跡出土遺物実測図(1)
第33図	H18号住居跡実測図	第76図	H46号住居跡出土遺物実測図(2)
第34図	H19号住居跡及び出土遺物実測図	第77図	H47号住居跡及び出土遺物実測図
第35図	H20号住居跡実測図	第78図	H48号住居跡及び出土遺物実測図
第36図	H20号住居跡出土遺物実測図(1)	第79図	H48号住居跡出土遺物実測図
第37図	H20号住居跡出土遺物実測図(2)	第80図	H49号住居跡実測図
第38図	H20号住居跡出土遺物実測図(3)	第81図	H49号住居跡出土遺物実測図
第39図	H20号住居跡出土遺物実測図(4)	第82図	H50号住居跡及び出土遺物実測図
第40図	H20号住居跡出土遺物実測図(5)	第83図	H51号住居跡及び出土遺物実測図
第41図	H21号住居跡及び出土遺物実測図	第84図	H52号住居跡実測図
第42図	H21号住居跡出土遺物実測図	第85図	H52号住居跡出土遺物実測図
第43図	H22号住居跡及び出土遺物実測図	第86図	H53号住居跡実測図

第87図	H54号住居跡及び出土遺物実測図	第120図	F21号掘立柱建物跡実測図
第88図	H54号住居跡出土遺物実測図	第121図	F22号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図
第89図	H56号住居跡及び出土遺物実測図	第122図	F23号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図
第90図	H57号住居跡及び出土遺物実測図	第123図	F24号掘立柱建物跡実測図
第91図	H58号住居跡実測図	第124図	F25号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図
第92図	H59号住居跡及び出土遺物実測図	第125図	F26号掘立柱建物跡実測図
第93図	H60号住居跡及び出土遺物実測図	第126図	F27号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図
第94図	H61号住居跡実測図	第127図	F28号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図
第95図	H62号住居跡及び出土遺物実測図	第128図	F29号掘立柱建物跡実測図
第96図	H63号住居跡及び出土遺物実測図	第129図	F30号掘立柱建物跡実測図
第97図	H64号住居跡及び出土遺物実測図	第130図	F31号掘立柱建物跡実測図
第98図	H65号住居跡及び出土遺物実測図	第131図	D1号土坑及び出土遺物実測図
第99図	H66号住居跡及び出土遺物実測図	第132図	D2～11号土坑及び 出土遺物実測図
第100図	F1号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第133図	D12～14・18～25号土坑及び 出土遺物実測図
第101図	F2号掘立柱建物跡実測図	第134図	D26～32号土坑及び 出土遺物実測図
第102図	F3号掘立柱建物跡実測図	第135図	D34号土坑及び出土遺物実測図
第103図	F4号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第136図	D35号土坑及び出土遺物実測図
第104図	F5号掘立柱建物跡実測図	第137図	D36号土坑及び出土遺物実測図
第105図	F6号掘立柱建物跡実測図	第138図	D38～45号土坑及び 出土遺物実測図
第106図	F7号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第139図	D46～49号土坑及び 出土遺物実測図
第107図	F8号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第140図	M1号溝状遺構及び出土遺物実測図
第108図	F9号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第141図	M2～6・8号溝状遺構及び 出土遺物実測図
第109図	F10号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第142図	M7号溝状遺構及び出土遺物実測図
第110図	F11号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第143図	M9号溝状遺構実測図
第111図	F12号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第144図	M9号溝状遺構出土遺物実測図
第112図	F13号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第145図	M10号溝状遺構及び 出土遺物実測図
第113図	F14号掘立柱建物跡実測図	第146図	M11号溝状遺構及び 出土遺物実測図
第114図	F15号掘立柱建物跡実測図	第147図	M11号溝状遺構出土遺物実測図
第115図	F16号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第148図	M12号溝状遺構及び 出土遺物実測図
第116図	F17号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図	第149図	M13号溝状遺構及び 出土遺物実測図
第117図	F18号掘立柱建物跡実測図		
第118図	F19号掘立柱建物跡実測図		
第119図	F20号掘立柱建物跡及び 出土遺物実測図		

- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|----------------|
| 第150図 | I区火葬墓・土壌墓位置図 | 第171図 | ビット平面図(10) |
| 第151図 | OT1～5・7・8号
火葬墓及び出土遺物実測図 | 第172図 | ビット平面図(11) |
| 第152図 | OT6・9～11号
火葬墓・土壌墓及び出土遺物実測図 | 第173図 | ビット平面図(12) |
| 第153図 | OT12～15・18号火葬墓
及び出土遺物実測図 | 第174図 | ビット平面図(13) |
| 第154図 | Ⅲ区火葬墓・土壌墓位置図 | 第175図 | ビット平面図(14) |
| 第155図 | OT16・17・19～21号
火葬墓及び出土遺物実測図 | 第176図 | ビット出土遺物実測図(1) |
| 第156図 | OT22～25号火葬墓
及び出土遺物実測図 | 第177図 | ビット出土遺物実測図(2) |
| 第157図 | OT26～31号火葬墓・土壌墓
及び出土遺物実測図 | 第178図 | 土塁実測図 |
| 第158図 | OT32～37号火葬墓
及び出土遺物実測図 | 第179図 | 土塁出土遺物実測図 |
| 第159図 | OT38～43号火葬墓・土壌墓
及び出土遺物実測図 | 第180図 | 遺構外出土遺物実測図(1) |
| 第160図 | OT44・45号火葬墓実測図 | 第181図 | 遺構外出土遺物実測図(2) |
| 第161図 | ビットセクション図 | 第182図 | 遺構外出土遺物実測図(3) |
| 第162図 | ビット平面図(1) | 第183図 | 遺構外出土遺物実測図(4) |
| 第163図 | ビット平面図(2) | 第184図 | 遺構外出土遺物実測図(5) |
| 第164図 | ビット平面図(3) | 第185図 | 遺構外出土遺物実測図(6) |
| 第165図 | ビット平面図(4) | 第186図 | 遺構外出土遺物実測図(7) |
| 第166図 | ビット平面図(5) | 第187図 | 遺構外出土遺物実測図(8) |
| 第167図 | ビット平面図(6) | 第188図 | 遺構外出土遺物実測図(9) |
| 第168図 | ビット平面図(7) | 第189図 | 遺構外出土遺物実測図(10) |
| 第169図 | ビット平面図(8) | 第190図 | 遺構外出土遺物実測図(11) |
| 第170図 | ビット平面図(9) | 第191図 | 石製品計測凡例図 |
| | | 第192図 | 遺構外出土遺物実測図(12) |
| | | | 調査の総括 |
| | | 第1図 | 墨書「西」集成図 |
| | | 第2図 | 「四鄰譚載」掲載図 |
| | | 第3図 | 「岩村田上ノ城反別縮図」 |
| | | 第4図 | 上の城跡推定縄張り図 |
| | | 第5図 | 藤ヶ城跡復元図 |
| | | 第6図 | 岩村田御新城分間縮図 |

写真図版

- | | | | |
|------|---------------|------|----------------------------------|
| 図版1 | IV区全景
I区全景 | 図版13 | H12号住居跡
H13号住居跡 |
| 図版2 | H1号住居跡 | 図版14 | H14号住居跡 H16号住居跡カマド
H15号住居跡カマド |
| 図版3 | H2号住居跡 | 図版15 | H15号住居跡 |
| 図版4 | H3号住居跡 | 図版16 | H17号住居跡 |
| 図版5 | H4号住居跡 | 図版17 | H18号住居跡 |
| 図版6 | H5号住居跡 | 図版18 | H19号住居跡 |
| 図版7 | H6号住居跡 | 図版19 | H20号住居跡
H21号住居跡カマド |
| 図版8 | H7号住居跡 | 図版20 | H21号住居跡 |
| 図版9 | H8号住居跡 | 図版21 | H22号住居跡 |
| 図版10 | H9号住居跡 | 図版22 | H23号住居跡 |
| 図版11 | H10号住居跡 | 図版23 | H25号住居跡 |
| 図版12 | H11号住居跡 | | |

図版24	H26号住居跡	図版61	D29~31・34・35号土坑
図版25	H27号住居跡	図版62	D32・36・38~43号土坑
図版26	H28号住居跡	図版63	D44~48号土坑
図版27	H30号住居跡	図版64	M1・2・6号溝状遺構
図版28	H31号住居跡	図版65	M7・9号溝状遺構
図版29	H32号住居跡	図版66	M9号溝状遺構
図版30	H33号住居跡	図版67	M10号溝状遺構
図版31	H34号住居跡	図版68	M11号溝状遺構
図版32	H35号住居跡	図版69	M12・13号溝状遺構
図版33	H36号住居跡	図版70	M13号溝状遺構
図版34	H37号住居跡	図版71	O T 1~8号火葬墓
図版35	H38号住居跡	図版72	O T 9~13・15号火葬墓・土壙墓
	H39号住居跡	図版73	O T 14・16~19号火葬墓
図版36	H40号住居跡	図版74	O T 20~26号火葬墓
図版37	H41号住居跡	図版75	O T 27~32号火葬墓・土壙墓
図版38	H42号住居跡	図版76	O T 33~40号火葬墓
	H43号住居跡	図版77	O T 41~45号火葬墓・土壙墓
	H44号住居跡	図版78	藤ヶ城跡土壙調査状況
図版39	H45号住居跡	図版79	土壙検出状況
図版40	H46号住居跡	図版80	土壙版築状況
図版41	H47号住居跡	図版81	土壙版築状況②・③
図版42	H48号住居跡	図版82~134	出土遺物
図版43	H49号住居跡		
図版44	H50号住居跡		
図版45	H51号住居跡		
	H52号住居跡		
図版46	H53号住居跡		
図版47	H54号住居跡		
図版48	H56号住居跡		
	H57号住居跡		
図版49	H58号住居跡		
	H59号住居跡		
図版50	H60号住居跡		
図版51	H61号住居跡		
	H62号住居跡		
図版52	H63号住居跡		
	H64号住居跡		
図版53	H65号住居跡		
図版54	H66号住居跡		
図版55	F1~8号掘立柱建物跡		
図版56	F9~12・14~17号掘立柱建物跡		
図版57	F18~22・29~31号掘立柱建物跡		
図版58	D1~8号土坑		
図版59	D9~14・19・20号土坑		
図版60	D21~28号土坑		

表目次

第1~3表	掘立柱建物跡計測表
第4・5表	火葬墓・土壙墓計測表
第6~15表	ピット計測表
第16~46表	出土遺物観察表
第47~62表	人骨検出状況表
第1~20図	火葬墓出土人骨部位

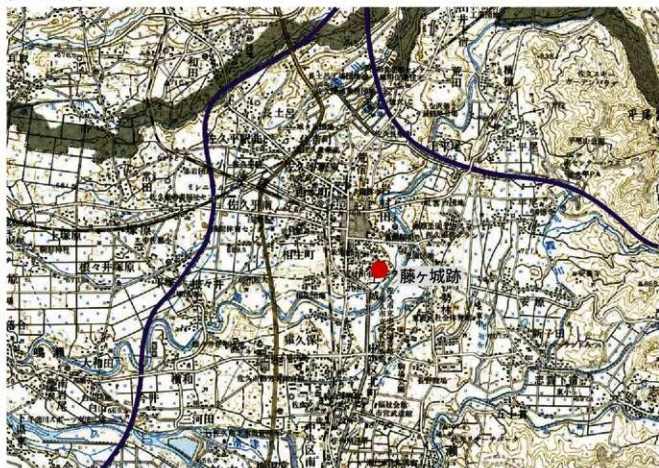
第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯

藤ヶ城跡は佐久市岩村田市街地の南東方向に位置する。城跡が立地する台地は標高690m前後を測り、台地下を流れる湯川との比高差は約20mである。東と南は急峻な崖地形となっている。北より流れる湯川は、城跡眼下で流れを西に大きく変える。このため、崖地形と伴に湯川が東と南の防御の要となっている。

藤ヶ城は幕末に築城された岩村田藩内藤家の城郭で南北約300m・東西約550mの城域を持つ。現在では井戸や土塁等が残されている。周辺部の遺跡調査としては、小学校と隣接する児童館建設の折に上ノ城遺跡が調査され、古墳時代や奈良時代の竪穴住居跡、中世の堀跡、火葬墓などが検出されている。また、付近を通る国道141号線工事に伴い発掘調査が行われた上の城遺跡Ⅱでは古墳時代から平安時代の竪穴住居跡47軒、掘立柱建物跡9棟等が調査され、出土遺物としては「東」と書かれた墨書土器が多数発見されている。今回の調査で多く出土した「西」の墨書との関係が注目される。また、北東に接して調査された下信濃石遺跡からは中世寺院関連の遺構・遺物が確認され、初期龍雲寺との関連が注目された。

今回、城域内において岩村田小学校改築工事が佐久市により計画され、文化財保護法94条が長野県教育委員会宛て、佐久市教育委員会に通知された。市教育委員会では該地の試掘調査を行い、学校敷地内から遺構を発見した。保護協議の結果、工事により遺跡破壊が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うことになり、佐久市教育委員会文化振興課において発掘調査が実施される事となった。



第1図 藤ヶ城跡1～V位置図(1:50000)

第2節 調査体制

調査受託者 佐久市教育委員会 教育長 棚澤晴樹 (R3年5月迄)
吉岡道明 (R3年6月～)

事務局

社会教育部長	山浦俊彦 (H27年)	荻原幸一 (H28・29年)	
	青木 源 (H30・31年)	三浦一浩 (R2年)	
	土屋 孝 (R3年～)		
文化振興課長	小林 聖 (H27年)	三石 建 (H28年)	
	小林義男 (H29・30年)	東城 洋 (H31・R2年)	
	平林照義 (R3年)	中沢栄二 (R4年)	
企画幹	三石 建 (H27年)	小林登志朗 (H28・29年)	武者新一 (H30年)
	吉田 晃 (H31年)	岡部政也 (R2年)	谷津和彦 (R3年)
	井上 剛 (R4年～)		
文化財調査係長	大塚広樹 (H27～29年9月)	堀川宏幸 (H29年10月～H30年)	
	山本秀典 (H31年～R3年、R4年7月～)	伊澤信子 (R4年4～6月)	
文化財調査係	小林眞寿 (R2年4月～再任用)	富沢一明 上原 学	
	神津一明 (H27・28年)	生島修平 (H27・28年)	
	岩下 琴 (H29～H30年6月)	荻原義治 (H30年7月～3月)	
	羽毛田卓也 (H31年～R3年)	久保浩一郎 (H31年～)	
	松下友樹 (R4年～)		

調査員

林 幸彦 (囑託)	森泉かよ子 (囑託)			
堺 益子	小林妙子	柳澤孝子	田中ひさ子	加藤ひろ美
橋詰信子	赤羽根篤	浅沼勝男	甘利隆雄	山口ひとみ
橋詰勝子	小林敏雄	小山 功	清水律子	堀籠まゆみ
中澤 登	堀籠保子	木内修一	油井満芳	羽毛田利明
横尾敏雄	依田好行	松本仁宣	赤羽根充江	柳沢亜矢子
高野園美	岩崎重子	飯森成英	花岡美津子	小林喜久子
磯貝律子	小幡弘子	土屋邦子	広瀬梨恵子	柳澤千賀子
堀籠滋子	山村容子	副島充子	宮川真紀子	比田井久美子
山田叔正	箕輪由紀	岩松茂年	小根山理香	神津千春
大矢志慕	小島 真	小林節子	原 園子	



児童館脇表土剥ぎ



旧グラウンド部分遺構検出状況

第3節 調査日誌

平成25年12月27日	佐久市より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知。
平成26年1月10日	長野県教育委員会へ市教育委員会より25佐教文財第230号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(申申)
1月20日	長野県教育委員会より25教文第8-315号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
3月19～28日	I期工事予定範囲より試掘・確認調査を行う。
平成27年4月24日	I期工事範囲の旧グラウンド部分より発掘調査を開始する。
～7月10日	調査区全体に遺構の広がりを確認。西端で中世と考えられる大型の堀跡を確認する。
5月14日	岩村田小学校6年生の発掘体験教室を実施する。
平成28年7月11日	II期工事範囲の旧プール部分を中心に調査を行う。
～12月7日	児童館脇の部分より中世と考えられる大型の堀跡が発見され、堀内より31基の火葬墓が検出される。
	県立歴史館による平成28年度冬季展「信濃国の城と城下町」に出土品を出展する。(財)長野県埋蔵文化財センター刊行「信州の遺跡8」に調査概要を掲載する。
平成29年8月4日	III期工事範囲の旧校舎部分の調査を行う。
～10月3日	旧校長室脇より藤ヶ城の本丸内井戸と考えられる石組遺構を確認する。
	また、弥生時代後期と考えられる「環濠」の一部が検出される。
平成30年12月	藤ヶ城井戸枠の移転保存に伴い新設の駐車場脇に藤ヶ城跡の説明板を設置する。
令和元年6月21日	IV期工事範囲となる旧体育館及び校舎下の調査を行う。
～11月29日	新たな中世と考えられる堀跡を検出。また、旧体育館観覧席下に残されていた藤ヶ城土塁と伝えられている部分の調査を行う。なお、新グラウンド部分については工事が遺跡に影響が出る部分のみの調査となった。
令和2年4月～3月	藤ヶ城土塁の一部を現地保存し、説明板を設置する。報告書作成業務を断続的に行う。
令和3～5年	報告書作成業務を断続的に行い、調査報告書を刊行する。
4月～3月	記録類・出土品を整理保管し、すべての業務を終了する。



6年生による発掘体験教室



旧体育館下調査状況

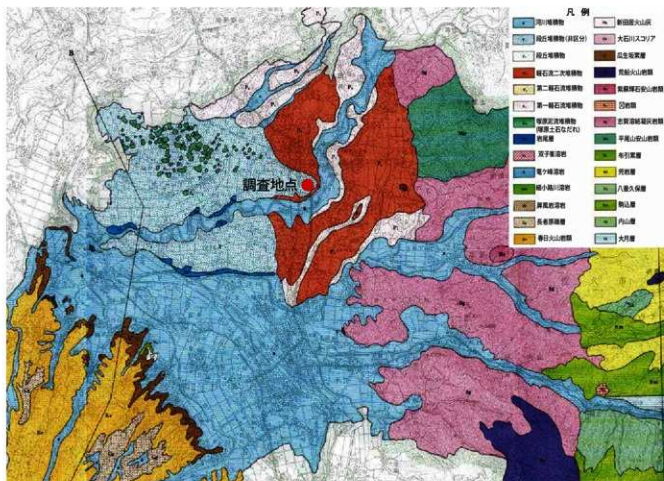
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然的環境

佐久地域は、周辺を山地や台地に囲まれた盆地状を呈する。標高は700m前後であり、夏涼しく、冬寒い高原性の気候を特徴とする。北には現在も噴煙を上げる浅間山が聳え、南には蓼科連峰が東西に連なる。東は関東山地が南北に連なり、群馬県との境をなしている。西には隆起地形である御牧原・八重原台地が広がっている。佐久盆地の中央には甲武信岳の山麓に水源を持つ千曲川が蓼科連峰や関東山地から流れ出した中小河川を集めて北流している。

このように、佐久盆地は周囲を山々に囲まれ幾多の河川に潤された大地が広がるが、地質学的にみると南北に大きく二分することができる。境界は関東山地より流れ出て、盆地のほぼ中央を西に流れる滑津川付近であり、滑津川と千曲川が合流する付近では北部地域との比高差は20m内外を示す。ここを境として北部地域は浅間山から広がる山麓が緩やかに傾斜する地形で、浅間山の噴火によって堆積した火砕流や火山灰により形成された台地が広がっている。この台地は雨水等の浸食に弱く、浅間の麓から放射状に幾筋ものいわゆる「田切り」と呼ばれる谷が伸び、切り立った崖により台地を細長く分断している。これとは対照的に、南部地域は千曲川の氾濫原とする沖積地や滑津川や志賀川といった中小河川により形成された谷口扇状地が広がっている。このため、地表下は河床礫層と沖積粘土層が広がり、現在では佐久地域の穀倉地帯となっている。

今回の調査地点は北部地域に広がる田切りに挟まれた台地上に位置し、塚原土石なだれを埋めるように堆積した第一軽石流（P1）やその二次堆積土が調査区全体に広がっている。



第2図 佐久市地質図(佐久市志 自然編より 一部改編)

第2節 歴史的環境

今回調査した藤ヶ城跡が位置する佐久市の北部は、1980年代より大規模な発掘調査が相次いだ地域である。それにより膨大な埋蔵文化財資料が蓄積されており、ここでそれらを概観したい。

まず、旧石器・縄文時代であるが、これらの時代は調査面積に比して資料が非常に希薄な時代である。近津遺跡群からは縄文後期の土器・石器群が出土しているが住居跡は発見されていない。縄文期の集落が発見されるのは、関東山地の山裾や千曲川を挟んで蓼科山麓側であり、縄文時代に佐久平中心部の平坦地は主に狩場として利用されていたと考えられる。

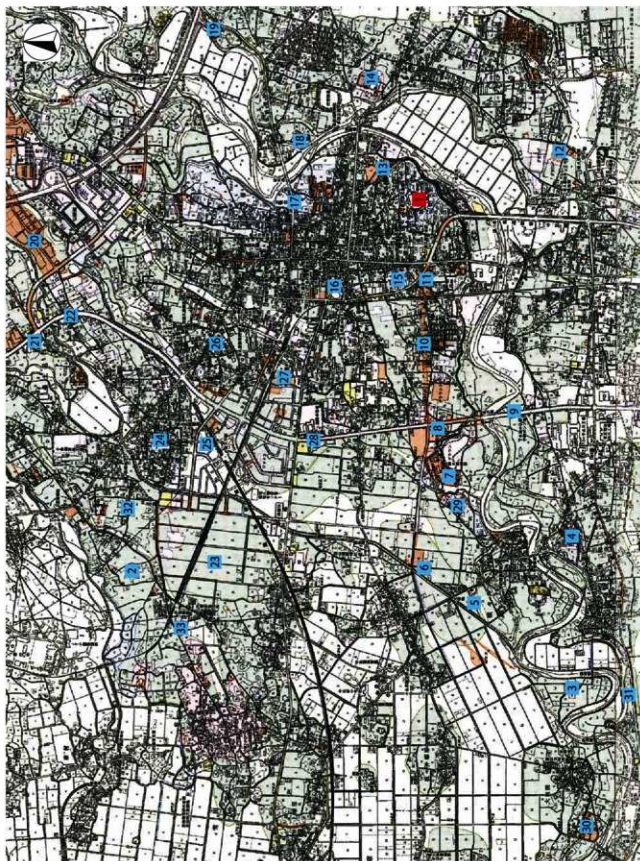
次に弥生時代では、前期と中・後期で様相が異なる。まず前期では発見された遺跡が非常に少なく、集落も発見されていない。仲田遺跡の土坑より口縁二重突帯文の壺、東大門先遺跡Ⅱから同じく土坑より水Ⅱ式に比定される細密条痕の甕が出土している。また、本遺跡に隣接する下信濃石遺跡Ⅱからは包含層から弥生前期とすべき良好な土器・石器資料が出土している。これらの遺跡はいずれも湯川沿いに立地する遺跡であり、佐久北部においては弥生前期の人々が湯川を意識して活動していたことが解る。次に中期になると遺跡数も増え集落跡が確認されるようになる。湯川沿いの下流より、川原端遺跡・森平遺跡・寄塚遺跡・根々井芝宮遺跡・北西の久保遺跡・西一本柳遺跡、内陸部に円正坊遺跡がある。これらの遺跡はいずれも中期後半に比定されるが、中期後半古相に位置づけられるのは根々井芝宮遺跡のみである。このように中期に至り集落が形成されるようになっても遺跡立地は湯川沿岸を指向する傾向にあり、佐久平北部において弥生前期・中期を通して湯川が人々の生産あるいは流通・移動等の諸々の活動において重要な要素を担っていたことが解る。後期集落は湯川沿岸より内陸部に進出する。北から近津遺跡・宮の前遺跡・周防畑遺跡・上直路遺跡・円正坊遺跡・西一本柳遺跡・西一塚遺跡などがあげられる。これらの遺跡は田切地形が消滅し、濁川により形成された低地を取り囲むように立地し、佐久平北部における稲作生産の本格的な導入を示唆している。また、西近津遺跡より国内で最大級となる18×9.5mの堅穴住居跡が発見されたり、上直路遺跡からは屋内埋葬という特異な形態の土壌墓内より、埋葬者腕に装着された状態で銅鋼15本が発見されている。

次の古墳時代前期は弥生後期の集落展開に比べ、規模が非常に縮小し立地も限定的となる。湯川沿いの小さな平地や田切台地でも縁辺など、弥生後期に開発した水田地帯を放棄するような状態である。つづく中期前半は北西の久保遺跡のみであり、前期にもまして遺跡数が激減する。中期前半は他地域においても遺跡数が減少するが、本地域の少なさは異常である。これとは対照的に中期後半から後期の所謂、5世紀後半から6世紀にかけての遺跡数の増加は目を見張るものがある。特に北部においては、弥生後期に集落が展開した地域とともに、新たに田切台地の内陸部まで集落が広がっていく。特に上聖端遺跡・芝宮遺跡・聖原遺跡といった遺跡では累積で100軒単位の集落が形成されている。この現象は佐久平において、5世紀後半以降の集落選地の理由が大きく変わった。或いは加わったことを意味する。一つの可能性としては、水田経営に適さない高燥台地の内陸にあえて集落を展開するという事は集落維持のための生産基盤を牧経営等に置いた結果とも考えられる。

続く奈良時代は古墳後期と同じような場所に集落が展開し、生活・生産活動の継続性が見て取れる。平安時代になると、集落内の住居跡数は増すが、住居は小型化が顕著であり、平安時代後半は散村化の傾向がある。また、西近津遺跡付近の調査で「大井」の墨書や刻書が記載された土器が多く出土し、古代「大井郷」の核地域であろうことが推測されている。

その後、鎌倉時代になると、甲斐源氏の加々美遠光が信濃守となり、その子小笠原長清の七男朝光が大井荘に土着し、大井氏を名乗るようになる。この地域は大井氏により発展し、『四隣譚載』によれば「その賑わい国府にまされり」と例えられる隆盛を誇った。これらの関連遺跡としては現岩村田市街地付近に集中し、苑地の跡が発見された柳堂遺跡や龍雲寺との関連が推定される下信濃石遺跡、漆工房跡と考えられる北一本柳遺跡、また、大井氏の居城と考えられている大井城跡などがある。

近世になってからは、地域内を「中山道」が通過し、それに伴う宿場整備で岩村田宿は繁栄する。特に岩村田は佐久甲州街道が通り、北国街道も近く中世の隆盛を彷彿とさせる状態であった。町屋調査としては中山道沿いの中宿遺跡等があげられる。以上、各時代の概観である。



第3图 周边遗迹位置图

No.	遺跡群名	遺跡名	所在地	検出遺構	報告書
1	藤ヶ城跡		岩村田		本報告書
2	近津遺跡群		長土呂字西近津・森下	竪穴住605(縄文～平安)、掘立80、土坑3、周溝墓13	県調査
3	森平遺跡		横和字森平	竪穴住(弥生中期1)、周溝墓1、礎石、溝3、配石遺構2	県調査
4	宮の上遺跡群	根々井芝宮遺跡	根々井芝宮	竪穴住(弥生43・古墳3・平安14)、掘立3、土坑27、溝5	第494集
5	根々井大塚古墳		根々井字大塚	方形墳丘墓1	年報9
6	西一里塚遺跡群	西一里塚遺跡	岩村田字西一里塚	竪穴住(弥生後期1)、周溝墓1、礎石、土坑7、溝6	
7	岩村田遺跡群	北西の久保遺跡	岩村田字北西/久保	竪穴住(弥生中期9)・弥生後期38・古墳中期20	
8	岩村田遺跡群	西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ	岩村田字西一本柳	竪穴住201(弥生～平安)、掘立45、土坑12、溝11	第73集
		西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ	岩村田字上樋田	竪穴住(弥生中期3・弥生後期1・古墳後期2・奈良1)、溝	第91集
		西一本柳遺跡Ⅶ	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期7・後期2・古墳後期6・奈良・平4)、掘立5、土坑8、溝6	年報8
		西一本柳遺跡Ⅷ	岩村田字下樋田	竪穴住(弥生中期9・弥生後期7・古墳中期6・古墳後期42・奈良16・平安9・不明2)、掘立30、土坑51、溝13	第109集
		西一本柳遺跡Ⅸ	岩村田字西一本柳	竪穴住(古墳後期16・奈良1・平安2・竪穴状2)、掘立9、土坑12	第113集
		西一本柳遺跡Ⅹ	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期34・弥生後期12・古墳中期12・古墳後期15・奈良21・平安9・不明2)、掘立14、土坑19、溝14	年報14
		西一本柳遺跡Ⅺ	岩村田字下樋田	竪穴住(弥生中期1・弥生後期1)、溝	年報13
		西一本柳遺跡Ⅻ	岩村田字下樋田	竪穴住(古墳後期5・奈良1・竪穴状遺構6)、掘立2	第125集
		西一本柳遺跡Ⅼ	岩村田字下樋田	竪穴住(弥生中期13・弥生後期8・古墳中期2・古墳後期2・奈良2・平安1・不明8)、掘立5	第139集
		西一本柳遺跡ⅭⅣ	岩村田字上樋田	竪穴住(弥生中期17・後期17・古墳中期3・後期7・奈良11)、掘立10、土坑16、溝13	第175集
		西一本柳遺跡ⅭⅤ	岩村田字常木上	竪穴住(弥生中期3・後期3・古墳後期2・奈良・平5)、掘立3、土坑5	第154集
		西一本柳遺跡ⅭⅥ	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期12・後期1・古墳後期4・奈良1)、掘立6、溝3	第160集
9	寺畑遺跡群	仲田遺跡	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期)・後期2・奈良2)、溝	第169集
10	岩村田遺跡群	北一本柳遺跡Ⅱ	岩村田字北一本	竪穴住(古墳中期4・後期6・奈良10・平安6)、掘立11、土坑6、H15より花卉双環八花輪出土	第66集
		北一本柳遺跡Ⅲ	岩村田字北一本	竪穴住4、土壇墓1、溝2	年報14
		北一本柳遺跡Ⅳ	岩村田字北一本	竪穴住(弥生後期48・古墳後期11・中世57)、掘立13、土坑310、溝32	第175集
		北一本柳遺跡Ⅴ	岩村田字北一本	竪穴住3、溝2	第158集
11	岩村田遺跡群	東大門先遺跡Ⅱ	岩村田字東大門先	竪穴住(古墳後期2・奈良・平安15)、掘立21、土坑9、溝10	第175集
12	野馬塚遺跡群	野馬塚遺跡Ⅱ・Ⅲ	竪穴住1、竪穴状遺構17、掘立13、土坑234	第170集	
13	下信濃石遺跡	岩村田字仁王前	寺院関連1、竪穴状遺構10、土坑47 古瀬戸灰軸木樋出土	第134集	
14	蛇塚古墳	安原字蛇塚	後期古墳3基、竪穴住3、掘立1	第78集	
15	岩村田遺跡群	観音堂遺跡	岩村田字観音堂	竪穴住(平安1・中世27)、土坑170、土壇墓4、掘立1	第79集
16	岩村田遺跡群	柳堂遺跡	岩村田字柳堂	竪穴住(弥生後期2・平安1・中世33)、掘立2、土坑203、周溝墓3、池	第85集
17	大井城址	岩村田字古城	竪穴住(古墳後期15・中世54)、掘立3、土坑285		
18	下小平遺跡	岩村田字下小平	竪穴住(弥生後期5・古墳後期1)、方形周溝墓2		
19	腰巻遺跡	上平尾字腰巻	竪穴住(弥生後期1・古墳前期4・平安2)、溝4		
20	長土呂遺跡群	聖原遺跡	長土呂字聖原	竪穴住(古墳後期155・奈良平安663)、掘立869、土坑370、溝40	第103集～
21	芝宮遺跡群	下芝宮遺跡Ⅰ～Ⅳ	長土呂字下芝宮	竪穴住(古墳中期5・後期2・平安2)、掘立6	第9集
22	長土呂遺跡群	下上聖壇遺跡Ⅰ・Ⅱ	長土呂字下聖壇	竪穴住(弥生後期4・古墳中期13・後期25・奈良11・平安15)、掘立18	第99集
23	四防塚遺跡群		長土呂	竪穴住92(弥生～平安)、掘立9、円形周溝墓15、土坑422	県調査
24	長土呂遺跡群	長土呂飯址	長土呂	中世飯址	
25	長土呂遺跡群	下伯母塚遺跡	長土呂字下伯母塚	竪穴住(弥生後期末9)、溝、銅鏡	第110集
26	枇杷坂遺跡群	上直路遺跡	岩村田字上直路	竪穴住(弥生後期2)、銅網11	年報5
27	円正坊遺跡群	円正坊遺跡Ⅱ	岩村田字円正坊	竪穴住(弥生中期2・弥生後期1・古墳後期2・平安2)、掘立1、古墳1、土坑8	第53集
		円正坊遺跡Ⅳ	岩村田字円正坊	竪穴住(古墳中期7・後期23・平安4)、方形・円形周溝墓10	第102集
		円正坊遺跡Ⅵ	岩村田字円正坊	竪穴住37、掘立4、壺形墓1、土坑36	年報15
		円正坊遺跡Ⅶ	岩村田字円正坊	竪穴住(弥生～平安41)、掘立2、土坑11、溝3、円形周溝墓1	第185集
28	岩村田遺跡群	松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ	岩村田字松の木	竪穴住(弥生～古墳10)、掘立1、土坑1、溝6	第91集
29	鳴沢遺跡群	五里田遺跡	根々井字五里田	竪穴住(弥生中期43)、周溝墓5、古墳址2、土坑37	第74集
30	大和田遺跡群	川原端遺跡	鳴瀬字川原端	竪穴住(弥生中～後期13・古墳19)、掘立20、土坑22、溝24	第89集
31	寄塚遺跡群	寄塚遺跡	横和字寄塚	竪穴住13(弥生中期後半・古墳前期)、掘立6、土坑17	第157集
32	周防塚遺跡群	宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ他	長土呂字宮の前	竪穴住187(弥生後期～平安)、掘立59、土坑183	第198集
33	近津遺跡群	上大塚遺跡	長土呂上大塚	竪穴住2(弥生後期)	第217集

第三章 調査の方法

第1節 調査の方法

遺跡名・調査区

遺跡名は、佐久市詳細分布図の遺跡に照らし合わせ、藤ヶ城跡した。ローマ数字は調査回数である。調査区を網羅するように、国家座標に沿って40×40mの区画を設定し、北よりローマ数字を付した。この40mの区画は北東隅を起点に8mの各グリットを25分割しグリット名とした。

遺跡略記号・遺構略記号

遺跡略記号は以下の決まりに従い付けられている。

- アルファベット3文字の先頭は旧大字のローマ字表記の頭文字である。 I = 岩村田
- アルファベット3文字の2番目は遺跡群名のローマ字表記の頭文字である。 F = 藤ヶ城
- アルファベット3文字の3番目は遺跡名のローマ字表記の任意の文字である。 U
- 末尾のローマ数字は発掘調査回数を表す。

遺構略記号は以下のとおりであり、佐久市共通である。

- H = 住居跡（竪穴住居跡である。現在のところ佐久市内では明確な平地住居は確認されていない。）
- F = 掘立柱建物跡
- D = 土坑（陥穴、貯蔵穴等）
- M = 溝状遺構（環濠、水路、道路、堀）
- O T = 火葬墓、土城墓
- P = 単独ピット

遺構調査・遺構測量

住居跡は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構Noで一括した。溝跡は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遺り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い、手で行い、室内で乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。遺構図面は1/20で測量実測した図を1/40で修正し、遺物は1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。

遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

第2節 遺構・遺物の概要

遺 構	竪穴住居跡	64軒(古墳後期33軒、奈良11軒、平安7軒、不明13軒)
	掘立柱建物跡	31棟
	土 坑	44基
	溝状遺構	13本(弥生環濠1本、中世城館堀3本)
	火葬墓・土墳墓	45基
	土 塁	1カ所
	ピット	547個
遺 物	縄文土器(中期後半)	弥生土器(箱清水式) 土師器 須恵器 陶磁器類 カワラケ
	皇朝十二銭(富壽神寶) 鉄製品 石器	五輪塔

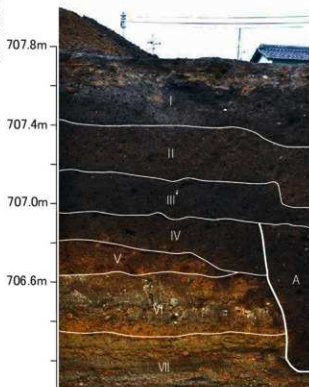
今回の調査範囲は、昭和28年の市民球場建設と昭和35年の岩村田小学校建設のおりに多くの部分がすでに削平を受けており遺跡が存在しない部分が多かった。特に改築前の旧校舎や体育館、プールといった基礎が深いものに関しては、次節で述べる砂層までコンクリートが入っていた。また、学校敷地の北側である正門付近は、球場建設時にゆるい南傾斜の地形をグラウンドにするため水平に削っており、下部のローム層である肌色のローム層が全体に広がり、遺構は確認できなかった。

これらの破壊を免れた部分では遺構が台地全体に広がる様に検出された。特に古墳時代～古代の竪穴住居跡は敷地全体から、弥生後期の遺構は環濠と考えられるM6号溝状遺構より東側で検出された。中世や近世の藤ヶ城跡関係の遺構は掘り込みが深いもの以外検出できなかった。

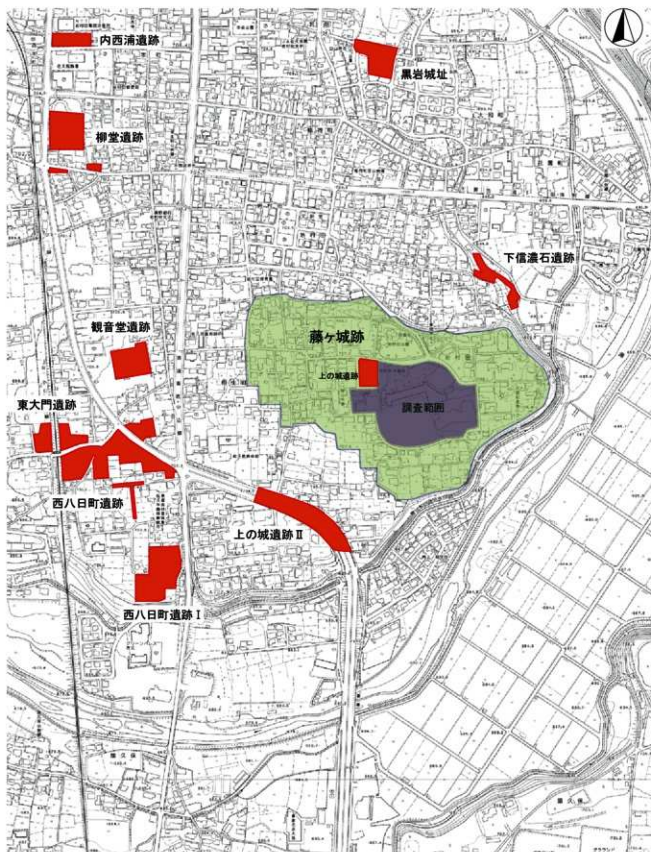
第3節 基本層序

今回の調査地点は南方向に僅かに傾斜する台地上で、基本層序は7層に分かれる。IV層上面が遺構確認面である。確認面深さは調査地点により大きく異なったが、調査区南側は学校造成時の盛り土や旧畑地耕作土が確認でき、遺構確認面まで70～80cmほどであった。

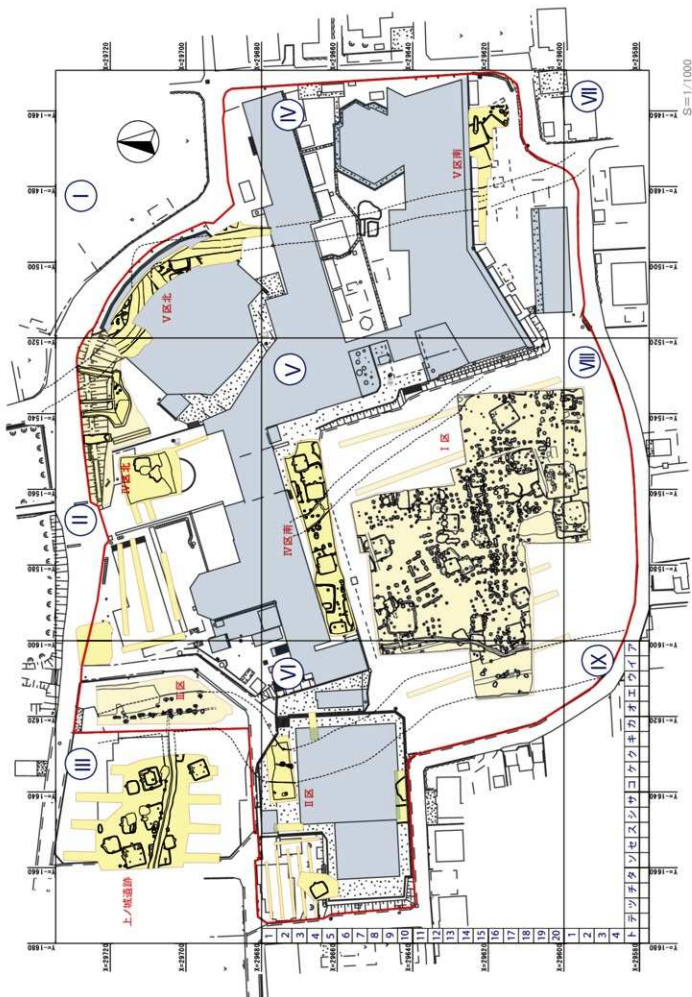
- 第Ⅰ層 暗褐色土 (10YR3/3)
学校建設時の造成土
- 第Ⅱ層 灰黄褐色土 (10YR4/2)
球場建設時の盛り土か?
- 第Ⅲ層 黒褐色土 (10YR3/2)
旧畑地耕作土
- 第Ⅳ層 黒褐色土 (10YR2/3)
しまり・粘性弱い。小石を多く含む。
- 第Ⅴ層 明黄褐色土 (10YR6/6)
ソフトローム。二次堆積P1層
- 第Ⅵ層 にぶい黄橙色土 (10YR7/3)
一部硬質化した砂層
- 第Ⅶ層 灰白色土 (10YR7/1)
縞状の堆積を示す脆い砂層。
- A層 遺構覆土



土層堆積状況



第4図 岩村田周辺の調査遺跡位置図



第5図 藤ヶ城跡調査全体図(1:1000)

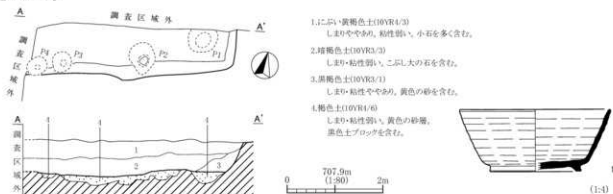
第IV章 調査の成果

第1節 竪穴住居跡

(1) H1号住居跡

本住居跡は調査I区北端のV-セ・ソー7Grに位置する。北側と西側が調査区域外となり、住居南東コーナー付近のみの検出となった。形態は不明である。壁高さは住居跡南東コーナー付近で0.36mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で3.01㎡を測る。覆土は3層に分かれ、自然堆積を示している。床は全体に硬質であった。貼床は全体に広がっており、貼床の厚みは0.09～0.20mを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは掘方検出時に4か所確認された。規模はP1が径0.60m・深さ0.25m、P2が径0.66m・深さ0.70m、P3が径0.43m・深さ0.34m、P4が径0.40m・深さ0.34mを測る。住居掘方は凹凸が激しかった。

本跡からの遺物は覆土からの出土が主で、遺物量は非常に少なかった。図示した1は須恵器有台杯である。内面見込み部がよく磨れている。これらの出土遺物より、不確定であるが本跡は8世紀代に比定される。

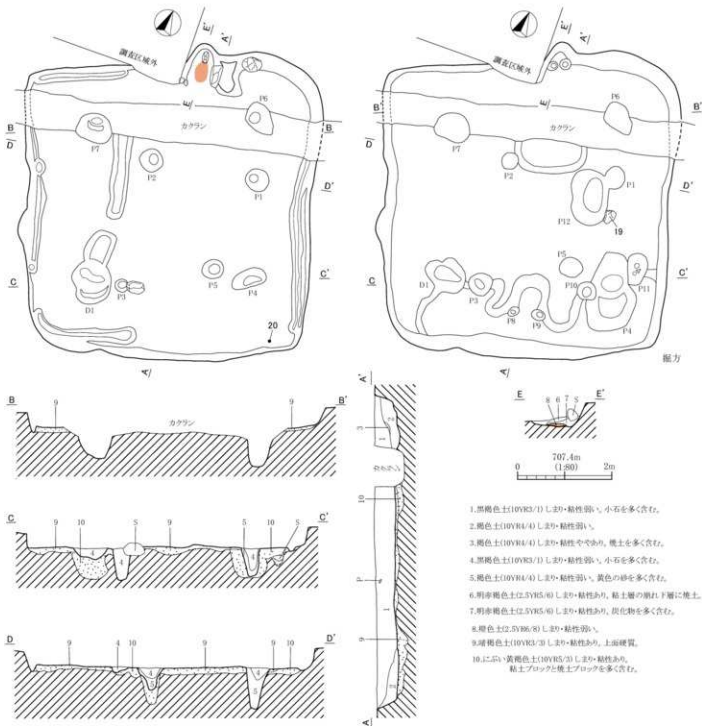


第6図 H1号住居跡及び出土遺物実測図

(2) H2号住居跡

本住居跡は調査I区北端のV-セ・ソー7・8・9、V-ター8Grに位置する。残存状態は北壁カマド脇が調査区域外となる他は良好である。形態は長方形を呈する。カマドは北壁やや東よりにつくられている。規模は南北の長軸で6.07m、東西の短軸で5.26m、壁高さは住居跡北東コーナー付近で0.48mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-22°-Wを示す。住居跡の床面積は30.80㎡を測る。覆土は2層に分かれ、自然堆積を示している。床は全体に硬質であったが、特にカマド前が硬質であった。貼床は住居全体に広がっており、貼床の厚みは0.05～0.22mを測る。壁溝は西壁と北壁・東壁・南壁の一部で確認された。壁溝の深さは0.02～0.25mである。P7とD1の間には間仕切り溝が検出された。ピットは12か所確認された。P4・P6・P7・D1が主柱穴と考えられるが、P1～P4の規模も深く柱穴として捉えられる。カマドが東側に寄っていることから本住居跡は北西方向への拡張が考えられる。ピット規模はP1が径0.49m・深さ0.87m、P2が径0.49m・深さ0.73m、P3が径0.27m・深さ0.66m、P4が径0.73m・深さ0.62m、P5が径0.43m・深さ0.19m、P6が径0.52m・深さ0.69m、P7が径0.60m・深さ0.61m、P8が径0.24m・深さ0.40m、P9が径0.30m・深さ0.36m、P10が径0.44m・深さ0.48m、P11が径0.66m・深さ0.38m、P12が径1.20m・深さ0.18mを測る。住居掘方は凹凸が激しく、南壁脇は一段深く掘り下がっていた。

カマドは北壁東よりに検出された。左側袖部は調査区域外となる。カマドは、煙道部がわずかに壁ラインより飛び出すタイプのもので、袖部は面取り加工をした軽石と粘土により構築されていた。

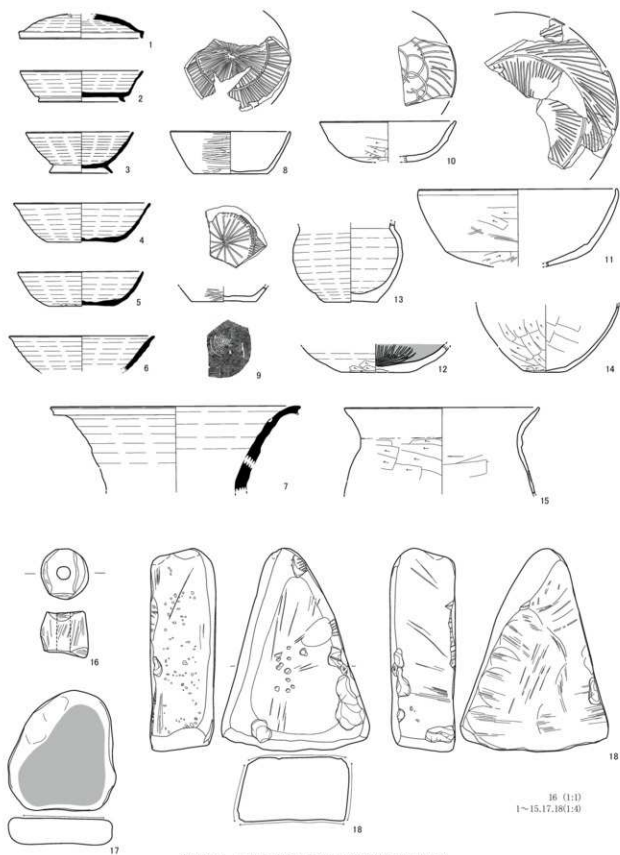


第7図 H2号住居跡実測図

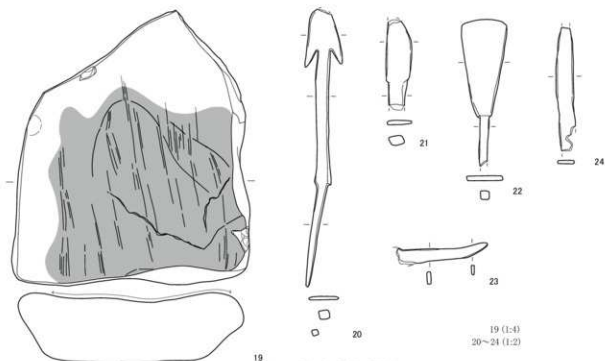
火床部はよく焼けており、焼土の規模は径0.60m、厚み0.08mを測る。煙道部側には面取り加工された支脚石が中央に確認された。

本跡からの遺物は覆土からの出土が主であったが、遺物量は非常に多かった。24点を図示した。1は須恵器蓋である。つまみ部が欠損している。2と3は須恵器有台環であるがともにタイプが異なる。4～6は須恵器環である。7は須恵器甕の口縁部破片である。8～10は土師器環である。8と9はいわゆる「甲斐型環」と呼ばれる土器で、胎土がよく精練され内面に放射状の暗文がある。

- 1.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
- 2.褐色土(10YR4/4)しまり・粘性弱い。
- 3.褐色土(10YR4/4)しまり・粘性ややあり、横土を多く含む。
- 4.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
- 5.褐色土(10YR4/4)しまり・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。
- 6.明赤褐色土(2.5YR5/6)しまり・粘性あり、粘土層の割れ下層に横土。
- 7.明赤褐色土(2.5YR5/6)しまり・粘性弱い、炭化物を多く含む。
- 8.褐色土(2.5YR6/8)しまり・粘性弱い。
- 9.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性あり、上面硬質。
- 10.濃い黄褐色土(10YR5/3)しまり・粘性あり、粘土ブロックと横土ブロックを多く含む。



第8图 H2号住居跡出土遺物実測図(1)



第9図 H2号住居跡出土遺物実測図(2)

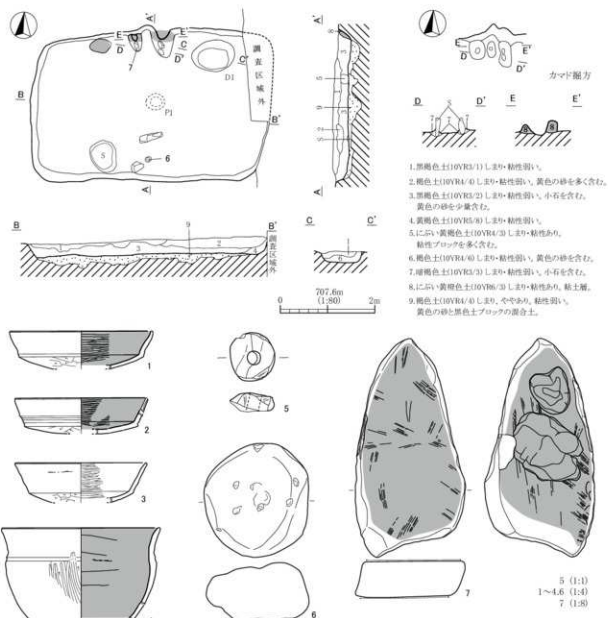
11は土師器鉢である。内面に丁寧な放射状の暗文が施される。12は内面黒色処理された土師器壺と考えられる。13～15は土師器甕で、14と15はいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれる甕の範疇として捉えられる。16は滑石製の白玉で、ほぼ完形である。17は一面が顕著な磨りが確認できる磨り石である。18は砥石であり、4面よく使われている。19は磨り石で、一面が顕著に磨かれており、台石的な使用が考えられる。20～24は金属製品である。20～22は鉄鏃で、20は長頭で長三角形の挟りがある。22は短頭で方頭斧箭タイプのものである。23は刀子の柄部分と考えられる。24は不明である。これらの出土遺物から本跡は8世紀後半に位置づけられると考える。

(3) H3号住居跡

本住居跡は調査I区北側のV-サー9・10、V-シー9・10Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長方形を呈する。カマドは北壁につくられている。規模は南北長で2.97m、東西長で4.85m、壁高さは南壁中央で0.28mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居跡の床面積は推定で13.88㎡を測る。覆土は自然堆積を示していた。床は全体に硬質であったが、特にカマド前面と住居跡中央が硬質であった。貼床は住居全体に施されていた。貼床の厚みは0.03～0.26mを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは1か所確認された。規模はP1が径0.40m・深さ0.24mを測る。住居掘方は凹凸が激しく、特に西壁側は全体に一段深く掘り窪められていた。

カマドは北壁に検出された。煙道部はわずかに壁ラインより飛び出すタイプのもので、袖部は自然石を心材として白色粘土を覆い構築されていた。顕著な火床部は確認できなかった。カマド脇には楕円形の土坑が検出された。規模は長軸長0.87m、深さ0.27mを測る。覆土中に焼土や炭化物は確認できなかった。

本跡からの遺物は覆土を中心に出土した。7点を図示した。1～3は土師器環で、1と2は内面黒色処理が施されている。4は土師器鉢で、内面黒色処理が施されている。5は滑石製の白玉で、一部欠損している。6は軽石製の石製品で、一部円形に面取りが行われている。7は擦痕の残る全体にミガキが施された磨り石である。カマド左軸の心材として使用されていた。本跡はこれらの出土遺物から古墳時代後期6世紀後半に位置づけられる。

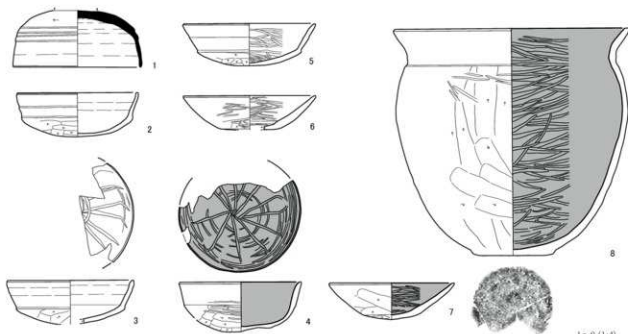
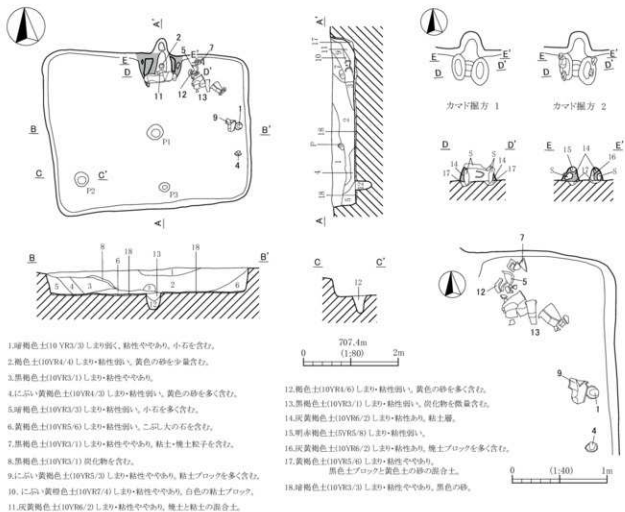


第10図 H3号住居跡及び出土遺物実測図

(4) H4号住居跡

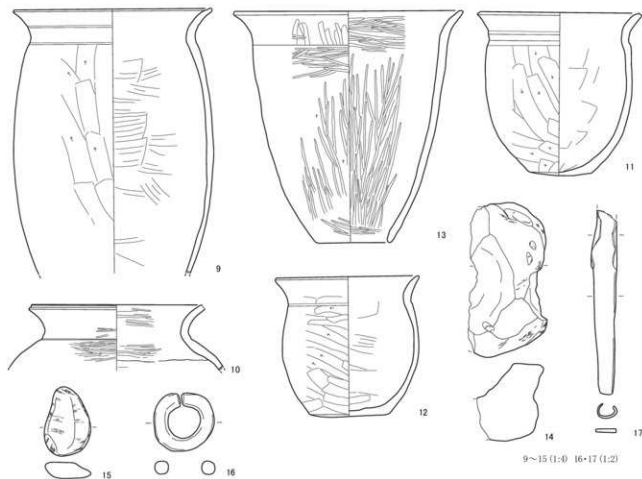
本住居跡は調査Ⅰ区中央東よりのV-シー11・12、V-スー11・12Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長方形を呈する。カマドは北壁につくられている。規模は南北長で3.05m、東西長で4.07m、壁高さは南壁中央東よりで0.50mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-4°-Eを示す。住居跡の床面積は12.45㎡を測る。覆土は自然堆積を示していた。床は全体に硬質であり、特にカマド前面と住居跡中央が硬質であった。貼床は住居全体に施されていたが非常に薄く、貼床の厚みは0.01~0.04mを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは3か所確認された。規模はP1が径0.32m・深さ0.30m、P2が径0.31m・深さ0.26m、P3が径0.21m・深さ0.32mを測る。住居掘方はほぼ平坦であった。

カマドは北壁に検出された。煙道部はわずかに壁ラインより飛び出すタイプのもので、袖部は自然石を心材として肌色粘土を覆い構築されていた。焚き口部の天井礫が高架したまま検出された。袖内側等はよく焼けていたが、火床部は顕著な範囲を確認できなかった。



第11図 H4号住居跡及び出土遺物実測図

1~8 0:4



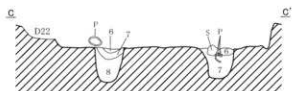
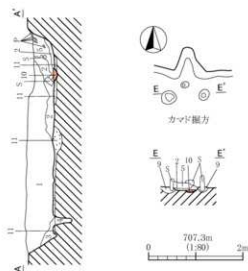
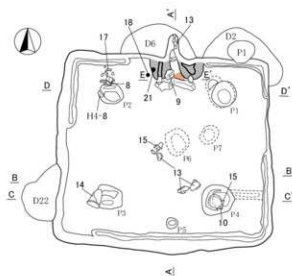
第12図 H4号住居跡出土遺物実測図

本跡からは図にも示したようにカマド脇の床面上から遺物がまとまって出土した。17点を図示した。1は須恵器蓋である。天井部につまみが存在した痕跡があるが欠損している。2～7は土師器坏である。6と7は須恵器模倣坏ではないタイプのものである。4と7は黒色処理が施されている。8～12は土師器甕である。8は内面黒色処理が施されている。13は単孔の土師器甕である。内外面に丁寧なミガキが施されている。14は欠損しているが軽石製の窪み石である。15は磨石で全体によく磨かれている。16は鉄製の環で、いわゆる装身具の耳環とも考えられるがメッキ等は確認できなかった。17は不明鉄製品で、管状に細く曲げられている。形状的には鉄鑿の舌とも考えられるが確認を得ない。

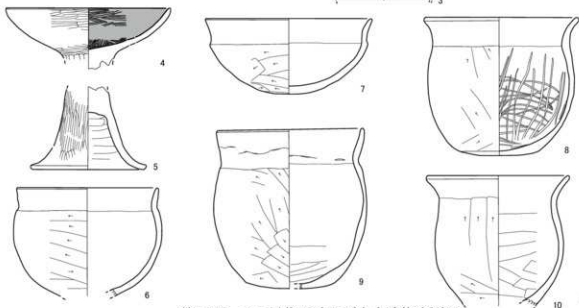
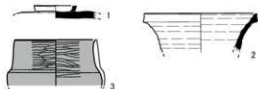
本跡はこれらの出土遺物から6世紀前半に位置づけられると考える。

(5) H5号住居跡

本住居跡は調査I区中央東よりのV-スー-12・13、V-セ-12・13Grに位置する。残存状態は一部土坑に切られるが良好である。形態は方形を呈する。カマドは北壁につくられている。規模は南北長で3.64m、東西長で4.22m、壁高さは南壁中央東よりで0.55mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居跡の床面積は14.68㎡を測る。覆土は自然堆積を示していた。床は全体に硬質であり、特にカマド前面と住居跡中央が硬質であった。貼床は住居全体に施されていたが非常に薄く、貼床の厚みは0.02～0.07mを測る。壁溝は北東・南東・北西の各コーナー部で検出された。深さは0.02～0.05mを測る。ピットは掘方時も含め7か所確認された。P1～P4が柱柱穴、P5が入口施設の穴と考えられる。

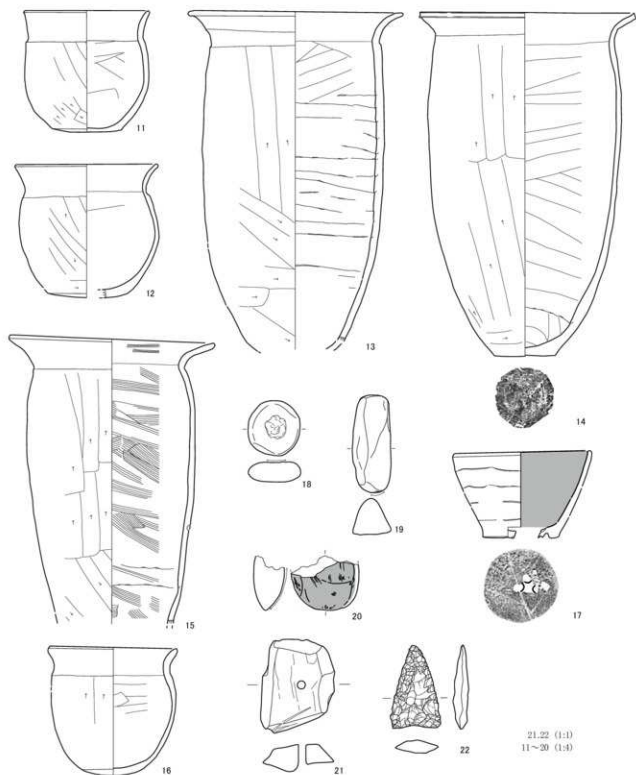


- 1.黒褐色土(10YR3/2)し20・粘土ややあり、小石を多く含む。
- 2.にがい・黄褐色土(10YR4/3)し20・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。
- 3.黄褐色土(10YR5/6)し20・粘性ややあり、こぶ、大の石を含む。
- 4.褐色土(10YR4/4)し20・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。
- 5.明黄褐色土(10YR6/6)し20・粘性ややあり、白色の粘土ブロックと焼土ブロックを含む。
- 6.黒褐色土(10YR3/1)し20・粘性弱い。
- 7.褐色土(10YR4/4)し20・粘性弱く、小石を含む。
- 8.明黄褐色土(10YR6/6)し20・粘性弱く、黄色の砂を含む。
- 9.黄褐色土(10YR5/6)し20・粘性ややあり、粘土と焼土ブロックを含む。
- 10.明赤褐色土(10YR5/4)火床面。
- 11.明黄褐色土(10YR7/6)し20あり、粘性弱い、黄色の砂層主体。



第13図 H5号住居跡及び出土遺物実測図

1~10 (1:0)



第14図 H5号住居跡出土遺物実測図

ピット規模はP1が径0.55m・深さ0.64m、P2が径0.43m・深さ0.61m、P3が径0.50m・深さ0.72m、P4が径0.67m・深さ0.63m、P5が径0.23m・深さ0.38m、P6が径0.57m・深さ0.11m、P7が径0.40m・深さ0.14mを測る。住居掘方はほぼ平坦であった。

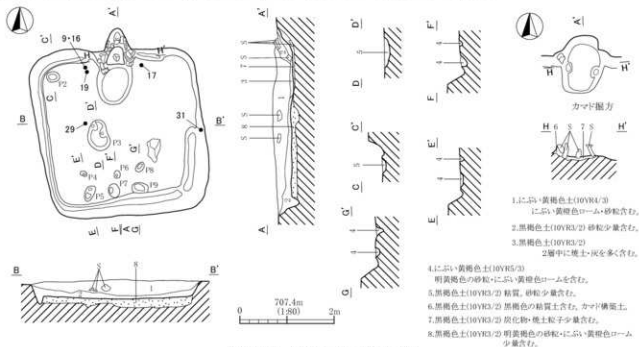
カマドは北壁に検出された。煙道部は壁ラインより飛び出すタイプのもので、袖部は面取りを施した軽石を心材として肌色粘土を覆い構築されていた。焚き口部の天井礫が崩れてはいるが高架したまま検出された。袖部内側等はよく焼けていた。火床部はよく焼けており、焼土は径0.24m・厚み0.09mを測る。

本跡からの遺物はカマド周辺や覆土から多く出土した。22点を図示した。1は須恵器蓋である。つまみ部はリング状を呈する。混入遺物と考えられる。2は須恵器壺の口縁部破片で自然軸の付着が確認できる。3は土師器坏で、内外面を黒色処理が施されている。口縁部が大きく立ち上がる特異なタイプである。4と5は土師器高坏の坏部と脚部である。坏部は内面黒色処理が施されている。6と7は土師器鉢とした。7は須恵器模倣坏の大型品としても捉えられる。8~12・16は土師器小型甕である。8のみ内面にミガキが施されている。13~15は土師器甕であり、いわゆる長胴甕と呼ばれるタイプのものである。14の底部には木葉痕が確認できる。17は土師器甗で、粘土紐の痕跡を残す。また、内面黒色処理されている。底部に5カ所の穴が穿孔され、木葉痕も確認できる。18と19は敲石である。20は片面のみよく磨られた磨り石である。21は滑石製の未製品で、白玉の作成途中と考えられる。22は石籤で完形である。

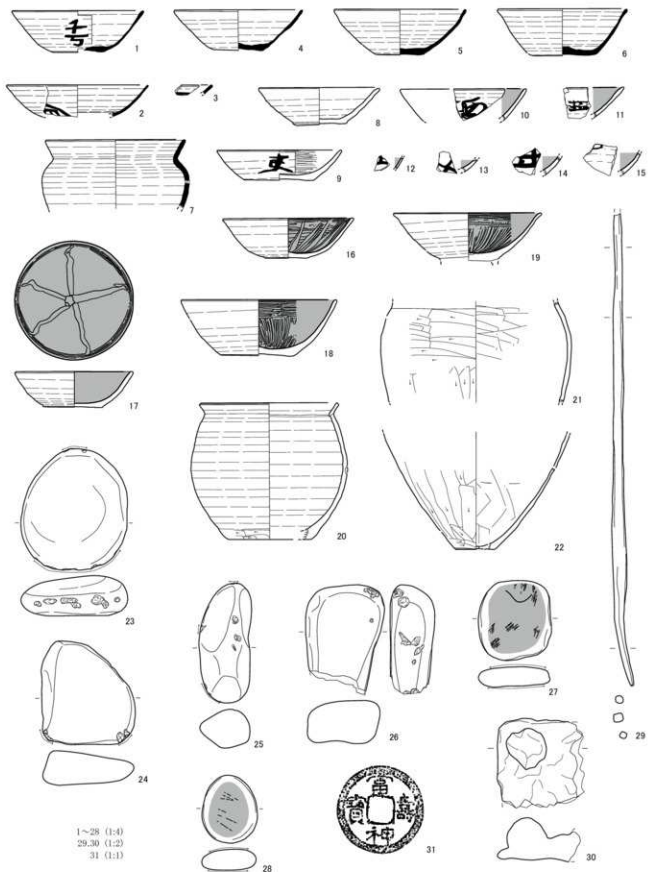
本跡はこれらの出土品より6世紀代に位置づけられると考える。

(6) H6号住居跡

本住居跡は調査I区中央東よりのV-コー14・15、V-サー14・15Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形を呈する。カマドは北壁につくられている。規模は南北長で2.79m、東西長で3.12m、壁高さは東壁中央南よりで0.43mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-6°-Wを示す。住居跡の床面積は8.40㎡を測る。覆土は自然堆積を示していた。床は全体にやや軟質であったが、カマド前面は硬質であった。貼床は住居全体に施されていた。貼床の厚みは0.11~0.17mを測る。壁溝は東壁の一部をのぞき検出された。深さは0.02~0.21mを測る。ピットは掘方時も含め8か所確認された。ピット規模はP2が径0.29m・深さ0.10m、P3が径0.63m・深さ0.14m、P4が径0.15m・深さ0.11m、P5が径0.32m・深さ0.18m、P6が径0.14m・深さ0.09m、P7が径0.24m・深さ0.23m、P8が径0.23m・深さ0.20m、P9が径0.35m・深さ0.10mを測る。



第15図 H6号住居跡実測図



第16图 H6号住居跡出土遺物実測図

カマドは北壁に検出された。煙道部は壁ラインより飛び出すタイプのもので、袖部は自然礫や面取りを施した軽石を心材として粘土を覆い構築されていた。火床部の顕著な焼けは確認できなかった。また、支脚石が原位置を保った状態で検出された。

本跡からの遺物はカマド周辺や覆土から多く出土した。31点を図示した。1～6は須恵器環である。1～3は墨書或いは墨痕が確認できる。1は「千万」か。7は須恵器短頸壺の上半部である。カマド内より出土した。8～18は土師器環である。8と9以外はいずれも内面黒色処理されている。また、9～14には墨書或いは墨痕が確認できる。9は「東」、10と11は当遺跡で事例が多い「西」と考えられる。19は土師器碗と考えられる。高台が欠損している。20は小型の土師器甕で、いわゆるロクロ甕と呼ばれるものである。21と22は土師器甕で「武蔵型甕」の範疇として捉えらものである。23～26は敲石、27と28は磨り石である。29と30は鉄製品で、29は紡錘車の軸とも考えられる。30は盛り上がっている部分が鋌と考えられ、馬具の一部か。31は皇朝十二銭の「富壽神寶」で、東壁際の床面から出土した。

本跡はこれらの出土品より9世紀前半に位置づけられると考える。

(7) H7号住居跡

本住居跡は調査I区東よりのV-オー16・17、V-カー15・16・17、V-キー16・17Grに位置する。残存状態は東壁の一部がカクランにより削平されている他は良好である。形態は方形を呈する。カマドは北壁につくられている。規模は南北長で5.84m、東西長で5.54m、壁高さは北東コーナー付近で0.46mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-34°-Wを示す。住居跡の床面積は31.73㎡を測る。覆土は1層と示した部分が人為埋土のであった。床は全体に硬質であり、特にカマド前面と中央部は硬質であった。貼床は住居全体に施されていた。貼床の厚みは0.05～0.18mを測る。壁溝は住居を全周し検出された。深さは0.04～0.18mを測る。ピットは掘方時も含め8か所確認された。P1～P4が主柱穴と考えられ、P1-P2間が3.26m、P1-P4間が3.16mを測る。ピット規模はP1が径0.36m・深さ0.84m、P2が径0.64m・深さ0.68m、P3が径0.64m・深さ0.76m、P4が径0.88m・深さ0.72m、P5が径0.46m・深さ0.22m、P6が径0.86m・深さ0.34m、P7が径0.27m・深さ0.13m、P8が径0.30m・深さ0.15mを測る。住居掘方はほぼ平坦であった。

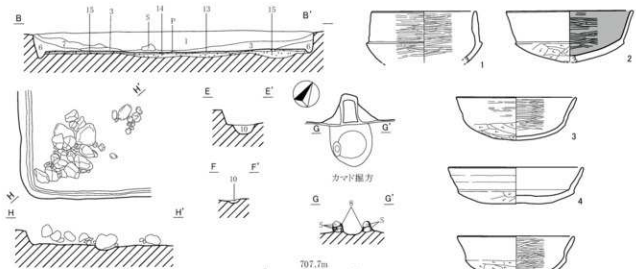
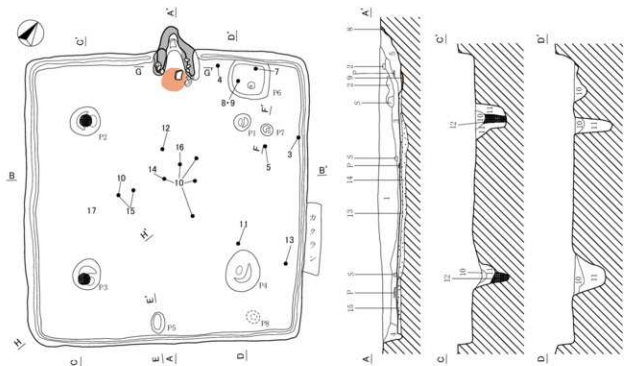
カマドは北壁に検出された。煙道部は壁ラインより飛び出すタイプのもので、袖部は自然礫や面取りを施した軽石を心材として粘土を覆い構築されていた。火床部は顕著な焼けが確認できた。焼土は径0.56m・厚み0.05mを測る。また、カマド脇には土坑状の掘り込みが確認できた。

本跡からの遺物はカマド周辺や住居中央覆土から多く出土した。20点を図示した。1～9は土師器環である。7は内面に放射状の暗文を施している。10～15は土師器甕である。10の底部には木葉痕が確認できる。16は土師器甕で、単孔と考えられる。17はガラス小玉で、色調は濁ったライトグリーンである。鉛ガラスか。19と20は鉄製品で、19は刀子の柄部分と考えられる。また、図に示したように本跡南西コーナー付近には大量の自然礫が検出された。これら礫は人頭大から拳ぐらいの大きさで、ほとんどが自然石であった。壁際から出土した礫は床面より浮いた状態で出土している。この事からこれら礫は破棄状態で投げ込まれたものと考えられる。

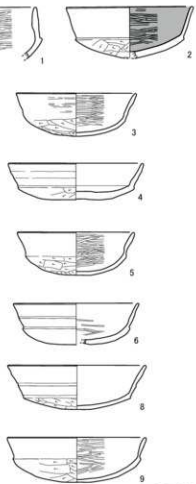
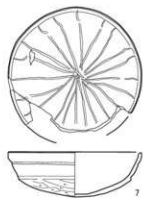
本跡はこれらの出土品より6世紀前半に位置づけられると考える。

(8) H8号住居跡

本住居跡は調査I区中央東よりのV-クー17・18、V-ケー17～19、V-コー17～19Grに位置する。残存状態はF4・F25掘立柱建物跡や、南側を旧球場の灌水施設により削平されている。形態は方形を呈する。カマドは北壁につくられている。規模は南北長で5.52m、東西長で5.84m、壁高さは北東コーナー付近で0.57mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-13°-Wを示す。住居跡の床面積は30.47㎡を測る。覆土は1層と示した部分が人為埋土のであった。床は全体に硬質であり、特にカマド前面と中央部は硬質であった。貼床は住居全体に施されていた。

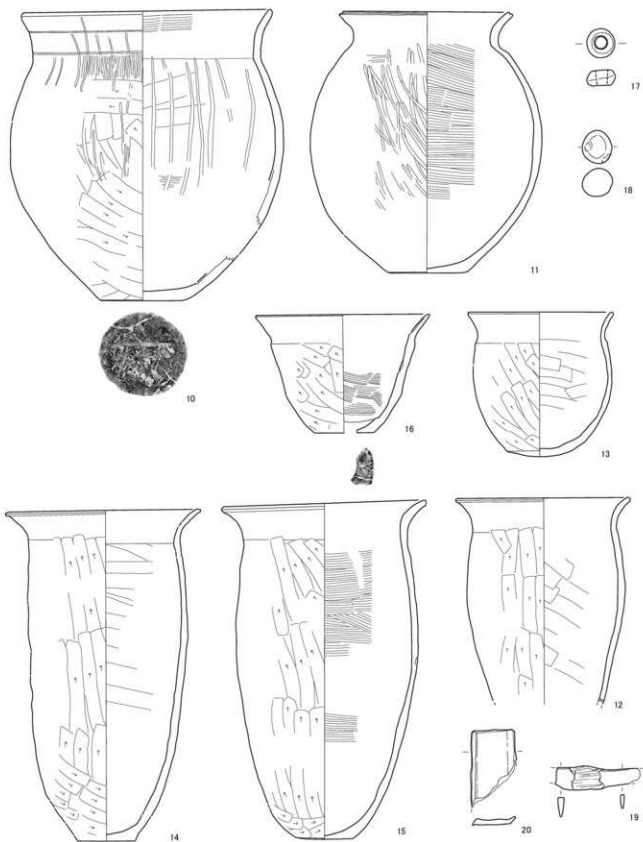


1. 1.に赤・黄褐色土(10YR7/3) ローム主体。に赤・黄褐色土・610m大・ピスを多数を含む。人為堆土
2. 1.に赤・褐色土(10YR7/3) 粘土ブロック。
3. 灰黄褐色土(10YR5/3) 上部に炭化物の層。に赤・黄褐色ローム・砂粒含む。
4. 黒褐色ロームに赤・黄褐色ロームの混在。
5. 1.に赤・黄褐色ロームに赤・褐色粘土・炭化物の混在層。
6. 黒褐色土(10YR2/2) 粘質土。
7. 1.に赤・黄褐色土(10YR4/3) に赤・黄褐色ローム・砂粒含む。
8. 黒褐色土(10YR2/2) カマド構築粘土。
9. 褐色土(10YR6/0) 粘土。
10. 黒褐色土(10YR3/2) に赤・黄褐色ロームを少量含む。
11. 1.に赤・黄褐色ローム・砂粒の混在。
12. 1.に赤・黄褐色土(10YR5/2) 柱状。
13. 1.に赤・黄褐色土(10YR4/3) 粘質土。
14. 黒褐色土(10YR3/2) に赤・黄褐色ローム・砂粒含む。履方埋土。
15. 1.に赤・黄褐色土(10YR7/4) ローム主体。黒褐色土を少量含む。



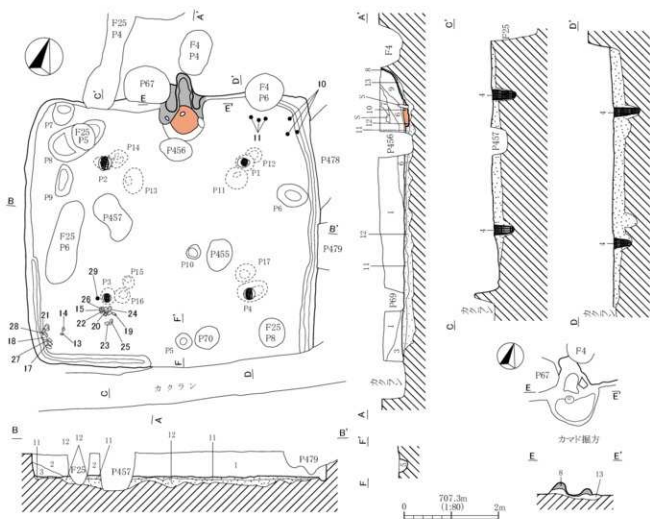
第17図 H7号住居跡及び出土遺物実測図

1~9 (1:4)

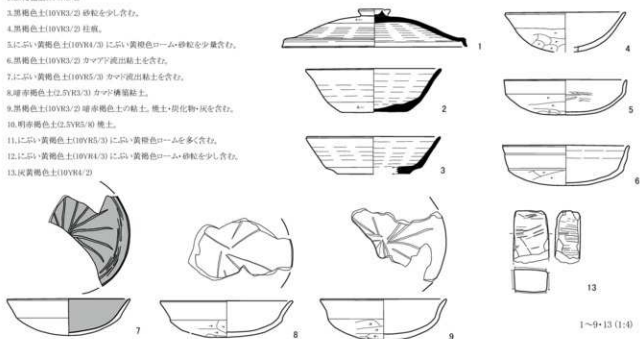


10~16-18(1:4), 19·20 (1:2)
17 (1:1)

第18图 H7号住居跡出土遺物実測図

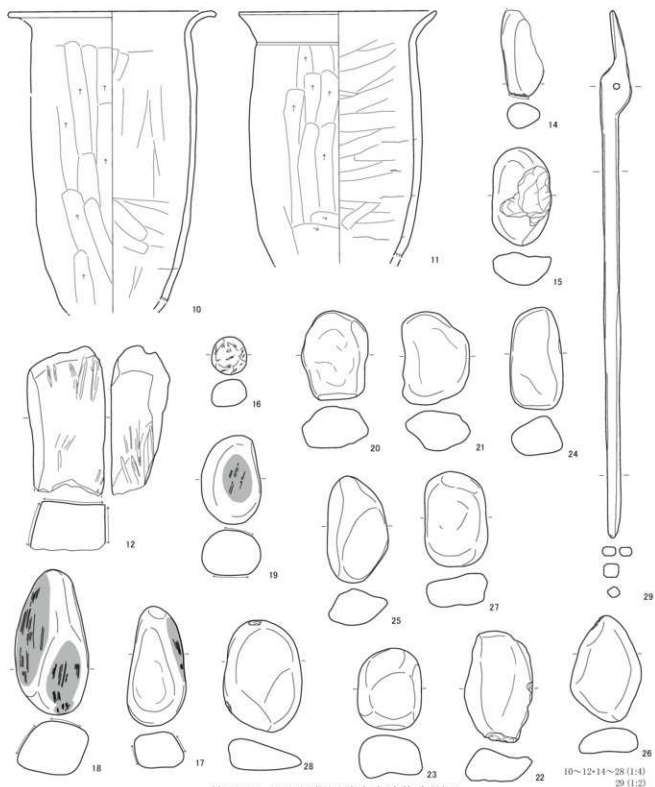


1. 土に黄褐色土(09R3/3) 及び黄褐色ローム・砂粒多く含む、人為的埋土。
2. 黒褐色土(09R3/2)
3. 黒褐色土(09R3/2) 砂粒を少し含む。
4. 黒褐色土(09R3/2) 柱痕。
5. 土に黄褐色土(09R4/3) 及び黄褐色ローム・砂粒を少量含む。
6. 黒褐色土(09R3/2) カマド流出粘土を含む。
7. 土に黄褐色土(09R5/3) カマド流出粘土を含む。
8. 増赤褐色土(2.5YR3/3) カマド構築粘土。
9. 黒褐色土(09R3/2) 増赤褐色土の粘土・焼土・炭化物・灰を含む。
10. 明赤褐色土(2.5YR5/3) 焼土。
11. 土に黄褐色土(09R3/3) 及び黄褐色ロームを多く含む。
12. 土に黄褐色土(09R1/3) 及び黄褐色ローム・砂粒を少し含む。
13. 灰黄褐色土(09R4/2)



第19図 H8号住居跡及び出土遺物実測図

1~9・13 (1:4)



第20図 H8号住居跡出土遺物実測図

貼床の厚みは0.08~0.27mを測る。壁溝は東壁と南西コーナー部で検出された。深さは0.03~0.08mを測る。ピットは掘方時も含め17か所確認された。P1~P4が支柱穴と考えられ、P1-P2間が3.00m、P1-P4間が2.83mを測る。ピット規模はP1が径0.27m・深さ0.53m、P2が径0.25m・深さ0.50m、

P3が径0.23m・深さ0.50m、P4が径0.25m・深さ0.36m、P5が径0.35m・深さ0.19m、P6が径0.65m・深さ0.18m、P7が径0.50m・深さ0.19m、P8が径1.30m・深さ0.29m、P9が径0.68m・深さ0.13m、P10が径0.30m・深さ0.22m、P11が径0.46m・深さ0.28m、P12が径0.36m・深さ0.11m、P13が径0.48m・深さ0.31m、P14が径0.40m・深さ0.21m、P15が径0.27m・深さ0.18m、P16が径0.35m・深さ0.18m、P17が径0.40m・深さ0.27mを測る。また、P11・P13・P15・P17は掘方検出時のピットであり、検出位置より建て替え前の主柱穴と考えられる。本跡の掘方は、小さな凹凸はあるがほぼ平坦であった。

カマドは北壁に検出された。煙道部は壁ラインより飛び出すタイプのもので、袖部は崩れていたが、面取りを施した軽石を心材として粘土を覆い構築されていた。火床部は顕著な焼けが確認できた。焼土は径0.60m・厚み0.10mを測る。また、カマド中央部には支脚石が設置された状態で検出された。

本跡からの遺物はカマド周辺や住居中央覆土から多く出土した。29点を図示した。1は須恵器蓋である。2と3は須恵器環で、1～3は重複する掘立柱建物跡等からの混入品と考えられる。4～9は土師器環である。7～9は内面見込み部に放射状の暗文を施す。10と11は土師器裏である。いずれも底部が欠損している。2点ともに住居北東コーナー部の床から浮いた状態で出土した。12と13は砥石である。12は長辺方向に条痕が確認でき、13は短辺方向に条痕が確認できる。14と15は敲石、16～19は磨り石である。20～28は編物石と考えられ、住居跡南西コーナー付近よりまとまって出土した。29は鉄釘の一部と考えられ希少である。

本跡はこれらの出土品より7世紀前半に位置づけられると考える。

(9) H9号住居跡

本住居跡は調査I区南東端のV-オー20、V-カー20、Ⅷ-オー1、Ⅷ-カー1Grに位置する。残存状態は掘立柱建物跡等に削平されている他は良好である。形態は長方形を呈する。カマドは北壁につくられている。規模は残存南北長で2.68m、東西長で3.53m、壁高さは西壁中央で0.19mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居跡の床面積は残存で10.39㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、特にカマド前面と中央部は硬質であった。貼床は住居全体に施されていた。貼床の厚みは0.01～0.06mを測る。壁溝は東壁と西壁で検出された。深さは0.05～0.08mを測る。ピットは掘方時も含め5か所確認された。規模はP1が径0.61m・深さ0.18m、P2が径0.25m・深さ0.10m、P4が径0.25m・深さ0.16m、P5が径0.30m・深さ0.15mを測る。住居掘方は細かな凹凸があった。

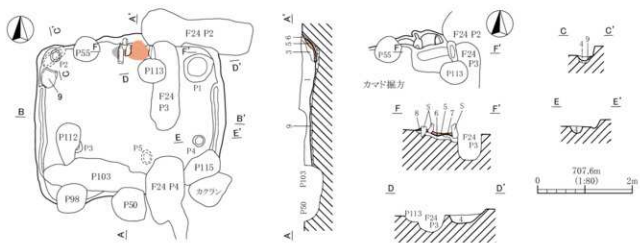
カマドは北壁に検出された。煙道部は壁ラインより飛び出さないタイプのもので、袖部は扁平な自然礫を立て心材として粘土を覆い構築されていた。火床部は顕著な焼けが確認できた。焼土は径0.54m・厚み0.08mを測る。また、カマド脇には土坑状のP1が掘り込まれていた。

本跡からの遺物は住居覆土から比較的多く出土した。11点を図示した。1は須恵器蓋である。擬宝珠状のつまみ部がつく。2と3は須恵器環である。4は須恵器裏で底部が欠損する。5は土師器裏でいわゆる「武蔵型裏」と呼ばれるものである。6は小型の土師器台付き裏である。ほぼ全体の容姿が判明している。7は同じく土師器裏であるが、脚部と口縁部が欠損する。8は磨りと敲きの両方の使用痕が確認できる。9も磨りと敲きが両方確認できる石製品で、形状より名称は台石とした。10は方頭式の短頭鉄鍬と考えられる。11は両端が欠損し全容が判らず不明鉄製品とした。

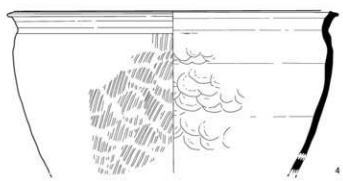
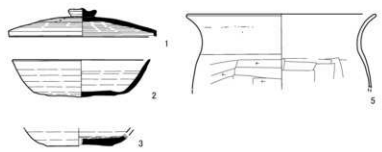
本跡はこれらの出土品より8世紀後半に位置づけられると考える。

(10) H10号住居跡

本住居跡は調査I区中央のV-サー14・15、V-ソー15Grに位置する。残存状態は掘立柱建物跡等に一部削平されているが良好である。形態は方形を呈する。カマドは北壁につくられている。規模は南北長で3.50m、東西長で3.52m、壁高さは南西コーナーで0.53mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-16°-Wを示す。住居跡の床面積は11.96㎡を測る。覆土は自然堆積であった。



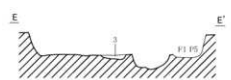
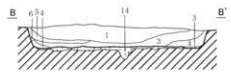
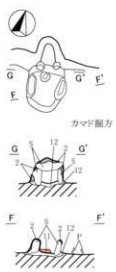
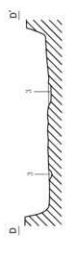
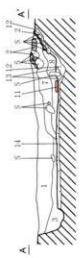
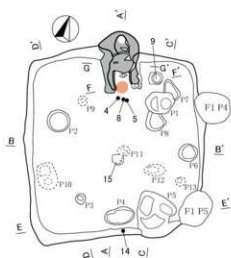
- 1.にひい・黄褐色土(10YR5/3) 明黄褐色土の粘土・砂粒を少量含む。
 2.にひい・黄褐色土(10YR5/3) にひい・黄褐色ロームを多く含む。
 3.にひい・黄褐色土(10YR7/4) ローム・粘土・炭化物・にひい・黄褐色土を少量含む。
 4.にひい・黄褐色土(10YR4/3) 砂粒・にひい・黄褐色ロームを少量含む。
 5.明赤褐色土(2.5YR5/8) 粘土。
 6.にひい・黄褐色土(10YR7/4) ローム主体。砂粒を多く含む。
 カマド扉方埴土。
 7.にひい・黄褐色土(10YR7/4) 砂粒を多く、また黒褐色土も含む。
 カマド扉方埴土。
 8.黒褐色土(10YR2/2) 粘土。
 9.灰黄褐色土(10YR4/2) 扉方埴土。



1~8 (1:4)
 9 (1:8)
 10, 11 (1:2)

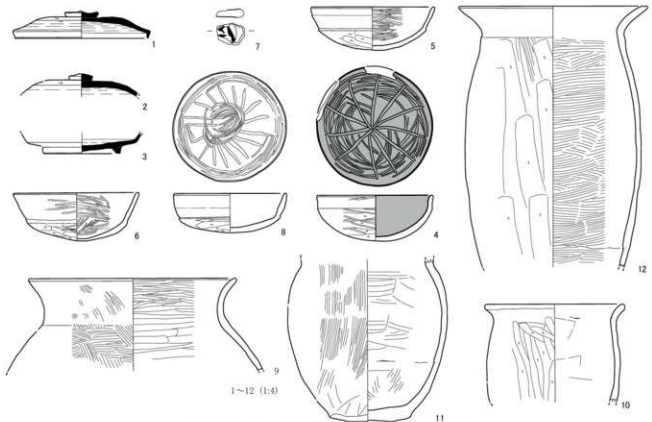


第21図 H9号住居跡及び出土遺物実測図



- 1.にぶい・黄褐色土(10VR5/3) 砂粘。明黄褐色土を多く含む。
- 2.にぶい・褐色土(5VR7/3) 粘土。
- 3.にぶい・黄褐色土(10VR4/3) 明黄褐色土を少量含む。
- 4.黒褐色土(10VR3/2) 炭化物を含む。粘質。
- 5.にぶい・黄褐色土(10VR4/3) 砂粘。明黄褐色土を多く含む。
- 6.灰白色土(10VR7/1) 砂粘。麓山の崩落ブロック。
- 7.黒褐色土(10VR3/2) 灰白色の粘土ブロックを含む。
- 8.にぶい・黄褐色土(10VR4/3) 灰・炭化物を含む。
- 9.にぶい・黄褐色土(10VR4/3) 明黄褐色土を多く含む。
- 10.灰白色土(10VR7/1) 砂粘。二次堆積。

- 11.褐色土G.5VR8/8 焼土。
- 12.にぶい・黄褐色土(10VR4/3) 明黄褐色のロームを少量含む。
- 13.灰白色土(10VR8/1) 灰。
- 14.にぶい・黄褐色土(10VR4/3) 堅方硬土。砂粘を含む。にぶい・黄褐色のロームを少量含む。



第22図 H10号住居跡及び出土遺物実測図

床は全体に硬質であり、特にカマド前面と中央部は硬質であった。貼床は住居全体に施されていた。貼床の厚みは0.03~0.08mを測る。壁溝は検出されなかった。

ピットは掘方時も含め13か所確認された。規模はP1が径0.60m・深さ0.37m、P2が径0.47m・深さ0.07m、P3が径0.22m・深さ0.05m、P4が径0.62m・深さ0.09m、P5が径0.87m・深さ0.40m、P6が径0.39m・深さ0.02m、P7が径0.47m・深さ0.08m、P8が径0.41m・深さ0.16m、P9が径0.22m・深さ0.13m、P10が径0.56m・深さ0.20m、P11が径0.25m・深さ0.21m、P12が径0.44m・深さ0.26m、P13が径0.20m・深さ0.13mを測る。住居掘方は細かな凹凸があったが、ほぼ平坦であった。

カマドは北壁中央に検出された。煙道部は壁ラインよりわずかに飛び出すタイプのもので、袖部は自然礫や軽石を心材として粘土を覆い構築されていた。本跡はカマド天井部が残存した状態であった。火床部は顕著な焼けが確認できた。焼土は径0.28m・厚み0.06mを測る。また、カマド中央部には支脚石が立った状態で検出された。

本跡からの遺物はカマド前面や住居覆土から比較的多く出土した。15点を図示した。1と2は須恵器蓋である。扁平な擬宝珠状のつまみ部がつく。3は須恵器有台坏である。7は土師器坏の破片で、底部には回転系切り痕と墨痕が確認できる。1~3と7は混入遺物と考えられる。4~6と8は土師器坏である。4と8は内面見込み部に暗文風のミガキが施されており、4は内面黒色処理が施されている。9~12は土師器甕である。10と11は小型品である。13は滑石製白玉の欠損品で、覆土中からの出土である。14は砥石で長辺方向に条痕がある。15は磨り石で、大きさから台石的な使用が考えられる。

本跡はこれらの出土品より8世紀代に位置づけられると考える。

(11) H11号住居跡

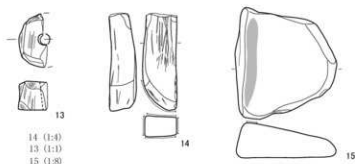
本住居跡は調査I区北端のV-ソー7・8、V-ター8Grに位置する。残存状態は北側が調査区域外で、南側がH2号住居跡に削平されており、南西コーナー部の検出に止まった。形態は方形を呈すると考えられる。規模は推定で東西長で5.92m、壁高さは西壁で0.38mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で2.68㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であった。貼床は検出された住居全体に施されていた。貼床の厚みは0.10~0.22mを測る。壁溝は南西コーナー部分に検出された。規模は深さ0.07~0.08mを測る。ピットは掘方時も含め4か所確認された。規模はP1が径0.42m・深さ0.25m、P2が径0.56m・深さ0.27m、P3が径0.62m・深さ0.16m、P4が径0.49m・深さ0.17mを測る。住居掘方は細かな凹凸があったが、全体的にはほぼ平坦であった。

本跡からの遺物は住居覆土から比較的多く出土したが、小片が多く4点のみの図示に止まった。1は土師器坏である。内面見込み部に放射状の暗文が見られる。2は土師器甕とした。胴部が球形となるタイプと考えられる。口縁部内面には丁寧なミガキが施されている。3は磨り石、4は磨り石と考えられる。本跡はこれらの出土品より6世紀代に位置づけられると考える。

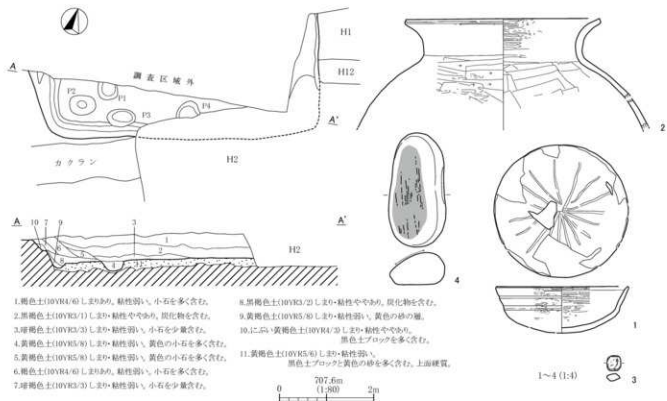
(12) H12号住居跡

本住居跡は調査I区北端のV-サー7、V-ソー7Grに位置する。残存状態は北側と南側がH1・H2号住居跡に削平され一部床面の検出に止まった。面積は検出部分で3.89㎡を測る。

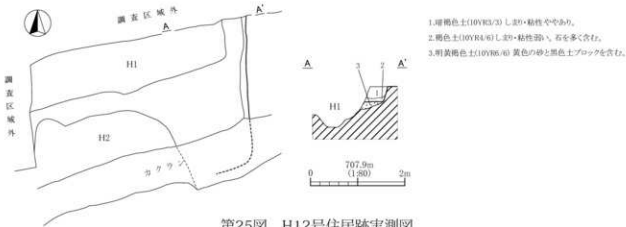
本跡からの出土遺物はなく、時期は不明である。



第23図 H10号住居跡出土遺物実測図



第24図 H11号住居跡及び出土遺物実測図

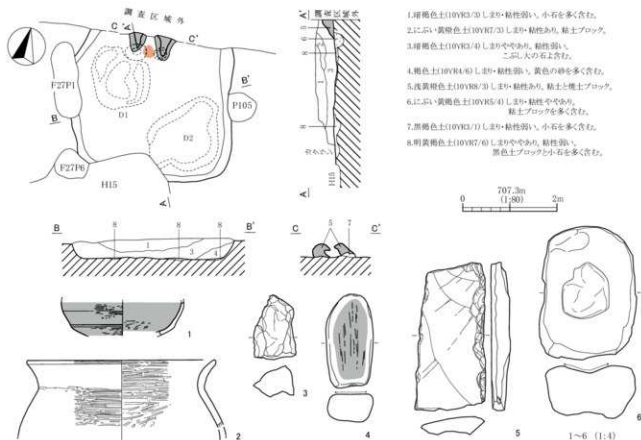


第25図 H12号住居跡実測図

(13) H13号住居跡

本住居跡は調査1区北端のV-ツ-8・9、V-テ-8・9Grに位置する。残存状態は北側が調査区域外で、南側がH15号住居跡に削平されている。形態は方形を呈すると考えられる。規模は検出された南北長が2.50m、東西長が3.28m。壁高さは東壁で0.35mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。カマドは北壁中央につくられていた。主軸方位はNを示す。住居跡の床面積は検出部分で7.85m²を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であった。貼床は部分的に施されていた。貼床の厚みは0.02~0.14mを測る。壁溝は検出されなかった。ピットは確認されたが、掘方検出時に床下土坑的な掘り込みが検出された。規模はD1が長軸1.45m・深さ0.26m、D2が残存長軸1.75m・深さ0.16mを測る。住居掘方は全体に凹凸が激しく掘られていた。

カマドは北壁中央で検出された。北側が調査区域外となるため、煙道部は検出できなかった。袖は



第26図 H13号住居跡及び出土遺物実測図

肌色の粘土で構築されていた。火床部はよく焼けており、焼土の径は0.27mを測る。

本跡からの出土遺物は少なかったが、6点を図示した。1は土師器環である。口縁部と底部を欠損する。内外面黒色処理されている。2は土師器甕で外面と内面ともに丁寧なミガキが施されている。4は磨りと敲き痕を両方備える石製品である。5は打製石斧の欠損品である。6は軽石製の窪み石で窪みは2面に確認できる。

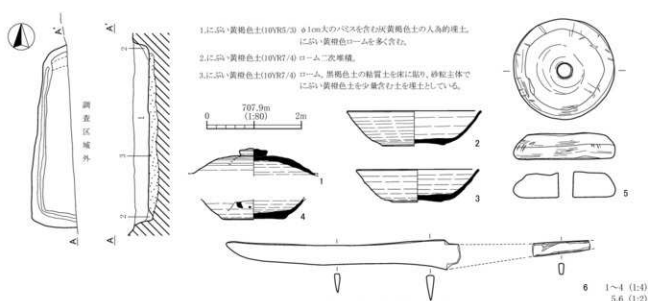
本跡はこれらの出土品より6世紀代に位置づけられると考える。

(14) H14号住居跡

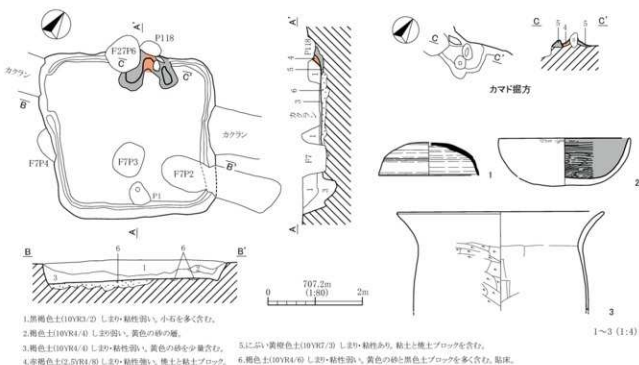
本住居跡は調査Ⅰ区東端のV-エー-17・18、V-オー-17・18Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外で、西壁周辺部しか検出できなかった。形態は方形を呈すると考えられる。規模は検出された西壁長が3.60mを測る。壁高さは南壁で0.43mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で1.69㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であった。貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.10～0.20mを測る。壁溝は西壁と南壁に検出された。深さは0.04～0.12mを測る。ピットは確認されなかった。住居掘方はほぼ平坦であった。

本跡からの出土遺物は少なかったが、6点を図示した。1は須恵器蓋である。擬宝珠状のつまみ部を持つ。2～4は須恵器環である。4は体部外面に墨痕が確認できる。5は滑石製の紡錘車で、一部欠損しているがほぼ完形であった。6は鉄製の刀子で、柄部分が欠損していたが、出土状態より同一個体として判断し図化した。

本跡はこれらの出土品より8世紀代に位置づけられると考える。



第27図 H14号住居跡及び出土遺物実測図



第28図 H15号住居跡及び出土遺物実測図

(15) H15号住居跡

本住居跡は調査Ⅰ区北側のV-ツ-8・9、V-テ-8・9Grに位置する。残存状態は掘立柱建物跡等に一部削平されているが良好である。形態は方形を呈する。カマドは北壁につくられている。規模は南北長で2.80m、東西長で3.32m、壁高さは西壁で0.48mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-36°-Wを示す。住居跡の床面積は8.89㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質で特にカマド前面が硬質であった。貼床は検出された住居全体に施されていたが、南東コーナー部は一段浅い掘り込みとなっていた。貼床の厚みは0.04~0.21mを測る。壁溝は西壁の一部をのぞき全周していた。壁溝深さは0.03~0.09mを測る。ピットは南壁際中央に1か所検出された。ピットの規模はP1が径0.50m・深さ0.34mを測る。

本跡のカマドは北壁東よりに検出された。ピットに削平され、全容は把握できないが、煙道部は壁ラインより飛び出さないタイプと考えられる。袖部は自然石と粘土で構築されていたが、ほとんど本来の形状を保っていないかった。火床部はよく焼けており、焼土は径0.37m・厚み0.13mを測る。

本跡からの遺物は少なく、3点の図示に止まった。1は須恵器蓋であり、掘方からの出土であるが混入の可能性がある。2は土師器環で、内面黒色処理が施されている。カマド内からの出土である。3は土師器甕で、いわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるものである。

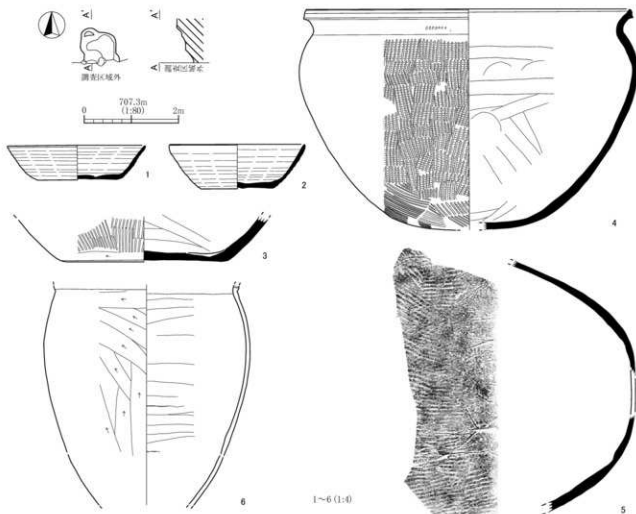
本跡は出土遺物が少なく所産時期の決定には躊躇するが、2のカマド内出土の土師器環から推定すると7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられると考える。

(16) H16号住居跡

本住居跡は調査I区南端のⅧ-ケー2、Ⅷ-ケー2Grに位置する。本跡は調査区域外よりカマド煙道部のみが突き出た状態で検出された。よって住居跡規模等は不明である。

しかし、煙道部から図示した6点が出土した。1と2は須恵器環である。いずれも底部は手持ちヘラケズリにより成形されている。3と4は須恵器甕である。4は口縁部から底部の全容が把握できるが、残存率は1/3程である。3は底部のみである。5は須恵器の横瓶破片と考えられる。6は土師器甕で、口縁部と底部を欠損する。

本跡はこれらの出土遺物から8世紀に位置づけられると考える。



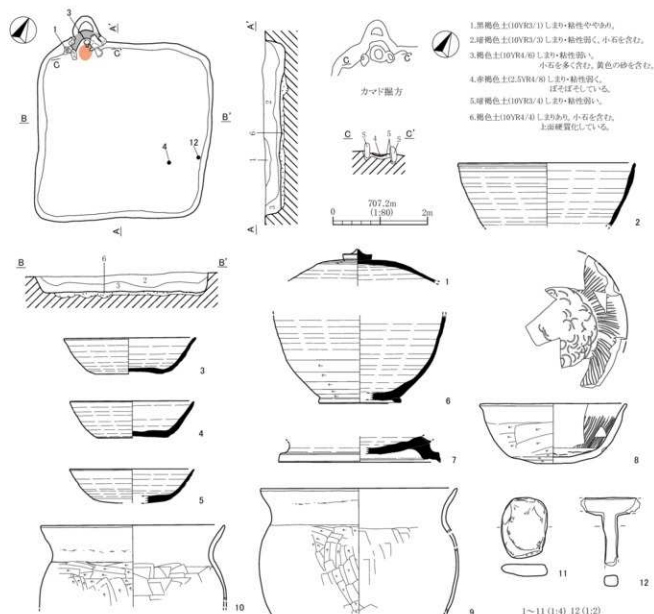
第29図 H16号住居跡及び出土遺物実測図

(17) H17号住居跡

本住居跡は調査I区中央のV-ゾー13、V-ター12~14Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形を呈する。カマドは北西コーナーよりにつくられている。規模は南北長で3.44m、東西長で3.40m、壁高さは東壁で0.44mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-26°-Wを示す。住居跡の床面積は11.39㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質で特にカマド前面が硬質であった。貼床は住居全体に施されており、掘方は細かな凹凸があった。貼床の厚みは0.04~0.17mを測る。壁溝やピットは確認されなかった。

カマドは北壁の北西コーナーよりにつくられていた。袖は面取りをした軽石を心材として粘土で覆い構築していた。煙道部は住居壁ラインより飛び出すタイプのもので、火床部はよく焼けていた。焼土は径0.37m・厚み0.04mを測る。カマド掘方では顕著な袖石の構築穴が検出された。

本跡からの出土遺物は比較的多く、カマド周辺や覆土から出土した。12点を図示した。1は須恵器蓋であり、カマド左袖より出土した。2~5は須恵器坏である。2は



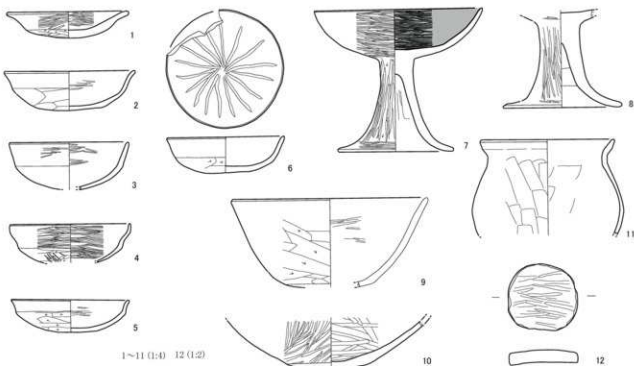
第30図 H17号住居跡及び出土遺物実測図

口唇部に一条の沈線が巡り、口径も大きいことから鉢となるかも知れない。6と7は須恵器壺である。7は高台の設置部が特徴的で、群馬方面の窯資料として捉えられるか。8は土師器環である。内面見込み部に螺旋状の暗文が、また口縁部内面に放射状の暗文がそれぞれ施されている。9と10は土師器甕である。いわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるものである。11は磨石で全体によく磨かれている。12は鉄製品であり、床面上から出土した。T字状を呈するが、端部がいずれも欠損しており全容の把握ができない。

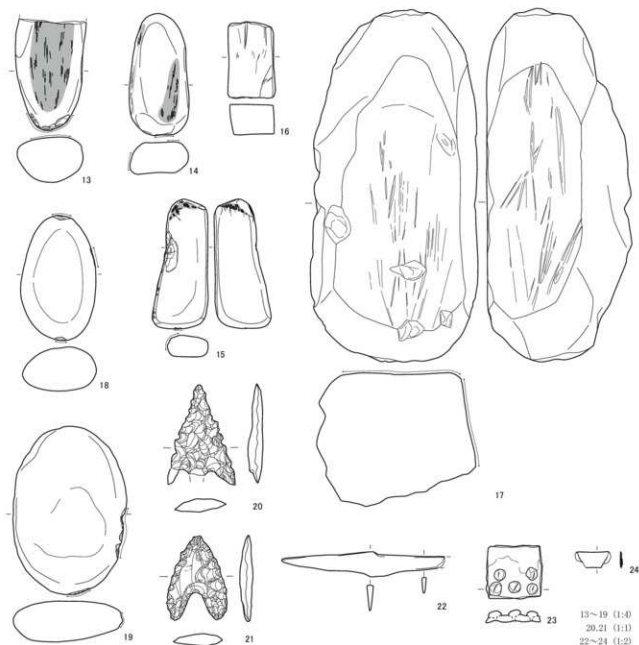
本跡はこれらの出土遺物から8世紀前半に位置づけられると考える。

(18) H18号住居跡

本住居跡は調査I区北側のV-ツ-9・10、V-テ-9~11、V-ト-9~11Grに位置する。残存状態は北東コーナー部をH15号住居跡に削平されている他は良好である。形態は長方形を呈する。カマドは北壁につくられている。規模は南北長で7.00m、東西長で7.26m、壁高さは東壁で0.47mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居跡の床面積は推定で48.08㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質で特にカマド前面が硬質であった。貼床は住居全体に施されており、貼床の厚みは0.04~0.26mを測る。掘方は細かな凹凸があった。また、住居中央部は0.10~0.22m程方形に深く掘り窪められており、後述する住居の拡張の結果と考えられる。壁溝は全体に巡っており、深さは0.04~0.22mを測る。ピットは掘方も含め10か所が確認された。検出位置よりP1~P4は主柱穴と考えられる。P1-P2は4.40m、P1-P4は4.12mを測る。P5は入口施設か。また、掘方時にP8とP9が検出された。このことからP1とP2、P8とP9のピットはその検出位置から主柱穴のピットであり、このことから本跡は南側への拡張が考えられる。P1-P2は4.32m、P1-P9は3.44mを測る。ピット規模はP1が径0.78m・深さ0.33m、P2が径0.70m・深さ0.56m、P3が径0.65m・深さ0.66m、P4が径0.72m・深さ0.53m、P5が径0.37m・深さ0.20m、P6が径0.42m・深さ0.18m、P7が径0.57m・深さ0.22m、P8が径0.46m・深さ0.50m、P9が径0.70m・深さ0.28m、P10が径1.31m・深さ0.17mを測る。



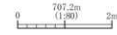
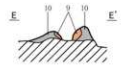
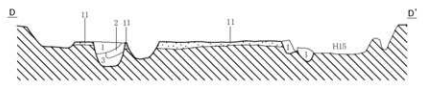
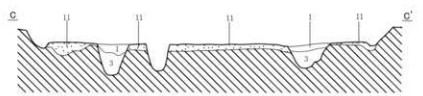
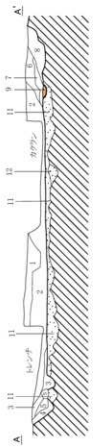
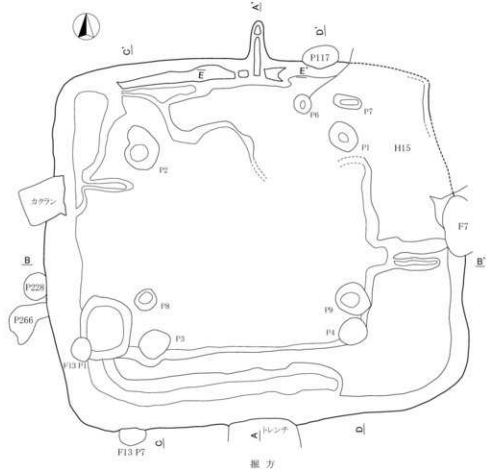
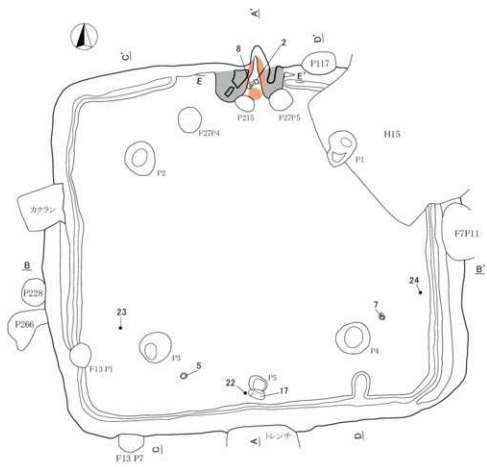
第31図 H18号住居跡出土遺物実測図(1)



第32図 H18号住居跡出土遺物実測図(2)

カマドは北壁中央で検出された。煙道部は住居壁ラインよりも飛び出すタイプのもので、袖部は面取りをした軽石を心材として粘土で覆い構築していた。火床部はよく焼けていた。焼土は径0.28m・厚み0.08mを測る。

本跡からの出土遺物は覆土を中心に多く出土した。24点を図示した。1～6は土師器環である。6は見込み部に放射状の暗文が確認できる。4は口唇部端部がやや内湾するタイプで、丁寧なミガキと胎土もよく精練されている。外来系か。7と8は土師器高環である。7はほぼ完形である。環部は内面黒色処理が施されている。9は土師器鉢である。底部を欠損する。10は土師器壺の底部で、丁寧なミガキが施されている。11は土師器甕である。12は土製円盤であり、土器片の転用である。13～15は敲きと磨りが両方確認できる石製品である。16と17は砥石である。17は大型の置砥石であり、2面の使用痕が確認できた。20と21は黒曜石の石鏃であり、混入品と考えられる。



- 1.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性弱い。
- 2.褐色土(10YR4/6)しまりやであり、粘性弱い。黄色の小石を含む。
- 3.黒褐色土(10YR2/1)しまり・粘性やであり。
- 4.黒褐色土(10YR2/1)しまり・粘性やであり、炭化物・堆土を微量含む。
- 5.黒褐色土(10YR2/2)しまり・粘性やであり、炭化物を含む。堆土層。
- 6.じい・黄褐色土(10YR7/2)しまり・粘性やであり、粘土と堆土ブロックを多く含む。
- 7.赤色土(10YR4/8)しまり弱く、粘性あり。堆土層。
- 8.赤褐色土(10YR5/8)しまり・粘性あり、粘土と堆土ブロックを多く含む。
- 9.赤色土(10YR5/8)しまり弱く、粘性弱い。堆土層でよく残っている。尖頭部。
- 10.じい・黄褐色土(10YR5/3)しまり粘性あり。堆土層。
- 11.黄褐色土(10YR5/6)しまり・粘性あり、黄色の砂と黒色土ブロックを多く含む。基床。
- 12.黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。

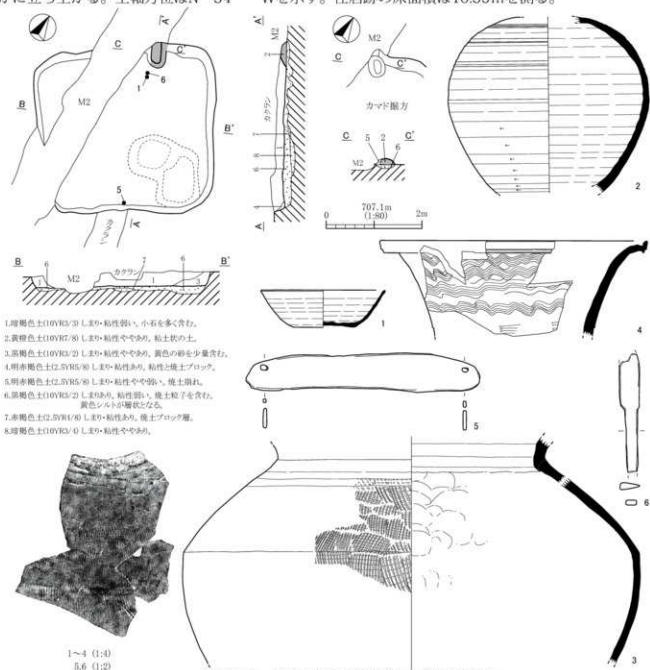
第33図 H18号住居跡実測図

22は鉄製の刀子で柄頭部分が欠損している。23は方形の鉄製品で5カ所の鉾のような部分が確認できる。帯金具的な使用が考えられ、馬具の可能性もある。24は銅製品を薄く折り曲げてつくられており、使用目的は不明である。

本跡はこれらの出土遺物より7世紀前半代に位置づけられると考える。

(19) H19号住居跡

本住居跡は調査I区北側のV-ト-13・14、VI-ア-13・14Grに位置する。残存状態は住居西側をM2号溝状遺構によって削平されている。形態は方形を呈する。カマドは北壁東よりにつくられている。規模は南北長で3.16m、東西長で3.36m、壁高さは北東コーナーで0.34mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。主軸方位はN-34°-Wを示す。住居跡の床面積は10.35m²を測る。



覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質で特にカマド前面が硬質であった。貼床は住居全体に施されており、掘方は細かな凹凸があり、貼床の厚みは0.03~0.21mを測る。また、住居南東コーナーには床下土坑的な掘り込みが検出され、規模は長軸1.78m・深さ0.29mを測る。壁溝やピットは確認されなかった。カマドは北壁の東よりにつくられていた。火床部や煙道部・左袖部はM2号溝状遺構により削平されていた。袖は粘土で構築していた。

本跡からの出土遺物は比較的少なく、6点を図示した。1は須恵器環である。カマド左袖よりで出土した。2は須恵器壺であり、口縁部と底部を欠損する。3と4は須恵器甕であり、4は口縁部に櫛波状文が施されている。5と6は鉄製品で、5は形状より鋸、6は長頸鏃と考えられる。

本跡はこれらの出土遺物より8世紀代に位置づけられると考える。

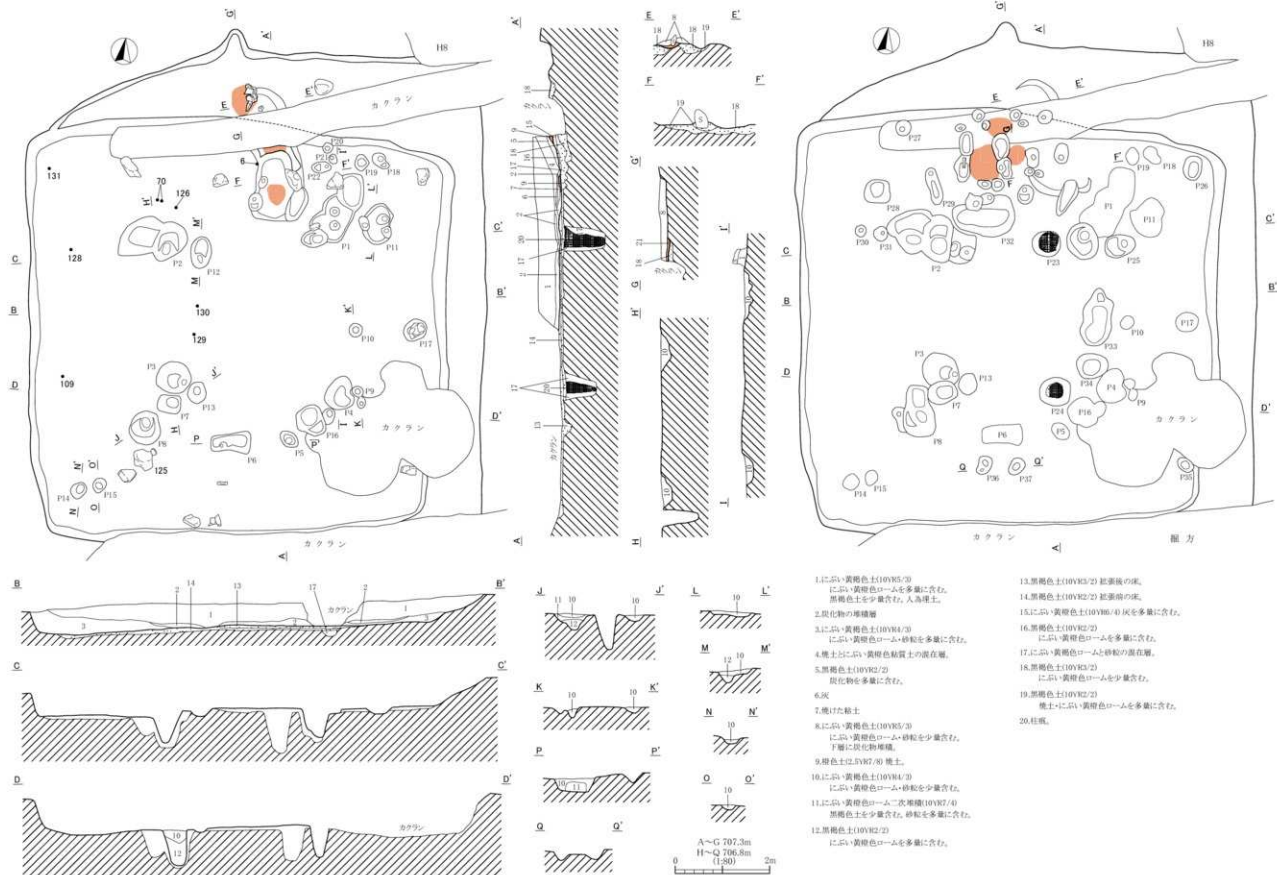
(20) H20号住居跡

本住居跡は調査I区中央のV-ケ・コ・サー-19・20、VIII-ケ・コ・サー-1Grに位置する。残存状態は北側の一部と南壁部分がカクランにより削平されている他は良好である。形態は方形を呈する。本跡は調査結果より北と東方向への拡張が確認された。まず拡張後の住居より述べる。カマドは北壁に構築されていた。規模は南北長10.00m、東西長9.44m、壁高さは北西コーナーで0.65mを測る。壁は西側のみほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-7°-Wを示す。住居跡の床面積は88.29㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質で特にカマド前面が硬質であった。貼床は住居全体に施されていた。壁溝は確認されなかったが、東側と北側に柵状の拡張部分が確認された。この拡張部分は北側は平坦であったが、東側はなだらかに傾斜する掘り込みであった。ピットは掘方時も含め37か所確認された。拡張後の住居主柱穴はP1・P2・P8・P16で東壁下のP26・P17・P35や北壁よりの大型礎は柱立ての補助穴や基礎石と考えられる。規模はP1-P2が3.16m、P2-P8が3.66mを測る。また、礎間は東西5.76m、南北6.18mを測る。各ピットの規模はP1が径1.85m・深さ0.64m、P2が径1.22m・深さ0.62m、P3が径0.75m・深さ0.24m、P4が径0.65m・深さ0.18m、P5が径0.40m・深さ0.23m、P6が径0.85m・深さ0.28m、P7が径0.47m・深さ0.74m、P8が径0.72m・深さ0.30m、P9が径0.48m・深さ0.23m、P10が径0.30m・深さ0.15m、P11が径0.80m・深さ0.35m、P12が径0.65m・深さ0.30m、P13が径0.47m・深さ0.10m、P14が径0.34m・深さ0.10m、P15が径0.29m・深さ0.18m、P16が径0.82m・深さ0.59m、P17が径0.49m・深さ0.12m、P18が径0.41m・深さ0.25m、P19が径0.34m・深さ0.21m、P20が径0.24m・深さ0.14m、P21が径0.21m・深さ0.09m、P22が径0.41m・深さ0.21m、P23が径0.63m・深さ0.82m、P24が径0.62m・深さ0.71m、P25が径0.66m・深さ0.33m、P26が径0.50m・深さ0.13m、P27が径0.33m・深さ0.19m、P28が径0.51m・深さ0.23m、P29が径0.76m・深さ0.27m、P30が径0.25m・深さ0.17m、P31が径0.33m・深さ0.16m、P32が径1.32m・深さ0.20m、P33が径1.26m・深さ0.26m、P34が径0.66m・深さ0.18m、P35が径0.36m、P36が径0.41m・深さ0.18m、P37が径0.40m・深さ0.22mを測る。

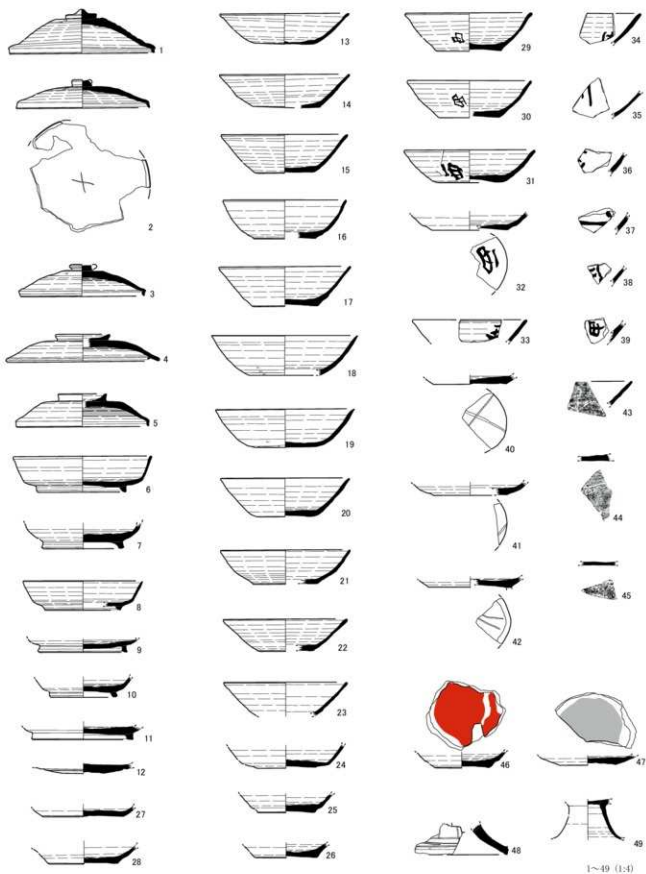
拡張前の住居跡規模は、南北長8.28m、東西長8.36m、床面積は66.98㎡を測る。主柱穴はP2・P7・P23・P24で、規模はP2-P23が2.30m、P2-P7が3.10mを測る。P36とP37は入口施設の柱穴とも考えられるが、南壁からは離れており確証を得ない。主軸方位は拡張前と同じである。

カマドは新旧いずれも北壁につくられていた。拡張後は東よりに位置を変えてつくられていた。拡張後のカマドは北側拡張部分にも及び煙道部はセクションG-G'ラインまで延びると考えられたが、焼土等の検出はなく確証を得なかった。カマドは新旧ともに火床部と袖構築材の掘り込み穴しか確認できなかったため構築材や構築方法は不明である。

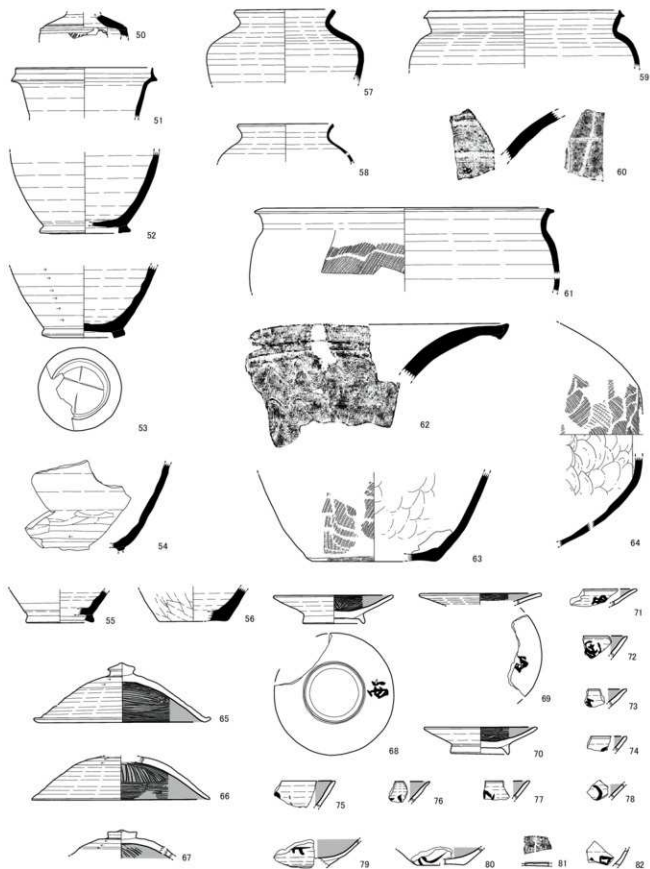
本跡からの出土遺物は非常に多く、146点を図示した。1~5は須恵器蓋である。つまみ部は1から3が擬宝珠状のつまみで、4と5はいわゆるリング状である。2は内面に焼成前の「X」のヘラ記号が確認できる。4はかえり部が内側につく。6~12と42は有台付きの環である。全容が把握できるものはやや浅いタイプのものである。13~41、43~47は須恵器環である。



第35図 H20号住居跡実測図

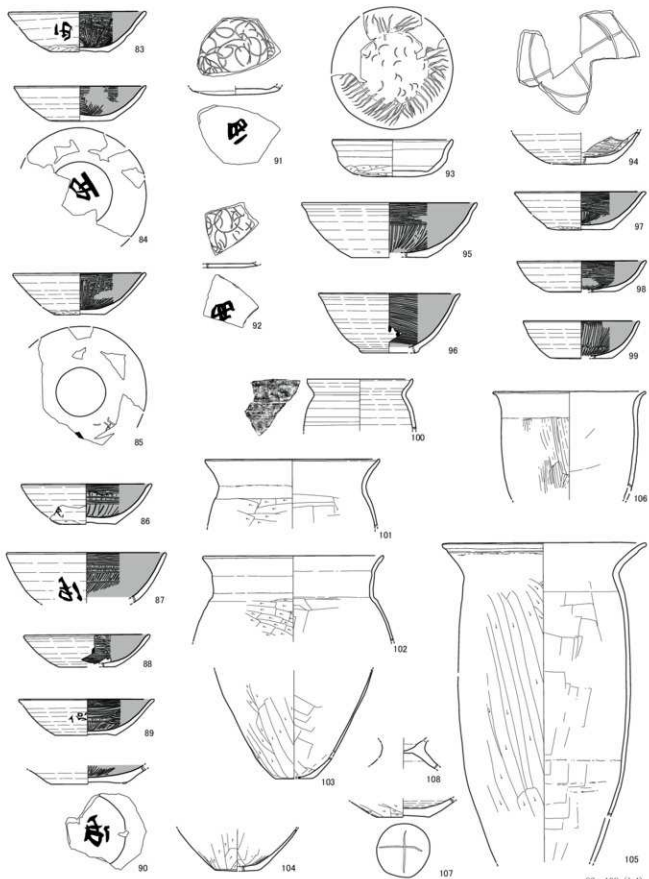


第36图 H20号住居跡出土遺物実測図(1)



第37图 H20号住居跡出土遺物実測図(2)

50~82 (1:1)



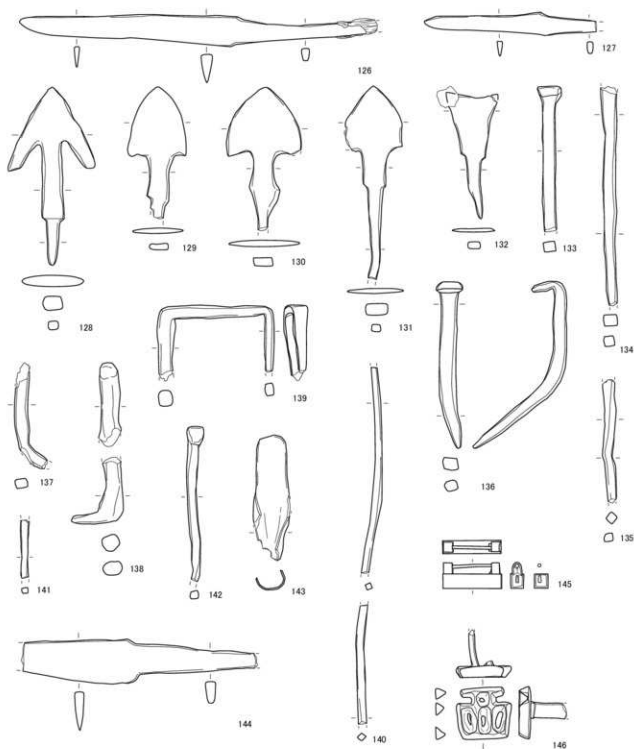
第38图 H20号住居跡出土遺物実測図(3)

83~108 (1:4)



109 (1:1) 110,111 (1:2) 112~125 (1:4)

第39图 H20号住居跡出土遺物実測図(4)



第40图 H20号住居跡出土遺物実測図(5)

126~146(1:2)

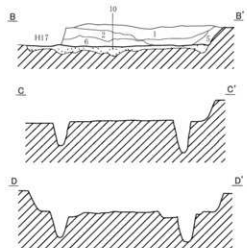
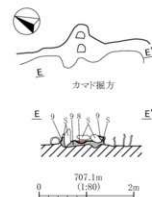
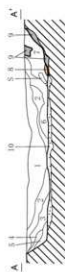
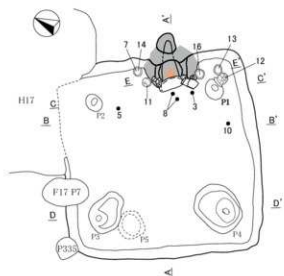
いずれもロクロ成形で、底部は回転糸切り離しや回転ヘラケズリが確認できるものもあった。また、29～39には墨書や墨痕が確認できた。特に29～32は「西」と読める。40～42・44・45はヘラ記号が確認できる。確認できるものはいずれも焼成前のもので、いずれも破片のため判読できるものはなかった。46は須恵器環で、見込み部に朱が付着していた。47は須恵器環で、内面見込み部が非常になめらかで転用硯の可能性が高い。48は須恵器円面硯で、小片のため全容は把握できないが、脚部破片で透かしと刻線が確認できる。49は須恵器高環、50は須恵器蓋の破片である。胴部に沈線区画と縄文が施されている。51～58は須恵器壺である。いずれも形態が異なるが、53のみ底部に「×」と考えられるヘラ記号が施されている。59～63は須恵器甕である。60は口縁部破片であるが、内面にヘラ記号が施されている。64は須恵器横瓶と考えられる。65～67は土師器蓋で、いずれも内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。つまみ部は擬宝珠状である。68～71は土師器皿である。いずれも小型のタイプで、内面に黒色処理が施されている。また、68・69・71は墨書が確認でき「西」と判読できるものがある。72～99は土師器環である。これら環のほとんどが内面に黒色処理が施されているが、91～93は内面見込み部を中心に螺旋状の暗文が施されている。また、墨書が確認できる個体も多く、判読できるほとんどが「西」と読める。100～108は土師器甕である。100は小型のロクロ甕で、108は台付甕である。また、107は底部外面に「×」印のヘラ記号が確認できる。109は滑石製のやや大型の白玉である。110と111は滑石で石製模造品の未製品と考えられる。113と114は砥石で、114は大型の置き砥石か。115～121は敷き或いは磨りの使用痕が確認できる石器である。123～125は磨り面や条痕が残る石で、大型のため台石とした。126～144は鉄製品である。126と127は刀子である。いずれも柄の一部を欠損する。128～132は鉄鏝である。いずれも短頭タイプのもので、128は抉りの深い柳葉系、129～131は三角形で抉りが存在するタイプ、132は斧箭系である。133～138は釘と考えられる。139は鏝で先端部を欠損する。144は刀子である。145と146は銅製品で、145は鉞前である。146は「西」と読める製品で、文字の後ろから延びる棒状の飛び出しが2本確認できる。この145と146は本跡を削平するカクラン部分から出土したため、この遺構に伴わない可能性も指摘できるが、本跡からの文字資料がいずれも「西」と判読できること、金属製品の「西」も墨書と同じように一画目の横が一下部に比べて短く共通性があることを考え掲載した。

本跡は先にも述べたが、拡張による建て替えが行われており、また規模も今回の調査された竪穴住居跡の中では非常に大きい。このような理由から出土遺物は多くの時期の異なるものも含まれている。しかし、主体的な出土遺物から、本跡の帰属時期は8世紀後半から9世紀前半代と考えられる。

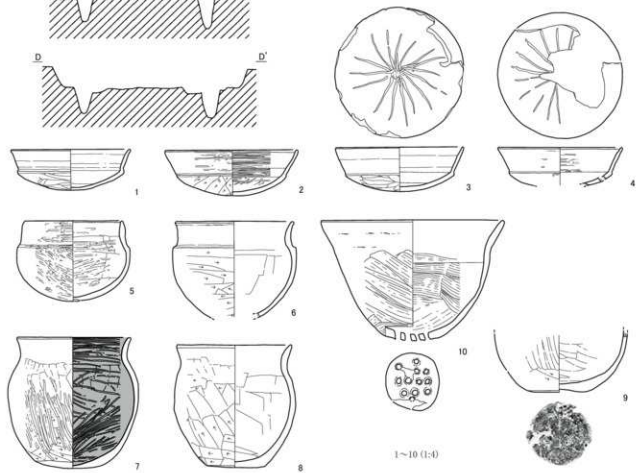
(21) H21号住居跡

本住居跡は調査I区中央のV-ソー14、V-ター13・14、V-チー14Grに位置する。残存状態は北西側がH17号住居跡により削平されているほかは良好である。形態は方形を呈する。主軸方位はN-66°-Eを示す。規模は南北長3.80m、東西長3.90mを測る。壁高さは北壁で0.47mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は14.19㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.04～0.20mを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは掘方時も含め5か所確認された。P1～P4が主柱穴と考えられ、P1～P2間が2.56m、P1～P4間が2.61mを測る。ピット規模はP1が径0.44m・深さ0.67m、P2が径0.39m・深さ0.51m、P3が径0.88m・深さ0.55m、P4が径1.07m・深さ0.68m、P5が径0.58m・深さ0.22mを測る。住居跡掘方は凹凸が激しく、特に中央部分が一段低くなっていた。

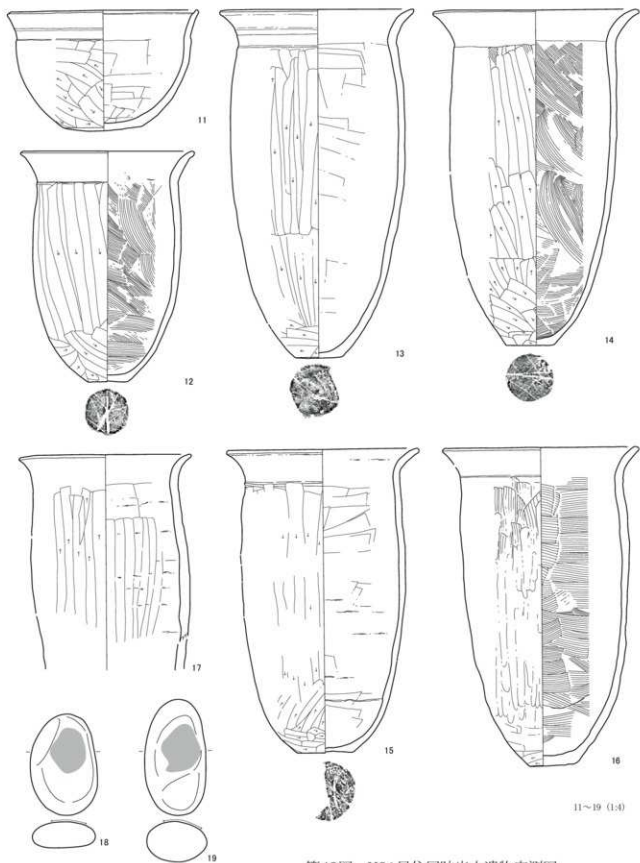
カマドは東壁中央に構築されていた。袖部は心材に川原石を使い、粘土で覆っていた。また、焚口部は礫を「コ」の字状に組んでいたが、崩れた状態で検出された。煙道部の粘土は筒状に形状が保たれており、煙り出しの形状が把握できた。火床部はよく焼けており、規模は径0.18m・厚み0.07mを測る。カマド周辺には図示した甕や鉢が使用した当時の状態で出土し、特に袖脇で検出された土師器甕は床を一部掘り込み立てた状態で確認された。



- 1.褐色土(10YR4/6)しまり・粘性弱い、小石を多く含み、ざりざりしている。
- 2.暗褐色土(10YR3/3)しまりややみり、粘性弱い。
- 3.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
- 4.黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性やややみり。
- 5.黄褐色土(10YR5/6)しまり・粘性弱い、黄色の小石を多く含む。
- 6.にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり・粘性やややみり、粘土ブロックと焼土粒子を少量含む。
- 7.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性やややみり。
- 8.明赤褐色土(2.5YR5/3)しまり細く、粘性あり、焼土層。
- 9.にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり・粘性あり、焼土層、焼土粒子を含む。
- 10.暗褐色土(10YR3/3)しまりやややみり、粘性弱い、黄色の砂を多く含む。



第41図 H21号住居跡及び出土遺物実測図



第42图 H21号住居跡出土遺物実測図

本跡からの出土遺物は比較的多く、特に先にも述べたがカマド周辺から多く出土した。1～4は土師器環である。3と4は内面の見込み部に放射状の暗文が施されている。5は環とすべきか鉢とすべきか迷う形態である。内外面に丁寧なミガキが施されている。6～9は土師器の小型甕である。7は内面に黒色処理が施されている。10は土師器甕で、底部に12カ所の焼成前穿孔が確認できる。11は土師器鉢である。カマド脇から完形の伏せた状態で出土した。12～17は土師器甕である。いずれもいわゆる長胴の甕で、外面は16以外縦方向のヘラケズリ、内面はいずれも刷毛目状の跡が残るナデカヘラナデによる成形が確認できる。18と19は磨り石である。

本跡はこれらの出土品より6世紀前半代に位置づけられると考える。

(22) H22号住居跡

本住居跡は調査I区中央のV-ソー12・13、V-ター13Grに位置する。残存状態は西側がH17号住居跡やF11号掘立柱建物跡により削平されているほかは良好である。形態は方形を呈する。主軸方位はN-48°-Eを示す。規模は南北長3.20m、東西長2.70mを測る。壁高さは南壁で0.58mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居跡の床面積は8.55㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.03～0.18mを測る。壁溝およびピットは確認されなかった。住居跡掘方はほぼ平坦であったが、南東コーナー付近が一段低く掘り込まれていた。

カマドは東壁中央に構築されていた。煙道部は住居壁ラインより外側に飛び出すタイプで、袖部は形状はつぶれた状態であったが粘土で覆っており、礫等は検出されなかった。火床部も不明瞭であった。

本跡からの出土遺物は比較的数量少なく、覆土やカマド周辺から出土した。1は須恵器高環の環部の破片である。口縁部付近に一段の稜が巡る。2は土師器高環の脚部である。欠損する環部内面は黒色処理が施されている。3と4は土師器甕でいわゆる球形胴タイプの甕と考えられる。5は土師器甕である。底部を欠損する。6は磨り石、7は敲石である。

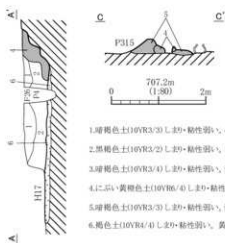
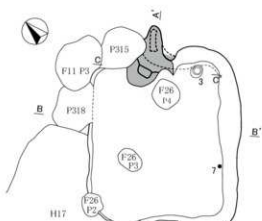
本跡はこれらの出土品より6世紀前半代に位置づけられると考える。

(23) H23号住居跡

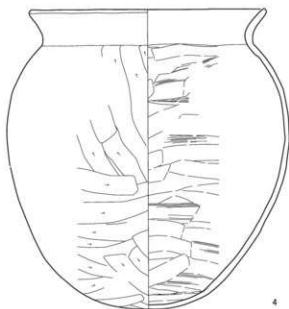
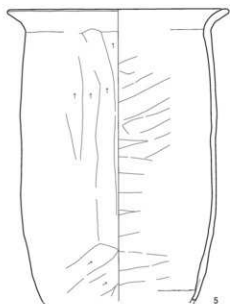
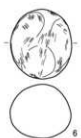
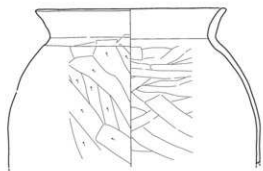
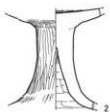
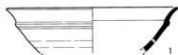
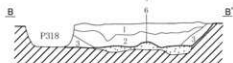
本住居跡は調査I区西よりのV-ター14・15、V-ト-14・15Grに位置する。残存状態は西側が一部クラムにより削平されている。形態は方形を呈する。主軸方位はN-9°-Wを示す。規模は南北長2.62m、東西長3.60mを測る。壁高さは北壁で0.57mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居跡の床面積は9.55㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.02～0.08mを測る。壁溝は西壁と南壁で確認された。規模は幅0.03～0.06mを測る。ピットは4カ所に検出された。ピット規模はP1が径0.37m・深さ0.40m、P2が径0.25m・深さ0.24m、P3が径0.60m・深さ0.17m、P4が径0.54m・深さ0.11mを測る。住居跡掘方は細かな凹凸はあったが、ほぼ平坦であった。また、掘方検出時に西壁下のP3北側で地山が焼けた範囲を確認した。しかし、西壁に煙道の痕跡は無かった為、カマドの存在は推定できない。

カマドは北壁中央に構築されていた。煙道部は住居壁ラインより外側に飛び出すタイプで、袖部は粘土で覆っていた。焚口部は「コ」の字状に石を組み焚口部としていたが、天井部の礫は故意的か中央部で折れ、落下していた。火床部は顕著に焼けており、径は0.18m・厚みは0.05mを測る。また、本跡のカマドは火床部奥に支脚石が立った状態で検出された。

本跡からの出土遺物は比較的多く、覆土やカマド周辺から出土した遺物13点を図示した。1～6は土師器環である。1～3は碗タイプで、4～6はいわゆる須恵器模倣環である。1は内外面に黒色処理されている。7～9は土師器甕である。9は丁寧なミガキが施され、形態から甕としてもよいのかもしれない。

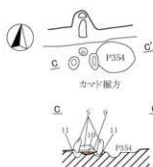
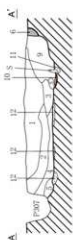
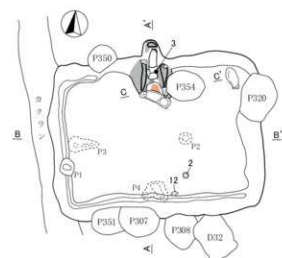


1. 暗褐色土(04VR3/3)石灰・粘性弱い、小石を多く含む。
2. 黒褐色土(04VR2/2)石灰・粘性弱い、1層より小石を多く含む。
3. 暗褐色土(04VR3/4)石灰・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。
4. 上に黄褐色土(04VR6/6)石灰・粘性ややあり、粘土土壌土層。
5. 暗褐色土(04VR3/3)石灰・粘性弱い、焼土・粘土粒子を含む。
6. 褐色土(04VR4/4)石灰・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。

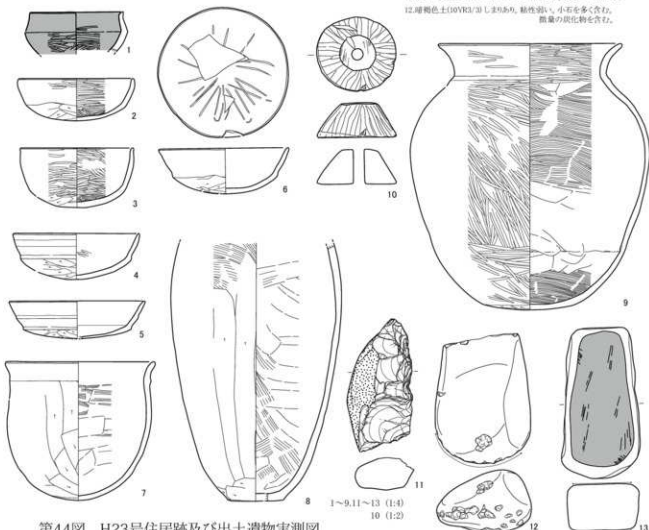
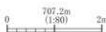
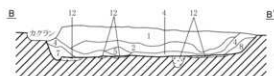


1~7 (1:4)

第43図 H22号住居跡及び出土遺物実測図



- 1.黒褐色土(10VR3/2)しまりややめ、粘性弱い、小石を多く含む。
- 2.灰黄褐色土(10VR4/2)しまり・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。
- 3.にがい・黄褐色土(10VR5/4)しまり・粘性あり、粘土ブロックを多く含む。
- 4.黒褐色土(10VR3/1)しまり・粘性ややめあり、炭化物を多く含む。
- 5.明黄褐色土(10VR6/8)しまり・粘性弱い、黄色の砂と黒土の混合土。
- 6.にがい・褐色土(7.10VR7/4)粘土層。
- 7.褐色土(10VR4/6)しまり・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。
- 8.黄褐色土(10VR5/3)しまり・粘性あり、ソフトロームのような土。
- 9.にがい・黄褐色土(10VR7/6)しまり・粘性あり、粘土と焼土の混合土、カマド焼土の層が剥れ、カマド構体の崩れ跡が認められる。
- 10.明赤褐色土(2.5VR5/3)しまりあり、粘性弱い、焼土の塊が認められる。
- 11.にがい・黄褐色土(10VR6/4)しまり・粘性あり、黄色の砂が混入。
- 12.暗褐色土(10VR3/2)しまりあり、粘性弱い、小石を多く含む、少量の炭化物を含む。



第44図 H23号住居跡及び出土遺物実測図

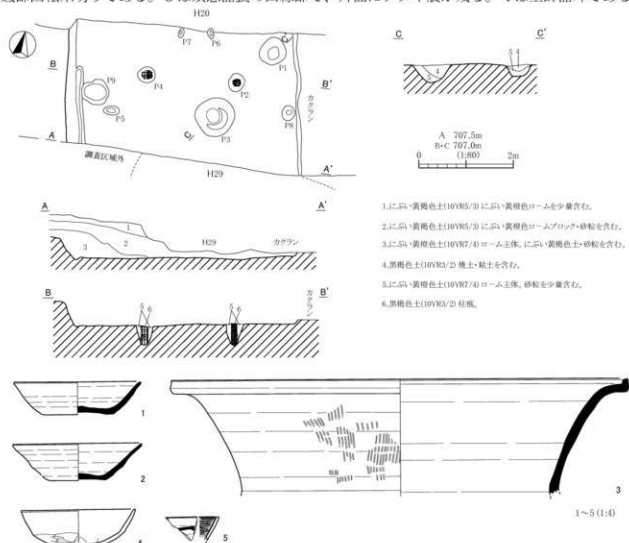
10は土製紡錘車で、完形である。11は複数の剝離痕が確認できるため石核とした。12は敲石、13は磨り石である。

本跡はこれらの出土遺物より6世紀前半に位置づけられると考える。

(24) H25号住居跡

本住居跡は調査I区南よりのⅧ-コー1・2、Ⅷ-サー1・2Grに位置する。残存状態は北側がH20号住居跡に南側が調査区域外となることから住居中央部のみを検出に止まった。形態は方形を呈すると考えられる。規模は残存南北長2.72m、東西長4.62mを測る。壁高さは西壁で0.48mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で12.50㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は確認されなかった。壁溝は西壁の一部に確認された。規模は幅0.01～0.03mを測る。ピットは9か所検出された。ピット規模はP1が径0.60m・深さ0.23m、P2が径0.41m・深さ0.45m、P3が径0.83m・深さ0.37m、P4が径0.36m・深さ0.42m、P5が径0.32m・深さ0.24m、P6が径0.23m・深さ0.07m、P7が径0.18m・深さ0.09m、P8が径0.32m・深さ0.19m、P9が径0.62m・深さ0.08mを測る。P2とP4が支柱穴の一部と考えられる。

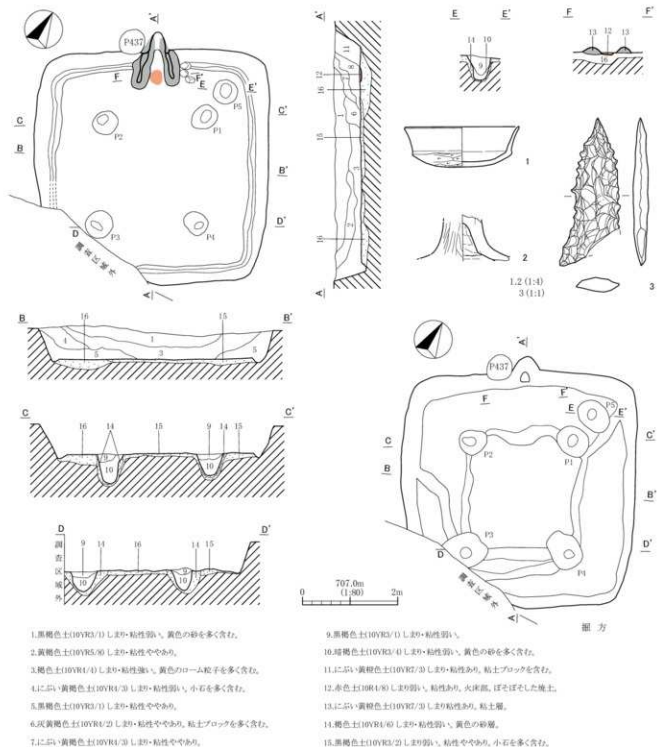
本跡からの出土遺物は覆土を中心に発見され、5点を図示した。1と2は須恵器環である。いずれも底部回転糸切りである。3は須恵器甕の口縁部で、外面にタタキ痕が残る。4は土師器環である。



第45図 H25号住居跡及び出土遺物実測図

いわゆる須恵器模倣環とされるタイプである。5は土師器環である。内面が黒色処理されている。また、外面に墨書と考えられる墨痕が確認できる。

本跡の帰属時期はH20号住居跡より古く、4の土師器環が示す6世紀代の可能性がある。



第46図 H26号住居跡及び出土遺物実測図

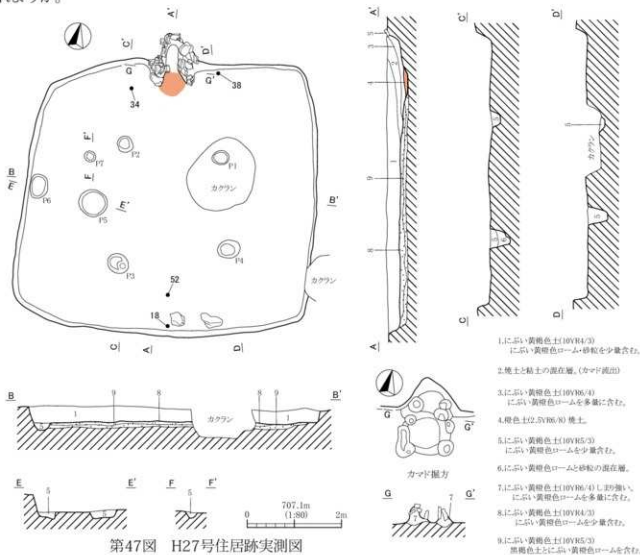
(25) H26号住居跡

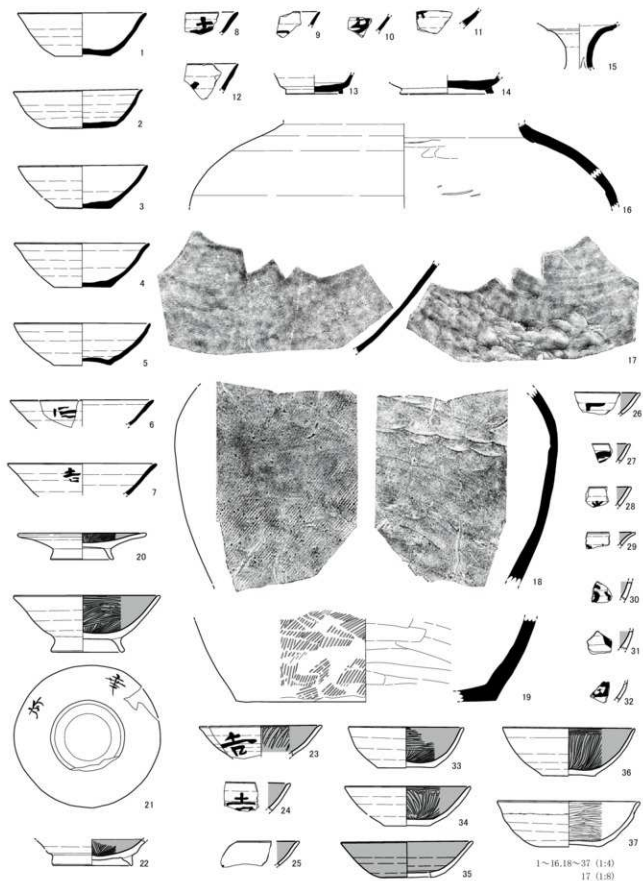
本住居跡は調査I区南よりのVーチ・ツ・テ-17・18Grに位置する。残存状態は南西側が一部調査区域外となるほかは良好である。形態は方形を呈する。主軸方位はN-25°-Wを示す。規模は南北長4.06m、東西長4.04mを測る。壁高さは西壁で0.65mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で14.98㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.04~0.20mを測る。壁溝は検出された部分では全周していた。規模は幅0.05~0.12mを測る。ピットは5か所に検出された。P1からP4は主柱穴と考えられ、P1-P2間は2.26m、P1-P4間は2.30mを測る。P5は貯蔵穴と考えられる。ピット規模はP1が径0.55m・深さ0.52m、P2が径0.49m・深さ0.68m、P3が径0.58m・深さ0.40m、P4が径0.52m・深さ0.45m、P5が径0.51m・深さ0.54mを測る。住居跡掘方は住居中央部が一段高く掘り残されるタイプで、周辺部との高さの差は0.12~0.15mを測る。

カマドは北壁中央に構築されていた。煙道部は住居壁ラインより外側に飛び出すタイプで、袖部は粘土で覆っていた。火床部は顕著に焼けており、径は0.32m・厚みは0.06mを測る。

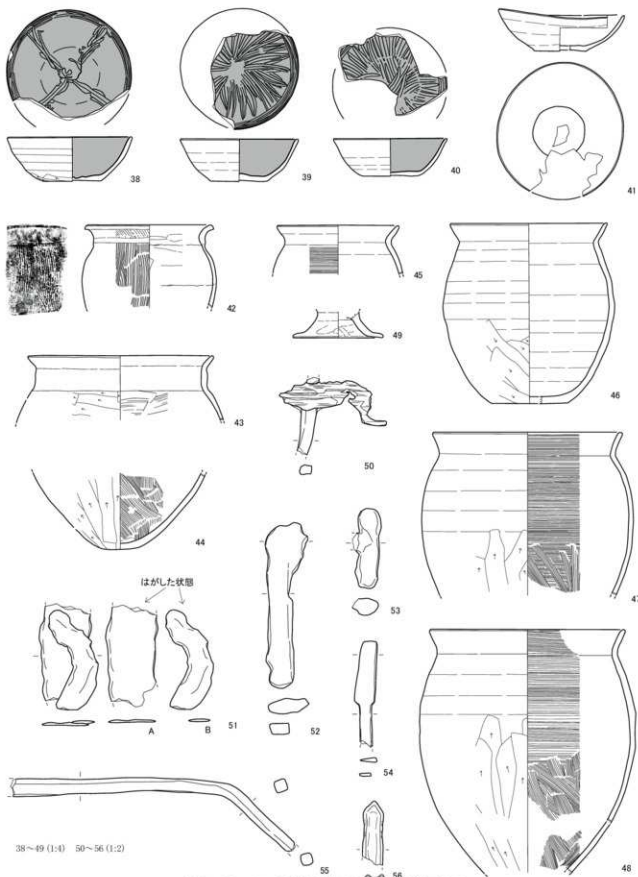
本跡からの出土遺物は比較的少なく3点を図示したのみである。1は土師器環である。いわゆる須恵器模倣坏と呼ばれるタイプである。2は土師器高環の脚部の破片である。外面にはミガキが施されている。3は石織で、かえりが一部欠損している。

本跡は出土遺物が非常に少なく、所産時期の確定に苦慮するが図示した土器から6世紀代と考えられようか。





第48图 H27号住居跡出土遺物実測図(1)



第49図 H27号住居跡出土遺物実測図(2)

(26) H27号住居跡

本住居跡は調査Ⅰ区南よりのV-シ・ス-20、Ⅷ-シ・ス-1・2Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形を呈する。主軸方位はN-14°-Wを示す。規模は南北長5.48m、東西長6.07mを測る。壁高さは西壁で0.38mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は31.64㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.04~0.14mを測る。壁溝は検出されなかった。ピットは7か所に検出された。P1からP4は主柱穴と考えられる。ピット規模はP1が径0.36m・深さ0.14m、P2が径0.34m・深さ0.21m、P3が径0.46m・深さ0.45m、P4が径0.48m・深さ0.47m、P5が径0.60m・深さ0.15m、P6が径0.50m・深さ0.13m、P7が径0.24m・深さ0.13mを測る。住居跡掘方はほぼ平坦であった。

カマドは北壁中央に構築されていた。煙道部は住居壁ラインより外側に飛び出すタイプで、袖部は心材を礫で構築し、粘土で覆っていた。火床部は顕著に焼けており、径は0.56m・厚みは0.09mを測る。また、火床部奥の左寄りには支脚石が立った状態で検出された。火床部の左寄りであることから、本カマドは二つの掛け口が存在したことが推定できる。カマド掘方は袖心材の掘り穴が確認された。

本跡からの出土遺物は覆土を中心に比較的多く出土し、56点を図示した。1~14は須恵器環である。6~12は墨書ならびに墨痕が確認できる。13と14は有台の環である。15は須恵器甕の頸部である。16~19は須恵器甕である。いずれも破片で全容が把握できるものはない。20は土師器有台付き皿である。内面に丁寧なミガキと黒色処理が施されている。21と22は土師器碗で、21は外面二か所に墨書が確認できるが判読できない。23~41は土師器環である。23~32は墨書あるいは墨痕が確認できる。23は「吉」か「土口」の2文字か。38は内面見込み部に「×」印的なミガキによる暗文が施されている。41は口縁部が円形ではなく、やや歪んだいわゆる「杓状環」と呼ばれている土器と考える。42~49は土師器甕である。42は胎土が白く、いわゆる外来系土器と認識されている「伊勢型甕」と呼ばれる範疇に含まれる土器と考える。45~48は土師器口クロ甕である。43はいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれる口縁部の破片である。50~56は金属製品である。いずれも種別決定には苦慮するが、54は鉄鏃、56は薄い銅製の板で何かの飾り金具と考えられる。

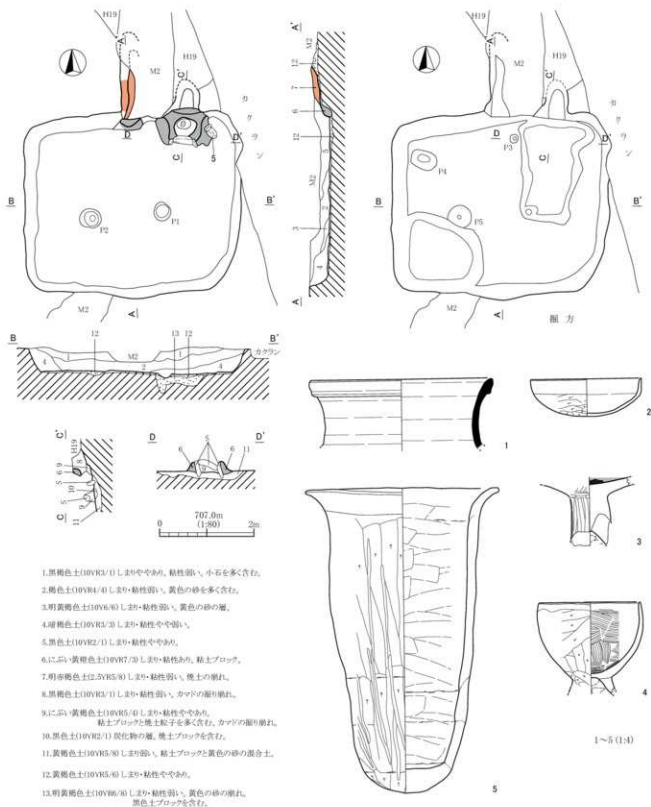
本跡はこれらの出土遺物から9世紀前半の帰属時期が考えられる。

(27) H28号住居跡

本住居跡は調査Ⅰ区西よりのVI-ア・イー14・15Grに位置する。残存状態は住居跡中心をM2号溝状遺構により削平されている。形態は方形を呈する。主軸方位はNを示す。規模は南北長3.36m、東西長4.11mを測る。壁高さは南東コーナーで0.54mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は13.62㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.02~0.08mを測る。壁溝は検出されなかった。ピットは5か所に検出された。ピット規模はP1が径0.40m・深さ0.50m、P2が径0.45m・深さ0.47m、P3が径0.20m・深さ0.10m、P4が径0.56m・深さ0.25m、P5が径0.50m・深さ0.46mを測る。住居跡掘方は北東コーナー側と南西コーナー側一段深く掘り窪められた部分があった。規模は北東側が長軸2.20m、深さ0.20m、南西側が長軸1.60m、深さ0.28mを測る。

カマドは北壁東よりと、カマド痕跡として北壁中央部に確認できた。このことから本跡カマドは作り変えが想定でき、中央部から東側に移動したことが想定できる。カマドはどちらも煙道部が住居壁ラインより外側に飛び出すタイプで、袖部は粘土を使い、焚口部は「コ」字状に礫を配置していた。また東側のカマドは火床部に支脚石が立った状態で検出された。中央部のカマドは煙道部と袖の一部が確認されたが、そのほとんどがM2号溝状遺構により削平されていた。

本跡からの遺物は少なく、5点を図示したのみである。1は須恵器甕の口縁部と考えられる。2は土師器環である。3は土師器高環の脚部破片で、残存する環部内面は黒色処理が施されている。4は土師器の台付き鉢とした。特異な形態であるが、口縁部は作成途中か、作り変えの可能性がある。5は土師器甕で、カマド脇から完形で出土した。器厚と重量があるタイプの甕である。



第50図 H28号住居跡及び出土遺物実測図

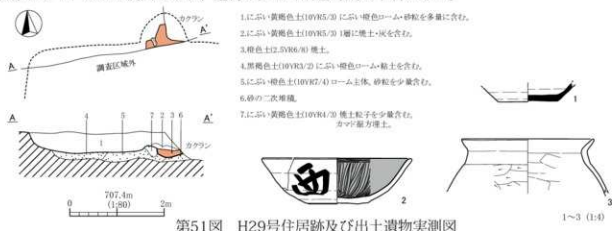
本跡は出土遺物が少なく、帰属時期の確定には苦慮するが、カマド脇より出土の土師器甕や土師器環の形態から6世紀後半に位置づけられると考える。

(28) H29号住居跡

本住居跡は調査Ⅰ区南端のⅧ-C-2Grに位置する。残存状態は住居跡のほとんどが調査区域外となり、カマドの一部分とセクション図により西壁が確認されたのみである。形態は不明である。壁高さは西壁で0.36mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で0.66㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は硬質であり、貼床は施されていた。貼床の厚みは0.07～0.20mを測る。壁溝は検出されなかった。カマドは北壁にあり、火床部は確認できた。

本跡からの遺物は少なく、3点を図示したのみである。1は須恵器環の底部破片である。2は土師器環で、外面に「西」と読める墨書がある。内面は黒色処理が施され、丁寧なミガキが施されている。3は土師器甕で、いわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるタイプのものである。

本跡はカマドのみの検出であり、遺物も少なく所産時期は不明である。



第51図 H29号住居跡及び出土遺物実測図

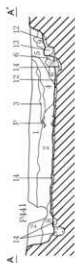
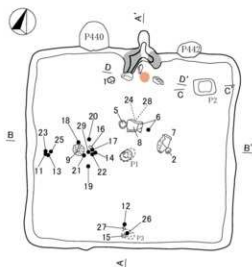
(29) H30号住居跡

本住居跡は調査Ⅰ区西よりのV-ト-17・18、VI-ア-17・18Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形を呈する。主軸方位はN-15°-Wを示す。規模は南北長3.88m、東西長4.00mを測る。壁高さは南西コーナーで0.59mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は15.92㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.01～0.03mを測り、非常に薄かった。壁溝は検出されなかった。ピットは3か所に検出された。P2が貯蔵穴と考えられる。ピット規模はP1が径0.26m・深さ0.15m、P2が径0.46m・深さ0.49m、P3が径0.26mを測る。住居跡掘方はほぼ平坦であった。

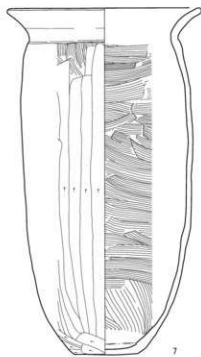
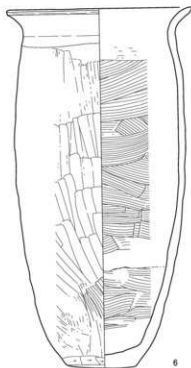
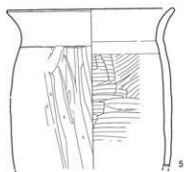
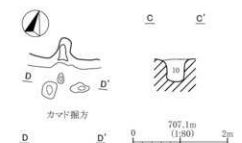
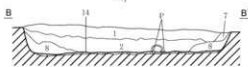
カマドは北壁中央に構築されていた。煙道部は住居壁ラインより外側に飛び出すタイプで、袖部は粘土で覆っていた。焚口部は入口に軽石を面取り加工し設置していた。火床部は顕著に焼けており、径は0.22m・厚みは0.02mを測る。また、火床部奥には支脚石が立った状態で検出された。火床部の左寄りであることから、本カマドは二つの掛け口が存在したことが推定できたが、掘方検出では設置穴が確認できなかった。カマド掘方は袖心材の掘方穴が確認された。

本跡からの出土遺物はカマド前面や西壁際の床面上から比較的多く出土し、29点を図示した。1～3は土師器環である。いずれもいわゆる須恵器模倣環であるが、3は口唇部が内側に内湾するタイプで、内面見込み部に放射状の暗文が施されていた。4は土師器甕で、底部は1/2程欠損するが多孔タイプである。5～8土師器甕である。6と7は同タイプで、外面ナデカヘラケズリ、内面は刷毛目状のナデが施されている。9は凹石である。中央が表裏ともに窪んでいる。10は磨り石で正面と側面が顕著に磨られていた。11～29は編物石と考えられる。住居床面の3カ所にまとまった状態で出土した。180～600gとやや重量にばらつきがあるが、おおむね250～320gの物が多い。いずれも川原石であり、遺跡東側に所在する湯川からの拾い上げと考えられる。

本跡はこれらの出土遺物から6世紀前半の帰属時期が考えられる。

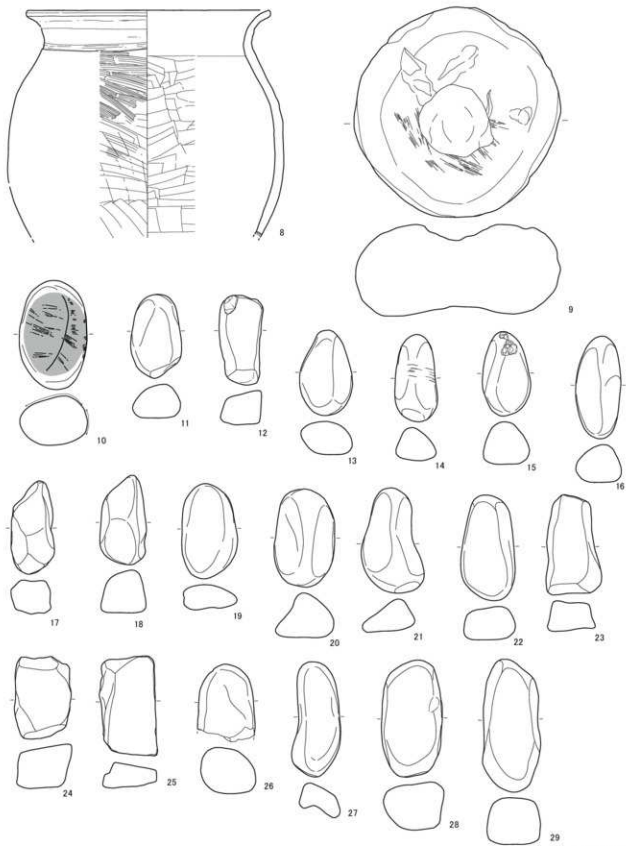


1. 暗褐色土(10YR3/2)しまりややあり、粘性弱い、小石を含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2)しまりややあり、粘性弱い。
3. 黒色土(10YR2/1)しまり、粘性ややあり。
4. ①に赤・黄褐色土(10YR5/4)しまり・粘性あり、粘土ブロック・焼土を含む。
5. 暗褐色土(10YR3/2)しまり・粘性弱い、粘土粒子を含む。
6. 明赤褐色土(5YR3/3)しまり・粘性弱い、焼土層の崩れ。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2)しまり・粘性弱い。
8. ①に赤・黄褐色土(10YR5/4)しまり・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。
9. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性弱い、黄色の砂を含む。
10. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
11. 棕色土(2.5YR6/3)焼土。
12. 黄褐色土(10YR5/4)しまり・粘性弱い、黄色の砂粒を含む。
13. 明赤褐色土(2.5YR3/3)焼土ブロック。
14. 褐色土(10YR4/4)しまりややあり。



1~7 (1:4)

第52図 H30号住居跡及び出土遺物実測図



8~29 (1:4)

第53图 H30号住居跡出土遺物実測図

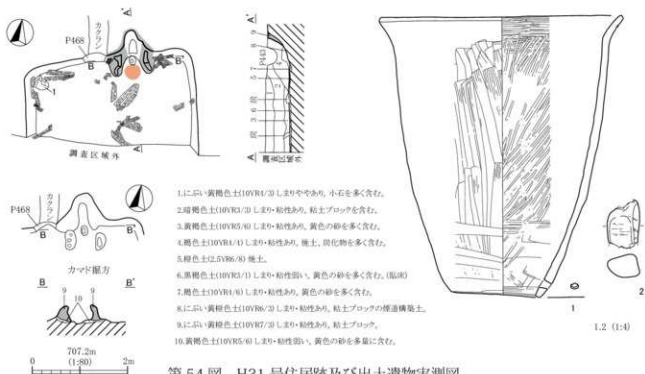
(30) H31号住居跡

本住居跡は調査1区南西よりのV-テ・ト-18Grに位置する。残存状態は南側が調査区域外となり、北側半分の検出に止まった。形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-17°-Wを示す。規模は検出南北長1.80m、東西長3.24mを測る。壁高さは南西コーナーで0.58mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で5.37㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.01~0.02mを測り、非常に薄かった。壁溝やピットは検出されなかった。本跡は図にも示した通り、床面に炭化材が確認された。炭化材は建築部材と考えられ、住居中央や壁際からまとまって出土した。部位を特定できるものはなかった。本跡は焼失住居の可能性がある。住居跡掘方はほぼ平坦であった。

カマドは北壁中央に構築されていた。煙道部は住居壁ラインより外側に飛び出すタイプで、袖部は粘土で覆っていた。火床部は顕著に焼けており、焼土径は0.32m・厚みは0.02mを測る。カマド掘方検出時に支脚石と焚口部の袖構築材の掘方穴が確認された。

本跡からの出土遺物は少なく2点を図示したのみである。1は土師器甕である。住居北西コーナーに立てかけたような状態で出土した。底付近に糞受けの孔と考えられる一対の焼成前の孔があげられている。2は磨石と考えられる。

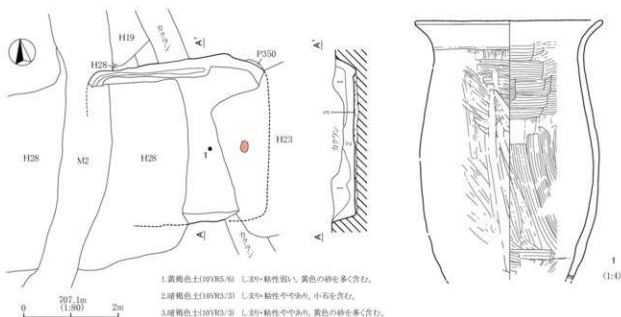
本跡は出土遺物が少なく所産時期を特定しづらいが、土師器甕の特徴から6世紀代の帰属時期が考えられる。



第54図 H31号住居跡及び出土遺物実測図

(31) H32号住居跡

本住居跡は調査1区西よりのV-ト-14・15、VI-ア-14・15Grに位置する。残存状態は西側がH28号住居跡、東側がH23号住居跡にそれぞれ削平されており、住居の北壁と中央部のみの検出に止まった。形態は方形を呈すると考えられる。規模は南北長2.88m、残存東西長0.64mを測る。壁高さは南壁で0.54mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で2.94㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.04~0.09mを測る。壁溝は北壁の一部で検出された。規模は幅0.02~0.08mを測る。住居跡掘方はほぼ平坦であった。ピットは確認されなかった。



第 55 図 H32 号住居跡及び出土遺物実測図

本跡のカマドは確認されなかった。北壁全体が検出されているため、北壁以外の構築が考えられる。可能性として、H23号住居跡の項で述べた、H23号住居跡の掘方検出時に西壁寄りで確認された焼土範囲が、前項ではH23号住居跡の古いカマドと考えたが、あるいは本跡のカマド火床部の残存の可能性もある。とすると東壁の構築となる。

本跡からの出土遺物は少なく、1の土師器甕を図示したのみである。1は住居中央の床面上から出土した。底部は欠損するが、内外面にナデが施されている。

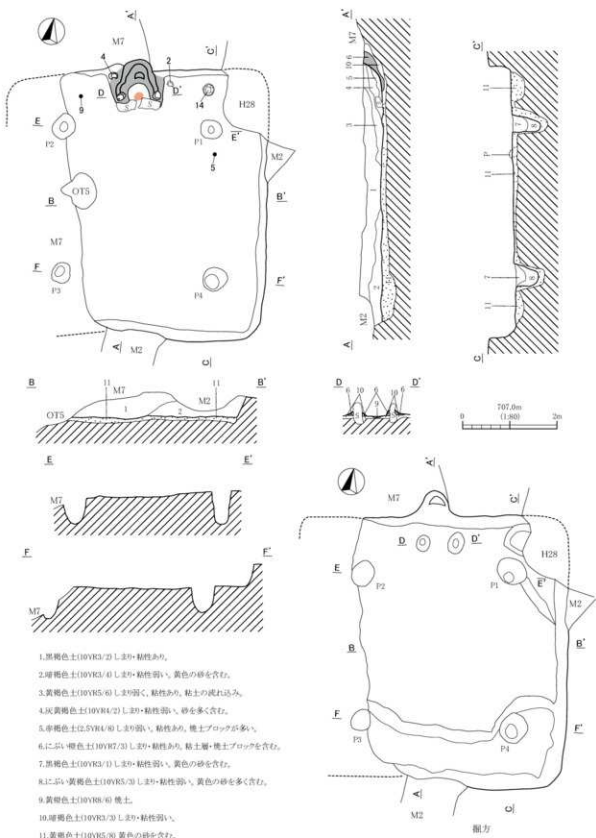
本跡の帰属時期は出土遺物が少なく不確実であるが、本跡を削平するH23・28号住居跡がいずれも6世紀代の構築であることから、本跡は5世紀代の所産時期の可能性もある。

(32) H33号住居跡

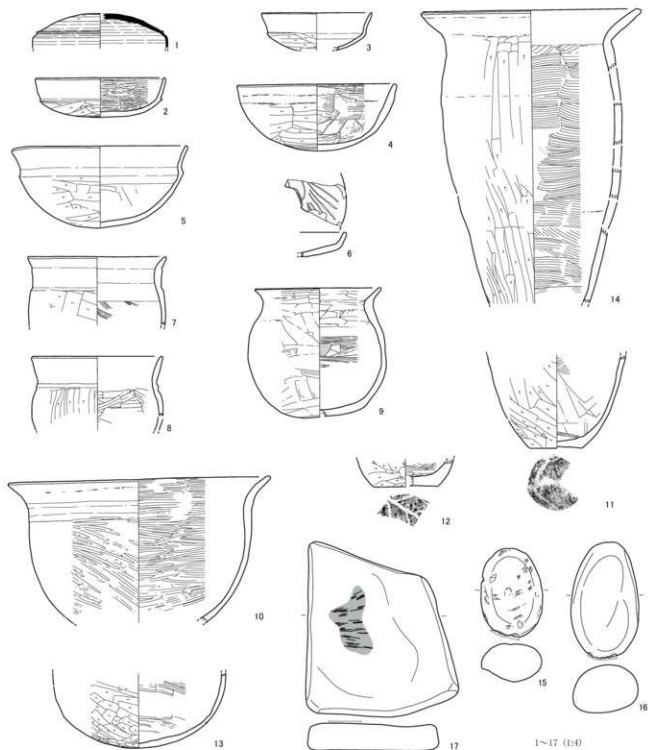
本住居跡は調査Ⅰ区西端のⅣ-ア・イー-15・16Grに位置する。残存状態は西側がM7号溝状遺構により削平されている。形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-15°-Wを示す。規模は南北長5.16m、残存東西長4.00mを測る。壁高さは南東コーナーで0.55mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は残存部分で19.75㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であり、貼床は全体的に施されており、貼床の厚みは0.05~0.32mを測る。ピットは4か所検出された。P1からP4が主柱穴と考えられる。柱間規模はP1-P2が3.12m、P1-P4が3.12mを測る。ピット規模はP1が径0.46m・深さ0.73m、P2が径0.54m・深さ0.47m、P3が径0.48m・深さ0.40m、P4が径0.54m・深さ0.63mを測る。住居跡掘方はP3~P4ラインの南側が一段深く掘り下がっており、段差は0.12~0.17mを測る。

カマドは北壁中央に構築されていた。煙道部は住居壁ラインより外側にあまり飛び出さないタイプで、袖部は粘土で覆っていた。焚口部は軽石を面取りして「コ」の字状に配置しており、天井部の大型礫は故意に中央で打折ったような状態で検出された。火床部は顕著に焼けており、焼土は径0.20m・厚み0.02mを測る。カマド掘方時に焚口部の袖構築材の掘方穴が確認された。

本跡からの出土遺物はカマド脇や覆土から多く出土し、17点を図示した。1は須恵器円蓋である。口縁部を欠損する。2~6は土師器環である。4と5は形態から鉢とすべきか。2と3はいずれも須恵器模倣環のタイプで、2は内面に丁寧なミガキが施されている。6はやや浅いタイプの環で、皿と



第56図 H33号住居跡実測図



第57図 H33号住居跡出土遺物実測図

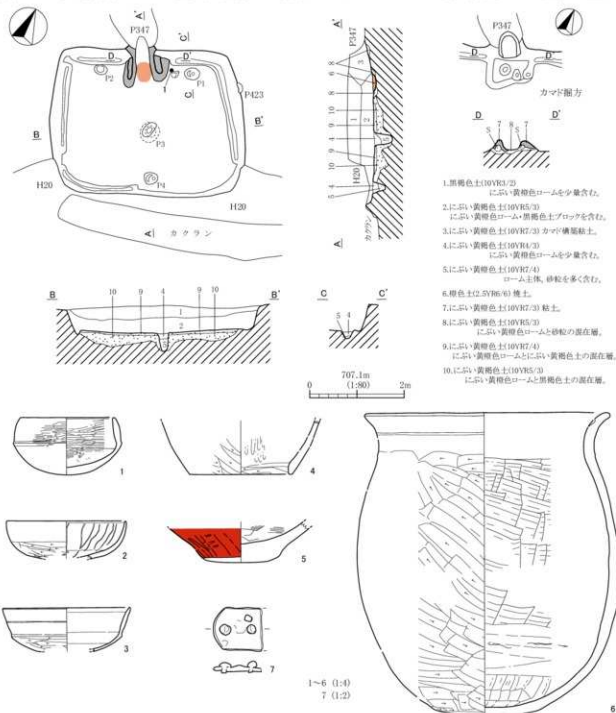
すべきか。内面見込み部に放射状の暗文が施されている。7～9は土師器小型甕である。10は土師器鉢で大型品であり、内外面に丁寧なミガキが施されている。11～14は土師器甕である。11と12は底部に木葉痕が確認できる。13は底部が球形である。15は軽石製の石製品で一部に敲き痕が確認できる。16も敲き痕が確認できる。17は一部に顕著な磨りがみられる石製品で、大きさから台石的

な使用が考えられる。

本跡は出土遺物の特徴から6世紀前半の所産時期が考えられる。

(33) H34号住居跡

本住居跡は調査I区中央のV-サ・コー18・19Grに位置する。残存状態は南側がH20号住居跡に削平されている他は良好であった。形態は方形を呈する。主軸方位はN-24°-Wを示す。規模は南北長2.60m、東西長3.44mを測る。壁高さは北東コーナーで0.57mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上が



第58図 H34号住居跡及び出土遺物実測図

る。住居跡の床面積は8.78㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されていた。貼床の厚みは0.09～0.32mを測る。ピットは4か所検出された。変形的であるが、P1からP4は柱穴と考えられる。ピット規模はP1が径0.34m・深さ0.21m、P2が径0.28m・深さ0.07m、P3が径0.36m・深さ0.40m、P4が径0.30m・深さ0.27mを測る。住居跡掘方は南側が全体的に深く掘り下がっていた。

カマドは北壁中央に構築されていた。煙道部は住居壁ラインより外側にあまり飛び出さないタイプで、袖部は粘土で覆い、心材として礫が配置されていた。火床部は顕著に焼けており、焼土は径0.44m・厚み0.07mを測る。カマド掘方時に焚口部の袖構築材の掘方穴が確認された。

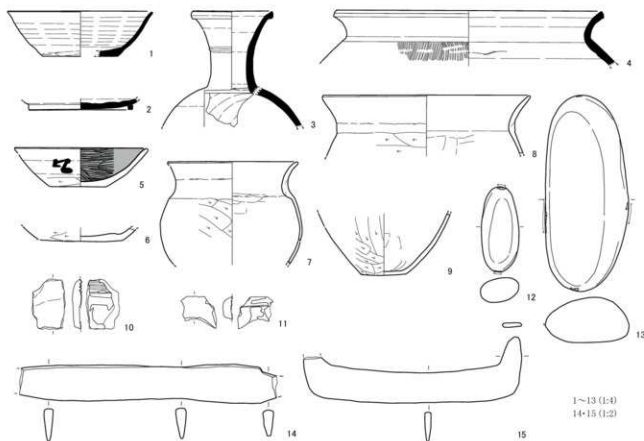
本跡からの出土遺物はカマド脇や覆土から出土し7点を図示した。1～3は土師器環である。1はやや深いタイプの環で、口縁部が内湾する。カマド脇から出土した。3はいわゆる「有段口縁環」と考えられる。4は土師器甕である。5は土師器の壺か甕の底部と考えられる。外面に赤彩を施している。6は土師器甕で、外面ヘラケズリを施す。7は銅製の辻金具と考えられる。3か所の鎮留め具が確認できる。

本跡はこれらの出土遺物から6世紀後半の所産時期が考えられる。

(34) H35号住居跡

本住居跡は調査I区南端のVーシ・ス・セー20、Ⅷーシ・ス・セー1・2Grに位置する。残存状態は西側がM6号溝状遺構により、上部をH27号住居跡に削平されている。南側は調査区域外となる。形態は方形を呈する。主軸方位はN-7°-Wを示す。規模は南北長8.92m、残存東西長7.28mを測る。壁高さは南東コーナー付近で0.41mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は残存部分で64.45㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は全体的に施されており、貼床の厚みは0.07～0.24mを測る。ピットは62か所検出された。P2・P3・P5・P37が主柱穴と考えられる。柱間規模はP2-P3が3.68m、P2-P5が3.44mを測る。ピット規模はP1が径0.88m・深さ0.19m、P2が径0.83m・深さ0.33m、P3が径0.72m・深さ0.41m、P4が径0.60m・深さ0.18m、P5が径0.68m・深さ0.36m、P7が径0.74m・深さ0.35m、P8が径0.25m・深さ0.17m、P9が径0.33m・深さ0.22m、P10が径0.84m・深さ0.32m、P11が径0.95m・深さ0.30m、P12が径0.86m・深さ0.21m、P13が径0.56m・深さ0.22m、P14が径0.70m・深さ0.19m、P15が径0.48m・深さ0.32m、P16が径0.50m・深さ0.24m、P17が径0.32m・深さ0.17m、P18が径0.20m・深さ0.23m、P19が径0.23m・深さ0.15m、P20が径0.11m・深さ0.18m、P21が径0.27m・深さ0.11m、P22が径0.22m・深さ0.14m、P23が径0.38m・深さ0.49m、P24が径0.24m・深さ0.31m、P25が径0.26m・深さ0.17m、P26が径0.24m・深さ0.17m、P27が径0.34m・深さ0.14m、P28が径0.25m・深さ0.20m、P29が径0.23m・深さ0.15m、P30が径0.26m・深さ0.14m、P31が径0.68m・深さ0.13m、P32が径0.31m・深さ0.16m、P33が径0.77m・深さ0.29m、P34が径0.28m・深さ0.16m、P35が径0.32m・深さ0.07m、P36が径0.82m・深さ0.38m、P37が径0.38m・深さ0.34m、P38が径0.58m・深さ0.15m、P39が径0.30m・深さ0.08m、P40が径0.46m・深さ0.11m、P41が径0.36m・深さ0.15m、P42が径0.25m・深さ0.16m、P43が径0.66m・深さ0.08m、P44が径0.68m・深さ0.19m、P45が径1.06m・深さ0.34m、P46が径0.36m・深さ0.20m、P47が径0.72m・深さ0.06m、P48が径0.92m・深さ0.46m、P49が径0.60m・深さ0.15m、P50が径0.54m・深さ0.08m、P51が径0.70m・深さ0.48m、P52が径1.02m・深さ0.38m、P53が径0.36m・深さ0.31m、P54が径0.83m・深さ0.46m、P55が径0.36m・深さ0.21m、P56が径0.40m・深さ0.18m、P57が径0.32m・深さ0.32m、P58が径0.55m・深さ0.14m、P59が径0.48m・深さ0.18m、P60が径0.32m・深さ0.19m、P61が径0.33m・深さ0.14m、P62が径0.28m・深さ0.15m、P63が径0.37m・深さ0.36mを測る。

また、本跡は床面上に大型礫が配され礎石的な使い方が想定できる。特に北壁と東壁は顕著で、礫間隔は2.06～4.08mを測る。本跡の掘方は全体に凹凸が激しかったが、住居中央が高く、壁際が一段低く掘られていた。



第59図 H35号住居跡出土遺物実測図

1~13 (1:0)
14・15 (1:2)

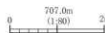
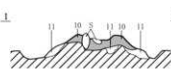
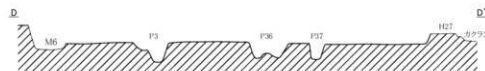
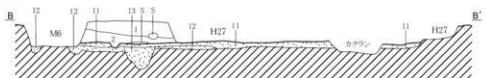
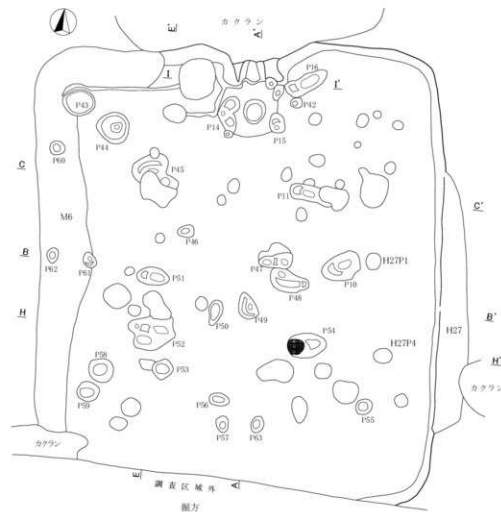
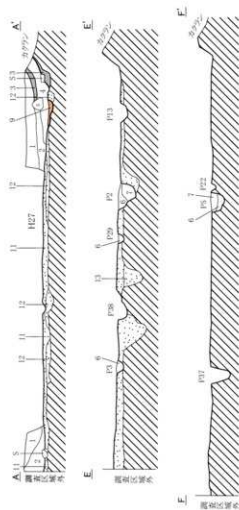
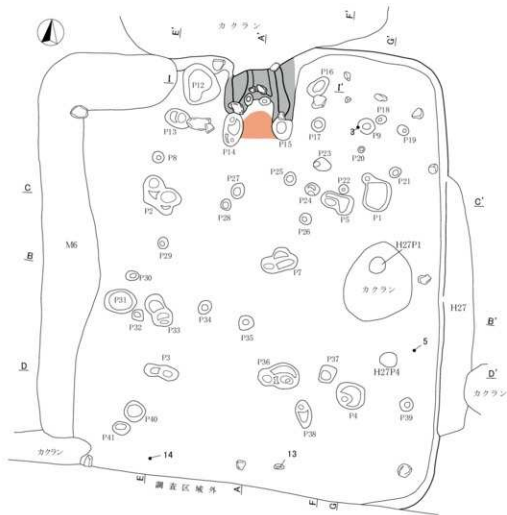
カマドは北壁中央に構築されていた。煙道部はカクランにより削平されており詳細は不明である。袖部は心材として軽石を使い、粘土で覆っていた。焚口部の「コ」の字状に配置された石はすでに欠損していた。火床部は顕著に焼けており、焼土は径0.76m・厚み0.09mを測る。カマド掘方時に焚口部の袖構築材の掘方穴が確認された。

本跡からの出土遺物は覆土やカマド内から多く出土し15点を図示した。1は須恵器環である。2は須恵器有台帯で口縁部を欠損する。3は須恵器瓶で、いわゆる「フラスコ型」と呼ばれるものと考えられる。頸部に2本の沈線が巡り、肩部に自然釉が付着する。4は須恵器甕で、頸部～口縁部の破片である。外面にタタキが残る。5は土師器環で、内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。体部外面には、判読不明な墨書が確認できる。7～9は土師器甕である。いずれも外面へラケズリが施されている。10と11は土製品と考えられるが、種別は不明である。裏面に接合部と考えられる凹凸が確認できる。12と13は敲石である。12は上下に、13は両側に敲き痕が確認できる。14と15は鉄製品である。形状より14は刀子、15は芋引金具と考えられる。

本跡はこれらの出土遺物から9世紀前半の所産時期が考えられる。

(35) H36号住居跡

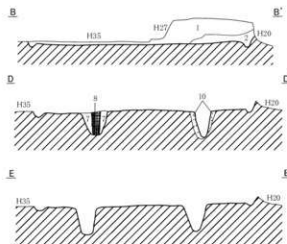
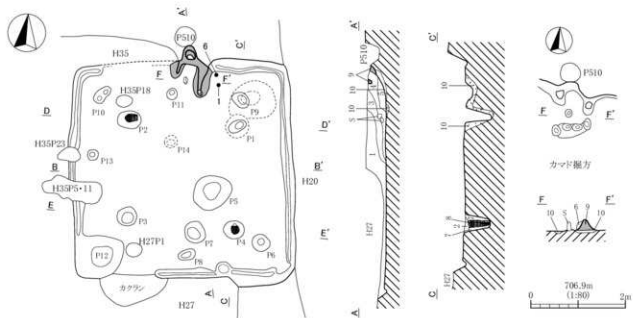
本住居跡は調査I区南端のV-サ・シ・ス-20、Ⅷ-サ・シ・ス-1Grに位置する。残存状態は東側をH20号住居跡、南側をH27号住居跡に削平されている。形態は方形を呈する。主軸方位はN-4°-Wを示す。規模は南北長4.24m、東西長4.40mを測る。壁高さは南東コーナー付近で0.54mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は18.18㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床は確認されず、地山を踏み固めたような状態であった。



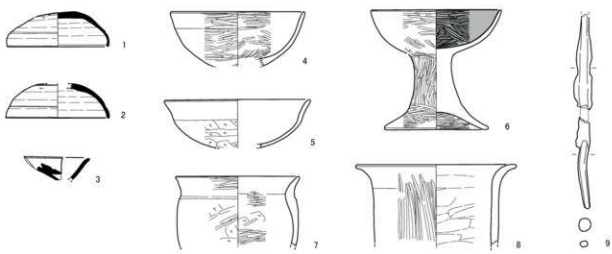
1. 1,2に5-1黄褐色土(10YR7/4)ローム主体、砂粒を多量に含む。
2. 1に5-1黄褐色土(10YR8/3)に5-6黄褐色ローム・黒褐色土を含む。
3. 概6色土(10YH/1)粘土。
4. 1,2黄褐色土(10YR4/2) 概灰色粘土と5-6黄褐色粘土の層在層。
5. 黒色土(10YR2/1) 炭化物の堆積。
6. 黒褐色土(10YR3/2) 砂粒を少量含む。
7. 暗褐色土(10YR3/4) ローム主体、砂粒を多く含む。

8. 1に5-1黄褐色土(10YR4/2) 柱肌。
9. 褐色土(2.5YR6/6) 機土。
10. 黒褐色土(10YR2/2) 黒褐色粘土と5-6黄褐色粘土の層在層。
11. 黒褐色土(10YR3/2) に5-6黄褐色ローム・砂粒を含む。灰床。
12. 黒褐色土(10YR3/2) 砂粒を含む。黒方硬土。
13. 1に5-1黄褐色土(10YR7/4) ローム主体、1に5-6黄褐色土を少量含む。

第60図 H35号住居跡実測図



- 1.黒褐色土(10V83/2) に灰・黄褐色ロームを少量含む。
- 2.に灰・黄褐色土(10V85/3) に灰・黄褐色ローム・砂粒を多量に含む。
- 3.に灰・黄褐色土(10V86/4) 粘土。
- 4.に灰・黄褐色土(10V85/3) 二層中にに灰・黄褐色粘土粒子を少量含む。
- 5.に灰・黄褐色土(10V84/3) に灰・黄褐色ロームの存在層。
- 6.に灰・黄褐色土(10V86/4) 粘土。陥没した天井部分。
- 7.に灰・黄褐色土(10V87/4) ローム主体。砂粒少量含む。
- 8.に灰・黄褐色土(10V84/3) 柱状。
- 9.に灰・黄褐色土(10V86/4) 粘土。
- 10.に灰・黄褐色土(10V84/2) 5層中に砂粒多く含む。



第61図 H36号住居跡及び出土遺物実測図

1~8 (1:4)
9 (1:2)

本跡の壁溝は北壁と南壁の一部をのぞいて確認された。規模は幅0.02～0.08mを測る。ピットは14か所検出された。P1からP4が主柱穴と考えられる。柱間規模はP1-P2が2.24m、P1-P4が2.16mを測る。また、P12は南西コーナー部に検出され、床下土坑的な形状である。ピット規模はP1が径0.38m・深さ0.56m、P2が径0.52m・深さ0.48m、P3が径0.40m・深さ0.55m、P4が径0.44m・深さ0.49m、P5が径0.84m・深さ0.26m、P6が径0.40m・深さ0.21m、P7が径0.47m・深さ0.17m、P8が径0.35m・深さ0.18m、P9が径0.40m・深さ0.14m、P10が径0.40m・深さ0.11m、P11が径0.24m・深さ0.12m、P12が径0.90m・深さ0.19m、P13が径0.24m・深さ0.11m、P14が径0.28m・深さ0.17mを測る。本跡は貼床がほとんどなかったため、掘方については確認できなかったが、細かな凹凸は検出された。

本跡のカマドは北壁中央部分で検出された。煙道は住居壁よりやや飛び出すタイプのカマドで、煙道の煙り出し部分が残っていた。袖部は粘土で覆い、心材として礫が配置されていた。火床部は顕著な焼けが確認できなかった。火床部中央で支脚石が立った状態で確認できた。カマド掘方時に焚口部の袖構築材の掘方穴が確認された。

本跡からの出土遺物は覆土やカマド周辺部から出土した。9点を図示した。1と2は須恵器環蓋である。3は須恵器環の口縁部で、墨書が確認できるが判読不明である。4と5は土師器環としたが、鉢としてもよい大きさである。また、4は丁寧なミガキが施され器高も高いことから、高環坏部の可能性がある。6は土師器高環で、全体に丁寧なミガキが施され、坏部内面は黒色処理が施されている。7と8は土師器甕で、7は小型甕のタイプである。9は鉄製品で、二つに折れているが同一個体と考えた。用途は不明である。

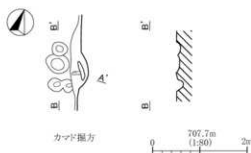
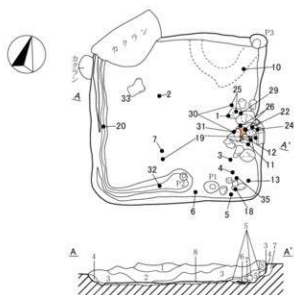
本跡は1と2の須恵器蓋や6の土師器高環などから7世紀中葉の所産時期が考えられる。

(36) H37号住居跡

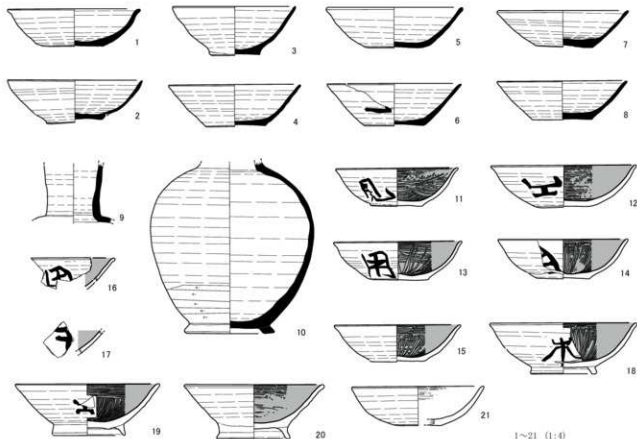
本住居跡は調査Ⅱ区西端のVI-チ・ツ-4・5Grに位置する。残存状態は北西コーナー付近をカクランにより削平されている。なお、本跡は調査の都合で北側と南側それぞれに分けて調査が行われた。形態は方形を呈する。主軸方位はN-76°-Eを示す。規模は南北長3.32m、東西長3.00mを測る。壁高さは北壁中央で0.26mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は9.67㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床の厚みは0.02～0.06mを測る。壁溝は西壁と南壁の一部で検出された。規模は幅0.03～0.09mを測る。ピットは2か所検出された。ピットの規模はP1が径0.32m・深さ0.14m、P2が径0.16m・深さ0.14mを測る。本跡の掘方は、北東コーナー部が一部土坑状に掘り込まれていた。規模は長軸1.47m・短軸0.96m・深さ0.26mを測る。

本跡のカマドは東壁中央部分で検出された。煙道は住居壁より飛び出さないタイプのカマドである。袖部は粘質土と自然礫により構築されていた。火床部はよく焼けており、焼土規模は径0.36m・厚み0.08mを測る。

本跡からの出土遺物は覆土やカマド周辺部から数多く出土し、35点を図示した。1～8は須恵器環である。1のみ底部が静止糸切り離しであるが、2～8は回転糸切り離しであった。6は体部に墨書が確認できる。9は須恵器長頸壺の頸部である。自然軸の付着が確認できる。10は須恵器長頸壺の底部から胴部の部分で、頸部と口縁部が欠損するが他は完形である。11～17は土師器環である。いずれも内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。また、15を除く6点は墨書も確認できる。11は「見」、13は「用」と判読できる。18～20は土師器碗である。いずれも内面に丁寧なミガキが施され、黒色処理を施している。18と19は体部外面に墨書が確認できる。18は「奉」の変形か。21は土師器環である。22～31は土師器甕である。22～24は小型のロク口甕で、23は口縁部が受け口状を呈する。25～31はいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるタイプの甕である。いずれも口縁部から頸部が「コ」の字状を呈する。32～35は石製品である。32は砥石である。砥面は3面で、広い面に深い条痕状の磨りが確認できる。33は台石であり、住居北側の床面上から出土した。両面に細かな擦痕



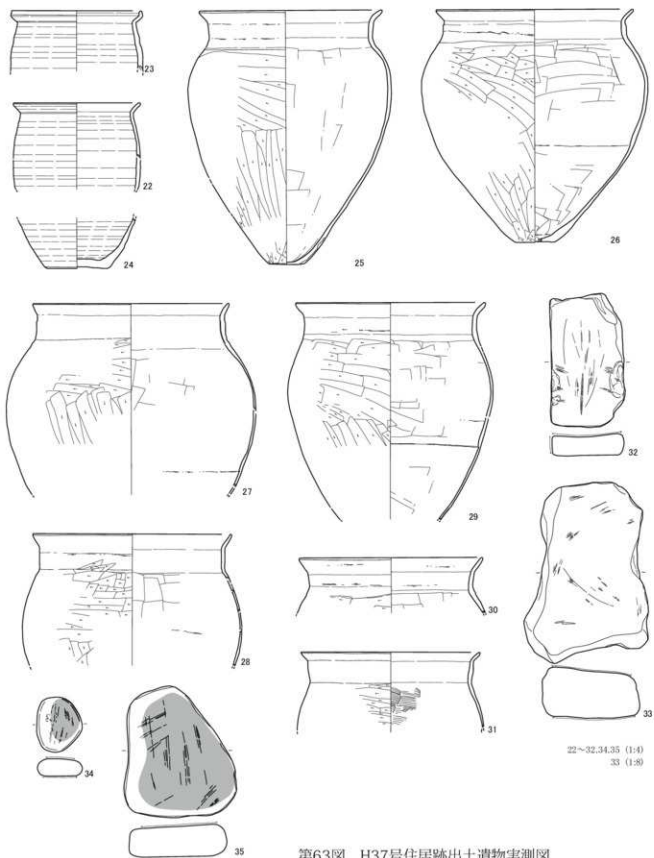
- 1.黒褐色土(10YR3/1)しまりややみ、粘性弱い、ローム粒子を少量含む。
- 2.暗褐色土(10YR3/4)しまり・粘性やや弱、ローム粒子を多く含む。
- 3.黒褐色土(10YR3/2)しまり弱、粘性ややみ。
- 4.褐色土(10YR4/6)しまり・粘性弱、ロームブロックを含む。
- 5.にり・黄褐色土(10YR5/4)しまり弱、粘性あり、粘土と機土の混合土。
- 6.赤色土(10R5/4)しまりあり、粘性弱、赤床部より焼けてカリ状している。
- 7.黄褐色土(10YR5/6)しまりあり。
- 8.黄褐色土(10YR5/8)しまり・粘性ややみ、炭化粉・機土粒子を含む。



1~21 (1:4)

第62図 H37号住居跡及び出土遺物実測図

が確認できる。34と35は磨り石である。34は両面、35は片面が条痕を伴う磨りがみられた。本跡はこれらの出土遺物により、9世紀後半の所産時期が考えられる。



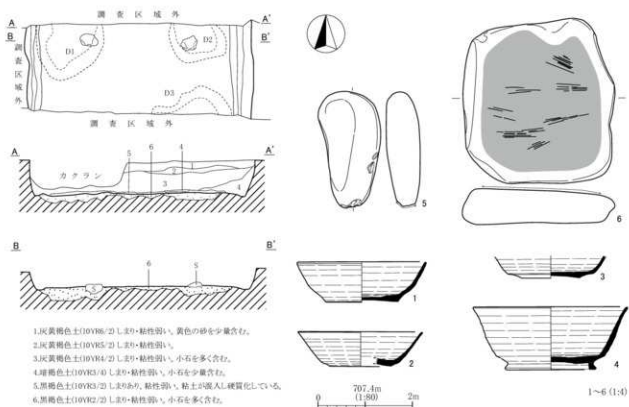
第63图 H37号住居跡出土遺物実測図

(37) H38号住居跡

本住居跡は調査Ⅱ区西端のVI-シ・スー9・10Grに位置する。検出状態は南北が調査区域外になるため、住居の中央部分のみの検出に止まった。形態は方形を呈し、主軸方位はNを示すと考えられる。規模は検出南北長1.88m、東西長3.98mを測る。壁高さは東壁で0.47mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で7.61㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床の厚みは0.04~0.15mを測る。壁溝は西壁と東壁で検出された。規模は幅0.01~0.10mを測る。ピットは検出されなかったが、床面上に2点の大型礫が配置されたように検出された。礫間は東西2.00mを測る。本跡の掘方は、3カ所に床下土坑的な掘り込みが確認された。規模はD1が長軸1.18m・深さ0.28m、D2が長軸1.18m・深さ0.16m、D3が長軸1.68m・深さ0.20mを測る。

本跡からの出土遺物は覆土を中心に多く出土し、6点を図示した。1~3は須恵器坏である。いずれも回転糸切りであった。4は須恵器有台坏である。底部糸切りの後、高台貼付を行っている。5と6は石製品である。5は敲石、6は磨り石である。

本跡はこれらの出土遺物から8世紀代の所産時期が考えられる。

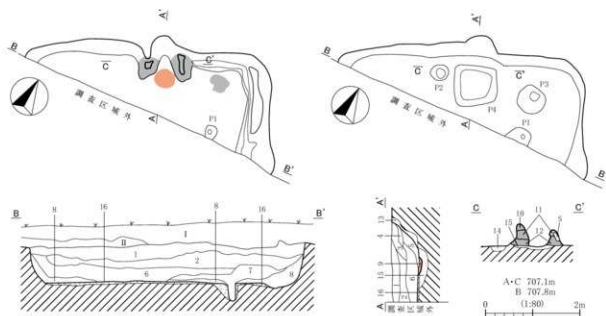


- 1.灰黄褐色土(10V08/2)しまり・粘性弱い、黄色の砂を少量含む。
- 2.灰黄褐色土(10V05/2)しまり・粘性弱い。
- 3.灰黄褐色土(10V04/2)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
- 4.暗褐色土(10V03/0)しまり・粘性弱い、小石を少量含む。
- 5.黒褐色土(10V02/2)しまりあり、粘性強い、粘土が凝入し硬質化している。
- 6.黒褐色土(10V02/2)しまり・粘性強い、小石を多く含む。

第64図 H38号住居跡及び出土遺物実測図

(38) H39号住居跡

本住居跡は調査Ⅱ区南端のVI-コ・サー9・10Grに位置する。残存状態は南側が調査区域外となる。形態は方形を呈する。主軸方位はN-28°-Wを示す。規模は検出南北長1.20m、東西長4.32mを測る。壁高さは北壁中央で0.55mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で4.36㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床の厚みは0.04~0.06mを測る。壁溝は東壁と北壁の一部で検出された。規模は幅0.02~0.05mを測る。ピットは掘方時も含め4か所検出された。ピットの規模はP1が径0.30m・深さ0.48m、P2が径0.40m・深さ0.15m、P3が径0.60m・深さ0.06m、P4が径0.90m・深さ0.23mを測る。本跡の掘方は、全体に細かな凹凸が確認された。



1. 埴間色土 学校建設時の造成土。

II. 黒褐色土 旧埋蔵層作土。

1. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性ややみ。

2. におい・黄褐色土(10YR4/3)しまり・粘性ややみ、粘土粒子を含む。

3. におい・黄褐色土(10YR7/2)しまり・粘性あり、粘土を多く含む。

4. 灰黄褐色土(10YR5/2)しまり・粘性弱い。

5. におい・黄褐色土(10YR7/3)しまり弱い、粘土を含む。崩れた粘土層。

6. 黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性ややみ、粘土粒子を多く含む。

7. 黒褐色土(10YR2/2)しまり・粘性ややみ、黒色土ブロックと炭化物を含む。

8. 埴間色土(10YR3/3)しまり弱く、粘性ややみ、小石を多く含む。

9. 明赤褐色土(2.5YR5/6)しまり・粘性弱い、砂がよく焼けた焼土でざらざらしている。

10. におい・黄褐色土(10YR5/4)しまり・粘性あり、褐色土ブロックを多く含む。

11. 灰白色土(10YR8/2)しまり・粘性あり、粘土層、白色の粘土ブロックを含む。

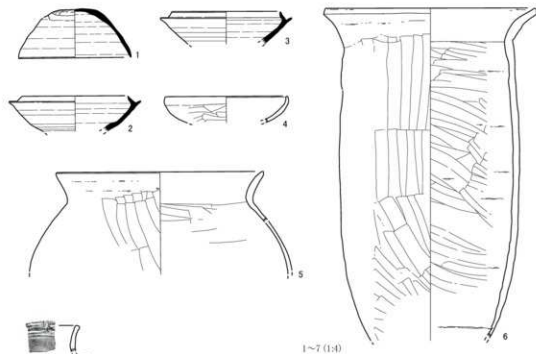
12. におい・黄褐色土(10YR7/2)しまり・粘性あり、粘土ブロックを多く含む。

13. 埴間色土(10YR3/3)しまり・粘性あり、粘土ブロックを含む。カマド構築土。

14. 埴間色土(10YR3/4)しまり・粘性弱い、砂が主体。

15. 明黄褐色土(10YR6/6)しまり・粘性弱い、黄色の砂と黒色土を少量含む。

16. におい・黄褐色土(10YR7/2)しまりあり、粘性ややみ、硬質化しており、粘土を一部含む。



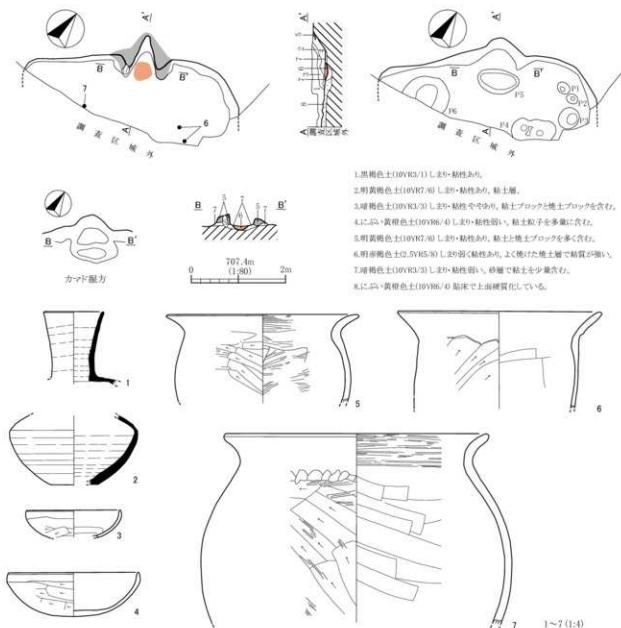
第65図 H39号住居跡及び出土遺物実測図

本跡のカマドは北壁中央部分で検出された。煙道は住居壁より飛び出さないタイプのカマドである。袖部は白色の粘土と自然礫により構築されていた。火床部はよく焼けており、焼土規模は径0.48m・厚み0.06mを測る。本跡のカマド掘方はP4として示したように方形を呈する掘り込みであった。

本跡からの出土遺物は覆土やカマドから出土したが比較的少なく、7点を図示したに止まった。1は須恵器坏蓋であり、カマド内より出土した。2と3は須恵器坏身である。4は土師器坏である。胎土はよく精練されており、体部外面はケズリが施されている。5と6は土師器甕である。5は球形胴のタイプで、胴部外面はヘラケズリを行う。7は形状より弥生前期土器と考えられ、口唇部に押捺、口縁部に沈線文が施されている。

本跡はこれらの出土遺物から7世紀代の所産時期が考えられる。

(39) H40号住居跡



第66図 H40号住居跡及び出土遺物実測図

本住居跡は調査IV区東端のV-ク-ケ-4Grに位置する。検出状態は南側が調査区域外となり、北半分の検出に止まった。形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-37°-Wを示す。規模は検出南北長1.44m、検出東西長3.20mを測る。壁高さは東壁で0.33mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で4.91㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であり、貼床の厚みは0.06~0.14mを測る。ピットはいずれも掘方検出時に6か所検出された。ピットの規模はP1が径0.28m・深さ0.25m、P2が径0.24m・深さ0.22m、P3が径0.46m・深さ0.25m、P4が径0.90m・深さ0.20m、P5が径0.88m・深さ0.15m、P6が径1.00m・深さ0.14mを測る。本跡の掘方は、住居中央部が一段深く掘り込まれていた。

本跡のカマドは北壁中央部分で検出された。煙道は住居壁より飛び出すタイプのカマドである。袖部はピンク色の粘土と自然礫により構築されていた。火床部はよく焼けており、焼土規模は径0.40m・厚み0.06mを測る。

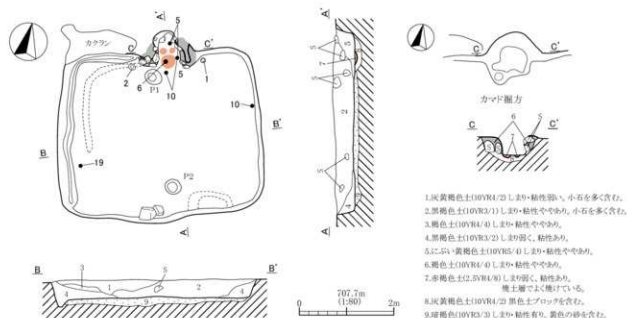
本跡からの出土遺物は覆土やカマド周辺部から出土し、7点を図示した。1と2は須恵器平瓶の口縁部と胴部の破片である。同一個体と考えられる。3と4は土師器環である。いずれも浅い皿状のタイプで、法量の違いはあるが、ほぼ同じ作りである。5~7は土師器甕であり、6は長胴タイプ、5と7は球形胴タイプと考えられる。

本跡はこれらの出土遺物から7世紀代の所産時期が考えられる。

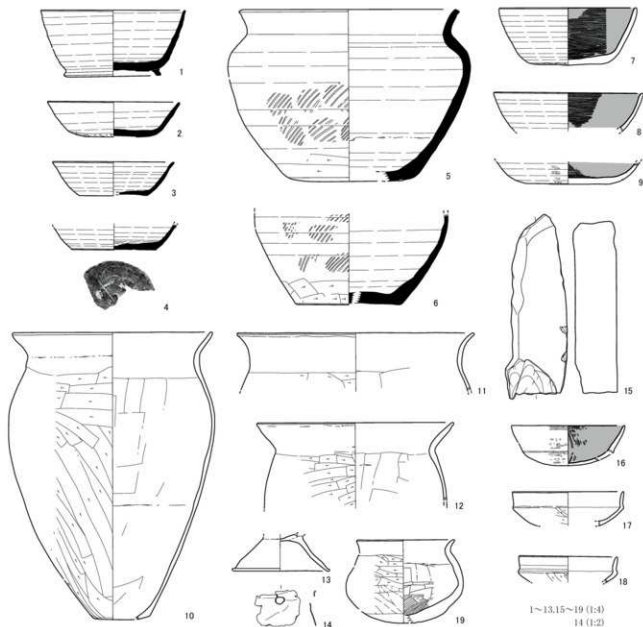
(40) H41号住居跡

本住居跡は調査IV区東よりのV-ケ-2・3、V-コー-3Grに位置する。残存状態は北西コーナー付近をカクランにより削平されているほかは良好である。形態は方形を呈する。主軸方位はN-12°-Wを示す。規模は南北長3.40m、東西長4.00mを測る。壁高さは北東コーナーで0.45mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は12.5㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、特にカマド前面が硬かった。貼床の厚みは0.07~0.16mを測る。ピットは2か所検出された。ピットの規模はP1が径0.33m・深さ0.20m、P2が径0.32m・深さ0.10mを測る。本跡の掘方は、全体に凹凸があり西側は特に一段深く掘り込まれていた。

本跡のカマドは北壁中央部分で検出された。煙道は住居壁より飛び出すタイプのカマドである。袖部は粘土と面取り加工された軽石により構築されていた。特に焚口部の袖端部の礫はよく焼けて原



第67図 H41号住居跡実測図



第68図 H41号住居跡出土遺物実測図

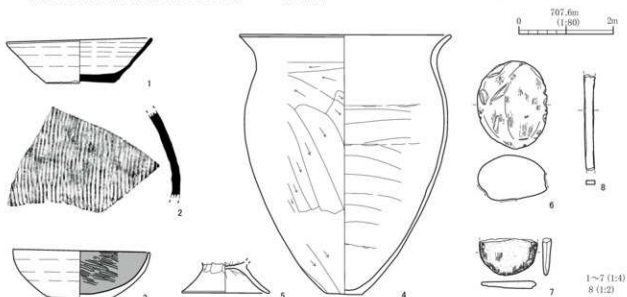
置を保っていた。火床部はよく焼けており、焼土規模は径0.30m・厚み0.05mを測る。

本跡からの出土遺物は覆土やカマド周辺部から出土し、19点を図示した。1は須恵器有台坏である。カマド脇から出土した。2～4は須恵器坏である。4は底部外面に焼成前に刻まれたへら記号が確認できる。5と6は須恵器甕であり、いずれもカマド内からの出土で広口タイプと考えられる。7～9は土師器坏である。いずれも内面に丁寧なミガキを施し、黒色処理されている。10～12は土師器甕であり、いわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるタイプの甕である。13は土師器台付き甕の脚部と考えられる。14は銅製品で、穿孔された部分があることから留め具の一部か。15は敲石である。16～19は、重複するH46号住居跡に伴う遺物と考えられる。16～18は土師器坏で、16のみ内面黒色処理が施されている。19は土師器の小型鉢とすべきか。

本跡はこれらの出土遺物から8世紀代の所産時期が考えられる。

(41) H42号住居跡

本住居跡は調査IV区中央のV-サー3・4、V-シー3・4Grに位置する。残存状態は住居中央をカクランにより削平されている。形態は方形を呈する。主軸方位はN-77°-Eを示す。規模は南北長4.26m、東西長3.90mを測る。壁高さは北壁を0.29mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は推定で15.56㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であり、貼床の厚みは0.02~0.17mを測る。ピットは4か所検出された。ピットの規模はP1が径0.40m・深さ0.21m、P2が径0.40m、P3が径0.88m・深さ0.18m、P4が径0.32m・深さ0.08mを測る。特にP1には図示した4の土師器甕が埋設された状態で出土し、中より3の土師器坏が伏せた状態で発見された。本跡の掘方は、全体に凹凸があり特に壁際は一段深く掘り込まれていた。掘り込みの段差は0.07~0.13mを測る。



第69図 H42号住居跡及び出土遺物実測図

本跡のカマドは明瞭な部分は確認できなかった。ただ、東壁の中央に一部粘土が確認された事と、その付近のカケラン下より火床部の跡のような痕跡が確認されたことから、本跡のカマドは東壁中央に存在した可能性が指摘できる。

本跡からの出土遺物は少なかったが8点を図示した。1は須恵器環である。東壁粘土付近から出土した。2は須恵器甕である。外面に平行タキが残る。3は土師器環である。前述したように4の土師器甕内から出土した。内面ミガキと黒色処理されている。4は土師器甕である。いわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるタイプであり、ほぼ完形であった。5は土師器の小型台付き甕の脚部と考えられる。6は軽石製の石製品で、表面に深い条痕がある。7は打製石斧の欠損品で、刃部は摩耗が激しい。8は鉄製品で、形状より鉄銚柄の部分か。

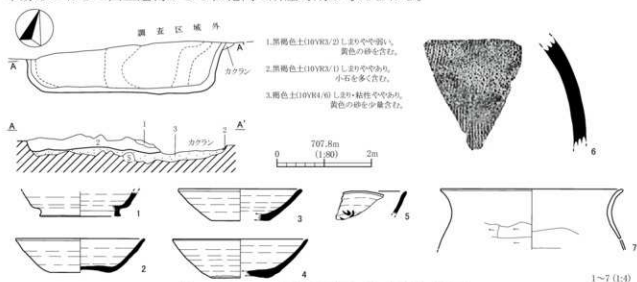
本跡はこれらの出土遺物から8世紀代の所産時期が考えられる。

(42) H43号住居跡

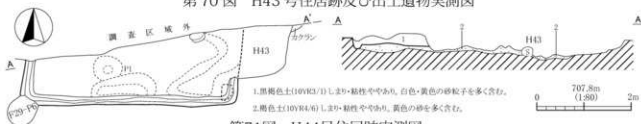
本住居跡は調査Ⅳ区中央のV-コー2・3、V-サー2・3Grに位置する。検出状態は住居北側が調査区域外となる。形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位は不明で、規模は検出南北長0.88m、東西長3.84mを測る。壁高さは南東コーナーで0.25mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部で3.18㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であり、貼床の厚みは0.04～0.20mを測る。ピットは検出されなかった。本跡の掘方は、東側が全体に一段深く掘り込まれていた。掘り込みの段差は約0.10mを測る。

本跡からの出土遺物は覆土を中心に比較的多く、7点を図示した。1は須恵器有台環である。高台部分と体部のみが残存である。2～5は須恵器環である。5は体部外面に墨書が確認できるが、判読不明である。6は須恵器甕の胴部破片である。自然釉の付着が確認できる。7は土師器甕であり、口縁部の破片である。いわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるタイプの甕である。

本跡はこれらの出土遺物から8世紀代の所産時期が考えられる。



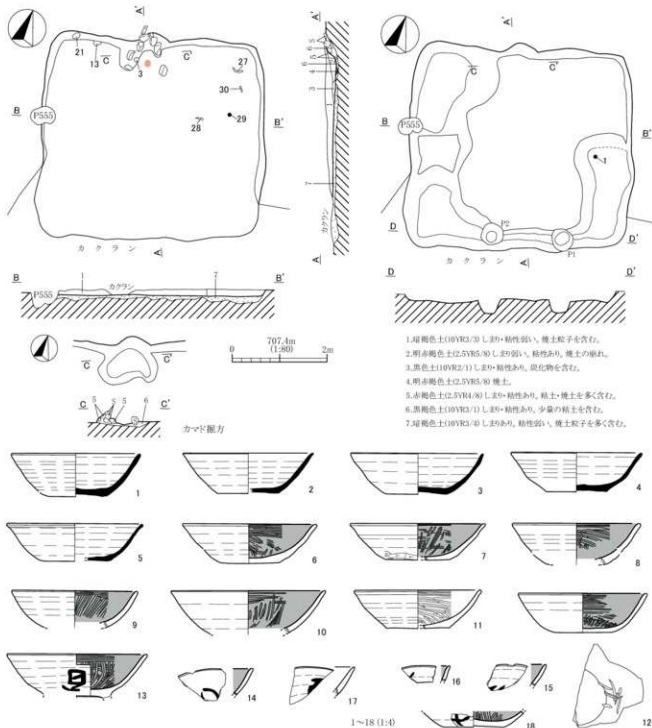
第70図 H43号住居跡及び出土遺物実測図



第71図 H44号住居跡実測図

(43) H44号住居跡

本住居跡は調査IV区中央のVーサ・シー3Grに位置する。検出状態は住居北側が調査区域外となる。形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位は不明で、規模は検出南北長1.08m、東西長4.12mを測る。壁高さは南壁で0.22mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部で4.51㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であり、貼床の厚みは0.05～0.18mを測る。ピットは1か所検出され、規模はP1が径0.64m・深さ0.16mを測る。壁溝は南壁と西壁に巡っていた。

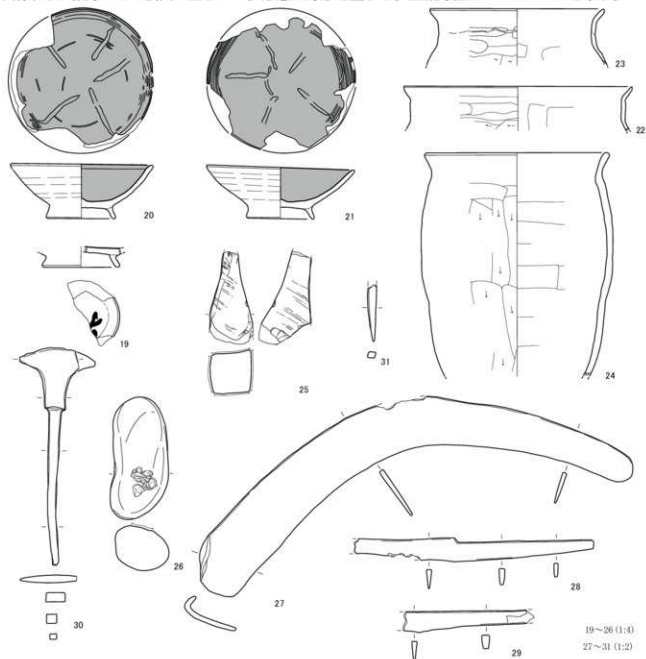


第72図 H45号住居跡及び出土遺物実測図

本跡からの出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。

(44) H45号住居跡

本住居跡は調査IV区西側のV-ソ・ター4・5Grに位置する。残存状態は住居南側がカクランにより削平され掘方みの検出に止まった。形態は方形を呈する。主軸方位はN-19° -Wを示す。



第73図 H45号住居跡出土遺物実測図

規模は南北長3.96m、東西長4.52mを測る。壁高さは北西コーナーで0.22mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は推定で18.21㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であり、貼床の厚みは0.04~0.13mを測る。ピットは2か所検出された。ピットの規模はP1が径0.52m・深さ0.34m、P2が径0.48m・深さ0.41mを測る。本跡の掘方は、全体に凹凸があり特に壁際は一段深く掘り込まれていた。掘り込みの段差は0.11~0.18mを測る。

本跡のカマドは北壁中央部分で検出された。煙道は住居壁より飛び出さないタイプのカマドである。袖部は粘質土と自然礫により構築されていた。火床部はわずかに焼けており、焼土規模は径0.14m・厚み0.03mを測る。

本跡からの出土遺物は覆土やカマド周辺部から多く出土し、31点を図示した。1～5は須恵器環、6～12と18は土師器環で、内面が黒色処理されたものが多い。13と19～21は土師器碗である。いずれも内面が黒色処理されている。12は外面に焼成前の刻書が確認できるが判読できない。13～19は墨書ならびに墨痕が確認できる。13は「百」か。22～24は「武蔵型甕」と呼ばれる土師器甕で、24のみタイプが異なる。25は砥石、26は敲石である。27～31は鉄製品である。

本跡はこれらの出土遺物から9世紀前半に位置づけられると考える。

(45) H46号住居跡

本住居跡は調査IV区中央のV-ケ・コ・サ-3・4Grに位置する。残存状態は西壁中央をカクランにより削平されている他は良好である。形態は方形を呈する。主軸方位はN-23°-Wを示す。規模は南北長5.08m、東西長5.12mを測る。壁高さは西壁南寄りでは0.52mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は25.51㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、特にカマド前面が硬かった。貼床の厚みは0.04～0.20mを測る。壁溝は検出された壁を巡り、規模は幅0.10～0.16mを測る。ピットは4か所検出された。P1からP4が主柱穴と考えられる。柱間はP1-P2が3.20m、P2-P3が3.04mを測る。ピットの規模はP1が径0.42m・深さ0.62m、P2が径0.28m・深さ0.77m、P3が径0.34m・深さ0.64m、P4が径0.32m・深さ0.83mを測る。本跡の掘方は、全体に凹凸があり、特に壁際は一段深く掘り込まれていた。段差は0.08～0.11mを測る。

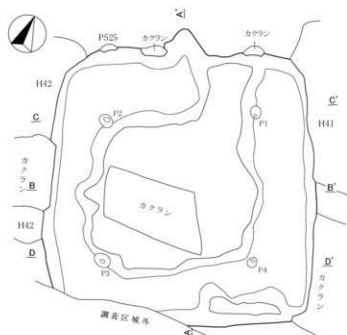
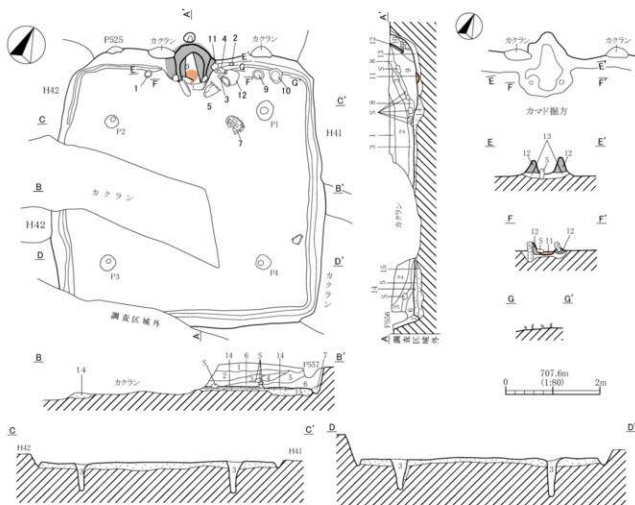
本跡のカマドは北壁中央部分で検出された。煙道は住居壁より飛び出すタイプのカマドである。煙道部は筒状の煙り出し部分が潰れずに残っていた。袖部は肌色の粘土と面取り加工された軽石により構築されていた。特に焚口部の袖端部の礫はよく焼けて原位置を保っていた。火床部はよく焼けており、焼土規模は径0.28m・厚み0.06mを測る。火床部左寄りには支脚石が立った状態で確認された。中央部よりずれる事から掛け口は二か所あったとも考えられる。

本跡からの出土遺物は覆土やカマド周辺部から多く出土した。特にカマド周辺には非常に多くの土器が置かれたような状態で検出された。1と2は土師器環である。いずれもカマド周辺から出土した。1は内面に放射状の暗文が施されている。3と4は土師器鉢とした。3は底部に木葉痕が確認できる。5～7は土師器甕である。いずれも長胴タイプで、外面はヘラケズリを行う。9～14は土師器壺である。いずれも底部は丸底で、頸部から口唇部が「く」の字に屈曲する。また、12は胴部下半が急に小さくなる形態で、異質である。途中からの作り変えか。18・19は磨り石である。いずれも顕著な磨り痕跡が確認できる。16は敲石、17は磨石である。20と21は本跡への混入遺物である。20は縄文中期の土器片である。21は近世陶磁器の擂鉢と考えられる。

本跡はこれらの出土遺物から6世紀後半に位置づけられると考える。

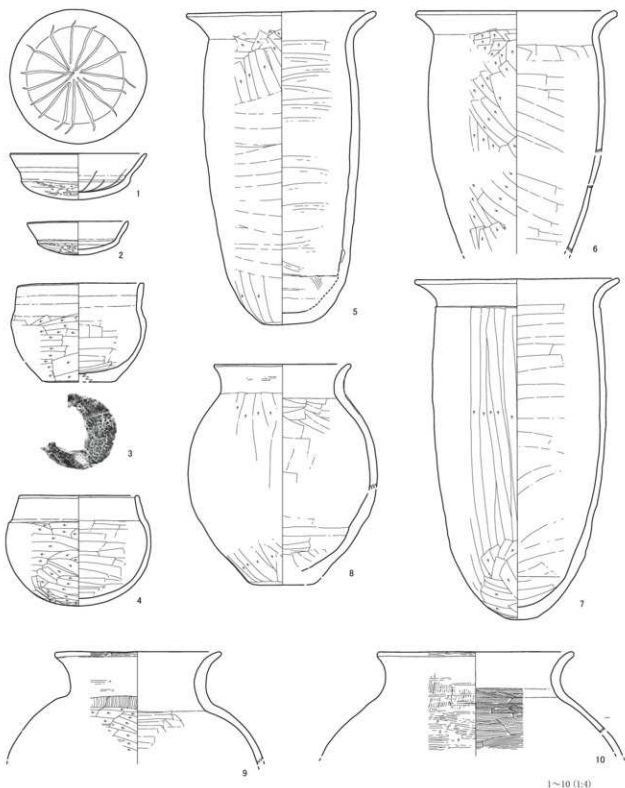
(46) H47号住居跡

本住居跡は調査IV区中央のV-ソ・ター-4・5Grに位置する。検出状態は北側半分が調査区域外となる。形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位はカマドが北壁とするとN-24°-Wを示す。規模は検出南北長2.64m、東西長5.00mを測る。壁高さは南東コーナーで0.57mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部分で12.62㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、特に中央部分が硬かった。貼床の厚みは薄く0.02～0.03mを測る。壁溝は検出された壁を巡り、規模は幅0.03～0.08mを測る。ピットは6か所検出された。P1とP2は主柱穴と考えられる。柱間はP1-P2が2.80mを測る。ピットの規模はP1が径0.63m・深さ0.40m、P2が径0.68m・深さ0.51m、P3が径0.40m・深さ0.10m、P4が径0.26m・深さ0.04mを測る。



- 1.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性あり。
- 2.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性ややあり、小石・白色和子をよく含む。
- 3.黒色土(10YR2/1)しまりあり、黒味が強く、粘性ややあり。
- 4.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性ややあり。
- 5.黄褐色土(10YR5/6)しまり・粘性弱い、黄色の砂をよく含む。
- 6.黒褐色土(10YR2/3)しまり・粘性ややあり、小石をよく含む。
- 7.黄褐色土(10YR5/8)しまり・粘性弱い、黄色の砂主体。
- 8.にがい・黄褐色土(10YR7/4)しまり・粘性あり、粘土が混れた層。
- 9.にがい・黄褐色土(10YR5/4)しまり・粘性ややあり、小石・粘土をよく含む。
- 10.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性弱い、砂と粘土ブロックをよく含む。
- 11.褐色土(2.5YR6/8)しまり・粘性あり、よく焼けた焼土層。
- 12.にがい・黄褐色土(10YR6/8)しまり・粘性あり、粘土層、焼土を含む。
- 13.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性弱い、粘土ブロックを含む。
- 14.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性あり、上面硬質化している。
- 15.にがい・黄褐色土(10YR5/3)しまり・粘性弱い、砂層の崩れ、黒色土ブロックを含む。

第74図 H46号住居跡実測図

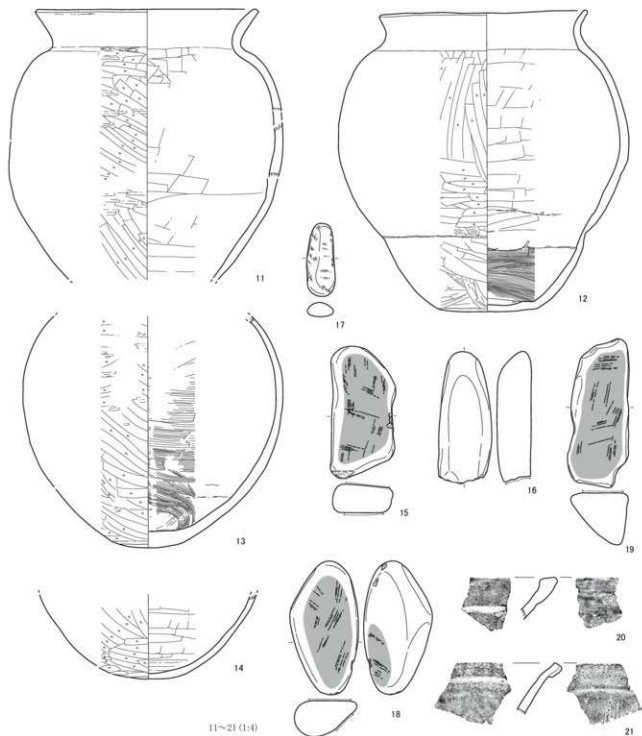


第75図 H46号住居跡出土遺物実測図(1)

1~10 (1:10)

P5が径0.16m・深さ0.04m、P6が径0.15m・深さ0.06mを測る。本跡の掘方は細かな凹凸はあるがほぼ均一に掘られていた。

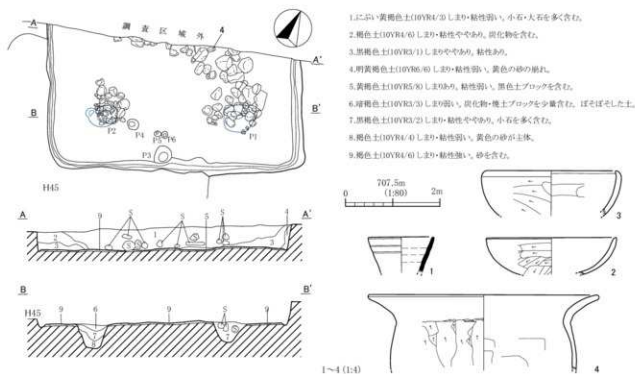
本跡からの出土遺物は少なく、4点を図示した。また、本跡は覆土中から床面にかけて、拳大から



第76図 H46号住居跡出土遺物実測図(2)

人頭大の自然礫が大量に出土した。これら礫は意図的な投げ込みと考えられる。1は須恵器瓶の口縁部で自然釉の付着が確認できた。2と3は土師器環である。いずれもよく精錬された胎土であり、体部外面はヘラケズリが施されている。4は土師器甕である。頸部から口縁部のみの残存であり、胴部はヘラケズリが施されている。

本跡は出土遺物が少なく不確実であるが、7世紀代の所産が考えられる。



第77図 H47号住居跡及び出土遺物実測図

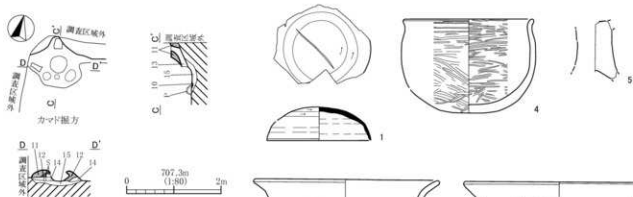
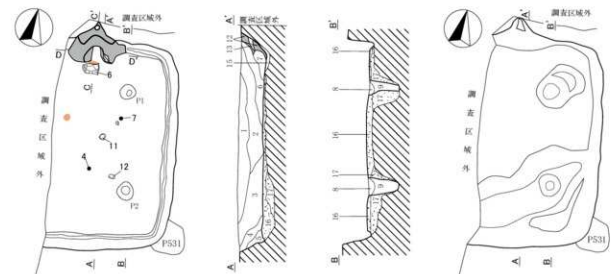
(47) H48号住居跡

本住居跡は調査IV区西端のV-ト-5・6Grに位置する。検出状態は西側が調査区域外となり、東側のみの検出となった。形態は方形を呈する。主軸方位はN-10°-Wを示す。規模は南北長3.92m、検出された東西長2.40mを測る。壁高さは東壁南よりで0.55mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部で8.86㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、特にカマド前面が硬かった。貼床の厚みは0.03~0.29mを測る。壁溝は検出された壁全体を巡り、規模は幅0.03~0.09mを測る。ピットは2か所検出された。P1とP2が主柱穴と考えられる。柱間はP1-P2が2.08mを測る。ピットの規模はP1が径0.68m・深さ0.57m、P2が径0.78m・深さ0.61mを測る。本跡の掘方は、全体に凹凸があり、特に南側が一段深く掘り込まれていた。段差は0.05~0.15mを測る。

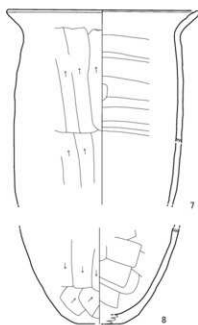
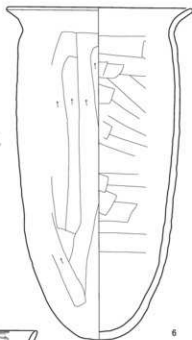
本跡のカマドは北壁中央部分で検出された。煙道は住居壁よりあまり飛び出さないタイプのカマドである。煙道部は筒状の煙り出し部分が潰れずに一部残存していた。袖部は肌色の粘土と自然礫により構築されていた。右側の焚口袖部に礫が立った状態で確認された。火床部はよく焼けており、焼土規模は径0.21m・厚み0.03mを測る。

本跡からの出土遺物は覆土やカマド周辺部及び床面上から多く出土し、14点を図示した。1は須恵器蓋である。天井部に焼成前のヘラ記号が確認できる。2と3は土師器杯である。2は内外面ともに丁寧なミガキが施されている。4は土師器鉢である。内外面に丁寧なミガキが施されている。5は土師器高環の脚部破片である。6~8は土師器甕である。いずれも外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施されている。6はほぼ完形で、カマド前面の床面上から潰れた状態で出土した。10と13は敲石である。10は先端部に、13は側面に顕著なタタキ痕が確認できる。11はタタキ痕と磨りが両方確認できる石器である。12は磨り石で、14は磨石である。特に14は全体に磨かれている。

本跡はこれらの出土遺物から6世紀後半に位置づけられると考える。

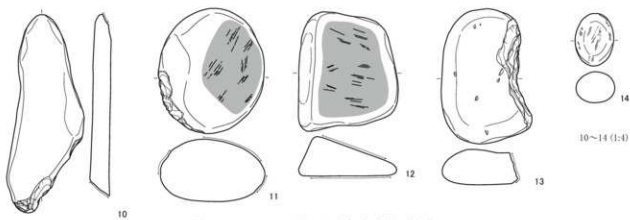


- 1.にぶい・黄褐色土(10YR5/4)し20・粘性ややあり、小石を多く含む。
- 2.黒褐色土(10YR3/1)し20・粘性弱い、小石を多く含む。
- 3.にぶい・黄褐色土(10YR4/3)し20・粘性弱い、小石を多く含む。
黒土ブロックを含む。
- 4.黒褐色土(10YR3/1)し20ややあり、粘性弱い、黄色土ブロックを
少量含む。
- 5.褐色土(10YR4/6)し20・粘性あり、黄色土ブロックを含む。
- 6.明黄褐色土(10YR6/6)し20・粘性あり、粘土・焼土を多く含む。
- 7.にぶい・黄褐色土(10YR5/4)し20・粘性あり、粘土・黒色土・砂の混合土。
- 8.黒褐色土(10YR2/2)し20・粘性弱い、焼土ブロックを含む、特にP1。
- 9.褐色土(10YR4/6)し20・粘性弱い、砂主体でさらさらしている。
- 10.明赤褐色土(2.5YR5/8)し20・粘性ややあり、焼土層。
- 11.暗褐色土(10YR3/3)し20・粘性あり、粘土層で、よく固まっている。
- 12.明赤褐色土(2.5YR5/8)し20・粘性ややあり、焼土ブロックで、
よく固まっている。
- 13.黒褐色土(10YR3/1)し20・粘性ややあり、焼土ブロック内に黒色土
ブロックを含む。
- 14.褐色土(10YR4/6)し20・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。
- 15.黄褐色土(10YR5/6)ルーム中に黒色土ブロックと小石を含む。
- 16.黒褐色土(10YR3/2)し20・粘性あり、上面硬質で硬質面の凹凸ある。
- 17.にぶい・黄褐色土(10YR7/3)し20・粘性弱い、黄色の砂と黒色土
ブロックを含む。

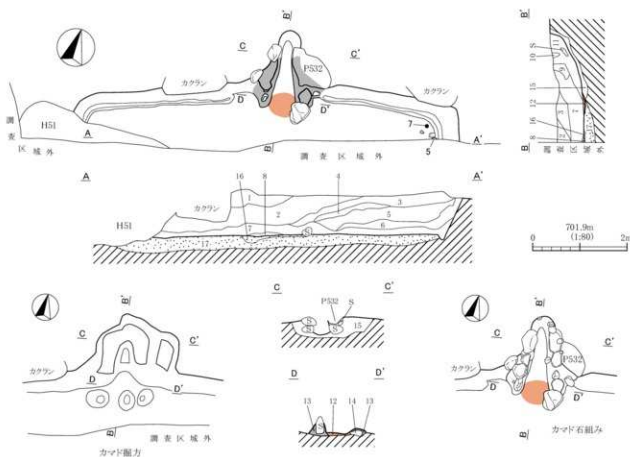


第78図 H48号住居跡及び出土遺物実測図

1~9(1:4)



第79図 H48号住居跡出土遺物実測図



1. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性ややあり、小石を多く含む。
2. 黄褐色土(10YR5/8)しまり・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性あり。
4. 褐色土(10YR4/4)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
5. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性ややあり、小石を含む。
6. じさい・黄褐色土(10YR4/3)しまり・粘性弱い、黄色の小石を含む。
7. 暗褐色土(10YR3/4)しまり・粘性ややあり、小石・炭化物を含む。
8. 明黄褐色土(10YR6/8)しまり・粘性あり、粘土・焼土を多く含む。
9. 褐色土(10YR4/4)しまり・粘性弱い、粘土・焼土を多く含む。

10. 暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性あり、小石を含む。
11. 明黄褐色土(10YR6/6)しまり・粘性あり、粘土層で黒色土ブロックを含む、断層粘土。
12. 棕色土(2.5YR6/8)しまりややあり、上面よく焼けた焼土面(火灰)。
13. 浅黄褐色土(10YR6/0)しまり・粘性あり、粘土層。
14. 赤褐色土(2.5YR4/6)しまり・粘性弱い、焼土ブロック。
15. 黄褐色土(10YR5/8)しまりややあり。
16. 褐色土(10YR4/6)しまり・粘性弱い、粘土が入る。
17. 黒褐色土(10YR2/3)しまり・粘性ややあり、黄色の砂と黒色土ブロックを含む。

第80図 H49号住居跡実測図

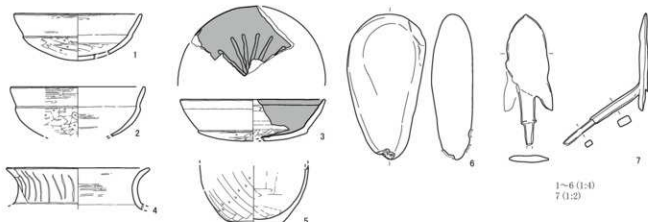
(48) H49号住居跡

本住居跡は調査IV区西端のVーツ・テ・トー6Grに位置する。検出状態は南側が調査区域外となり、北側のみの検出となった。形態は方形を呈する。主軸方位はN-16°-Wを示す。規模は検出された南北長0.92m、東西長7.28mを測る。壁高さは北壁カマド脇で0.61mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部で5.69㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、特にカマド前面が硬かった。貼床の厚みは0.10~0.32mを測る。壁溝は検出された壁全体を巡り、規模は幅0.06~0.11mを測る。ピットは検出されなかった。本跡の掘方は、全体に細かな凹凸があり、住居中央に向かって深く掘り込まれていた。

本跡のカマドは北壁中央部分で検出された。煙道は住居壁より大きく飛び出すタイプのカマドである。袖部は肌色の粘土と大型の自然礫により構築されていた。特に左側の袖は大型の自然礫を2段に積み上げ、石垣状に構築して粘土で被覆していた。火床部はよく焼けており、焼土規模は径0.60m・厚み0.06mを測る。

本跡からの出土遺物は覆土を中心に出土し、7点を図示した。1~3は土師器環である。3は内面に黒色処理が施され、放射状の暗文が確認できる。4は土師器壺の口縁部破片である。頸部から口縁部に掛けて縦方向の暗文が施されている。5は土師器の小型甕であり、胴部~底部のみ残存している。6は敲石で、先端部がよく使われている。7は鉄鏃であり、有茎の抉りがあるタイプの鏃である。

本跡は出土遺物が少なく不確実ではあるが6世紀代の所産時期が考えられる。

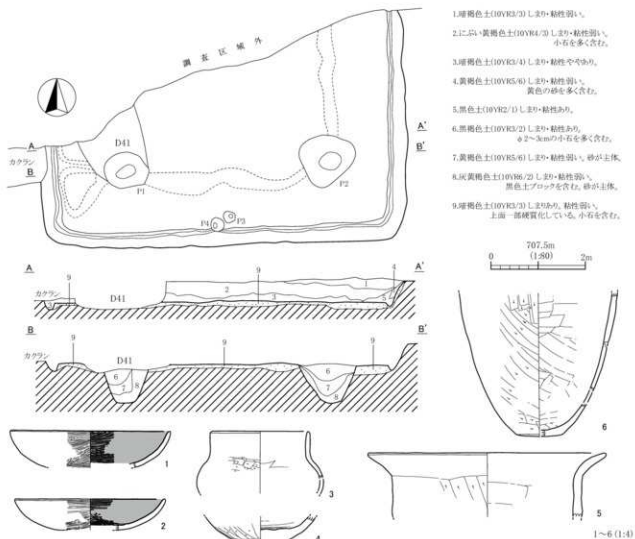


第81図 H49号住居跡出土遺物実測図

(49) H50号住居跡

本住居跡は調査IV区西よりVーチ・ツ・テー4・5Grに位置する。検出状態は北側が調査区域外となり、南側のみの検出となった。形態は方形を呈する。主軸方位はNを示す。規模は検出された南北長3.48m、東西長7.04mを測る。壁高さは東壁で0.51mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部で23.15㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、貼床の厚みは0.03~0.20mを測る。壁溝は検出された壁全体を巡り、規模は幅0.04~0.17mを測る。ピットは4か所検出された。P1とP2が主柱穴と考えられる。柱間はP1-P2が4.23mを測る。ピットの規模はP1が径0.94m・深さ0.67m、P2が径1.18m・深さ0.76m、P3が径0.26m・深さ0.33m、P4が径0.28m・深さ0.26mを測る。本跡の掘方は、住居中央が一段高く掘り残されるタイプの掘方であり、段差は0.23~0.25mを測る。

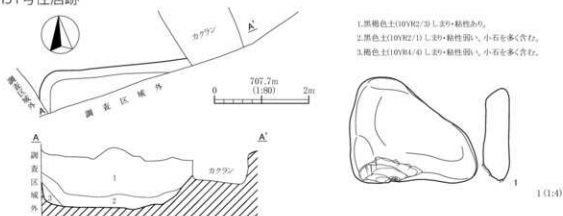
本跡からの出土遺物は規模の割合からすると少なく、6点のみの図示に止まった。1と2は土師器環である。いずれも内外面に丁寧なミガキが施され、内面黒色処理されている。形態的には皿とすべきか。3は土師器短頸壺と考えられる。4は3の同一個体とも考えられるが、不確実であり土師器甕とした。5と6は土師器甕である。いずれも外面がヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。



第82図 H50号住居跡及び出土遺物実測図

本跡はこれらの出土遺物から7世紀代の所産時期が考えられる。

(50) H51号住居跡



第83図 H51号住居跡及び出土遺物実測図

本住居跡は調査Ⅳ区西端のV-テー6、V-ト-6・7Grに位置する。検出状態は南側が調査区域外となり、住居北西コーナー部分のみの検出となった。形態は不明である。主軸方位は北壁を基準とするとN-6°-Eを示す。規模は検出された南北長0.56m、東西長2.42mを測る。壁高さは北壁で0.64mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部で0.86㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は壁際ということもあり軟質であった。貼床・壁溝・ピットは検出されなかった。

本跡からの出土遺物は非常に少なく、1の敲石を図示したのみである。よって、本跡の所産時期は不明で、H49号住居跡より新しい為、6世紀代より新しい住居跡として捉えられる。

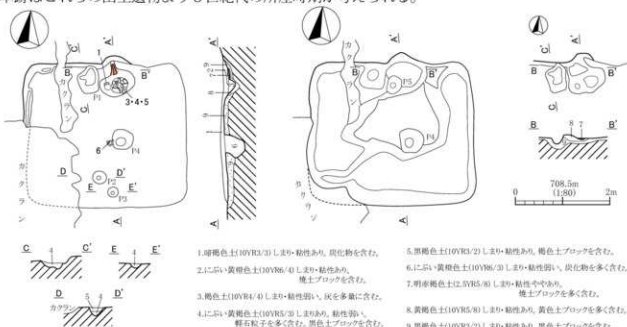
(51) H52号住居跡

本住居跡は調査Ⅳ区北側のⅡ-ケ-コー12・13Grに位置する。検出状態は南西側がカクランにより削平されている。形態は方形を呈する。主軸方位はN-5°-Wを示す。規模は南北長2.96m、東西長3.28mを測る。壁高さは北西コーナーで0.19mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は推定で9.72㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、特にカマド前面が硬かった。貼床の厚みは0.08~0.17mを測る。壁溝は北壁と西壁の一部分を巡り、規模は幅0.04~0.07mを測る。ピットは5か所検出された。ピットの規模はP1が径0.58m・深さ0.20m、P2が径0.30m・深さ0.18m、P3が径0.24m・深さ0.11m、P4が径0.55m・深さ0.42m、P5が径0.40m・深さ0.34mを測る。本跡の掘方は、全体に細かな凹凸があり、住居中央が一段高くなるタイプの掘方である。段差の規模は0.10mを測る。

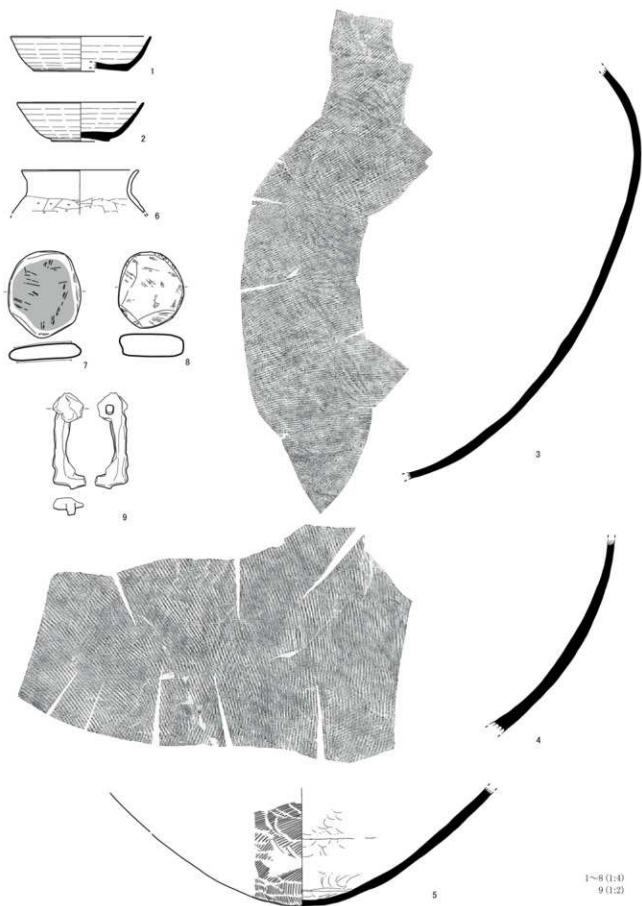
本跡のカマドは北壁中央部分で検出された。煙道は住居壁より飛び出さないタイプのカマドである。袖部はほとんど残存しておらず、火床部も煙道部側に焼けた範囲が確認されたのみである。しかし、本来のカマド火床部と考えられる場所からは、図示した須恵器裏片や須恵器環がまとまった形で出土した。カマドの掘方は不整形であった。

本跡からの出土遺物はカマドを中心に出土し9点を図示した。1と2は須恵器環である。1は底部回転ヘラ切り、2は底部左回転糸切りである。3~5は須恵器裏の胴部と底部の破片である。3と5は同一個体の可能性がある。内面は3と4ともナデにより敲き痕を磨り消している。6は土師器裏である。7と8は磨り石である。9は用途不明の鉄製品である。

本跡はこれらの出土遺物より8世紀代の所産時期が考えられる。



第84図 H52号住居跡実測図



第85图 H52号住居跡出土遺物実測図

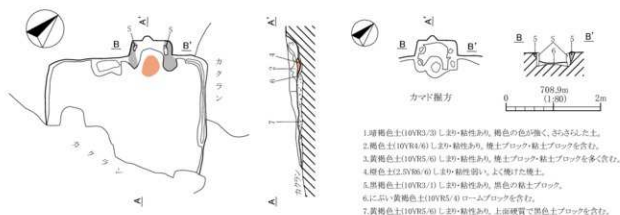
(52) H53号住居跡

本住居跡は調査Ⅳ区北端のⅡ-C-13・14Grに位置する。検出状態は南側がカクランにより削平されていた。形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-44°-Wを示す。規模は検出された南北長2.36m、東西長3.20mを測る。壁高さは北東コーナーで0.26mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部で5.88㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であり、特にカマド前面が硬かった。貼床の厚みは0.02~0.12mを測る。ピットは検出されなかったが、カマド脇に土坑状の掘り込みがあり、規模は長軸0.64m・深さ0.10mを測る。壁溝は東壁の一部で検出され、幅0.03~0.07mを測る。本跡の掘方は、全体に細かな凹凸があった。

本跡のカマドは北壁中央部分で検出された。煙道と燃焼部が住居壁より飛び出すタイプのカマドである。袖部は肌色の粘土と大型の自然礫により構築されていた。特に袖の奥側には平石の構築材が原位置を保って検出された。火床部はよく焼けており、焼土規模は径0.46m・厚み0.06mを測る。

本跡からの出土遺物は非常に少なく、須恵器坏片や土師器甕片が出土したのみである。これらは小片で図示できるものはなかった。

本跡は出土遺物が少なく所産時期は不明である。



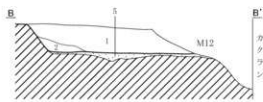
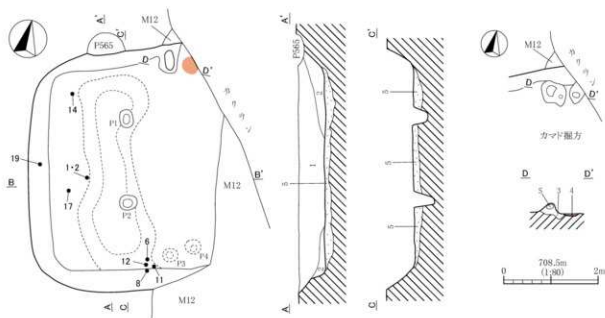
第86図 H53号住居跡実測図

(53) H54号住居跡

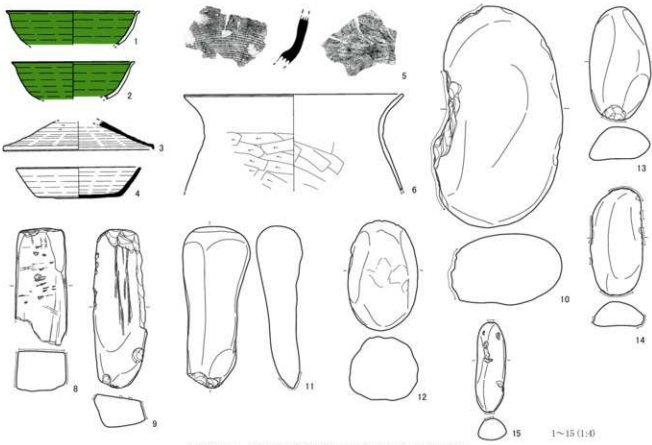
本住居跡は調査Ⅴ区北側中央のⅠ-C-14・15・16Grに位置する。検出状態は東側がM12号溝状遺構により削平されていた。形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-13°-Wを示す。規模は南北長4.50m、残存東西長3.72mを測る。壁高さは西壁で0.59mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居跡の床面積は残存部で15.17㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.07~0.19mを測る。壁溝は検出されなかった。ピットは4か所検出された。P1とP2は主柱穴と考えられる。P1-P2間は1.80mを測る。ピットの規模はP1が径0.39m・深さ0.22m、P2が径0.37m・深さ0.39m、P3が径0.32m・深さ0.08m、P4が径0.36m・深さ0.21mを測る。本跡の掘方は、P1からP2周辺が一段深く掘り込まれていた。

本跡のカマドは北壁で検出された。煙道部や右側袖部は体育館壁により削平されていた。検出されたのは左袖と火床部で、袖は灰色の粘土層により構築されていた。火床部はよく焼けており、焼土規模は径0.37m・厚み0.04mを測る。

本跡からの出土遺物は覆土を中心に多く出土し、19点を図示した。また、本跡はカマド前面を中心に、拳大から人頭大の自然礫が床面上からまとまって出土している。1と2は緑釉陶器碗である。同一個体の破片とも考えられるが、確証を得ない。高台部を欠損している。3は須恵器蓋である。天井部を欠損しており、通常の蓋に比べると器高が高い特徴がある。4は須恵器坏である。底部は回転ヘラ切りである。5は須恵器横瓶の破片と考えられる。外面にカキ目状の成形痕が残る。6は土師器



1. 2.5m・黄褐色土(10YR4/3)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
2. 褐色土(10YR3/4)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
3. 暗褐色土(10YR3/4)しまり・粘性ややあり、少量の粘土を含む。
4. 赤褐色土(2.5YR4/6)しまり・粘性弱い、よく焼けている。
5. 暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性ややあり、上面硬質化して、よくかままっている。



第87図 H54号住居跡及び出土遺物実測図



第88図 H54号住居跡出土遺物実測図

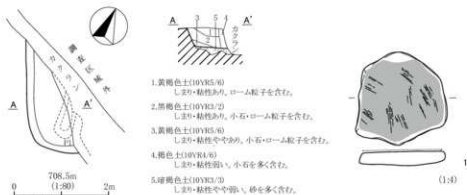
表でいわゆる「武蔵型表」と呼ばれるタイプである。7は磨り石である。8は砥石で、3面に砥面が確認できる。9～11・13～15は敲石である。16～18は鉄製品で、16は釘、17は鎌と考えられる。18は刀子か。19は管玉の完形品である。覆土中からの出土である。

本跡の出土遺物は、石製品や鉄製品が多く所産時期は不確定であるが9世紀前半代と考えられる。

(54) H56号住居跡

本住居跡は調査V区北側中央のI-テ・トー11Grに位置する。検出状態は東側が旧体育館基礎により削平されており、住居跡は南西コーナー部分の検出に止まった。形態は不明である。規模は残存南北長1.86m、残存東西長0.70mを測る。壁高さは南西コーナー付近0.40mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は残存部で1.24㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.02～0.05mを測る。壁溝は検出されなかった。ピットは掘方検出時に1か所検出された。規模はP1が残存長径0.74m・深さ0.26mを測る。形状よりピットではなく、本跡の掘方の一部とも考えられる。

本跡からの出土遺物は図示した磨り石のほかに、須恵器表片・須恵器环片・土器器表片があったがいずれも小片であった。よって、本跡の所産時期は不明である。

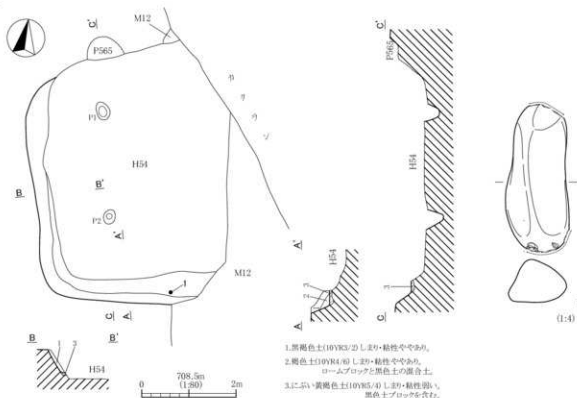


第89図 H56号住居跡及び出土遺物実測図

(55) H57号住居跡

本住居跡は調査V区北側中央のI-ター14～16Grに位置する。検出状態はH54号住居跡にほとんどが重複しており西壁と南壁の一部を検出したに止まった。形態は不明である。規模は残存南北長4.38m、残存東西長3.26mを測る。壁高さは西壁中央で0.46mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居跡の床面積は残存部で1.32㎡を測る。ピットは2か所確認された。いずれも支柱穴と考えられる。P1～P2間は2.28mを測る。ピットの規模はP1が径0.41m・深さ0.27m、P2が径0.32m・深さ0.38mを測る。床は軟質で、貼床の厚みは0.06～0.12mを測る。

本跡からの出土遺物は非常に少なく、図示した敲石のみであった。よって本跡の帰属時期は不明である。

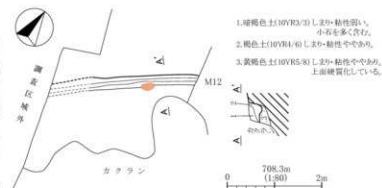


第90図 H57号住居跡及び出土遺物実測図

(56) H58号住居跡

本住居跡は調査V区北側中央の1-ター16・17Grに位置する。検出状態は西側が調査区外、東側がM12号溝状遺構、南側がカクランにより削平されている。形態は不明である。規模は残存南北長1.54m、残存東西長3.08mを測る。壁高さは北壁中央で0.26mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は残存部で3.55㎡を測る。床は軟質で、貼床の厚みは0.16~0.22mを測る。北壁には壁溝が確認された。

本跡からは古墳時代後期と考えられる土師器裏片・土師器坏片が出土したが、いずれも小片であり図示できなかった。よって本跡の帰属時期は不明である。

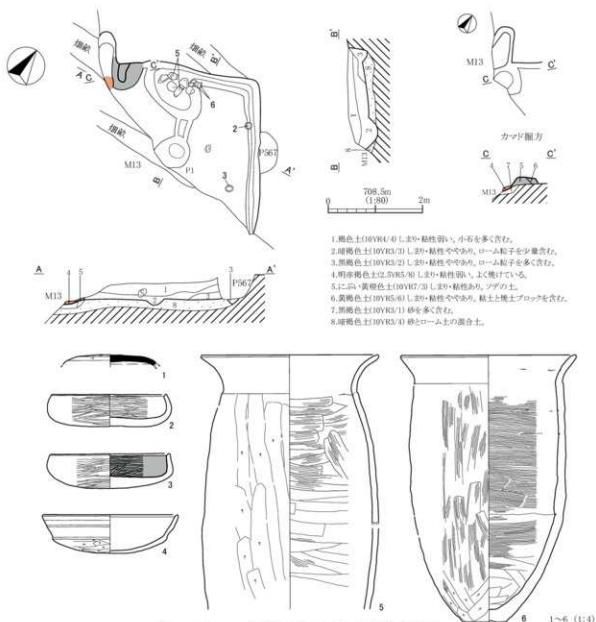


第91図 H58号住居跡実測図

(57) H59号住居跡

本住居跡は調査V区北側中央の1-ター13・14Grに位置する。検出状態は北側と西側がカクラン等により削平されている。形態は不明である。規模は残存南北長1.42m、残存東西長1.05mを測る。壁高さは西壁で0.34mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は残存部で1.26㎡を測る。床は軟質であり、貼床は最大0.18mの厚みで貼られていた。ピットや壁溝は確認できなかった。

本跡からの出土遺物は少なく、覆土より古墳時代後期と考えられる土師器残片や土師器坏片が出土したが、いずれも小片で図化できなかった。図示した1点は敲石と考えられ、先端に敲打痕が確認できる。よって、本跡の所産時期は不明である。



(58) H60号住居跡

本住居跡は調査V区北側のIーテ・トー11・12Grに位置する。検出状態は南側がM13号溝状遺構により削平されていた。形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-33°-Wを示す。規模は残存南北長2.72m、残存東西長2.86mを測る。壁高さは東壁で0.43mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は残存部で5.47㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.15~0.23mを測る。壁溝は検出された壁にすべて検出された。規模は深さ0.09~0.13mを測る。ピットは1か所検出された。ピットの規模はP1が径0.77m・深さ0.29mを測る。また、カマド脇に貯蔵穴状の掘り込みがあり、規模は長軸1.50m・深さ0.13mを測る。図示した土師器甕や自然礫が出土した。本跡の掘方は、全体に平坦に掘り込まれていた。

本跡のカマドは北壁で検出された。煙道部が住居壁より飛び出すタイプのカマドである。袖は粘土で構築され、火床部はよく焼けていた。焼土の規模は径0.32m・厚み0.08mを測る。

本跡からの出土遺物はカマド脇や床面を中心に多く出土した。1は須恵器环蓋である。天井部はヘラケズリが行われている。2~4は土師器環である。2と3は同じタイプの環であるが、3は内面が黒色処理されている。4はいわゆる「有段環」と呼ばれるタイプの環である。5と6は土師器甕である。いずれもカマド脇から出土した。6は底部に木葉痕が確認できる。

本跡はこれらの出土遺物より6世紀後半の所産時期が考えられる。

(59) H61号住居跡

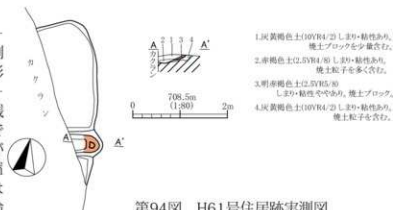
本住居跡は調査V区北側のIーテ・トー14・15Grに位置する。検出状態は西側がカクランにより削平されていた。形態は不明である。主軸方位はN-76°-Eを示す。規模は残存南北長3.10m、残存東西長1.00mを測る。壁高さは北壁で0.15mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は残存部で2.08㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であった。壁溝やピットは検出されなかった。

本跡のカマドは東壁で検出された。煙道部は住居壁よりわずかに飛び出すタイプのカマドで、袖は粘質土の強い土で構築され、火床部はよく焼けていた。焼土の規模は径0.30m・厚み0.06mを測る。

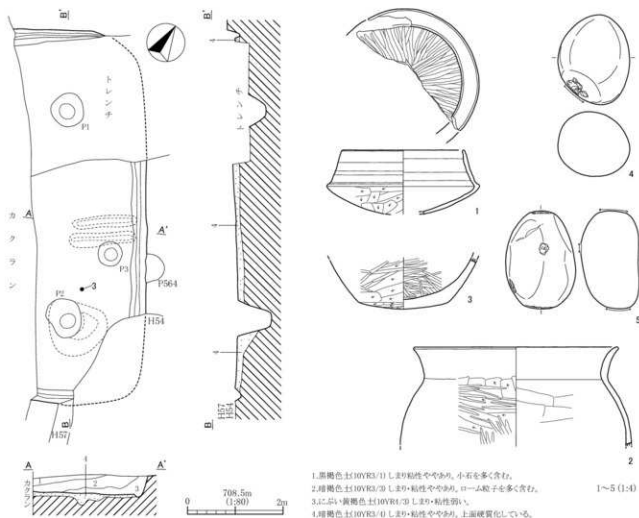
本跡からの遺物は覆土を中心に出土したがいずれも小片で図示可能なものはなかった。出土した土器片は弥生時代壺片、須恵器甕片、古墳時代後期の土師器甕片があった。よって本跡の所産時期は不明である。

(60) H62号住居跡

本住居跡は調査V区北側のIーテ・トー13・14・15、Iーツ・13・14Grに位置する。検出状態は西側がカクランにより削平されていた。形態は方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-31°-Wを示す。規模は南北長7.25m、残存東西長2.14mを測る。壁高さは東壁で0.35mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は残存部で14.70㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.12~0.15mを測る。壁溝は検出された壁にすべて検出された。規模は深さ0.07~0.12mを測る。ピットは3か所検出された。P1とP2が主柱穴と考えられ、P1-P2間は4.38mを測る。ピットの規模はP1が径0.72m・深さ0.34m、P2が径0.83m・深さ0.54m、P3が径0.51m・深さ0.30mを測る。本跡の掘方は細かな凹凸があり、東壁際に間仕切りの溝が2本検出された。規模は北側が長さ1.35m・幅0.24m・深さ0.16m、南側が長さ1.40m・幅0.27m・深さ0.11m



第94図 H61号住居跡実測図



第95図 H62号住居跡及び出土遺物実測図

を測る。カマドは発見されなかった。

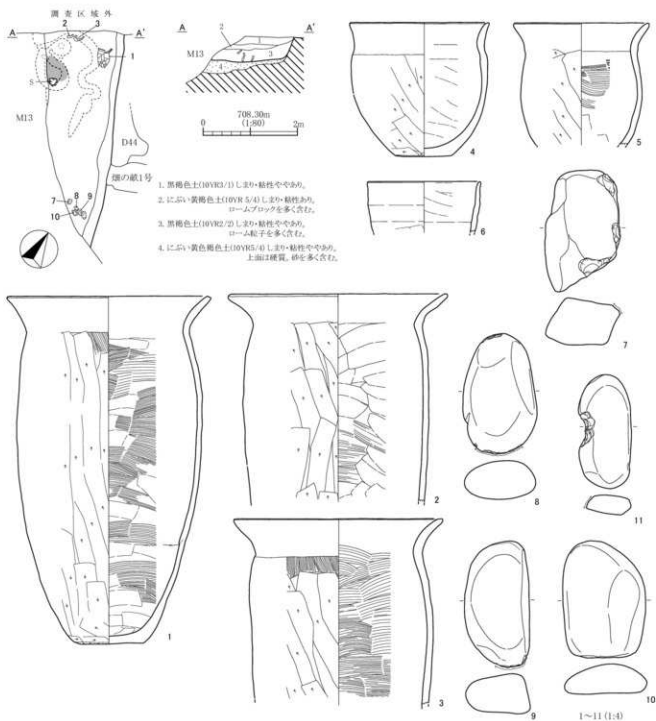
本跡からの出土遺物は覆土を中心に出土した。5点を図示した。1は土師器環とした。口縁部が内傾するタイプの坏で、内面見込み部には丁寧なミガキが施されていた。2と3は土師器甕である。いずれも外面はヘラケズリの後ミガキが施されている。4と5は敲石と考えられる。

本跡からの出土遺物は少なく、所産時期は不確実であるが6世紀代と考えられようか。

(61) H63号住居跡

本住居跡は調査V区北側のI-11、II-A-10・11Grに位置する。検出状態は西側がM13号溝状遺構に削平され、北側が調査区域外となる。形態は不明である。規模は残存南北長4.35m、残存東西長1.52mを測る。壁高さは東壁で0.35mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は残存部で4.50㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.07～0.29mを測る。壁溝やピットは検出されなかった。本跡の掘方は一部に深く掘り込まれている箇所があった。カマドは発見されなかったが、平面図に図示した床面上の範囲に粘土が検出された。

本跡からの出土遺物は覆土内や床面上から出土した。11点を図示した。1～5は土師器甕である。1は東壁脇の床面上から出土した。1～3は外面ヘラケズリ、内面は刷毛目の残るナデが施されている。4と5は小型甕である。6は器種不明であり、直立する口縁部が特徴である。7～10はまと(土)



第96図 H63号住居跡及び出土遺物実測図

て床面上から出土した。7～9は敲き痕があり、11は片側に抉りのような敲き痕が確認できる。これらの石製品は出土状態や大きさから編物石のな使用が考えられる。

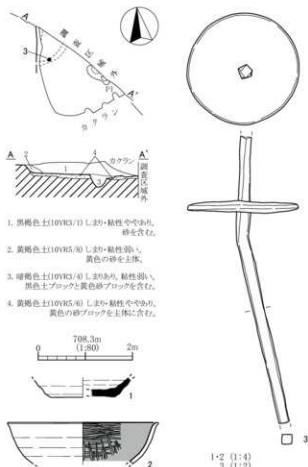
本跡は出土遺物の器種がかたより、土師器罢了か形態がわからない為所産時期は不確実であるが、7世紀代の範疇としてとらえられるか。

(62) H64号住居跡

本住居跡は調査V区南側のIーセー18・19、Iーセー18・19Grに位置する。検出状態は東側が調査区域外、南側がカクランにより削平されている。住居の南西コーナー部が検出されたと考える。形態は不明である。規模は検出南北長1.75m、検出東西長1.54mを測る。壁高さは西壁で0.15mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部で1.76㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.07～0.09mを測る。ピットは1か所検出された。P1の規模は径0.56m・深さ0.23mを測る。本跡の掘方は西側で一部に深く掘り込まれている箇所があった。カマドは確認できなかった。

本跡からの出土遺物は少なかったが覆土内や床面状から出土した。3点を図示した。1は須恵器環である。底部は右回転糸切りである。2はロクロ成形の土師器環である。内面は黒色処理が施され、丁寧なミガキが行われている。3は鉄製の紡錘車である。軸部分は両側欠損するが、円盤部は完形である。床面上から出土した。

本跡は遺物の出土量が少なく、所産時期は不確定であるが、以上のような出土遺物から9世紀代の時期が想定できると考える。



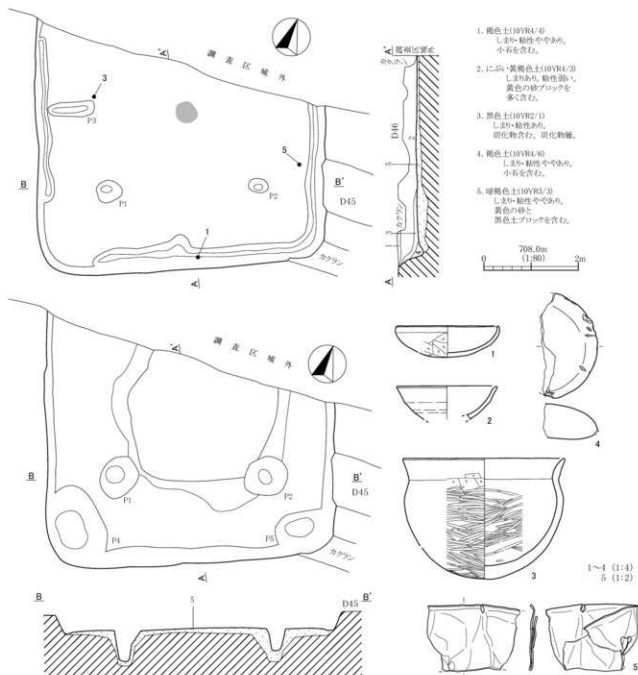
第97図 H64号住居跡及び出土遺物実測図

(63) H65号住居跡

本住居跡は調査V区南側のIVーキー14・15、IVークー14・15Grに位置する。検出状態は北側が調査区域外となる。形態は方形と考えられる。規模は検出南北長4.98m、東西長5.48mを測る。壁高さは南東コーナーで0.53mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面積は検出部で21.18㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.05～0.22mを測る。壁溝は東壁と南壁及び西壁の一部で検出された。壁溝の深さは0.04～0.09mを測る。ピットは掘方検出時も含め5か所確認された。P1とP2が支柱穴と考えられる。P1-P2間は3.21mを測る。規模はP1が径0.55m・深さ0.65m、P2が径0.42m・深さ0.46m、P3が径0.90m・深さ0.13m、P4が径1.76m・深さ0.26m、P5が径1.31m・深さ0.08mを測る。本跡の掘方は中央部が一段高く掘り残されるタイプの掘方であり、高さの差は0.04～0.12mを測る。カマドは発見されなかったが、住居中央床面上で粘土塊が検出された。

本跡からの出土遺物は覆土内や床面状から出土したが少なかった。1と2は土師器環である。1は外面ヘラケズリを施す皿状のタイプである。2はロクロ成形の小型環で底部を欠損する。3は土師器鉢とした。内外面に丁寧なミガキを施す。4は敲石である。5は金属製品で、形状より銅碗片を幾重化に折り込んだ物と考えられる。銅碗とすると口縁部が一部残存している。

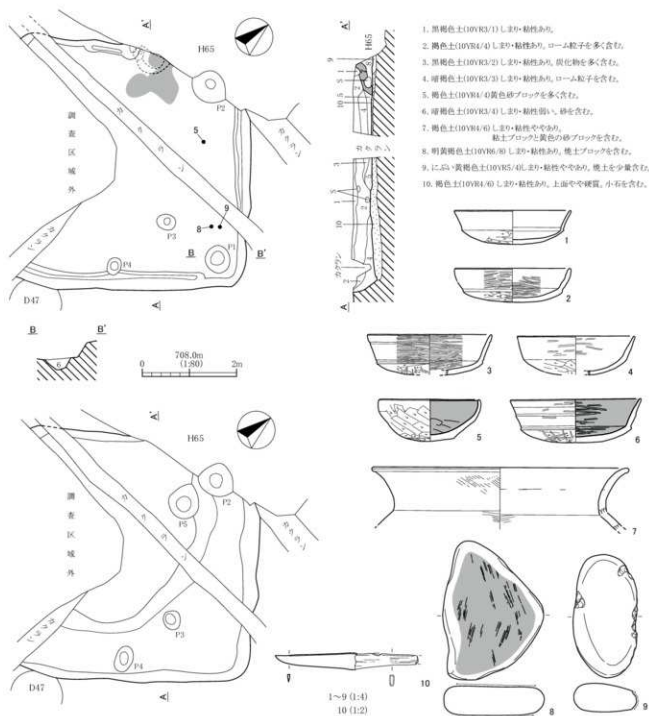
本跡は出土遺物が少なく帰属時期は不確定であるが、1の土師器環や銅碗片等を考慮すると7世紀後半代から8世紀前半代の帰属時期が考えられる。



第98図 H65号住居跡及び出土遺物実測図

(64) H66号住居跡

本住居跡は調査V区南側のV-カー15・16、V-キー15・16、V-クー15・16Grに位置する。検出状態は北側がH65号住居跡に削平され、西側は調査区域外となる。形態は方形と考えられる。規模は南北長4.66m、検出東西長4.34mを測る。壁高さは南壁で0.46mを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居跡の床面積は検出部で14.71㎡を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.04~0.19mを測る。壁溝は東壁と南壁及び西壁の一部で検出された。壁溝の深さは0.02~0.06mを測る。ピットは掘方検出時も含め5か所確認された。規模はP1が径0.59m・深さ0.22m、P2が径0.83m・深さ0.60m、P3が径0.42m・深さ0.44m、P4が径0.38m・深さ0.35m、P5が径0.75m・深さ0.46mを測る。本跡の掘方は、住居中央が一段高くなる掘方で、高さの差は



第99図 H66号住居跡及び出土遺物実測図

0.08～0.13mを測る。カマドは北壁中央に存在したと考えられるが、H65号住居跡により削平され、崩れた袖構築粘土のみ確認できた。

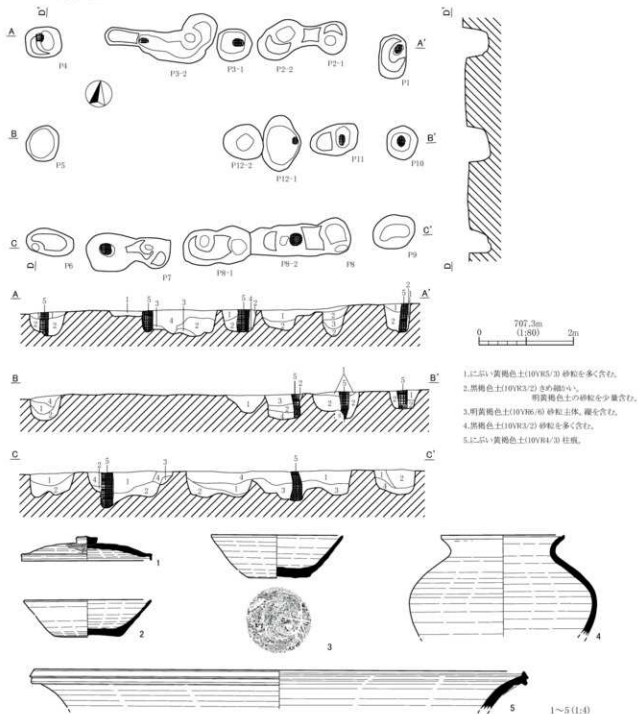
本跡からの出土遺物は覆土を中心にやや多くあった。1～6は土師器環である。5のみタイプが異なる環であり、1・2・4はいわゆる「須恵器模倣環」、3と6は「有段口縁環」と呼ばれるものである。7は土師器甕で、頸部が「く」の字に屈曲する。8は台石状の磨り石で、2面の磨り面が確認できる。9は敲石である。両側面に敲き痕がある。10は鉄製刀子と考えられる。

本跡はこれらの出土遺物から6世紀後半代の所産時期が考えられる。

第2節 掘立柱建物跡

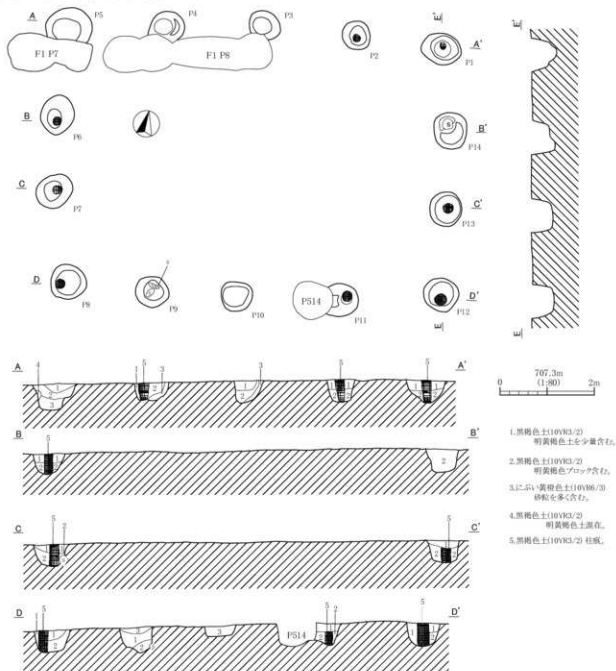
(1) F1号掘立柱建物跡

本跡は調査Ⅰ区中央のV・シ・ス・セー14・15・16Grに位置する。形態は東西方向に長軸を持つ2間×6間の側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-82°-Eを示す。規模は桁行長7.60m・梁間長4.40mで、桁行柱間は1.02~2.20m、梁間柱間1.84~2.22mを測る。ピット間に囲まれた面積は31.03m²を測る。



第100図 F1号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

柱穴の形態はやや方形基調のピットや楕円形、また溝持ち状の連結したピットであった。ピット内で柱痕を確認できたものもあった。ピットの規模は、P1が径0.92m・深さ0.64m、P2-1が径0.70m・深さ0.66m、P2-2が径1.06m・深さ0.75m、P3-1が径0.74m・深さ0.45m、P3-2が径1.35m・深さ0.57m、P4が径0.76m・深さ0.54m、P5が径0.78m・深さ0.52m、P6が径1.00m・深さ0.49m、P7が径1.78m・深さ0.84m、P8-1が径1.43m・深さ0.61m、P8-2が径2.10m・深さ0.63m、P9が径0.92m・深さ0.52m、P10が径0.72m・深さ0.40m、P11が径1.05m・深さ0.56m、P12-1が径1.16m・深さ0.53m、P12-2が径0.86m・深さ0.37mを測る。本跡はピットの配置が複雑で、一部に総柱建物跡的な配置を示す部分もあることから、建て替えか或いは2棟分の建物跡が重複しているとも考えられる。



第101図 F2号掘立柱建物跡実測図

本跡からの出土遺物は5点を図示した。いずれも須恵器で、1は須恵器蓋、2と3は須恵器環で底部回転系切りである。4は須恵器短頸壺で、底部を欠損する。5は須恵器甕の口縁部である。本跡はこれらの出土遺物から8世紀代の所産時期が考えられる。

(2) F 2号掘立柱建物跡

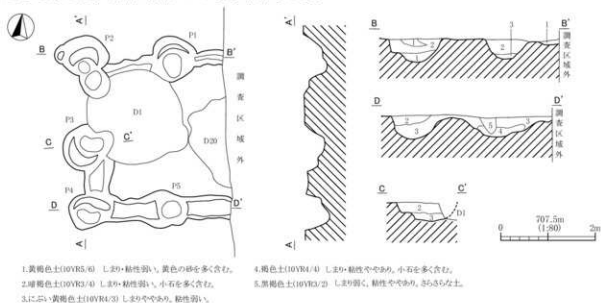
本跡は調査I区中央のV-サ・シ・スー15・16・17Grに位置する。形態は東西方向に長軸を持つ3間×4間の側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-83°-Eを示す。規模は桁行長8.12m・梁間長5.47mで、桁行柱間は1.84~2.32m、梁間柱間1.68~2.00mを測る。ピット間に囲まれた面積は45.71㎡を測る。柱穴の形態はほぼ円形であった。ピット内で柱痕を確認できたものもあった。ピットの規模は、P1が径0.84m・深さ0.52m、P2が径0.60m・深さ0.48m、P3が径0.70m・深さ0.50m、P4が短径0.70m・深さ0.48m、P5が径1.00m・深さ0.55m、P6が径0.86m・深さ0.47m、P7が径0.79m・深さ0.51m、P8が径0.77m・深さ0.52m、P9が径0.69m・深さ0.57m、P10が径0.67m・深さ0.29m、P11が短径0.69m・深さ0.55m、P12が径0.76m・深さ0.51m、P13が径0.73m・深さ0.49m、P14が径0.77m・深さ0.52mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットより須恵器環・蓋・甕、土師器環・甕等が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。本跡はF 1号掘立柱建物跡より古いことから、8世紀代以前と考えられるが帰属時期について詳細は不明である。

(3) F 3号掘立柱建物跡

本跡は調査I区東よりのV-サ・シー8・9Grに位置する。東側が調査区域外となる。形態は2間×2間以上の溝持ち側柱式掘立柱建物跡である。軸方位は東西を基本とすればN-81°-Eを示す。規模は検出部で桁行長3.00m・梁間長3.23mで、桁行柱間は1.80~1.90m、梁間柱間1.58~1.65mを測る。ピット間に囲まれた検出部の面積は9.45㎡を測る。柱穴の形態はほぼ円形であり、各ピット間は溝状遺構により連結していた。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径1.00m・深さ0.44m、P2が径1.38m・深さ0.55m、P3が径1.11m・深さ0.45m、P4が径0.95m・深さ0.53m、P5が径0.89m・深さ0.46mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットより須恵器環・甕、土師器環・甕等が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。帰属時期については不明である。



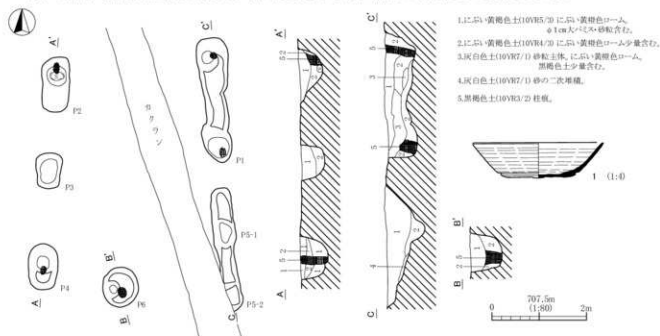
第102図 F 3号掘立柱建物跡実測図

(4) F 4号掘立柱建物跡

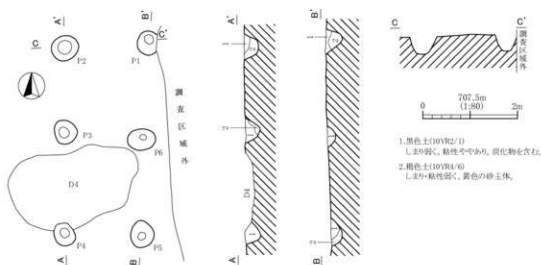
本跡は調査Ⅰ区中央のVーク・ケー16・17Grに位置する。形態は2間×2間の溝持ち側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-1°-Wを示す。規模は桁行長5.20m・梁間長4.05mで、桁行柱間は1.45~1.96m、梁間柱間1.73~2.32mを測る。ピット間に囲まれた面積は17.58㎡を測る。柱穴の形態は円形から長方形であり、各ピット間は溝状遺構により連結している部分もある。ピット内で柱痕を確認できた部分もあった。ピットの規模は、P1が径2.66m・深さ0.64m、P2が径1.16m・深さ0.51m、P3が径0.75m・深さ0.52m、P4が径0.98m・深さ0.63m、P5が径2.63m・深さ0.82m、P6が径0.83m・深さ0.75mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットより須恵器環・甕片、土師器環・甕片、特に土師器甕はいわゆる「武蔵型甕」が破片で出土した。図示可能なものは須恵器環1点であった。

本跡の帰属時期は出土遺物が少なく不確実であるが、古代の範疇として捉えられる。



第103図 F 4号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

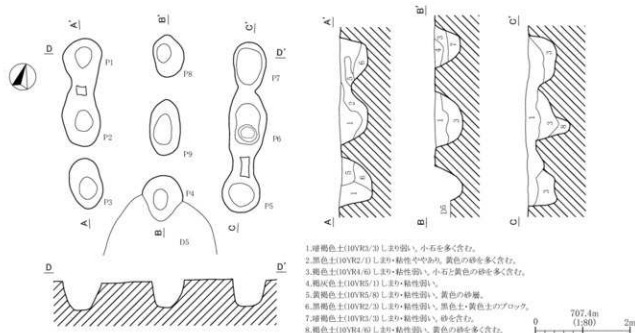


第104図 F 5号掘立柱建物跡実測図

(5) F 5号掘立柱建物跡

本跡は調査Ⅰ区東よりのV-サー12・13Grに位置する。東側が調査区域外となる。形態は1間×2間の側柱式か2間×2間以上の総柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-2°-Eを示す。規模は桁行長3.94m・検出梁間長2.40mで、桁行柱間は1.82~2.15m、梁間柱間1.82mを測る。ピット間に囲まれた検出部分の面積は8.83㎡を測る。柱穴の形態は円形であり、ピット内で柱痕を確認できたピットはなかった。ピットの規模は、P1が径0.52m・深さ0.35m、P2が径0.58m・深さ0.34m、P3が径0.53m・深さ0.32m、P4が径0.51m・深さ0.34m、P5が径0.57m・深さ0.28m、P6が径0.60m・深さ0.25mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットより土師器環・裏片、特に土師器環は古墳時代後期のものであった。図示できるものはなかった。本跡の帰属時期は出土遺物が少なく不明である。



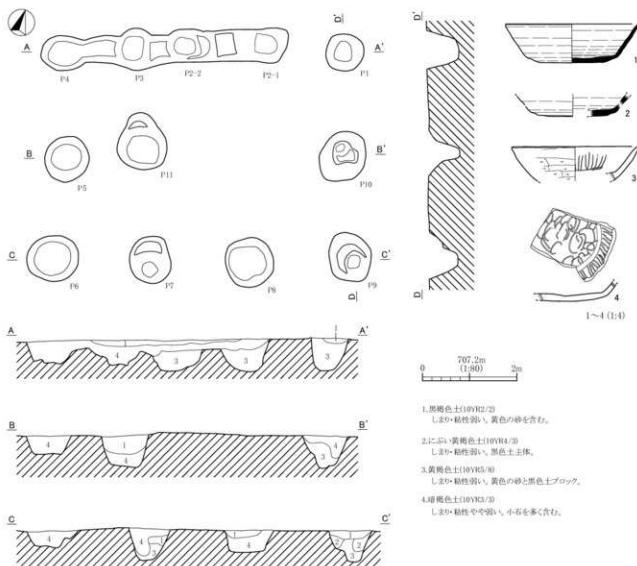
第105図 F 5号掘立柱建物跡実測図

(6) F 6号掘立柱建物跡

本跡は調査Ⅰ区東よりのV-セ・ソー11・12Grに位置する。形態は2間×2間の一部溝持ち総柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-79°-Eを示す。規模は桁行長3.48m・梁間長2.87mで、桁行柱間は1.72~1.80m、梁間柱間1.36~1.45mを測る。ピット間に囲まれた面積は9.78㎡を測る。柱穴の形態は円形であり、一部に溝状遺構で連結している。ピット内で柱痕を確認できたピットはなかった。ピットの規模は、P1が径1.03m・深さ0.60m、P2が径1.12m・深さ0.59m、P3が径1.06m・深さ0.70m、P4が径0.98m・深さ0.60m、P5が径0.86m・深さ0.60m、P6が径1.43m・深さ0.92m、P7が径1.07m・深さ0.63m、P8が径0.87m・深さ0.68m、P9が径1.18m・深さ0.63mを測る。本跡からの出土遺物は各ピットから土師器裏片、須恵器環・裏片が出土したが、いずれも小片で図示できるものはなかった。本跡の帰属時期は不明である。

(7) F 7号掘立柱建物跡

本跡は調査Ⅰ区北よりのV-チ・ツ・テー9・10Grに位置する。形態は2間×3間の一部溝持ち側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-73°-Eを示す。規模は桁行長6.45m・梁間長4.50mで、桁行柱間は1.12~2.22m、梁間柱間2.06~2.40mを測る。ピット間に囲まれた面積は27.58㎡を測る。柱穴の形態は円形であり、一部に溝状遺構で連結している。ピット内で柱痕を確認できたピットはな



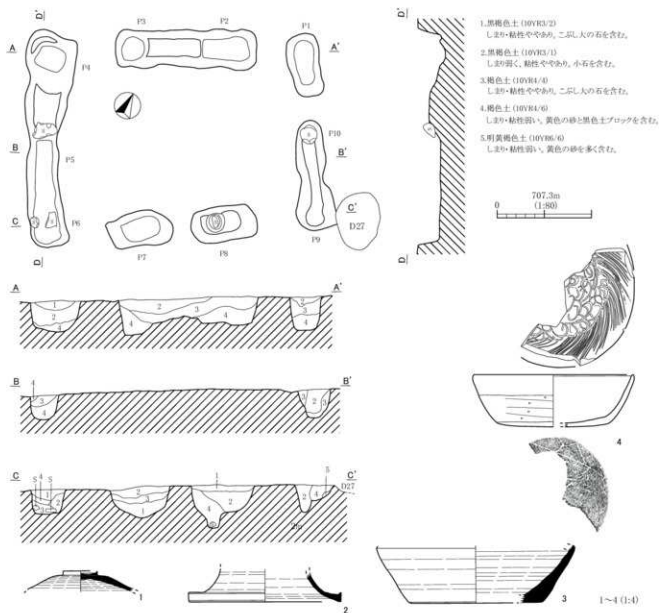
第106図 F7号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

かった。ピットの規模は、P1が径0.82m・深さ0.70m、P2-1が径1.17m・深さ0.71m、P2-2が径1.12m・深さ0.69m、P3が径0.88m・深さ0.61m、P4が径1.00m・深さ0.36m、P5が径1.00m・深さ0.39m、P6が径1.12m・深さ0.32m、P7が径1.00m・深さ0.71m、P8が径1.06m・深さ0.46m、P9が径1.10m・深さ0.65m、P10が径1.17m・深さ0.77m、P11が径1.22m・深さ0.71mを測る。本跡からの出土遺物は4点を図示した。1と2は須恵器環である。1は底部回転へら切りが施されている。3と4は土師器環である。いずれも胎土が精錬されたタイプの環であり、4は内面見込み部に螺旋状の暗文が施され、どちらも口縁部内面は放射状の暗文が施されている。

本跡はこれらの出土遺物から8世紀代の帰属時期が考えられる。

(8) F8号掘立柱建物跡

本跡は調査1区中央よりのV-ソー10・11、V-ター10・11、V-チー10・11・12Grに位置する。形態は2間×3間の一部溝持ち側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-64°-Eを示す。規模は桁行長5.66m・梁間長3.68mで、桁行柱間は1.40~2.10m、梁間柱間1.28~1.86mを測る。ピット間に囲まれた面積は20.25㎡を測る。柱穴の形態は長方形を基調とし、一部に溝状遺構で連結して

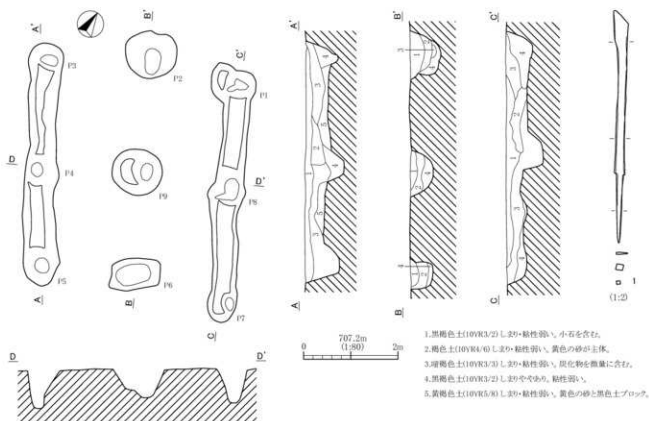


第107図 F 8号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

いた。ピット内で柱痕を確認できたピットはなかった。ピットの規模は、P1が径1.33m・深さ0.73m、P2が径1.28m・深さ0.57m、P3が径0.94m・深さ0.78m、P4が径1.42m・深さ0.75m、P5・6が径2.48m・深さ0.65m、P7が径1.43m・深さ0.71m、P8が径1.40m・深さ0.92m、P9・10が径2.30m・深さ0.62mを測る。

本跡からの出土遺物は4点を図示した。1は須恵器蓋である。つまみ部はリング状を呈する。2は須恵器の長頸壺の口縁部と迷ったが、形状より高坏脚として報告した。3は須恵器壺の胴部下半と考えられる。底部は回転ヘラ切りである。4は土師器坏である。胎土はよく精錬されており、底部に木葉痕が確認できる。内面は見込み部が螺旋状の暗文、口縁部が放射状の暗文がそれぞれ施されている。

本跡はこれらの出土遺物から8世紀代の帰属時期が考えられる。



第108図 F 9号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

(9) F 9号掘立柱建物跡

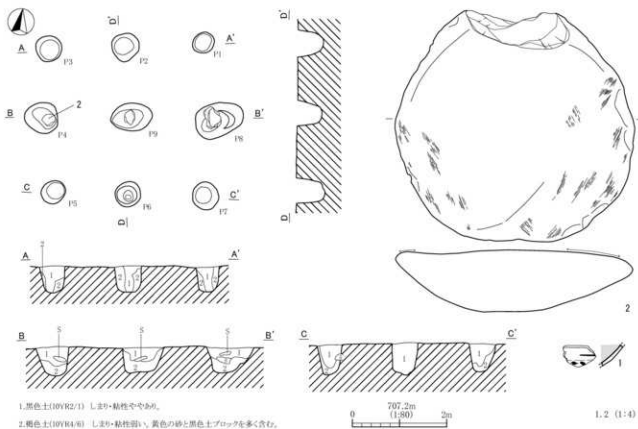
本跡は調査Ⅰ区中央のV-チー11・12、V-ツー11・12、V-テー11Grに位置する。形態は2間×2間の一部溝持ち総柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-31°-Wを示す。規模は桁行長4.66m・梁間長4.05mで、桁行柱間は2.05~2.48m、梁間柱間1.92~2.20mを測る。ピット間に囲まれた面積は18.55㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とし、一部に溝状遺構で連結していた。ピット内で柱痕を確認できたピットはなかった。ピットの規模は、P1が径0.96m・深さ0.59m、P2が径1.13m・深さ0.71m、P3が径0.78m・深さ0.69m、P4が径0.86m・深さ0.82m、P5が径0.86m・深さ0.73m、P6が径1.06m・深さ0.51m、P7が径0.78m・深さ0.76m、P8が径0.90m・深さ0.79m、P9が径1.08m・深さ0.60mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットから須恵器甕片、土師器環・甕片が出土した。いずれも小片で図示できなかったが、土師器甕の中にはいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるタイプの甕片が多くあった。図示した鉄製品は片刃の長頸鎌でほぼ完形である。

本跡のこれら出土遺物は小片であり不確定要素が大きいが、土師器甕などの特徴から8世紀代の帰属時期が考えられる。

(10) F 10号掘立柱建物跡

本跡は調査Ⅰ区中央のV-テー12、V-トー11・12、VI-アー11・12Grに位置する。形態は2間×2間の総柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-85°-Eを示す。規模は桁行長3.30m・梁間長3.24mで、桁行柱間は1.55~1.70m、梁間柱間1.45~1.72mを測る。ピット間に囲まれた面積は10.38㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とする。ピット内で柱痕と推定できる土層を確認できたピットがあった。また、中央列のP4とP8とP9で底面から浮いた状態で扁平な礫が検出された。

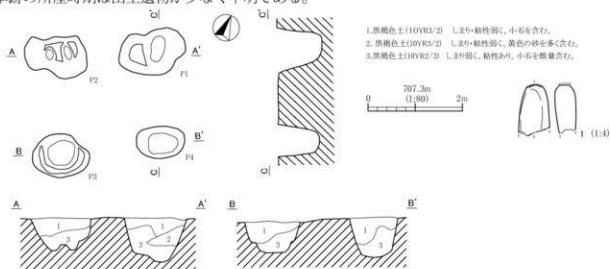


第109図 F 10号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

ピットの規模は、P1が径0.48m・深さ0.55m、P2が径0.59m・深さ0.54m、P3が径0.56m・深さ0.56m、P4が径0.75m・深さ0.56m、P5が径0.54m・深さ0.61m、P6が径0.55m・深さ0.68m、P7が径0.59m・深さ0.62m、P8が径1.03m・深さ0.54m、P9が径0.89m・深さ0.53mを測る。

本跡からの出土遺物は少なく、2点を図示した。1は土師器杯の胴部破片で、内面黒色処理が施され、外面には墨書と考えられる墨痕がある。2はP4から出土した磨り痕のある台石である。

本跡の所産時期は出土遺物が少なく不明である。



第110図 F 11号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

(11) F11号掘立柱建物跡

本跡は調査Ⅰ区中央のV-ソー12、V-ター12Grに位置する。形態は1間×1間の掘立柱建物跡である。軸方位はN-64°-Eを示す。規模は桁行長2.30m・梁間長2.12mを測る。ピット間に囲まれた面積は4.36㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とする。ピット内で柱痕と確認できたピットはなかった。ピットの規模は、P1が径1.45m・深さ0.97m、P2が径1.30m・深さ0.70m、P3が径1.20m・深さ0.69m、P4が径1.01m・深さ0.86mを測る。

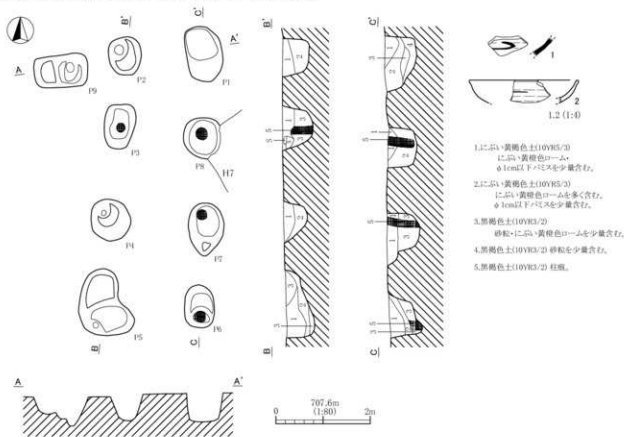
本跡からの出土遺物は少なく、各ピットから須恵器環・裏片、土師器裏片、内面黒色処理が施された土師器坏片等が出土したがいずれも小片で図化できなかった。図化した1は敲石で欠損している。本跡の所産時期は出土遺物が少なく不明である。

(12) F12号掘立柱建物跡

本跡は調査Ⅰ区中央のV-キー16・17、V-クー16・17Grに位置する。形態は変則的な1間×3間の掘立柱建物跡として捉えた。軸方位はNを示す。規模は桁行長5.90m・梁間長2.80m、桁行柱間は1.70~2.40m、梁間柱間1.10~1.75mを測る。P9を除いたピット間に囲まれた面積は11.17㎡を測る。柱穴の形態は楕円形を基調とする。ピット内で柱痕と確認できたピットがあった。ピットの規模は、P1が径1.21m・深さ0.64m、P2が径0.82m・深さ0.72m、P3が径0.94m・深さ0.66m、P4が径0.90m・深さ0.67m、P5が径1.43m・深さ0.85m、P6が径0.91m・深さ0.75m、P7が径1.12m・深さ0.71m、P8が径0.88m・深さ0.65m、P9が径1.14m・深さ0.65mを測る。

本跡からの出土遺物は少なく、2点を図示した。1は須恵器環の胴部破片である。外面に墨書の一部と考えられる墨痕がある。2は土師器環で、同じく胴部に墨痕が確認できる。

本跡の所産時期は出土遺物が少なく不明である。



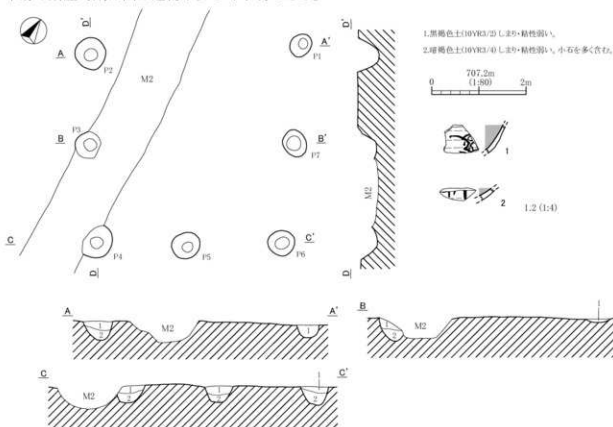
第111図 F12号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

(13) F13号掘立柱建物跡

本跡は調査I区西よりのV-ト-10・11、V-ア-11・12Grに位置する。形態は2間×2間の側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-29°-Wを示す。規模は桁行長4.52m・梁間長4.26m、桁行柱間は1.95~2.02m、梁間柱間1.90~2.15mを測る。ピット間に囲まれた面積は17.36㎡を測る。柱穴の形態は楕円形を基調とする。ピット内で柱痕と確認できたピットはなかった。ピットの規模は、P1が径0.50m・深さ0.20m、P2が径0.66m・深さ0.47m、P3が径0.56m・深さ0.46m、P4が径0.75m・深さ0.40m、P5が径0.61m・深さ0.37m、P6が径0.57m・深さ0.39m、P7が径0.60m・深さ0.10mを測る。

本跡からの出土遺物は少なく、2点を図示した。1と2はいずれも土師器環で、内面黒色処理が施されている。また、外面に墨書と考えられる墨痕が確認できる。

本跡の所産時期は出土遺物が少なく不明である。

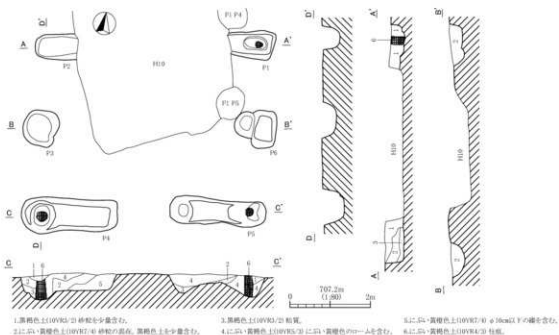


第112図 F13号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

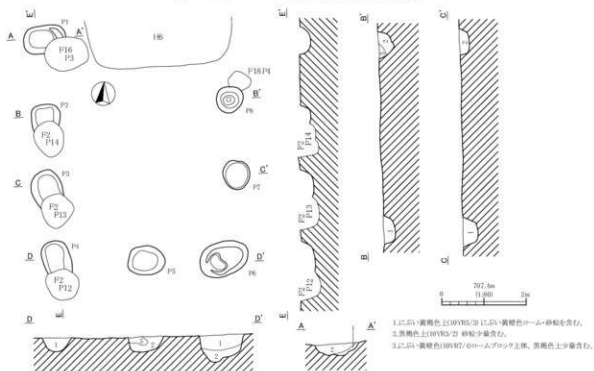
(14) F14号掘立柱建物跡

本跡は調査I区中央のV-ス-15・16、V-セ-15・16、V-ソ-15・16Grに位置する。形態は2間×3間の一部溝持ち側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-82°-Eを示す。規模は桁行長5.15m・梁間長4.18m、桁行柱間は2.03m、梁間柱間1.98~2.20mを測る。ピット間に囲まれた面積は22.13㎡を測る。柱穴の形態は円形と方形を基調とする。ピット内で柱痕と確認できたピットがあった。ピットの規模は、P1が残存径1.11m・深さ0.43m、P2が残存径1.05m・深さ0.47m、P3が径0.88m・深さ0.37m、P4が径2.38m・深さ0.58m、P5が径2.39m・深さ0.53m、P6が径1.05m・深さ0.43mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットより須恵器環・甕片、土師器環・甕片が出土したがいずれも小片で図示できなかった。本跡の所産時期は出土遺物が少なく不明である。



第113図 F14号掘立柱建物跡実測図



第114図 F15号掘立柱建物跡実測図

(15) F15号掘立柱建物跡

本跡は調査1区中央のV-コー15・16、V-サー15・16Grに位置する。形態は2間×3間の側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-3°-Wを示す。規模は桁行長5.34m・梁間長3.82m、桁行柱間は1.70~2.15m、梁間柱間1.70~2.12mを測る。ピット間に囲まれた面積は推定で22.41㎡を測る。柱穴の形態は円形と楕円形を基調とする。ピット内で柱痕と確認できたものはなかった。

ピットの規模は、P1が径1.00m・深さ0.32m、P2が短径0.66m・深さ0.29m、P3が短径0.73m・深さ0.39m、P4が短径0.66m・深さ0.35m、P5が径0.88m・深さ0.42m、P6が径1.20m・深さ0.67m、P7が径0.71m・深さ0.25m、P8が径0.66m・深さ0.41mを測る。

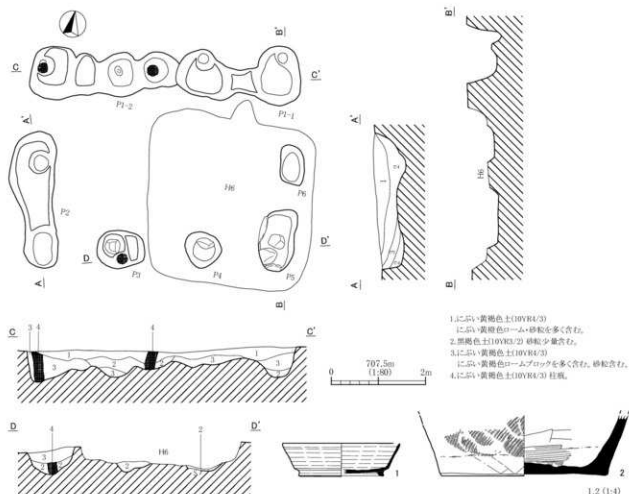
本跡からの出土遺物は各ピットより須恵器蓋・坏・甕片、土師器坏・甕片が出土した。特に土師器甕はいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるものであった。しかし、いずれも小片で図示できなかった。本跡の所産時期は出土遺物が少なく不明である。

(16) F16号掘立柱建物跡

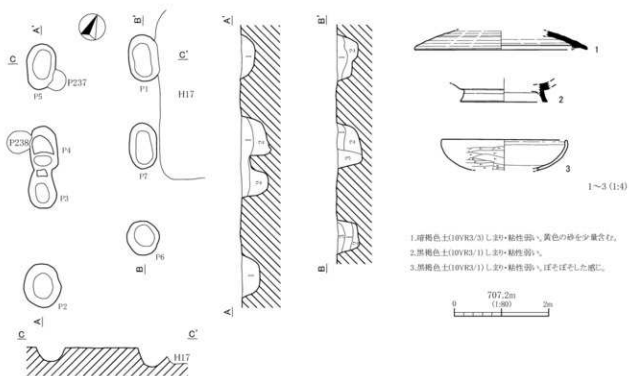
本跡は調査Ⅰ区中央のV-コー14・15、V-サー14・15Grに位置する。形態は2間×3間の一部溝持ちの側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-79°-Eを示す。規模は桁行長5.10m・梁間長3.86m、桁行柱間は1.08~2.37m、梁間柱間1.55~2.35mを測る。ピット間に囲まれた面積は20.52㎡を測る。柱穴の形態は円形と楕円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものがある。ピットの規模は、P1-1が径2.67m・深さ0.84m、P1-2が径3.07m・深さ0.77m、P2が径2.89m・深さ0.70m、P3が径1.00m・深さ0.54m、P4が径0.76m・深さ0.28m、P5が径1.31m・深さ0.25m、P6が径0.80m・深さ0.22mを測る。

本跡からの出土遺物は2点を図示した。1は須恵器有台坏で、底部回転系切りの後、高台を貼付している。2は須恵器甕の底部で、外面底部付近に自然釉が付着している。

本跡の所産時期は出土遺物が少なく不明である。



第115図 F16号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図



第116図 F17号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

(17) F17号掘立柱建物跡

本跡は調査I区中央のV-ター13・14、V-チー13・14Grに位置する。形態は変則的な1間×2間の側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-22°-Wを示す。規模は桁行長4.74m・梁間長2.16m、桁行柱間は1.84~2.03mを測る。ピット間に囲まれた面積は9.22㎡を測る。柱穴の形態は円形と楕円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径0.98m・深さ0.44m、P2が径0.92m・深さ0.38m、P3が径0.69m・深さ0.55m、P4が径0.90m・深さ0.63m、P5が径0.97m・深さ0.29m、P6が径0.73m・深さ0.47m、P7が径0.97m・深さ0.52mを測る。

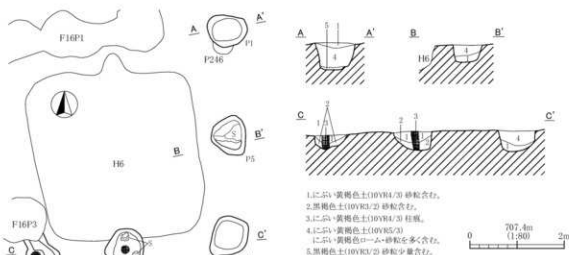
本跡からの出土遺物は3点を図示した。1は須恵器蓋でつまみ部を欠損するが、かえり部は内側に突起状に出るタイプの蓋である。2は須恵器有台坏で、高台部分のみ残存している。3は土師器坏である。胎土はよく精練されており、外面はヘラケズリが行われている。

本跡の所産時期は出土遺物が少なく不確実であるが、7世紀末から8世紀前半代の可能性がある。

(18) F18号掘立柱建物跡

本跡は調査I区中央のV-コー14・15、V-サー15Grに位置する。本跡は中央と北西側がH6号住居跡とF16号掘立柱建物跡により削平されている。よって形態は2間×2間の側柱式掘立柱建物跡と考えられるが、北側と西側の柱列は検出できなかった。軸方位はN-2°-Eを示す。規模は桁行長4.40m・梁間長4.10m、桁行柱間は2.12~2.28m、梁間柱間1.92~2.20mを測る。ピット間に囲まれた面積は推定で18.62㎡を測る。柱穴の形態は円形と楕円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものや礫が出土したものがあつた。ピットの規模は、P1が径0.83m・深さ0.54m、P2が短径0.59m・深さ0.38m、P3が径0.81m・深さ0.39m、P4が径0.92m・深さ0.51m、P5が径0.86m・深さ0.41mを測る。

本跡からの出土遺物はP2より土師器口クロ裏の破片が3点出土したのみである。図示できる遺物はなかった。本跡の所産時期は出土遺物が少なく不明である。



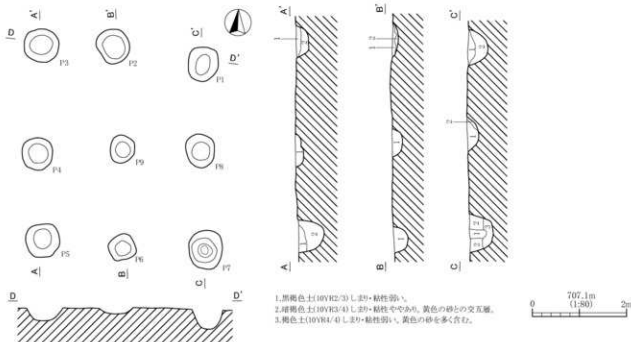
第117図 F18号掘立柱建物跡実測図

(19) F19号掘立柱建物跡

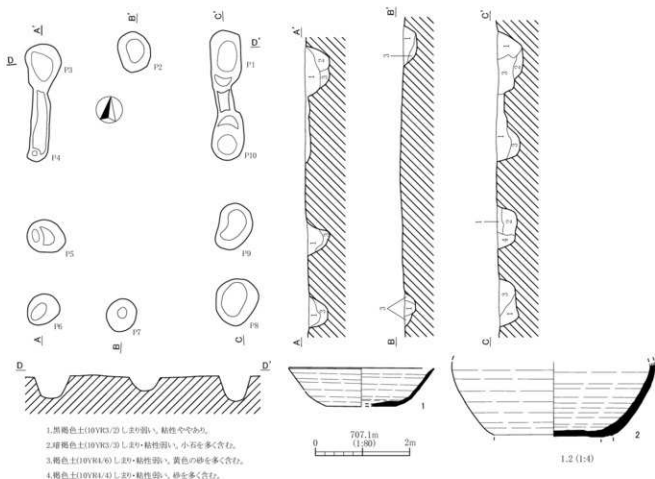
本跡は調査I区中央のV-ター16・17、V-チー16・17Grに位置する。形態は2間×2間の縦柱式掘立柱建物跡と考えられる。軸方位はNを示す。規模は桁行長4.20m・梁間長3.48m、桁行柱間は1.83~2.32m、梁間柱間1.54~1.96mを測る。ピット間に囲まれた面積は14.10㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径0.75m・深さ0.41m、P2が径0.73m・深さ0.10m、P3が径0.75m・深さ0.27m、P4が径0.70m・深さ0.16m、P5が径0.78m・深さ0.56m、P6が径0.62m・深さ0.32m、P7が径0.83m・深さ0.55m、P8が径0.72m・深さ0.32m、P9が径0.60m・深さ0.25mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットより須恵器環・甕片、土師器環・甕片があったがいずれも小片で図示できるものはなかった。

よって、本跡の所産時期は不明である。



第118図 F19号掘立柱建物跡実測図



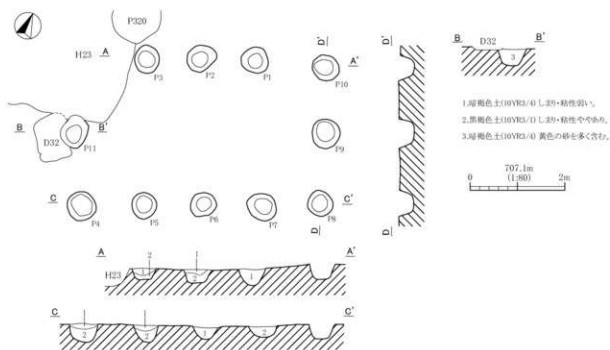
第119図 F20号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

(20) F20号掘立柱建物跡

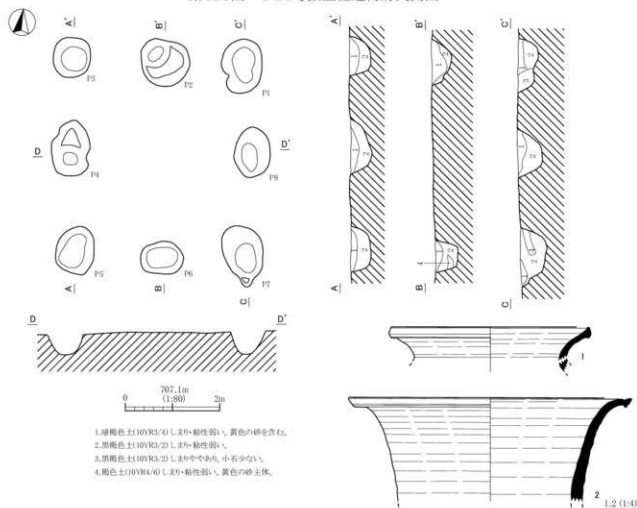
本跡は調査Ⅰ区中央のV-ゾーン15・16、V-ター15・16Grに位置する。形態は2間×3間の一部溝持ち側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-6°-Wを示す。規模は桁行長5.17m・梁間長4.10m、桁行柱間は1.58~1.87m、梁間柱間1.76~2.35mを測る。ピット間に囲まれた面積は21.91㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径1.34m・深さ0.50m、P2が径0.87m・深さ0.33m、P3が径1.02m・深さ0.55m、P4が径0.44m・深さ0.26m、P5が径0.81m・深さ0.49m、P6が径0.72m・深さ0.43m、P7が径0.72m・深さ0.31m、P8が径1.00m・深さ0.51m、P9が径1.00m・深さ0.44m、P10が径1.10m・深さ0.50mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットより須恵器環・甕片、土師器環・甕片があり、2点を図示した。1は須恵器環であり、底部回転ヘラ切りの後、回転ヘラケズリを施している。2は須恵器壺の胴部下半と考えられる。底部は高台が貼付されていたと考えられるが欠損している。内面見込み部には自然釉が付着していた。

よって、本跡の所産時期は遺物が少なく不確実であるが、小片や図示した2点の須恵器から8~9世紀代の時期が推定できる。



第120図 F21号掘立柱建物跡実測図



第121図 F22号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

(21) F 21号掘立柱建物跡

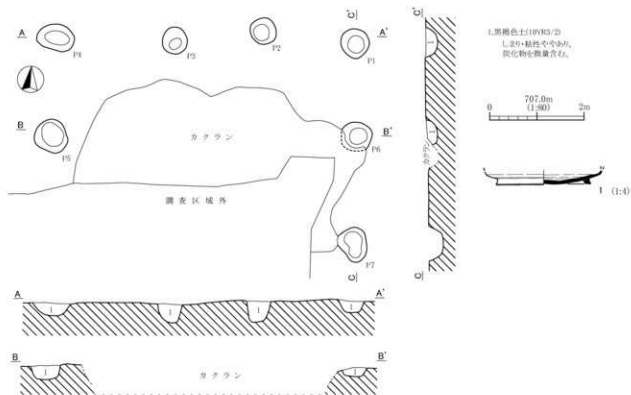
本跡は調査1区西よりのV-ツ-14・15、V-テ-14~16Grに位置する。北西角の柱穴はH23号住居跡により削平されている。形態は2間×4間の側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-67°-Eを示す。規模は桁行長5.05m・梁間長2.90m、桁行柱間は1.20~1.30m、梁間柱間1.36~1.53mを測る。ピット間に囲まれた面積は推定で15.54㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径0.60m・深さ0.36m、P2が径0.60m・深さ0.29m、P3が径0.60m・深さ0.26m、P4が径0.60m・深さ0.35m、P5が径0.57m・深さ0.38m、P6が径0.55m・深さ0.24m、P7が径0.66m・深さ0.23m、P8が径0.56m・深さ0.31m、P9が径0.63m・深さ0.34m、P10が径0.57m・深さ0.35m、P11が径0.66m・深さ0.36mを測る。

本跡からの遺物は各ピットより土師器環・甕片が出土したがいずれも小片で図示できなかったが、土器片の特徴はいずれも古墳時代後期の特徴をもっていた。本跡の所産時期は古墳時代後期とも考えられるが不確実である。

(22) F 22号掘立柱建物跡

本跡は調査1区西よりのV-チ-15~17、V-ツ-15~17Grに位置する。形態は2間×2間の側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-6°-Wを示す。規模は桁行長4.16m・梁間長3.68m、桁行柱間は1.97~2.18m、梁間柱間1.80~1.90mを測る。ピット間に囲まれた面積は15.48㎡を測る。柱穴の形態は円形と楕円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径1.13m・深さ0.45m、P2が径1.08m・深さ0.54m、P3が径0.84m・深さ0.46m、P4が径1.16m・深さ0.50m、P5が径0.97m・深さ0.45m、P6が径0.90m・深さ0.47m、P7が径1.30m・深さ0.58m、P8が径1.07m・深さ0.50mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットより須恵器環・甕片、土師器環・甕片が出土した。特に土師器甕はいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるタイプの甕片であった。図示した2点は須恵器甕の口縁部破片であ



第122図 F 23号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

る。1は頸部から口縁部にかけて「く」の字に屈曲するタイプの甕で、2は口縁部が大きく外反して伸びるタイプの甕である。

本跡も不確実であるが、これらの遺物から8～9世紀代の所産時期が考えられる。

(23) F 23号掘立柱建物跡

本跡は調査Ⅰ区南よりのV-セー17・18、V-ソー17、V-ター17・18Grに位置する。形態は2間×3間の側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はEを示す。規模は桁行長6.35m・梁間長4.24m、桁行柱間は1.84～2.50m、梁間柱間1.95～2.30mを測る。ピット間に囲まれた面積は推定で27.46㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径0.61m・深さ0.28m、P2が径0.56m・深さ0.47m、P3が径0.58m・深さ0.38m、P4が径0.79m・深さ0.27m、P5が径0.74m・深さ0.31m、P6が径0.67m・深さ0.24m、P7が径0.74m・深さ0.31mを測る。

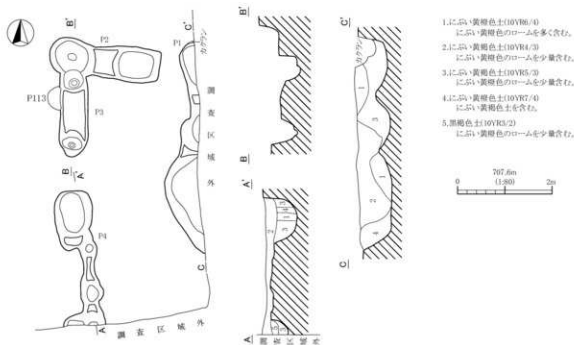
本跡からの出土遺物は図示した物の外に、各ピットより須恵器蓋片、土師器坏・甕片が出土した。1は須恵器有台坏の底部破片である。底部は回転ヘラ切りの後、高台を貼付している。

本跡からの出土遺物は少なく、所産時期は不明である。

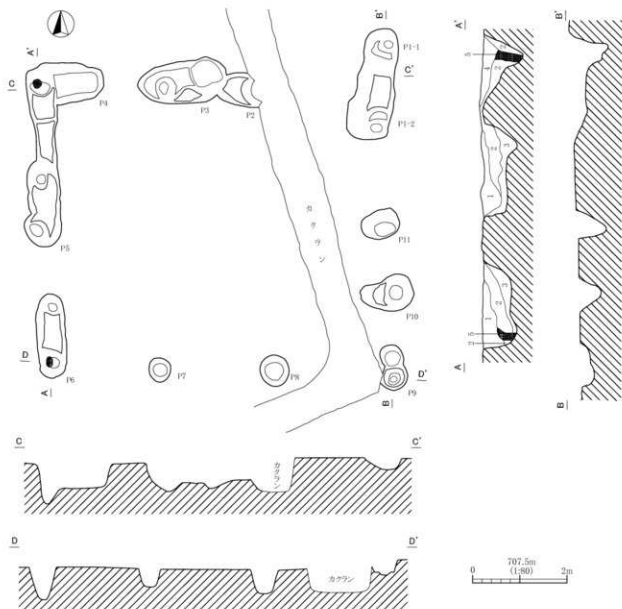
(24) F 24号掘立柱建物跡

本跡は調査Ⅰ区東よりのV-エー20、V-オー20、Ⅷ-エー1、Ⅷ-オー1・2Grに位置する。東側が調査区域外となるため全容は不明である。形態は2間×3間以上の一部溝持ち側柱式掘立柱建物跡と考えられる。軸方位はNを示す。規模は検出桁行長5.68m・検出梁間長2.50m、桁行柱間は1.50～2.30m、梁間柱間1.22mを測る。ピット間に囲まれた面積は検出部分で14.61㎡を測る。柱穴の形態は円形か楕円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものがあつた。ピットの規模は、P1が径4.52m・深さ0.67m、P2が径2.34m・深さ0.41m、P3が径1.95m・深さ0.91m、P4が径1.28m・深さ0.73mを測る。

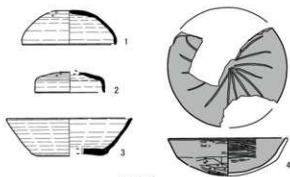
本跡からの出土遺物はピットより出土したがいずれも小片で図示可能なものはなかった。出土した



第123図 F 24号掘立柱建物跡実測図



1. 土に黄褐色土(10YR5/3)に黄褐色土・灰砂粒子多く含む。
2. 土に黄褐色土(10YR4/3)に黄褐色土を含む。
3. 土に黄褐色土(10YR7/4)に黄褐色ローム主体、に黄褐色土を含む。
4. 灰白色土(10YR7/1)砂利主体、に黄褐色ロームを含む。
5. 黒褐色土(10YR3/2)程度。



1~4(1:4)

第124図 F25号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

土器片は、須恵器環・蓋・甕片、土師器環・甕片であった。特に土師器甕はいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるタイプの甕であった。

本跡からの出土遺物は非常に少なく所産時期は確定できないが、土器片から8～9世紀代の時期が推定可能かもしれない。

(25) F 25号掘立柱建物跡

本跡は調査I区中央のV-ケー16～18、V-ケー17・18、V-コー17・18Grに位置する。形態は3間×4間の一部溝持ちの側柱式掘立柱建物跡である。軸方位はN-88°-Eを示す。規模は桁行長7.45m・梁間長7.10m、桁行柱間は2.20～4.84m、梁間柱間1.38～2.13mを測る。ピット間に囲まれた面積は45.38㎡を測る。柱穴の形態は円形と楕円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものがある。ピットの規模は、P1-1が径1.02m・深さ0.73m、P1-2が径0.92m・深さ0.56m、P2・3が残存径2.40m・深さ0.65m、P4が径1.62m・深さ0.82m、P5が径1.90m・深さ0.85m、P6が径1.79m・深さ0.70m、P7が径0.53m・深さ0.41m、P8が径0.72m・深さ0.49m、P9が径0.97m・深さ0.30m、P10が径1.10m・深さ0.48m、P11が径0.80m・深さ0.63mを測る。

本跡からの出土遺物は図示した物の外に、各ピットより須恵器蓋・環・甕片、土師器環・甕片が出土した。1は須恵器環蓋である。天井部はヘラケズリが施される。2は須恵器蓋であり、天井部を欠損する。形態から壺蓋の可能性がある。3は須恵器環である。底部は回転糸切りである。4は土師器環であり、内外面に黒色処理が施されている。内面見込み部に放射状の暗文がある。

本跡からの出土遺物は時期幅が大きく、遺構の所産時期を決定するには不確定要素が大きい。

(26) F 26号掘立柱建物跡

本跡は調査I区中央のV-ソー12・13、V-ター12・13Grに位置する。形態は変則的な一部溝持ちの側柱式掘立柱建物跡と考えられる。南側の柱列が住居跡により上部を削平され全容を把握しきれなかった。軸方位はN-78°-Eを示す。規模は桁行長3.28m・梁間長2.98m、梁間柱間1.25～1.68mを測る。ピット間に囲まれた面積は9.23㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径4.44m・深さ0.97m、P2が径0.58m・残存深さ0.16m、P3が径0.56m・深さ0.69m、P4が径0.64m・深さ0.79mを測る。

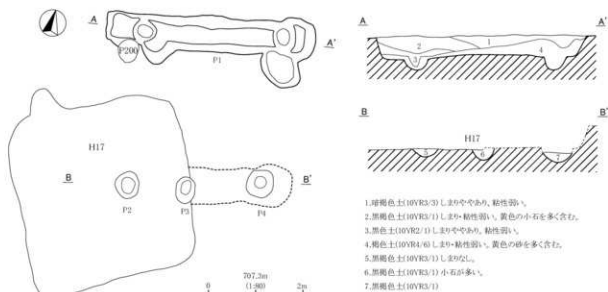
本跡からの出土遺物は各ピットより須恵器甕片、土師器環・甕片が出土したが図示可能なものはなかった。本跡の所産時期は不明である。

(27) F 27号掘立柱建物跡

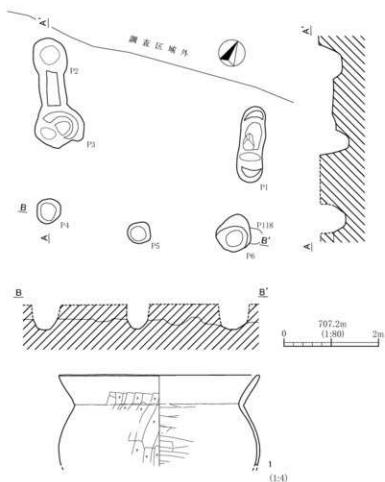
本跡は調査I区北よりのV-テー8・9、V-トー8・9Grに位置する。形態は2間×3間以上の一部溝持ちの側柱式掘立柱建物跡と考えられる。北側が調査区域外となり全容は不明である。軸方位はN-21°-Wを示す。規模は検出桁行長3.34m・梁間長4.02m、桁行柱間は1.66～1.68m、梁間柱間2.00～2.04mを測る。ピット間に囲まれた面積は検出部分で15.05㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径1.61m・深さ0.73m、P2が径0.79m・深さ0.50m、P3が径1.04m・深さ0.62m、P4が径0.54m・深さ0.57m、P5が径0.49m・深さ0.57m、P6が径0.80m・深さ0.63mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットより土師器環・甕片が出土した。特に土師器甕はいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるタイプのものである。1の図示した土師器甕も「武蔵型甕」のタイプの一つと考えられ、頸部が「コ」の字状に変化する前段階のものか。

本跡の所産時期は、出土遺物が非常に少なく不明である。



第125図 F26号掘立柱建物跡実測図



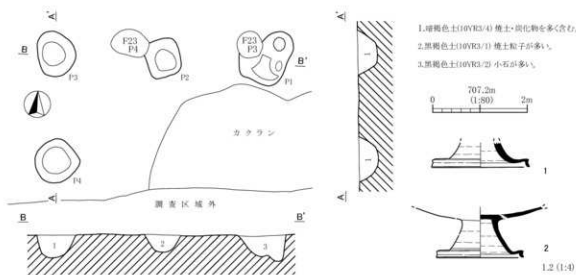
第126図 F27号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図

(28) F 28号掘立柱建物跡

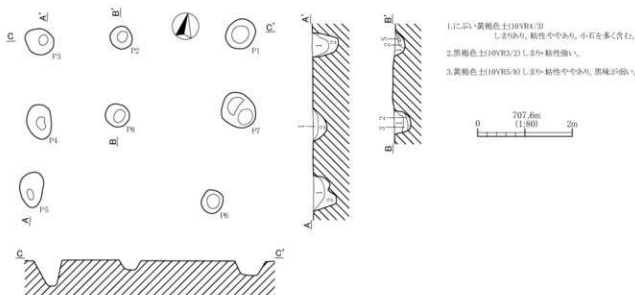
本跡は調査Ⅰ区南よりのVゾーン17、Vター17・18Grに位置する。形態は2間×2間以上の側柱式掘立柱建物跡と考えられる。南側が調査区域外となり全容は不明である。軸方位はN-4°-Wを示す。規模は検出桁行長2.28m・梁間長4.77m、梁間柱間2.38~2.39mを測る。ピット間に囲まれた面積は検出部分で13.31㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径1.22m・深さ0.48m、P2が径0.79m・深さ0.39m、P3が径0.97m・深さ0.48m、P4が径0.91m・深さ0.42mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットよりあり、須恵器の破片が多かった。種別は蓋・坏・甕片があった。図示した1と2は須恵器高坏と捉えられる破片である。2点とも同タイプのもので、脚端部が蓋状に屈曲する特徴を持つ。

本跡の帰属時期は不確定であるが、須恵器の出土量が多く、土師器甕の「武蔵型甕」片も出土していることから8~9世紀代の範疇で捉えられる可能性がある。



第127図 F 28号掘立柱建物跡及び出土遺物実測図



第128図 F 29号掘立柱建物跡実測図

(29) F 29号掘立柱建物跡

本跡は調査IV区中央のV-シー3・4、V-スー3・4Grに位置する。形態は2間×2間の一部総柱式掘立柱建物跡と考えられる。軸方位はN-81°-Eを示す。規模は検出桁行長4.18m・梁間長3.55m、桁行柱間は1.65~2.52m、梁間柱間1.52~1.80mを測る。ピット間に囲まれた面積は14.10㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径0.67m・深さ0.29m、P2が径0.48m・深さ0.25m、P3が径0.62m・深さ0.54m、P4が径0.74m・深さ0.29m、P5が径0.75m・深さ0.48m、P6が径0.50m・深さ0.27m、P7が径0.79m・深さ0.44m、P8が径0.51m・深さ0.37mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットよりあった。種別は須恵器環・裏片、土師器環・裏片、弥生時代後期の壺・鉢片等があった。土師器裏片にはいわゆる「武蔵型裏」片が含まれていた。

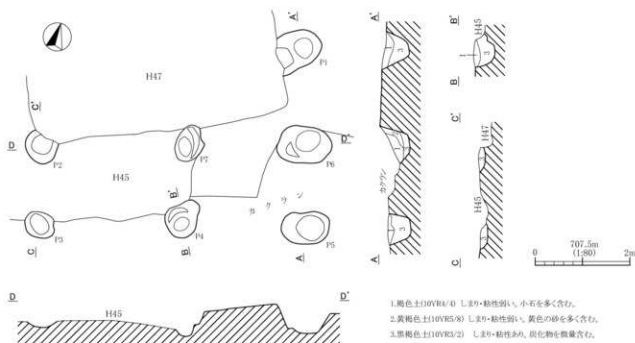
本跡の所産時期は、出土遺物が非常に少なく、不明である。

(30) F 30号掘立柱建物跡

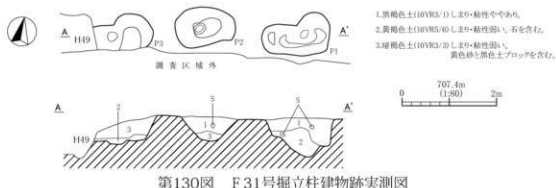
本跡は調査IV区中央のV-ソー4・5、V-ター5Grに位置する。形態は2間×2間の総柱式掘立柱建物跡と考えられる。軸方位はN-77°-Eを示す。規模は検出桁行長5.75m・梁間長3.79m、桁行柱間は2.73~3.00m、梁間柱間1.85~1.95mを測る。ピット間に囲まれた面積は推定で21.33㎡を測る。柱穴の形態は円形及び楕円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が短径0.79m・深さ0.56m、P2が短径0.68m・深さ0.15m、P3が径0.67m・深さ0.20m、P4が径0.84m・深さ0.49m、P5が径1.03m・深さ0.51m、P6が径1.17m・深さ0.63m、P7が径0.80m・深さ0.50mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットよりあった。種別は土師器裏片、弥生時代後期の壺・甕・高環・鉢片等があった。図示できるものはなかった。

本跡の所産時期は出土遺物が非常に少なく不明であるが、弥生時代後期のいわゆる箱清水式土器の破片が多く出土する事が特徴である。



第129図 F 30号掘立柱建物跡実測図



(31) F31号掘立柱建物跡

本跡は調査IV区西よりのV-ーチー6、V-ーツー6Grに位置する。形態は側柱式掘立柱建物跡と考えられるが、南側が調査区域外となるため全容は不明である。軸方位はN-81°-Eを示す。規模はP1-P3間長4.09m、P1-P2間長2.23m、P2-P3間長1.87mを測る。柱穴の形態は楕円形を基調とする。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。ピットの規模は、P1が径1.43m・深さ0.79m、P2が径1.28m・深さ0.62m、P3が検出径1.25m・深さ0.59mを測る。

本跡からの出土遺物は各ピットよりあった。種別は須恵器坏片、土師器坏・甕片、弥生時代後期張・鉢片等があった。図示できるものはなかった。

本跡の所産時期は出土遺物が非常に少なく不明である。

第3節 土坑

(1) D1号土坑

本跡は調査I区中央のV-サー・シー8・9Grに位置する。形態は一部変形しているが円形である。長軸方位はN-68°-Wを示す。規模は長軸長2.14m・短軸長2.08m、深さ0.42mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。

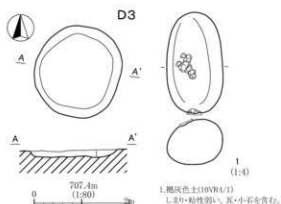
本跡からの出土遺物は6点を図示した。1と2は燈明受け皿である。どちらも鉄軸が施されている。3は薄手の陶器甕である。鉄軸が施されている。4と5は土鍋の口縁部破片である。5は外面にケズリが施されている。6は鉄製品で角釘と考えられるが確証を得ない。

本跡はこれらの出土遺物から近世の所産時期が考えられる。





1. 褐色土(10YR5/1) しまり・粘性弱い、
小石を含む。黄色の砂を含む。



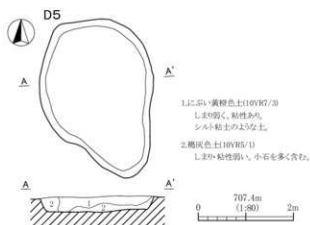
1. 褐色土(10YR6/1)
しまり・粘性弱い、小石を含む。



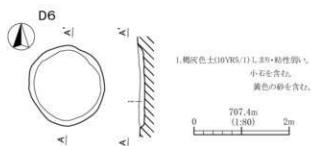
1. 褐色土(10YR5/1)
しまり・粘性弱い、小石を含む。



1. 褐色土(10YR5/1)
しまり・粘性弱い、小石を含む。
2. 黄褐色土(10YR5/6)
しまり・粘性弱い、黄色の砂。
3. 黒褐色土(10YR3/1)
しまり・粘性ややあり。



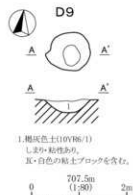
1. 灰に富み黄褐色土(10YR7/3)
しまり弱く、粘性あり、
シルト粘土のような土。
2. 褐色土(10YR5/1)
しまり・粘性弱い、小石を多く含む。



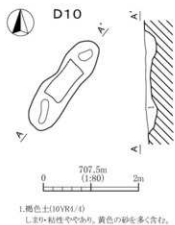
1. 褐色土(10YR5/1) しまり・粘性弱い、
小石を含む。
黄色の砂を含む。



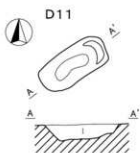
1. 褐色土(10YR5/1)
しまり・粘性弱い、小石を含む。



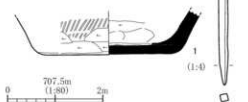
1. 褐色土(10YR6/1)
しまり・粘性あり、
灰・白色の粘土ブロックを含む。



1. 褐色土(10YR1/0)
しまり・粘性ややあり、黄色の砂を多く含む。



1. 黄褐色土(10YR2/3) しまりあり、粘性弱い。
小石と炭化物を微量に含む。



2
(1:2)

第132図 D2～11号土坑及び出土遺物実測図

(2) D2号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-スー12・13Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-72°-Wを示す。規模は長軸長1.64m・短軸長1.40m、深さ0.14mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。土坑底面はほぼ平坦であった。

本跡からの出土遺物は須恵器坏片、土師器坏・甕片、弥生時代後期高坏片があったがいずれも小片で図示できなかった。本跡は出土遺物が少なく所産時期は不明である。

(3) D3号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-シー12・13Grに位置する。形態は円形である。長軸方位はN-9°-Wを示す。規模は長軸長1.94m・短軸長1.86m、深さ0.26mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。

本跡からの出土遺物は瓦片、須恵器坏・甕片、土師器坏・甕片、弥生時代後期の壺片が出土したが、いずれも図示可能なものはなく、蔽石1点を図示した。本跡は瓦片等が出土することから近世以降の所産時期が考えられる。

(4) D4号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-サ・シー12・13Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-68°-Eを示す。規模は長軸長2.74m・短軸長1.52m、深さ0.21mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。壁は緩やかに立ち上がる。

本跡からの遺物は須恵器坏片、土師器坏・甕片が出土したが、いずれも小片であり図示できなかった。本跡は出土遺物が少なく所産時期は不明である。

(5) D5号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-セー12・13Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-26°-Wを示す。規模は長軸長3.52m・短軸長2.46m、深さ0.32mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。

本跡からの遺物は須恵器坏・甕片、土師器坏・甕片が出土したが、いずれも小片であり図示できなかった。また、これら遺物は摩耗したものが多かった。本跡は出土遺物が少なく所産時期は不明であるが、覆土に粘土質のシルト層があることや摩耗した土器片が多いことから、近世以降の所産時期が考えられる。

(6) D6号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-スー12・13Grに位置する。形態は円形である。長軸方位はN-5°-Wを示す。規模は長軸長1.68m・短軸長1.58m、深さ0.15mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。

本跡からの遺物は土師器甕片が出土したが、いずれも小片であり図示できなかった。本跡は出土遺物が少なく所産時期は不明である。

(7) D7号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-スー9Grに位置する。形態は楕円形である。長軸方位はN-85°-Eを示す。規模は長軸長0.88m・短軸長0.71m、深さ0.15mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。

本跡からの遺物はなく、所産時期も不明である。

(8) D8号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-スー9Grに位置する。形態は楕円形である。長軸方位はN-12°-Wを示す。規模は長軸長1.05m・短軸長0.76m、深さ0.15mを測る。土坑底面は北側が一段低くなっていた。

本跡からの遺物はなく、所産時期も不明である。

(9) D9号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-シー8Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-82°-Eを示す。規模は長軸長0.92m・短軸長0.80m、深さ0.28mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

本跡からの出土遺物は土師器杯・甕片があったが小片で図示できなかった。本跡は出土遺物が少なく所産時期は不明である。

(10) D10号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-サー10・11、V-シー11Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-37°-Eを示す。規模は長軸長2.16m・短軸長0.60m、深さ0.32mを測る。土坑底面は両端が一段低くなり、溝持ちの掘立柱建物跡ピットのような形態であった。

本跡からの出土遺物は須恵器蓋・杯・甕片、土師器甕片が出土したが、いずれも図示可能なものなかった。本跡は出土遺物が少なく所産時期は不明である。

(11) D11号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-サー11Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-55°-Eを示す。規模は長軸長1.52m・短軸長0.72m、深さ0.35mを測る。土坑底面は北側が一段高くなっている。壁は緩やかに立ち上がる。

本跡からの遺物は2点を図示した。1は須恵器甕底部である。外面に敲き痕が残る。2は鉄製品の釘と考えられる。本跡からの出土遺物はこのほかに土師器甕のいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれる土器片が多く出土している。このことから本跡の所産時期は古代と考えられる。

(12) D12号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-サー11Grに位置する。形態は楕円形である。長軸方位はN-88°-Eを示す。規模は長軸長0.96m・短軸長0.54m、深さ0.17mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。

本跡からの出土遺物はなく所産時期も不明である。

(13) D13号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-サー9Grに位置する。形態は方形である。長軸方位はNを示す。規模は長軸長1.12m・短軸長0.84m、深さ0.44mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。

本跡からの遺物は須恵器蓋・杯・甕片、内面黒色処理された土師器杯片が出土したが、いずれも小片であり図示できなかった。本跡は出土遺物が少なく所産時期は不明である。

(14) D14号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-シー12Grに位置する。形態は円形である。長軸方位はN-42°-Wを示す。規模は長軸長2.60m・短軸長2.36m、深さ0.40mを測る。土坑底面は播鉢状に深くなっていた。

本跡からの出土遺物は図示した鉄軸の播鉢と18世紀後半と考えられる染付碗が出土している。これら遺物から本跡は近世の所産と考えられる。

(15) D18号土坑

本跡は調査Ⅰ区東よりのV-カー14Grに位置する。形態は楕円形である。北側が調査区域外となる。長軸方位はN-77°-Eを示す。規模は長軸長1.28m・検出短軸長0.42m、深さ0.39mを測る。土坑底面は平坦であったが、大型の礫が土坑内に詰まっていた。本跡は後述するD19とともに検出位置から藤ヶ城跡南門の礎石の可能性がある。

本跡からの出土遺物は図示した灯明皿と鑑戸鍋片があった。



第133図 D12～14・18～25号土坑及び出土遺物実測図

(16) D19号土坑

本跡は調査Ⅰ区東よりのV-オ・カー13・14Grに位置する。形態は不整形である。北側が調査区域外となる。長軸方位はN-86°-Wを示す。規模は長軸長1.44m・検出短軸長0.88m、深さ0.58mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。また、D18号土坑と同じく、土坑内から大型の礫が数多く出土した。本跡からの出土遺物はなかったが、先にも述べた通りD18号とD19号の両土坑は、検出位置が藤ヶ城跡の南門の位置に対応することから、門礎石穴の可能性はある。

(17) D20号土坑

本跡は調査Ⅰ区東よりのV-サー8・9Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-5°-Wを示す。規模は長軸長1.92m・検出短軸長0.77m、深さ0.54mを測る。土坑底面は平坦であった。本跡からの出土遺物は瓦片があったが、いずれも図示可能なものはなかった。本跡は出土遺物が少なく所産時期が不確実であるが、近世の遺構と考えられる。

(18) D21号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-シー9Grに位置する。形態は長方形と考えられるが南側がH3号住居跡により削平されている為、確証を得ない。長軸方位はN-80°-Eを示す。規模は長軸長1.47m・残存短軸長0.43m、深さ0.26mを測る。土坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。本跡からの出土遺物は須恵器高坏・甕片、土師器甕片が出土した。いずれも小片で図示できなかったが、土師器甕はいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるものであった。本跡の所産時期は不明である。

(19) D22号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-セー13Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-38°-Eを示す。規模は長軸長1.37m・短軸長0.88m、深さ0.30mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。本跡からの出土遺物は須恵器蓋・甕片、土師器坏・甕片が出土した。いずれも小片で図示できなかった。本跡の所産時期は不明である。

(20) D23号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-シー10・11Grに位置する。形態は楕円形である。長軸方位はN-8°-Wを示す。規模は長軸長1.84m・短軸長1.23m、深さ0.51mを測る。土坑底面は播鉢状を呈する。本跡からの出土遺物はなく、所産時期は不明である。

(21) D24号土坑

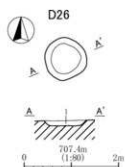
本跡は調査Ⅰ区中央のV-シー14Grに位置する。形態は円形である。長軸方位はN-77°-Eを示す。規模は長軸長1.23m・短軸長1.04m、深さ0.27mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。本跡からの出土遺物はなく、所産時期は不明である。

(22) D25号土坑

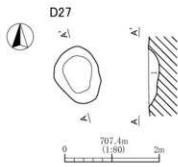
本跡は調査Ⅰ区中央のV-セー12Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-18°-Wを示す。規模は長軸長2.00m・短軸長0.74m、深さ0.22mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。本跡からの出土遺物はなく、所産時期は不明である。

(23) D26号土坑

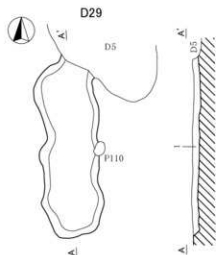
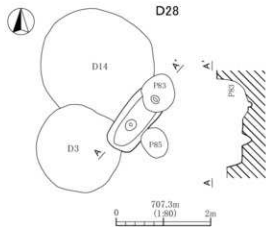
本跡は調査Ⅰ区中央のV-ター9Grに位置する。形態は円形である。長軸方位はNを示す。規模は長軸長0.90m・短軸長0.88m、深さ0.17mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。本跡からの出土遺物はなく、所産時期は不明である。



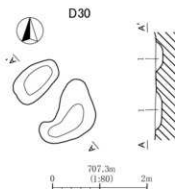
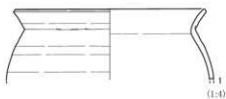
D26
1. 黒灰色土(10YR4/1)
しまり・粘性弱く、炭化物を含む。



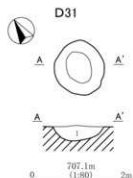
D27
1. 黒灰色土(10YR4/1)
しまり・粘性弱く、炭化物を含む。



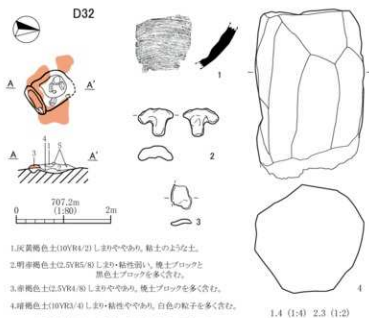
D29
1. 黒灰色土(10YR4/1) しまり・粘性弱く、小石・炭化物を含む。
瓦片を含む。



D30
1. 黒灰色土(10YR4/1)
しまり・粘性弱く、炭化物を含む。
瓦を含む。



D31
1. 1. 灰・黄褐色土(10YR4/3)
しまり・粘性強い、小石を多く含む。



D32
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりややあり、粘土のような土。
2. 明赤褐色土(2.5YR5/3) しまり・粘性強い、焼土ブロックと
黒色土ブロックを多く含む。
3. 赤褐色土(5YR4/6) しまりややあり、焼土ブロックを多く含む。
4. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性ややあり、白色の粒子を多く含む。

1.4 (1:4) 2.3 (1:2)

第134図 D26～32号土坑及び出土遺物実測図

(24) D27号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-ソー11Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-17°-Wを示す。規模は長軸長1.20m・短軸長0.96m、深さ0.22mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

本跡からの出土遺物は須恵器環・甕片、土師器環・甕片があったが、いずれも小片で図示できなかった。本跡の帰属時期は不明である。

(25) D28号土坑

本跡は調査Ⅰ区西よりのV-シー12Grに位置する。形態は長方形である。長軸方位はN-40°-Eを示す。規模は残存長軸長1.08m・短軸長0.66m、深さ0.77mを測る。土坑底面は平坦であったが、ビット状の掘り込みを二か所確認した。掘り込みの深さは0.11~0.18mを測る。

本跡からの出土遺物はなく、帰属時期は不明であるが、土坑の形態からいわゆる「落とし穴」としての使用が考えられる。

(26) D29号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-セ・ソー13Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-5°-Wを示す。規模は長軸長3.76m・短軸長1.04m、深さ0.20mを測る。土坑底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

本跡からの出土遺物は須恵器環・甕片、土師器環・甕片が出土した。土師器甕1点を図示した。いわゆるロクロ甕と呼ばれるものであり、二次焼成を受けているのか灰色化していた。本跡の所産時期は不明である。

(27) D30号土坑

本跡は調査Ⅰ区中央のV-セ・ソー14Grに位置する。形態は不整形である。本跡は二つに分かれているが、遺構確認の関係で二つに分かれてしまったと判断し、同一遺構として報告する。長軸方位はN-51°-Eを示す。規模は北側長軸長1.04m・短軸長0.64m、深さ0.20m、南側長軸長1.32m・短軸長0.76m、深さ0.15mを測る。土坑底面は播鉢状を呈する。

本跡からの出土遺物はなく、所産時期も不明である。

(28) D31号土坑

本跡は調査Ⅰ区西よりのV-タ・チー13Grに位置する。形態は円形である。規模は長軸長1.13m・短軸長1.04m、深さ0.37mを測る。土坑底面は播鉢状を呈する。

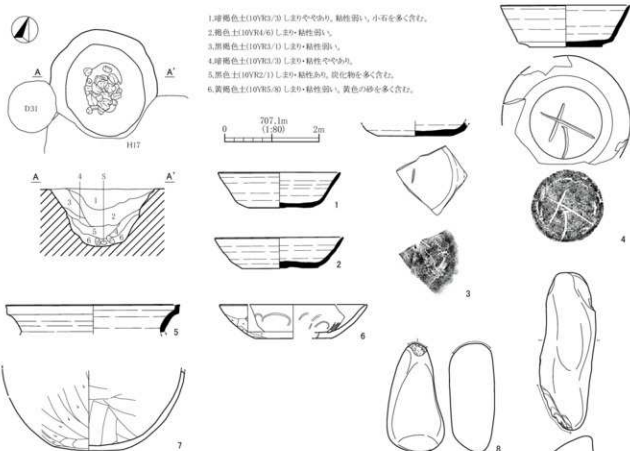
本跡からの出土遺物は土師器甕片が出土したが、小片のため図示できなかった。所産時期は不明である。

(29) D32号土坑

本跡は調査Ⅰ区西よりのV-テ・トー15Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-33°-Wを示す。規模は長軸長1.00m・短軸長0.70m、深さ0.14mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。本跡は遺構確認時に掘り込み面上部に大量の焼土が広がり、被熱した拳大の礫も散在した状態で出土した。

本跡からの出土遺物は4点を図示した。1は須恵器甕の破片と考えられる。胎土が一般的に出土する須恵器に比べ白色である。また、外面の調整痕が細かな「ハケ目」状で特異である。2と3は銅製品と考えられるが種別は不明である。4は面取り加工された軽石の石製品で、形状はいわゆるカマドの「支脚石」状を呈し、比熱の痕跡はない。また、炭化したモモの種1点が出土している。

本跡の所産時期は出土遺物が少なく不明であるが、検出時の状況や周辺の遺構から折りたたんだ銅製品の出土などから小鋸治的な遺構とも考えられる。



第135図 D34号土坑及び出土遺物実測図

1~9 (1:4)

(30) D34号土坑

本跡は調査Ⅰ区西よりのV-ター12・13Grに位置する。形態は円形である。長軸方位はN-15°-Wを示す。規模は残存長軸長2.28m・残存短軸長2.16m、深さ1.51mを測る。土坑底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。本跡の底面付近からは炭化物を多く含む層が確認され、その層下からは拳大の自然礫がまとめて検出された。

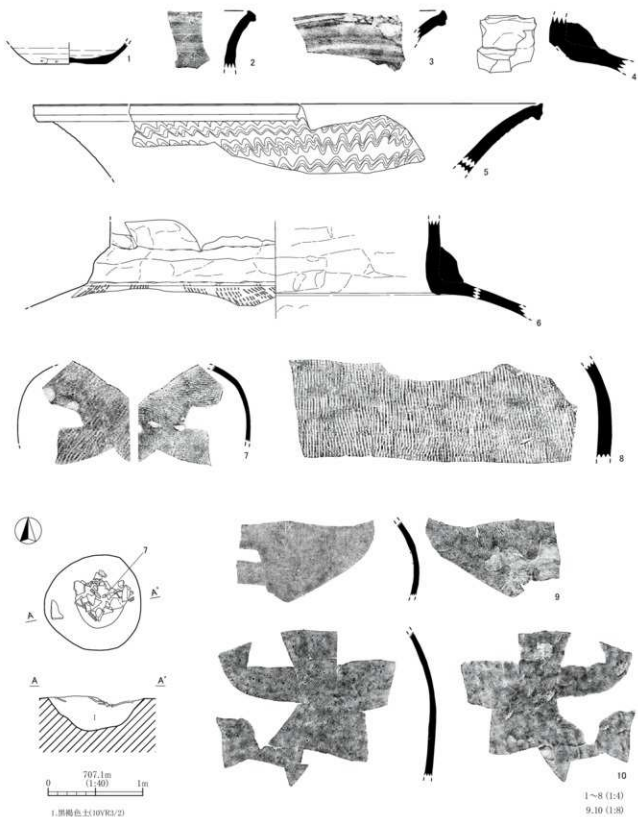
本跡からの出土遺物は比較的多く、9点を図示した。1~4は須恵器環である。1と2は底部回転ヘラ切りである。3と4は底部に焼成前のヘラ記号が確認できる。特に4は「才」或いは「オ」と判読できる。5は須恵器甕であり、口縁部の破片である。6は土師器環で、内面が磨れて全容は把握できないが、螺旋状の暗文が施されている。7は土師器甕の胴部下半で、ヘラケズリを施している。8と9は敲石で、いずれも長辺先端の一角所に敲き痕が確認できる。

本跡の所産時期はこれらの出土遺物から8世紀後半代が考えられる。

(31) D35号土坑

本跡は調査Ⅰ区西よりのV-ター15Grに位置する。形態は円形である。長軸方位はNを示す。規模は長軸長1.00m・深さ0.34mを測る。土坑底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。本跡は覆土上層から須恵器甕がまとめて出土した。

本跡からの出土遺物は比較的多く、10点を図示した。1は須恵器環であり、底部回転ヘラ切りである。2~10は須恵器甕であり、口縁部、頸部、胸部の破片である。この内4と6は頸部に補強帯が付けられたような形状である。類例としては佐久市田口中原2号墳、上田市陣馬塚古墳等があり、群馬県から埼玉県北西部に濃厚な分布を見せる須恵器として理解されている。



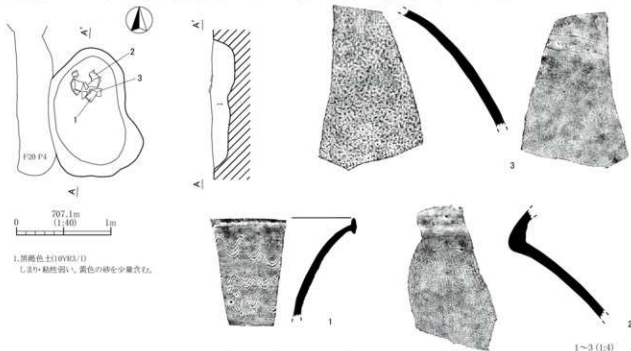
第136図 D35号土坑及び出土遺物実測図

これらの遺物から本跡は古墳時代後期の所産時期が考えられる。

(32) D36号土坑

本跡は調査Ⅰ区西よりのV-ター-15Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はNを示す。規模は長軸長1.35m・残存短軸長0.74m、深さ0.26mを測る。土坑底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

本跡からの出土遺物は覆土上層から比較的多く、3点を図示した。1～3はいずれも須恵器甕である。同一個体の可能性がある。1は口縁部で3段の櫛描波状文が施されている。3は胴部外面に自然釉が付着している。本跡の所産時期はこれらの出土遺物から古代と考えられる。



第137図 D36号土坑及び出土遺物実測図

(33) D38号土坑

本跡は調査Ⅳ区中央のV-ス-セ-4Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はNを示す。規模は長軸長1.48m・短軸長1.13m、深さ0.71mを測る。土坑底面は南側が一段深く掘り込まれており、テラス部分は深さ0.28mを測る。

本跡からの出土遺物は須恵器環・甕片、土師器環・甕片が出土したがいずれも小片で図示できなかった。なお、土師器甕はいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるタイプのものであった。本跡の所産時期は不明である。

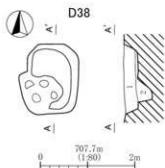
(34) D39号土坑

本跡は調査Ⅳ区中央のV-セ-4Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はEを示す。規模は長軸長1.64m・残存短軸長1.04m、深さ0.18mを測る。土坑底面は東側が徐々に深くなる形状であった。

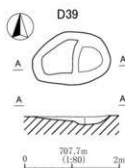
本跡からの出土遺物は内面黒色処理された土師器環が出土したが小片で図示できなかった。本跡の所産時期は不明である。

(35) D40号土坑

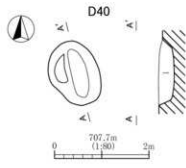
本跡は調査Ⅳ区中央のV-セ-5Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-13°-Wを示す。規模は長軸長1.40m・短軸長1.04m、深さ0.37mを測る。土坑底面は平坦であった。本跡からの出土遺物はなく、所産時期も不明である。



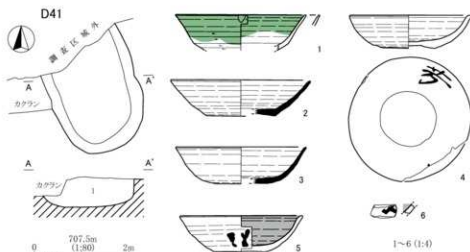
1. 黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性ややあり、小石を多く含む。
 2. にじみ・黄褐色土(10YR4/3)しまり・粘性弱い、黄色の砂を多く含む。



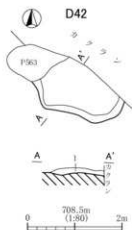
1. 褐色土(10YR4/4)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。



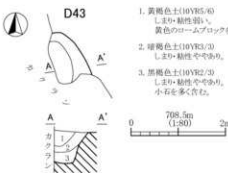
1. 黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり、小石を多く含む。



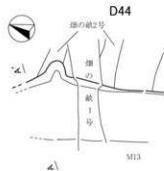
1. 黒色土(10YR2/1)しまり強く、粘性ややあり、小石を多く含む。



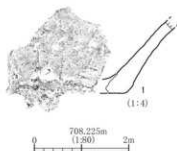
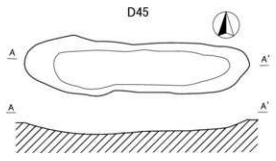
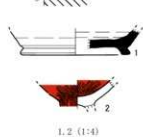
1. 褐色土(10YR4/4)しまり・粘性ややあり、黄色のローム砂子を含む。



1. 黄褐色土(10YR5/4)しまり・粘性弱い、黄色のロームブロックを含む。
 2. 暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性ややあり。
 3. 黒褐色土(10YR2/3)しまり・粘性ややあり、小石を多く含む。



1. 黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性弱い、白色砂子を多く含む。
 2. 褐色土(10YR4/4)しまり・粘性あり、粘土を多く含む。



第138図 D38～45号土坑及び出土遺物実測図

(36) D41号土坑

本跡は調査IV区西よりVーツ・テ-4・5Grに位置する。形態は楕円形と考えられる。長軸方位はN-19°-Wを示す。規模は検出長軸長2.24m・短軸長1.90m、深さ0.55mを測る。土坑底面は平坦であった。

本跡からの遺物は覆土から比較的多く出土した。6点を図示した。1は灰釉陶器碗で、底部を欠損する。釉葉はつけ掛けで、口唇部に輪花が確認できる。2と3は須恵器環である。いずれも底部回転系切りである。5～6は土師器環である。いずれも墨書或いは墨痕が確認できる。4は「芳」か。5は内面黒色処理が施されている。

本跡の所産時期はこれらの出土遺物から9世紀代の範疇で捉えられると考える。

(37) D42号土坑

本跡は調査V区北側のIーツ・テ-11・12Grに位置する。形態は不整形である。長軸方位はN-60°-Wを示す。規模は残存長軸長1.72m・残存短軸長1.22m、深さ0.11mを測る。土坑底面は平坦であった。

本跡からの出土遺物は須恵器甕片、土師器甕片があったがいずれも小片であり図示できなかった。本跡の所産時期は不明である。

(38) D43号土坑

本跡は調査V区北側のIータ・チ-15・16Grに位置する。形態は不明である。長軸方位はN-30°-Wを示す。規模は残存長軸長0.98m・残存短軸長0.64m、深さ0.68mを測る。土坑底面は平坦であった。

本跡からの出土遺物は2点を図示した。1は須恵器壺の底部であり、内外面に自然釉の付着が見られた。2は弥生土器の高環脚部の破片である。内外面に赤彩が施されている。本跡からの出土遺物は少なく、所産時期は不明である。

(39) D44号土坑

本跡は調査V区北側のIート-11、IIーア-11Grに位置する。形態は不明である。長軸方位はN-70°-Eを示す。規模は残存長軸長1.67m、深さ0.23mを測る。土坑底面は平坦であった。本跡は形状より住居跡の一部とも考えられたが、残存部分が少なく確証を得なかった。

本跡からの出土遺物は土師器甕片、弥生土器壺片があったがいずれも小片で図示できなかった。よって所産時期は不明である。

(40) D45号土坑

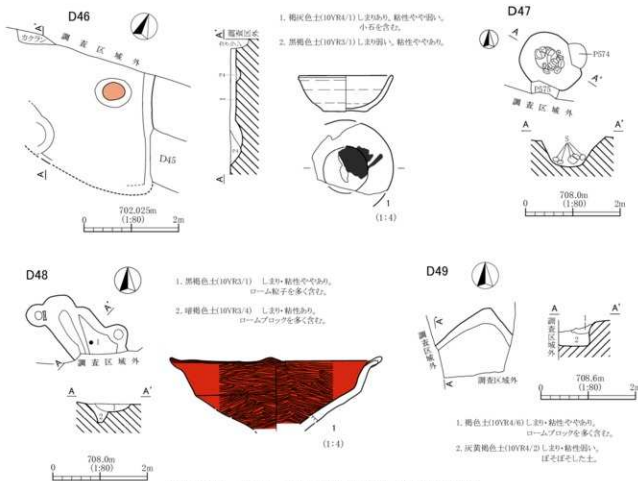
本跡は調査V区南側のIVーカ・キ-14・15Grに位置する。形態は長い楕円形である。長軸方位はEを示す。規模は残存長軸長4.75m・短軸長1.01m、深さ0.30mを測る。土坑底面は播鉢状であった。また、本跡は覆土中に拳大の礫が詰まった状態で検出された。

本跡からの出土遺物はこね鉢1点を図示したが所産時期は不明である。

(41) D46号土坑

本跡は調査V区南側のIVーキ・ク-14・15Grに位置する。形態は不明である。規模は東側壁の検出長が2.28mを測る。土坑底面はほぼ平坦であった。また、壁際に焼土が入ったピットが検出された。ピットは径0.75m・深さ0.13mである。本跡は形状より住居の一部とも考えられたが、残存部分が少なく確証を得なかった。

本跡からの出土遺物は土師器環があり、1点を図示した。底部外面に墨痕が確認できる。



第139図 D46～49号土坑及び出土遺物実測図

(42) D47号土坑

本跡は調査V区南側のIV-キー16・17Grに位置する。形態は楕円形である。長軸方位はN-52°-Wを示す。規模は長軸長1.35m・短軸長1.12m、深さ0.62mを測る。土坑底面は播鉢状で、拳大から人頭大の自然礫が出土した。

本跡からの出土遺物は須恵器裏片、土師器裏片、弥生土器裏片があったがいずれも小片で図示できなかった。所産時期は不明である。

(43) D48号土坑

本跡は調査V区南側のIV-カー16・17Grに位置する。形態は不整形である。規模は検出長軸長1.46m、深さ0.44mを測る。土坑底面は西側が一段低くなる掘り方で、東側と西側にビット状の掘り込みを持つ。形状より風倒木とも考えられる。

本跡からは弥生土器の高坏部が出土した。丁寧なミガキと赤彩が施されている。後期の箱清水期と考えられる。

(44) D49号土坑

本跡は調査IV区北側のII-キー・クー10Grに位置する。形態は不明である。土坑底面はほぼ平坦であった。本跡は形状より住居跡の一部とも考えられたが、残存部分が少なく確認を得なかった。

本跡からの出土遺物はなく、所産時期も不明である。

本跡からの出土遺物は4点を図示した。いずれも覆土中からの出土である。1は土師器環と考えられる。形態的には特殊で底部外周が粘土帯を貼り付けたように比厚する。内面は黒色処理が施され、丁寧なミガキが施されている。特徴より古墳時代後期の所産と考えられるが確認を得ない。2は弥生土器壺である。頸部文様帯を除く外面と口縁部周辺の内部が赤彩されている。頸部の文様帯は上段に4連止めの櫛描波状文と櫛描横線文が施されている。3は弥生土器甕で、ほぼ全容が把握できる。口縁部から胴部下半まで櫛描波状文、頸部に3連止めの櫛描波状文が施され、口唇部に縄文か疑似縄文の施文が確認できる。胴部下半は丁寧なミガキが施されている。4も同じく弥生土器甕である。口唇部は折り返しがあり、櫛状の工具で施文が確認できる。口縁部は櫛描斜走文、頸部は櫛描横線文、胴部は櫛描斜走文の羽状構成が施されている。内面はミガキが施されている。

本跡はこれらの出土遺物から弥生時代後期、箱清水期の所産と考えられ、後述するⅣ区のM11号溝状遺構とつながり、形態や立地から「環濠」としての機能が考えられる遺構である。

(2) M2号溝状遺構

本跡は調査Ⅰ区西端のⅥーアー8～18、Ⅵーイー15～18Grに位置する。北側と南側が調査区域外となる為、全容は不明であるが南北方向に伸びる溝状遺構と考えられる。M7号溝状遺構よりは古い。形態は断面が逆台形状を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は検出部分の最大長39.80m、幅0.80～1.40m、深さは0.19～0.49mを測る。溝底面はほぼ平坦であった。溝の最下点は標高706.46mを示し、北端より南端が0.34m低かった。覆土の堆積は自然堆積を示していた。

本跡からの出土遺物は少なく、須恵器環・甕片、土師器環片等が出土したがいずれも小片であった。図示した1は鉄鎌の切先部と考えられる。よって本跡の所産時期は不明であるが、遺構の重複関係から古代の竅穴住居よりは新しく、中世のM7号溝状遺構よりは古い事が判っている。

(3) M3号溝状遺構

本跡は調査Ⅰ区中央のⅤーサー17・18Grに位置する。北側と南側がピットにより削平されている。形態は断面が「U」字状を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は残存部分の最大長4.24m、幅0.12～0.28m、深さは0.17～0.23mを測る。溝底面はほぼ平坦であった。北端より南端が0.16m低かった。覆土の堆積は自然堆積を示していた。

本跡からの出土遺物は土師器環・甕片があったがいずれも小片で図示できなかった。

(4) M4号溝状遺構

本跡は調査Ⅰ区中央のⅤーサー18、Ⅴーシー17・18Grに位置する。北側と南側がピットにより削平されている。形態は断面が「U」字状を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は残存部分の最大長5.28m、幅0.16～0.26m、深さは0.18～0.27mを測る。溝底面はほぼ平坦であった。南端より北端が0.06m低かった。覆土の堆積は自然堆積を示していた。

本跡からの出土遺物は須恵器甕片、土師器甕片があったがいずれも小片で図示できなかった。図示した1は鉄釘か鉄鎌柄の一部と考えられる。

(5) M5号溝状遺構

本跡は調査Ⅰ区中央のⅤーサー17・18Grに位置する。形態は断面が「U」字状を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は最大長2.96m、幅0.17～0.44m、深さは0.12～0.39mを測る。溝底面はほぼ平坦であった。東端より西端が0.27m低かった。覆土の堆積は自然堆積を示していた。

本跡からの出土遺物は須恵器壺片、土師器環・甕片があったがいずれも小片で図示できなかった。M3～5号溝状遺構は近接しており、形態もよく似ているが、その性格や所産時期はいずれも不明である。

(6) M6号溝状遺構

本跡は調査Ⅰ区南端のV-ス・セー20、Ⅷ-セー1・2Grに位置する。南側が調査区域外となる為、全容は不明であるが、南北方向に伸び北側で曲がる溝状遺構と考えられる。形態は断面が逆台形状を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は検出部分の最大長8.20m、幅0.80～1.36m、深さは0.31～0.55mを測る。溝底面はほぼ平坦であった。溝の最下点は標高706.36mを示し、北端より南端が0.06m低かった。覆土の堆積は自然堆積を示していた。

本跡からの出土遺物は3点を図示した。いずれも覆土中からの出土である。1は須恵器環である。2は土師器甕で口縁部から胴部上半のみ残存する。ヘラケズリが行われ、器厚がやや厚いタイプの甕である。3は瓦質の植木鉢である。底部の一部に水抜き穴が確認できる。

本跡は遺物が少なく所産時期の確定に苦慮するが、3の植木鉢の出土や、本遺構の下に存在するH35号住居跡との明確な覆土相違を考えると、近世所産と考えられる事も可能であろうか。

(7) M7号溝状遺構

本跡は調査Ⅰ区西端のⅥ-イ・ウ・エー14～18、Ⅵ-オー15～17Grに位置する。北側と南側が調査区域外となる為、全容は不明であるが、南北方向に伸びる溝状遺構と考えられる。形態は断面が「V」字状を呈する。壁は緩やかに立ち上がるが、溝底面近くでは急激に立ち上がる。規模は検出部分の最大長15.50m、幅10.6～12.8m、深さは3.93～4.22mを測る。溝底面はほぼ平坦であり、幅0.44mを測る。覆土の堆積は自然堆積を示し、最下層は砂層となっていた。また、本跡中層からは後述する火葬墓群が検出されている。

本跡からの出土遺物は13点を図示した。いずれも覆土中からの出土である。1は龍泉窯系青磁碗である。外面に蓮弁文、内面に描画文が施される。12世紀代と考えられる。2は中津川系山茶碗のこね鉢である。自然釉が付着している。13世紀後半と考えられる。3は古瀬戸折縁鉢で上層より出土している。13～14世紀代と考えられる。4～10はいわゆるカワラケである。10は煤が付着している。11は土師器甕か壺の胴部と考えられる。外面は丁寧なミガキが施されている。周辺部に立地する古墳時代の竪穴住居からの混入品と考えられる。12は滑石製の白玉で一部欠損している。13は石臼の一部で、中心の穴が一部残存している。

本跡はこれらの出土遺物と土鍋片が組成に加わらない事から中世前半に位置づけられると考える。

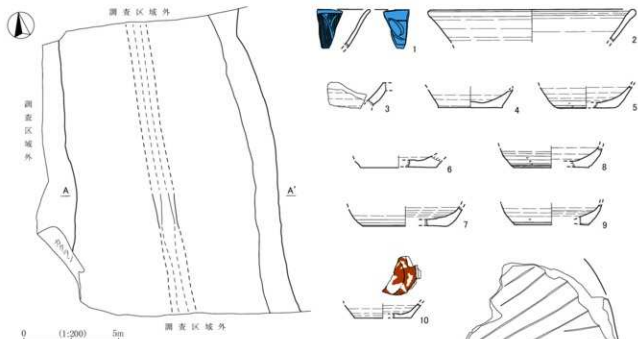
(8) M8号溝状遺構

本跡は調査Ⅰ区西よりのV-チー15・16、V-ツー16Grに位置する。形態は断面が「U」字状を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は検出最大長3.52m、幅0.20～0.85m、深さは0.14～0.22mを測る。溝底面はほぼ平坦であった。東端より西端が0.13m低かった。覆土の堆積は自然堆積を示していた。

本跡からの出土遺物はなかった。本跡は先に述べたM3～5号溝状遺構とピット間に検出される点等がよく似ている。しかし、その性格や所産時期はいずれも不明である。

(9) M9号溝状遺構

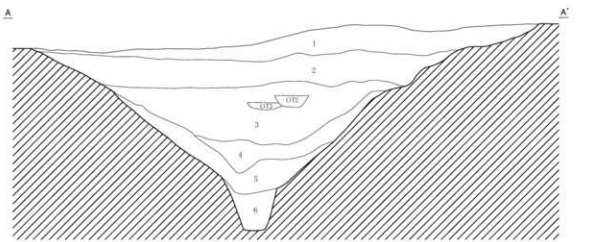
本跡は調査Ⅲ区のⅢ-カー10・11、Ⅲ-オーカー12～14、Ⅲ-エ・オ・カー15～17Grに位置する。南北と西側が調査区域外となる為、全容は不明であるが、南北方向に伸びる溝状遺構と考えられる。形態は断面が「V」字状を呈する。壁は緩やかに立ち上がるが、溝底面近くでは急激に立ち上がる。規模は検出部分の最大長29.20m、幅5.50～6.60m、推定幅は約10.00mを測る。深さは2.56～4.53mを測る。溝底面はほぼ平坦であり、底面幅は北側で0.60m、南側で0.34mを測る。覆土の堆積は自然堆積を示し、最下層は砂層となっていた。また、本跡中層からは後述する火葬墓群が検出されているほか、調査地点中央で西から伸びてくる上ノ城遺跡M1号堀跡を検出した。M1号堀跡が接する部分は本跡の深さと底面幅が変化し、北側は浅く、底面幅は広がる。



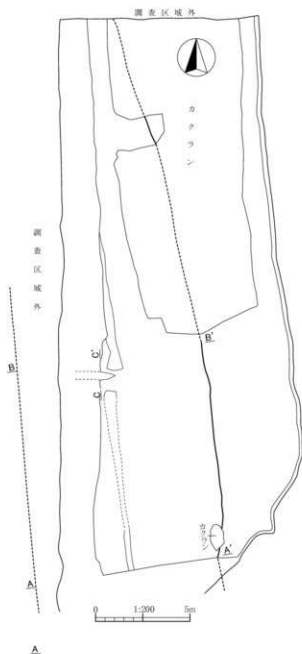
- 1.球褐色土(10YR3/0) L.2.9・粘性弱い。
- 2.球褐色土(10YR3/0) L.2.9・粘性ややあり、黄色の砂を含む。
- 3.球褐色土(10YR3/3) L.2.9・粘性弱い、小石を多く含む。
- 4.にじい・黄褐色土(10YR4/3) L.2.9・粘性弱い。
- 5.球褐色土(10YR3/3) L.2.9・粘性弱い、小石を多く含む。
- 6.灰黄褐色土(10YR6/2) L.2.9・粘性弱い、砂質。



1~11.13 (1:4)
12 (1:1)



第142図 M7号溝状遺構及び出土遺物実測図



C C'

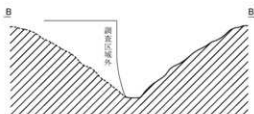
C-C' 土層説明

1. 灰黄褐色土(09YR5/2)しまり・粘性弱い。
2. 灰黄褐色土(09YR4/2)しまり・粘性弱い、砂を多く含む。
3. 褐色土(09YR3/4)しまり・粘性ややあり、上面に砂。
4. 褐色土(09YR4/4)しまり・粘性弱い、砂と黒色土ブロックの混合土。
5. 灰黄褐色土(09YR3/2)しまり・粘性弱い、砂層。

調査区域外



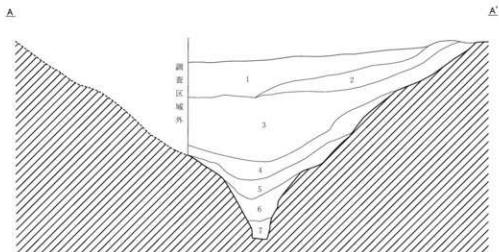
708.2m
(1:80) 2m



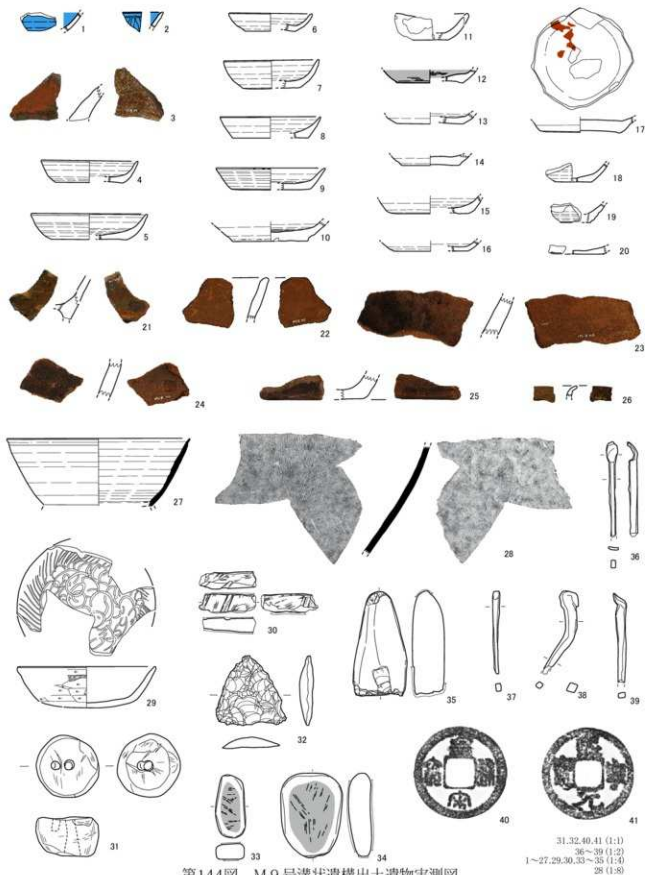
708.2m
(1:160) 4m

A-A' 土層説明

1. 潮灰色土(10YR4/1)しまり・粘性弱い。
2. にごい黄褐色土(10YR6/2)しまりややあり、小石を多く含む。
3. 褐色土(10YR3/4)しまり、粘性弱い、白色の粒子を多く含む。
4. 黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性ややあり、黒色土ブロックと軽石粒子を多く含む。
5. にごい黄褐色土(10YR6/2)しまり弱い、ローム土と黒色土ブロックを多く含む。
6. にごい黄褐色土(10YR6/2)しまり・粘性弱い、砂が交互に堆積している。
7. 灰白色土(10YR8/1)しまり・粘性弱い、砂と細かい炭を含む。



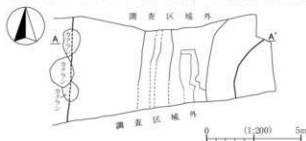
第143図 M9号溝状遺構実測図



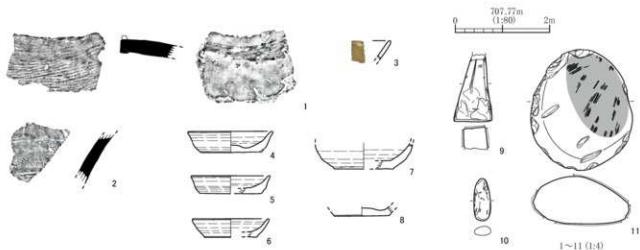
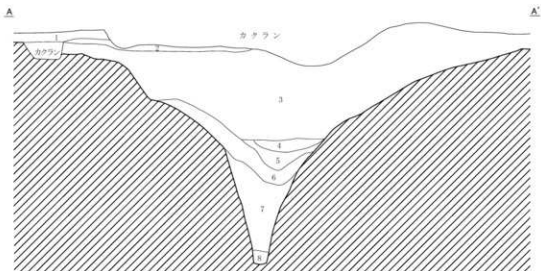
第144图 M9号沟状遗構出土遺物実測図

形状的にはM1号堀跡が南に屈曲して行くような形状である。しかし、本跡とM1号堀跡は幅が大きく異なることから同一遺構とはならないが、堆積状況などから同時に併存していた可能性は指摘できると考える。

本跡からの出土遺物は覆土からを中心に多数あり、41点を図示した。1と2は青磁碗である。2は蓮弁文が確認できる。3は中津川系の陶器と考えられるが器種が不明である。4～20はいわゆるカワラケと呼ばれる小皿である。形態も胎土も様々な物がある。まず胎土としては肉眼観察ではあるが、白色系と褐色系があり、白色系は9・12・16・18・20である。その他のものは褐色系であるが、11のみ胎土が非常に精錬されているように見える。また、7と14は断面の形状が焼成むらによると考えられるサンドイッチ状の色合いが特徴である。この焼成むらは5と8にも確認できる。



1. 褐色土(09YR4/4)しまり・粘性弱い。
2. 明黄褐色土(09YR6/3)しまり・粘性弱い、黄色の砂層。
3. 灰黄褐色土(09YR4/2)しまりややあり、粘性弱い、小石を多く含む。
4. 灰黄褐色土(09YR4/2)しまりややあり、粘性弱い、φ2～3cmの小石と白色粘土ブロックを含む。
5. 黒褐色土(09YR3/2)しまりややあり、粘性あり。
6. 黄褐色土(09YR5/4)しまり・粘性弱い、小石と砂が交互に堆積。
7. にじみ・黄褐色土(09YR7/2)しまり・粘性弱い、軽石を含む砂層。
8. 浅黄褐色土(09YR8/3)しまり・粘性あり、流水による粘質土層。



第145図 M10号溝状遺構及び出土遺物実測図

本跡から出土したカワラケについては、土鍋で使用されるざらついた胎土の製品は無かった。21は瓦質の火鉢と考えられる。22～25は土鍋の破片と考えられる。26は陶器環等の口縁部と考えられるが、内面が比熱し鉄分が付着しており「増埴」的な使い方が想定できる。27は須恵器環である。底部が欠損している。28は須恵器裏胴部の破片である。外面は平行タタキ、内面はナデが施されている。29は土師器環である。外面はヘラケズリ、内面は見込み部に螺旋状の暗文が、口縁部には放射状の暗文がそれぞれ施されている。30は砥石であり、2面の砥面が確認できる。31は滑石製の白玉である。中央の穴は貫通しているが、もう1穴は未貫通である。32は黒曜石の石鏃である。33は磨石である。34は磨り・敲石で、一端に敲き痕もある。35は敲石で、上下端に敲き痕が確認できる。36～39は鉄製品である。37～39は角釘と考えられる。36は先端が緩い弧を描く受け手のように加工されており、或いは「刺金」の一部とも考えられる。40と41は銅銭で、40が「皇宋通寶」、41が「熙寧元寶」である。

本跡はこれらの出土遺物から、中世の所産時期が考えられる。また、先に述べたM7号溝状遺構と本跡、また、後述するM10号溝状遺構はいずれも部分的な調査であるが、形状やその立地から同一の遺構と考えられる(第5図全体図参照)。

(10) M10号溝状遺構

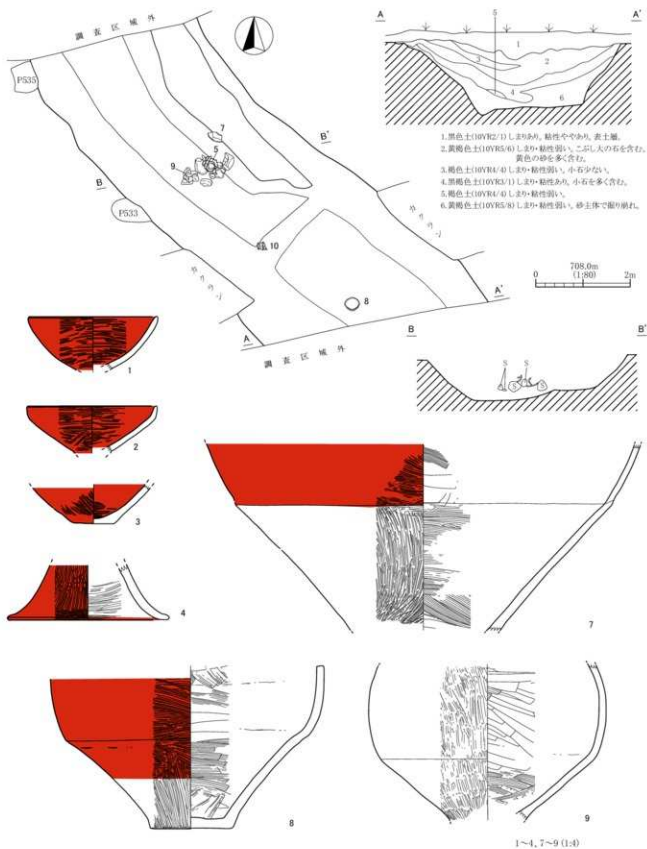
本跡は調査Ⅱ区のVIーク・ケ・コー1・2Grに位置する。南北と東側が調査区域外となる為、全容は不明であるが、南北方向に伸びる溝状遺構と考えられる。また、わずかであるが北側で溝上端が東側に曲がっていくのが観察できた。形態は断面が「V」字状を呈する。壁は緩やかに立ち上がるが、溝底面近くでは急激に立ち上がる。規模は検出部分の最大長5.40m・幅8.70～10.20mを測る。深さは4.51mを測る。溝底面はほぼ平坦であり、底面幅は0.38mを測り、一人がやっと立てる幅であった。覆土の堆積は自然堆積を示し、最下層は砂層となっていた。また、本跡中層からは後述する火葬墓群が検出されている。

本跡からの出土遺物は覆土を中心に11点を図示した。1は珠洲産の裏破片と考えられる。外面にタタキ痕がある。2は須恵器裏か壺の口縁部と考えられる。3は瀬戸美濃系の碗口縁部と考えられる。4～8はカワラケである。7以外は底部回転糸切り離しである。胎土は4と5、6と7が同質であり、4と5は白色系の精錬された胎土である。8は内外煤けたようになっている。9は砥石である。10は磨石で、全面に研磨状態である。11は側面に敲き痕があり、2面に磨り痕がある。本跡はこれらの出土遺物から中世の所産と考えられ、M7号溝状遺構とM9号溝状遺構と一連の遺構と考えられる。

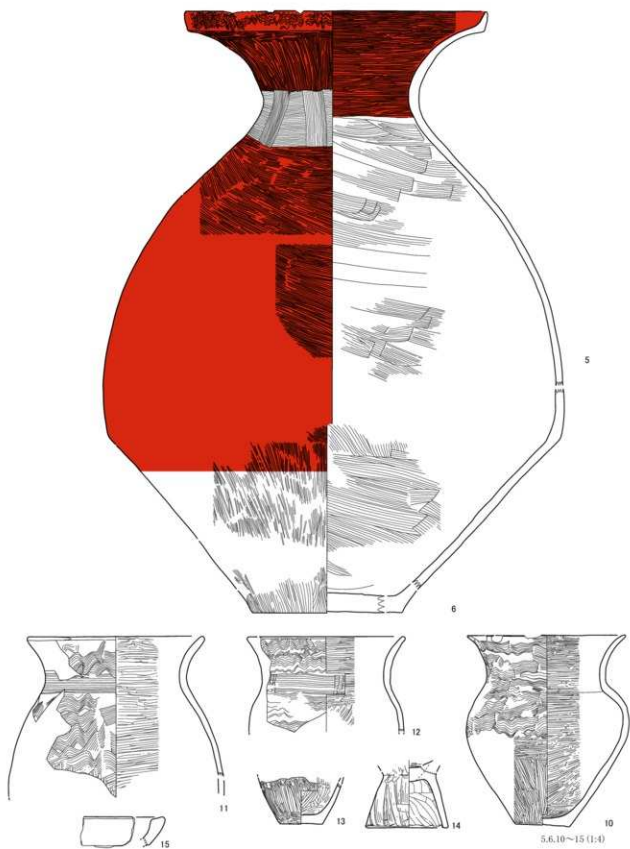
(11) M11号溝状遺構

本跡は調査Ⅳ区の中央であるV-シー4・5、V-スー3・4・5、V-セー3・4Grに位置する。北側と南側が調査区域外となる為、全容は不明であるが、南北方向に伸びる溝状遺構と考えられる。形態は断面が逆台形状を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は検出部分の最大長8.16m・幅3.60～4.80mを測る。深さは0.84～1.30m、底面幅は2.15mを測る。溝底面はほぼ平坦であったが、南側は北側より一段低くなっており、段差は0.26mを測る。覆土の堆積は自然堆積を示す。

本跡からの出土遺物は覆土中や図に示したように溝底面近くに礫がまとまって出土した。1は鉢、2は高環部である。いずれも丁寧なミガキと内外面赤彩が施されている。3は鉢の底部付近で、赤彩が施されている。4は高環脚部で、外面は丁寧なミガキと赤彩が施されている。5と6は壺の上部と下半である。同一個体と考えられるが接点が見いだせない。胴部下半以外と口縁部内面は赤彩が施される。文様は口縁部に櫛描波状文、頸部には櫛描垂下文と櫛描横線文が施されている。7～9は壺の胴部下半である。7と8は外面に赤彩が施されている。9は無彩であり、胴部下半の形態から台付きの可能性もある。10～14は裏や台付き裏の一部である。10と13は櫛描波状文、12は櫛描波状文と櫛描簾状文、11は櫛描波状文と櫛描横線文が施されている。15は縄文土器で、浅鉢の口縁部と考えられる。中期後半に位置づけられるか。



第146図 M11号溝状遺構及び出土遺物実測図



第147图 M11号沟状遗构出土遗物实测图

本跡はこれらの出土遺物や遺構形状より弥生後期の箱清水段階の「環濠」としての機能が考えられる。また、前述したとおりM1号溝状遺構とつながる可能性が指摘でき、本遺跡の立地する台地上を北西方向から南東方向に区画していることが予想できる。



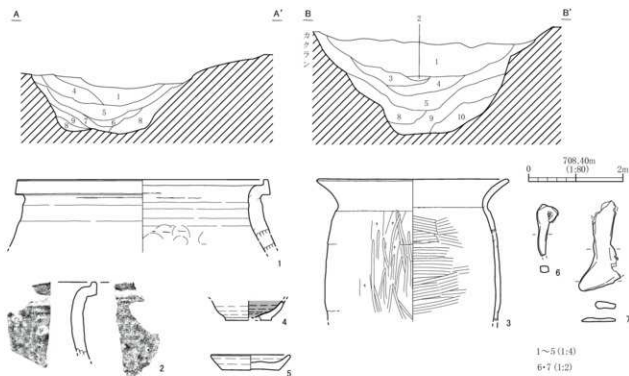
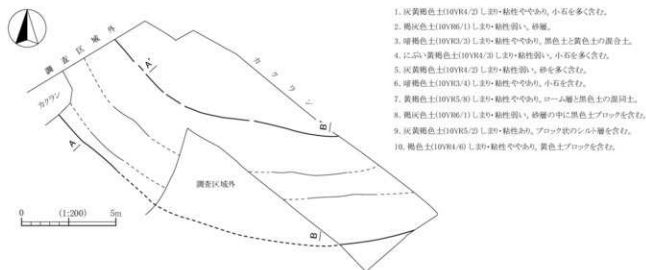
第148図 M12号溝状遺構及び出土遺物実測図

(12) M12号溝状遺構

本跡は調査V区の中央であるI-セー17~21、I-ソー14~19、I-ター14~16Grに位置する。北側と南側が調査区域外となるが、全容は不明であるが、南北方向に伸びる溝状遺構と考えられる。形態は断面が逆台形状を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は検出部分の最大長24.0m・幅5.20~5.60mを測る。深さは1.97m、底面幅は2.12mを測る。溝底面はほぼ平坦であった。覆土の堆積は自然堆積を示す。

本跡からの出土遺物は覆土を中心に少量あり、10点を図示した。1~3は陶磁器口縁部の破片である。1は梁付、2は瀬戸美濃、3は伊万里か。4と5は土鍋胴部の破片と考えられる。6は須恵器環であり、底部は回転糸切りである。7は須恵器甕の口縁部破片である。櫛描波状文が描かれている。8は土師器壺の底部と考えられるが確証を得ない。底部は糸切りである。9は砥石で4面が使われている。10は鉄製品で釘と考えられる。

本跡は遺物が少なく所産時期は不確実であるが、覆土の状況から中世と考えられる。



第149図 M13号溝状遺構及び出土遺物実測図

(13) M13号溝状遺構

本跡は調査V区の中央であるIーチー13、Iーツ・テー12・13、Iートー11・12・13、IIーアー10～13、IIーイー11・12Grに位置する。北側と東側が調査区域外となる為、全容は不明であるが、東西方向にやや曲がりながら伸びる溝状遺構と考えられる。形態は断面が逆台形状を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は検出部分の最大長20.60m・幅4.87～5.74mを測る。深さは1.82～2.34m、底面幅は1.10～1.86mを測る。溝底面はほぼ平坦であった。覆土の堆積は自然堆積を示す。

本跡からの出土遺物は覆土を中心に少量あった。7点を図示した。1と2は常滑の甕口縁部である。同一個体とも考えられる。口縁部の形態より13世紀後半～14世紀前半と考えられる。3は土師器甕である。外面ミガキが施されている。5はカワラケで、胎土がよく精錬されている。6と7は鉄製品で用途不明である。

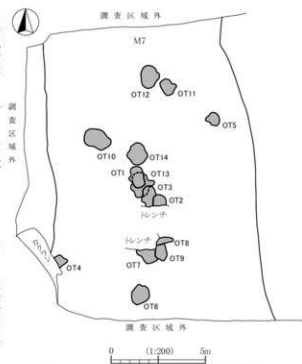
本跡の所産時期は出土遺物が少なく非常に不確定であるが、常滑の甕等から13世紀後半～14世紀前半と考えたい。また、本跡とM12号溝状遺構は、その形態と出土遺物から同一遺構の可能性はある。V区南側の確認部分も含めると全長は約100mにおよび、一部で屈曲している可能性がある。この形態はM7・9・10号溝状遺構の全体形状と似る。これら中世の溝状遺構はその規模や形状から「堀」としての機能が考えられ、小字「上の城」との関連が推測できる。

第5節 火葬墓・土壙墓

今回の発掘調査では、先に述べたM7・9・10号溝状遺構内において合計45基の火葬墓や土壙墓が検出された。同じ中世所産と考えられるM11・12号溝状遺構内からは調査範囲内で1基も発見されなかった。検出された墓壙の内訳は火葬墓42基、土壙墓3基である。

これら墓は各堀跡がある程度埋没した状態の窪地を利用し、煙道部を東西方向に設定して立地するものが多かった。また、M9号溝状遺構に顕著であったが、これら火葬墓は上下二段に分かれるように検出され、下段に営まれた火葬墓がある程度埋没したところで、上面の火葬墓群が溝跡に沿うようにある程度の間隔を保って構築されているように考えられた。

今回調査された火葬墓で上部に盛り土が確認されたものはなかった。唯一OT28号火葬墓が掘り込みを覆うように人頭大の自然礫が積まれたような状態で検出された。なお、墓壙から発見された骨と炭化材については分析結果を第V章に掲載した。



第150図 I区火葬墓・土壙墓位置図

(1) OT1号火葬墓

本跡は調査I区の西端であるVI-U-16Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-15°-W、煙道部軸はN-105°-Wを測る。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸長1.14m・短軸長0.70mを測る。深さは0.30mを測る。墓壙底面は播鉢状を呈していた。覆土の堆積は自然堆積を示す。火葬骨は墓壙中心に多く検出された。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(男性)が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は、覆土中より図示した大型のカワラケ1点があった。底部は糸切りであり、断面は焼成むらのような層状を呈していた。

(2) OT2号火葬墓

本跡は調査I区の西端であるVI-U-17Grに位置する。南側をトレンチにより削平されている。形態は長方形を呈すると考えられる。長軸方位はN-6°-Wと考えられる。壁は緩やかに立ち上がる。規模は検出部分の長軸長0.64mを測る。深さは0.31mを測る。墓壙底面は播鉢状を呈していた。覆土の堆積は自然堆積を示す。火葬骨は墓壙全体から検出された。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(男性の可能性1、女性2)が3個体と報告された。

本跡からの出土遺物は、覆土中より図示したカワラケ1点と4枚の古銭があった。1のカワラケは非常に小さな製品で、底部は糸切りと考えられる。在地産で15世紀後半の位置づけがなされている。古銭は2～4が北宋銭、5は「開〇〇寶」としか判読できず時期不明である。

(3) OT3号火葬墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるVI-U-16・17Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-11°-W、煙道部軸はN-100°-Wを測る。壁は緩やかに立ち上がる。規模は残存長軸長1.10m・残存短軸長0.52mを測る。深さは0.31mを測る。墓壇底面は播鉢状を呈していた。また、墓壇短辺には自然礫が配置されていた。覆土の堆積は自然堆積を示す。火葬骨は墓壇中心に多く検出された。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(女性1、性別不明1)が2個体と報告された。本跡からの出土遺物はなかった。

(4) OT4号火葬墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるVI-E-17・18Grに位置する。南側をトレンチにより削平されている。形態は不整形を呈する。規模は残存長軸長0.50mを測る。深さは0.31mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面は播鉢状を呈していた。中央部が一段深く掘り込まれており、この部分が煙道部につながる部分か。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(男性)が1個体と報告された。本跡からは溶けた古銭が出土した。

(5) OT5号火葬墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるVI-I-15・16Grに位置する。形態は煙道部付の楕円形を呈する。長軸方位はN-16°-W、煙道部軸はN-105°-Wを測る。規模は長軸長0.76m・短軸長0.52m、深さは0.27mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面は播鉢状を呈し、中央部が一段深く掘り込まれており、この部分が煙道部につながる部分か。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(女性)が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は土師器甕片と須恵器甕片があったがいずれも小片であった。図示した古銭1は北宋銭であった。

(6) OT6号火葬墓

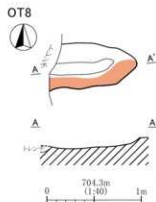
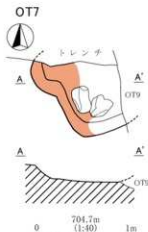
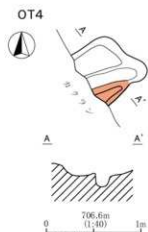
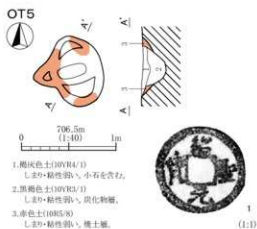
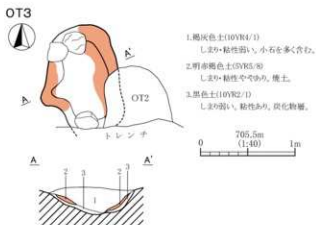
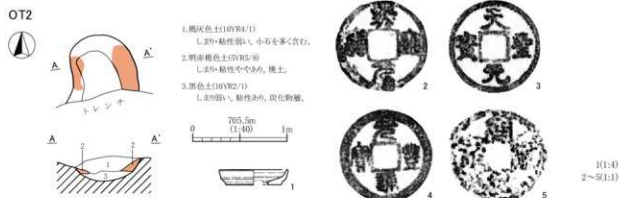
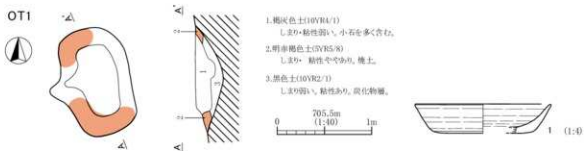
本跡は調査Ⅰ区の西端であるVI-U-18Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-109°-W、煙道部軸はN-19°-Wを測る。規模は長軸長0.96m・短軸長0.86m、深さは0.39mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面は播鉢状を呈し、中央部が一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(性別不明)が1個体、10代の子供が1個体の合計2個体と報告された。

本跡からの出土遺物は土師器坏片と須恵器坏片があったがいずれも小片であった。図示した遺物は7点である。1～6は古銭で、1は明銭、6が唐銭、残り4枚は北宋銭である。7は鉄製品で角軸を呈するが詳細は不明である。

(7) OT7号火葬墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるVI-U-17Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈すると考えられるがトレンチとOT9号土壇墓により削平され全容は不明である。推定で長軸方位はN-17°-W、煙道部軸はN-107°-Wを測る。規模は残存長軸長0.66m、深さは0.22mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、礫が2点配置されていた。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(男性)が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は図示した北宋銭1点があったのみである。



第151図 OT1~5・7・8号火葬墓及び出土遺物実測図

(8) OT8号火葬墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるⅥ-U-17Grに位置する。形態は不整形である。推定で長軸方位はWを測る。規模は残存長軸長0.84m・短軸長0.48m、深さは0.12mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦であった。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（女性1、性別不明1）が2個体と報告された。本跡からの出土遺物はなかった。

(9) OT9号土壇墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるⅥ-U-17Grに位置する。形態は不整形である。本跡はほとんど火を受けておらず、焼土も検出されなかったことから「土壇墓」とした。規模は残存長軸長0.84m・短軸長0.62m、深さは0.19mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦であった。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体と報告された。本跡からの出土遺物は3点の北宋銭があった。2点を図示した。「皇宋通寶」は状態が悪く写真のみ掲載した。

(10) OT10号火葬墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるⅥ-E-16Grに位置する。形態は楕円形を呈し、煙道部は明瞭ではなかった。長軸方位はN-58°-Wを測る。規模は長軸長1.44m・短軸長0.94m、深さは0.54mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面は播鉢状を呈し、中央部が一段深く掘り込まれていた。また、底面には短辺に沿うように礫が二列に配されていた。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（女性1、性別不明1）が2個体、10代の子供が1個体、6才未満の幼児が1個体、合計4個体と報告された。

本跡からの出土遺物は6点の古銭を図示した。1は明銭、5は唐銭であり、その他は北宋銭であった。

(11) OT11号火葬墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるⅥ-U-15Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-24°-W、煙道部軸はN-68°-Eを測る。規模は長軸長0.88m・短軸長0.52m、深さは0.24mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面は播鉢状を呈し、中央部が一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は20才前後成人（女性）が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は土師器甕・坏片があったがいずれも小片であった。図示した遺物は3点である。1～3は古銭で、1は金銭、残り2点は北宋銭である。

(12) OT12号火葬墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるⅥ-U-15Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN、煙道部軸はWを測る。規模は長軸長1.16m・短軸長0.81m、深さは0.35mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面は播鉢状を呈し、中央部が一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（男性1、性別不明1）が2個体と報告された。

本跡からの出土遺物は土師器甕・坏片があったが小片であった。また古銭は4枚が出土したが、3枚は比熱による溶けで図示できたのは1の北宋銭だけである。

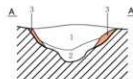
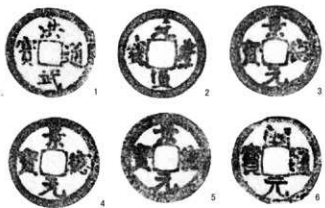
(13) OT13号火葬墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるⅥ-U-16・17Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。また、本跡は西側も一部煙道状に壁が張りだしている。長軸方位はN-11°-W、煙道部軸はN-78°-Eを測る。規模は長軸長1.28m・短軸長0.80m、深さは0.44mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面は播鉢状を呈し、中央部が一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（男性）が1個体である。

OT6



1. 赭灰色土(10YR4/1)
L250・粘性强い、小石を多く含む。
2. 黒色土(10YR2/1)
L250・粘性强い、炭化物を多く含む。
3. 明赤褐色土(2.5YR5/8)
L250・粘性强い、よく焼けている。焼土層。

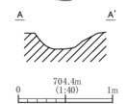
705.4m
(1:40)

1~6 (1:1) 7 (1:2)

OT9



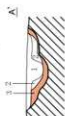
1

704.4m
(1:40)

2

1:2(1:1)

OT11

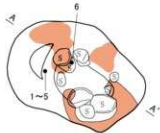


1. L250 濃い黄褐色土(10YR4/3)
L250・粘性强い、小石を多く含む。
2. 黒色土(10YR2/1)
L250・粘性强い、炭化物を多く含む。
3. 明赤褐色土(2.5YR5/8)
焼土層。

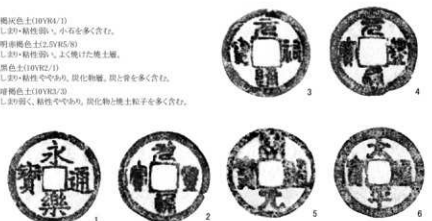
705.8m
(1:40)

1~3(1:1)

OT10

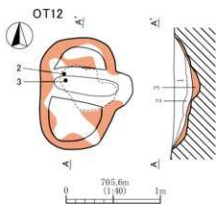


1. 赭灰色土(10YR4/1)
L250・粘性强い、小石を多く含む。
2. 明赤褐色土(2.5YR5/8)
L250・粘性强い、よく焼けた焼土層。
3. 黒色土(10YR2/1)
L250・粘性强い、炭化物、炭土骨を多く含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3)
L250 弱く、粘性强い、炭化物と焼土粒子を多く含む。

705.7m
(1:40)

1~6 (1:1)

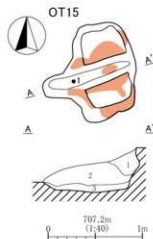
第152図 OT6・9~11号火葬墓・土壌墓及び出土遺物実測図



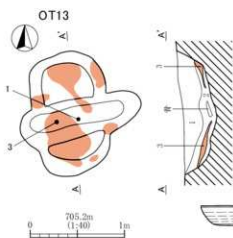
- 1.濃い黄褐色土(09R4/3)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
- 2.黒色土(09R2/1)しまり・粘性弱い、炭化物を多く含む、骨を含む。
- 3.明赤褐色土(2.5YR5/8)焼土層。



1 (1:1)



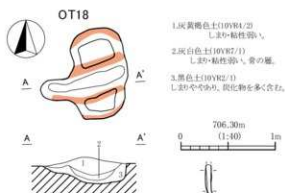
- 1.褐色土(09R4/0)しまり・粘性弱い。
- 2.明黄褐色土(09YR6/0)しまり・粘性弱い、ローム土。
- 3.黒色土(09R2/1)しまり・粘性弱い、炭化物が多い。



- 1.褐色土(09R4/1)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
- 2.黒色土(09R2/1)しまり・粘性あり、炭化物層、灰を含む。
- 3.褐色土(2.5YR6/8)焼土層。

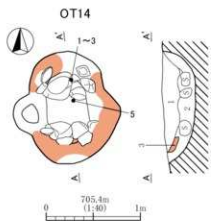


1.2 (1:4)



- 1.灰黄褐色土(09YR4/2)しまり・粘性弱い。
- 2.灰白色土(09R7/1)しまり・粘性弱い、骨の層。
- 3.黒色土(09R2/1)しまり・骨の多い、炭化物を多く含む。

1 (1:2)



- 1.褐色土(09R4/1)しまり・粘性弱い、小石を多く含む。
- 2.黒色土(09R2/1)しまり・粘性あり、炭化物層、灰を含む。
- 3.褐色土(2.5YR7/8)焼土層。



1



2



3



4

1~4 (1:1)

第153図 OT12~15・18号火葬墓及び出土遺物実測図

本跡からの出土遺物はカワラケがあり2点を図示した。1はほぼ完形であり、2点とも胎土はよく精練されているが、2の方が焼成は硬質である。いずれも在地産と考えられる。

(14) OT14号火葬墓

本跡は調査Ⅰ区の西端であるⅥ-U-16Grに位置する。形態は煙道部付の楕円形を呈する。長軸方位はN-8°-W、煙道部軸はN-97°-Wを測る。規模は長軸長1.18m・短軸長0.78m、深さは0.35mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面は擂鉢状を呈し、中央部が一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。この掘り込みに沿うように拳大から人頭大の礫が二列に配置されていた。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（男性1、性別不明1）が2個体と報告された。

本跡からの出土遺物は土師器甕片があったがいずれも小片であった。図示した遺物は4点である。1～4は古銭で、1は「永楽通寶」、4は「元豊通寶」、3は「元〇〇寶」であるが、2は判読不明である。

(15) OT15号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-E-O-16Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-11°-W、煙道部軸はN-100°-Wを測る。規模は長軸長1.04m・短軸長0.66m、深さは0.47mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部が一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人30代後半（男性1）が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は古銭があったが比熱による溶解・付着で判読不明であり、写真のみの提示に止まっている。

(16) OT16号火葬墓

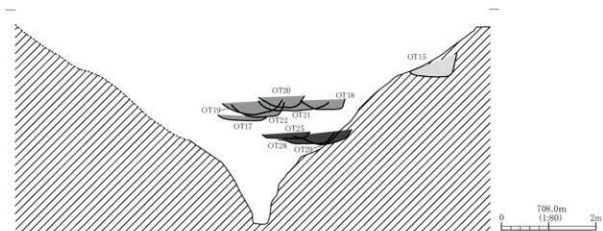
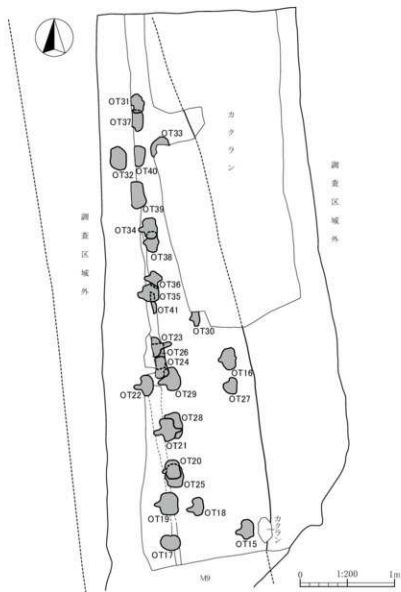
本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-O-14Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-6°-W、煙道部軸はN-95°-Wを測る。規模は長軸長1.12m・短軸長0.80m、深さは0.46mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部が一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（男性の可能性）が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は古銭6点を図示した。1～3と6は北宋銭、4と5は明銭である。いずれの古銭も比熱して湾曲等していた。

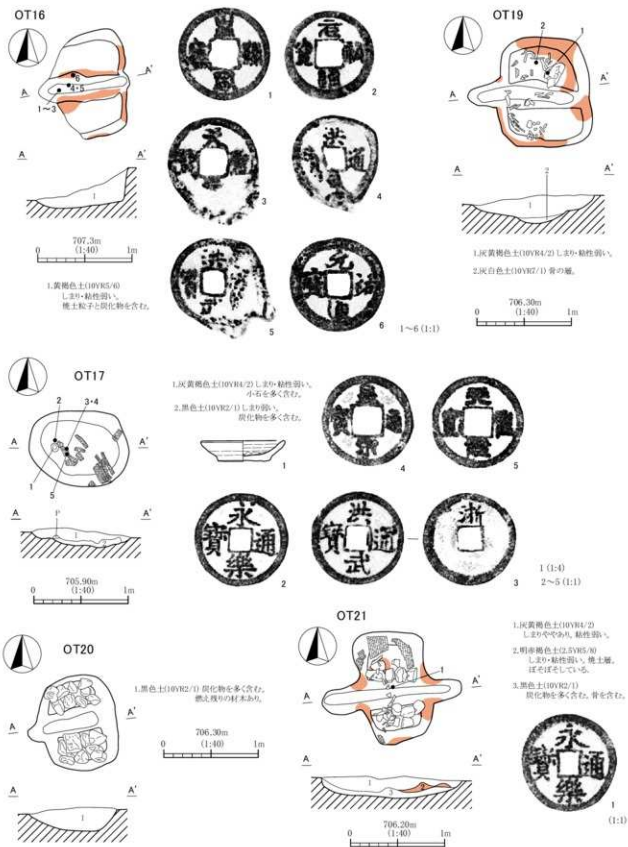
(17) OT17号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-O-C-16・17Grに位置する。形態は楕円形を呈する。長軸方位はN-78°-Wを測る。規模は長軸長1.04m・短軸長0.80m、深さは0.16mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦であった。本跡は人骨の出土量が非常に少なかったが、他の火葬墓に比べ炭化材が多く依存していた。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体と報告された。

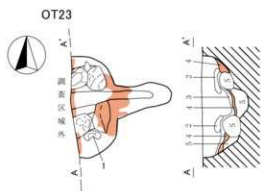
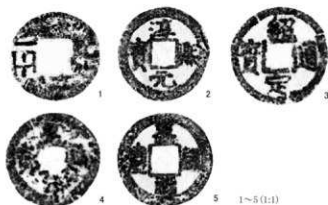
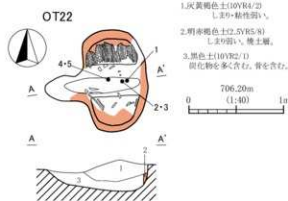
本跡からの出土遺物は5点を図示した。1はカワラケで完形である。底部回転糸切り離しであり、時期は17世紀代と考えられる。2～5は古銭である。4と5は北宋銭、2と3は明銭である。3の「洪武通寶」は背面に「漸」の文字がある。



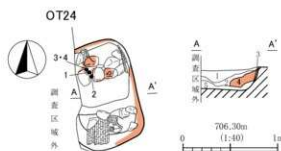
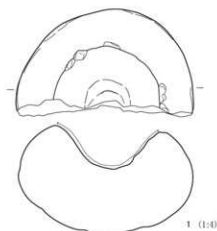
第154図 Ⅲ区火葬墓・土壘墓位置図



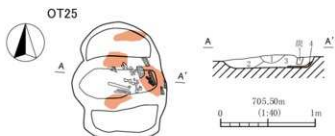
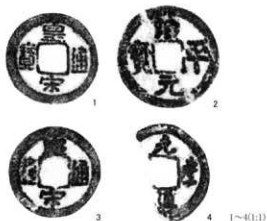
第155図 OT16・17・19~21号火葬墓及び出土遺物実測図



- 1.灰黄褐色土(10YR4/2) L.主9・粘性弱い。
- 2.にぶい黄褐色土(10YR7/4) L.主9・粘性弱い、ローム土。
- 3.黒褐色土(10YR3/1) L.主9・粘性弱い、炭化物を少量含む、骨を多く含む。
- 4.明赤褐色土(2.5YR5/6) 焼土層。
- 5.黒色土(10YR2/1) 炭化物を多く含む。



- 1.灰黄褐色土(10YR4/2) L.主9・粘性弱い。
- 2.灰白色土(10YR7/1) L.主9・粘性弱い、灰層骨を多く含む。
- 3.明赤褐色土(2.5YR5/6) L.主9・粘性弱い、焼土層。
- 4.明赤褐色土(2.5YR5/6) L.主9・粘性弱い、棕色土混入、焼土層。
- 5.黒色土(10YR2/1) L.主9・粘性弱い、炭化物を多く含む。



- 1.灰黄褐色土(10YR4/2) L.主9・粘性弱い。
- 2.明黄褐色土(10YR6/6) L.主9・粘性弱い、小石を多く含む。
- 3.棕色土(10YR2/1) L.主9・粘性弱い、炭化物を多く含む。
- 4.明赤褐色土(2.5YR5/6) 焼土層。

第156図 OT22~25号火葬墓及び出土遺物実測図

(18) OT18号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-オ-16Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-8°-W、煙道部軸はN-97°-Wを測る。規模は長軸長0.96m・短軸長0.56m、深さは0.28mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部が一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（男性の可能性2）が2個体と報告された。

本跡からの出土遺物は図示した不明の鉄製品と須恵器坏片、土師器裏片があったがいずれも小片で図示できなかった。

(19) OT19号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-オ-カー16Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN、煙道部軸はWを測る。規模は長軸長1.16m・短軸長0.96m、深さは0.30mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部が一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明2）が2個体、6歳未満の幼児が1個体、合計3個体と報告された。

本跡からの出土遺物は土師器裏片と溶けた古銭2点があったがいずれも小片で図示できなかった。

(20) OT20号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-オ-カー15・16Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-8°-W、煙道部軸はN-97°-Wを測る。規模は長軸長1.00m・短軸長0.82m、深さは0.24mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、平坦部には比熱した人頭大の礫が敷きならべられていた。中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（男性の可能性）が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は土師器坏片があったがいずれも小片で図示できなかった。

(21) OT21号火葬墓

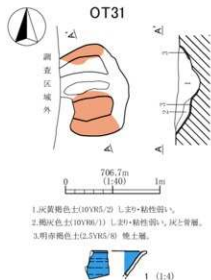
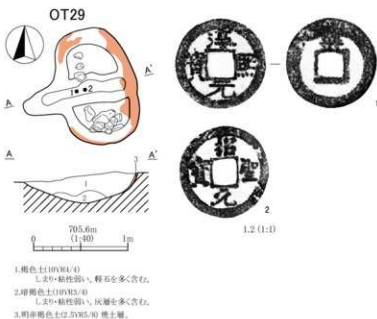
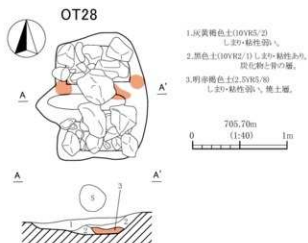
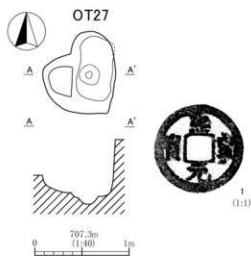
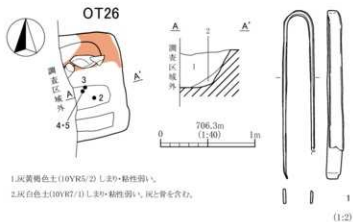
本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-オ-カー15Grに位置する。形態は両側に煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-4°-W、煙道部軸はN-95°-Wを測る。規模は長軸長1.18m・短軸長0.76m、深さは0.24mを測る。壁はなだらかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、平坦部には比熱した小ぶりの礫が敷きならべられていた。また、本跡は炭化材が多く残存していた。中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（男性1、性別不明1）が2個体と報告された。

本跡からの出土遺物は明銭1枚があったのみである。

(22) OT22号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-カー14・15Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-4°-W、煙道部軸はN-93°-Wを測る。規模は長軸長1.08m・短軸長0.68m、深さは0.33mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、平坦部には炭化材が多く残存していた。中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明1）が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は5枚の古銭を図示した。1は前漢の「四銖半兩」と考えられる。2と3は南宋銭、4と5はいずれも判読不明である。また、5は比熱により溶着しており枚数は2枚である。



第157図 OT26～31号火葬墓・土塚墓及び出土遺物実測図

(23) OT23号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-カー-14Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-3°-W、煙道部軸はN-87°-Eを測る。規模は長軸長1.06m・検出短軸長0.48m、深さは0.39mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、平坦部には人頭大礫が配置されていた。中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明1）が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は図示した塙白が1点と写真掲載した古銭片があった。

(24) OT24号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-カー-14Grに位置する。形態は長方形を呈する。煙道部は調査区外と考えられる。長軸方位はN-11°-Wを測る。規模は長軸長1.12m・検出短軸長0.60m、深さは0.23mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、平坦部には人頭大礫が配置されていた。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（女性の可能性）が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は4枚の古銭を図示した。いずれも北宋銭である。また、本跡からは2点の比熱により変形した古銭を写真掲載した。

(25) OT25号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-オ・カー-15・16Grに位置する。形態は短い煙道部が付く長方形を呈する。長軸方位はN、煙道部軸はWを測る。規模は長軸長1.24m・短軸長0.87m、深さは0.18mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（女性）が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は炭化材と焼骨のみであった。

(26) OT26号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の南側であるⅢ-カー-14Grに位置する。形態は長方形を呈する。煙道部は調査区域外に存在すると考えられる。長軸方位はN-7°-Wを測る。規模は長軸長1.12m・検出短軸長0.54m、深さは0.40mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、平坦部には一部に人頭大礫が配置されていた。中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながると考えられる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（男性2、性別不明1）が3個体で、そのうち1個体は熟年段階に達していた可能性が高いと報告された。

本跡からの出土遺物は図示した鑊子と考えられる鉄製品が1点と、写真掲載した溶けた古銭4点があった。古銭の一枚は「永樂通寶」と判読できる。

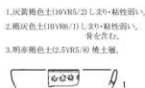
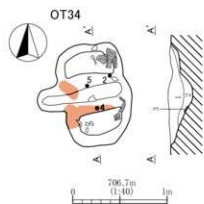
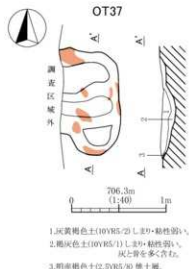
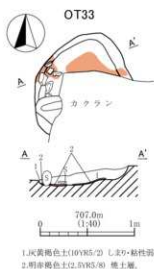
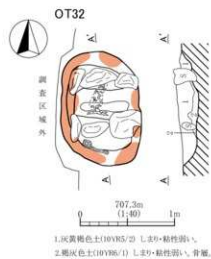
(27) OT27号土壇墓

本跡は調査Ⅲ区の中央であるⅢ-オ-14Grに位置する。形態は不整形を呈する。本跡からは骨や炭化材が出土しておらず、土壇墓とするには躊躇するが、古銭の出土や検出位置から今回は土壇墓として報告する。また、西側の壁はM9号溝状遺構覆土と認識ができず掘り下げてしまっている。長軸方位はNを測る。規模は長軸長0.88m・短軸長0.76m、深さは0.69mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壇底面はピット状の掘り窪みがある。

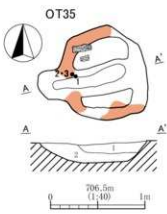
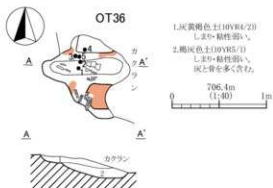
本跡からの出土遺物は図示した北宋銭が1点あったのみである。

(28) OT28号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の中央であるⅢ-オ・カー-15Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN、煙道部軸方位はWを測る。規模は長軸長1.32m・短軸長1.00m、深さは0.25mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、平坦部には人頭大礫が配置されていた。中央部は



1 (1:4)
2.3 (1:1)



1~3 (1:1)

5 1~5 (1:1)

第158図 OT32~37号火葬墓及び出土遺物実測図

一段深く掘り込まれており、煙道部につながると考えられる。また、本跡は遺構確認時に墓壇上から人頭大の自然礫が置かれたように検出されたが、顕著な盛り土は確認できなかった。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(性別不明)が1個体であると報告された。

本跡からの出土遺物は炭化材と焼骨しかなかった。

(29) OT29号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の中央であるⅢ-オ・カー14Grに位置する。形態は煙道部付の楕円形を呈する。長軸方位はN-15°-W、煙道部軸方位はN-106°-Wを測る。規模は長軸長1.24m・短軸長0.83m、深さは0.33mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、平坦部には拳大から人頭大礫が検出されていた。中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(女性の可能性)が1個体であると報告された。

本跡からの出土遺物は北宋銭2枚を図示した。

(30) OT30号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の中央であるⅢ-オ-13・14Grに位置する。形態は短い煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-3°-Wを測る。規模は残存長軸長0.76m・短軸長0.52m、深さは0.26mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながると考えられる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(男性の可能性)が1個体であると報告された。

本跡からの出土遺物は焼骨しかなかった。

(31) OT31号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北であるⅢ-カー11Grに位置する。形態は短い煙道部付の長方形を呈すると考えられる。長軸方位はN-7°-Wを測る。規模は残存長軸長0.96m・検出短軸長0.72m、深さは0.25mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながると考えられる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(女性の可能性)が1個体であると報告された。

本跡からの出土遺物は青磁碗片を1点図示した。

(32) OT32号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北であるⅢ-カー11・12Grに位置する。形態は楕円形を呈する。長軸方位はNを測る。規模は長軸長1.20m・短軸長0.88m、深さは0.17mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、大型の礫が3点1組が2列に配置されていた。中央部は一段深く掘り込まれていた。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(性別不明)が1個体であると報告された。

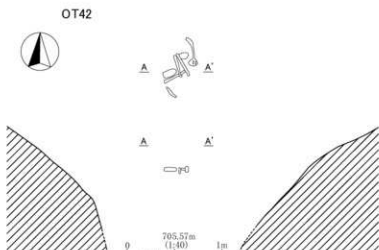
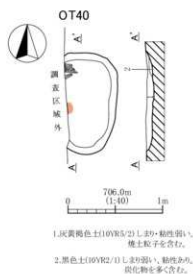
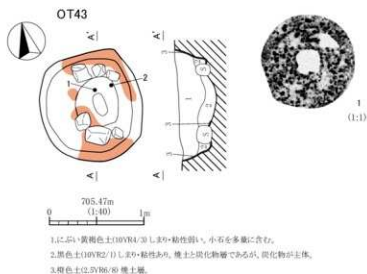
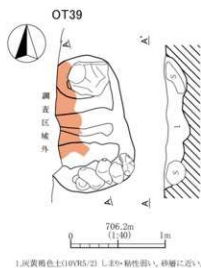
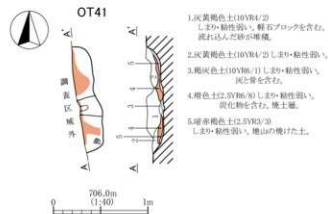
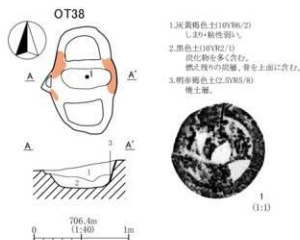
本跡からの出土遺物は土師器坏片が出土したが小片で図示できなかった。

(33) OT33号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北であるⅢ-カー11Grに位置する。形態は不整形である。規模は残存長軸長0.40m、深さは0.46mを測る。墓壇底面はほぼ平坦であった。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(女性の可能性)が1個体であると報告された。出土遺物はなかった。

(34) OT34号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北側であるⅢ-カー12Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN-6°-W、煙道部軸はN-96°-Wを測る。規模は長軸長1.08m・短軸長0.76m、深さは0.25mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部は一段深く掘り込まれてお



第 159 図 OT38 ~ 43 号火葬墓・土壌墓及び出土遺物実測図

り、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(性別不明)が1個体と報告された。本跡からの出土遺物は3点を図示した。1はスタンプ文が押された香炉である。2は明銭、3は北宋銭である。また、写真のみで2点の古銭を掲載した。

(35) OT35号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北側であるⅢ-カー-13Grに位置する。形態は煙道部付の楕円形を呈する。長軸方位はN-13°-W、煙道部軸はN-103°-Wを測る。規模は長軸長0.98m・短軸長0.90m、深さは0.26mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(性別不明)が1個体と報告された。本跡からの出土遺物は3点を図示した。1と2は明銭、3は北宋銭である。

(36) OT36号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北側であるⅢ-カー-13Grに位置する。北側と東側がカクランにより削平されている。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN、煙道部軸はWを測る。規模は残存長軸長0.84m・残存短軸長0.68m、深さは0.28mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(性別不明)が1個体と報告された。本跡からの出土遺物は5点の古銭を図示した。1と3は明銭、2と5は北宋銭、4は唐銭である。

(37) OT37号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北側であるⅢ-カー-11Grに位置する。西側は調査区域外となる。形態は煙道部付の長方形を呈すると考えられ、煙道部は調査区域外となる。長軸方位はNを測る。規模は長軸長1.08m・検出短軸長0.60m、深さは0.19mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながると考えられる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(女性の可能性)が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は須恵器裏片、土師器裏・坏片が出土したがいずれも小片で図示できなかった。

(38) OT38号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北側であるⅢ-カー-12・13Grに位置する。形態は煙道部付の長方形を呈する。長軸方位はN、煙道部軸方位はWを測る。規模は長軸長1.08m・短軸長0.70m、深さは0.29mを測る。壁はやや急激に立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(女性の可能性)が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は判読不明な古銭が1点ある。

(39) OT39号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北側であるⅢ-カー-12Grに位置する。形態は長方形を呈する。煙道部は調査区域外側にあると考えられる。長軸方位はN-10°-Wを測る。規模は長軸長1.42m・検出短軸長0.74m、深さは0.29mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、平坦部には大型の自然礫が並べられていた。中央部は一段深く掘り込まれており、煙道部につながる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人(女性の可能性)が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は焼骨と炭化物があったのみである。

(40) OT40号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北側であるⅢ-カー-11Grに位置する。西側は調査区域外となる。形態は楕円形を呈すると考えられる。長軸方位はNを測る。規模は長軸長1.07m・検出短軸長0.52m、深さは0.12m

を測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦であった。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体と報告された。本跡からの出土遺物は火葬骨が少量のみであった。

(41) OT41号火葬墓

本跡は調査Ⅲ区の北側であるⅢ-カー13Grに位置する。西側は調査区域外となる。形態は長方形を呈すると考えられる。長軸方位はN-12°-Wを測る。規模は長軸長1.12m・検出短軸長0.22m、深さは0.10mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦であり、中央部がやや窪んでいた。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は火葬骨が少量のみであった。

(42) OT42号土壇墓

本跡は調査Ⅱ区の中央であるⅥ-ケー2Grに位置する。第157図に示したM10号溝状遺構の中層あたりから確認され、骨の検出状況から掘り込み等の存在を推定し、確認したが確認はできなかった。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体と報告された。

本跡からの出土遺物は土葬骨が少量のみであった。

(43) OT43号火葬墓

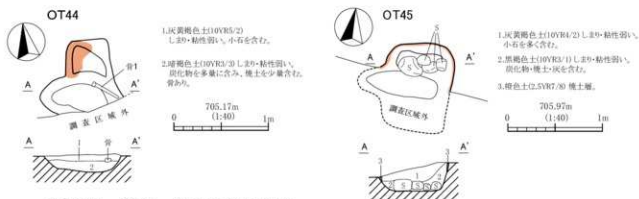
本跡は調査Ⅱ区の中央であるⅥ-ケー2Grに位置する。形態は楕円形を呈すると考えられる。長軸方位はNを測る。規模は長軸長1.16m・短軸長1.08m、深さは0.42mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、よく焼けていた。墓壇底面は、円形に一段深く掘り込まれており、その周りには自然礫が配置されていた。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（女性の可能性）が1個体と報告された。本跡からの出土遺物は2点の古銭があり、1点は図示し、1点は写真のみの掲載とした。図示した古銭は「元豊通寶」と考えられるが、比熱が激しく確認を得ない。

(44) OT44号火葬墓

本跡は調査Ⅱ区の中央であるⅥ-ケー2Grに位置する。南側は調査区域外となる。形態は不整形で、規模は検出長軸長0.72m・短軸長0.84m、深さは0.19mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。墓壇底面は段差があり、低い部分は煙道部とも考えられる。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（男性1、女性の可能性1）が2個体と報告された。本跡からの出土遺物は土師器片があったが、小片で図示できなかった。

(45) OT45号火葬墓

本跡は調査Ⅱ区の中央であるⅥ-ケー2Grに位置する。南側は調査区域外となる。形態は煙道部付



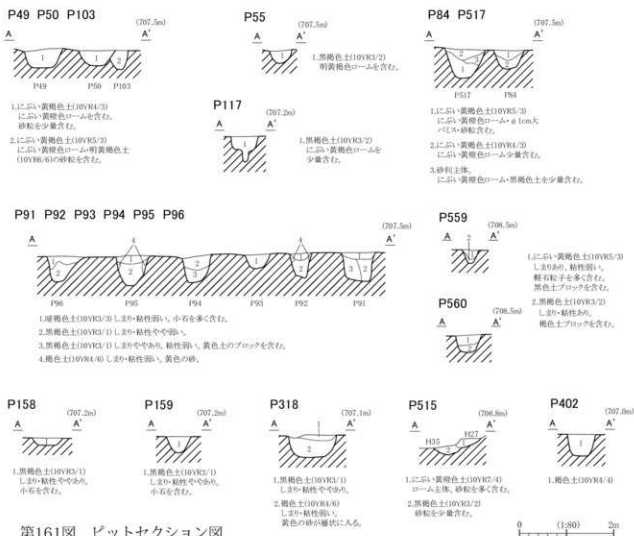
第160図 OT44・45号火葬墓実測図

の長方形を呈すると考えられる。長軸方位はNを測る。規模は推定長軸長0.92m・推定短軸長0.72m、深さは0.45mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壇底面はほぼ平坦で、礫が配置され、中央部は一段低くなっていた。鑑定の結果、埋葬された推定最小個体数は成人（男性の可能性）が1個体と報告された。本跡からの出土遺物はカワラケ片4点が出土したが、小片であり図示できなかった。

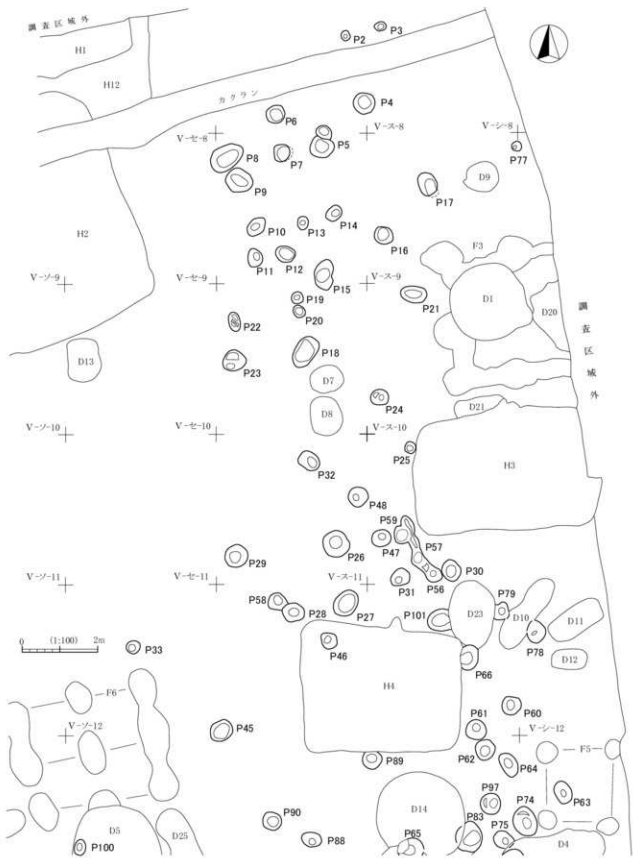
第6節 ビット

今回の発掘調査では、単独ビットとして547個を調査した。調査区域の関係があるため、掘立柱建物跡の一部と考えられるものもあるが、配列に組めないものは単独ビットとした。本節では特徴的な遺構のみ取り上げ、その他は平面図と計測表で詳細を示した。

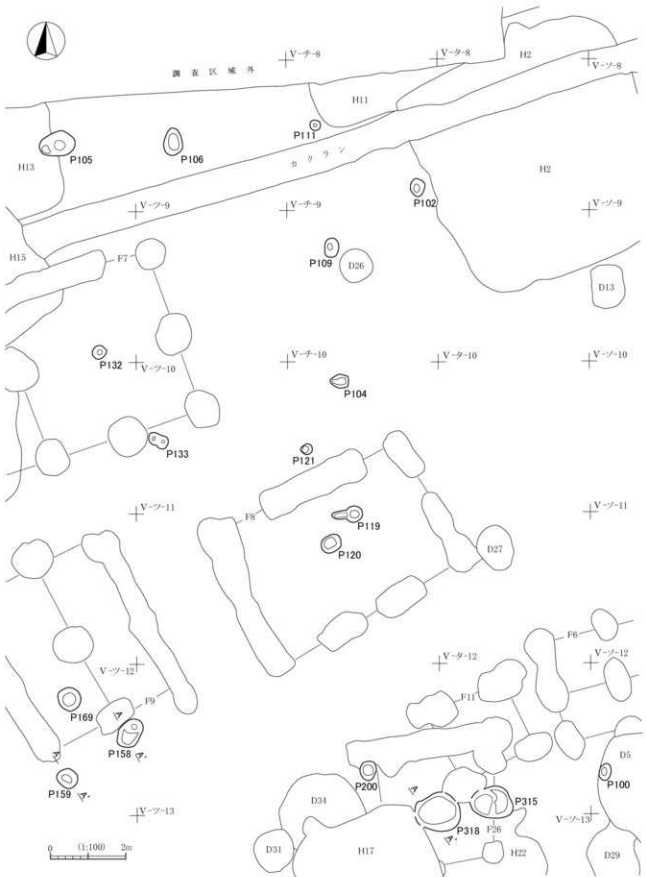
まず、IV区西よりで検出されたP531とP532である。詳細平面図は第173図、写真は第166図上に示した。規模はP531が径0.80m・深さ0.15m、P532が径1.16m・深さ0.29mを測る。形態はいずれも円形を基調とし、壁はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦であった。特徴はいずれのビットも径2～10cm程の川原石が充填されていた事である。また、P532は中央に石灰状の白い粉が円形に確認された。このビットに似た物を岩村田市街地の旧民家土蔵の基礎形状で確認したことがある。柱を受ける基礎石の下部に石を敷き詰め、土坑状の掘り込みを配置する構造である。よって、重量建物の基礎構造の一部ではないかと推測できる。今回の検出部周辺は近世藤ヶ城の櫓門が存在した場所であり、これらビットは櫓門基礎の一部とも考えられる。



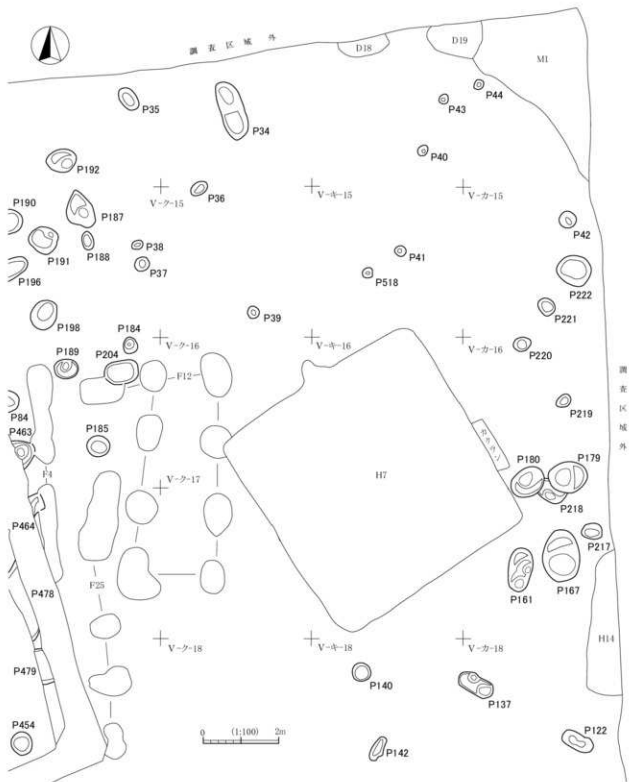
第161図 ビットセクション図



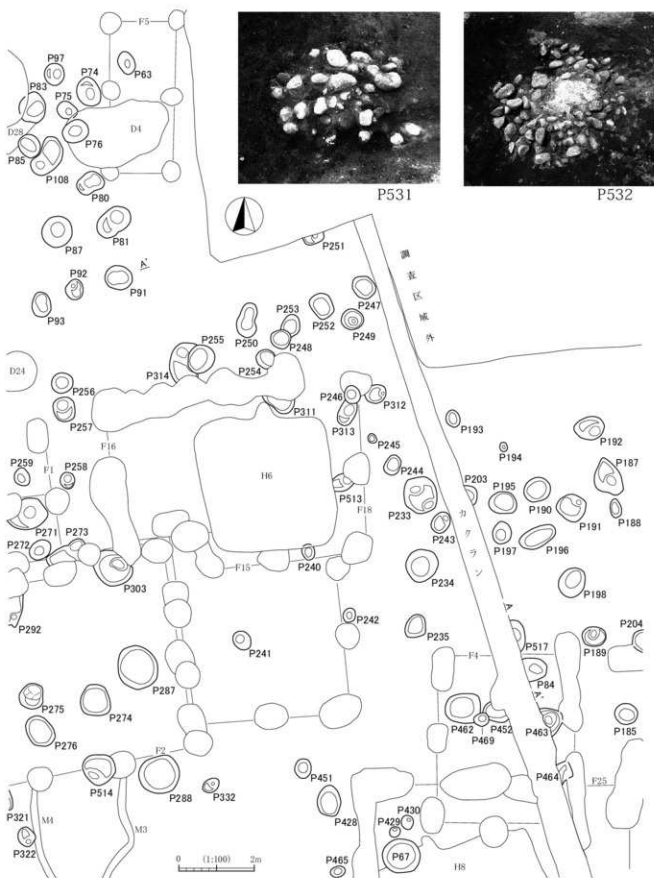
第162図 ピット平面図(1)



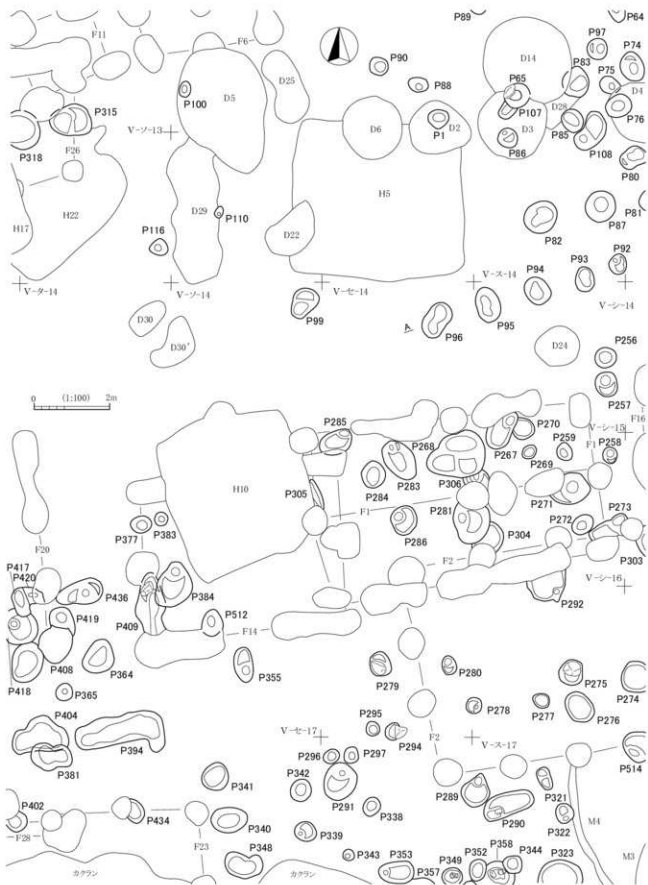
第163図 ピット平面図(2)



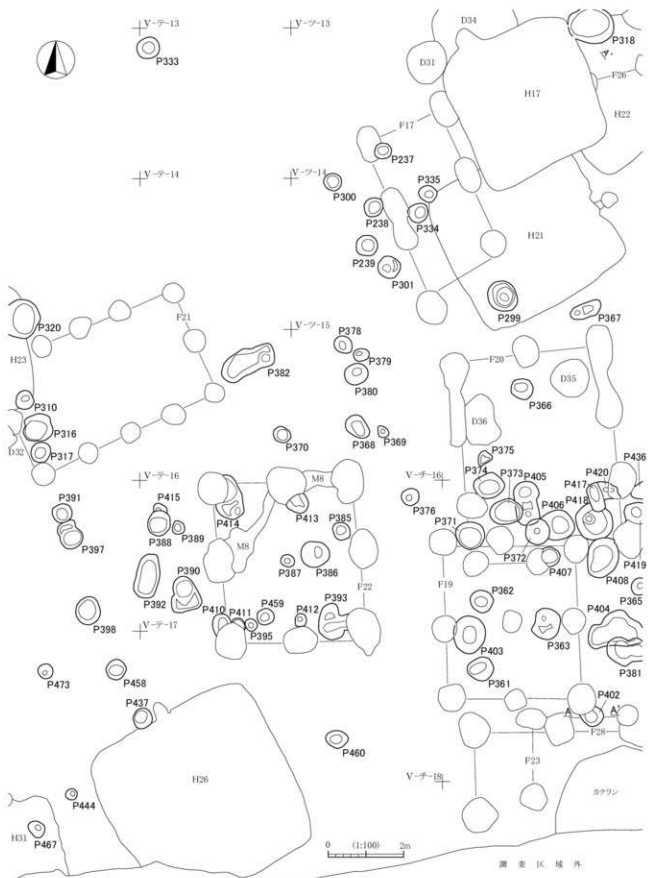
第165図 ピット平面図(4)



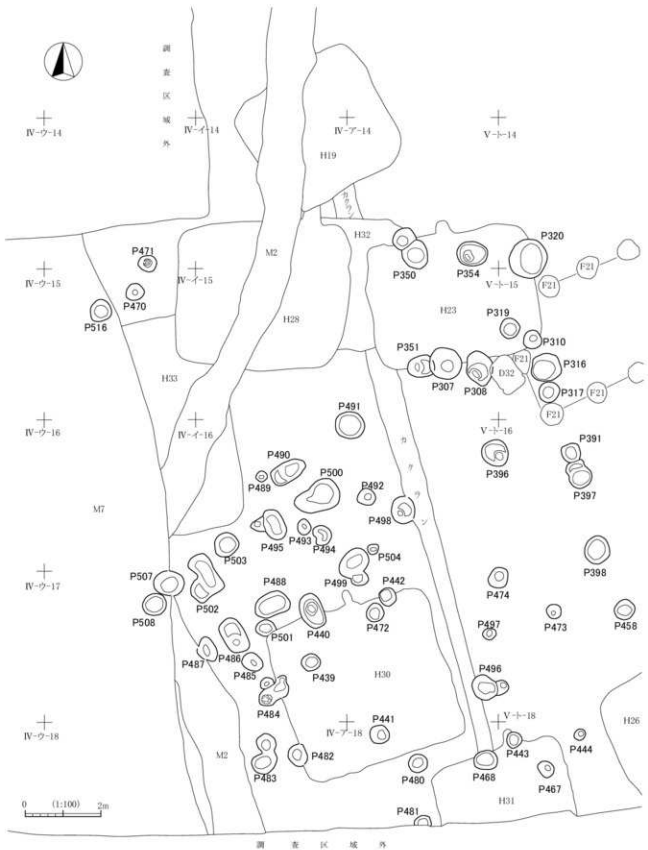
第166図 ピット平面図(5)



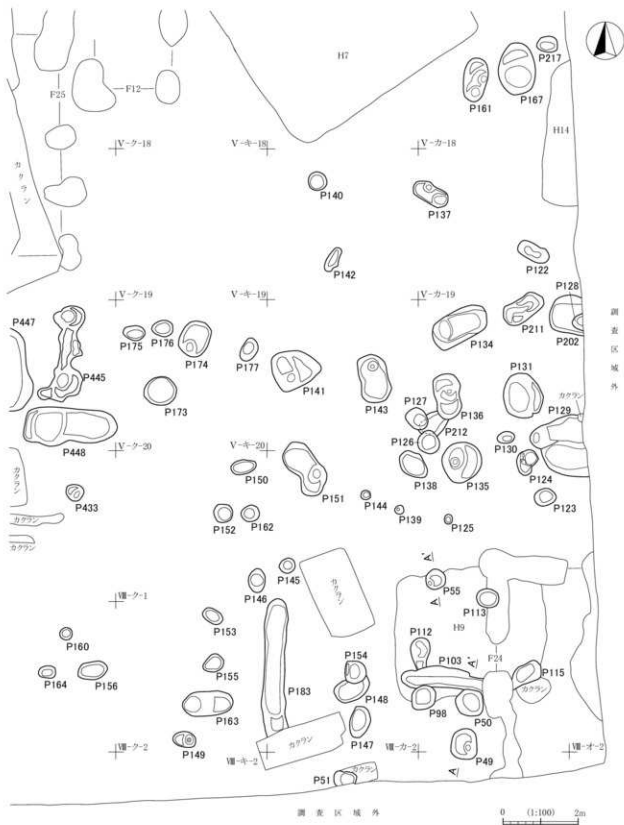
第167図 ピット平面図(6)



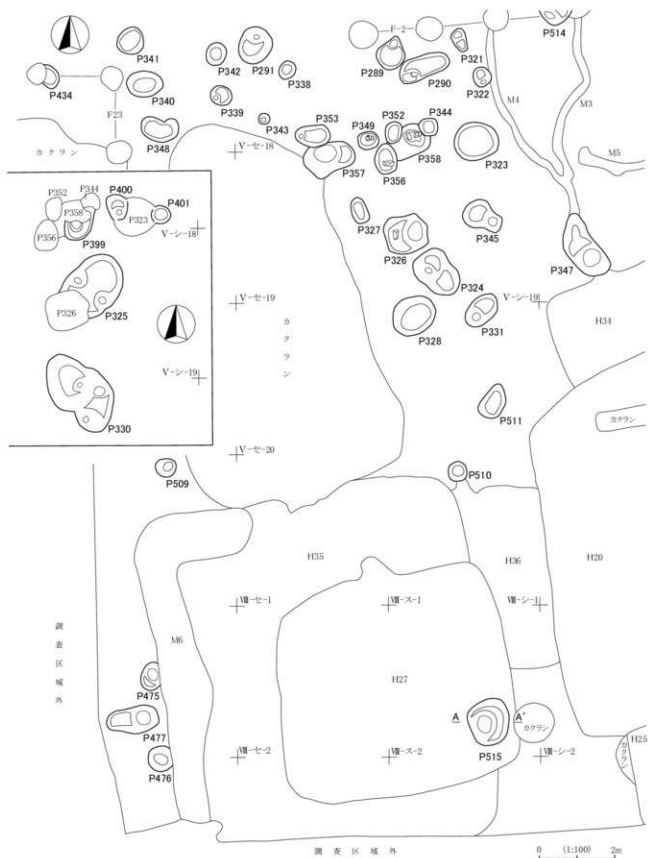
第168図 ピット平面図(7)



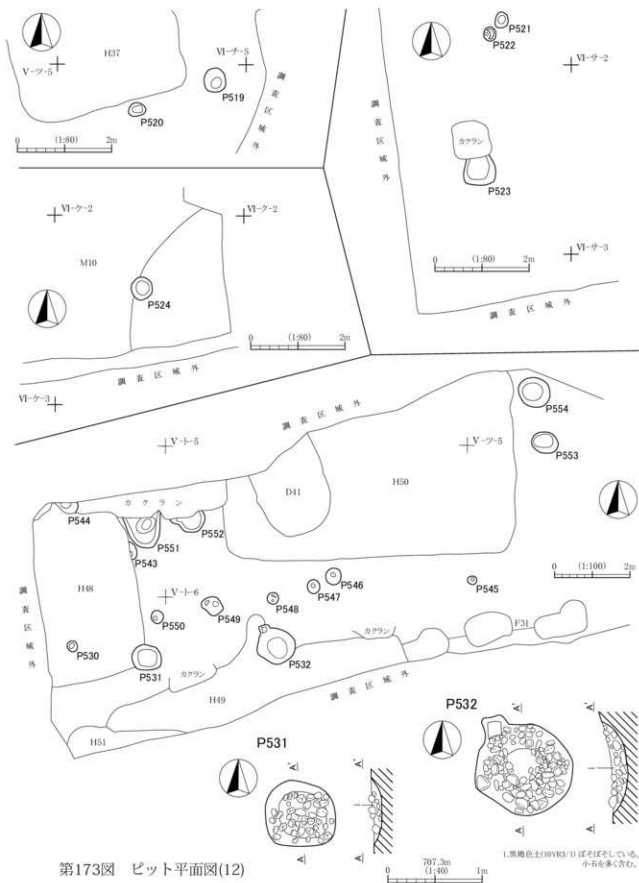
第169図 ビット平面図(8)

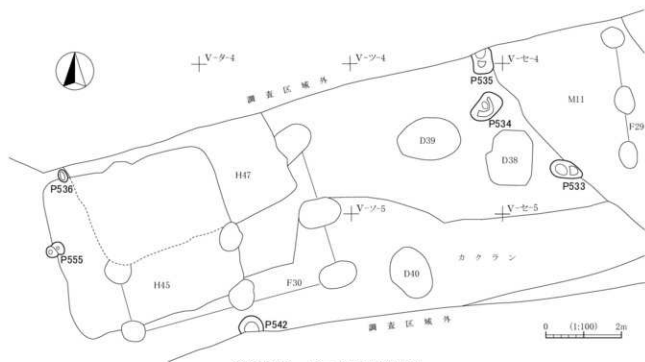
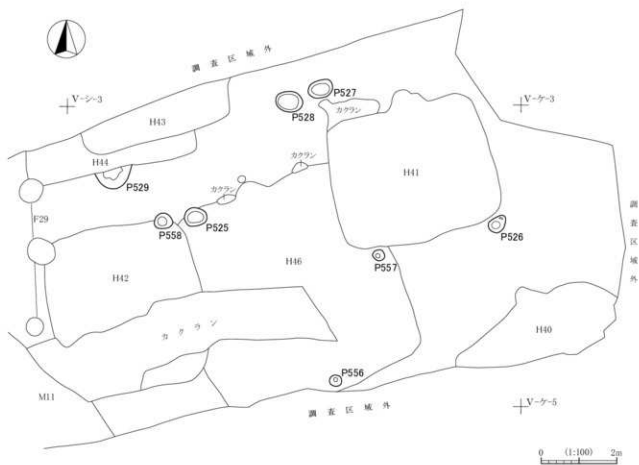


第170図 ピット平面図(9)

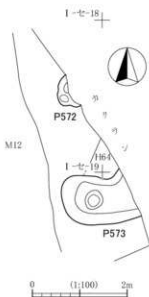
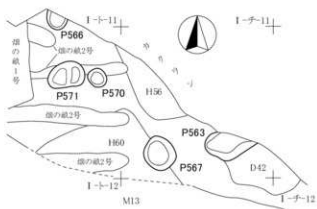
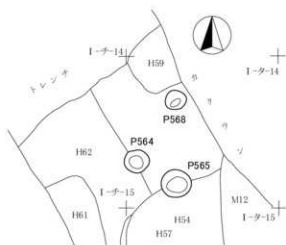
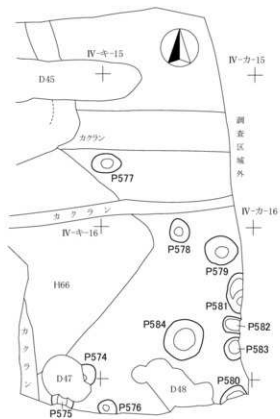
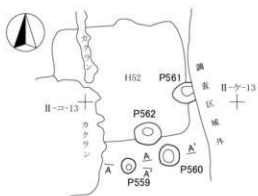
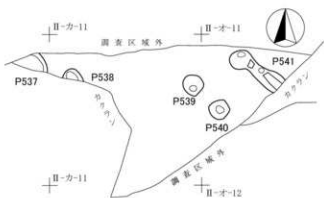


第172図 ビット平面図(11)

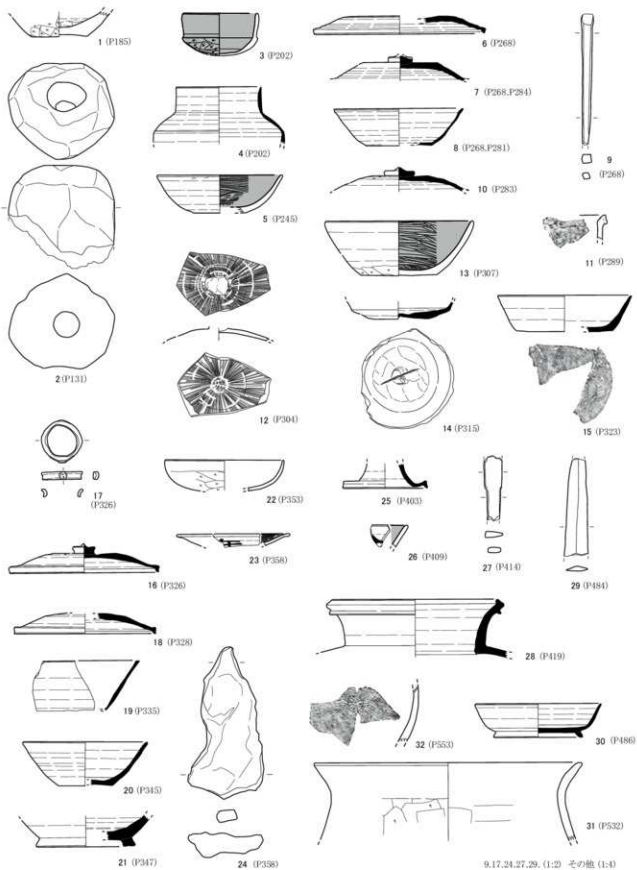




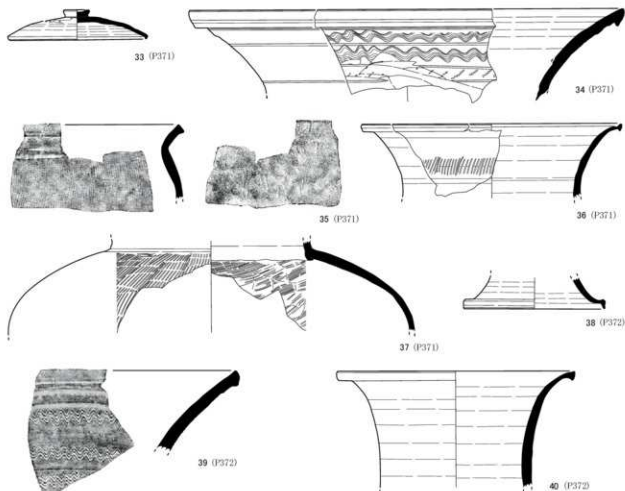
第174図 ビット平面図(13)



第175図 ビット平面図(14)



第176図 ピット出土遺物実測図(1)



第177図 ビット出土遺物実測図(2)

33~40 (1:4)

各ビットから出土した遺物は40点を図示した。奈良・平安時代の所産が多く単独ビットの所産時期も多くはこの時代と考えられる。

2は軽石製の石製品で円形の穴が穿孔されている。二次焼成が確認されることから羽口としての使用が考えられる。3は土師器環であり、小型であるが内外面黒色処理が施されている。4は須恵器短頸壺の口縁部である。胎土が非常に白色で、東海方面からの持ち込みか。11は縄文土器の深鉢口縁部の破片で、形態より堀之内式と考えられる。12は土師器蓋と考えられる。つまみ部が欠損している。外面と内面に細かく丁寧な暗文が放射状に施されている。胎土もよく精錬されており、甲斐型土器の可能性もある。14は須恵器環の底部破片である。底部は無調整で、焼成前に刻まれたヘラ記号が確認できる。15は須恵器環で、底部はヘラケズリが行われている。また焼成前のヘラ記号が一部確認できる。17は銅製リングと考えられる。一部に円形の飾り？が確認できる。23は土師器皿であり、内面は黒色処理されている。外面には墨書が確認でき「午」の可能性もある。26は土師器環であり、内面黒色処理が施されている。外面に墨痕が確認できる。27鉄製品で鉄鏃の一部と考えられる。29は鉄製品で、中央部に稜がある。種別は槍鉋か或いは鉄鏃の一部とも考えられる。32は弥生土器の裏片である。胴部に櫛描波状文が描かれている。弥生時代後期の箱清水式に位置づけられる。34は須恵器甕の口縁部破片である。二段の波状文と最下段に列点文が施されている。38は須恵器高環脚部とした。壺口縁部と迷ったが内面の粗い成形から判断した。39は須恵器甕口縁部で櫛描波状文が施されている。

第7節 土塁

今回の発掘調査では、藤ヶ城本丸の土塁と考えられる部分の調査を行った。藤ヶ城は岩村田藩内藤家の城として、文久2年(1862)に起工し、元治元年(1864)にほぼ完成した。長野県内では籠岡城五稜郭と並び幕末に築城された希少な近世城郭である。城の総面積は39756坪(約13.1ha)である。現在、色彩された「岩村田御新城分間縮図」(P250参照)が地元旧家に伝わっている。調査した土塁は、本丸御殿を囲む東西・南北辺110mの北東コーナー付近にあたると思われる。この本丸御殿部分は現在の岩村田小学校敷地にほぼ重なる。

調査した範囲は、全長68mで一部は学校敷地と道路を区画する土盛りとして、一部は体育館ギャラリー席の基礎として残存していた。なお、岩村田小学校は昭和47年に現在の地に新築移転しており、その前は市民球場が造られていた。市民球場は昭和28年に造成建設されている。この造成時に現在残っている土塁部分はバックネット裏の観覧席として二次利用され、削平を免れたようである。実際、調査IV区北側周辺は球場グラウンド造成の為に水平の掘削が行われており、旧地形が失われていた。

土塁調査は、土塁上に植生する桜の木を伐採後、現状での地形測量を行い、その後残存状況のよさそうな部分をトレンチ調査により土塁構造の把握に務めた。

その結果、部分的に球場のネット支柱基礎等により掘削を受けていたものの、土塁版築の状況が把握できた。特に明瞭な部分はセクションラインD-D'、E-E'、F-F'である。土塁版築は畑畝跡が確認できる旧表土にまず第15層で示した黄色砂層が整地層として確認できる。この層が基底の作業面と考えられ非常に硬化していた。その後、ほぼ水平に同じような土を盛り高さを増していくが、F-F'やG-G'ラインで確認された第8層は上面が明らかに硬化しており、土を盛り上げた時もその都度固めている様子が確認できた。なお、トレンチ部分や土塁盛り土除去時も土塁内に石垣や築地塀的な部分は確認できなかった。調査結果から、築城当時の土塁規模は底面が7~8m、高さが3m近くあったと推定できる。幕末という時期的な理由か、或いは急ぎの築城工事からなのか、土塁版築の状況は急ごしらえ的な印象を受けた。

なお、今回の調査部分はほとんどが学校建設により記録保存となってしまったが、D-D'ライン付近の土塁が一部分のみ現地に現状保存が行われ、説明看板も設置できたことは幸いであった。

土塁からの出土遺物は、40点を図示した。図示した物の中には土塁構築当時ではない後世の遺物も入っている。土塁盛り土内には瓦片が入っている部分があった。1は墨書が確認できる土師器環である。2~4はいわゆるカワラケである。5は内耳部分が確認できる焙烙の胴部破片である。6~13は染付で、6と7は蓋、9・10・12・13は染付小碗である。17と18は瓦質土器で、同一と考えられるが器種不明である。22はキセルの吸口である。23と24は鉄製品で釘と考えられる。26は昭和13年製造の十銭アルミ青銅貨である。36と37はガラス製の薬瓶か。38~40は瓦片である。

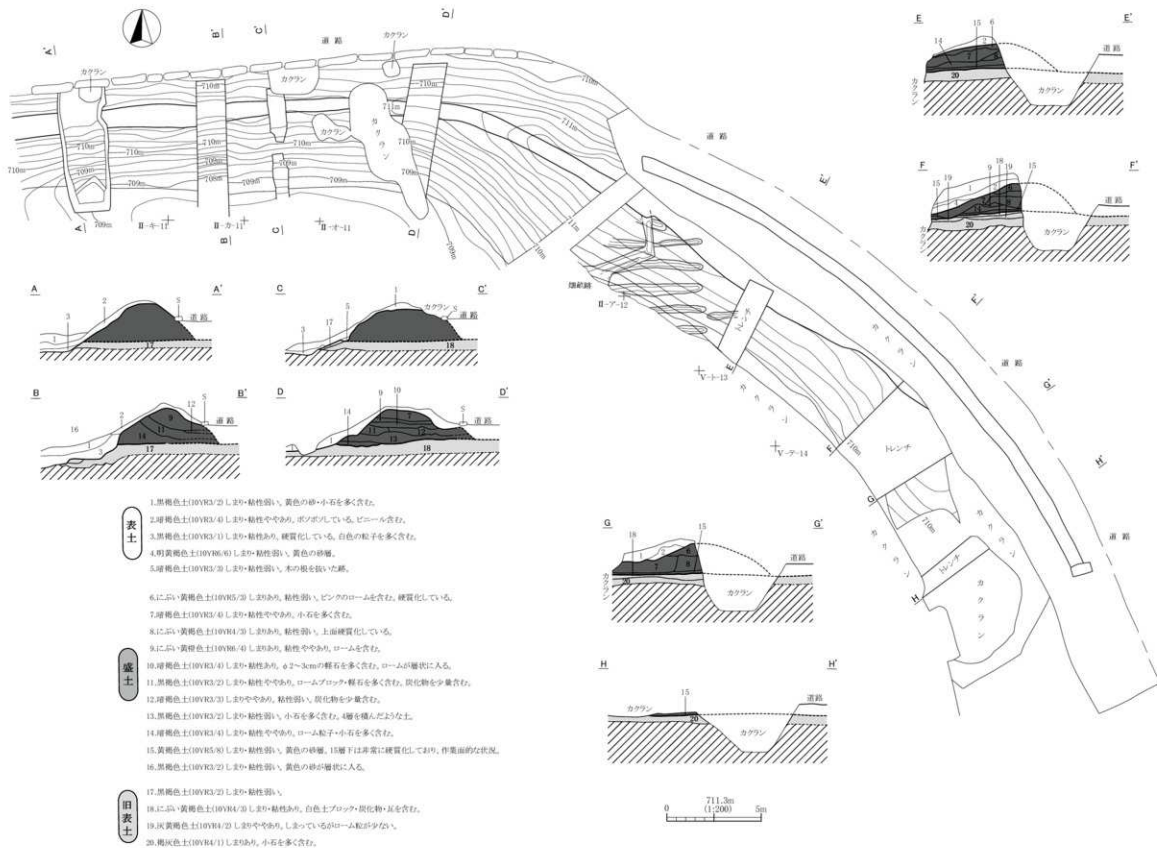
第8節 遺構外出土遺物

今回の発掘調査では、遺構に伴わない出土遺物が多数あった。これらを時代と種別により分類し図化し報告する。

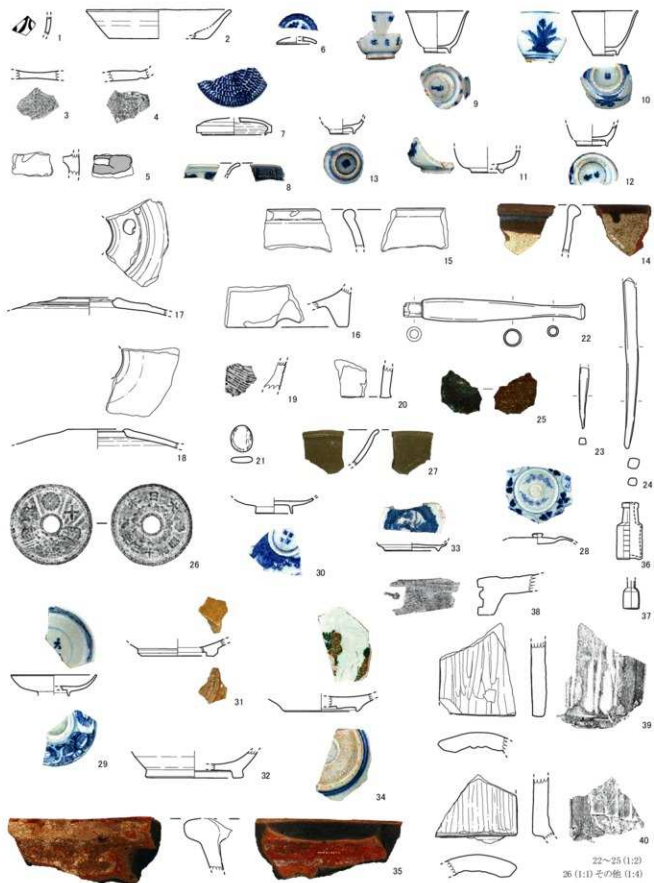
(1)古代 第180図

16点を図示した。1は須恵器環蓋でつまみ部を持たないタイプの蓋である。天井部はヘラケズリを施す。2は須恵器蓋で、天井部外面に墨書と考えられる墨痕が確認できるが判読不明である。3~5は須恵器環である。3と4に墨書が確認できる。6は須恵器甕の口縁部である。7~11は土師器環である。11以外は口ロウ成形である。11は胎土がよく精錬されており、内面に螺旋状と放射状の暗文が施されている。12は土師器の長胴甕、16は土師器のいわゆる胴張甕と考えられる。13は土師器鉢である。14は須恵器蓋で内側に突起状のかえりがある。15は土師器環で、内外面丁寧なミガキが施されている。口唇部がやや内湾する特徴をもつ。本環は在来の古墳時代環に比べ器厚も薄く、形態も異なる。山梨方面の土師器環に似る部分があり、影響下の作り出されたものか。

これらの遺物は古墳時代後期から平安時代に比定できる。

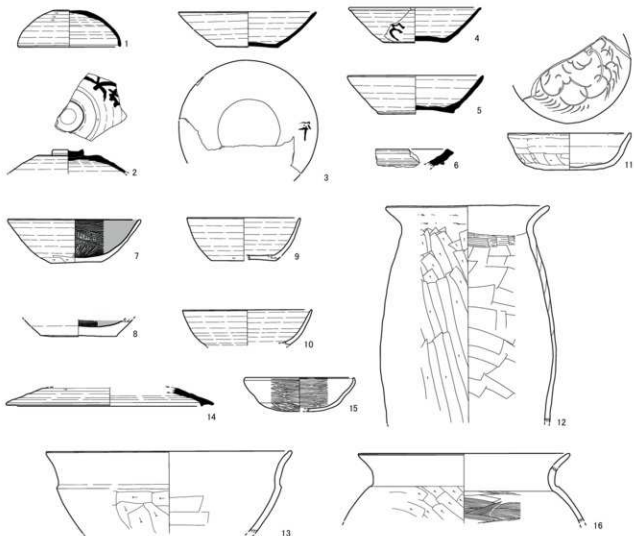


第178図 土層実測図



22~25 (1:2)
26 (1:1) その他 (1:4)

第179図 土塁出土遺物実測図



第180図 遺構外出土遺物実測図(1)

1~16 (1:0)

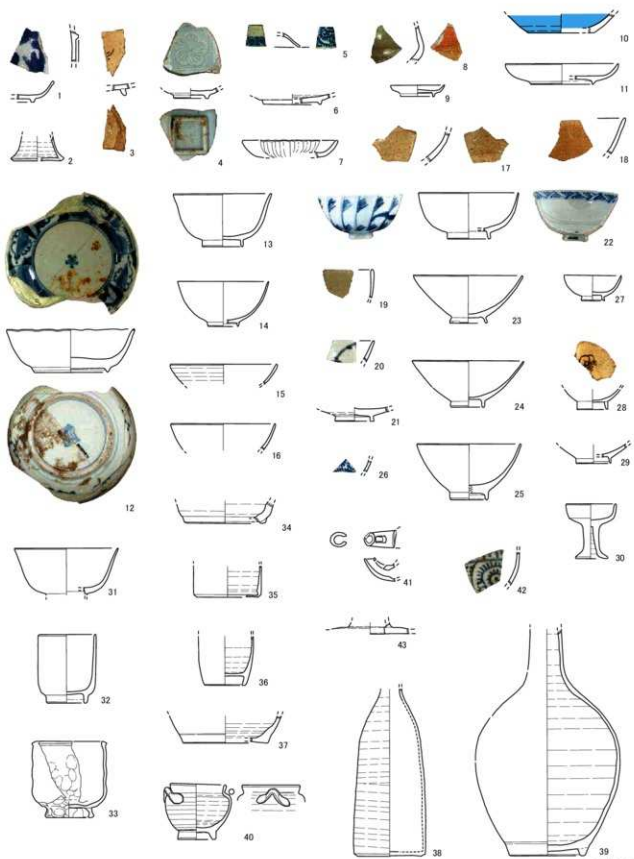
(2)中世 第181図

7点を図示した。1と2は青磁碗の破片である。共に蓮弁文が確認できる。3~7はいわゆるカワラケである。3は外面をケズリにより器形を成形している。口唇部が玉縁状になっている。3~6は内面に煤が付着しており、灯明皿としての使用が考えられる。5は断面中心が黒色化している。7は他のカワラケと胎土が異なり、よく精錬され赤色化している。



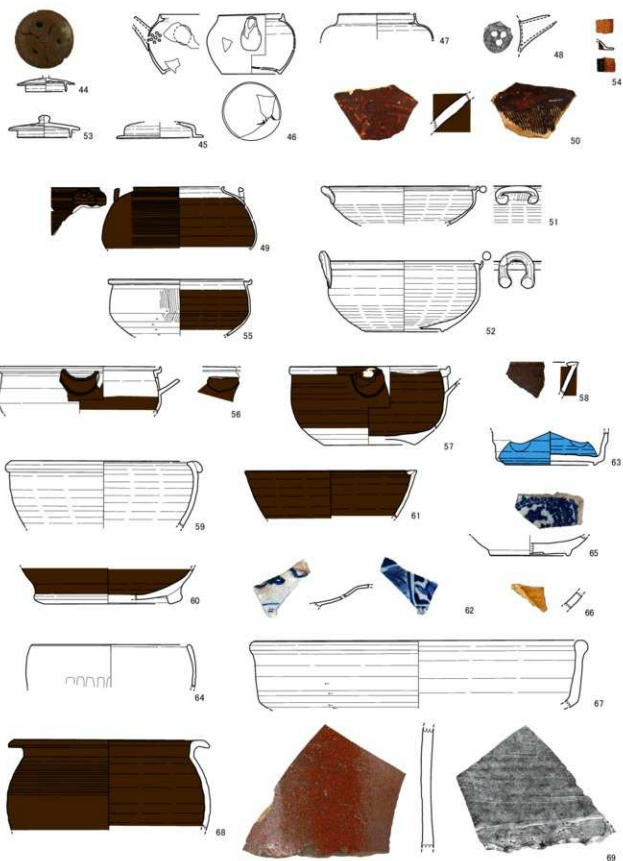
第181図 遺構外出土遺物実測図(2)

1~7 (1:0)



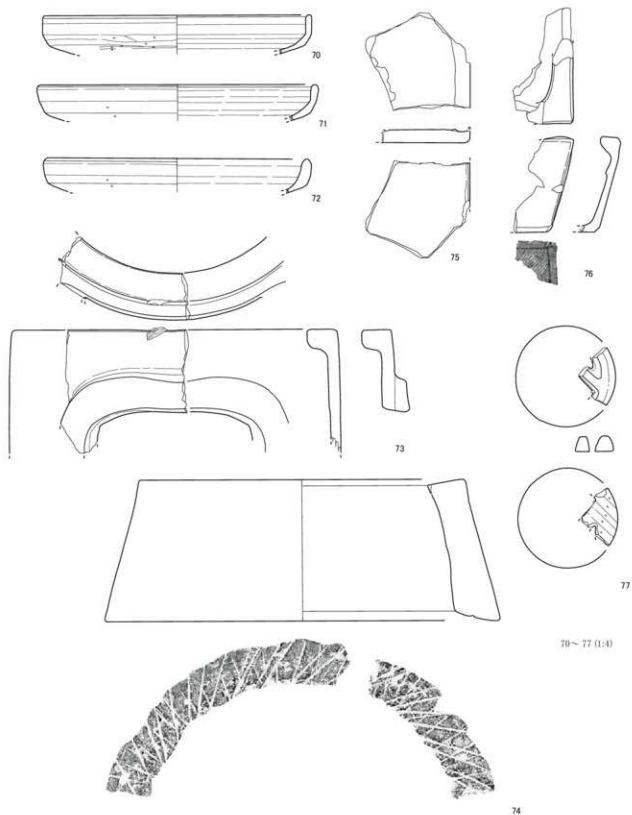
1~43 (1:4)

第182図 遺構外出土遺物実測図(3)



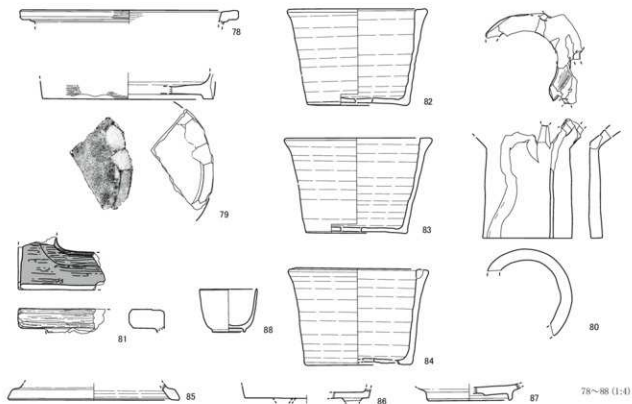
第183図 遺構外出土遺物実測図(4)

44~69 (1:1)

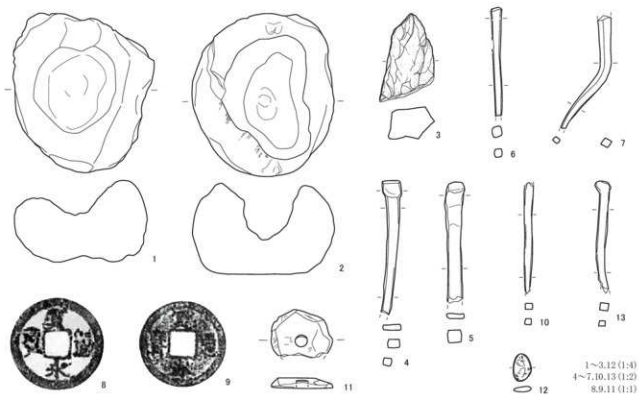


70~77 (1:4)

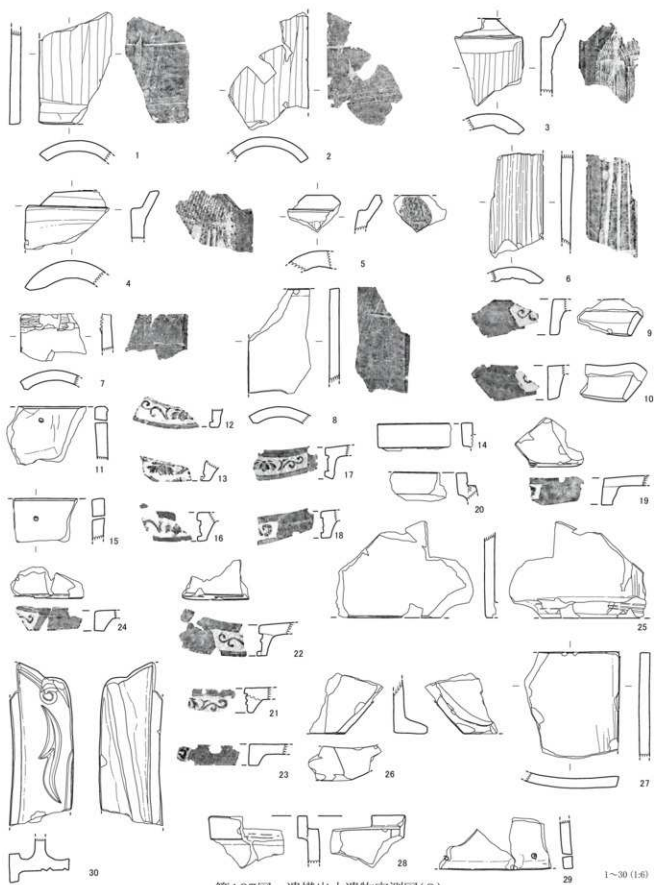
第184図 遺構外出土遺物実測図(5)



第185図 遺構外出土遺物実測図(6)

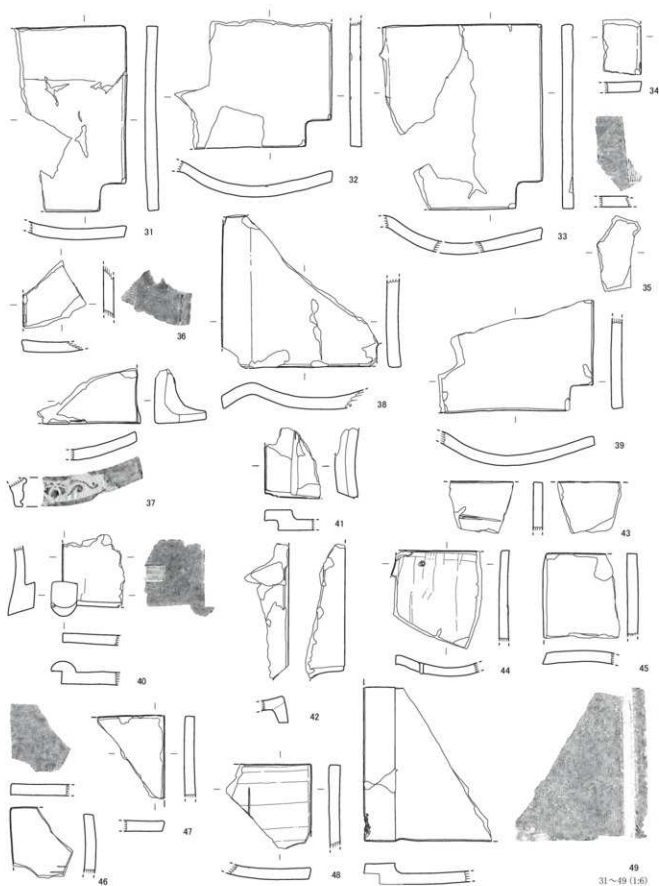


第186図 遺構外出土遺物実測図(7)



第187図 遺構出土遺物実測図(8)

1~30 (1:6)



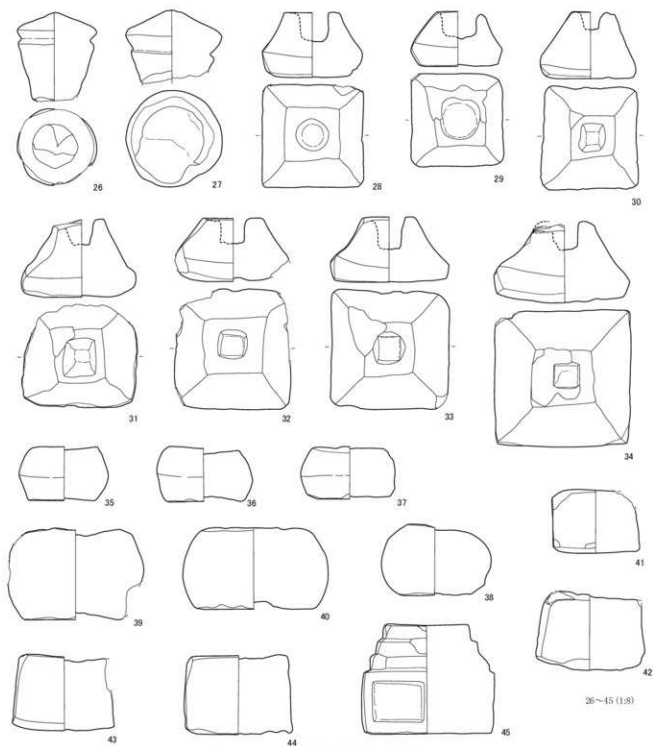
第188図 遺構外出土遺物実測図(9)

49
31~49 (1/6)

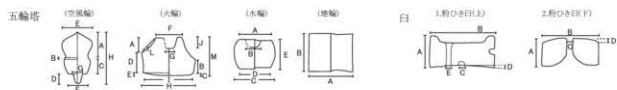


第189图 遺構外出土遺物実測図(10)

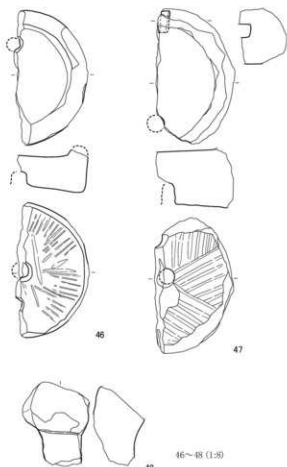
1~25 (1:8)



第190图 遺構外出土遺物実測図(11)



第191图 石製品計測凡例図



第192図 遺構外出土遺物実測図(12)

(3)近世以降 第182~188図

本項では近世以降と考えられる遺物を掲載した。陶磁器類・瓦・石製品・鉄製品である。個別の詳細は「出土遺物観察表」に記載した。

これらすべてが藤ヶ城築城時に持ち込まれたという確証は得られないが、可能性のあるものを選択する。まず、82~84の植木鉢がある。3点とも瓦質である。国内の陶製植木鉢の生産は18世紀第4四半期から本格化したと考えられているので、本製品も18世紀末以降であろう。植木は町人文化としても広がっていた為、城内の遺物とも言い切れないが、残存率もよく築城前の畑地利用には不釣り合いな焼物と考えられる。

瓦は49点を図示した。陶磁器類と同じくすべてが藤ヶ城としての遺物かは確証が得られない。しかし、庶民の家瓦としては30・32・33・49が大型で、陣屋を移築したと言われる藤ヶ城の建物瓦として可能性があろう。ただ、全体をみても冠瓦、のし瓦、鬼瓦などの部位はほとんど出土せず、丸瓦か平瓦である。廃城後に建物の取り壊しで持ち出されたにしても少ない量である。また、軒平瓦は椀瓦の形状で、文様も薦に唐草をモチーフとした物がほとんどであるが、37のみ文様構成が異なる。佐久地域では19世紀初頭から有力農民の瓦葺家屋建設の記録が確認できる。今回の資料も再度の精査が必要であろう。なお、第186図11は石製模造品の白玉である。

(4)五輪塔・石臼 第189~190・192図

ここに示した五輪塔と臼は解体予定の岩村田小学校校舎脇にまとめられて置かれていたものである。これらの遺物が、どのような経緯でここにあるのかは学校の記録にもなく不明であった。また、総括で示した明治6年写しの「岩村田上ノ城反別縮図」にも土地利用として墓地の記載はない。また、地元の古老にお話をお聞きしたが学校周辺に墓地があったとは記憶していなかった。よってこれらの五輪塔は昭和20年代の市民球場建設か昭和40年代の小学校建設時に地中より発見されそのまま残された可能性が高い。

五輪塔の石材はいわゆる「浅間の焼石」と呼ばれた溶岩を利用している。部位の構成は空風輪が27点、火輪が7点、水輪が6点、地輪4点と宝篋院塔の基礎が1点である。この構成には大きかたよりがあることが判る。火輪・水輪と地輪が非常に少ない。これは形状の違いから後世の二次利用による滅失の可能性が指摘でき、先に推測した「地中からの発見」を補強する事実なのかも知れない。

これら五輪塔の築造時期であるが、先行の研究成果を援用すれば、おおむね15世紀後半から16世紀代以降が比定できる。このことから、これらの五輪塔はM7・9号溝状遺構で検出された火葬墓群の埋葬墓部分の墓碑として使用された可能性がある。第V章の出土人骨鑑定でも、「今回の火葬墓からの人骨量は非常に少なく、出土したすべての火葬人骨は、火葬された場所そのまま埋葬されたものでなく、火葬後、埋葬用の墓壇に骨を移して埋葬されたことは間違いない。」と述べられている。火葬墓の下限が出土した古銭より16世紀代である事を考えると、火葬墓とこれら五輪塔は先に述べたような関係にあることが十分に考えられる。

第V章 自然科学分析

第1節 藤ヶ城跡出土遺物自然科学分析

株式会社 アーキジオ

はじめに

長野県佐久市に所在する藤ヶ城跡は、江戸時代に信濃国佐久郡および小県郡の一部を支配した岩村田藩により築城され、廃藩置県により未完成となった城郭跡である。

本分析調査では、炭化材および炭化種実を対象に、植物利用について検討することを目的として、同定を実施した。

1.炭化材の樹種同定

1.試料

試料は、各遺構から出土した炭化材36試料である。多くの試料は、タッパー内に複数の炭化材片が認められ、多い試料では100片を超える。それぞれの試料は、1～3点の分析点数が設定されており、合計87点を抽出して同定を実施する。

2.分析方法

炭化材の抽出は、目視で樹種が異なると判断できる時は、異なる樹種を選択する。樹種に違いが見られない場合には、形状・木取り・大きさに注目して設定点数を選択する。

炭化材は、自然乾燥させた後、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面図を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にしている。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にしている。

3.結果

樹種同定結果を表1に示す。これらの炭化材は、針葉樹3分類群(マツ属複雑管束亜属・サワラ・ヒノキ科)と広葉樹20分類群(サワグルミ・ヤナギ属・ハンノキ属ハンノキ亜属・クマシデ属イヌシデ節・ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケヤキ・モクレン属・イワガラミ・バラ科ナシ亜科・キハダ・ヌルデ・カエデ属・アワブキ属・ミズキ属・クマノミズキ類・タカノツメまたはコシアブラ・トネリコ属)に同定された。なお、OT22①(分析No.34-36)には炭化材の他に骨片も認められたが、種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亜属 (Pinus subgen. Diploxylon) マツ科
軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・サワラ (Chamaecyparis pisifera (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・サワグルミ (Pterocarya rhoifolia) クルミ科

散孔材で、道管は比較的大径、単独または2-4個が複合して散射し、年輪界付近で径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性～異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・ヤナギ属 (Salix) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (Alnus subgen. Alnus) カバノキ科

散孔材で、道管は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの集合放射組織とがある。

・クマシデ属クマシデ節 (Carpinus sect. Distegocarpus) カバノキ科

散孔材で、道管は単独または2-4個が放射方向に複合して配列する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-40細胞高のもの集合放射組織とがある。

・ブナ属 (Fagus) ブナ科

散孔材で、道管は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercus subgen. Quercus sect. Prinus) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの複合放射組織とがある。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ケヤキ (Zelkova serrata (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・モクレン属 (Magnolia) モクレン科

散孔材で、道管は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-40細胞高。

・イワガラミ (Schizophragma hydrangeoides Sieb. et Zucc.) ユキノシタ科イワガラミ属

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-80細胞高以上となる。

・バラ科ナシ亜科 (Rosaceae subfam. Maloideae)

散孔材で、道管は単独または2-5個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外でやや急激に径を減じたのち塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

・ヌルデ (*Rhus javanica* L.) ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圏部は4-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では2-5個が塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-4細胞幅、1-30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・モチノキ属 (*Ilex*) モチノキ科

散孔材で、道管は単独または2-6個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

・アワブキ属 (*Meliosma*) アワブキ科

散孔材で、道管は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性、1-3細胞幅、1-60細胞高。

・クマノミズキ類 (*Swida*) ミズキ科ミズキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-50細胞高。

ミズキ属のクマノミズキあるいはヤマボウシ属のヤマボウシと考えられる。

・ミズキ属 (*Swida*) ミズキ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して残存し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-30細胞高。

クマノミズキ類とは異なる組織を持っており、消去法でミズキの可能性もある。

・タカノツメまたはコシアブラ (*Evodiodaphne innovans* (Sieb. et Zucc.) Nakai or *Acanthopanax sciadophylloides* Fr. et Sav.) ウコギ科

環孔材で、孔圏部は1列であるが、大径の道管の接線方向の配列は疎らであり、大径の道管が無い部分では孔圏部でも小径の道管が認められる。小径の道管は単独または2-4個が塊状あるいは放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性～同性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

タカノツメとコシアブラは木材組織がよく似ており、今回の試料では炭化の影響もあって区別できなかった。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圏部は接線方向に疎な1列、孔圏外で急激に径を減じたのち、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

4. 考察

炭化材は、多くの試料で複数断片が含まれており、多い試料では100片を越える。炭化材には不定形の破片が多いが、芯持丸木やミカン割状の試料もある。また、点数は少ないが、先端を斜めに尖らせる加工が見られる炭化材や切断痕と考えられる痕跡が見られる炭化材もある。

同定された各種類の特徴をみると、針葉樹のマツ属複雑管束亜属は、本州ではアカマツまたはクロマツである。二次林等に生育する常緑高木であり、木材は針葉樹としては重硬な部類に入り、強度と

保存性が高い。サワラとヒノキ科は山地に生育する常緑高木で、木材は木理が通直で割裂性と耐水性が高い。広葉樹のサワグルミは、溪畔に生育する落葉高木で、木材は軽軟な部類に入り、強度と保存性は低い。ヤナギ属は、属としては河畔から山地まで広く分布する落葉低木～高木で、木材は軽軟で強度と保存性は低い。ハンノキ亜属は、河畔の湿地等に生育する落葉高木で、木材は比較的重硬な部類に入る。クマシデ節は、山地・丘陵地の谷筋等に生育する落葉高木で、木材は重硬・緻密で強度が高い。ブナ属は、山地の落葉広葉樹林において主要な構成種となる落葉高木で、木材は重硬で強度が高いが、加工は容易で保存性は低い。コナラ節は二次林や山地の落葉広葉樹林において主要な構成種となる落葉高木で、木材は重硬で強度が高い。クリは二次林等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。ケヤキは、河畔・溪畔に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。モクレン属は二次林や溪畔等に生育する落葉高木で、木材は軽軟な部類に入り、強度と保存性は低い。イワガラミは、林縁部等に生育するつる植物である。木材は、現在では利用されることが少なく、材質的な資料が無いため、詳細は不明である。ナシ亜科は海岸林、二次林、山地等に生育する分類群を含む。常緑広葉樹も含まれるが、本地域の植生を考慮すれば落葉性の種類と考えられる。落葉性の種類は低木から高木まであり、木材は重硬・緻密で強度が高い。キハダは河畔等に生育する落葉高木で、木材は軽軟で強度が低いが、耐朽性は高いとされる。ヌルデは河畔や林縁部等に生育する落葉小高木で、木材は軽軟な部類に入り、強度は低い。カエデ属は、二次林に、河畔、山地などに広く分布する落葉低木～高木であり、木材は重硬・緻密で強度が高い。モチノキ属は、本地域の植生を考慮すれば、落葉性の種類と考えられる。山地・丘陵地等に生育する落葉高木であり、木材は比較的重硬で強度が高い。アワブキ属は、山地に生育する種類で、常緑の種類もあるが、本地域では落葉の種類と考えられる。木材はやや重硬な部類に入る。ミズキ属とクマノミズキ類は、二次林等に生育する落葉高木で、木材は重硬・緻密で強度が高い。タカノツメとコシアブラは山地・丘陵地の林縁部等に生育する落葉高木で、木材はいずれも軽軟な部類に入り、強度と保存性は低い。トネリコ属は、河畔等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度が高い。

炭化材は中世（15～16世紀代）の火葬墓内より出土し、燃料としての使用が考えられるが、23種類の木材が認められ、重硬な木材から軽軟な木材まで様々な材質の木材が利用されたことが推定される。確認された種類は、現在の佐久市周辺において分布が確認できる種類であり、周辺に生育していた樹木を利用したものと考えられる。今回同定を実施した炭化材については、出土状況などの発掘調査成果を含めた総合的な解析を行い、当該期の木材利用について検討することが望まれる。

II. 種実同定

1. 試料

試料は、D32(No.88)とOT19(No.89)から出土した炭化種実2点である。試料は、乾燥した状態で容器に入っている。

2. 分析方法

試料を肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察する。炭化種実の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示す。また、各種の写真を添付し、炭化種実の大きさをデジタルノギスで計測した結果等を一覧表に併記して同定根拠とする。分析後は、炭化種実を容器に入れて返却する。

3. 結果

同定および計測結果等を表2、炭化種実各種の写真を図版10に示す。

D32(No.88)は炭化した栽培種のモモの核に、OT19(No.89)は炭化した栽培種のイネの穎に同定された。以下、形態的特徴等を述べる。

・モモ(*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属 写真図版番号1

D32(No.88)より、炭化した核(内果皮)の破片が5個(0.50g)同定された。合計半分未満である。核は黒色、完形ならばやや扁平な広楕円体で、頂部がやや鋭く尖る。内果皮表面には縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、粗いしわ状に見える。出土炭化核のうち、接合する2個の計測値は、残存長18.72mm、残存幅13.61mm、残存厚6.32mmを測る。腹面に円状に欠損する箇所がみられ、ネズミ類による食痕の可能性がある。内面には種子1個が入る広卵状の窪みがある。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属 写真図版番号2

OT19(No.89)より、灰化した穎(果)が1個(0.01g未満)同定された。穎果(穎)は暗灰白色、やや扁平な長楕円体を呈す。頂部を僅かに欠損し、残存長5.75mm、幅2.86mm、厚さ1.41mmを測る。基部には径1.0mm程度の斜切状円柱形の果実序柄(小穂軸)と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合して稲籾を構成する。果皮は薄く、表面には微細な顆粒状突起が縦列し、ふ毛の残存が確認される。穎果内に1個入る胚乳を欠損しており、欠損部より確認される穎内部は中空である。

4.考察

炭化種実同定の結果、栽培種のモモ、イネが確認された。果樹のモモ、穀類のイネは、当時の藤ヶ城周辺で利用された植物質食料と示唆され、火を受けたとみなされる。また、D32より出土したモモは、ネズミ類による食害を受けた可能性がある。OT19より出土したイネは、ふ毛が残る穎果が灰化した状態で確認された。灰化後の保存状態が極めて良好な条件下で埋積したと示唆される。

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版),東北大学出版会,678p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種—,誠文堂新光社,272p.

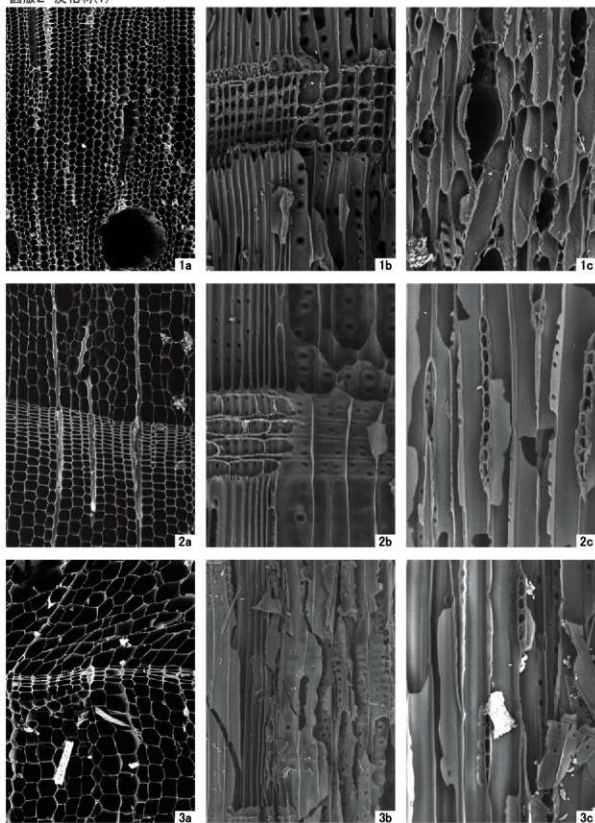
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

図版1 炭化材の形状と骨片



- 1.分析No.5
- 2.分析No.16
- 3.分析No.21
- 4.分析No.74
- 5.分析No.85
- 6.OT22-①の骨片(分析No.34-36)

図版2 炭化材(1)



1. マツ属複維管束亜属(分析No.50)

2. サワラ(分析No.29)

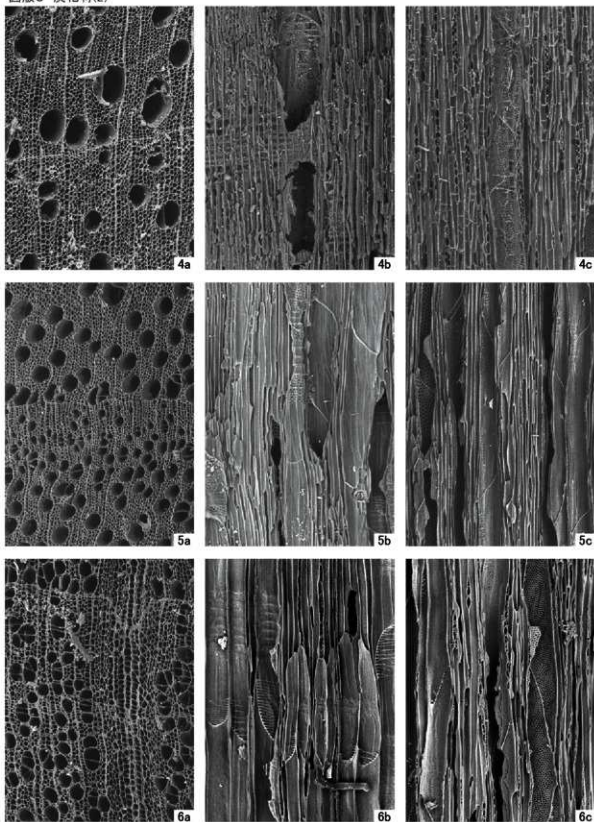
3. ヒノキ科(分析No.68)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

100 μ m a

100 μ m b, c

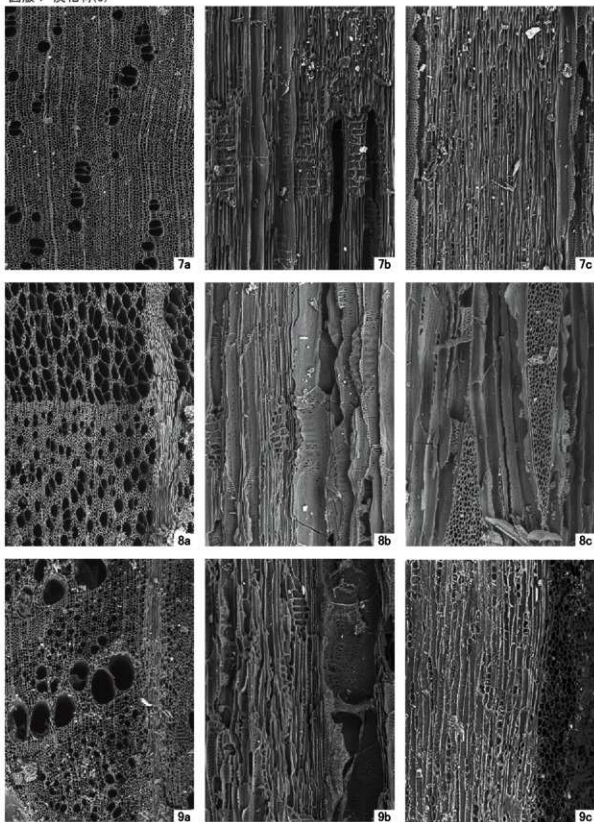
図版3 炭化材(2)



4. サワグルミ(分析No.52)
 5. ヤナギ属(分析No.24)
 6. ハンノキ属ハンノキ亜属(分析No.32)
 a:木口,b:柱目,c:板目

100 μ m,a
 100 μ m,b,c

図版4 炭化材(3)



7.クマシデ属クマシデ節(分析No.23)

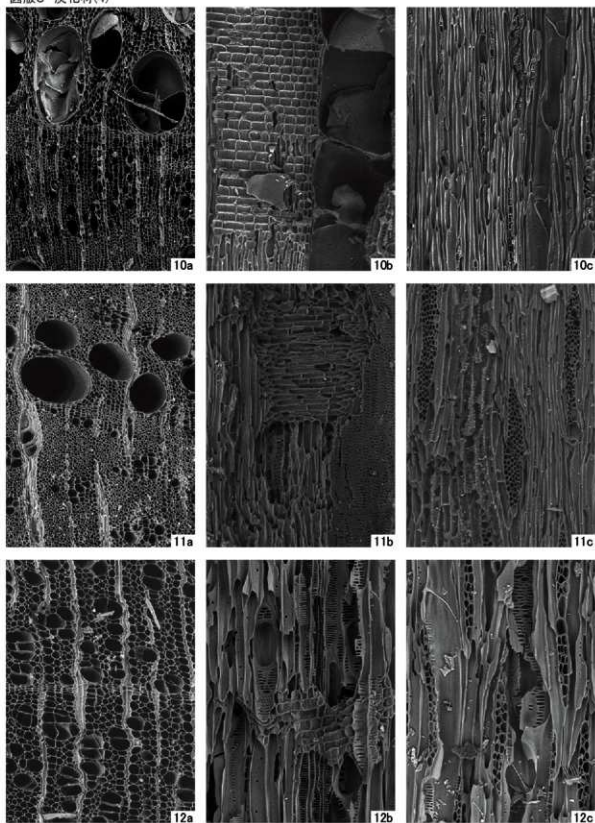
8.フナ属(分析No.5)

9.コナラ属コナラ亜属コナラ節(分析No.13)

a:木口,b:柱目,c:板目

100 μ m a
100 μ m b,c

図版5 炭化材(4)



10. クリ(分析No.30)

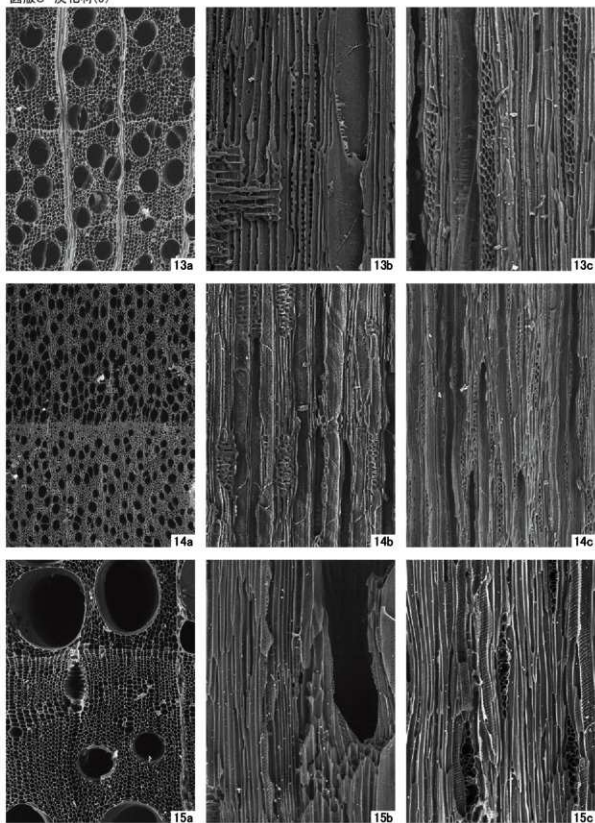
11. ケヤキ(分析No.83)

12. モクレン属(分析No.10)

a:木口,b:柁目,c:板目

100 μ m:a
100 μ m:b,c

図版6 炭化材(5)

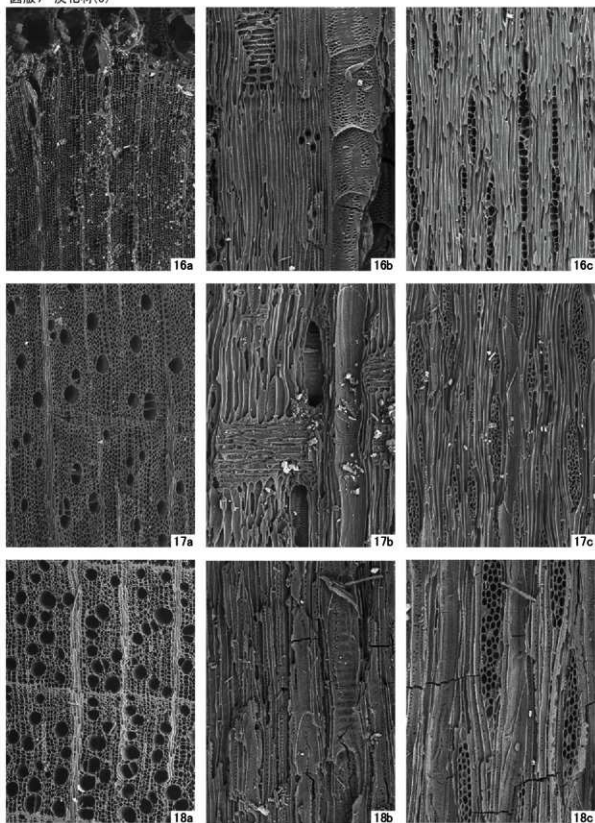


13.イワガラミ(分析No.40)
14.バラコナン亜科(分析No.33)
15.キハダ(分析No.80)

a:木口,b:柁目,c:板目

100 μ m:a
100 μ m:b,c

図版7 炭化材(6)



16.ヌルデ(分析No.75)

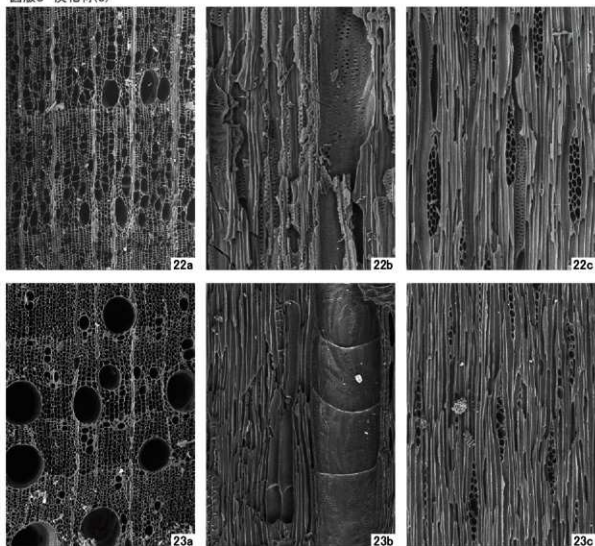
17.カエデ属(分析No.27)

18.モ子ノキ属(分析No.85)

a.木口,b.柱目,c.板目

100 μ m:a
100 μ m:b,c

図版9 炭化材(8)

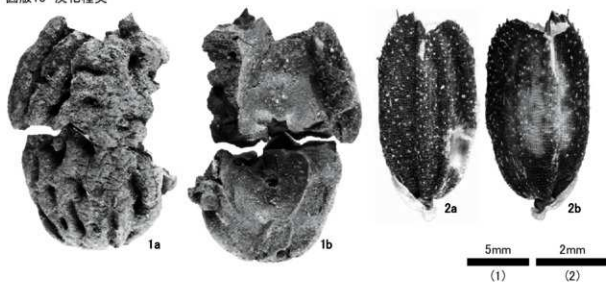


22.タカノツメまたはコシアブラ(分析No.78)

23.トネリコ属(分析No.61)

a:木口.b:柱目.c:板目

図版10 炭化種実



1.モモ 核(No.88:D32)

2.イネ 穎(No.89:OT19)

表2. 種実同定結果

No.	遺構名	種名	部位	状態	個数	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
88	D32	モモ	核	破片	5	0.50	18.72 +	13.61 +	6.32 +	2個接合計半分未満、 腹面食痕の可能性
89	OT19	イネ	穎	完形	1	<0.01	5.75 +	2.86	1.41	頂部僅かに欠損、 反化ふ毛残存

注 計測はデジタルノギスを使用し、モモは2個を接合した状態で計測した。

表1. 樹種同定結果

遺構名	No.	点数	分析 No.	形状	種類	備考	遺構名	No.	点数	分析 No.	形状	種類	備考
OT2	2	1	1	破片	ミズキ属		OT25	3	47	1	ミカン割状	ブナ属	
				2	2	ミカン割状					バラ科ナシ亜科		48
OT4	2	4	3	ミカン割状	ブナ属		OT26	1	50	1	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
				5	半截状	クマシデ属イヌシデ節					先端加工有	51	破片
OT5	3	6	6	半截状	ブナ属		OT28	1	51	1	半截状	カエデ属	
				7	ミカン割状	ブナ属						52	芯持丸木
OT10	1	8	8	ミカン割状	ブナ属		OT29	1	52	1	芯持丸木	サワグルミ	
				9	ミカン割状	ブナ属						53	破片
OT11	1	9	9	ミカン割状	ブナ属		OT30	2	53	2	破片	カエデ属	
				10	破片	モクレン属						54	破片
OT12	1	10	10	破片	モクレン属		OT31	2	55	2	ミカン割状	カエデ属	節付近
				11	芯持丸木	クリ						56	ミカン割状
OT13	3	12	12	ミカン割状	ブナ属		OT32	3	57	3	半截状	ブナ属	
				13	半截状	コナラ属コナラ亜属コナラ節						58	半截状
OT14	3	15	15	板目状	ブナ属		OT33	1	60	1	ミカン割状	カエデ属	
				16	板目状	ブナ属					切断痕?有	61	芯持丸木
OT15	1	17	17	半截状	カエデ属		OT34	3	62	3	芯持丸木	クリ	小径
				18	半截状	ニレ属						63	半截状
OT17	1	19	19	ミカン割状	バラ科ナシ亜科		OT35	2	64	2	芯持丸木	ハンノキ属ハンノキ亜属	
				20	ミカン割状	ケヤキ					切断痕?有	65	ミカン割状
OT18	1	21	21	半截状	ブナ属		OT36	2	66	2	芯持材	クリ	
				22	半截状	ケヤキ						67	芯持丸木
OT19	1	23	23	半截状	クマシデ属イヌシデ節		OT37	2	68	2	板目状	ヒノキ科	
				24	半截状	ヤナギ属						69	ミカン割状
OT20	3	25	25	半截状	クマシデ属イヌシデ節		OT38	2	70	2	ミカン割状	ブナ属	
				26	半截状	ケヤキ						71	芯持丸木
OT21	2	27	27	ミカン割状	カエデ属		OT39	3	72	3	半截状	クリ	
				28	破片	ブナ属						73	破片
OT22	1	29	29	板目状	サワラ		OT40	3	74	3	芯持丸木	バラ科ナシ亜科	先端加工有
				30	半截状	クリ						75	半截状
OT23	1	31	31	ミカン割状	クマノミズキ類		OT41	1	76	1	半截状	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
				32	芯持材	ハンノキ属ハンノキ亜属						77	ミカン割状
OT24	1	33	33	ミカン割状	バラ科ナシ亜科		OT42	3	78	3	ミカン割状	クマノミズキ類	
				34	ミカン割状	ブナ属						79	ミカン割状
OT25	1	35	35	ミカン割状	クリ	骨片有	OT43	3	80	3	半截状	キハダ	
				36	ミカン割状	クリ						81	ミカン割状
OT26	1	37	37	芯持丸木	ブナ属		OT44	3	82	3	芯持材	モクレン属	
				38	半截状	クリ						83	ミカン割状
OT27	1	39	39	分節状	クリ		OT45	3	85	3	芯持丸木	モチノキ属	先端加工有
				40	破片	イワガラミ						86	ミカン割状
OT28	1	41	41	ミカン割状	ブナ属		OT46	3	87	3	ミカン割状	カエデ属	
				42	ミカン割状	ブナ属						88	ミカン割状
OT29	1	43	43	半截状	ブナ属		OT47	3	89	3	半截状	クマノミズキ類	
				44	破片	クマノミズキ類						90	半截状
OT30	1	45	45	半截状	クマノミズキ類		OT48	3	91	3	ミカン割状	クマノミズキ類	
				46	ミカン割状	クマノミズキ類						92	ミカン割状

第2節 藤ヶ城跡出土人骨鑑定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

藤ヶ城跡の発掘調査は平成27年より行われ、縄文時代の落とし穴、古墳～奈良時代の住居跡、中世の火葬墓など複数の遺構が確認されている。

本分析調査では、中世の火葬墓から出土した人骨について鑑定を行い、年齢・性別・病歴・傷痕等について検討する。

1. 試料

試料は、いずれも中世の火葬墓から出土した人骨で、OT1～26、OT28～43、OT44-1～OT44-3、OT45の47試料である(表1)。いずれの試料にも複数の破片が含まれている。

表1. 試料一覧

資料No.	No.	遺構名	重さ (g)	収納ケース	備考
No. 1	1	OT1	810	A	
	2	OT2	680	B	北宋銭4
	3	OT3	710	A	
	4	OT4	320	B	古銭4
	5	OT5	400	C	北宋銭1
	6	OT6	370	B	明・北宋銭6
	7	OT7	410	B	北宋銭1
	8	OT8	220	B	
No. 2	9	OT9		テンバコ1	土葬 北宋銭3
	10	OT10	830	A	明・北宋銭8
	11	OT11	540	B	北宋・金銭5
	12	OT12	1070	A	北宋銭3
	13	OT13	280	B	カワラケ 古銭1
	14	OT14	590	B	明・北宋銭5
	15	OT15	540	B	古銭2
	16	OT16	310	B	明・北宋銭6
No. 3	17	OT17	10	D	カワラケ 明・北宋銭4
	18	OT18	760	A	
	19	OT19	1410	A	古銭2
	20	OT20	10	D	
	21	OT21	1290	B	明銭1
	22	OT22	970	A	南宋銭5
	23	OT23	230	B	古銭1
	24	OT24	750	B	北宋銭5
No. 4	25	OT25	850	B	
	26	OT26	1460	A	明銭4
	27	OT28	190	C	
	28	OT29	430	C	北宋銭3
	29	OT30	270	C	
	30	OT31	530	B	
	31	OT32	790	A	
	32	OT33	90	C	
No. 5	33	OT34	500	B	明・北宋銭4
	34	OT35	220	C	明・北宋銭3
	35	OT36	1360	A	明・北宋銭5
	36	OT37	460	C	
	37	OT38	410	C	古銭1
	38	OT39	260	C	
	39	OT40	80	C	
No. 6	40	OT41	40	D	
	41	OT42	120	B	土葬
	42	OT43	460	B	古銭2
	43	OT44-1	120	B	土葬
			50	C	土葬
	44	OT44-2	300	C	
	45	OT44-3	50	D	
46	OT45	430	B		

容器大きさ

Aタイプ	34×28×11 cm
Bタイプ	30×22×10 cm
Cタイプ	22×16×7 cm
Dタイプ	12×8.5×3 cm

2.分析方法

出土した火葬骨はいずれの資料も非常に小さな骨片で、部位の特定のかなわぬ骨片も多かった。限られた資料ではあるが、観察できた部位については遺構（墓墳）ごとに鑑定を行った。また鑑定した人骨については鑑定カルテにまとめて記した。

また、歯は歯冠と歯根に分かれているものが多く、かつ歯冠や歯根が更なる細片となっているものが多かった。また、明らかに複数個体であることが確認できているものの、それぞれの歯がいずれの個体に属するかの判定はできない。そのため、歯種が同定できたもの以外は、上顎歯、下顎歯、切歯、臼歯など歯種の種類の記事にとどめた。

接合可能な資料については、クリーニングの後にアセトンで希釈したBUTVALで接着した。なお、資料の鑑定にあたり京都大学大学院医学研究科附属先天異常標本解析センターの橋本裕子氏には多くの助言をいただきました。記して深く感謝申し上げます。

3.結果

各遺構から出土した人骨、特に火葬骨は1遺構の出土量が2kgに満たないものばかりであった。一般的に火葬した人骨の重量が男性はおおよそ3kg、女性は2.5kgと推定されているため、それぞれの遺構から出土した人骨の重量から判断すると1個体である可能性が高い。しかし、鑑定の結果、重複する部位や明らかに年齢の異なる骨が同じ遺構から確認でき、それぞれの遺構は1個体～複数個体であることが判明した。

鑑定結果は表2に示し、詳細な部位については図1に示す。なお、表2は遺構ごとに表記するが、重複する箇所、あるいは重複しなくても明らかに別個体と判断される部位を右側に示す。また、図1では、出土部位を基本赤色で示すが、重複する部位がみられる箇所は青色で表記する。

上顎骨、下顎骨において歯槽部が比較的良好な状態で保存されている資料に関しては、死後脱落歯槽開放の確認できた部分については上顎と下顎に分けて歯式で示した。以下、遺構ごとに示す。

1) OT1

全身の骨格の骨片が多く保存されている。被熱により全骨片に顕著な収縮が認められる。全身がほぼ均一に火を受けており、比較的硬質であることから、焼成温度は高めであったことが推測できる。骨片は収縮をしているにもかかわらず、骨質が厚く頑丈であることが明瞭である。頭蓋骨の縫合は内板の一部が癒合を始めており、外板は開放の状態である。後頭骨の項前付着面は粗造で凹凸が目立つ。乳突上縁は粗造で、乳様突起は幅が広く下方を向いている。以上のことから性別が男性であることは疑いようがない。上顎骨は歯槽部が保存されているが、すべて死後脱落歯槽開放の状態である。下顎骨は左側の下顎体の一部と下顎枝上部の一部が保存されている。下顎の歯槽部も保存されている部位は死後脱落歯槽開放の状態である。遊離歯は歯根部が2点確認できた。上顎小白歯と上顎大白歯の歯根片である。上顎および下顎の歯槽部から、第三大白歯が萌出し、歯根も完成していることが分かるため本被葬者が成人していることは間違いない。また、下顎の左側第三大白歯の歯槽は歯槽内部がスポンジ状になり歯槽部が本来の歯根の形状より大きく広がっていることから、歯周病になっていることが分かる。確認できた骨片には重複している部位は確認できない。

OT1	M3	M2	M1	P2	P1	C	I 2	I 1	I 1	I 2	C	P1	P2	M1	M2	M3
													P2	M1	M2	M3

すべて死後脱落歯槽解放

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性）が1個体である。

2) OT2

全身の骨格の骨片が多く保存されている。下顎骨の右側、肩甲骨に重複する部位が確認できる。前頭骨は骨質が厚く頑丈である。頭頂骨は骨質が厚く頑丈なものとそうでないものが確認できたため、別個体と混在している。骨質の厚い個体については弾性と推測され、縫合は内板が癒合し外板の一部が癒合を始めている。別個体の縫合は内板の一部が癒合を始めて外板は開放している。四肢長管骨はいずれも細かい骨片となっており特筆すべきことはない。肩甲骨は左右とも2個体分確認でき、一方は明らかに若い個体である。椎骨は頸椎と腰椎に強いリッピングが確認できる。頸椎は椎体の一部しか保存されていないものの、椎体が圧迫されたようになっている。腰椎も同様で、第4と第5腰椎については椎体の圧迫が激しく通常の2/3程度の高さになっている。椎骨自体の大きさが比較的小さいことから女性であることが推測できる。骨自体ももろくなっている。頸椎と腰椎が同一個体か否かは不明だが、加齢性のリッピングに加えて過度の労働によるリッピングの可能性も高い。椎骨の加齢性の認められる個体と肩甲骨の若い個体（おそらく女性）とは年齢が合致しないため、女性が2個体ということになる。寛骨は骨片が多いものの、大座骨切痕部が確認でき、妊娠出産痕の認められる骨片も確認できた。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性の可能性1、女性2）が3個体である。

2) OT3

全身の骨格の骨片が多く保存されている。骨は全体的に骨質が薄く華奢である。頭蓋骨は骨がとても薄い印象である。前頭骨は眼窩上三角が華奢で女性である可能性が高い。上顎骨と下顎骨は歯槽部が確認でき、上顎右側の第一大臼歯、第二大臼歯は一部植立の状態と保存されている。他は死後脱落歯槽開放の状態である。上顎と下顎が同一個体であるかは不明である。保存されている遊離歯は歯冠部と歯槽部に分かれているものが多い。上顎犬歯、上顎小臼歯、上顎大白歯、下顎切歯、下顎大白歯の歯冠や歯冠の破片が確認できる。

OT3	M2	M1	P2	P1	C	I 2	I 1									
M3	M2	M1	P2	P1	C	I 2	I 1	I 1	I 2	C	P1	P2	M1	M 2	M 3	

死後脱落歯槽開放 □ 植立歯

体幹肢骨格は骨片が多く特筆すべきことはない。本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性1、性別不明1）が2個体である。

なお、本遺構には火を受けた小型獣の下顎骨片が確認できた。人骨と同様な焼成を受けているようだが、一緒に火葬されたものなのかは骨片のみのため判断はできない。また、副葬品として埋納されたものかは判断できない。

4) OT4

全身の骨格の骨片が保存されている。骨質は厚く頑丈である。頭蓋骨の縫合は内板、外板ともに開放している。四肢長管骨は関節部分と骨体とに割れている。骨質は厚みがあり関節面は張り出しているため、男性の可能性が高い。重複する部位はない。上顎骨と下顎骨は歯槽部が保存されている。歯槽部は部分的に破損しているものの全体が確認できる。上顎右側の第一大臼歯、下顎左側の第一大臼歯は植立の状態と保存されている。他は死後脱落歯槽開放の状態である。保存されている歯槽部については以下に歯式で示した。遊離歯は上顎の犬歯片、下顎の犬歯片、下顎の犬歯片が確認できるが、保存されている歯槽部と同一人物であるかについては歯槽部の破損があり確認できなかった。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性）が1個体である。

なお、出土した骨片（部位不明）には青銅製の付着物が確認できた。明らかに火を受けていることから被葬者と共に火葬されたことが推測できる。

5) OT5

全身の骨格の骨片が保存されている。骨質は薄いが華奢な印象はない。頭蓋骨の縫合は内板が閉鎖しており、外板も矢状縫合は縫合線が確認できるが概ね閉鎖している状態のため、40代になっている可能性が高い。右側の外耳孔は小さく卵型である。乳様突起の幅は狭く前方を向いている。下顎骨は右側の一部が確認できる。歯槽部は切歯から第二大臼歯まで保存されているが、犬歯を除きすべて歯槽が完全に閉鎖しているため、生前の早い段階で歯がぬけてしまったことがわかる。そのため、下顎体の高さが低くなっている。また、犬歯の歯槽部も根尖部が膨らんでおり、歯周病になっていたことは間違いない。生前に脱落した他の歯種についても歯周病による生前喪失であった可能性が推測できる。重複している部位は確認できない。

OT5	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
			M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3

死後脱落歯槽解放 — 歯槽が閉鎖

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性）が1個体である。

6) OT6

全身の骨格の骨片が保存されている。骨は薄く華奢である。頭蓋骨は骨の厚さが極端に薄い骨片が確認できるため、未成人の骨があることは間違いない。ほとんどの骨は、細かい骨片となっており部位の特定できた資料は少ない。上腕骨遠位骨端は骨体と未癒合の状態である。椎骨は椎体の辺縁部が完成していない個体があり未成人の段階と判断できる。他の四肢骨は特筆すべきことはない。上顎骨と下顎骨は小白歯部分の歯槽片が確認できた。遊離歯は上顎側切歯の歯根片が確認できた。歯根は完成している。本遺構に埋葬された推定最小個体数は、成人（性別不明）が1個体、10代の子供が1個体、合計2個体が確認できた。

7) OT7

全身の骨格の骨片が保存されている。骨質は厚く頑丈である。頭蓋骨は側頭線が明瞭である。縫合は内板が癒合し外板の一部が癒合を始めている。四肢骨は骨質が厚く保存されている関節面は大きく頑丈である。いずれの部位も骨が細かく割れており特筆すべきことはない。本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性）が1個体である。

なお、本遺構にはシカの大腿骨（右側）が保存されており、火を受けている。骨の焼成の状態も人骨と同様な状態のため、人骨と一緒に火葬された可能性が推測できる。ただし、副葬品なのか否かについては判断できない。

8) OT8

全身の骨格の骨片が保存されている。全身が均一に火葬されている。骨質は薄い華奢な印象はない。側頭骨の破片は骨に厚みがなく小さい。遊離歯は下顎の左側第一大臼歯の歯冠のみが確認できる。咬合面は擦り減っておらず、本個体が比較的若いことが推測できる。また本第一大臼歯には屈曲隆線が認められる。左の鎖骨は遠位部が保存されているが細く小さい。上腕骨遠位は重複していないが、太さの異なる個体が確認できたことから、2個体であることが確認できる。他の四肢骨については特筆すべきことはない。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性1、性別不明1）が2個体である。

9) OT9

全身の骨格の骨片がわずかに保存されている。骨はあまり火を受けておらず、焼成温度が低かったことが推測できる。特に大腿骨片は土葬のような状態であった。性別や年齢を特定できる骨片がほとんど保存されておらず、特筆すべきことは特ない。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。

10) OT10

全身の骨格の骨片が多く保存されている。頭蓋骨はいずれも小さな骨片である。下顎骨の下顎体中央と右側、上腕骨の右側遠位は重複しており、どちらも成人と認められる。成人のうち1個体は火葬されて骨の収縮が起きているものの、非常に華奢であることから女性である可能性が高い。歯は、歯根と歯冠にそれぞれ別れ、かつ更に細片となっていた。上顎切歯は、第一切歯、犬歯の歯冠部、臼歯が最低でも2個体分確認できる。上顎の第三大臼歯は、歯根の根尖が完成していることから、成人個体であることは明らかである。下顎歯は切歯もしくは小白歯と推定できる歯根、右側第一大臼歯の歯冠片、他にも大臼歯の歯冠片が確認できる。大臼歯の歯根の根尖が未完成の個体があり、10代前半の個体が含まれていることが推測できる。本遺構には、下顎骨、四肢骨、手根骨に明らかに成長過程の個体が含まれていた。特に四肢長管骨に至っては、推定でも10cmに満たない長さであり、幼児個体（6歳未満）である可能性が高い。更に、肩甲骨の一部に10歳前後と推定できる部分が確認できる。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は、成人（女性1、性別不明1）が2個体、10代の子供が1個体、6歳未満の幼児が1個体、合計4個体が確認できた。

11) OT11

全身の骨格の骨片が多く保存されている。ただし、手掌や足趾などの四肢末端部分は保存されていない。頭蓋骨や四肢骨の骨質は薄く華奢である。縫合の状態は内板・外板ともに癒合は確認できない。大座骨切痕には妊娠出産痕が確認でき、本個体の性別は女性の可能性が高い。歯は、上顎の右側第一切歯の歯冠片、大臼歯片が確認できる。下顎歯は、切歯の歯根、小白歯の歯冠、左側第二大臼歯の歯冠が確認できる。下顎の第三大臼歯は歯根の根尖が未完成である。咬合面を観察するとあまり咬耗が進んでいない。重複部位はないため、出土した骨片が1個体であることに矛盾はない。本遺構に埋葬された推定最小個体数は1個体、年齢は20歳前後で性別は女性であると推定した。

12) OT12

全身の骨格の骨片が多く保存されている。頭蓋骨片は骨質が厚く頑丈で、後頭骨の筋附着面には凹凸が明瞭である個体と、骨質が薄いが華奢では無い個体がある。橈骨の右側、寛骨の左側が重複し、明らかに大ききの異なる大腿骨があることから、2個体の成人骨が埋葬されていることは間違いない。遺構には種は不明だが獣骨が確認できた。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性1、性別不明1）が2個体である。

13) OT13

全身の骨格の骨片が多く保存されている。頭蓋骨片は骨質が厚く頑丈で、後頭骨の筋附着面には凹凸が明瞭である。四肢骨片や距骨片は大きい印象はないが骨に厚みがあり、筋粗面が発達していることから、生前は筋肉質な体格であった可能性が高い。軸椎の高さが高く厚みがあり、頸部の筋が発達した頭の太い印象が推測できる。歯は上顎の小白歯の歯根部のみであった。本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性）が1個体である。

なお、遺構には火を受けていない鹿角が確認できた。火葬後に副葬品として埋納されたものかは判断できない。

14) OT14

全身の骨格の骨片が多保存されている。骨質は厚く頑丈な個体と厚くはないが華奢な個体が確認できる。上腕骨の右側遠位は重複していることから2個体が埋葬されていることが分かる。後頭骨は項筋の附着面が明瞭で頑丈である。乳様突起は幅が広い。下顎は左の下顎枝が保存されおり、高さは低く小さい印象である。歯は遊離歯が1点で上顎の犬歯（左右不明）の歯根のみである。体幹体肢骨格に特筆すべき点はない。距骨は左右ともに1点ずつ保存されているが、骨質と大きさが明らかに異なることから別個体である。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性1、性別不明1）が2個体である。

15) OT15

全身の骨格の骨片が多く保存されている。骨質が厚く頑丈である。頭蓋骨は厚みがあり、項筋の付着面が明瞭である。縫合は内板の一部に癒合が始まっているが外板は開放している。腰椎の椎体は強いリッピングが確認でき、椎体も圧迫を受けている。歯は上顎骨が比較的良好に保存されている。左側の第一大臼歯第二大臼歯と右側の第二小臼歯が植立している。他は死後脱落歯槽開放の状態である。上顎左側の第三臼歯は萌出していないが、歯槽部に萌出のスペースがないため、先天的に第三大臼歯がなかった可能性が高い。右側の臼歯部は歯槽が破損しているが第一大臼歯の歯槽部は歯周疾患である可能性が高い。下顎の右側第二切歯が植立している。歯冠は火葬の際に壊れてしまっている。他の切歯は死後脱落で歯槽が開放している状態である。保存されている遊離歯は下顎の犬歯、大臼歯の歯根のみである。上顎の大臼歯部の歯槽部分にはわずかだが歯周疾患が認められる。奥歯を噛みしめるような力のいる作業を日常的に行っていた可能性が高い。骨や歯に重複部位はないため、出土した骨片が1個体であることに矛盾はない。

OT15	M2	M1	P2	P1	C	I 2			I 2	C	P1	P2	M1	M2
------	----	----	----	----	---	-----	--	--	-----	---	----	----	----	----

死後脱落歯槽解放 □植立歯

頭蓋骨の縫合や四肢骨の関節面、歯の状態から年齢は30代である可能性が高い。他の骨の状態と比較すると、腰椎のリッピングが非常に早くから進んでいることが分かる。他の骨と同一個体と推測するならば、腰部に加齢の症状が早く現れたようである。歯槽部の奥歯の噛みしめの痕跡と、腰部の早からのリッピングなどの加齢変化が比較的若い年齢のころから腰部に負担のかかる（例えば荷物運びなど）職業を営んでいた可能性が推測できる。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は1個体、年齢は30代後半で性別は男性であると推定した。なお、遺構には火を受けていない鹿角が確認できた。火葬後に副葬品として埋納されたものかは判断できない。他にも種は不明だが獣骨片、炭化物が確認できた。

16) OT16

全身の骨格の骨片が多く保存されている。骨片は非常に小さく特筆すべき特徴はほとんどない。側頭骨の外耳孔は楕円形で大きく周囲の骨も厚みがあるので男性の可能性が高い。四肢骨には青銅製の付着物があり、骨と同様に火を受けているようである。副葬品と判断するのは難しいが、火葬時に衣服以外のものが一緒に火葬され、四肢骨に付着したまま埋葬されたことは間違いない。下顎骨は破片資料であるため、年齢や性別の判断はできないが、歯槽部が浅くなっている部分が確認できることから、歯周疾患を伴っていたことが分かる。保存されている歯は上顎大臼歯の歯根、下顎の小臼歯の歯根、下顎の大臼歯の歯冠片が確認できた。歯根はいずれも完成しているため成人していることは間違いない。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性の可能性）が1個体である。

17) OT17

細かい骨片がわずかに保存されているのみである。特筆すべきことは特になく、本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。

18) OT18

全身の骨格の骨片が多く保存されている。下肢骨は炭化が激しく低温で火葬された可能性が高い個体がある。頭蓋骨の骨質は厚くはないが、乳突上稜の凹凸が顕著である。右側の大腿骨、右側の脛骨はそれぞれ重複している。一方の脛骨にはヒラメ筋線が明瞭である。歯は遊離歯のみで上顎の小臼歯、下顎の大臼歯の歯根部片が確認できる。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は、成人（男性の可能性2）が2個体である。

22) OT22

全身の骨格の骨片が多く保存されている。骨質は厚いが頑丈な印象はあまりない。頭骨や上肢に比べると下肢骨の炭化が著しく、火葬の際に下肢の方の焼成温度がより低かったためにこのような差が生じたと推測できる。頭蓋骨は厚みがあり、項筋の付着面が明瞭である。縫合は内板の一部に癒合が始まり外板は部分的に癒合が始まっている。下顎骨は右側の下顎枝が保存されており、幅が狭い。また、下顎体の高さも低い。四肢骨の骨質は厚いが関節は大きく張り出すことはない。上顎歯は左側の臼歯の歯槽部が保存されており、第一大臼歯が植立しているが歯冠は破損している。下顎歯は下顎体の一部が保存されており、左側の第一小臼歯、第二小臼歯が植立しているが、歯冠は破損している。遊離歯は上顎の小臼歯や大臼歯、下顎の切歯や小臼歯、大臼歯が確認できたが歯冠もしくは歯根のみのものがほとんどであった。全体的に歯根が細く華奢である。

OT22															P1	P2	M1	M2
		M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2			

死後脱落歯槽開放 □植立歯

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。なお、遺構にはシカの椎骨と思われる獣骨片、炭化材が確認できた。

23) OT23

全身の骨格の骨片が多く保存されている。骨片は全体的に灰色でよく焼けており、別の遺構の焼け斑の有る個体と比べると均一に火葬されたことが推測できる。骨質が厚く頑丈である。頭蓋骨は厚みがあり、項筋の付着面が明瞭である。寛骨の耳状面が多孔質に肥厚していることから、若い年齢層ではない。本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。

24) OT24

全身の骨格の骨片が多く保存されている。骨質は薄いが華奢な印象はない。頭蓋骨は内板、外板ともに癒合が確認できる。四肢骨の関節面は小さいが、筋粗面は粗造である。骨そのものは細いものの、全体的に筋肉質である印象である。椎骨は腰椎にリッピングが確認でき、椎体がやや圧迫されたように薄くなり、加齢に伴う変化が確認できる。下顎枝は華奢な印象である。遊離歯はほとんどが歯根ばかりで、上顎では犬歯、小臼歯、大臼歯が、下顎では切歯、小臼歯が確認できる。歯根は長く、確認できた全ての歯根は根尖が完成していることから成人であることは間違いない。本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性の可能性）が1個体である。

なお、遺構には種は不明だが獣骨片が確認できた。

25) OT25

全身の骨格の骨片が多く保存されている。骨質は薄いが華奢な印象はない。側頭骨の外耳孔は卵形で小さめである。乳様突起は幅が狭く前方を向いている。四肢関節も骨自体は張り出しがほとんどないものの、頭蓋骨と同様に華奢な印象はない。所謂、骨太な印象である。寛骨には妊娠出産痕が確認できる。遊離歯は、上顎顎の大臼歯歯根片、下顎の切歯と犬歯の歯根片である。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性）が1個体である。

26) OT26

全身の骨格の骨片が非常に多く保存されている。骨質の異なる個体が確認でき、重複部位も確認できた。恥骨は右側が3つ確認できた。保存されている骨は1つ1つが細かく割れているものが多く部位は特定できても、個別に分類することは難しい。頭蓋骨は骨質が厚く頑丈な個体と、そうでない個体が確認できる。頑丈な個体の縫合は内板が閉鎖で外板が部分的に癒合している。上顎骨と下顎骨は破損しているが、重複する部分、骨質が異なるものが確認できた。上顎骨は左右確認できるが同一個体かは不明である。

上顎歯は左右とも門歯から第一大臼歯までの歯槽部が保存されているが、すべて死後脱落歯槽開放

の状態である。下顎骨は左右の一部が確認できるが同一一体化は不明であり、いずれも第一大臼歯から第三大臼歯の歯槽部が保存されており、死後脱落歯槽開放の状態である。遊離歯は上顎の小白歯や大臼歯の歯根が確認できる。保存されている顎骨は歯槽部の歯槽が深いのにに対し、遊離歯は短い歯根のものが多く、明らかに別個体であるのが分かる。近位骨端に非常に大きく頑丈な個体と、比較的大きく頑丈な個体が確認できたことから男性が2個体含まれると判断できる。椎骨は頸椎から腰椎までリッピングが確認でき、椎体も圧迫されている個体と、そうでない個体が確認できる。

OT26	M2	M1	P2	P1	C	I 2	I1														
								I 1	I 2	C	P1	P2	M1	M 2							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I 2	I1													
																			M1	M 2	M3

すべて死後脱落歯槽開放

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性2、性別不明1）が3個体で、そのうち1個体は熟年段階に達していた可能性が高い。

27) OT28

全身の骨格の骨片が保存されている。しかし骨片の数は少ない。性別や年齢を特定できる骨片がほとんど保存されておらず、特筆すべきことは特にない。遊離歯は小白歯と大臼歯の歯根片のみである。歯根の根尖は完成しており、歯根も太い。成人していると判断してよいであろう。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。

28) OT29

全身の骨格の骨片が多く保存されている。頭蓋骨や四肢骨の骨質は薄く華奢である。四肢骨の関節面は小さく、保存されている骨全体が小さい印象である。遊離歯は上顎の大臼歯や下顎の小白歯の歯根が確認できる。上顎歯第三大臼歯の歯根が確認でき、根尖の形成が完了していることから成人していることは間違いない。歯根は全体的に短いが委縮している印象はない。下顎体の高さは低いことが推測できる。本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性の可能性）が1個体である。

29) OT30

全身の骨格の骨片が保存されている。しかし骨片の数は少ない。全体的に炭化が激しく低温で火葬された可能性が高い。頭蓋骨の縫合は内板の一部に癒合が始まっているが外板は部分的に癒合が始まっている。頭蓋骨は厚みがあり筋付着面も明瞭である。乳突上稜の凹凸も明瞭である。遊離歯は歯根の破片と大臼歯の歯冠片のみである。体幹体肢骨格は非常に小さな骨片ばかりであった。本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性の可能性）が1個体である。なお、遺構には種は不明だが獣骨片が確認できた。

30) OT31

全身の骨格の骨片が多く保存されている。比較的均一に焼成を受けている。骨質は薄く華奢な印象である。頭蓋骨の縫合は内板が閉鎖を始めており外板は開放の状態である。歯は遊離歯ばかりで歯根片となっており、歯種を特定することは難しかった。性別や年齢を特定できる骨片がほとんど保存されておらず、特筆すべきことは特にない。ただし、頸椎に骨病変が確認できた。環椎の上部、頭蓋骨との関節面がスポンジ状になっている。また、頸椎（番号不明）の椎弓に癒合が確認できた。環椎と関節する頭蓋骨の後頭頭が保存されていないために、詳細なことはわからない。

多孔質な点、椎弓の癒合など頸部に骨病変があることから、被葬者が首を動かすのに不自由があったことは間違いない。X線による診断が今回はできなかったため、頸部に骨病変があったという報告にとどめておく。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性の可能性）が1個体である。

31) OT32

全身の骨格の骨片が多く保存されている。比較的均一に焼成を受けている。骨質は薄く華奢な印象である。頭蓋の骨は鼻骨が保存されている。四肢骨の関節面は骨体との癒合は終了して小さく、保存されている骨全体が小さい印象である。性別や年齢を特定できる骨片がほとんど保存されておらず、特筆すべきことは特になし。遊離歯はほとんどが歯根部で上顎の犬歯、小白歯、大白歯、下顎の切歯、小白歯が確認できる。また歯冠片は上顎の大白歯、下顎の小白歯が確認できた。上顎歯第三大臼歯の歯根形成が完成していることから年齢は成人であることは間違いない。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。

なお、遺構には種は不明だが獣骨片が確認できた。

32) OT33

全身の骨格の骨片がわずかに保存されている。性別や年齢を特定できる骨片がほとんど保存されておらず、特筆すべきことは特になし。わずかに残された頭骨片は骨質が薄く華奢で女性の印象を受ける。前頭骨には前頭縫合が残る状態（メトビズム）が確認できる。遊離歯は歯根片のみで下顎の切歯と不明の合計3点のみである。歯根の根尖は完成している。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性の可能性）が1個体である。

33) OT34

全身の骨格の骨片が多く保存されている。比較的均一に焼成を受けている。骨質は厚いが頑丈な印象はない。頭蓋骨の縫合は内板が閉鎖を始めており外板は開放の状態である。四肢骨の関節面は骨体との癒合は終了している。骨自体はあるものの、特に体幹体肢骨格は頭蓋骨の厚さに比べると華奢に感じてしまう。頭頂骨と後頭骨の内板には、火葬による収縮とは異なる、骨の収縮や局所的に多孔質になっている部分が認められる。脳腫瘍などの骨病変である可能性が高い。X線による判断が今回はできなかったため、骨病変があったという報告にとどめておく。重複する部位は認められないが、頭蓋骨と四肢骨の間において骨の印象が異なったのは、病気により行動に制限ができ、四肢が痩せてしまったためという可能性が推測できる。遊離歯は上顎左側の第一大臼歯以外は歯根のみで、上顎小白歯、下顎の切歯が確認できる。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。なお、遺構には炭化物が確認できた。

34) OT35

全身の骨格の骨片が多く保存されている。比較的均一に焼成を受けている。骨質は薄く華奢な印象である。四肢骨の関節面は骨体との癒合は終了して小さく、保存されている骨全体が小さい印象である。性別や年齢を特定できる骨片がほとんど保存されておらず、特筆すべきことは特になし。遊離歯は歯根のみで、下顎の切歯と歯種不明の6点である。遺構には種は不明だが獣骨片が確認できた。本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。

35) OT36

全身の骨格の骨片が多く保存されている。骨質は厚く頑丈である。頭蓋骨の縫合は内板に癒合が始まっているが外板は開放の状態である。四肢骨は全体的に細いが筋付着面は粗造で華奢な印象はない。また、上肢骨に比べると下肢骨の筋付着面の方が発達していることから上肢骨に比べると下肢に負担の多い生活もしくは職業であった可能性が高い。歯は遊離歯ばかりで歯根部のみがほとんどである。上顎の大白歯は他の歯の歯根よりも退縮が進んでいる。重複する歯種や骨はないため、1個体の可能性であるならば、上顎の大白歯部には歯周病となっている可能性がある。ただし、別個体であるならばの歯根の短い別個体である可能性も推測できる。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。

なお、遺構には炭化物が多く含まれていた。

36) OT37

全身の骨格の骨片が多く保存されている。骨質は薄く華奢な印象である。四肢骨の関節面は骨体との癒合は終了して小さく、保存されている骨全体が小さい印象である。性別や年齢を特定できる骨片がほとんど保存されておらず、特筆すべきことは特でない。遊離歯は下顎歯5点で切歯3、小白歯1が歯根のみ（切歯は象牙質の一部が確認できる）、第一大臼歯は歯冠の咬合面の一部のみである。第一大臼歯の咬耗はほとんどなく、20代の可能性が高い。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性の可能性）が1個体である。なお、遺構には種は不明だが獣骨片が確認できた。

37) OT38

全身の骨格の骨片が多く保存されている。全体的に炭化が激しく低温で火葬された可能性が高い。頭蓋骨の縫合は内板の一部に癒合が始まっているが外板は開放している。骨質は薄く華奢な印象である。眼窩上縁の外側の厚みも薄い。上顎歯右側が保存されており、歯槽部は門歯から第二大臼歯の近位部までが保存されている。すべて死後脱落歯槽開放の状態である。遊離歯は下顎の犬歯、小白歯、大白歯が保存されている。歯根の先端は完成しており、成人であることは疑いようがない。骨や歯に重複している部位はない。

OT38	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1												
------	----	----	----	----	---	----	----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

すべて死後脱落歯槽開放

本遺構の推定最小個体数は成人（女性の可能性）が1個体である。

38) OT39

全身の骨格の骨片が多く保存されている。頭骨は保存されておらず、遊離歯が確認できるのみである。歯は上顎の第三大臼歯が確認でき歯根の形成は完成している。上顎小白歯や下顎大白歯はすべて歯根のみである。骨は全体的に小さく細く華奢である。重複する部位は確認できなかった。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性の可能性）が1個体である。

なお、遺構には種は不明だが獣骨片が確認できた。

39) OT40

全身の骨格の骨片がわずかに保存されている。性別や年齢を特定できる骨片がほとんど保存されておらず、特筆すべきことは特でない。遊離歯は上顎大白歯の歯冠片と歯根片のみである。歯根の根尖は完成している。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。

40) OT41

全身の骨格の骨片がわずかに保存されている。性別や年齢を特定できる骨片がほとんど保存されておらず、特筆すべきことは特でない。頭蓋骨片の骨は薄いが華奢な印象はない。遊離歯は上顎の小白歯の歯根片と左側犬歯のみである。歯根の根尖は完成している。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。

41) OT42

本遺構は土葬であることが確認されている。保存されている骨は状態がもろく、壊れやすい状態である。四肢骨のみが確認でき、骨質や筋の付着状況からも同一個体であることは疑いようがない。骨の印象から比較的若い年齢（20代）と推測できる。大きな破片は大腿骨が左右一対確認できる。また、上腕骨と脛骨は骨体が部分的に確認できるのみである。いずれも骨自体に頑丈な印象がない。大腿骨は大きくはなく、骨質も厚くはないが背側の殿筋粗面やピラスターが発達している。このピラスターの発達には外側唇と内側唇の突出にわずかながら差異が認められる。

また、骨体上部が扁平で殿筋粗面の発達も認められることからウマに騎乗する機会の多い可能性が推測できる。筆者の経験則ではあるが、熟練となるほどの騎乗の機会はあまり多くないまま死亡した可能性が推測できる。当時の騎乗者が男性に偏ることは容易に推測できるが、女性が騎乗しないと断言はできないため、性別は不明とした。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（性別不明）が1個体である。

42) OT43

全身の骨格の骨片が多く保存されている。骨質は薄いが華奢な印象はない。頭蓋骨の縫合は内板の一部に癒合が始まっているが外板は部分的に癒合が始まっている。四肢関節も骨自体は張り出しがほとんどないものの、頭蓋骨と同様に華奢な印象はない。歯は下顎の右側の犬歯が植立しているが歯冠は破損している。下顎右側の第二小白歯の歯槽が閉鎖していることから生前に既にこの歯は失っていたであろう。また切歯の歯槽部も通常よりも顕著に多孔になっていることから歯周疾患を患っていたと推測できる。本遺構には種は不明だが獣骨片、炭化物が確認できた。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（女性の可能性）が1個体である。

43) OT44

本遺構は土葬とあるが、大腿骨と膝蓋骨、寛骨の一部は火を受けていないものの他の部位のほとんどが火を受けている。特に炭化の激しい骨片も多くあり、焼成温度の低い火葬を受けている可能性が高い。重複している部位はないが、尺骨の骨体は、骨質や筋付着面の状態が明確に異なるものがあり、2個体が埋葬されていることは疑いようがない。大腿骨は骨質が厚く頑丈で関節面も大きいことから男性である。大きく保存されている左側の大腿骨は背側の殿筋粗面やピラスターが発達している。このピラスターの発達は外側唇と内側唇の突出にわずかながら差異が認められること、外側唇と内側唇の幅が広いことから、乗馬の際には中世の時に多く利用された舌長鎧を利用することなく、乗馬することができた熟練の乗馬経験者であった可能性が高い。ウマに騎乗する機会が非常に多い生活をしてきた可能性が推測できる。どちらの個体かは不明だが、足の中節骨と末節骨が扁平につぶれている状態が確認できた。怪我によるものか病気によるものかはX線撮影をして確認しなければ詳細な判断は難しい。そのため、この足趾についての詳細な鑑定については将来に行われる際の分析に譲りたい。

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性1、女性の可能性1）が2個体である。

44) OT45

全身の骨格の骨片が多く保存されている。下肢骨は炭化が激しく低温で火葬された可能性が高い。下肢骨、寛骨の一部、大腿骨の一部にはほとんど火を受けていない部分も認められた。中世にみられる火葬炉などを利用した場合、体の部位によって焼成温度のばらつきが出ることはあるものの、火をほとんど受けていない部位と炭化している部位が、体の近い部位で確認できることは少ない。本遺構に埋葬された被葬者の火葬は、丁寧に火葬されたという印象がない。骨質はあまり厚くはないが筋付着面が明瞭である。頭蓋骨の縫合は内板が癒合し、外板も癒合を始めている。乳椽突起の幅は広くないが下方を向いている。下顎骨は下顎体の一部が保存されている。下顎切歯から犬歯までは左右とも死後脱落歯槽開放の状態である。下顎は骨質が厚く頑丈で、ほとんど火を受けていない。下顎右側の小白歯は歯槽が閉鎖しており、生前に歯を失っていたことは間違いない。保存されている切歯や犬歯の歯槽も歯根の退縮の影響か、非常に浅くなり下顎体が低くなっている。遊離歯は上顎左側の側切歯、下顎の切歯や犬歯の歯冠部分が保存されている。寛骨は大きく頑丈で、あまり火を受けていないが部分的に炭化している。大腿骨背側の殿筋粗面は筋付着面が粗造である。大腿骨も寛骨と同様にあまり火を受けていないが部分的に炭化している。

OT45																			
				P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2							

すべて死後脱落歯槽開放 □歯槽が閉塞

本遺構に埋葬された推定最小個体数は成人（男性の可能性）が1個体、年齢は頭蓋の縫合の状態から30代後半から40代の可能性が高い。

4. 考察

墓域における墓域は、火葬骨と土葬が混在している。火葬骨は火葬の際に収縮し、細かく割れて骨片になっているものがほとんどであった。すべての火葬骨に、収縮と割れが確認でき、四肢骨については、頭尾方向に対して垂直方向の割れがほとんどであることから、軟組織が付着した状態（死後に軟組織は交叉することのない状態を保っているために腐食する前の段階）で火葬が行われたと判断できる。また、割れた部位では、割れが交叉したものは確認できなかったため、火葬は1度で、骨の状態で火を受けた可能性はないと判断した。今回観察した資料において、本遺跡から出土した人骨の推定最小個体数は61個体である。推定最小個体数は性差もあわせて表に示した（表3）。保存されている部位は、ヒトの身体の中で最も硬質な部位である歯、火葬の際に保存状態が確認しやすい下顎骨や側頭骨などが全体的な骨の出土量に対して少ないことから、出土したすべての火葬人骨は、火葬された場所でそのまま埋葬されたものではなく、火葬後、埋葬用の墓域に骨を移して埋葬されたことは間違いない。また、保存されている部位は特定の部位に偏ることがないこと、墓域ごとに骨の出土量に差があることから、火葬場所から墓域に都度適量を埋葬用の骨として運んだことが推察できる。土葬の人骨は全身骨格の量よりはるかに少なく、解剖学的な配列が保たれていない。また、骨自体が脆くなっており、四肢骨が多く部位に偏りがあるようである。そのため、二次埋葬の可能性が推察できる。本地域における中世の土葬や二次埋葬に関しては報告例が確認できておらず、現段階での考察は難しい。

次に出土人骨全体の性別や年齢構成であるが、性別は火葬により判断が難しい資料が1/3を占めた。性別の確認できた資料は男性が18、女性が17であり、埋葬人骨に性差の偏りは認められないと判断してよいであろう（表3）。年齢構成は頭蓋骨縫合の癒合状態や四肢骨の骨端癒合状態、歯の咬耗状態などから判断したが、火葬による骨の収縮や変形のため詳細な年齢推定はかなわず、成人している人骨に対してはそれ以上の年齢も含めて「成人」と文中で記載したため、詳細な年齢区分が分からないものについては「不明(成人以上)」として、年齢構成を表で示した（表4）。中世の平均寿命が壮年（30代から40代後半）であることから、本遺跡に埋葬された人骨の年齢構成に矛盾はない。他にも幼児骨や小児骨、10代後半の若年層に加えて、熟年段階と推測できる個体も埋葬されており、年齢の幅は広いといえる。特定の年齢層を選択的に埋葬している墓域とは考え難い。

墓坑は遺構の切り合い関係を確認すると、3つの段階に分かれる。最も古い段階が9墓（OT17、OT25、OT26、OT28、OT29、OT36、OT37、OT38、OT41）、次の段階が3墓（OT15、OT16、OT30）、最も上層に位置するのが11墓（OT18、OT19、OT20、OT21、OT22、OT23、OT31、OT32、OT34、OT35、OT39）である。いずれの時期も埋葬されている人骨の性差や年齢差、特筆事項の偏りは認められない。本区画が時期を経ても広く墓域として使用されている区画であるということであろう。

佐久地域では、中世の火葬についての記録が曹洞宗の龍雲寺文書や康国寺からも確認でき、火葬は比較的一般的であったことがうかがえる。また、供養者の記録から、当地域における曹洞宗の女性および農民への浸透が確認でき、また当地域の曹洞宗への受容率が高いことを考慮しても、埋葬された人骨の性差が認められないことは納得できる。騎乗の習慣がある可能性の個体や、重い荷運びを推測させる骨病変など、様々な生業の被葬者が本墓域から出土することからも、特定の階層の集団墓ではなく、地域の集団墓、もしくは同一の宗教のもとに埋葬された人々である可能性が推測できる。

引用文献

Brothwell, D.R., 1981, Digging up Bones. Cornell University Press.

Hiroko Hashimoto, 2014, Life history indicated by the plaster of femur - Neolithic Jomon Japan and Early Bronze Age Jordan. Bulletin Int. Assoc. IUAEs

Hiroko Hashimoto, 2016, "Characters observed on femurs of riders during the Kofun Period in Japan. 8th Annual Conference of WAC book of Abstract

Hiroko Hashimoto, 2017, Experimental archaeological approach to understanding how the pilaster of femur was developed during Kofun Period in Japan. Bulletin Int. Assoc. BABAO 19

石田英實・橋本裕子, 2008, 敏満寺石仏谷墓跡(多賀町) 出土人骨. 敏満寺遺跡・第2次調査・多賀町教育委員会.

White, T. D., 1991, Human Osteology. Academic Press, Inc.

米元史織, 2012, 生活様式の復元における筋骨格ストレスマーカーの有効性. Anthropological Science (Japanese Series) 120-1.

表3. 出土人骨推定最小個体数及び年齢構成

OT	男性	女性	性別不明	子供	合計	成人	壮年	熟年	幼児	小児	不明(成人以上)	合計
1	1				1		1					1
2	1	2			3		2				1	3
3		1	1		2		1				1	2
4	1				1	1						1
5		1			1		1					1
6			1	1	2	1				1		2
7	1				1		1					1
8		1	1		2						2	2
9		1	1		1						1	1
10		1	1	2	4	1			1	1	1	4
11		1			1	1						1
12	1		1		2		1				1	2
13	1				1		1					1
14	1		1		2		1				1	2
15	1				1		1					1
16	1				1		1					1
17			1		1						1	1
18	2				2		1				1	2
19			2	1	3	2			1			3
20	1				1						1	1
21	1		1		2	2						2
22			1		1		1					1
23			1		1		1					1
24		1			1		1					1
25		1			1		1					1
26	2		1		3		2	1				3
28			1		1						1	1
29		1			1		1					1
30	1				1		1					1
31		1			1		1					1
32			1		1		1					1
33		1			1						1	1
34			1		1		1					1
35			1		1						1	1
36			1		1		1					1
37		1			1	1						1
38		1			1		1					1
39		1			1						1	1
40			1		1						1	1
41			1		1						1	1
42			1		1	1						1
43		1			1		1					1
44	1	1			2		2					2
45	1				1		1					1
合計	18	17	22	4	61	10	29	1	2	2	17	61

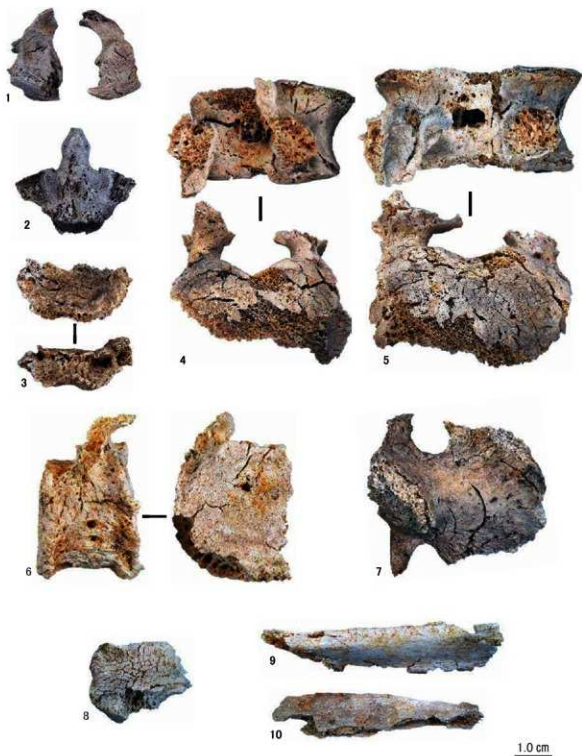


1. 頭蓋骨 後頭骨 骨病變 (OT34)
2. 頭蓋骨 頭頂骨 (OT30)
3. 頭蓋骨 頰骨 右 (OT2)
4. 頭蓋骨 頰骨 左 (OT2)
5. 頭蓋骨 蝶形骨 (OT2)

6. 頭蓋骨 篩骨 (OT29)
7. 頭蓋骨 上顎骨 (OT1)
8. 頭蓋骨 下顎骨 (OT45)
9. 頭蓋骨 下顎骨 右 齒周病・生前喪失 (OT5)
10. 頭蓋骨 下顎骨 左 子供 (OT10)

1.0 cm

図版 2 人骨



1. 椎骨 第一頸椎 (OT22)
2. 椎骨 第二頸椎 (OT22)
3. 椎骨 頸椎 リップング (OT2)
4. 椎骨 胸椎 (OT21)
5. 椎骨 腰椎 (OT21)

6. 椎骨 腰椎 リップング (OT2)
7. 椎骨 仙骨 (OT22)
8. 肋骨 (OT19)
9. 肋骨 右 (OT26)
10. 肋骨 左 (OT26)

图版 3 人骨



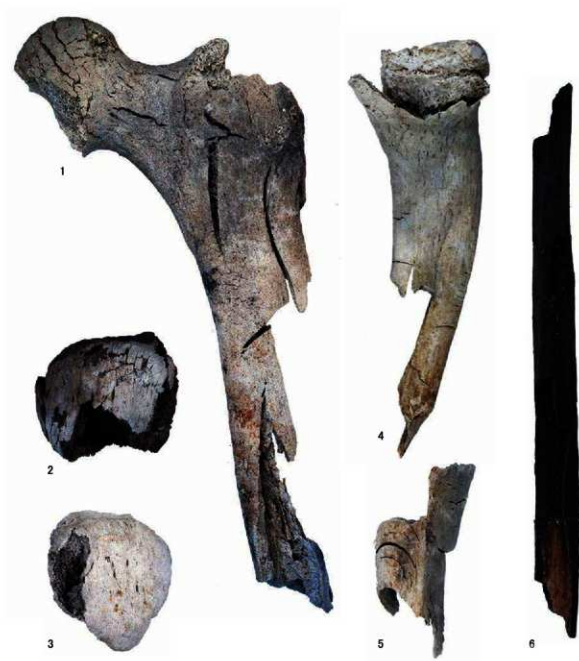
1. 肩甲骨 右 (OT21)
2. 肩甲骨 左 (OT22)
3. 肩甲骨 左子供 (OT10)
4. 锁骨 右 (OT8)
5. 锁骨 左 (OT21)

6. 桡骨 右 (OT36)
7. 尺骨 右 (OT36)
8. 上腕骨 右子供 (OT10)
9. 上腕骨 右 (OT8)
10. 尺骨 左 (OT22)
11. 桡骨 左 (OT10)

圖版 4 人骨

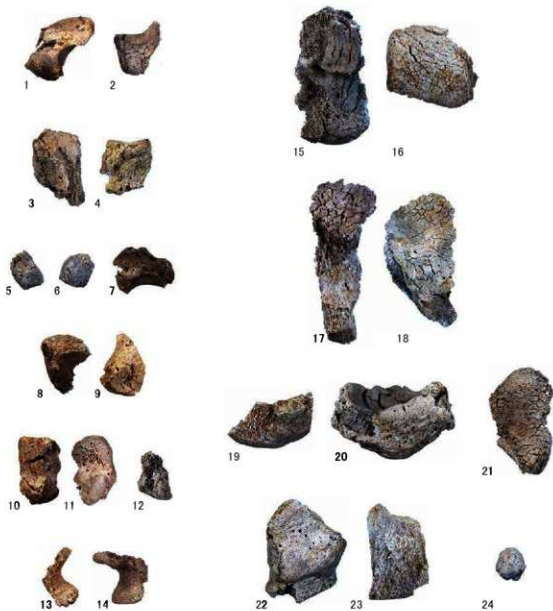


1. 大腿骨 右 (OT42)
2. 寬骨 左 (OT45)
3. 寬骨 右 妊孺出產痕 (OT11)
4. 寬骨 左 妊孺出產痕 (OT11)
5. 大腿骨 左 (OT42)



1. 大腿骨 左 (OT12)
2. 膝蓋骨 右 (OT21)
3. 膝蓋骨 左 (OT21)
4. 脛骨 右 (OT19)
5. 脛骨 左 (OT19)
6. 橈骨 左 (OT29)

圖版 6 人骨



1.0 cm

1. 手根骨 舟狀骨 右 (OT21)
2. 手根骨 月狀骨 左 (OT21)
3. 手根骨 三角骨 右 (OT28)
4. 手根骨 三角骨 左 (OT28)
5. 手根骨 豆狀骨 右 (OT28)
6. 手根骨 豆狀骨 左 (OT28)
7. 手根骨 大菱形骨 左 (OT21)
8. 手根骨 小菱形骨 右 (OT6)
9. 手根骨 小菱形骨 左 (OT8)
10. 手根骨 有頭骨 右 (OT10)
11. 手根骨 有頭骨 右 (OT21)
12. 手根骨 有頭骨 子供 (OT10)

13. 手根骨 有鉤骨 右 (OT32)
14. 手根骨 有鉤骨 左 (OT22)
15. 足根骨 距骨 右 (OT14)
16. 足根骨 距骨 左 (OT14)
17. 足根骨 踵骨 右 (OT32)
18. 足根骨 踵骨 左 (OT19)
19. 足根骨 舟狀骨 右 (OT10)
20. 足根骨 舟狀骨 左 (OT3)
21. 足根骨 內側楔狀骨 左 (OT44)
22. 足根骨 立方骨 右 (OT44)
23. 足根骨 立方骨 左 (OT10)
24. 足根骨 種子骨 (OT43)

図版 7 人骨



1. 中手骨 (OT22)
2. 指骨 基節骨 (OT26)
3. 指骨 中節骨 (OT26)
4. 指骨 末節骨 (OT26)
5. 指骨 第一末節骨 右 (OT32)
6. 指骨 第一末節骨 左 (OT32)
7. 中足骨 (OT26)
8. 趾骨 基節骨 (OT14)
9. 趾骨 中節骨 (OT43)
10. 趾骨 末節骨 (OT43)

11. 趾骨 中節骨 骨病変 (OT44)
12. 趾骨 末節骨 骨病変 (OT44)
13. 第一中足骨 右 (OT22)
14. 第一中足骨 左 (OT22)
15. 第一基節骨 右 (OT22)
16. 第一基節骨 右 (OT35)
17. 第一基節骨 左 (OT35)
18. 第一末節骨 左 (OT35)
19. 短い骨 幼児 (OT10)
20. 長管骨 幼児 (OT10)

1.0 cm

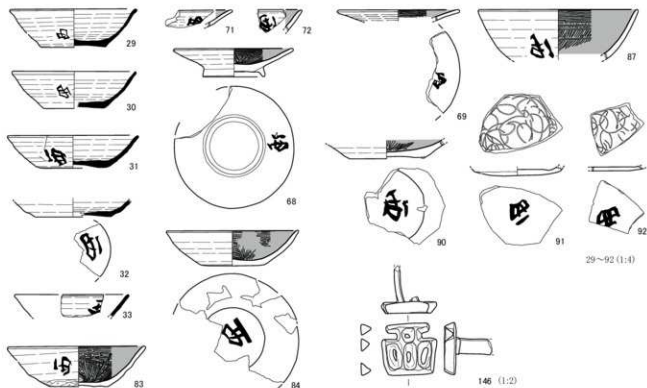
第VI章 調査の総括

第1節 墨書「西」について

本稿では、奈良・平安時代の竪穴住居跡より出土した墨書土器の内、特徴的であるH20号住居跡出土の「西」についてまとめてみたい。

今回、H20号住居跡から「西」と判読できる墨書が15点出土した。墨書「西」はH6号住居跡から2点、H29号住居跡から1点が出土している。H20号住居跡から出土した15点を下に図示したが、特徴的な点は第一画目の「一」が短いことである。これは他の住居跡から出土した墨書も同様の特徴がある。書体としてはいずれもよく似ており同一人物の筆と思える程である。しかし、書かれている土器自体をみるとやや年代の幅がある。特に91・92はその特徴から8世紀代の所産が考えられ、68・69は9世紀前半以降のものである。H20号住居跡は建替えが行われており、通常の竪穴住居跡に比べると存続期間が長いことも想定できるが、土器自体の同一性は疑問がある。よって91・92は手習い的に、残存していた破片を使ったものと考えたい。なお、146は銅製品で、本文中でも触れたが、H20号住居跡のカクラン土から出土した。しかし、墨書の書体と特徴を同じくすることから本跡に関連する遺物として取り上げた。銅製であるため「焼印」的な使用はできないが、焼成前の押面がやわらかい陶器類へのスタンプ的（刻印）な使用や、墨を付けて布へ押すといった使用方法は考えられないだろうか。「銅印」や「焼印」とは違う所有権を表す道具の一部と考えたい。

本遺跡からは墨書「西」がまとまりある出土傾向にあったが、南に200m離れた上の城遺跡Ⅱでは「東」と書かれた墨書がまとまって出土している。また、西に500mの西八日町遺跡では「西家」と読める墨書が出土しており、湯川を挟んで400mの野馬久保遺跡からは「西」が多く出土している。各遺跡の位置関係からするとこれらの文字が方位を示すものではなく、やはり集落や集団を特定する意味をもっていると推定できるのではないだろうか。



第1図 墨書「西」集成図

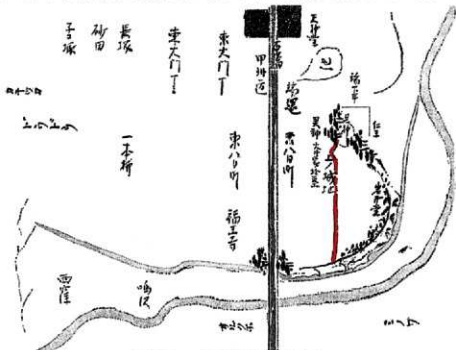
第2節 中世堀跡と小字「上の城」について

今回の調査では、中世の所産と考えられるM7・9・12・13号溝状遺構が検出された。これら遺構は調査地点が離れているがM7とM9、M12とM13は同一遺構と考えられ、またその規模や形態より城館の堀跡と推定した。本項ではこれら溝跡の位置づけについて考察したい。

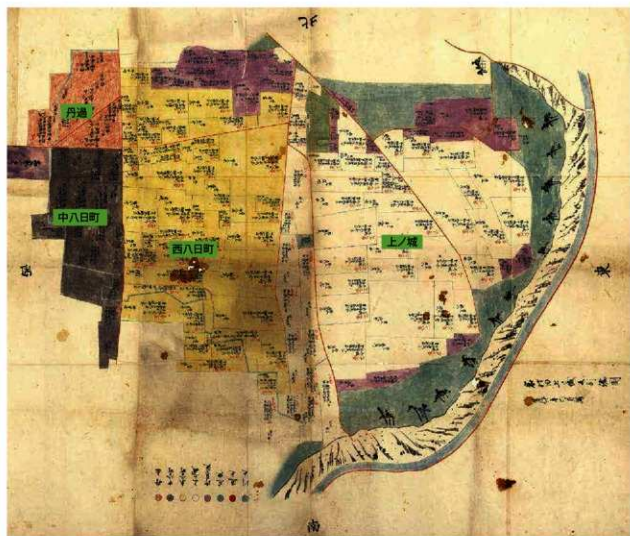
本溝跡の特徴は、東西方向に「瘤」状の張り出しを持つことである。この張り出しがどのような機能を持たしているのか不明であるが、M7・9号が張り出す部分は、地形も西側に張り出しているようであり、地形に起因しているのかも知れない。ただ、M12・13号も東側にとび出している部分が推定でき、機能として必要であった可能性も捨てきれない。

なお、この溝の張り出しは江戸中期にすでに認識されていた可能性がある。第2図に示した絵図は「四鄰譚藪」に掲載されたもので、彩色した部分がM7・9号溝状遺構と考えられる。当時は道路的なものになっていたかも知れないが、添え書きは「上ノ城址」と書かれていることから当時も堀として認識していた可能性がある。「四鄰譚藪」は元文元年(1736)に岩村田宿中町出身の吉沢好謙により纏められた書物で、岩村田を中心に、中世の大井郷や中世・近世の歴代城主・仏寺の沿革盛衰などを記した郷土史の先駆的書物で七巻からなっている。この内第三巻に、「黒岩陣城の南四丁を隔て、上の城というあり、南北式丁半、東西式丁、堀かた橋台あり、八日町へ三丁半東南岸高く湯川を帯びたり、上の城乾松山の内に、大井城主たまやというあり、方三四十間、今霊神又りやうをうともいへり、ならびに上古竜雲寺の跡あり、東西三丁許、湯川の岸に至る、近年遺骨の出る事あり、又だびの竈を出せり、たた仁王門の跡として残れり、或云、大井政則法名良鑑、信州佐久郡於長倉三原之奈、岐山宮御口云、岩村田之下奉仰竜慈大明神ヲ今祭之」とこの周辺について記載されている。これらの図や文章から江戸中期段階の人々には、この部分が「上ノ城」という名称で城館跡として認識されていた可能性が非常に大きい。

また、それを追認する資料として、第3図の「岩村田上ノ城反別縮図」を取り上げたい。この図は地元旧家に伝わるもので、明治6年に写したと記録されている。内容は地籍ごとの所有者と耕作面積が記載されているが、作成目的は幕末の藤ヶ城築城の折の土地買い上げ資料として作成された可能性があり、藤ヶ城の予定城域が朱の点線で示されている。現在、この地域の地籍線は藤ヶ城築城により大きく作り直されており、築城後の縄張り図に沿うように地籍線が引かれている。



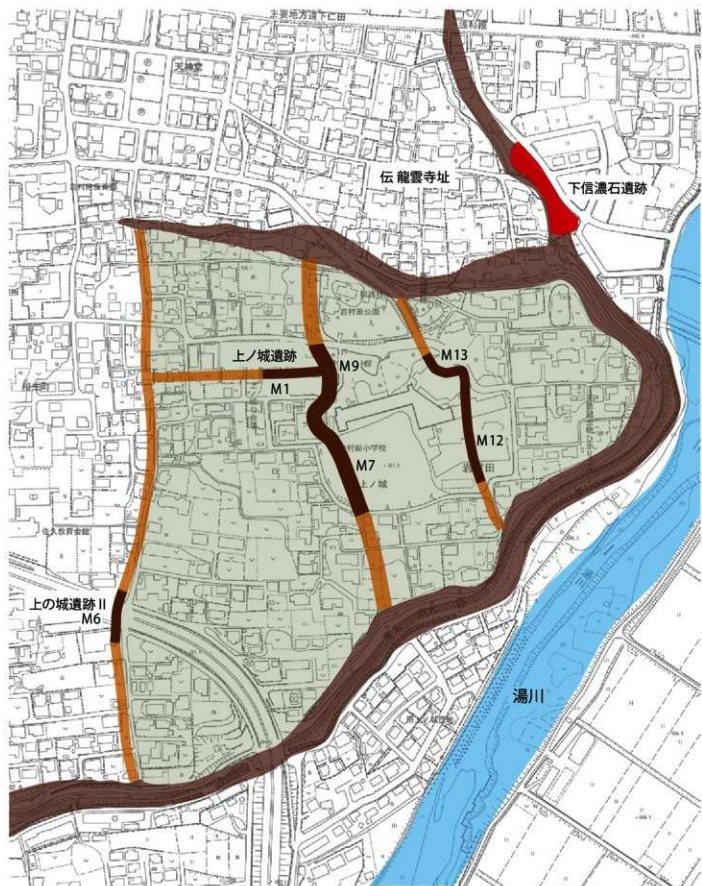
第2図 「四鄰譚藪」掲載図



第3図 「岩村田上ノ城反別縮図」明治六年六月写し

しかし、本図は失われた築城前の地籍線が描かれている。ここで注目される点が2点ある。第1点目として、赤線で描かれた道の位置である。北の基点から台地を南北に貫くように3本の道があり、東西にも描かれている。この道の位置が今回検出されたM7・9号とM12・13号に重なる可能性が高いことである。特に中央の幅を持たせた2本の道は、M7・9号溝状遺構の幅を示しているのではないだろうか。中近世の城郭堀跡が後世に道として利用されている例は多い。今回の事例も、江戸期までは溝状遺構部分が窪地となり、道として利用していたことが考えられる。また、現在北側台地を堀切状に開削してある上り坂はこの時点ですでに開削されている事が判り、開削が中世まで遡る一つの傍証となろう。第2点目は色分けで示された小字の範囲である。この図では小字「上ノ城」が白色で示されM7・9号溝状遺構までの範囲で示され、現在の小字範囲より東側の狭い範囲を示している。また、西八日町は現在よりも北側に大きく広がり、中八日町との境の道(赤線)は第4図に示した上の城遺跡ⅡのM6号溝状遺構のラインとほぼ重なる事が判った。

以上のように、今回調査された中世堀跡は江戸期まではその存在が認識されており、土地利用や表示に影響していた事が判明し、小字「上の城」は、中世にこの場所に存在した城館跡を示している事が判ったと言ってよいであろう。今回の調査成果を基に第4図として仮称「上の城」の推定縄張り復元図を提示した。先にも触れたが、出土遺物や北側に存在したであろう旧龍雲寺の存続期間から、本城館の存続期間は14世紀～15世紀前半とし、大井氏による王城・黒岩城の前代城郭と捉えたい。



第4図 上の城跡推定縄張り図

第3節 藤ヶ城跡関連遺構について

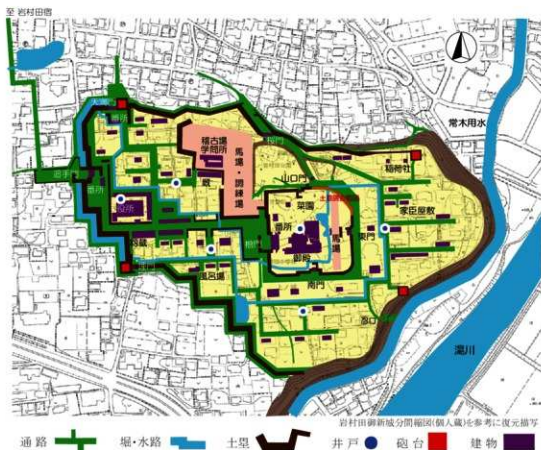
今回の発掘調査では、藤ヶ城跡に関連すると考えられる遺構が調査された。本節ではそれら発見された遺構について、現時点での藤ヶ城跡の実態についてまとめてみた。

検出された遺構は、本文中でも触れたがまず、南門の礎石と考えられるD18号土坑とD19号土坑である。調査区域外に一部が入る為、全体を把握できなかったが、大型の自然礫を土坑内に配置する点は大型建物の東石的性格を擁していると考えられた。下図に示した南門位置ともほぼ整合する。

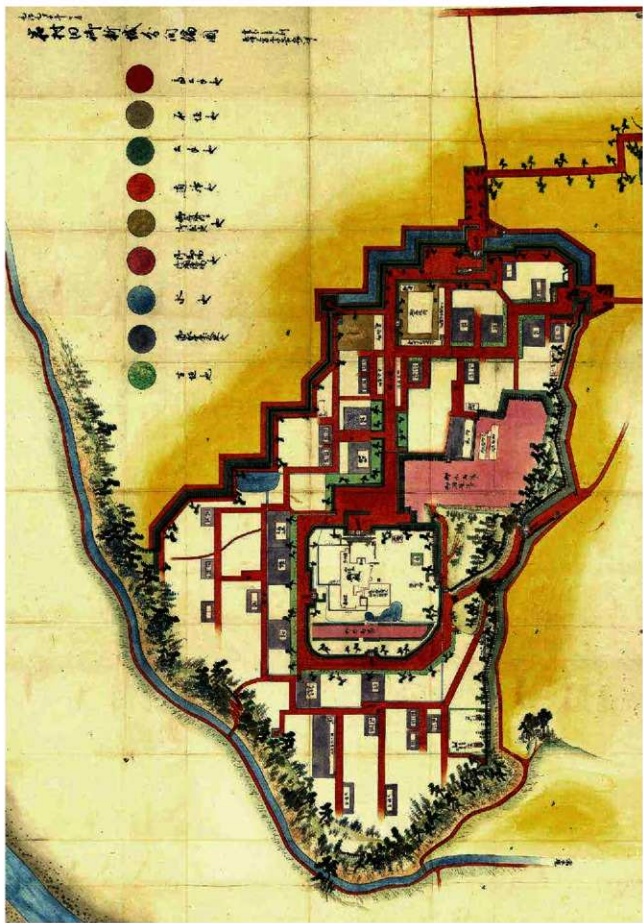
次に「御殿」を取り囲む土塁である。北東コーナーの曲線部分を調査したと考えられる。調査結果から土塁は底面が7～8m、高さが3m近くあったと推定できる。残念ながら土塁上の構築物は確認できなかったが、現代に伝わる「岩村田御新分間縮図」から判断すると、御殿周りの土塁上には構築物は無かったと推定できる。また、戦後GHQにより撮影された航空写真にもこの土塁部分は鮮明に映し出されており、市民球場ができる昭和28年までは畑地の中に「御殿」を取り囲む土塁が残存していたことが判る。

次にピットの項で触れたがP531とP532がある。これらピットは播鉢状の掘り込み内に拳大の石を敷き詰めているのが特徴であり、現在の岩村田市街地の旧家蔵の基礎形状から藤ヶ城の「櫓門」の礎石一部ではないかと推測した。また、土坑のD5号やD14号も覆土の特徴から近世遺構の構築と考えられ城関連遺構の可能性もある。以上、調査によって確認された藤ヶ城関連の遺構を取り上げた。関連遺構は思いのほか少なく、地表近くの構築物は球場や小学校建設で削平を受けたことが影響を及ぼしていると考ええる。

最後に城の名称について触れたい。本城の名称は、「藤ヶ城」と「岩村田城」が現在まで使われている。地名を取る城名が多いことを考えると「岩村田城」でもよいように考えるが、関連文献を調べて



第5図 藤ヶ城跡復元図



第6図 岩村田御新城分間縮図(個人蔵)

みると、管見に触れたものとして一番古い文献は明治初めに出された『長野県町村誌 東信編』の岩村田町の項で「藤ヶ城墟」と記載されている。この文献は明治維新後に政府が地方の情勢把握のために各県令に命じ編纂したものである。このことから、明治初年の頃は地元で「藤ヶ城」と呼ばれていたことが推測される。また、昭和18年(1943年)の『史跡名称天然記念物調査報告書 第二十四輯』では報告者の岩崎長思氏が「藤ヶ城址」として報告している。

これが、戦後に入り昭和31年刊行の『北佐久郡志 第二巻歴史編』では興良 清氏により初めて「岩村田城」の名称が使われている。その後、平成4年(1992年)には『佐久市志 歴史編(三) 近世』において「藤ヶ城」と記載され、名称の混乱が生じる。これを受けて、平成9年(1997年)刊行の『定本佐久の城』において木内 寛氏は「藤ヶ城(岩村田城)」として「どういわけか明治以降、この城の正式な名称「藤ヶ城」はあまり使われていない。「藤ヶ城」は城主内藤氏の家紋「下り藤」に由来するものと考えられる。」と記載している。

確かに、近世城郭の名称は地名を冠とするものが多く、その他に岡山城の「鳥城」に代表される容姿などからくる俗称がついているものが多い。この観点からすると地名を冠とする「岩村田城」が通称としては良いようにも思う。しかし、本来は、岩村田藩が幕府に願ひ出た「築城願ひ」か或いは当時の家臣団の日記等に城名が記載されている事が判ればよいが、現状でそのような資料は未発見であり、最も時代の近い明治初年の先に触れた『町村誌』の記載に「藤ヶ城」と記載して届け出た事実は大きな意味があると考えられる。よって、新資料が発見されるまでは、「藤ヶ城(岩村田城)」の記載方法がよいのではないだろうか。



周辺航空写真(出典・国土地理院ウェブサイト昭和23年GHQ撮影)
中央部が現在の小学校敷地部分。北西方向にある大型の木造建物が移転前の岩村田小学校

第4節 まとめ

調査の総括として、第1節 墨書「西」について、第2節 中世堀跡と小字「上の城」について、第3節 藤ヶ城跡関連遺構について3点を現時点の調査成果として記載した。しかし、今回の発掘調査ではこの他にまだ多くの論点が残っている。列記すると、

1. 弥生時代後期の環濠と考えられる溝状遺構について

今回の調査で弥生時代の竪穴住居跡は発見されなかったが、形状より弥生環濠と判断した溝跡があった。今後、環濠内(台地東側)に集落の存在を確認する必要がある。また周辺部では西八日遺跡Ⅰ～Ⅷの調査で弥生後期末から古墳時代初頭の集落跡が確認されており、関連を考える必要がある。

2. 古墳時代後期の集落規模について

今回の調査でも古墳時代後期(6世紀～7世紀代)の竪穴住居跡は不確定部分もあるが33軒検出されている。上ノ城遺跡も含めると約40軒の集落が展開している。また、南西に存在する上の城遺跡Ⅱでは17軒、西八日町遺跡Ⅰでは49軒、西八日町遺跡Ⅱ～Ⅵでは53軒の竪穴住居跡が検出されている。湯川に東と南を区切られた東西500mの台地上に約200軒の集落が集中する状況が見て取れる。この集中度は何に起因したのか考える必要がある。

3. 中世火葬墓群について

今回の調査で45基の中世墓が検出され、この内、火葬墓は42基を数える。通常の中世墓域であれば、様々な形態の墓が検出される。土壙墓や石を詰めた集石墓、また五輪塔なども周辺部に散逸した状態で発見されるのが通常である。

しかし、今回は火葬墓が埋まりかけた堀跡の中に並ぶように検出された。この形状は「墓」というより「火葬場」に近い状況を示しており、それを裏付けるように検出された骨の量がいずれも少なく、埋葬用の墓壙に骨を移したことが推測されている。これが肯定できれば、今回検出されたこれら火葬墓は、中世後期に佐久地域に展開した曹洞宗布教の動きを示す傍証になる可能性が指摘できる。

先学の成果を援用すれば、中世後期(15～16世紀)に信濃は曹洞宗が大きく広がりを見せる。特に如仲派と呼ばれる宗派は、下級武士や農民・商人へも布教活動を広げ、その活動の一つとして信者に葬送儀礼を行い信者獲得につなげていった。その中心的な内容は、火葬を行い、僧侶が故人を追想し引導する様子が地元「龍雲寺文書」や「康国寺文書」に残されている。今回の火葬の場はこれらを示す可能性があり、分析結果の男女数や年齢幅、推定職種などもこれを裏付けている。今後、さらなる検証は必要であるが、武田氏の信頼を得た北高全祝が活躍する曹洞宗龍雲寺に近く、火葬墓の営みも15～16世紀に限定されるなど、時間的・空間的な要素は満たしており、今後のさらなる考察が望まれる論点である。

参考文献 村石正行「戦国期曹洞宗の地域展開と北高全祝」雑誌『信濃』第62巻第12号 2010

以上ここでも3点を挙げたが、まだ多様な論点が潜んでいることは確かである。平成27年の春から始まった発掘調査は足掛け8年を迎えようとしている。世も平成から令和となり、当時グラウンドで共に発掘調査を行った6年生は成人を迎えた。既存敷地内での建替え工事であったため、5か年に及ぶ取り壊しと建て替え工事にあわせての調査であり、その後の整理・報告書作成も月日を要したがここに刊行の運びとなる。調査を通して工事関係者や小学校教職員の皆さん、また地元の皆さんには大変なご理解・ご協力をいただき、記して感謝申し上げたい。

最後に、今回の発掘調査を機に藤ヶ城土塁が一部保存され、また最後に残った藤ヶ城井戸が地元の方々の熱意から市指定文化財になったことは望外の喜びであり、ご尽力頂いた方々に重ねて感謝申し上げ、報告書を閉じたい。



IV区全景（奥の新校舎部分がI区調査範囲）



I区全景（旧グラウンド範囲）

图版 2



H1号住居跡跡



H1号住居跡掘方



H2号住居跡



H2号住居跡掘方

図版 4



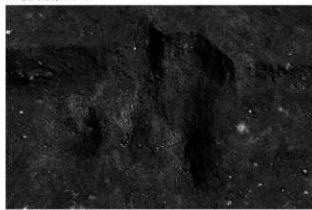
H3号住居跡



H3号住居跡カマド



H3号住居跡掘方



H3号住居跡カマド掘方



H3号住居跡内土坑



H4号住居跡



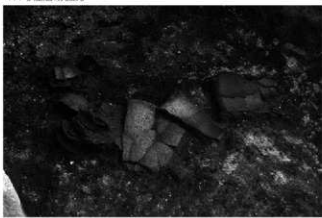
H4号住居跡カマド



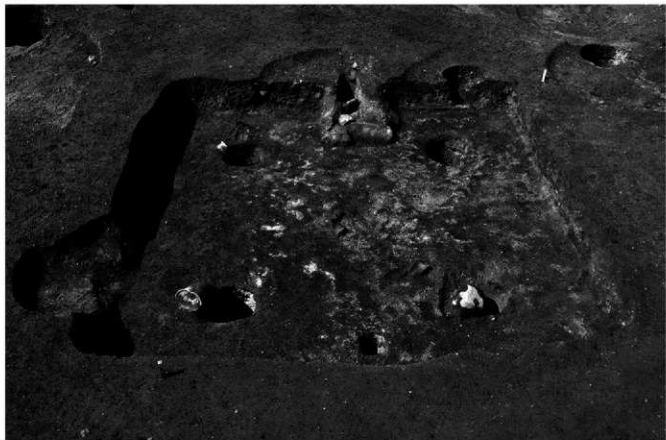
H4号住居跡掘方



H4号住居跡カマド掘方



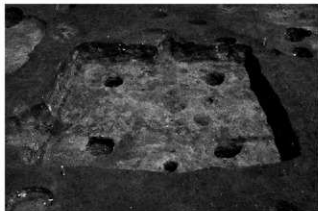
H4号住居跡出土遺物



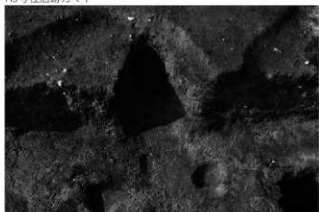
H5号住居跡



H5号住居跡カマド



H5号住居跡掘方



H5号住居跡カマド掘方



H5号住居跡出土遺物



H6号住居跡



H6号住居跡掘方

图版 8



H7号住居跡



H7号住居跡確認状況



H8号住居跡



H8号住居跡掘方



H9号住居跡



H9号住居跡カマド



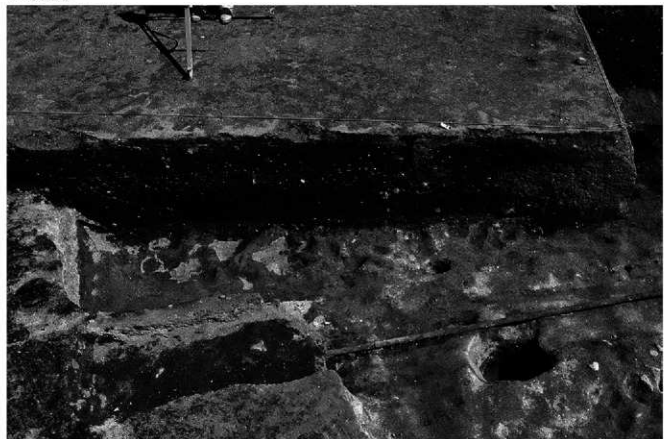
H10号住居跡



H10号住居跡カマド



H11号住居跡



H11号住居跡照方



H12号住居跡



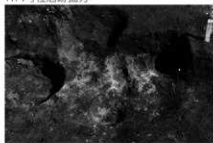
H13号住居跡



H14号住居跡



H14号住居跡掘方



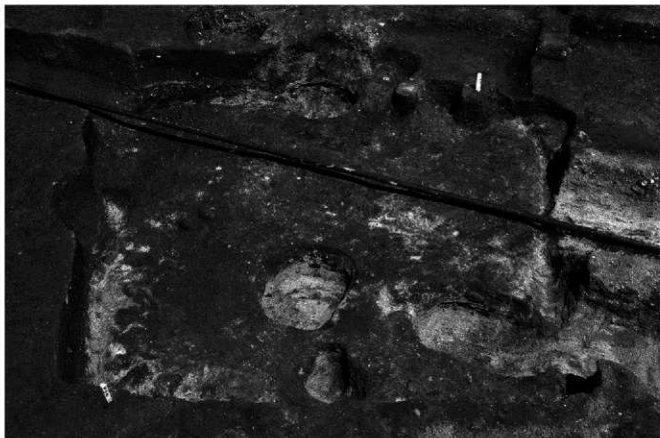
H15号住居跡カマド面方



H16号住居跡カマド



H15号住居跡カマド



H15号住居跡



H15号住居跡掘方



H17号住居跡



H17号住居跡カマド



H18号住居跡



H18号住居跡掘方



H18号住居跡遺物出土状況



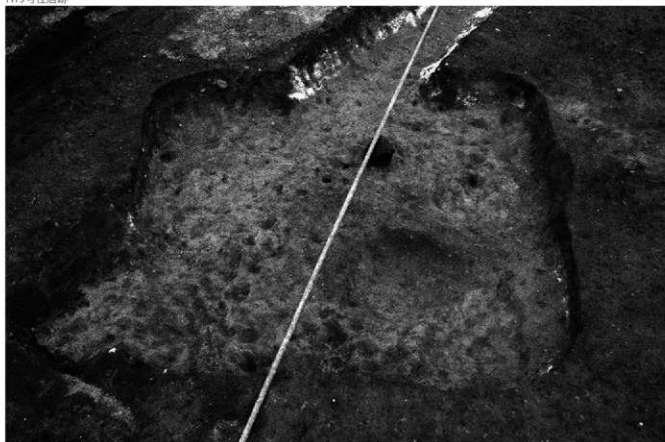
H18号住居跡カマド



H18号住居跡遺物出土状況



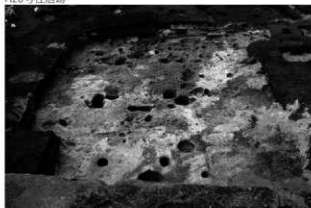
H19号住居跡



H19号住居跡掘方



H20号住居跡



H20号住居跡掘方



H20号住居跡カマド



H20号住居跡カマド掘方



H21号住居跡カマド



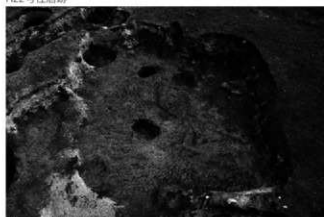
H21号住居跡



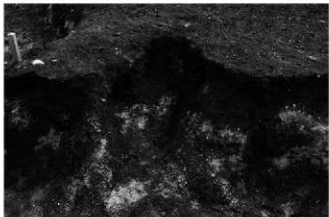
H21号住居跡掘方



H22号住居跡



H22号住居跡掘方



H22号住居跡カマド掘方



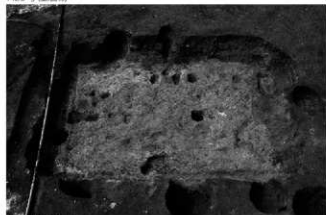
H22号住居跡カマド



H22号住居跡遺物出土状況



H23号住居跡



H23号住居跡掘方



H23号住居跡カマド



H23号住居跡カマド掘方



H23号住居跡遺物出土状況



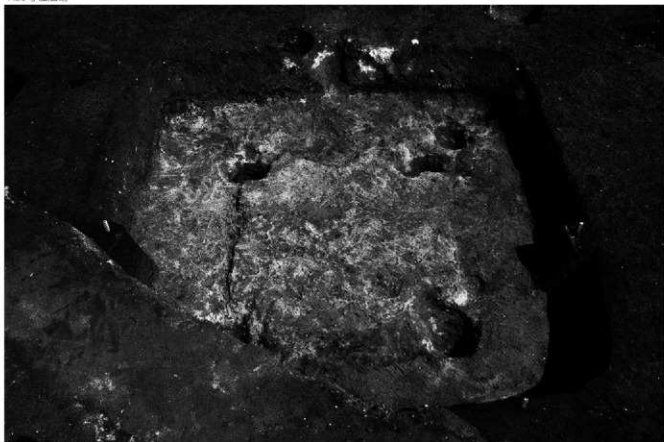
H25号住居跡セクション



H25号住居跡



H26号住居跡



H26号住居跡掘方



H27号住居跡



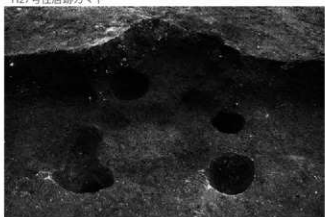
H27号住居跡掘方



H27号住居跡カマド



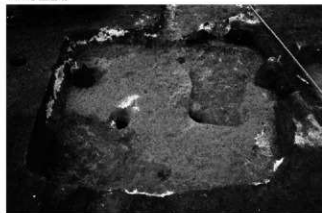
H27号住居跡セクション



H27号住居跡カマド掘方



H28号住居跡



H28号住居跡掘方



H28号住居跡カマド



H28号住居跡遺物出土状況



調査状況



H30号住居跡



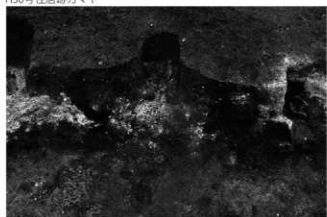
H30号住居跡掘方



H30号住居跡カマド



H30号住居跡遺物出土状況



H30号住居跡カマド掘方



H31号住居跡



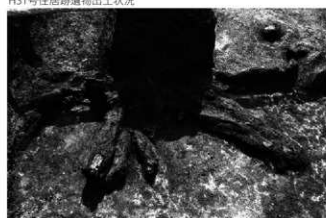
H31号住居跡掘方



H31号住居跡遺物出土状況



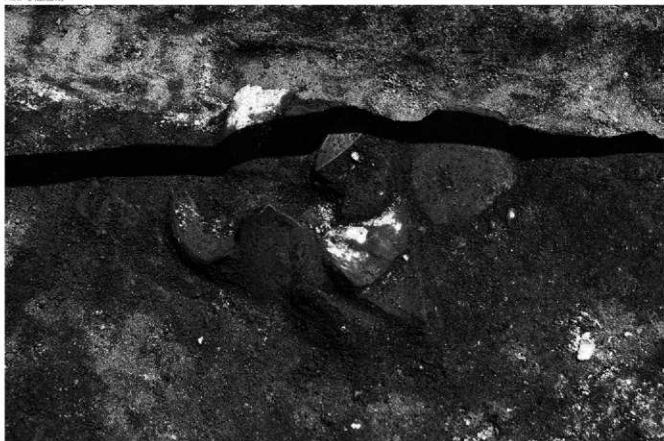
H31号住居跡カマド掘方



H31号住居跡炭化材検出状況



H32号住居跡



H32号住居跡粘土・焼土範圍



H33号住居跡



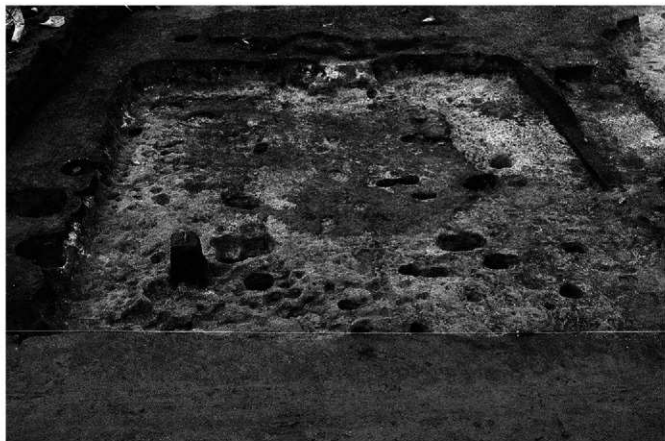
H33号住居跡カマド



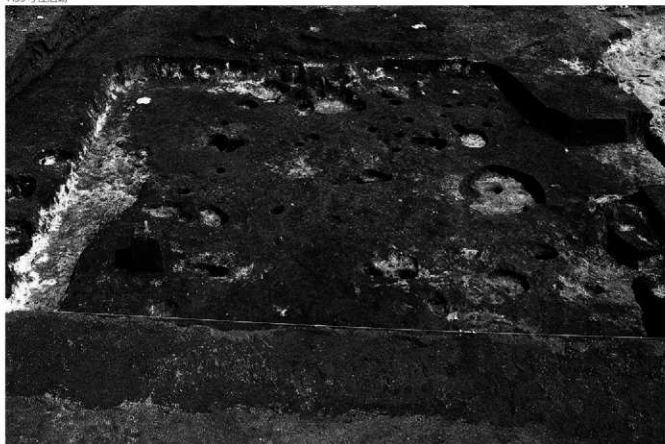
H34号住居跡



H34号住居跡掘方



H35号住居跡



H35号住居跡掘方



H36号住居跡



H36号住居跡面方



H37号住居跡



H37号住居跡



H37号住居跡カマド



H37号住居跡遺物出土状況



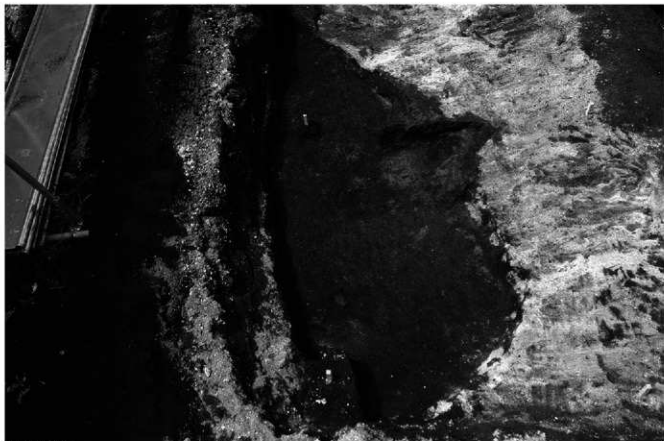
調査状況



H38号住居跡



H39号住居跡



H40号住居跡



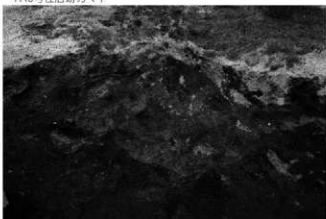
H40号住居跡



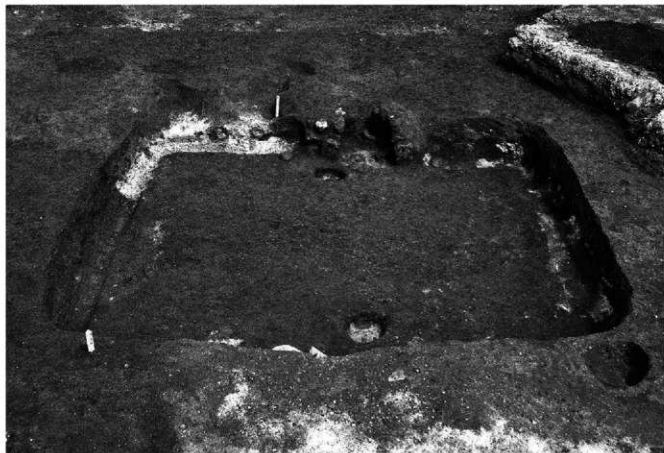
H40号住居跡カマド



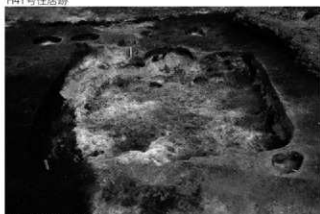
H40号住居跡カマドセクション



H40号住居跡カマド掘方



H41号住居跡



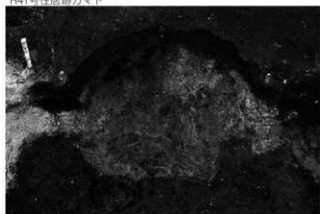
H41号住居跡掘方



H41号住居跡カマド



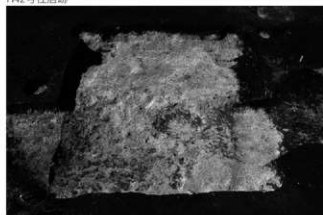
H41号住居跡遺物出土状況



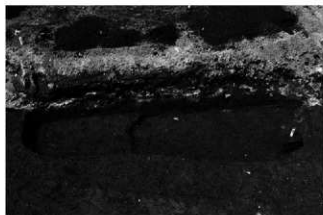
H41号住居跡カマド掘方



H42号住居跡



H42号住居跡掘方



H43号住居跡



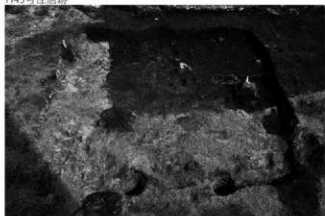
H42号住居跡遺物出土状況



H44号住居跡



H45号住居跡



H45号住居跡西方



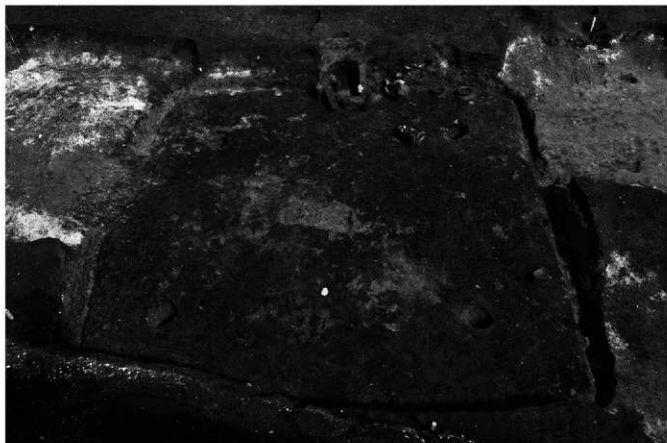
H45号住居跡カマ下



H45号住居跡遺物出土状況



H45号住居跡遺物出土状況



H46号住居跡



H46号住居跡カマド及び遺物出土状況



H47号住居跡



H47号住居跡細方



H48号住居跡



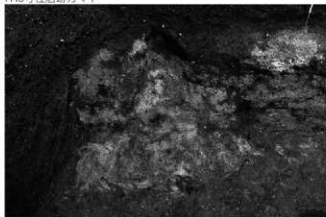
H48号住居跡掘方



H48号住居跡カマド



H48号住居跡遺物出土状況



H48号住居跡カマド掘方



H49号住居跡



H49号住居跡掘方



H49号住居跡カマド横梁材検出状況



H50号住居跡



H50号住居跡掘方



H51号住居跡



H52号住居跡カマド



H52号住居跡



IV区南調査風景



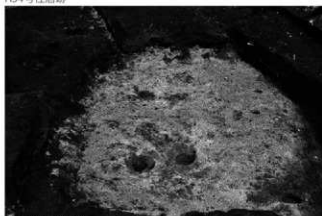
H53号住居跡



H53号住居跡掘方



H54号住居跡



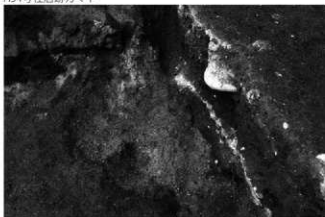
H54号住居跡掘方



H54号住居跡カマド



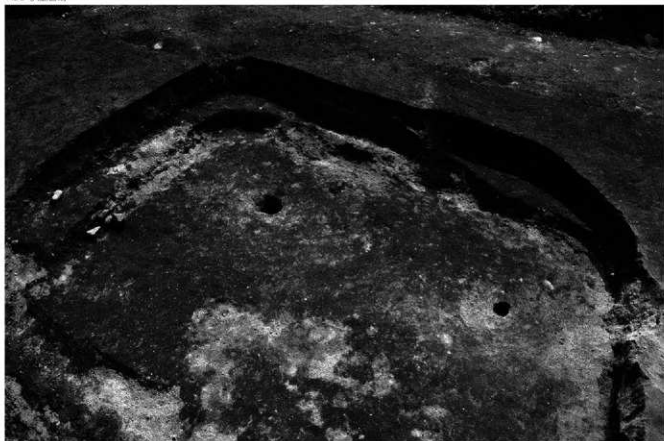
H54号住居跡遺物出土状況



H54号住居跡カマド掘方



H56号住居跡



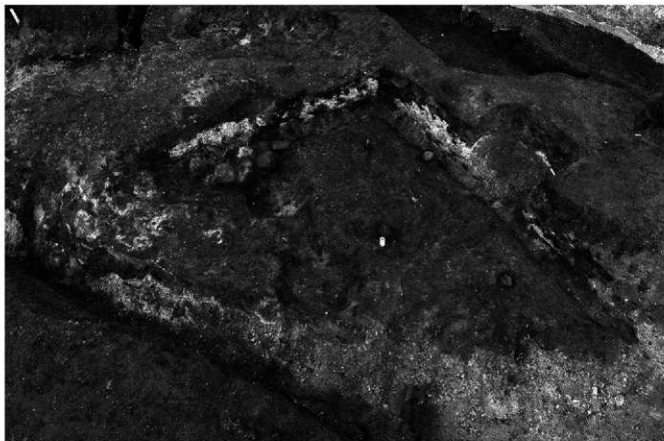
H57号住居跡



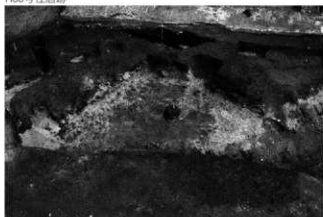
H58号住居跡



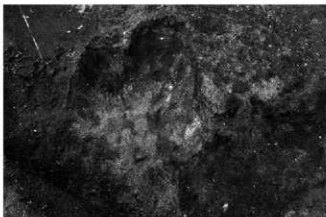
H59号住居跡



H60号住居跡



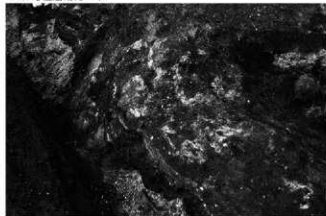
H60号住居跡掘方



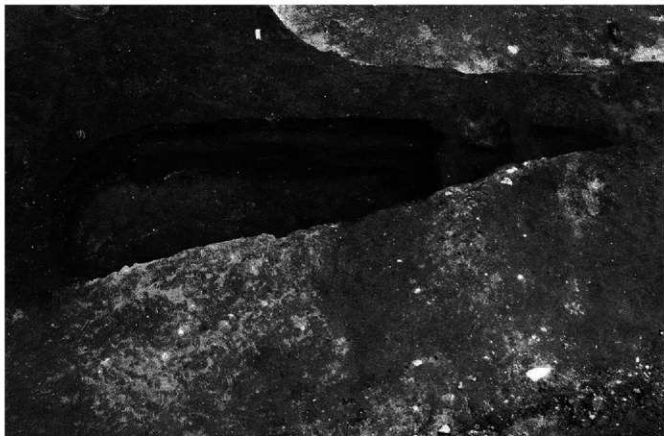
H60号住居跡カマド



H60号住居跡遺物出土状況



H60号住居跡カマド掘方



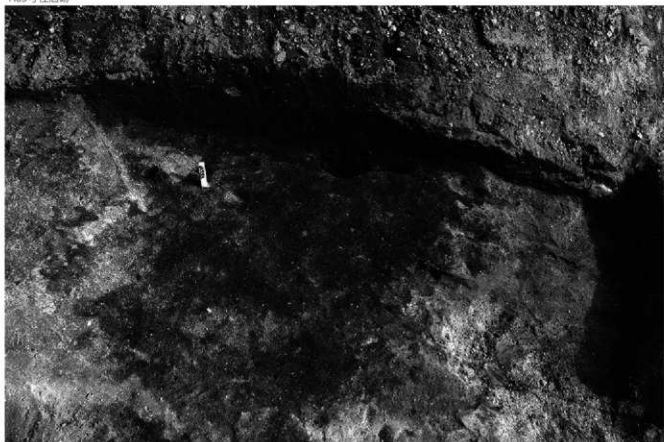
H61号住居跡



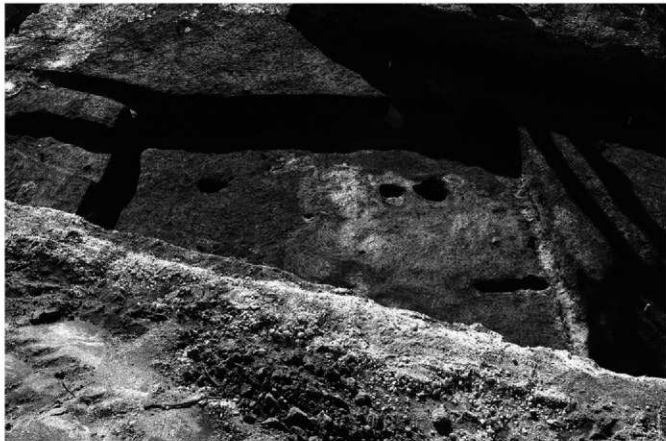
H62号住居跡



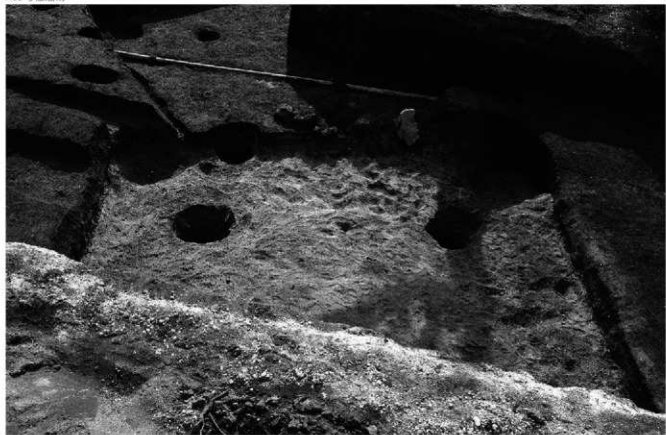
H63号住居跡



H64号住居跡



H65号住居跡跡



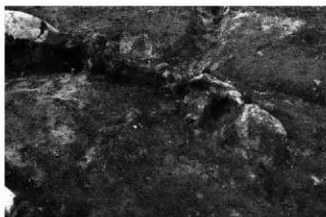
H65号住居跡掘方



H66号住居跡



H66号住居跡掘方



H66号住居跡カマド



H66号住居跡遺物出土状況



H66号住居跡カマド掘方



F 1号独立柱建物跡



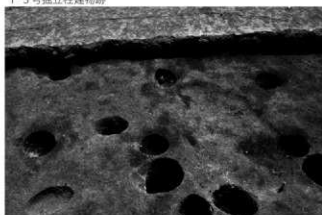
F 2号独立柱建物跡



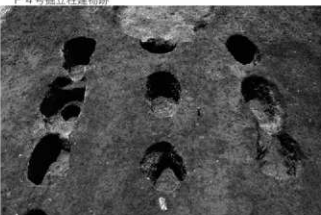
F 3号独立柱建物跡



F 4号独立柱建物跡



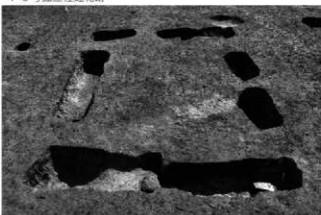
F 5号独立柱建物跡



F 6号独立柱建物跡



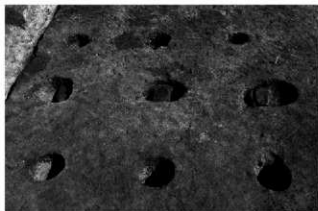
F 7号独立柱建物跡



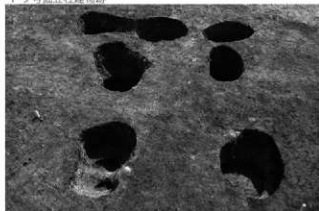
F 8号独立柱建物跡



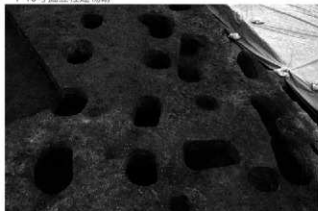
F 9号掘立柱建物跡



F 10号掘立柱建物跡



F 11号掘立柱建物跡



F 12号掘立柱建物跡



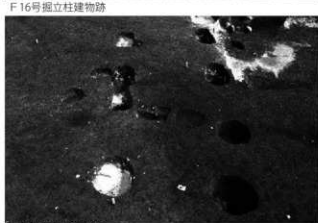
F 14号掘立柱建物跡



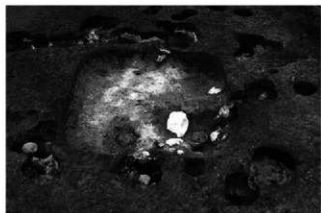
F 16号掘立柱建物跡



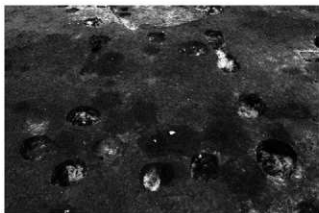
F 15号掘立柱建物跡



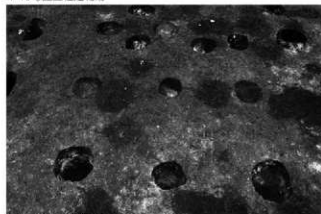
F 17号掘立柱建物跡



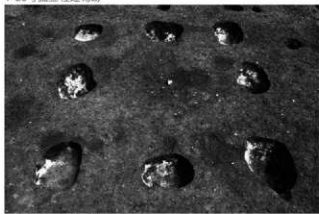
F 18号掘立柱建物跡



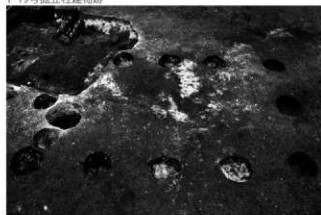
F 20号掘立柱建物跡



F 19号掘立柱建物跡



F 22号掘立柱建物跡



F 21号掘立柱建物跡



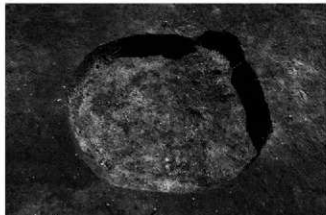
F 30号掘立柱建物跡



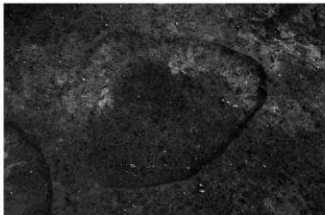
F 29号掘立柱建物跡



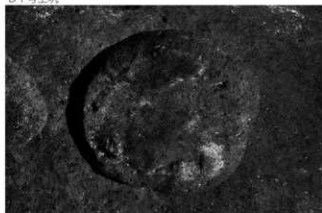
F 31号掘立柱建物跡



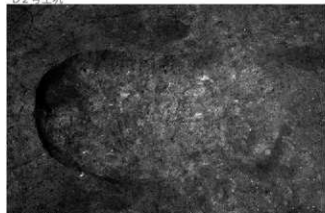
D1号土坑



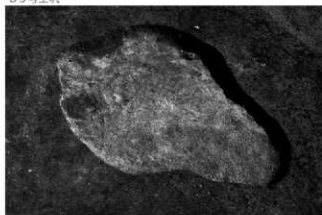
D2号土坑



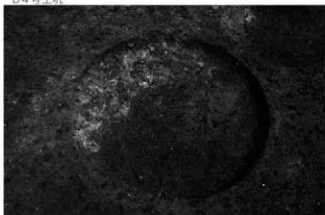
D3号土坑



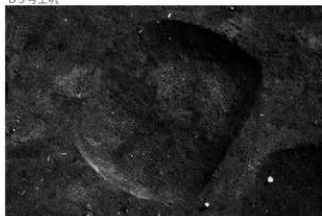
D4号土坑



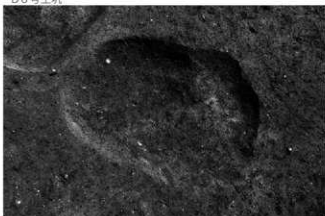
D5号土坑



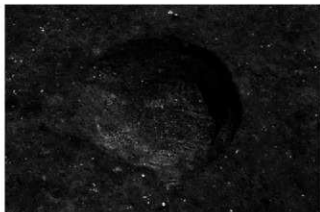
D6号土坑



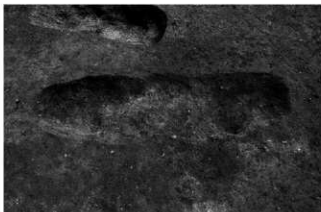
D7号土坑



D8号土坑



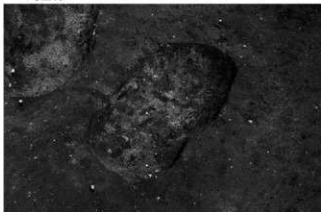
D9号土坑



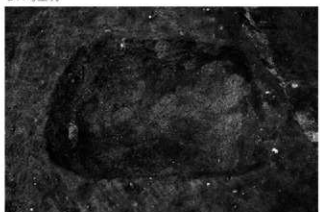
D10号土坑



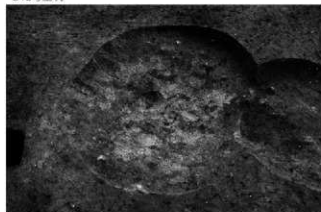
D11号土坑



D12号土坑



D13号土坑



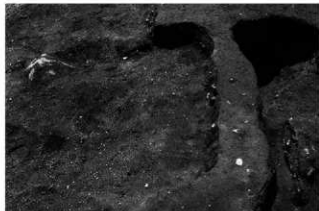
D14号土坑



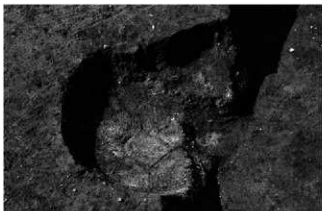
D19号土坑



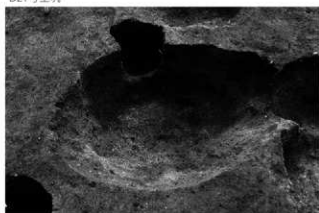
D20号土坑



D21号土坑



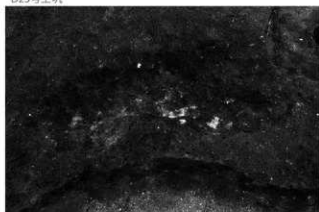
D22号土坑



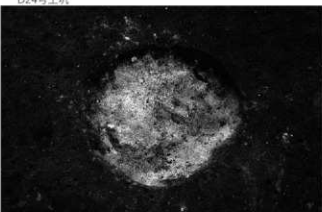
D23号土坑



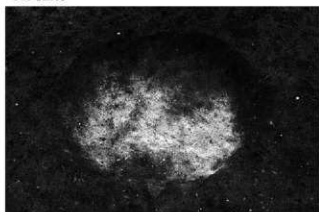
D24号土坑



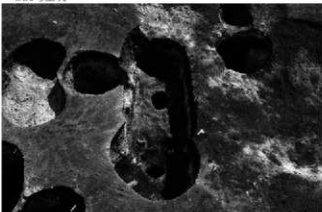
D25号土坑



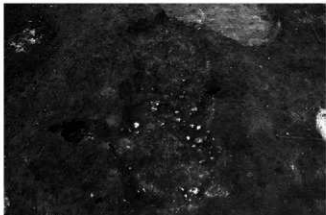
D26号土坑



D27号土坑



D28号土坑



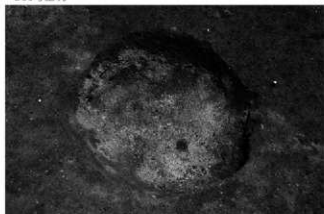
D29号土坑



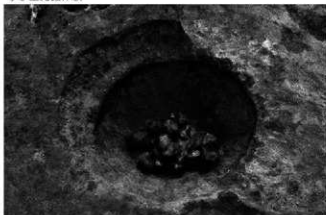
D30号土坑



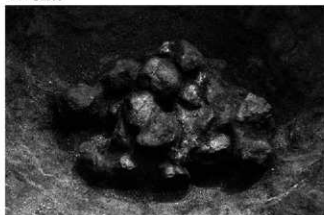
小学生发掘现场



D31号土坑



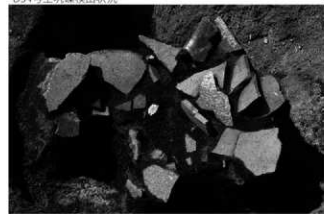
D34号土坑



D34号土坑碑出土状况



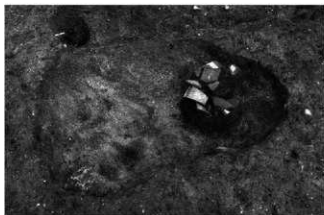
D35号土坑



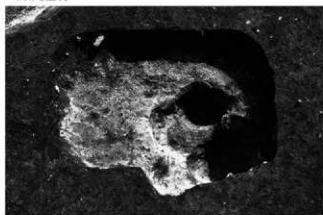
D35号土坑遗物出土状况



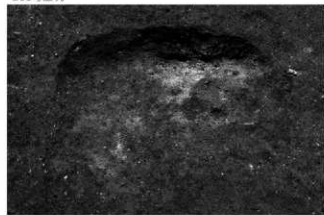
D32号土坑



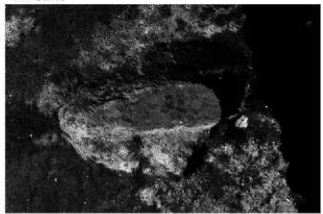
D36号土坑



D38号土坑



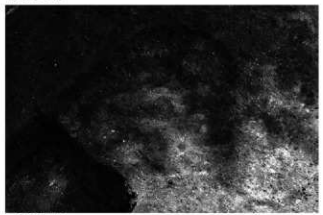
D39号土坑



D40号土坑



D41号土坑



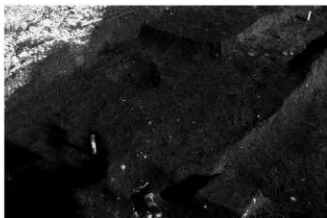
D42号土坑



D43号土坑



D44号土坑



D46号土坑



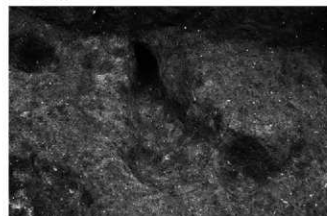
D45号土坑阶梯状出状况



D45号土坑



D47号土坑



D48号土坑



M7号沟状遺構調査風景



M 1号溝状遺構



M 2号溝状遺構



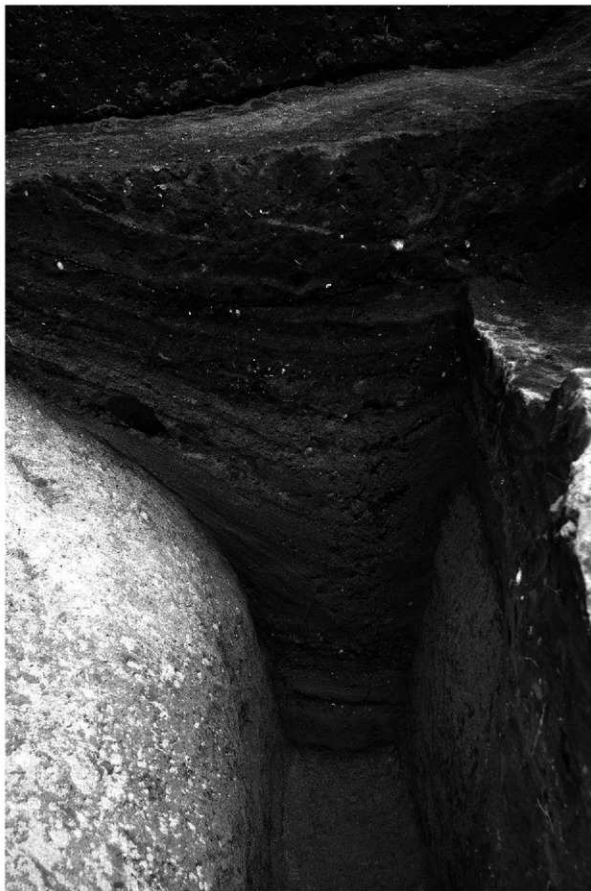
M 6号溝状遺構



M7号溝状遺構



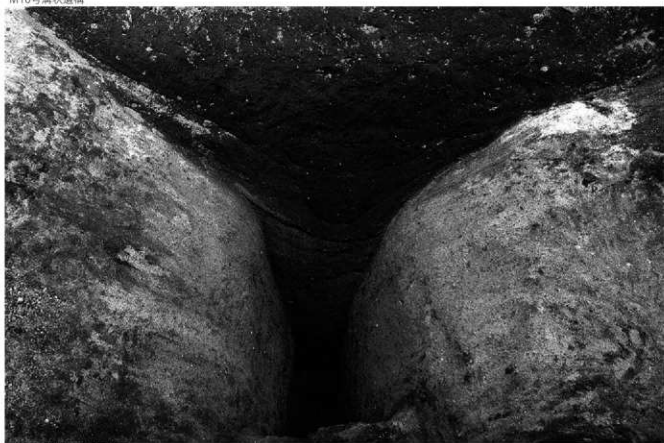
M9号溝状遺構



M9号溝状遺構堆積状況



M10号溝状遺構



M10号溝状遺構堆積状況



M11号溝状遺構



M11号溝状遺構遺物出土状況



M12号溝状遺構



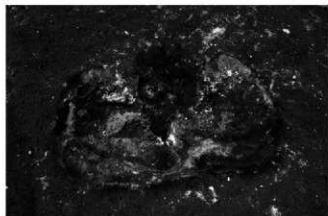
M13号溝状遺構(正面の土盛は藤ヶ城の土塁、M13は土塁下を抜けて正面の切通しの道路に向かっている。)



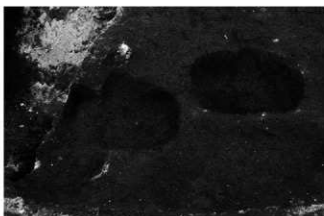
M13号溝状遺構



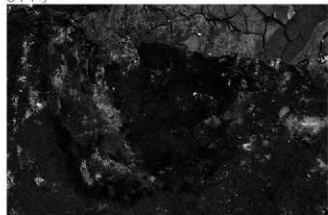
M13号溝状遺構堆積状況



OT1号



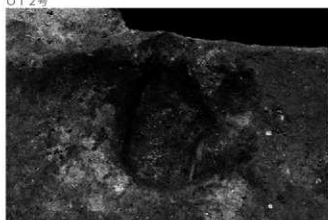
OT1号・左OT2号とOT3号



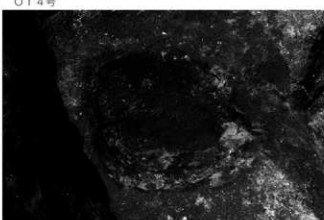
OT2号



OT4号



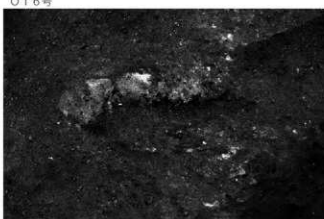
OT5号



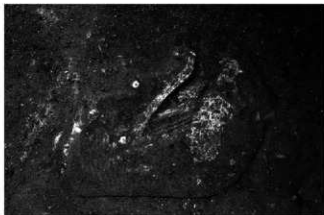
OT6号



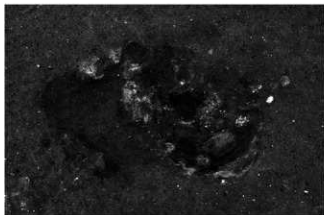
OT7号



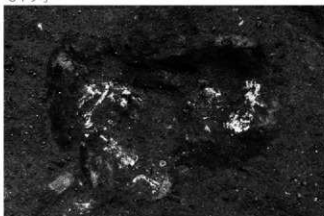
OT8号



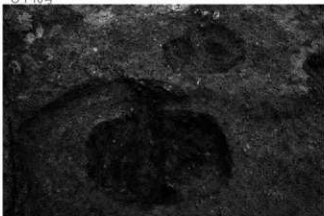
OT 9号



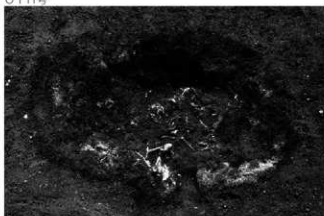
OT 10号



OT 11号



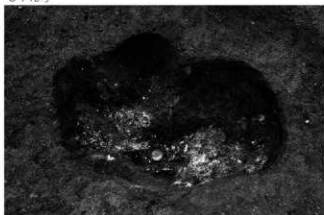
OT 11号・OT 12号(奥)



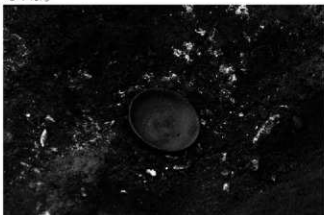
OT 12号



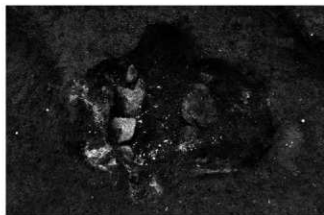
OT 15号



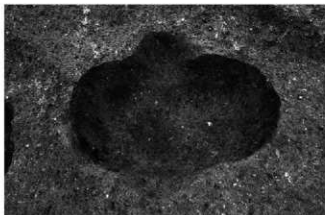
OT 13号



OT 13号遺物出土状況



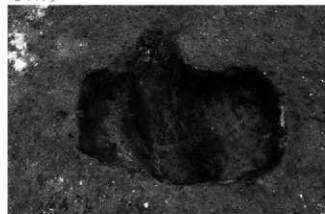
OT14号



OT14号



OT16号



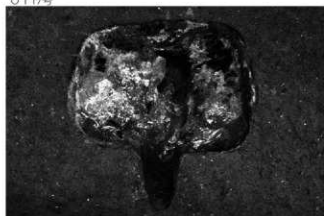
OT18号



OT17号



OT17号遺物出土状況



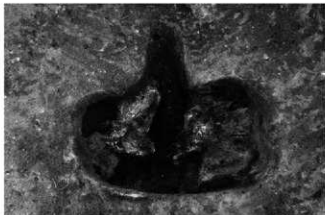
OT19号火葬骨検出状況



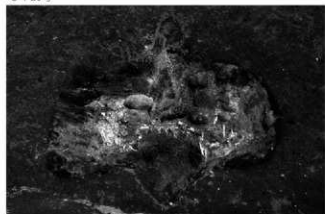
OT19号



OT 20号



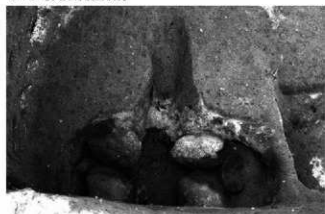
OT 22号



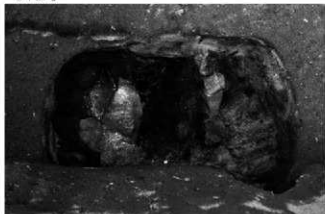
OT 21号火葬骨堆出状况



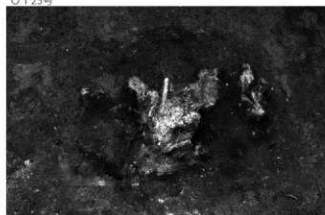
OT 21号



OT 23号



OT 24号



OT 25号



OT 26号



OT 27号



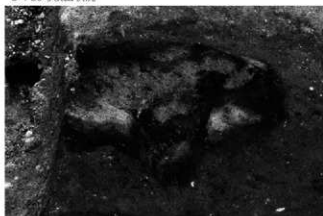
OT 29号



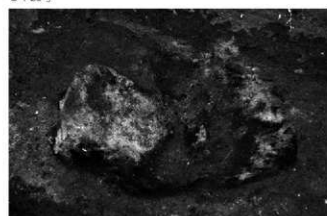
OT 28号 映出状况



OT 28号



OT 30号



OT 31号



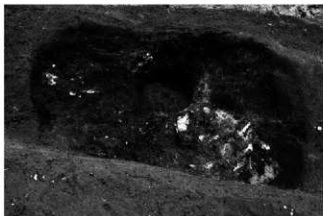
OT 32号 碾碎出状况



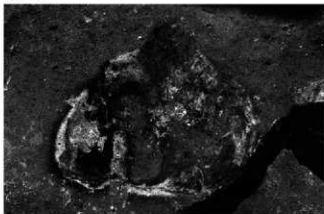
OT 32号



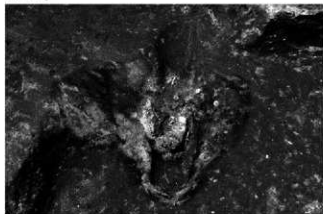
OT 33号



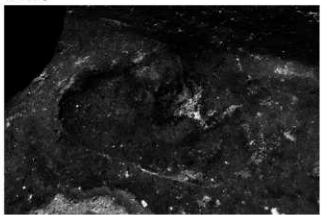
OT 34号



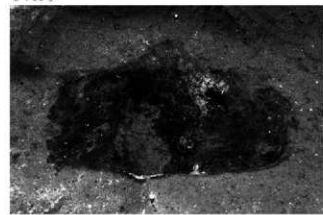
OT 35号



OT 36号



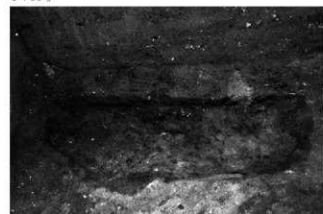
OT 37号



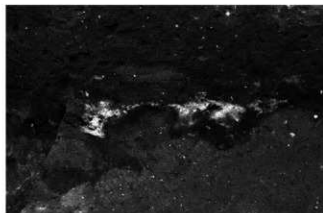
OT 38号



OT 39号



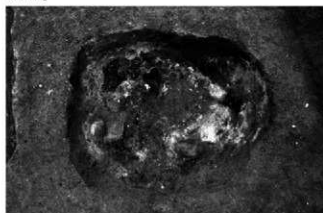
OT 40号



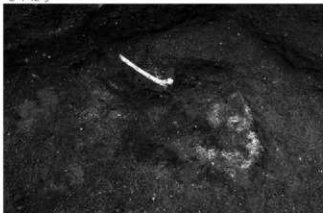
OT41号



OT42号



OT43号



OT44号



OT45号



OT21号調査状況



火葬墓群調査状況



藤ヶ城跡土塁（伐採後）



藤ヶ城跡土塁調査状況



土層検出状況 (小学校旧正門東側)



土層検出状況 (旧体育館下)



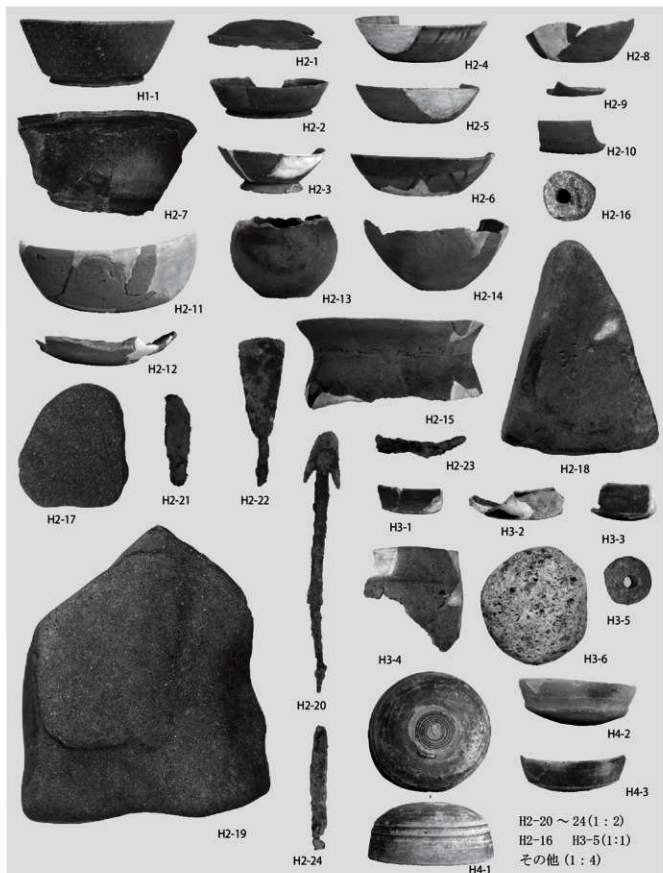
土壘版築状況（旧正門東側）

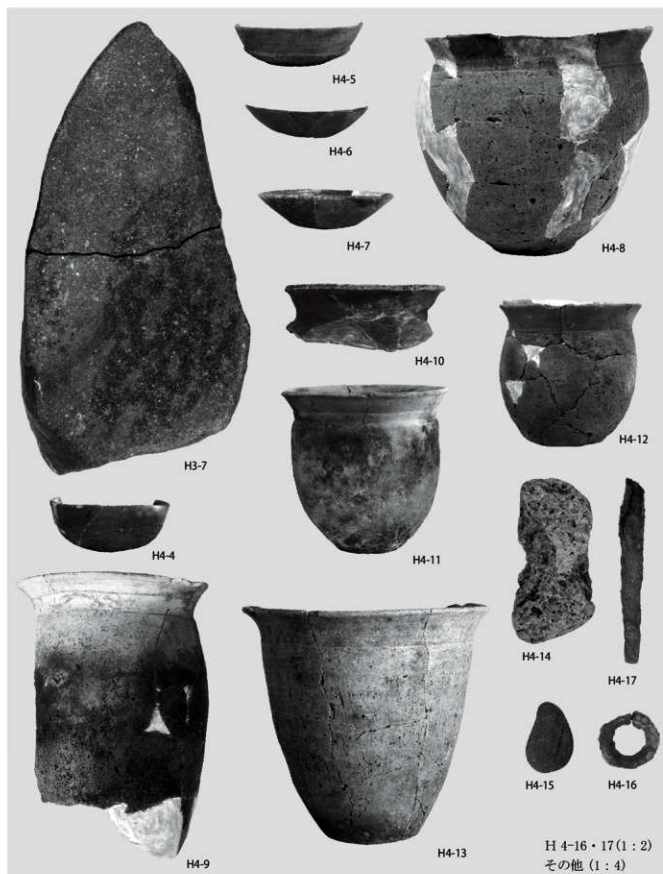


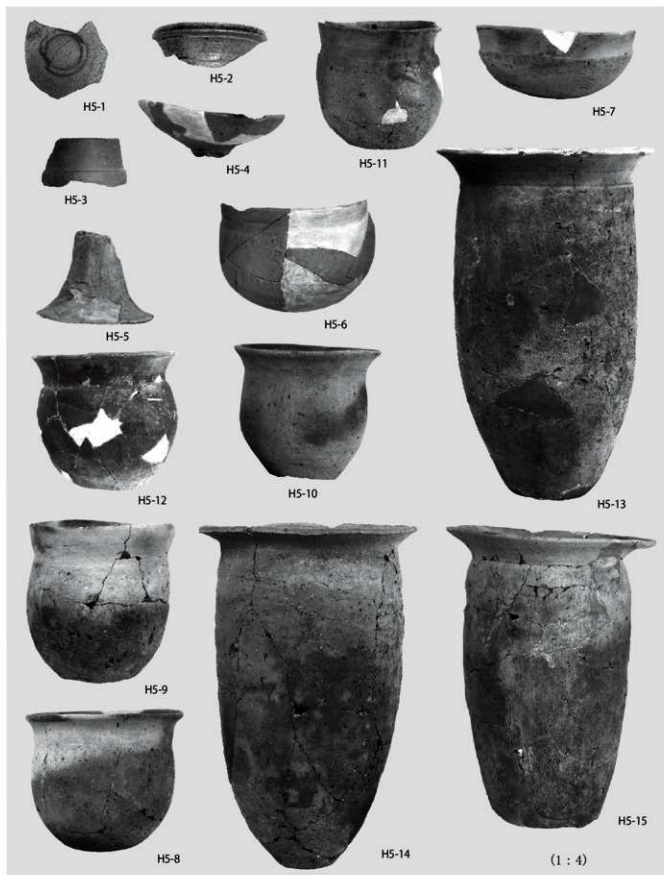
土壘版築状況② (旧体育館下)

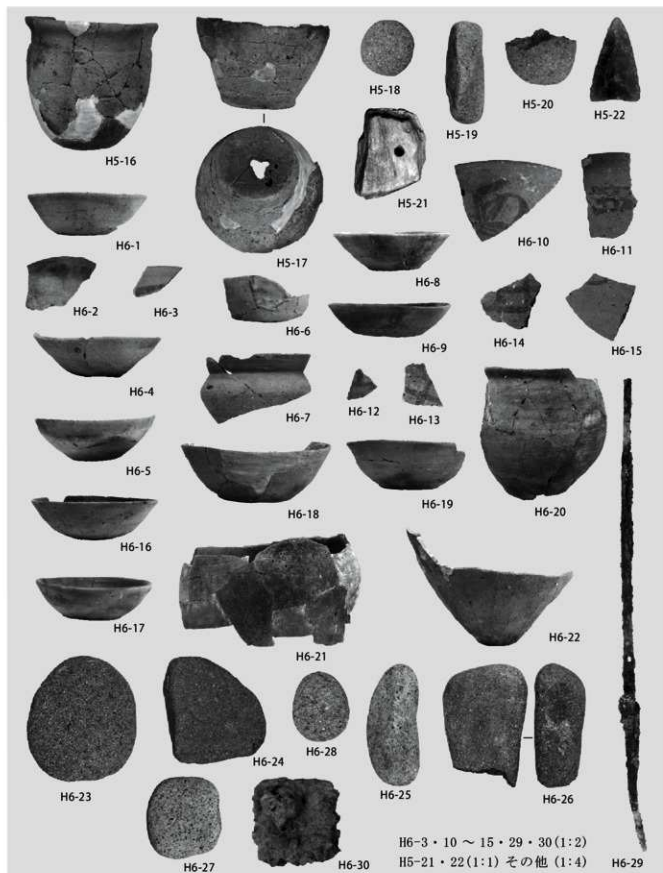


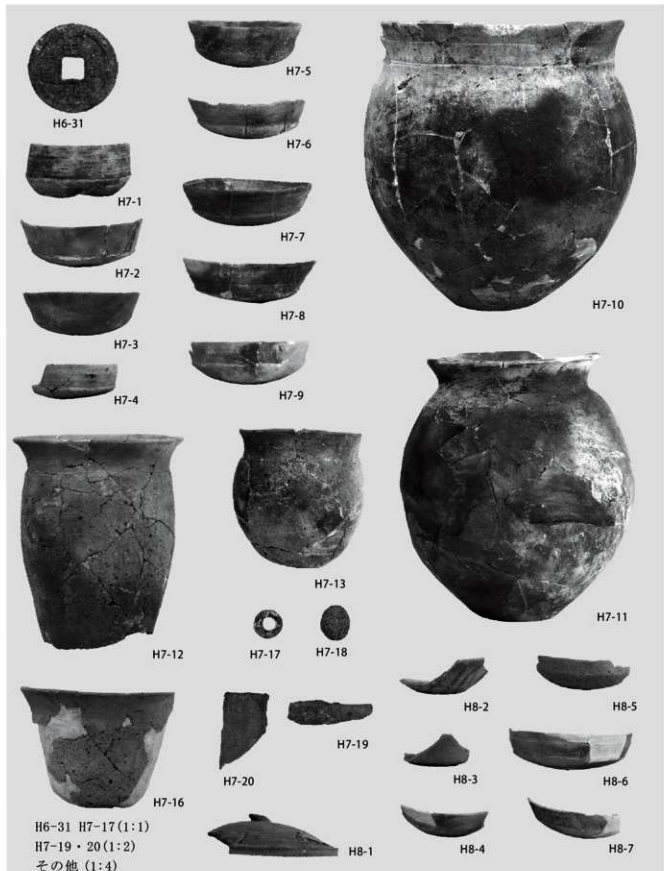
土壘版築状況③ (旧体育館下)

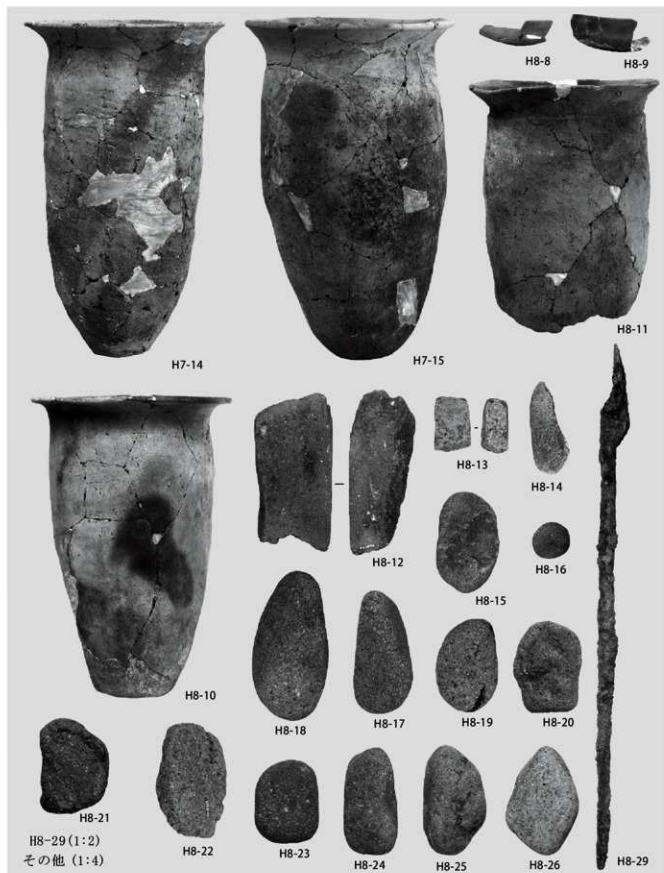


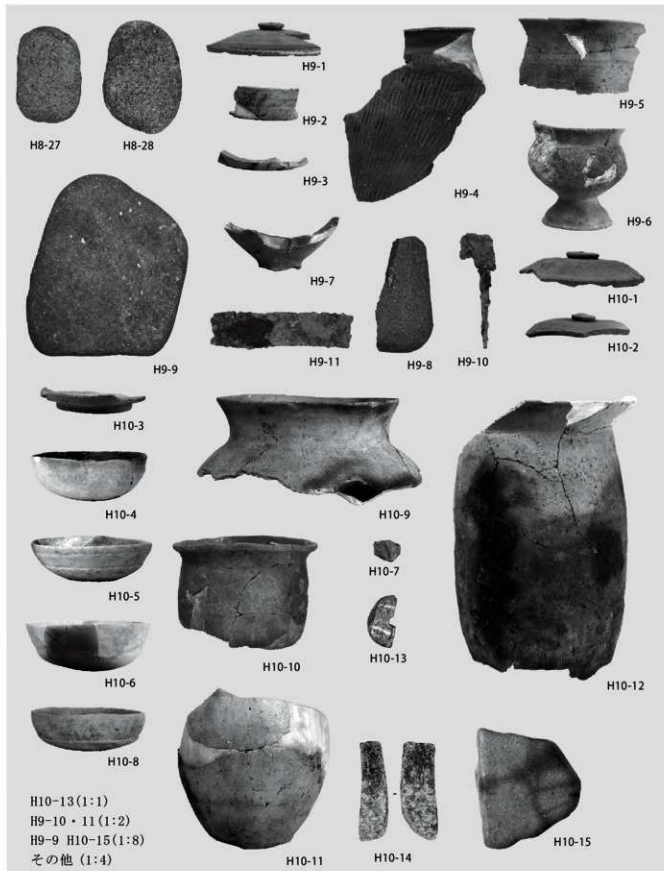


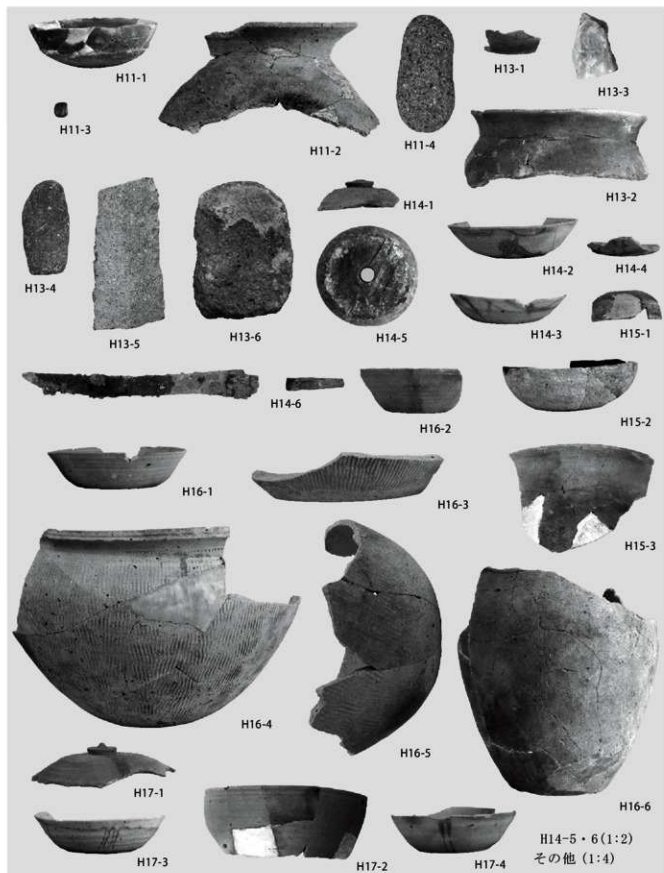


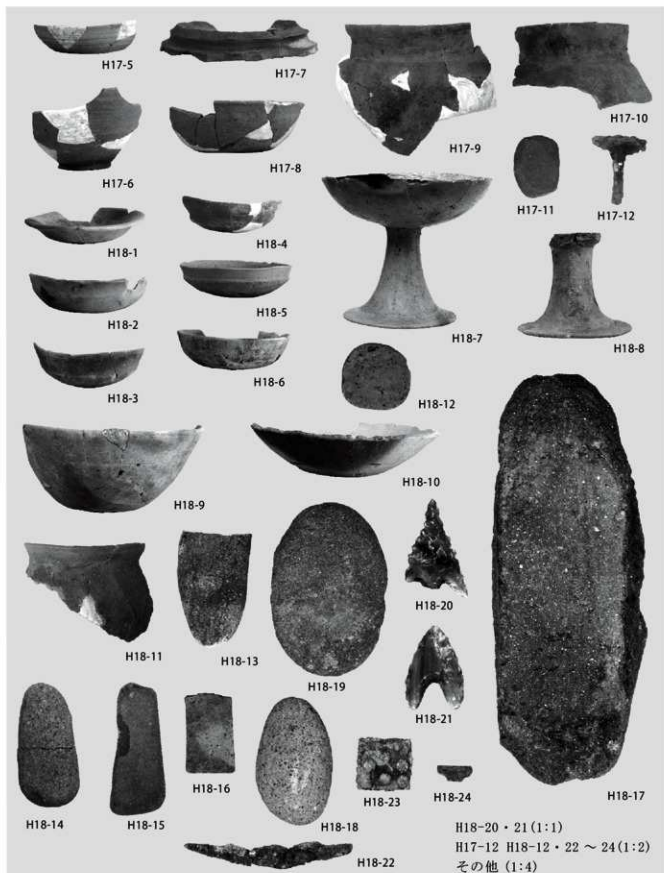


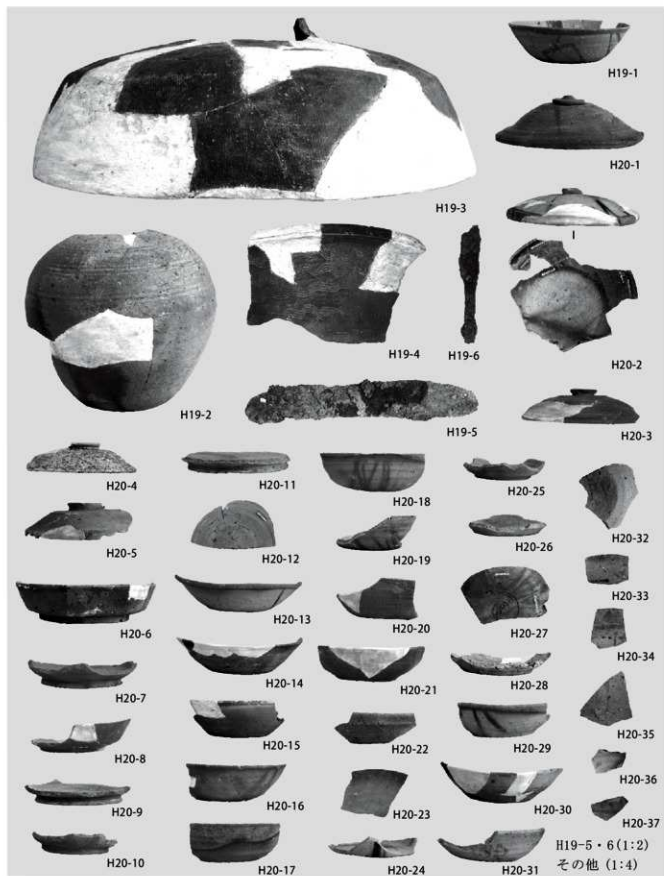


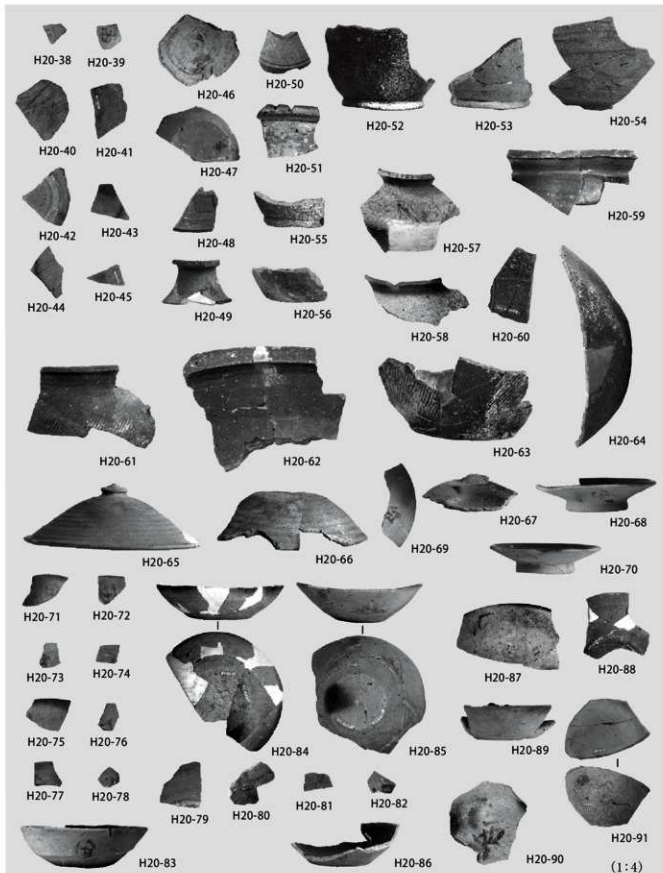


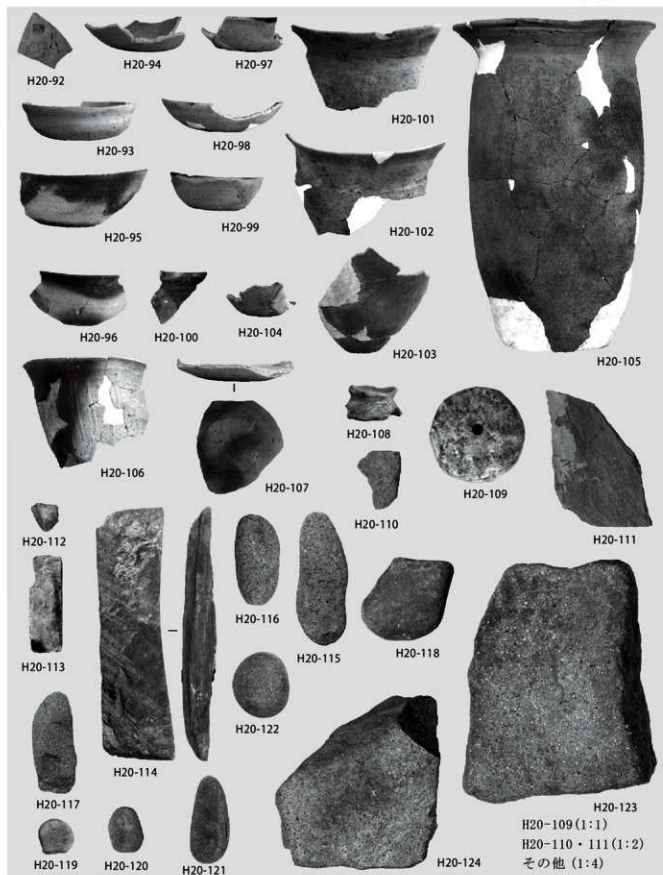


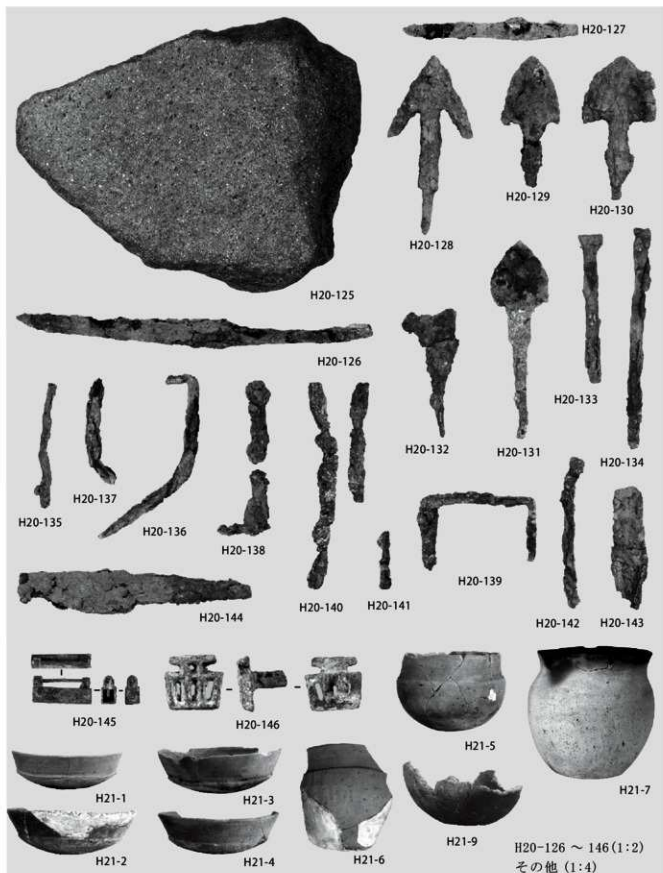


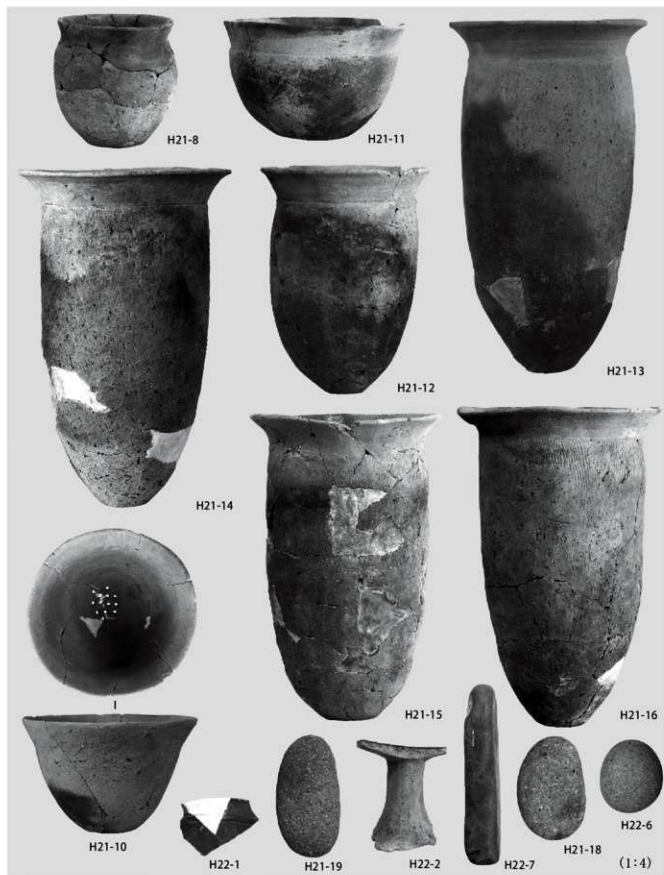


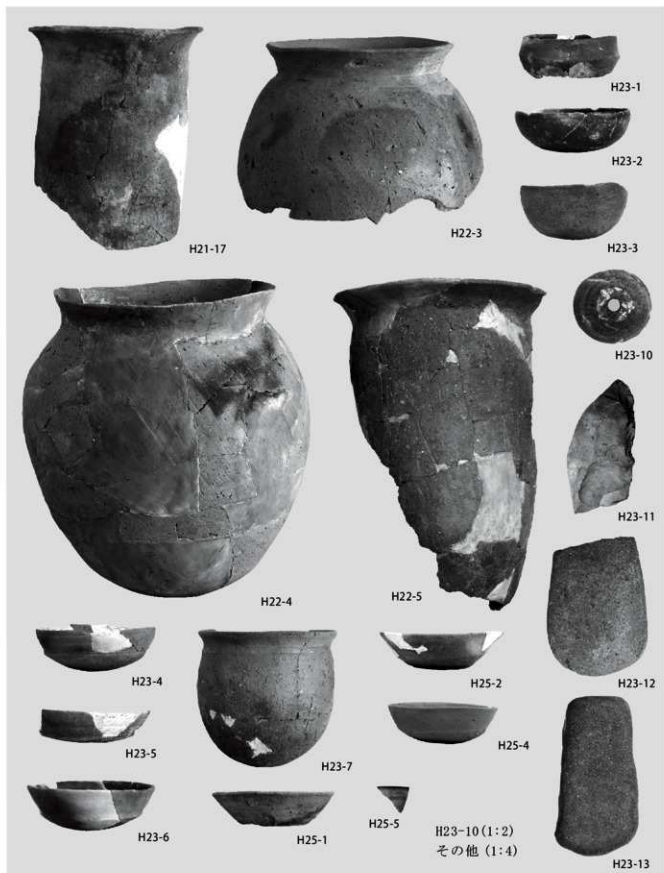


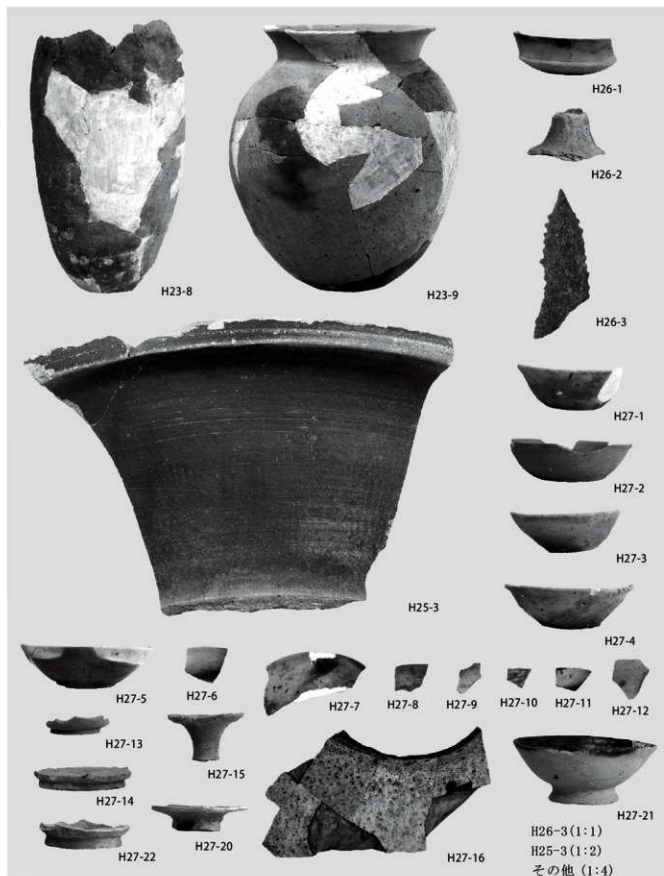


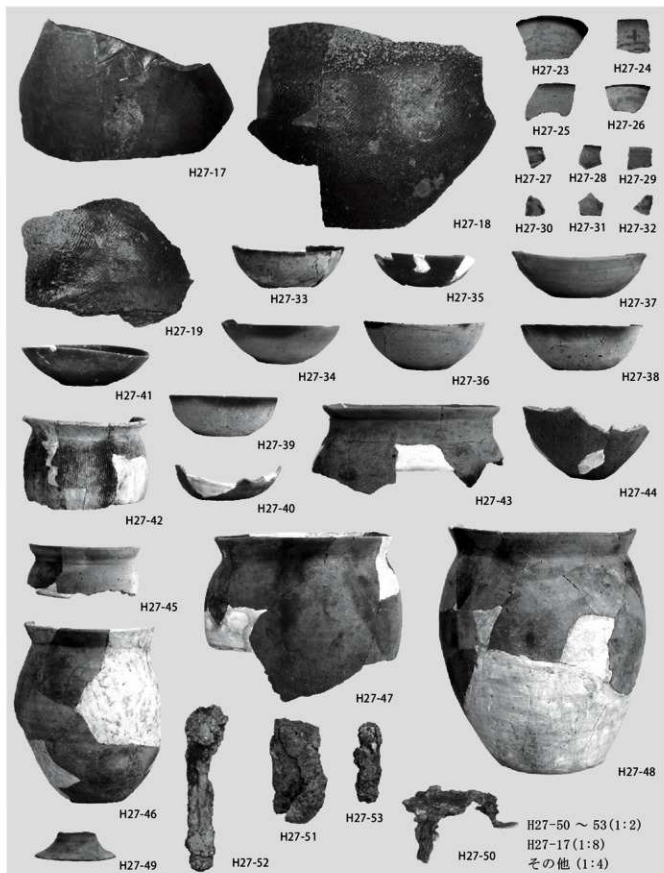


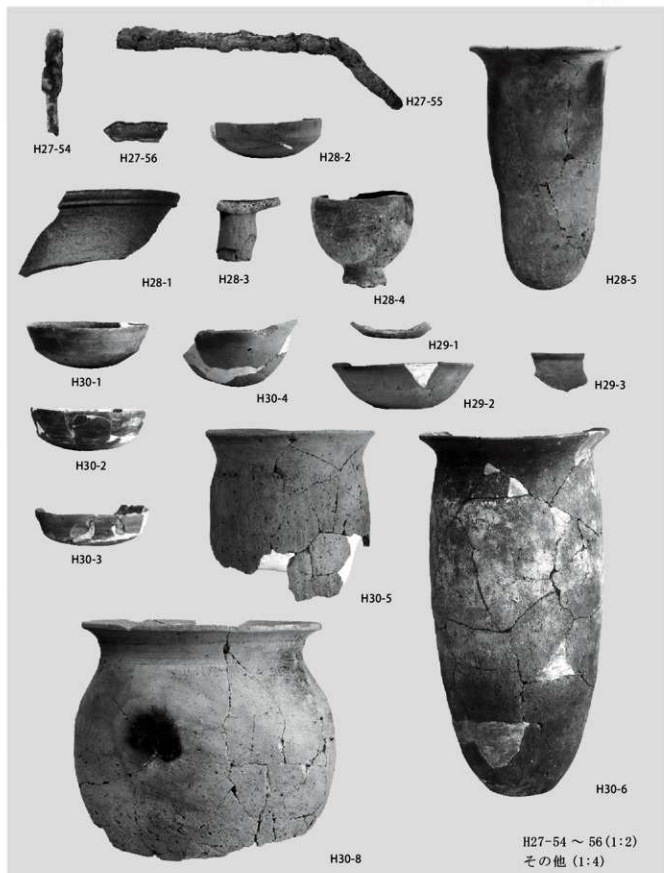


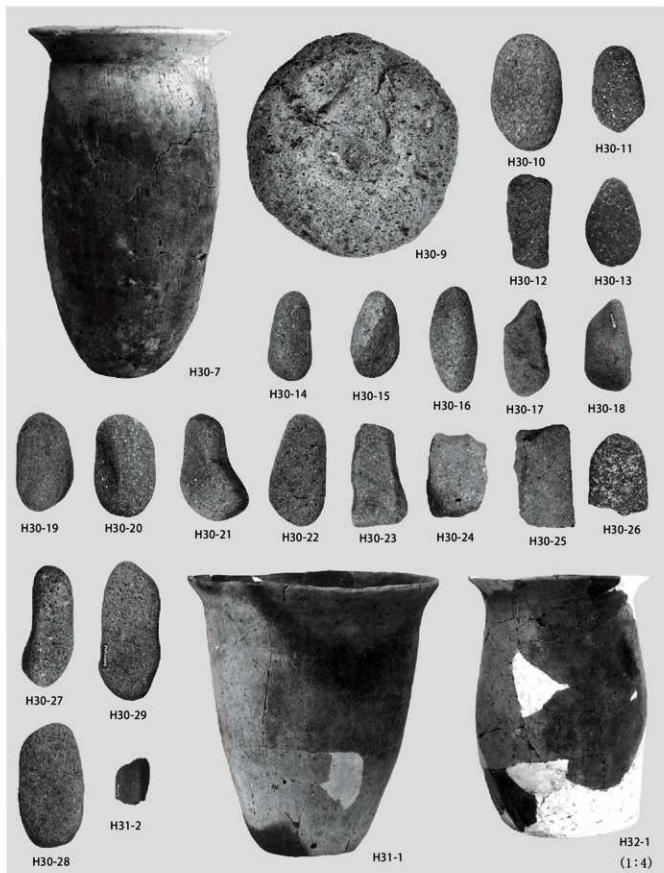


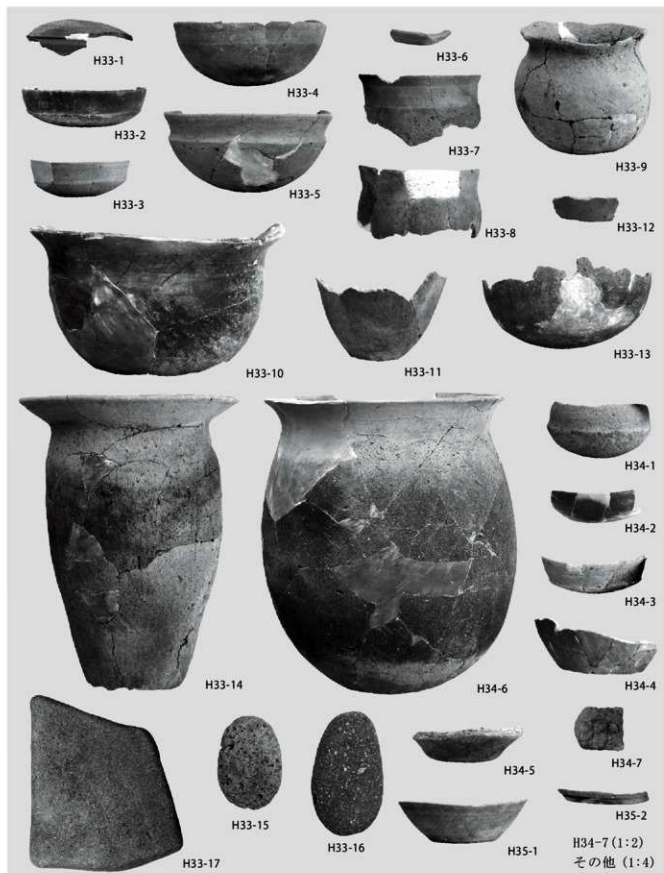


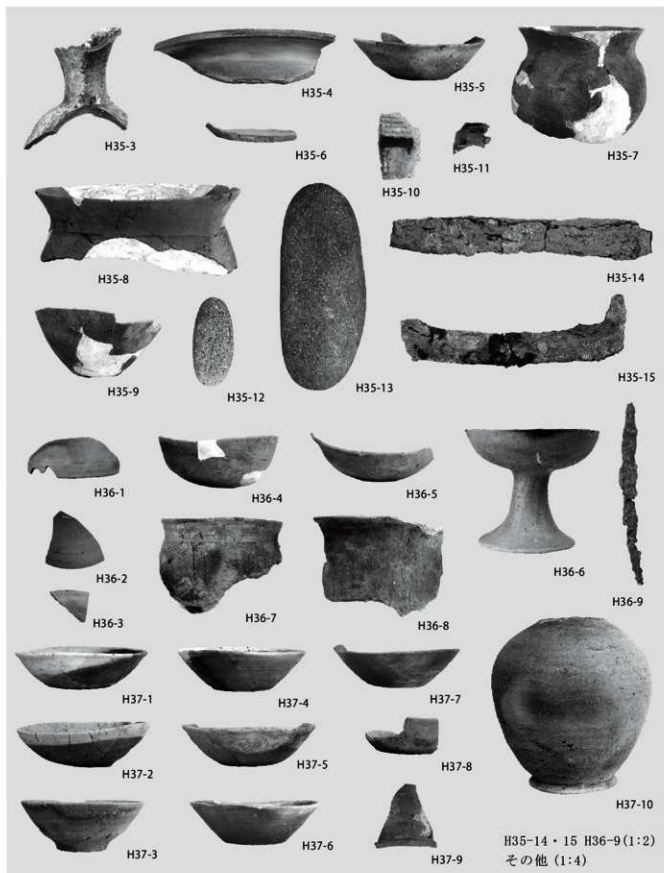


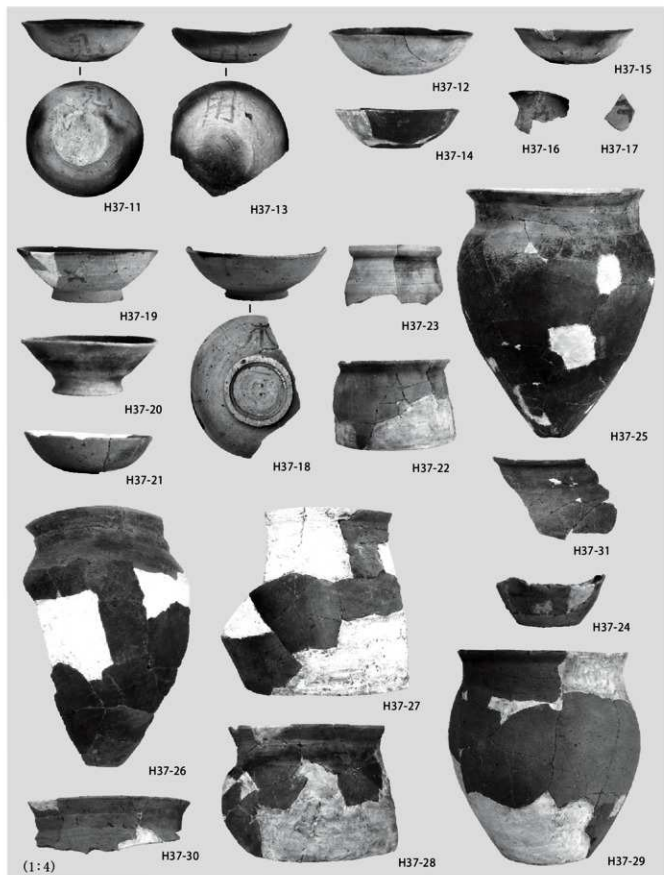


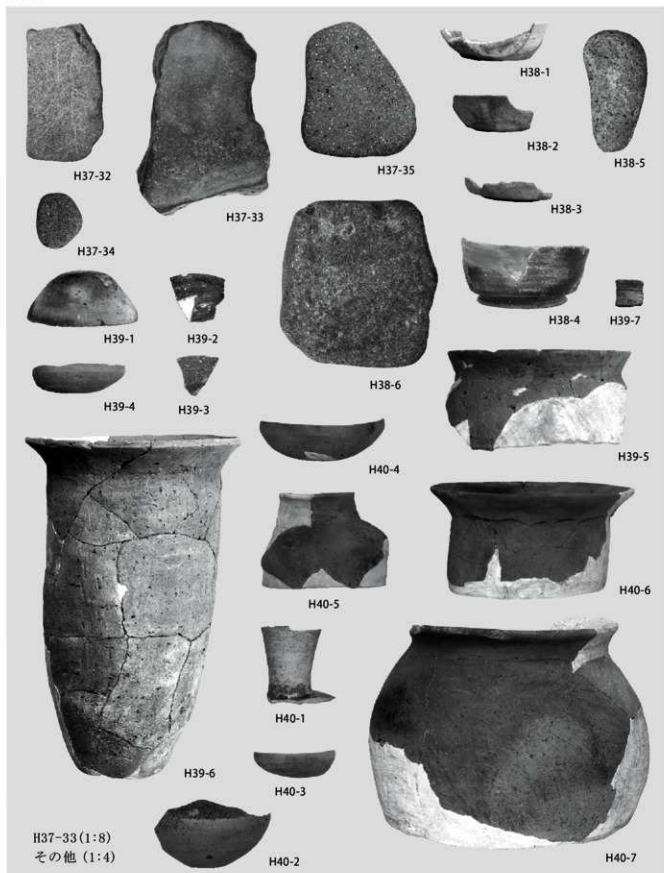


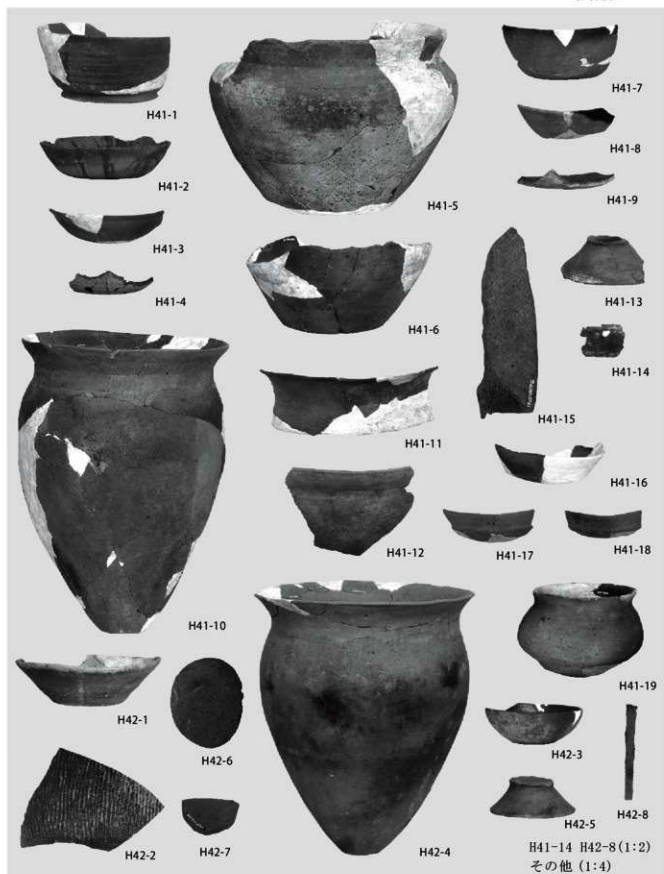


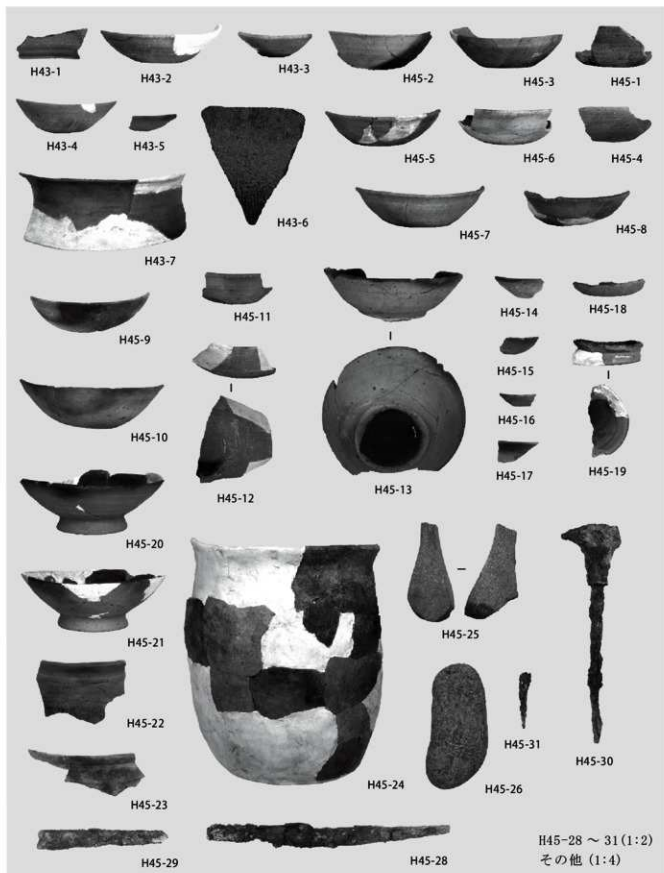


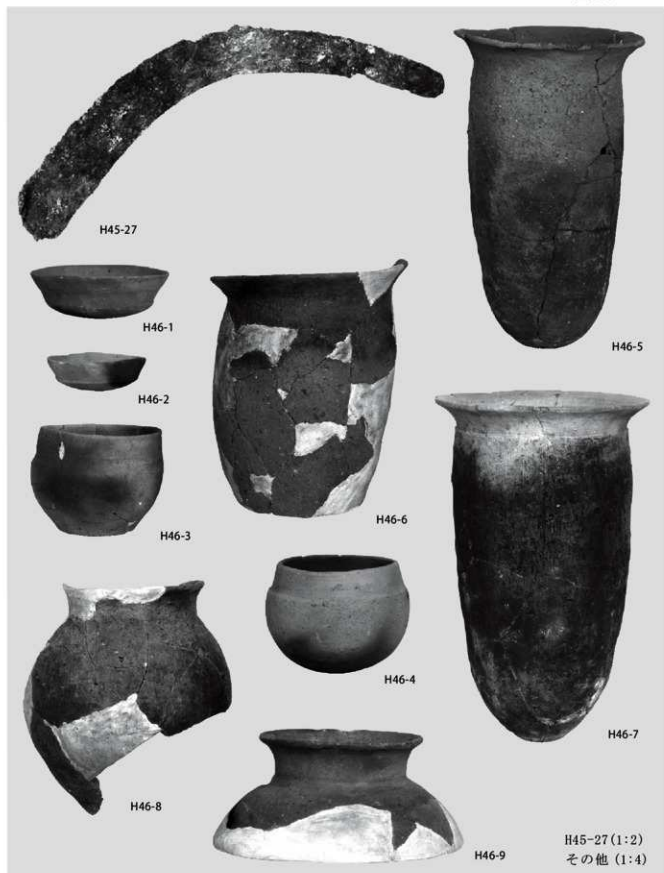


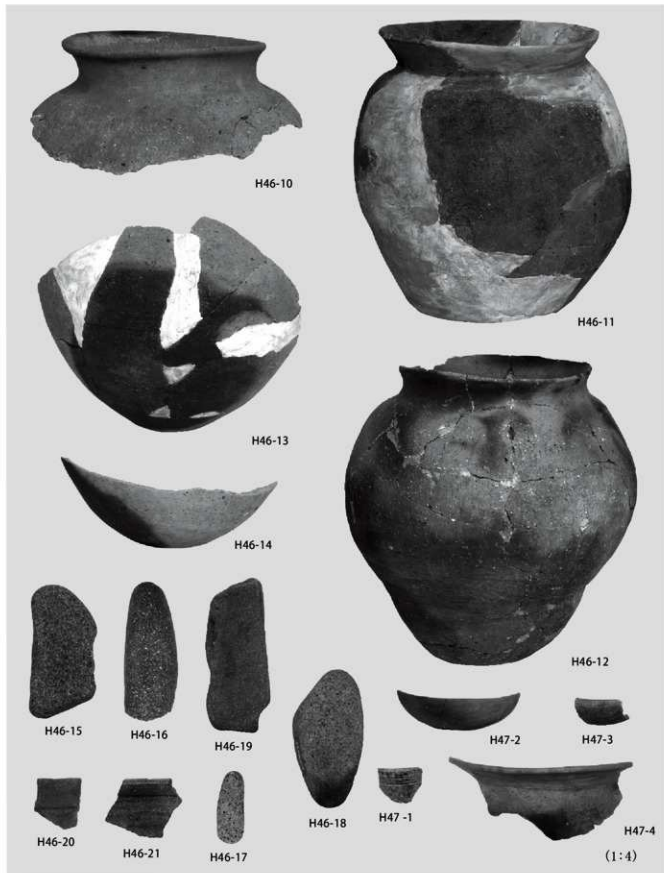


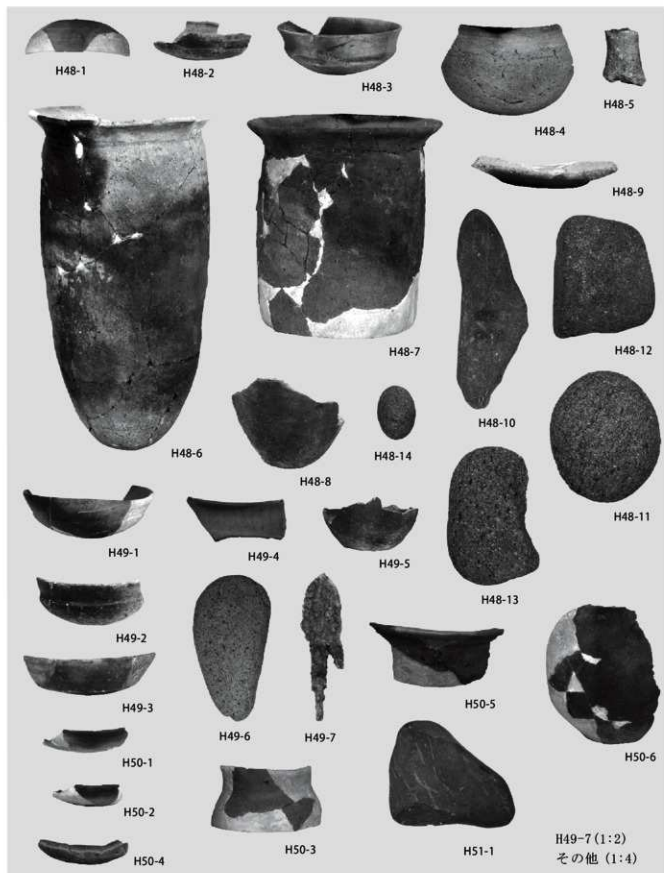


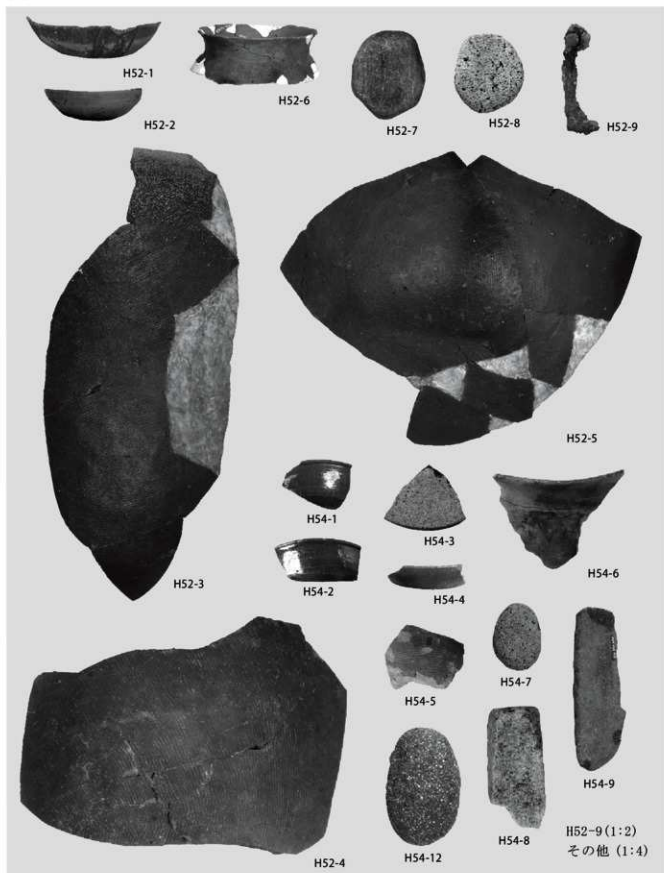


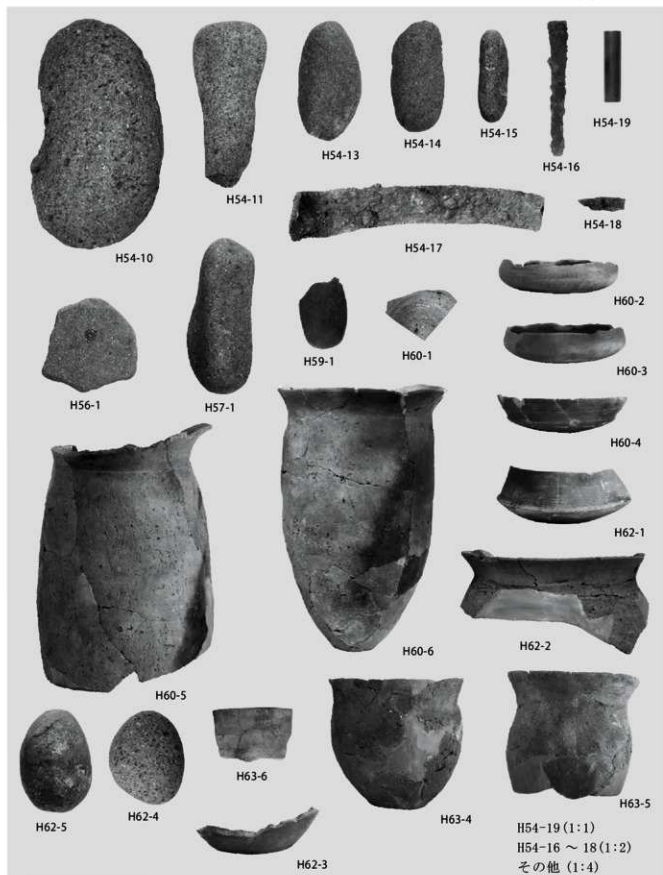


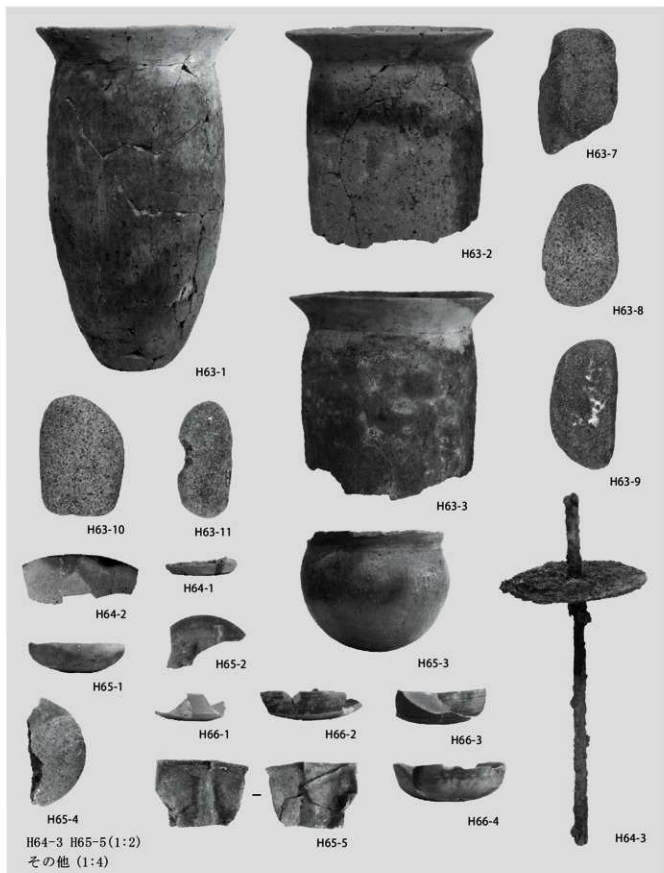


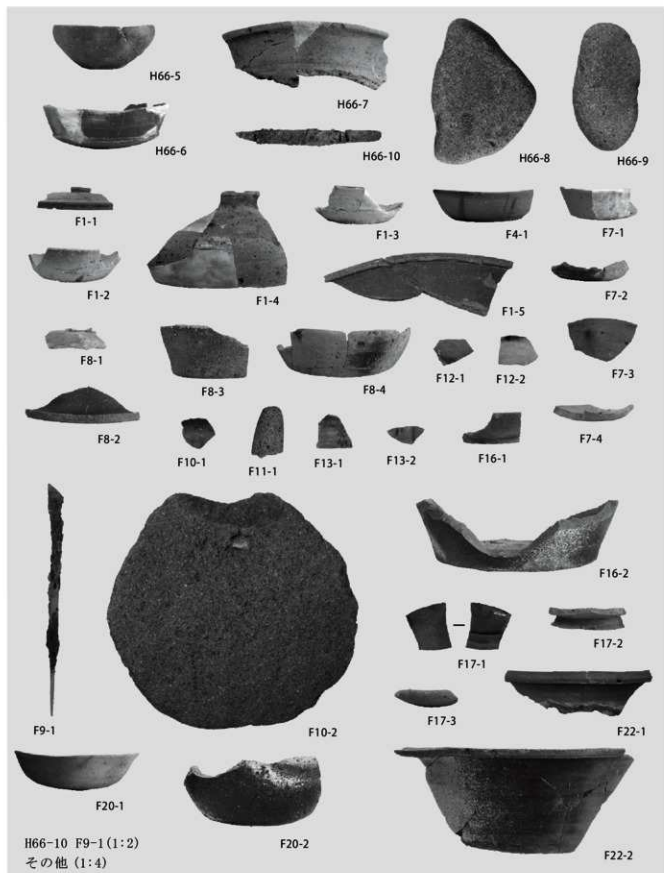




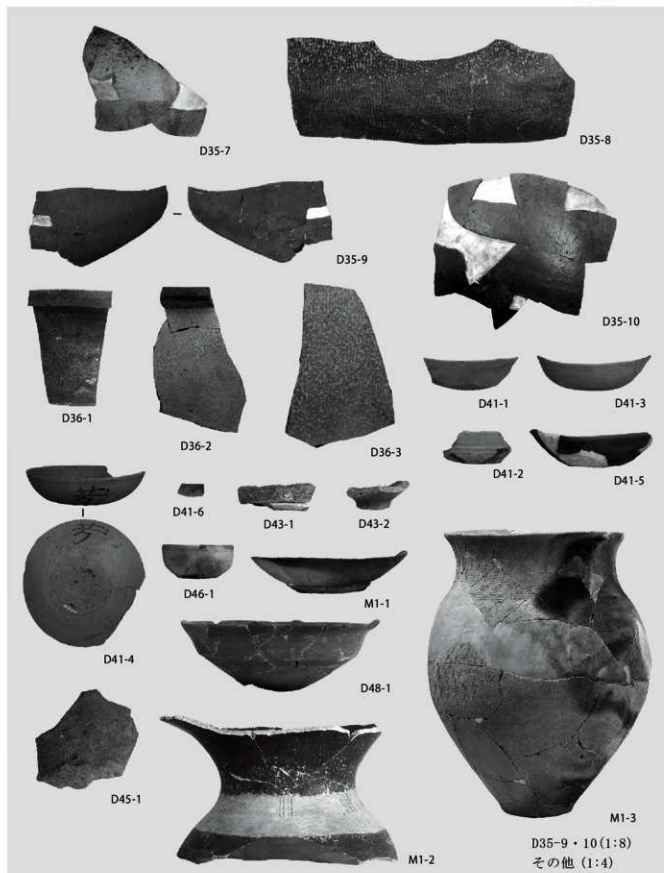


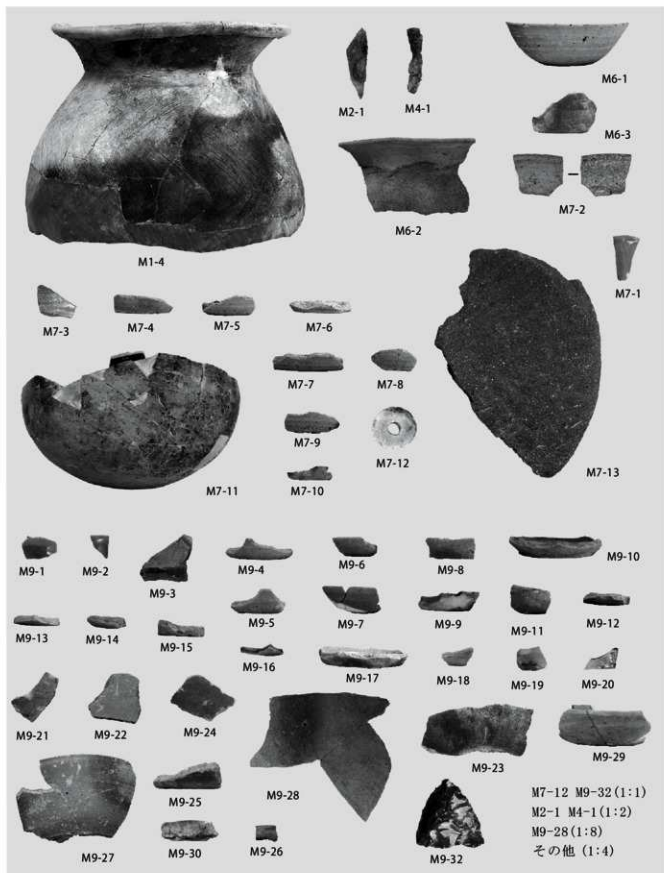


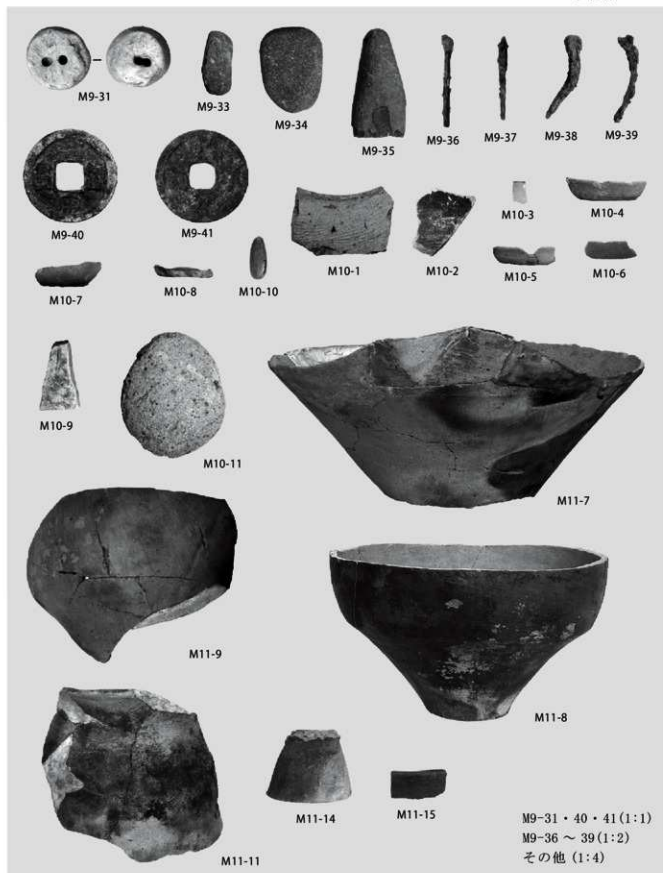


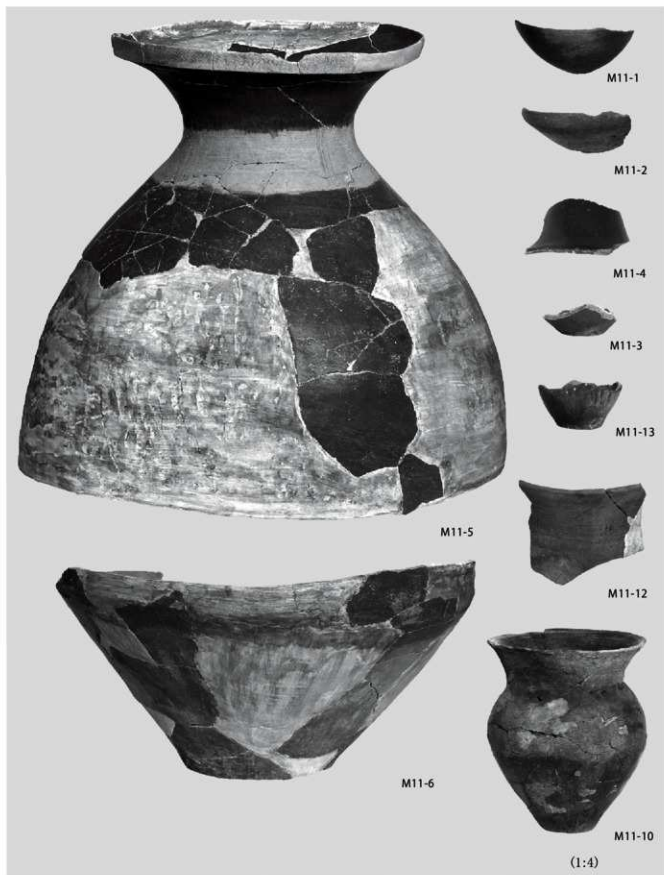


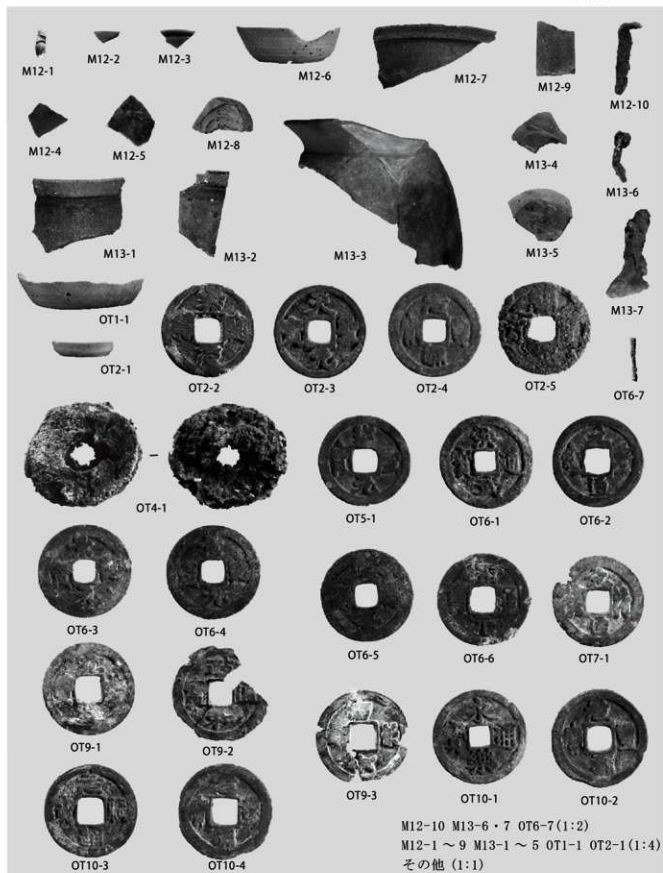


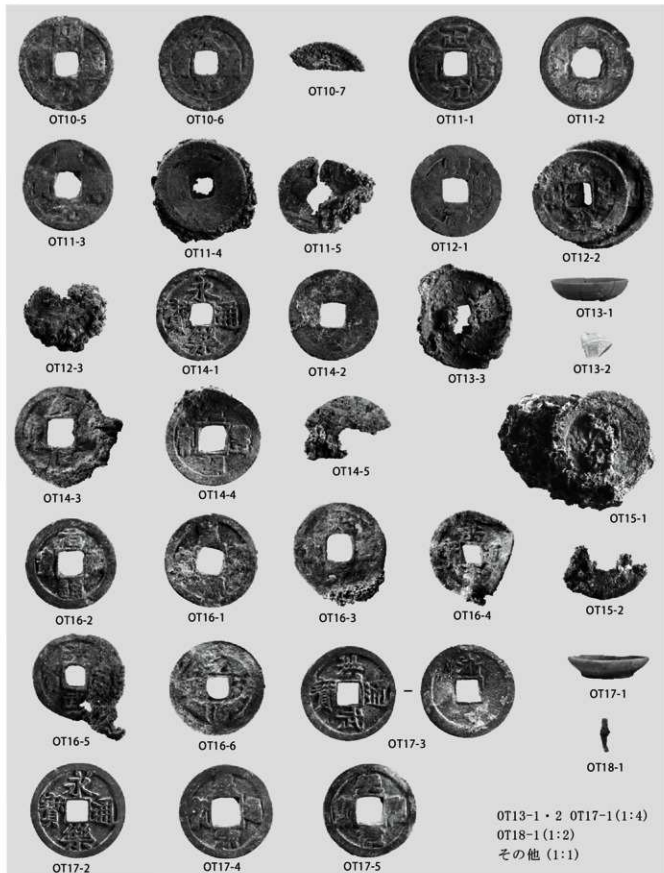


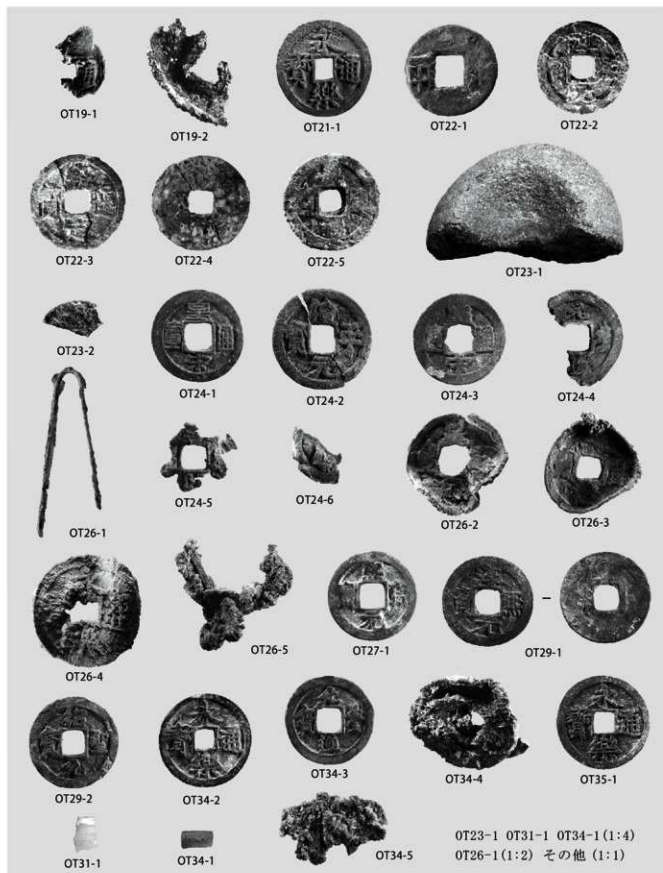




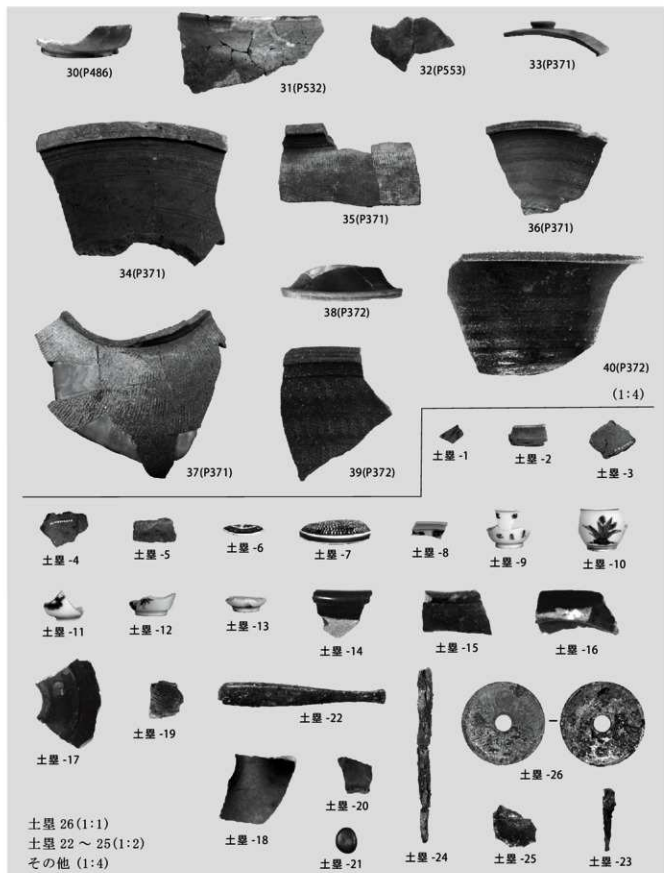


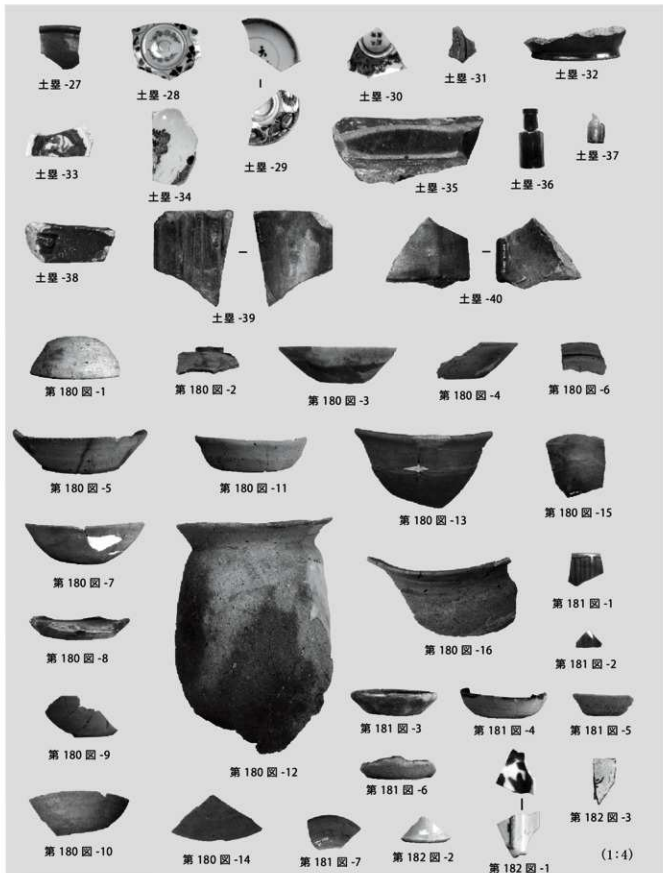














第 182 图-4



第 182 图-5



第 182 图-6



第 182 图-7



第 182 图-9



第 182 图-8



第 182 图-10



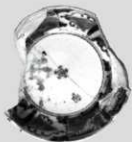
第 182 图-11



第 182 图-15



第 182 图-16



第 182 图-12



第 182 图-13



第 182 图-14



第 182 图-17



第 182 图-18



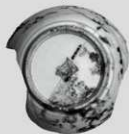
第 182 图-19



第 182 图-20



第 182 图-26



第 182 图-21



第 182 图-22



第 182 图-23



第 182 图-25



第 182 图-28



第 182 图-29



第 182 图-27



第 182 图-31



第 182 图-32



第 182 图-33



第 182 图-30



第 182 图-30

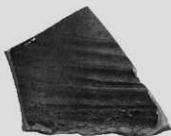


(1:4)





第 183 图 -68



第 183 图 -69



第 184 图 -74



第 184 图 -73



第 184 图 -70



第 184 图 -72



第 184 图 -71



第 184 图 -77



第 184 图 -75



第 184 图 -76

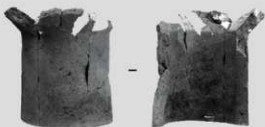
(1:4)



第185図-78



第185図-79



第185図-80



第185図-82



第185図-81



第185図-83



第185図-84



第185図-86



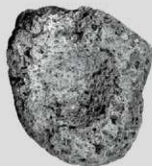
第185図-85



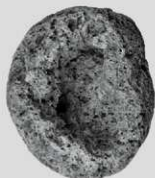
第185図-87



第185図-88



第186図-1



第186図-2



第186図-3



第186図-4



第186図-5



第186図-6



第186図-7



第186図-10



第186図-13



第186図-8



第186図-9



第186図-11



第186図-12

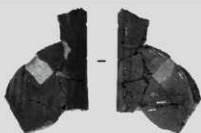
第186図 8・9・11(1:1)

第186図 4～7・10・13(1:2)

その他(1:4)



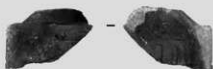
第 187 图-1



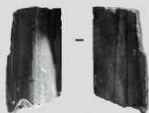
第 187 图-2



第 187 图-3



第 187 图-4



第 187 图-6



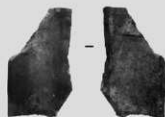
第 187 图-5



第 187 图-7



第 187 图-11



第 187 图-8



第 187 图-9



第 187 图-10



第 187 图-15



第 187 图-12 第 187 图-13



第 187 图-14



第 187 图-18 第 187 图-19



第 187 图-20



第 187 图-16 第 187 图-17



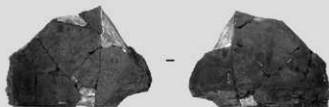
第 187 图-23 第 187 图-24



第 187 图-22

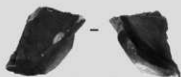


第 187 图-21



第 187 图-25

(1:6)



第 187 图 -26



第 187 图 -28



第 187 图 -30



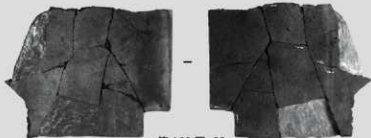
第 188 图 -31



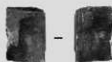
第 187 图 -27



第 187 图 -29



第 188 图 -32



第 188 图 -34



第 188 图 -35



第 188 图 -33



第 188 图 -36



第 188 图 -37

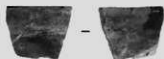
(1:6)



第 188 图 -40



第 188 图 -41



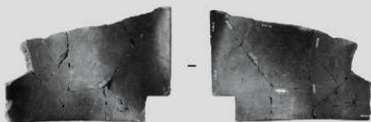
第 188 图 -43



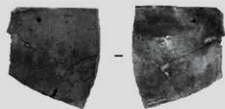
第 188 图 -38



第 188 图 -42



第 188 图 -39



第 188 图 -44



第 188 图 -45



第 188 图 -46



第 188 图 -47



第 188 图 -48



第 188 图 -49

(1:6)



第 189 图-1



第 189 图-2



第 189 图-3



第 189 图-4



第 189 图-5



第 189 图-6



第 189 图-7



第 189 图-8



第 189 图-9



第 189 图-10



第 189 图-11



第 189 图-12



第 189 图-13



第 189 图-14



第 189 图-15



第 189 图-16



第 189 图-17



第 189 图-18



第 189 图-19



第 189 图-20



第 189 图-21



第 189 图-22



第 189 图-23



第 189 图-24



第 189 图-25

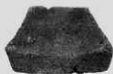


第 190 图-26

(1:8)



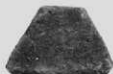
第 190 图 -27



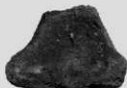
第 190 图 -28



第 190 图 -29



第 190 图 -30



第 190 图 -31



第 190 图 -32



第 190 图 -33



第 190 图 -34



第 190 图 -35



第 190 图 -36



第 190 图 -37



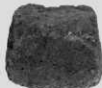
第 190 图 -38



第 190 图 -39



第 190 图 -40



第 190 图 -41



第 190 图 -42



第 190 图 -43



第 190 图 -44



第 192 图 -46



第 192 图 -47



第 190 图 -45



第 192 图 -48

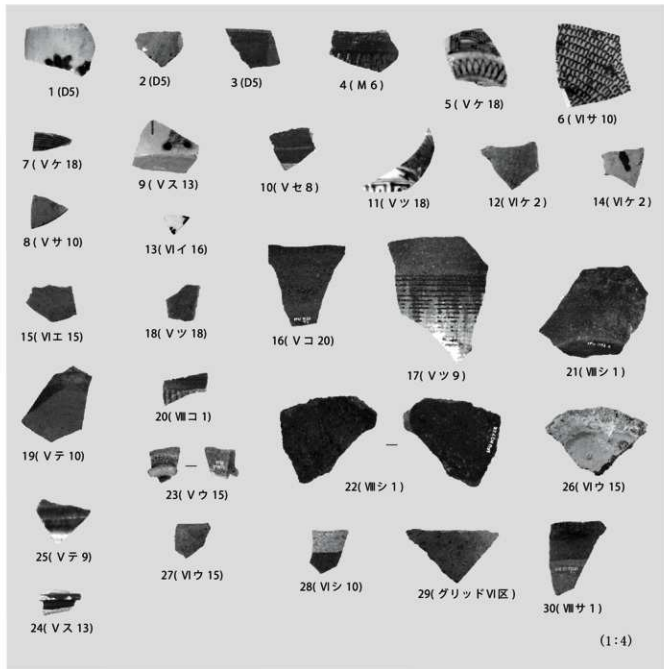


第 192 图 -46



第 192 图 -47

(1:8)



第2表 掘立柱建物跡計測表(2)

遺構名	検出位置	重複関係	平面 形態	規 模				柱		出土遺物 (掘立柱内外)	
				長軸方位	桁行長	梁間長	面積	ピット径	深さ		桁行柱間寸法
F11	V-ツチ-12	H22・F315・ P318より新	正方形	N-64°-E	2.30	2.12	4.36	1.01~ 1.45	0.69~ 0.97	0-F4204	P1積造部、土造部、土造部 P2積造部、土造部、土造部 P3積造部、土造部、土造部
F12	V-キ-テ-16・17	P204より新 H7より古	-	N	5.90	<2.80>	11.17	0.82~ 1.43	0.64~ 0.85	0-F1175, 0-F199 0-F199, 0-F176 0-F176, 0-F177 0-F177, 0-F178 0-F182, 0-F183 0-F183, 0-F235	P1積造部、土造部、土造部、土造部 P2積造部、土造部、土造部、土造部、土造部 P3積造部、土造部、土造部、土造部、土造部、土造部 P4積造部、土造部、土造部、土造部、土造部、土造部、土造部
F13	V-1・10・11 V1-7・11・12	H18より新 M2より古	正方形	N-29°-W	4.52	4.26	17.36	0.50~ 0.75	0.10~ 0.47	0-F1213, 0-F193 1.90, 0-F1212, 0-F1211	P1積造部、土造部、土造部、土造部 P2積造部、土造部、土造部、土造部、土造部 P3積造部、土造部、土造部、土造部、土造部、土造部
F14	V-3・モ-7 15・16	P285・P100・ P512より新 H10・F1より古	長方形	N-82°-E	5.15	4.18	22.13	0.88~ 2.39	0.37~ 0.58	0-F196, 0-F198 0-F198, 0-F199 0-F199, 0-F200 0-F200, 0-F201 0-F201, 0-F202 0-F202, 0-F203 0-F203, 0-F204	P1積造部、土造部、土造部、土造部 P2積造部、土造部、土造部、土造部、土造部 P3積造部、土造部、土造部、土造部、土造部、土造部 P4積造部、土造部、土造部、土造部、土造部、土造部、土造部
F15	V-コ-チ-15・16	H6・F2・F16・ F18より古	長方形	N-3°-W	5.34	3.82	(22.41)	0.42~ 1.20	0.29~ 0.67	0-F197, 0-F198, 0-F199 0-F199, 0-F215, 0-F198, 0-F170 0-F198, 0-F128	P1積造部、土造部、土造部、土造部、土造部 P2積造部、土造部、土造部、土造部、土造部、土造部 P3積造部、土造部、土造部、土造部、土造部、土造部、土造部
F16	V-コ-チ-14・15	F15・F18・ P254・P203・ P311・P214より 新H6より古	長方形	N-79°-E	5.10	3.86	20.52	0.76~ 3.07	0.22~ 0.84	0-F197, 0-F198, 0-F199 0-F199, 0-F200, 0-F201 0-F201, 0-F202, 0-F203 0-F203, 0-F204, 0-F205 0-F205, 0-F206, 0-F207 0-F207, 0-F208, 0-F209 0-F209, 0-F210, 0-F211 0-F211, 0-F212, 0-F213 0-F213, 0-F214, 0-F215 0-F215, 0-F216, 0-F217 0-F217, 0-F218, 0-F219 0-F219, 0-F220, 0-F221 0-F221, 0-F222, 0-F223 0-F223, 0-F224, 0-F225 0-F225, 0-F226, 0-F227 0-F227, 0-F228, 0-F229 0-F229, 0-F230, 0-F231 0-F231, 0-F232, 0-F233 0-F233, 0-F234, 0-F235 0-F235, 0-F236, 0-F237 0-F237, 0-F238, 0-F239 0-F239, 0-F240, 0-F241 0-F241, 0-F242, 0-F243 0-F243, 0-F244, 0-F245 0-F245, 0-F246, 0-F247 0-F247, 0-F248, 0-F249 0-F249, 0-F250, 0-F251 0-F251, 0-F252, 0-F253 0-F253, 0-F254, 0-F255 0-F255, 0-F256, 0-F257 0-F257, 0-F258, 0-F259 0-F259, 0-F260, 0-F261 0-F261, 0-F262, 0-F263 0-F263, 0-F264, 0-F265 0-F265, 0-F266, 0-F267 0-F267, 0-F268, 0-F269 0-F269, 0-F270, 0-F271 0-F271, 0-F272, 0-F273 0-F273, 0-F274, 0-F275 0-F275, 0-F276, 0-F277 0-F277, 0-F278, 0-F279 0-F279, 0-F280, 0-F281 0-F281, 0-F282, 0-F283 0-F283, 0-F284, 0-F285 0-F285, 0-F286, 0-F287 0-F287, 0-F288, 0-F289 0-F289, 0-F290, 0-F291 0-F291, 0-F292, 0-F293 0-F293, 0-F294, 0-F295 0-F295, 0-F296, 0-F297 0-F297, 0-F298, 0-F299 0-F299, 0-F300, 0-F301 0-F301, 0-F302, 0-F303 0-F303, 0-F304, 0-F305 0-F305, 0-F306, 0-F307 0-F307, 0-F308, 0-F309 0-F309, 0-F310, 0-F311 0-F311, 0-F312, 0-F313 0-F313, 0-F314, 0-F315 0-F315, 0-F316, 0-F317 0-F317, 0-F318, 0-F319 0-F319, 0-F320, 0-F321 0-F321, 0-F322, 0-F323 0-F323, 0-F324, 0-F325 0-F325, 0-F326, 0-F327 0-F327, 0-F328, 0-F329 0-F329, 0-F330, 0-F331 0-F331, 0-F332, 0-F333 0-F333, 0-F334, 0-F335 0-F335, 0-F336, 0-F337 0-F337, 0-F338, 0-F339 0-F339, 0-F340, 0-F341 0-F341, 0-F342, 0-F343 0-F343, 0-F344, 0-F345 0-F345, 0-F346, 0-F347 0-F347, 0-F348, 0-F349 0-F349, 0-F350, 0-F351 0-F351, 0-F352, 0-F353 0-F353, 0-F354, 0-F355 0-F355, 0-F356, 0-F357 0-F357, 0-F358, 0-F359 0-F359, 0-F360, 0-F361 0-F361, 0-F362, 0-F363 0-F363, 0-F364, 0-F365 0-F365, 0-F366, 0-F367 0-F367, 0-F368, 0-F369 0-F369, 0-F370, 0-F371 0-F371, 0-F372, 0-F373 0-F373, 0-F374, 0-F375 0-F375, 0-F376, 0-F377 0-F377, 0-F378, 0-F379 0-F379, 0-F380, 0-F381 0-F381, 0-F382, 0-F383 0-F383, 0-F384, 0-F385 0-F385, 0-F386, 0-F387 0-F387, 0-F388, 0-F389 0-F389, 0-F390, 0-F391 0-F391, 0-F392, 0-F393 0-F393, 0-F394, 0-F395 0-F395, 0-F396, 0-F397 0-F397, 0-F398, 0-F399 0-F399, 0-F400, 0-F401 0-F401, 0-F402, 0-F403 0-F403, 0-F404, 0-F405 0-F405, 0-F406, 0-F407 0-F407, 0-F408, 0-F409 0-F409, 0-F410, 0-F411 0-F411, 0-F412, 0-F413 0-F413, 0-F414, 0-F415 0-F415, 0-F416, 0-F417 0-F417, 0-F418, 0-F419 0-F419, 0-F420, 0-F421 0-F421, 0-F422, 0-F423 0-F423, 0-F424, 0-F425 0-F425, 0-F426, 0-F427 0-F427, 0-F428, 0-F429 0-F429, 0-F430, 0-F431 0-F431, 0-F432, 0-F433 0-F433, 0-F434, 0-F435 0-F435, 0-F436, 0-F437 0-F437, 0-F438, 0-F439 0-F439, 0-F440, 0-F441 0-F441, 0-F442, 0-F443 0-F443, 0-F444, 0-F445 0-F445, 0-F446, 0-F447 0-F447, 0-F448, 0-F449 0-F449, 0-F450, 0-F451 0-F451, 0-F452, 0-F453 0-F453, 0-F454, 0-F455 0-F455, 0-F456, 0-F457 0-F457, 0-F458, 0-F459 0-F459, 0-F460, 0-F461 0-F461, 0-F462, 0-F463 0-F463, 0-F464, 0-F465 0-F465, 0-F466, 0-F467 0-F467, 0-F468, 0-F469 0-F469, 0-F470, 0-F471 0-F471, 0-F472, 0-F473 0-F473, 0-F474, 0-F475 0-F475, 0-F476, 0-F477 0-F477, 0-F478, 0-F479 0-F479, 0-F480, 0-F481 0-F481, 0-F482, 0-F483 0-F483, 0-F484, 0-F485 0-F485, 0-F486, 0-F487 0-F487, 0-F488, 0-F489 0-F489, 0-F490, 0-F491 0-F491, 0-F492, 0-F493 0-F493, 0-F494, 0-F495 0-F495, 0-F496, 0-F497 0-F497, 0-F498, 0-F499 0-F499, 0-F500, 0-F501 0-F501, 0-F502, 0-F503 0-F503, 0-F504, 0-F505 0-F505, 0-F506, 0-F507 0-F507, 0-F508, 0-F509 0-F509, 0-F510, 0-F511 0-F511, 0-F512, 0-F513 0-F513, 0-F514, 0-F515 0-F515, 0-F516, 0-F517 0-F517, 0-F518, 0-F519 0-F519, 0-F520, 0-F521 0-F521, 0-F522, 0-F523 0-F523, 0-F524, 0-F525 0-F525, 0-F526, 0-F527 0-F527, 0-F528, 0-F529 0-F529, 0-F530, 0-F531 0-F531, 0-F532, 0-F533 0-F533, 0-F534, 0-F535 0-F535, 0-F536, 0-F537 0-F537, 0-F538, 0-F539 0-F539, 0-F540, 0-F541 0-F541, 0-F542, 0-F543 0-F543, 0-F544, 0-F545 0-F545, 0-F546, 0-F547 0-F547, 0-F548, 0-F549 0-F549, 0-F550, 0-F551 0-F551, 0-F552, 0-F553 0-F553, 0-F554, 0-F555 0-F555, 0-F556, 0-F557 0-F557, 0-F558, 0-F559 0-F559, 0-F560, 0-F561 0-F561, 0-F562, 0-F563 0-F563, 0-F564, 0-F565 0-F565, 0-F566, 0-F567 0-F567, 0-F568, 0-F569 0-F569, 0-F570, 0-F571 0-F571, 0-F572, 0-F573 0-F573, 0-F574, 0-F575 0-F575, 0-F576, 0-F577 0-F577, 0-F578, 0-F579 0-F579, 0-F580, 0-F581 0-F581, 0-F582, 0-F583 0-F583, 0-F584, 0-F585 0-F585, 0-F586, 0-F587 0-F587, 0-F588, 0-F589 0-F589, 0-F590, 0-F591 0-F591, 0-F592, 0-F593 0-F593, 0-F594, 0-F595 0-F595, 0-F596, 0-F597 0-F597, 0-F598, 0-F599 0-F599, 0-F600, 0-F601 0-F601, 0-F602, 0-F603 0-F603, 0-F604, 0-F605 0-F605, 0-F606, 0-F607 0-F607, 0-F608, 0-F609 0-F609, 0-F610, 0-F611 0-F611, 0-F612, 0-F613 0-F613, 0-F614, 0-F615 0-F615, 0-F616, 0-F617 0-F617, 0-F618, 0-F619 0-F619, 0-F620, 0-F621 0-F621, 0-F622, 0-F623 0-F623, 0-F624, 0-F625 0-F625, 0-F626, 0-F627 0-F627, 0-F628, 0-F629 0-F629, 0-F630, 0-F631 0-F631, 0-F632, 0-F633 0-F633, 0-F634, 0-F635 0-F635, 0-F636, 0-F637 0-F637, 0-F638, 0-F639 0-F639, 0-F640, 0-F641 0-F641, 0-F642, 0-F643 0-F643, 0-F644, 0-F645 0-F645, 0-F646, 0-F647 0-F647, 0-F648, 0-F649 0-F649, 0-F650, 0-F651 0-F651, 0-F652, 0-F653 0-F653, 0-F654, 0-F655 0-F655, 0-F656, 0-F657 0-F657, 0-F658, 0-F659 0-F659, 0-F660, 0-F661 0-F661, 0-F662, 0-F663 0-F663, 0-F664, 0-F665 0-F665, 0-F666, 0-F667 0-F667, 0-F668, 0-F669 0-F669, 0-F670, 0-F671 0-F671, 0-F672, 0-F673 0-F673, 0-F674, 0-F675 0-F675, 0-F676, 0-F677 0-F677, 0-F678, 0-F679 0-F679, 0-F680, 0-F681 0-F681, 0-F682, 0-F683 0-F683, 0-F684, 0-F685 0-F685, 0-F686, 0-F687 0-F687, 0-F688, 0-F689 0-F689, 0-F690, 0-F691 0-F691, 0-F692, 0-F693 0-F693, 0-F694, 0-F695 0-F695, 0-F696, 0-F697 0-F697, 0-F698, 0-F699 0-F699, 0-F700, 0-F701 0-F701, 0-F702, 0-F703 0-F703, 0-F704, 0-F705 0-F705, 0-F706, 0-F707 0-F707, 0-F708, 0-F709 0-F709, 0-F710, 0-F711 0-F711, 0-F712, 0-F713 0-F713, 0-F714, 0-F715 0-F715, 0-F716, 0-F717 0-F717, 0-F718, 0-F719 0-F719, 0-F720, 0-F721 0-F721, 0-F722, 0-F723 0-F723, 0-F724, 0-F725 0-F725, 0-F726, 0-F727 0-F727, 0-F728, 0-F729 0-F729, 0-F730, 0-F731 0-F731, 0-F732, 0-F733 0-F733, 0-F734, 0-F735 0-F735, 0-F736, 0-F737 0-F737, 0-F738, 0-F739 0-F739, 0-F740, 0-F741 0-F741, 0-F742, 0-F743 0-F743, 0-F744, 0-F745 0-F745, 0-F746, 0-F747 0-F747, 0-F748, 0-F749 0-F749, 0-F750, 0-F751 0-F751, 0-F752, 0-F753 0-F753, 0-F754, 0-F755 0-F755, 0-F756, 0-F757 0-F757, 0-F758, 0-F759 0-F759, 0-F760, 0-F761 0-F761, 0-F762, 0-F763 0-F763, 0-F764, 0-F765 0-F765, 0-F766, 0-F767 0-F767, 0-F768, 0-F769 0-F769, 0-F770, 0-F771 0-F771, 0-F772, 0-F773 0-F773, 0-F774, 0-F775 0-F775, 0-F776, 0-F777 0-F777, 0-F778, 0-F779 0-F779, 0-F780, 0-F781 0-F781, 0-F782, 0-F783 0-F783, 0-F784, 0-F785 0-F785, 0-F786, 0-F787 0-F787, 0-F788, 0-F789 0-F789, 0-F790, 0-F791 0-F791, 0-F792, 0-F793 0-F793, 0-F794, 0-F795 0-F795, 0-F796, 0-F797 0-F797, 0-F798, 0-F799 0-F799, 0-F800, 0-F801 0-F801, 0-F802, 0-F803 0-F803, 0-F804, 0-F805 0-F805, 0-F806, 0-F807 0-F807, 0-F808, 0-F809 0-F809, 0-F810, 0-F811 0-F811, 0-F812, 0-F813 0-F813, 0-F814, 0-F815 0-F815, 0-F816, 0-F817 0-F817, 0-F818, 0-F819 0-F819, 0-F820, 0-F821 0-F821, 0-F822, 0-F823 0-F823, 0-F824, 0-F825 0-F825, 0-F826, 0-F827 0-F827, 0-F828, 0-F829 0-F829, 0-F830, 0-F831 0-F831, 0-F832, 0-F833 0-F833, 0-F834, 0-F835 0-F835, 0-F836, 0-F837 0-F837, 0-F838, 0-F839 0-F839, 0-F840, 0-F841 0-F841, 0-F842, 0-F843 0-F843, 0-F844, 0-F845 0-F845, 0-F846, 0-F847 0-F847, 0-F848, 0-F849 0-F849, 0-F850, 0-F851 0-F851, 0-F852, 0-F853 0-F853, 0-F854, 0-F855 0-F855, 0-F856, 0-F857 0-F857, 0-F858, 0-F859 0-F859, 0-F860, 0-F861 0-F861, 0-F862, 0-F863 0-F863, 0-F864, 0-F865 0-F865, 0-F866, 0-F867 0-F867, 0-F868, 0-F869 0-F869, 0-F870, 0-F871 0-F871, 0-F872, 0-F873 0-F873, 0-F874, 0-F875 0-F875, 0-F876, 0-F877 0-F877, 0-F878, 0-F879 0-F879, 0-F880, 0-F881 0-F881, 0-F882, 0-F883 0-F883, 0-F884, 0-F885 0-F885, 0-F886, 0-F887 0-F887, 0-F888, 0-F889 0-F889, 0-F890, 0-F891 0-F891, 0-F892, 0-F893 0-F893, 0-F894, 0-F895 0-F895, 0-F896, 0-F897 0-F897, 0-F898, 0-F899 0-F899, 0-F900, 0-F901 0-F901, 0-F902, 0-F903 0-F903, 0-F904, 0-F905 0-F905, 0-F906, 0-F907 0-F907, 0-F908, 0-F909 0-F909, 0-F910, 0-F911 0-F911, 0-F912, 0-F913 0-F913, 0-F914, 0-F915 0-F915, 0-F916, 0-F917 0-F917, 0-F918, 0-F919 0-F919, 0-F920, 0-F921 0-F921, 0-F922, 0-F923 0-F923, 0-F924, 0-F925 0-F925, 0-F926, 0-F927 0-F927, 0-F928, 0-F929 0-F929, 0-F930, 0-F931 0-F931, 0-F932, 0-F933 0-F933, 0-F934, 0-F935 0-F935, 0-F936, 0-F937 0-F937, 0-F938, 0-F939 0-F939, 0-F940, 0-F941 0-F941, 0-F942, 0-F943 0-F943, 0-F944, 0-F945 0-F945, 0-F946, 0-F947 0-F947, 0-F948, 0-F949 0-F949, 0-F950, 0-F951 0-F951, 0-F952, 0-F953 0-F953, 0-F954, 0-F955 0-F955, 0-F956, 0-F957 0-F957, 0-F958, 0-F959 0-F959, 0-F960, 0-F961 0-F961, 0-F962, 0-F963 0-F963, 0-F964, 0-F965 0-F965, 0-F966, 0-F967 0-F967, 0-F968, 0-F969 0-F969, 0-F970, 0-F971 0-F971, 0-F972, 0-F973 0-F973, 0-F974, 0-F975 0-F975, 0-F976, 0-F977 0-F977, 0-F978, 0-F979 0-F979, 0-F980, 0-F981 0-F981, 0-F982, 0-F983 0-F983, 0-F984, 0-F985 0-F985, 0-F986, 0-F987 0-F987, 0-F988, 0-F989 0-F989, 0-F990, 0-F991 0-F991, 0-F992, 0-F993 0-F993, 0-F994, 0-F995 0-F995, 0-F996, 0-F997 0-F997, 0-F998, 0-F999 0-F999, 0-F1000, 0-F1001 0-F1001, 0-F1002, 0-F1003 0-F1003, 0-F1004, 0-F1005 0-F1005, 0-F1006, 0-F1007 0-F1007, 0-F1008, 0-F1009 0-F1009, 0-F1010, 0-F1011 0-F1011, 0-F1012, 0-F1013 0-F1013, 0-F1014, 0-F1015 0-F1015, 0-F1016, 0-F1017 0-F1017, 0-F1018, 0-F1019 0-F1019, 0-F1020, 0-F1021 0-F1021, 0-F1022, 0-F1023 0-F1023, 0-F1024, 0-F1025 0-F1025, 0-F1026, 0-F1027 0-F1027, 0-F1028, 0-F1029 0-F1029, 0-F1030, 0-F1031 0-F1031, 0-F1032, 0-F1033 0-F1033, 0-F1034, 0-F1035 0-F1035, 0-F1036, 0-F1037 0-F1037, 0-F1038, 0-F1039 0-F1039, 0-F1040, 0-F1041 0-F1041, 0-F1042, 0-F1043 0-F1043, 0-F1044, 0-F1045 0-F1045, 0-F1046, 0-F1047 0-F1047, 0-F1048, 0-F1049 0-F1049, 0-F1050, 0-F1051 0-F1051, 0-F1052, 0-F1053 0-F1053, 0-F1054, 0-F1055 0-F1055, 0-F1056, 0-F1057 0-F1057, 0-F1058, 0-F1059 0-F1059, 0-F1060, 0-F1061 0-F1061, 0-F1062, 0-F1063 0-F1063, 0-F1064, 0-F1065 0-F1065, 0-F1066, 0-F1067 0-F1067, 0-F1068, 0-F1069 0-F1069, 0-F1070, 0-F1071 0-F1071, 0-F1072, 0-F1073 0-F1073, 0-F1074, 0-F1075 0-F1075, 0-F1076, 0-F1077 0-F1077, 0-F1078, 0-F1079 0-F1079, 0-F1080, 0-F1081 0-F1081, 0-F1082, 0-F1083 0-F1083, 0-F1084, 0-F1085 0-F1085, 0-F1086, 0-F1087 0-F1087, 0-F1088, 0-F1089 0-F1089, 0-F1090, 0-F1091 0-F1091, 0-F1092, 0-F1093 0-F1093, 0-F1094, 0-F1095 0-F1095, 0-F1096, 0-F1097 0-F1097, 0-F1098, 0-F1099 0-F1099, 0-F1100, 0-F1101 0-F1101, 0-F1102, 0-F1103 0-F1103, 0-F1104, 0-F1105 0-F1105, 0-F1106, 0-F1107 0-F1107, 0-F1108, 0-F1109 0-F1109, 0-F1110, 0-F1111 0-F1111, 0-F1112, 0-F1113 0-F1113, 0-F1114, 0-F1115 0-F1115, 0-F1116, 0-F1117 0-F1117, 0-F1118, 0-F1119 0-F1119, 0-F1120, 0-F1121 0-F1121, 0-F1122, 0-F1123 0-F1123, 0-F1124, 0-F1125 0-F1125, 0-F1126, 0-F1127 0-F1127, 0-F1128, 0-F1129 0-F1129, 0-F1130, 0-F1131 0-F1131, 0-F1132, 0-F1133 0-F1133, 0-F1134, 0-F1135 0-F1135, 0-F1136, 0-F1137 0-F1137, 0-F1138, 0-F1139 0-F1139, 0-F1140, 0-F1141 0-F1141, 0-F1142, 0-F1143 0-F1143, 0-F1144, 0-F1145 0-F1145, 0-F1146, 0-F1147 0-F1147, 0-F1148, 0-F1149 0-F1149, 0-F1150, 0-F1151 0-F1151, 0-F1152, 0-F1153 0-F1153, 0-F1154, 0-F1155 0-F1155, 0-F1156, 0-F1157 0-F1157, 0-F1158, 0-F1159 0-F1159, 0-F1160, 0-F1161 0-F1161, 0-F1162, 0-F1163 0-F1163, 0-F1164, 0-F1165 0-F1165, 0-F1166, 0-F1167 0-F1167, 0-F1168, 0-F1169 0-F1169, 0-F1170, 0-F1171 0-F1171, 0-F1172, 0-F1173 0-F1173, 0-F1174, 0-F1175 	

第4表 火葬墓・土壌墓計測表

()推定 < > 残存 単位:cm・㎡

遺構名	発出位置	平面形態		縦										出土遺物 (展示以外の物)	重層区分
		長軸方位	長軸	短軸	高さ	傾度	面積	溝道部分方位	溝道長さ						
OT1	Ⅴ-9-16	溝道部付長方形	N-15°-W	1.14	0.70	0.20	0.14~0.21	0.74	N-105°-W	0.16				MF・OT13,19新	
OT2	Ⅴ-9-17	(狭方形)	N-6°-W	<0.64>	—	0.31	0.17	—	—	—	—	—	MF・OT3,19新		
OT3	Ⅴ-9-16+17	溝道部付長方形	N-11°-W	<1.10>	<0.52>	0.31	0.17~0.25	—	N-100°-W	0.16	カワツク		MF・OT13,19新 OT2,19古 MF2,19新		
OT4	Ⅴ-3-17+18	不整形	N-53°-E	<0.50>	—	0.31	0.67	—	—	—	—	—	H33-MF2,19新		
OT5	Ⅴ-1-15+16	溝道部付楕円形	N-16°-W	0.76	0.52	0.27	0.04~0.09	0.36	N-105°-W	0.22	須忠器・土師器		MF2,19新		
OT6	Ⅴ-9-18	溝道部付長方形	N-71°-W	0.96	0.86	0.39	0.15	0.77	N-19°-W	0.12	須忠器・土師器		MF2,19新		
OT7	Ⅴ-9-17	(溝道部付長方形)	N-17°-W	<0.60>	—	0.22	0.13	—	N-107°-W	0.22			MF2,19新 OT9,19古		
OT8	Ⅴ-9-17	不整形	W	<0.84>	0.46	0.12	0.06~0.12	—	—	—	—	—	MF・OT9,19新		
OT9	Ⅴ-9-17	(土壘形) 不整形	N	<0.84>	0.62	0.19	0.09~0.17	—	—	—	—	—	MF・OT7,19新 OT8,19古		
OT10	Ⅴ-3-16	楕円形	N-58°-W	1.44	0.94	0.54	0.23~0.26	1.21	—	—	土師器・常滑		MF2,19新		
OT11	Ⅴ-9-15	溝道部付長方形	N-34°-W	0.88	0.52	0.24	0.06~0.10	0.50	N-68°-E	0.16	土師器・壺		MF2,19新		
OT12	Ⅴ-9-15	溝道部付長方形	N	1.16	0.81	0.35	0.08~0.14	0.89	W	0.16	土師器		MF2,19新		
OT13	Ⅴ-9-16+17	溝道部付長方形	N-11°-W	1.28	0.80	0.44	0.22~0.29	1.08	N-78°-E	0.16	壺0.36 甗0.14		MF2,19新 OT1+OT3,19古		
OT14	Ⅴ-9-16	溝道部付楕円形	N-8°-W	1.18	0.78	0.35	0.22~0.28	0.93	N-97°-W	0.34	土師器		MF2,19新		
OT15	Ⅴ-5-16	溝道部付長方形	N-11°-W	1.04	0.66	0.47	0.15~0.31	0.67	N-100°-W	0.16			MF2,19新		
OT16	Ⅴ-7-14	溝道部付長方形	N-6°-W	1.12	0.80	0.46	0.05~0.23	0.77	N-95°-W	0.16			MF2,19新		
OT17	Ⅴ-7+16+17	楕円形	N-78°-W	1.04	0.80	0.16	0.05~0.13	0.68	—	—	土師器		MF2,19新		
OT18	Ⅴ-7-16	溝道部付長方形	N-8°-W	0.96	0.56	0.28	0.11~0.17	0.55	N-97°-W	0.36	須忠器・土師器		MF2,19新		
OT19	Ⅴ-7-16	溝道部付長方形	N	1.16	0.96	0.30	0.14~0.18	1.09	W	0.32	土師器		MF2,19新		
OT20	Ⅴ-7+15-16	溝道部付長方形	N-8°-W	1.00	0.82	0.24	0.09~0.15	0.72	N-97°-W	0.12	土師器		MF2,19新		
OT21	Ⅴ-7-15	溝道部付長方形	N-4°-W	1.18	0.76	0.24	0.12~0.17	0.96	N-95°-W	0.40	壺0.32 甗0.40		MF2,19新		
OT22	Ⅴ-7+14+15	溝道部付長方形	N-4°-W	1.08	0.68	0.33	0.13~0.19	0.71	N-93°-W	0.40	須忠器・土師器		MF2,19新		
OT23	Ⅴ-7-14	溝道部付長方形	N-3°-W	1.06	<0.48>	0.39	0.19~0.27	—	N-87°-E	0.58	土師器・壺		MF2,19新		
OT24	Ⅴ-7-14	長方形	N-11°-W	1.12	<0.60>	0.23	0.08~0.14	—	—	—	—	—	MF2,19新 OT29,19新		
OT25	Ⅴ-7+15-16	溝道部付楕円形	N	1.24	0.87	0.18	0.02~0.06	0.98	W	0.13			MF2,19新 OT29,19古		

第5表 火葬墓・土葬墓計測表(2)

() 推定 < > 残存 単位:m・㎡

遺構名	検出位置	平面形態	塚										出土遺物 (検出以外の物)	重畳関係		
			主軸方位	長軸	短軸	深さ	形状	面積	構造部方位	構造長	出土遺物	重畳関係				
OT26	Ⅱ-9-14	(構造部付長方形)	N-7°-W	1.12	<0.54>	0.40	0.19~0.24	-	-	-	-	-	-	-	AB-2号新 OT23-OT24,2号古	
OT27	Ⅱ-9-14	(土塚墓) 不整形	N	0.88	0.76	0.69	0.31~0.32	0.40	-	-	-	-	-	-	AB-2号新	
OT28	Ⅱ-9-9-15	構造部付長方形	N	1.32	1.00	0.25	0.05~0.15	1.20	W	W	0.18	-	-	-	AB-2号新 OT21,2号古	
OT29	Ⅱ-9-9-14	構造部付楕円形	N-15°-W	1.24	0.83	0.33	0.11~0.13	0.97	N-106°-W	N-106°-W	0.40	-	-	-	AB-2号新 OT23,2号古	
OT30	Ⅱ-9-19-14	構造部付長方形	N-3°-W	<0.76>	0.52	0.26	0.10~0.11	-	-	-	-	-	-	AB-2号新		
OT31	Ⅱ-9-11	構造部付長方形	N-7°-W	0.96	<0.72>	0.25	0.08~0.11	-	-	-	-	-	-	AB-OT137,2号新		
OT32	Ⅱ-9-11-12	楕円形	N	1.20	0.88	0.17	0.05~0.14	0.86	-	-	-	-	-	AB-2号新		
OT33	Ⅱ-9-11	不整形	N-5°-W	<0.40>	<0.28>	0.46	0.04~0.15	-	-	-	-	-	-	AB-2号新		
OT34	Ⅱ-9-12	構造部付長方形	N-6°-W	1.08	0.76	0.25	0.05~0.12	0.75	N-96°-W	N-96°-W	0.24	-	-	AB-OT38,2号新		
OT35	Ⅱ-9-13	構造部付楕円形	N-13°-W	0.98	0.90	0.26	0.05~0.14	0.82	N-103°-W	N-103°-W	0.26	-	-	AB-OT38-OT41,2号新		
OT36	Ⅱ-9-13	構造部付長方形	N	<0.84>	<0.68>	0.28	0.12	-	W	W	0.24	-	-	AB-2号新 OT35,2号古		
OT37	Ⅱ-9-11	(構造部付長方形)	N	1.08	<0.69>	0.19	0.05~0.10	-	-	-	-	-	-	須恵部 土師器坪・儀	AB-2号新 OT31,2号古	
OT38	Ⅱ-9-19-13	構造部付長方形	N	1.06	0.70	0.29	0.05~0.11	0.64	W	W	0.08	-	-	AB-2号新 OT34,2号古		
OT39	Ⅱ-9-12	(構造部付長方形)	N-10°-W	1.42	<0.74>	0.29	0.14~0.15	-	-	-	-	-	-	AB-2号新		
OT40	Ⅱ-9-11	(楕円形)	N	1.07	<0.52>	0.12	0.05~0.10	-	-	-	-	-	-	AB-2号新	AB-2号新 OT35,2号古	
OT41	Ⅱ-9-13	(長方形)	N-12°-W	1.12	<0.22>	0.10	-	-	-	-	-	-	-	M10,2号新		
OT42	Ⅱ-9-2	(土塚墓)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	M10,2号新		
OT43	Ⅱ-9-2	楕円形	N	1.16	1.08	0.42	0.18~0.33	1.02	-	-	-	-	-	須恵部河古代 土師器	M10,2号新	
OT44	Ⅱ-9-2	不整形	N	<0.72>	0.84	0.19	0.05~0.13	-	-	-	-	-	-	土師器河古代	M10,2号新	
OT45	Ⅱ-9-2	構造部付長方形	N	0.92	0.72	0.45	0.13~0.17	0.68	W	W	0.26	-	-	土師器坪・カワツケ	M10,2号新	

第6表 ビット計測表(1)

()推定 < > 残存 単位m

道幅名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物 重要程度	備 考	道幅名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物 重要程度	備 考	
P1	V-3-12	0.56	0.51	0.44	円形	D1427点 H5L29新	褐色土00VR4/0 しまり強い、小石多く含む。	P34	V-3-14	1.39	0.60	0.37	楕円形	褐色土00VR4/1 ロームブロック多い。		
P2	V-3-7	0.38	0.33	0.35	円形		黒褐色土00VR3/1 しまり強い、小石含む。	P35	V-3-14	0.67	0.42	0.10	楕円形	褐色土00VR4/1 ロームブロック多い。		
P3	V-3-7	0.32	0.25	0.13	楕円形		黒褐色土00VR3/1	P36	V-3-14-11	0.49	0.33	0.11	楕円形	褐色土00VR4/1 ロームブロック多い。		
P4	V-3-7	0.58	0.56	0.45	円形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P37	V-3-15	0.39	0.38	0.36	円形	土師製土甕	褐色土00VR4/1 ロームブロック多い。	
P5	V-3-7-8	0.84	0.46	0.22	不整形	土師製土甕	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P38	V-3-15	0.31	0.25	0.07	円形	煎茶壺	褐色土00VR4/1 ロームブロック多い。	
P6	V-3-7	0.59	0.47	0.46	円形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P39	V-3-15	0.32	0.31	0.37	円形		褐色土00VR4/1 ロームブロック多い。	
P7	V-3-8	0.46	0.41	0.63	方形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P40	V-3-14	0.31	0.25	0.18	楕円形	褐色土00VR4/1 ロームブロック多い。		
P8	V-3-8-9	0.95	0.62	0.42	楕円形	土師製	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P41	V-3-15	0.31	0.28	0.20	円形		褐色土00VR4/1 ロームブロック多い。	
P9	V-3-8	0.71	0.63	0.26	楕円形	土師製土甕	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P42	V-3-15	0.45	0.44	0.24	円形	煎茶壺	黒褐色土00VR3/1 しまり強い。	
P10	V-3-8	0.59	0.46	0.42	楕円形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P43	V-3-14	0.28	0.24	0.12	円形		黒褐色土00VR3/1 ローム粘土多い。	
P11	V-3-8	0.47	0.46	0.72	楕円形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P44	V-3-14	0.27	0.24	0.15	方形		黒褐色土00VR3/1 ローム粘土多い。	
P12	V-3-8	0.52	0.42	0.46	楕円形	土師製土甕	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P45	V-3-8- 11-12	0.64	0.52	0.17	楕円形	煎茶壺・ 土師製	黒褐色土00VR3/1 ローム粘土多い。	
P13	V-3-8	0.32	0.28	0.28	円形	土師製	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P46	V-3-11	0.20	0.45	0.45	円形	H429新	黒褐色土00VR3/2 しまり強い。	
P14	V-3-8	0.46	0.36	0.33	楕円形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P47	V-3-10	0.32	0.49	0.35	円形		褐色土00VR4/4 しまり強い、炭化物含む。	
P15	V-3-8-9	0.77	0.47	0.61	不整形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P48	V-3-3-10	0.32	0.51	0.46	円形		褐色土00VR4/4 しまり強い、炭化物含む。	
P16	V-3-8	0.53	0.48	0.48	円形	土師製	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P49	Ⅴ-3-1-2	0.80	0.68	0.47	楕円形	煎茶壺・ 土師製	セクション面中に土認め、 319Pに土認め	
P17	V-3-8	0.62	0.48	0.63	方形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P50	Ⅴ-3-1	0.80	0.73	0.34	方形	煎茶壺・ 土師製	セクション面中に土認め、 319Pに土認め	
P18	V-3-9	0.68	0.54	0.59	楕円形	土師製土甕	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P51	Ⅴ-3-2	0.56	0.49	0.48	不明		319Pに土認め、 319Pに黒褐色土00VR4/0 319Pに黒褐色土00VR7/0 磁粒少量含む。	
P19	V-3-9	0.33	0.32	0.21	円形	土師製	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P52	F24Pに変更							
P20	V-3-9	0.35	0.29	0.13	円形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P53	F24Pに変更							
P21	V-3-9	0.70	0.43	0.60	楕円形	土師製	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P54	F24Pに変更							
P22	V-3-9	0.52	0.38	0.24	楕円形	土師製	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P55	V-3-20	0.35	0.34	0.32	円形	煎茶壺 土師製土甕	H429新 セクション面中に土認め、 石多く含む。	
P23	V-3-9	0.63	0.53	0.26	円形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P56	V-3-10	0.43	0.49	0.30	円形		黒褐色土00VR3/1 石多く含む。	
P24	V-3-9	0.47	0.42	0.65	円形		黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P57	V-3-10	0.54	0.38	0.45	不整形		黒褐色土00VR3/1 石多く含む。	
P25	V-3-10	0.31	0.28	0.19	円形	煎茶壺・ 土師製土甕	黒褐色土00VR3/1 褐色土ブロック含む。	P58	V-3-11	0.32	0.44	0.47	不明	土師製・ P28L29古	黒褐色土00VR3/1 石多く含む。	
P26	V-3-10	0.72	0.70	0.37	円形	煎茶壺 土師製	黒褐色土00VR3/1 炭土・炭化物多く含む。	P59	V-3-10	0.30	0.48	0.50	円形	土師製	黒褐色土00VR3/1 石多く含む。	
P27	V-3-11	0.25	0.25	0.23	楕円形	土師製	黒褐色土00VR3/1 炭土・炭化物多く含む。	P60	V-3-11-11	0.33	0.30	0.24	円形	煎茶壺・ 土師製	黒褐色土00VR3/2 しまり強 粘性強い、炭化物含む。	
P28	V-3-11	0.61	0.51	0.27	円形	P59L29新	黒褐色土00VR3/1 しまり 粘性強い、小石多く含む。	P61	V-3-11-12	0.35	0.33	0.46	円形		黒褐色土00VR3/2 しまり強 粘性強い、炭化物含む。	
P29	V-3-10	0.64	0.60	0.28	円形		黒褐色土00VR3/1 しまり 粘性強い、小石多く含む。	P62	V-3-12	0.36	0.32	0.32	円形		黒褐色土00VR3/2 しまり強 粘性強い、炭化物含む。	
P30	V-3-10	0.59	0.50	0.45	楕円形		黒褐色土00VR3/1 しまり 粘性強い、小石多く含む。	P63	V-3-12	0.60	0.48	0.44	楕円形	土師製 カマ	褐色土00VR4/1	
P31	V-3-10-11	0.52	0.48	0.31	円形		黒褐色土00VR3/1 しまり 粘性強い、小石多く含む。	P64	V-3-12	0.67	0.42	0.21	楕円形		褐色土00VR4/1	
P32	V-3-10	0.37	0.44	0.49	楕円形		黒褐色土00VR3/1 しまり 粘性強い、小石多く含む。	P65	V-3-12	0.69	0.66	0.48	円形	D3-D1427点 P107L29新	黒褐色土00VR3/1 しまり強い、炭化物含む。	
P33	V-3-11	0.28	0.34	0.24	円形		黒褐色土00VR3/1 しまり 粘性強い、小石多く含む。	P66	V-3-11	0.67	0.50	0.40	不明	H429古 D23L29新	褐色土00VR2/1 しまり強い、炭化物含む。	
								P67	V-3-3-17	0.99	0.90	0.33	円形	煎茶壺・ 土師製・ H429新	319Pに土認め、 319Pに黒褐色土00VR4/3 磁多量含む。	

第7表 ピット計測表(2)

()推定 < > 残存 単位:m

遺構 番号	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物 発掘時期	備 考	遺構 番号	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物 発掘時期	備 考
P68	V-18	0.70	0.62	0.32	円形	黒土層内 土師内装片・燧石 18.25新	黒褐色土010V93/2 砂多含む。	P106	V-7-8	0.72	0.49	0.37	楕円形	土師内・燧石 D11-P103.29古	黒褐色土010V94/1 黒褐色土010V94/1
P69	F209に突変							P108	V-12	1.10	0.57	0.37	楕円形	黒土層 土師燧石 (試掘含む)	黒褐色土010V94/1
P70	V-18-18	0.70	0.54	0.33	楕円形	土師内・燧石 18.25新	黒褐色土010V93/2 明黒褐色土010V96/60-砂多含む。	P109	V-7-9	0.51	0.27	0.24	楕円形		黒褐色土010V94/1 炭化物含む
P71	F491に突変							P110	V-7-13	0.32	0.21	0.19	楕円形	D28.29新	黒褐色土010V94/1 炭化物含む
P72	F209に突変							P111	V-7-8	0.30	0.29	0.17	円形		黒褐色土010V94/1 炭化物含む
P73	F209に突変							P112	溝-7-9-1	0.47	0.30	0.23	不整形	19.25新 P103.29古	にじみ・黒褐色土010V93/2 にじみ・黒褐色土010V97/40- 砂多を含む。
P74	V-7-13	0.81	0.61	0.71	楕円形	土師(古墳)	黒色土010V92/1 しまり・粘性ややあり、 下層で黄色の砂含む。	P113	V-7-20 溝-7-1	0.56	0.31	0.28	円形	土師燧石(試掘) 10-P24.29古	黒褐色土010V92/2 にじみ・黒褐色土010V97/40- ローム少量含む。
P75	V-7-12	0.33	0.42	0.43	円形	D41.9古	黒色土010V92/1 しまり・粘性ややあり、 下層で黄色の砂含む。	P114	F209に突変						
P76	V-7-12	0.70	0.60	0.62	円形	D41.9古	黒色土010V92/1 しまり・粘性ややあり、 下層で黄色の砂含む。	P115	溝-7-1	0.871	0.47	0.36	不整形	19.25新 P24.29古	黒褐色土010V92/2 にじみ・黒褐色土010V92/40- ローム少量含む。
P77	V-7-18	0.26	0.25	0.46	円形		黒褐色土010V94/1 しまり・粘性強。	P116	V-7-13	0.43	0.44	0.43	円形		黒褐色土010V94/1
P78	V-7-11	0.60	0.30	0.33	楕円形	D10.29古	黒褐色土010V94/1 しまり・粘性強。	P117	V-7-9	0.77	0.47	0.36	楕円形	黒土層 土師内・燧石 H18.29新	セランソウ器中に土混あり。
P79	V-7-11	0.50	0.48	0.42	不明		黒褐色土010V93/1 炭化物含む。	P118	V-7-8-9	0.58	0.46	0.19	楕円形	H13-H15- F21.29新	黒褐色土010V93/1
P80	V-7-13	0.23	0.31	0.36	楕円形		黒褐色土010V93/1 炭化物含む。	P119	V-7-10-11	0.82	0.43	0.35	不整形	黒土層 土師燧石	黒褐色土010V93/1 炭化物含む。
P81	V-7-13	0.36	0.49	0.73	楕円形		黒褐色土010V93/1	P120	V-7-11	0.56	0.44	0.18	円形		黒褐色土010V93/1 炭化物含む。
P82	V-7-12	0.32	0.31	0.69	円形	黒土層・燧石 土師内・燧石 D14.29古 D28.29新	黒褐色土010V93/1	P121	V-7-10	0.31	0.28	0.20	円形		黒褐色土010V93/1 炭化物含む。
P83	V-7-12	0.32	0.72	0.61	円形	土師内・燧石	黒褐色土010V93/1	P122	V-7-18	0.86	0.42	0.22	楕円形		黒褐色土010V92/2 明黒褐色土010V97/60-ローム含む。
P84	V-7-7-6	0.50	0.38	0.39	不明		セランソウ器中に土混あり。	P123	V-7-20	0.49	0.46	0.16	円形		黒褐色土010V92/2 明黒褐色土010V97/60-ローム含む。
P85	V-7-12	0.62	0.35	0.41	楕円形	D28.29新	黒褐色土010V93/1 しまりあり。	P124	V-7-19-20	0.70	0.55	0.30	不整形		黒褐色土010V92/2 明黒褐色土010V97/60-ローム含む。
P86	V-7-12	0.55	0.34	0.32	円形	D31.29古	黒褐色土010V93/1 炭化物含む。	P125	V-7-26	0.24	0.22	0.10	円形		黒褐色土010V92/2 明黒褐色土010V97/60-ローム含む。
P87	V-7-13	0.83	0.77	0.68	円形	土師燧石	黒褐色土010V93/1 炭化物含む。	P126	V-7-19-20	0.63	0.52	0.12	円形	P212.29新	黒褐色土010V93/2 明黒褐色土010V97/60-ローム含む。
P88	V-7-12	0.53	0.46	0.38	楕円形		黒褐色土010V94/1	P127	V-7-19-19	0.61	0.48	0.15	楕円形	P212.29新	黒褐色土010V93/2 明黒褐色土010V97/60-ローム含む。
P89	V-7-7-12	0.51	0.40	0.38	不明	H4.25古	黒褐色土010V93/1	P128	V-7-19	0.51	0.26	0.61	不明	P202.29新	黒褐色土010V93/2 明黒褐色土010V97/60-ローム含む。
P90	V-7-12	0.52	0.49	0.11	円形		黒褐色土010V94/1	P129	V-7-19-20	1.73	1.36	0.43	不整形	土師燧石	にじみ・黒褐色土010V94/3 にじみ・黒褐色土010V97/60- ローム多含む。
P91	V-7-12	0.73	0.63	0.60	楕円形		セランソウ器中に土混あり。	P130	V-7-19	0.46	0.30	0.12	楕円形		にじみ・黒褐色土010V94/3 にじみ・黒褐色土010V97/60- ローム多含む。
P92	V-7-7-13	0.52	0.47	0.61	楕円形		セランソウ器中に土混あり。	P131	V-7-19	1.17	1.03	0.28	不整形	黒土層	にじみ・黒褐色土010V94/3 にじみ・黒褐色土010V97/60- ローム多含む。
P93	V-7-13-14	0.67	0.30	0.37	楕円形		セランソウ器中に土混あり。	P132	V-7-9	0.38	0.37	0.29	円形	土師燧石	黒褐色土010V93/1 炭化物含む。
P94	V-7-13-14	0.70	0.62	0.56	楕円形	黒土層 赤土層	セランソウ器中に土混あり。	P133	V-7-10	0.55	0.28	0.24	不整形	土師燧石	黒褐色土010V93/1 炭化物含む。
P95	V-7-14	0.94	0.63	0.59	楕円形	赤土層・燧石	セランソウ器中に土混あり。	P134	V-7-19	1.36	0.80	1.18	不整形	黒土層 土師内・燧石 土師内・燧石	にじみ・黒褐色土010V93/2 明黒褐色土010V97/60-ローム ブツ多含む。
P96	V-7-14	1.00	0.39	0.36	楕円形	黒土層 赤土層	セランソウ器中に土混あり。	P135	V-7-19-20	1.11	1.05	0.36	楕円形	黒土層	にじみ・黒褐色土010V93/2 明黒褐色土010V97/60- ロームブツ多含む。
P97	V-7-12	0.56	0.53	0.49	円形		黒褐色土010V94/1 砂多含む。								
P98	溝-7-9-1	0.25	0.65	0.42	方形	黒土層 土師燧石 H9-P101.29古	にじみ・黒褐色土010V94/2 砂多含む。								
P99	V-7-14	0.96	0.61	0.28	楕円形	黒土層・燧石 土師燧石(試掘)	黒褐色土010V93/2 砂多含む。								
P100	V-7-12	0.46	0.32	0.18	楕円形	D5.29古	黒色土010V92/1 しまりややあり								
P101	V-7-11	0.60	0.65	0.38	不明	D23.29古	褐色土010V94/1								
P102	V-7-8	0.49	0.35	0.25	楕円形	黒土層 赤土層	黒色土010V92/1								
P103	溝-7-9-1	2.18	0.32	0.31	不整形	黒土層・燧石 土師内・燧石 (試掘)	H9-P112.29新 F21-P26-P28.29古 セランソウ器中に土混あり。								
P104	V-7-10	0.49	0.27	0.35	楕円形	土師内	褐色土010V94/1								
P105	V-7-8	0.25	0.64	0.38	楕円形	H12.29新	黒褐色土010V94/1								

第8表 ビット計測表(3)

()推定 < > 残存 単位m

遺構名	出土位置				出土遺物 遺物関係	備 考	遺構名	出土位置				出土遺物 遺物関係	備 考
	表積	短壁	隅込	形 態				表積	短壁	隅込	形 態		
P136	V-4-19	1.20	0.68	0.69	不整形	瓦葺裏面 土師焼 P121と同	P157	V-4-1	0.62	0.42	0.10	不整形	黒褐色土00V93/2 明黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。
P137	V-4-18	0.99	0.50	0.24	楕円形	にぶい黄褐色土00V94/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム含む。	P158	V-4-12	0.84	0.59	0.40	楕円形	瓦葺裏面 土師焼 セクション図中に土塊あり。
P138	V-4-20 V-4-19-20	0.85	0.62	0.12	楕円形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。	P159	V-4-12	0.55	0.48	0.33	楕円形	瓦葺裏面 土師 内部に土塊
P139	V-4-20	0.23	0.23	0.13	円形	黒褐色土00V93/2 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム含む。	P160	V-4-1	0.31	0.30	0.18	円形	瓦葺裏面
P140	V-4-18	0.50	0.49	0.14	円形	黒褐色土00V93/2 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム含む。	P161	V-4-17	1.16	0.62	0.54	楕円形	瓦葺裏面 土師焼(土塊含む)。
P141	V-4-19	1.32	1.04	0.37	不整形	土師付付壁	P162	V-4-20	0.50	0.45	0.41	円形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。
P142	V-4-18	0.70	0.27	0.23	楕円形	土師焼	P163	V-4-1	1.32	0.64	0.35	楕円形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。
P143	V-4-19	0.76	0.72	0.33	不整形	瓦葺裏面	P164	V-4-1	0.44	0.34	0.32	楕円形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。
P144	V-4-20	0.26	0.24	0.12	円形	黒褐色土00V93/2 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム少量含む。	P165	V-4-1	0.41	0.36	0.40	方形	瓦葺裏面
P145	V-4-20	0.40	0.40	0.26	円形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。	P166	V-4-1	0.51	0.43	0.11	楕円形	P149と同
P146	V-4-20	0.64	0.44	0.36	楕円形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。	P167	V-4-17	1.36	0.99	0.61	楕円形	瓦葺裏面 土師焼
P147	V-4-1	0.83	0.52	0.53	楕円形	瓦葺裏面	P168	V-4-12	0.40	0.22	0.17	不明	79.22号
P148	V-4-1	0.99	0.67	0.42	楕円形	瓦葺裏面 土師焼(土塊含む) P154.19号	P169	V-4-12	0.63	0.60	0.40	円形	黒褐色土00V93/2 小石多量含む。
P149	V-4-1	0.60	0.38	0.47	楕円形	黒褐色土00V93/2 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム少量含む。	P170	V-4-12	0.59	0.46	0.36	円形	黒褐色土00V93/2 小石多量含む。
P150	V-4-20	0.66	0.36	0.26	楕円形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。	P171	F2394C変遷					
P151	V-4-19-20	1.53	0.73	0.38	不整形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。	P172	V-4-20 V-4-1	1.09	1.05	0.23	不整形	瓦葺裏面 土師焼
P152	V-4-20	0.53	0.50	0.40	円形	黒褐色土00V93/2 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム少量含む。	P173	V-4-19	0.85	0.79	0.67	円形	瓦葺裏面 土師焼
P153	V-4-1	0.55	0.36	0.33	楕円形	黒褐色土00V93/2 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム少量含む。	P174	V-4-19	0.95	0.76	0.36	不整形	土師焼
P154	V-4-1	0.60	0.53	0.57	円形	瓦葺裏面 土師焼(土塊含む) P182.19号	P175	V-4-19	0.50	0.40	0.17	楕円形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。
P155	V-4-1	0.56	0.45	0.13	不整形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム含む。	P176	V-4-19	0.54	0.43	0.17	楕円形	にぶい黄褐色土00V95/3 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム多量含む。
P156	V-4-1	0.40	0.46	0.20	楕円形	黒褐色土00V93/2 明黄褐色土00V97/6 ローム少量含む。	P177	V-4-19	0.63	0.43	0.22	楕円形	黒褐色土00V93/2 にぶい黄褐色土00V97/6 ローム少量含む。
							P178	F2394C変遷					
							P179	V-4-16-17	1.04	0.82	0.47	楕円形	瓦葺裏面 土師焼 P182.19号
							P180	V-4-16-17	0.94	0.73	0.39	楕円形	P182.19号
							P181	F2394C変遷					
							P182	F2394C変遷					
							P183	V-4-20 V-4-1	<1.60>	0.60	0.27	楕円形	土師焼 土師焼 ローム少量含む。

第9表 ビット計測表(4)

()推定 < > 残存 単位m

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物 遺構関係	備 考	遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物 遺構関係	備 考	
P184	V-ト-16	0.40	0.28	0.21	楕円形	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム含む。		P211	V-ト-18/19	1.13	0.82	0.40	不整形	黒土層 土師製土	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。	
P185	V-ト-16	0.61	0.54	0.30	円形	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P212	V-ト-19	0.70	0.53	0.29	不明	P126-F127- P136土台	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。	
P186	P27P1に変更								P213	V-ト-8	0.86	0.70	0.27	不明	土師製 P27土台	黒褐色土00V93/3 下層に灰を含む。
P187	V-ト-15	1.03	0.72	0.48	不整形	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P214	P27P5に変更							
P188	V-ト-15	0.52	0.28	0.12	楕円形	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P215	V-ト-9	0.43	0.31	0.55	楕円形	H18土台	黒褐色土00V93/4	
P189	V-ト-16	0.63	0.52	0.22	楕円形	に灰・黄褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム含む。		P216	P27P4に変更							
P190	V-ト-ト-15	0.72	0.64	0.21	円形	土師製 黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P217	V-ト-17	0.54	0.42	0.12	楕円形		に灰・黄褐色土00V94/3 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム含む。	
P191	V-ト-15	0.78	0.68	0.36	方形	土師内基坪 (土壇)	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P218	V-ト-16/17	0.68	0.40	0.11	不明	P179-F180 土台	に灰・黄褐色土00V94/3 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム含む。
P192	V-ト-14	0.79	0.63	0.33	円形	円形	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P219	V-ト-16	0.43	0.31	0.13	楕円形		に灰・黄褐色土00V94/3 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム含む。
P193	V-ト-14	0.46	0.36	0.18	楕円形	黒土層	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム含む。		P220	V-ト-16	0.45	0.38	0.13	楕円形		に灰・黄褐色土00V94/3 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム含む。
P194	V-ト-14	0.25	0.20	0.16	楕円形	楕円形	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P221	V-ト-15	0.47	0.41	0.08	楕円形	黒土層 土師製(試燬)	に灰・黄褐色土00V94/3 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム含む。
P195	V-ト-15	0.76	0.58	0.29	楕円形	黒土層	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P222	V-ト-15	0.92	0.81	0.15	円形	黒土層 P27土台	黒褐色土00V93/2 に灰を含む。
P196	V-ト-ト-15	1.08	0.58	0.21	楕円形	黒土層	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P223	V-ト-9/9	0.45	0.37	0.21	楕円形	土師製	黒褐色土00V93/3 に灰を含む。
P197	V-ト-15	0.60	0.50	0.14	楕円形	楕円形	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P224	V-ト-9 VI-ト-9	0.49	0.30	0.31	不整形	土師製	黒褐色土00V93/4 に灰を含む。
P198	V-ト-15	0.81	0.67	0.27	楕円形	土師製	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P225	VI-ト-9	0.70	0.58	0.41	楕円形		黒褐色土00V93/4 に灰を含む。
P199	P27P1に変更								P226	VI-ト-8	0.41	0.36	0.13	円形		黒褐色土00V93/4 に灰を含む。
P200	V-ト-12	0.31	0.43	0.31	円形	F28土台 黒土層	黒褐色土00V94/1 粘土ブロック含む。		P227	VI-ト-10	0.41	0.32	0.23	楕円形	黒土層 土師製	黒褐色土00V93/4 に灰を含む。
P201	P28P1に変更								P228	V-ト-10	0.57	0.52	0.48	円形	土師製(試燬) H18土台	黒褐色土00V93/4 に灰を含む。
P202	V-ト-ト-18/19	1.00	0.86	0.60	不明	黒土層 土師内基坪 P128土台	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P229	VI-ト-10	0.48	0.31	-	不明		黒褐色土00V93/1
P203	V-ト-15	0.53	0.25	0.37	不明		黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P230	V-ト-10 -11 VI-ト-10/11	0.93	0.61	0.33	不整形	土師内基坪	
P204	V-ト-16	0.91	0.67	0.66	楕円形	黒土層 土師内基坪 (土壇) P12土台	黒褐色土00V93/2 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム少量含む。		P231	VI-ト-11	0.90	0.85	0.19	不明		黒褐色土00V94/1
P205	VI-ト-8	0.66	0.45	0.37	楕円形	土師製 ME土台	黒褐色土00V93/1		P232	VI-ト-10	0.30	0.26	0.24	円形		黒褐色土00V93/4
P206	VI-ト-ト-9/9	0.41	0.40	0.59	円形	ME土台 P193土台	黒褐色土00V93/1		P233	V-ト-15	1.02	0.93	0.38	円形	黒土層 土師製(試燬) 含む)	に灰・黄褐色土00V94/3 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム・砂粒少量含む。
P207	VI-ト-9	0.96	0.79	0.56	楕円形		黒褐色土00V93/1		P234	V-ト-15	0.89	0.80	0.41	円形		に灰・黄褐色土00V94/3 に灰・黄褐色土00V97/4 ロームブロック・砂粒含む。
P208	VI-ト-ト-9	0.66	0.60	0.65	楕円形	土師内基坪 ME土台	黒褐色土00V93/1		P235	V-ト-16	0.67	0.56	0.18	楕円形		に灰・黄褐色土00V94/3 に灰・黄褐色土00V97/4 ローム・ブロック・砂粒含む。
P209	VI-ト-10	0.64	0.57	0.53	円形	ME土台	黒褐色土00V93/1		P236	欠落						
P210	VI-ト-10	0.53	0.40	0.44	楕円形	ME土台	黒褐色土00V93/1		P237	V-ト-13	0.45	0.44	0.24	円形	F17土台	黒褐色土00V93/4 小石多い。
								P238	V-ト-14	0.53	0.49	0.31	円形	黒土層 P17土台	黒褐色土00V93/4 小石多い。	
								P239	V-ト-14	0.59	0.50	0.24	円形		黒褐色土00V93/4 小石多い。	
								P240	V-ト-15	0.41	0.37	0.25	楕円形	ME土台	に灰・黄褐色土00V94/3 砂粒少量含む。	

第10表 ビット計測表(5)

()推定 < > 残存 単位m

道標 番号	出土位置	長さ	幅	高さ	形	出土遺物 種類	備	考	道標 番号	出土位置	長さ	幅	高さ	形	出土遺物 種類	備	考
P241	V-9-16	0.51	0.44	0.27	楕円形	土師弁	にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒含む。		P267	V-9-14	1.14	0.64	0.21	不明	土師弁-壺(試 掘) P129古 P270土師新	にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒多含む。	
P242	V-9-16	0.40	0.33	0.27	楕円形		にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・主軸、褐色土00VR3/2 少量含む。		P268	V-9-15	1.60	1.17	0.36	不明	壺蓋-小-壺 土師弁-壺	にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P243	V-9-15	0.55	0.45	0.23	楕円形		黒褐色土00VR3/2 砂粒少量含む。		P269	V-9-15	0.43	0.34	0.09	円形		にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P244	V-9-14 14-15 V-9-15	0.53	0.29	0.34	楕円形		にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒多含む。		P270	V-9-15	0.57	0.56	0.16	円形	P267土師古	にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P245	V-9-14	0.24	0.23	0.12	円形		にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒多含む。		P271	V-9-15	0.96	0.82	0.35	不明	P129古	にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P246	V-9-14	0.45	0.42	0.24	円形	F16-P313古 新	黒褐色土00VR3/2 灰化物・砂粒含む。		P272	V-9-15	0.59	0.50	0.18	楕円形		にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P247	V-9-13	0.62	0.55	0.33	円形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	砂粒、 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	P273	V-9-15	1.11	0.45	0.34	不明	土師内蓋弁 (45号) F1-P12古	にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P248	V-9-14	0.53	0.51	0.24	円形	F234土師新	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	砂粒、 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	P274	V-9-16	0.89	0.80	0.19	円形	土師内蓋弁 (57号)	にんい・黄褐色土00VR5/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒含む。	
P249	V-9-14	0.30	0.54	0.39	円形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	砂粒、 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	P275	V-9-16	0.68	0.60	0.39	楕円形		にんい・黄褐色土00VR5/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒含む。	
P250	V-9-13-14	0.91	0.44	0.26	不整形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	砂粒、 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	P276	V-9-16	0.87	0.67	0.25	楕円形		にんい・黄褐色土00VR5/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒含む。	
P251	V-9-13	0.36	0.22	0.30	不明		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	砂粒、 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	P277	V-9-16	0.47	0.39	0.28	楕円形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒多含む。	
P252	V-9-13-14	0.20	0.58	0.42	楕円形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	砂粒、 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。	P278	V-9-16	0.43	0.42	0.24	円形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒多含む。	
P253	V-9-14	0.63	0.48	0.41	楕円形	P348土師古	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。		P279	V-9-16	0.65	0.56	0.41	楕円形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒多含む。	
P254	V-9-14	0.20	0.49	0.50	不明	F16土師古	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。		P280	V-9-16	0.50	0.37	0.28	楕円形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒多含む。	
P255	V-9-14	0.26	0.68	0.44	円形	F136土師新	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム少量含む。		P281	V-9-15	1.17	0.96	0.40	不明	壺蓋裏-弁 土師蓋 P129古 P304土師新	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒多含む。	
P256	V-9-14	0.30	0.53	0.31	円形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒含む。		P282	V-9-9	1.13	0.98	0.45	不明	土師蓋 P206土師古	黒褐色土00VR3/2 小石多含む。意味不明。	
P257	V-9-14	0.68	0.53	0.45	楕円形	壺蓋弁 土師弁	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒含む。		P283	V-9-15	1.15	0.78	0.53	楕円形	土師樂(試掘) 含む。	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P258	V-9-15	0.45	0.37	0.68	楕円形	土師蓋	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒含む。		P284	V-9-15	0.72	0.63	0.23	円形	土師弁	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P259	V-9-15	0.47	0.40	0.19	楕円形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒含む。		P285	V-9-15	0.92	0.59	0.51	楕円形	壺蓋弁 土師弁-壺 F142古	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P260	V-9-9	1.86	0.64	0.98	不整形	H15-H18 土師古	黒褐色土00VR3/2 灰多含む。		P286	V-9-15	0.78	0.70	0.35	楕円形		黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P261	V-9-1- 9-9	0.68	0.40	0.13	楕円形		暗褐色土00VR3/0 土層不明。		P287	V-9-16	1.16	1.05	0.22	円形		にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒多含む。	
P262	不明								P288	V-9-16-17	1.09	1.02	0.38	円形	土師弁-壺	にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 ローム・砂粒多含む。	
P263	F17P13土師新								P289	V-9-17	0.92	0.75	0.31	不整形	土師蓋	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P264	F17P13土師新								P290	V-9-17	1.28	0.60	0.36	楕円形	壺蓋弁	黒褐色土00VR3/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P265	V-9-11	0.66	0.38	0.33	楕円形		暗褐色土00VR3/0		P291	V-9-17	1.01	0.86	0.40	楕円形	壺蓋弁-壺 土師蓋	にんい・黄褐色土00VR4/2 にんい・黄褐色土00VR7/4 砂粒多含む。	
P266	V-1-10 M-7-10	1.05	0.57	0.35	不整形	壺蓋裏-弁 土師弁 H18土師新	暗褐色土00VR3/0										

第11表 ビット計測表(6)

()推定 < > 残存 単位m

道標 番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	形 態	出土遺物 種類	備 考	道標 番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	形 態	出土遺物 種類	備 考
P292	V-9-15-16	0.97	(0.77)	0.27	不明	土師灰 F12.9号	にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0 ローム・砂粒含む。	P319	V-9-15	0.54	0.52	0.50	円形	黒土層 H23.2号	黒褐色土0.0VRS/2) しちみ多い。
P293	VI-9-9	0.78	(0.56)	0.35	不明		暗褐色土0.0VRS/2) しちみ・砂粒多い。	P320	V-9-14-13	1.04	0.95	0.61	円形	土師灰 H23.2号	黒褐色土0.0VRS/2) しちみ多い。
P294	V-9-16-17	0.46	(0.40)	0.24	不明	土師内黒灰 (平灰)	にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) 灰黄褐色土0.0VRS/2/0・砂粒含む。	P321	V-9-17	0.61	0.35	0.20	楕円形	土師灰・黄 土0.0VRS/2)	にじみ・黄褐色土0.0VRS/0) ローム・砂粒少量含む。
P295	V-9-16	0.39	0.37	0.24	円形		にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) 灰黄褐色土0.0VRS/2/0・砂粒含む。	P322	V-9-17	0.51	0.47	0.46	円形	黒土層 M4.2号	にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) 砂粒多く含む。
P296	V-9-17	0.44	0.37	0.30	円形		灰黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒少量含む。	P323	V-9-17-18	1.18	0.99	0.30	楕円形	黒土層・黄 土師内黒灰・ 灰・黄褐色土 を含む。	F400中組1.2号 にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) 砂粒多く含む。
P297	V-9-17	0.46	0.39	0.27	円形		黒褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒少量含む。	P324	V-9-18	1.36	0.65	0.51	不整形	黒土層・黄 土師内黒灰・ ローム・砂粒 少量含む。	にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒少量含む。
P298	VI-9-10	0.40	0.37	0.30	円形		暗褐色土0.0VRS/2) 色が薄い。	P325	V-9-18	1.37	(1.28)	0.39	不整形	F28.2号	黒褐色土0.0VRS/2) 砂粒少量含む。
P299	V-9-14	0.66	0.75	1.03	円形	黒土層・黄 土師内黒灰 を含む	H21.2号 黒褐色土0.0VRS/1) 炭化物多く含む。	P326	V-9-9-18	1.19	1.14	0.51	不整形	黒土層・黄 土師内黒灰・ F25.2号	黒褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒少量含む。
P300	V-9-12-14	0.46	0.46	0.21	円形	土師灰	黒褐色土0.0VRS/1) しちみ9やちみ。	P327	V-9-18	0.71	0.43	0.23	楕円形		にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒少量含む。
P301	V-9-14	0.40	0.39	0.48	円形	黒土層	黒褐色土0.0VRS/1) しちみ9やちみ。	P328	V-9-18-19	1.32	1.05	0.33	楕円形	黒土層・黄 土師内黒灰 F28.2号	にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒少量含む。
P302	文庫							P329	文庫						
P303	V-9-15	1.04	(0.81)	0.56	不明	土師灰・炭化 物含む) F2-F16.2号	にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム多く含む。	P330	V-9-18-19	3.34	1.40	0.58	不整形	黒土層・黄 土師内黒灰・ 炭化物 F28.2号	黒褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒少量含む。
P304	V-9-9-15	0.59	(0.56)	0.19	不明	F2-F28.1号	黒褐色土0.0VRS/2) 砂粒含む。	P331	V-9-18-19	1.01	0.65	0.41	楕円形	黒土層 土師灰	にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム多く、砂粒含む。
P305	V-9-9-13	(0.26)	(0.21)	0.36	不明	土師灰・黄 土師内黒灰 F10.0-F12.9号	黒褐色土0.0VRS/2) 砂粒含む。	P332	V-9-17	0.46	0.33	0.18	楕円形		黒褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒含む。
P306	V-9-9-15	0.67	(0.30)	0.14	不明	F1-F20.6.2号	黒褐色土0.0VRS/2) 砂粒含む。	P333	V-9-9-13	0.61	0.53	0.38	円形	土師灰	黒褐色土0.0VRS/2) 小石多い。
P307	V-9-15	0.69	0.62	0.58	円形	黒土層・黄 土師灰 H23- F35.1.2号	黒褐色土0.0VRS/1) 炭化物多い。	P334	V-9-14	0.54	0.51	0.37	円形	黒土層 土師灰 F12.9号	黒褐色土0.0VRS/2) 小石多い。
P308	V-9-15	0.94	0.74	0.79	不整形	土師黄 H23.1.2号 D32.1.2号	暗褐色土0.0VRS/0)黄色の砂 多く含む。B=0.5V。	P335	V-9-14	0.47	0.41	0.37	円形	黒土層・黄 H21.2号	黒褐色土0.0VRS/2) 小石多い。
P309	F21P11に 変更							P336	F26P2に 変更						
P310	V-9-15	0.49	0.47	0.39	円形	H23.1.2号	暗褐色土0.0VRS/0)黄色の砂 多く含む。B=0.5V。	P337	F26P2に 変更						
P311	V-9-14	0.82	(0.36)	0.23	不明	F16.2.2号	黒褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒含む。	P338	V-9-17	0.50	0.43	0.38	円形		にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム含む。
P312	V-9-9-14	0.55	0.30	0.30	円形	F18.2.2号	黒褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒含む。	P339	V-9-17	0.56	0.52	0.34	円形		にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム含む。
P313	V-9-14	(0.60)	0.46	0.30	楕円形	土師灰 F246.2.2号	黒褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒含む。	P340	V-9-17	0.93	0.67	0.55	楕円形		にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム含む。
P314	V-9-14	(0.87)	(0.40)	0.35	不明	F16-F20.2.0 号	にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム・砂粒少量含む。	P341	V-9-17	0.74	0.66	0.53	円形		にじみ・黄褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム含む。
P315	V-9-12-13	1.31	0.89	0.57	楕円形	土師黄 H22.1.2号 F31.2.2号	黒褐色土0.0VRS/1) 石多く含む。	P342	V-9-17	0.60	0.54	0.36	円形		黒褐色土0.0VRS/2) にじみ・黄褐色土0.0VRS/7/0) ローム少量含む。
P316	V-9-15	0.80	0.77	0.59	円形		黒褐色土0.0VRS/1) 石多く含む。								
P317	V-9-15	0.57	0.50	0.25	円形	土師灰・炭化 物含む)	暗褐色土0.0VRS/1)								
P318	V-9-9- 12-13	1.38	(1.00)	0.50	楕円形	H22.1.2号	H17-F11.2.2号 セメント・鋼管に土混入。								

第12表 ピット計測表(7)

() 推定 < > 残存 単位m

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形制	出土遺物 発掘関係	備 考	遺構 名	出土位置	長径	短径	深さ	形制	出土遺物 発掘関係	備 考
P343	V-3-17	0.34	0.31	0.31	円形		黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム少量含む。	P367	V-3-14	0.36	0.38	0.36	楕円形	黒土層	黒褐色土①0VR3/4 灰化物多い。
P344	V-3-17	0.51	0.48	0.27	円形	P256・P369 29新	黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム少量含む。	P368	V-3-15	0.70	0.48	0.28	楕円形		黒褐色土①0VR3/4
P345	V-3-18	1.07	0.70	0.47	不整形	黒土層+環 土層(築瓦)	に灰・黄褐色土①0VR5/3 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒少量含む。	P369	V-3-15	0.35	0.26	0.34	楕円形	土層	黒褐色土①0VR3/2
P346	P3074に 変更							P370	V-3-15	0.46	0.40	0.32	円形	土層	黒褐色土①0VR3/2
P347	V-3-18	1.03	0.84	0.47	不整形	黒土層+環 土層(築瓦) H34+M42.9新	に灰・黄褐色土①0VR4/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒含む。積土。	P371	V-3-16	0.78	0.72	0.56	円形	黒土層 土層+環	黒褐色土①0VR3/2 灰化物多く含む。
P348	V-3-17	1.00	0.59	0.54	不整形		に灰・黄褐色土①0VR4/3 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒含む。積土。	P372	V-3-16	0.68	0.66	0.30	円形	黒土層 土層	黒褐色土①0VR3/2 灰化物多く含む。
P349	V-3-17	0.55	0.50	0.33	円形	黒土層+環 土層(築瓦)	に灰・黄褐色土①0VR4/3 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒含む。積土。	P373	V-3-16	0.87	0.65	0.18	楕円形	黒土層 土層 P405.19新	黒褐色土①0VR3/4 小石多い。
P350	V-3- 14-15	1.16	0.60	0.58	不整形	土層+環 土層 H23+H22.2新	黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒少量含む。	P374	V-3-15-16	0.73	0.63	0.16	楕円形		黒褐色土①0VR3/4 小石多い。
P351	V-3-15	0.87	0.55	0.69	楕円形	土層 H23.19新	黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒少量含む。	P375	V-3-15	0.40	0.35	0.10	不整形		黒褐色土①0VR3/4 小石多い。
P352	V-3-3-17	0.64	0.50	0.17	楕円形	P354.29新	黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒少量含む。	P376	V-3-16	0.47	0.44	0.41	円形	黒土層	黒褐色土①0VR3/4 小石多い。
P353	V-3-17	0.94	0.58	0.30	楕円形	黒土層 P357.29新	黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒少量含む。	P377	V-3-15	0.56	0.45	0.50	楕円形		黒褐色土①0VR3/4 小石多い。
P354	V-3-14	0.80	0.64	0.58	楕円形	土層 H23.19新	黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒少量含む。	P378	V-3-15	0.52	0.44	0.23	円形		黒褐色土①0VR3/2
P355	V-3-16	0.93	0.49	0.39	楕円形	黒土層+環	に灰・黄褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒多く含む。	P379	V-3-15	0.43	0.32	0.40	円形		黒褐色土①0VR3/2
P356	V-3-3- 17-18	0.76	0.58	0.28	楕円形	P358.19新	黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム少量・砂粒含む。	P380	V-3-15	0.62	0.54	0.26	円形		黒褐色土①0VR4/4 しまり強い。
P357	V-3- 17-18	1.80	0.70	0.54	不整形	黒土層+環 土層内環(平 瓦)・築瓦 P353.19新	灰黄褐色土①0VR4/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム少量・砂粒含む。	P381	V-3-17	1.10	0.63	0.34	不整形	黒土層 P404.19新	黒褐色土①0VR3/2 小石多く含む。
P358	V-3- 17-18	0.30	0.32	0.60	不整形	黒土層+環 土層(築瓦) P369.19新	P344・P352・P356.19新 灰黄褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム少量・砂粒含む。	P382	V-3-15	1.31	0.67	0.26	不整形	黒土層 土層	黒褐色土①0VR4/4 小石多い。
P359	P2924に 変更							P383	V-3-15	0.37	0.35	0.30	円形	土層(築瓦)	黒褐色土①0VR4/4 小石多い。
P360	P2924に 変更							P384	V-3-16 15-16	1.20	0.95	0.44	不明	黒土層+環 土層 P409.19新	黒褐色土①0VR4/4 小石多い。
P361	V-3-17	0.68	0.62	0.39	円形	黒土層 土層	黒褐色土①0VR3/4積土・ 灰化物多く含む。特に積土 多く含む。	P385	V-3-16	0.52	0.45	0.31	円形		黒褐色土①0VR3/1
P362	V-3-16	0.60	0.56	0.33	円形	黒土層+環 土層(築瓦)	黒褐色土①0VR3/4積土・ 灰化物多く含む。特に積土多 く含む。	P386	V-3-16	0.76	0.68	0.40	円形	土層	黒褐色土①0VR3/1
P363	V-3-16-17	0.83	0.81	0.48	不整形	黒土層+環 土層	黒褐色土①0VR3/2	P387	V-3-16	0.37	0.32	0.20	円形		黒褐色土①0VR3/1
P364	V-3-16	0.94	0.76	0.46	不整形	黒土層+環 土層内環(平 瓦)	黒褐色土①0VR3/2	P388	V-3-16	0.69	0.59	0.31	円形	P415.19新	黒褐色土①0VR3/1
P365	V-3-16	0.46	0.43	0.33	円形		黒褐色土①0VR3/2	P389	V-3-16	0.37	0.31	0.30	円形	土層	黒褐色土①0VR3/1
P366	V-3-15	0.60	0.53	0.23	円形	黒土層	黒褐色土①0VR3/4 小石多い。	P390	V-3-16	0.92	0.60	0.43	不整形		黒褐色土①0VR3/1
								P391	V-3-16	0.30	0.49	0.41	円形	土層+環	黒褐色土①0VR3/1
								P392	V-3-16	1.17	0.60	0.17	楕円形		黒褐色土①0VR3/1
								P393	V-3-16-17	0.95	0.72	0.48	不整形	黒土層 P322.9新	黒褐色土①0VR3/2 小石多い。
								P394	V-3-16-17	2.32	0.76	0.50	不整形	黒土層+環 土層(築瓦)	黒褐色土①0VR3/2 下層は黄褐色砂。
								P395	V-3-16-17	0.34	0.30	0.36	円形		黒褐色土①0VR3/2 下層は黄褐色砂。
								P396	V-3-16	0.73	0.67	0.56	円形	黒土層+環 土層	黒褐色土①0VR4/4
								P397	V-3-16	0.73	0.52	0.44	不整形	土層	黒褐色土①0VR3/2
								P398	V-3-16	0.75	0.65	0.30	楕円形	土層内環(平 瓦)	黒褐色土①0VR3/2 小石多い。
								P399	V-3-15-18	0.97	0.61	0.40	不明	黒土層+環 P344・P358 29新	黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒少量含む。
								P400	V-3-17	0.71	0.50	0.40	不明	黒土層+環 土層+環 P323.19新	黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒少量含む。
								P401	V-3-17	0.30	0.46	0.43	円形	土層	黒褐色土①0VR3/2 に灰・黄褐色土②0VR7/4 ローム・砂粒少量含む。

第13表 ピット計測表(8)

()推定 < > 残存 単位m

遺構名	出土位置	長径	短径	高さ	形 態	出土遺物 遺構関係	備 考	遺構 名	出土位置	長径	短径	高さ	形 態	出土遺物 遺構関係	備 考	
P402	V-7-F-17	0.54	(0.40)	0.30	不明	土師甕 P19.29古	セリソウ假中に土師あり。	P429	V-7-17	0.30	0.30	0.21	円形		にじみ・黄褐色土(00V8/3) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム・砂粒多量含む。	
P403	V-7-16-17	1.01	0.84	0.49	楕円形	黒褐色土(00V8/1) 土師片・甕 P19.29古	黒褐色土(00V8/1) 粘土粒子多量含む。	P430	V-7-17	0.38	0.33	0.23	円形		にじみ・黄褐色土(00V8/3) 黒褐色土(00V8/2)・にじみ・黄褐色土(00V8/4)ローム少量含む。	
P404	V-7-16-17	1.48	0.96	0.51	不整形	黒褐色土(00V8/3) 土師甕 P28.129古	黒褐色土(00V8/3) 下層に砂多量含む。	P431	V-7-19	0.63	0.42	0.44	楕円形	P432.29古	にじみ・黄褐色土(00V8/3) 黒褐色土(00V8/2)・にじみ・黄褐色土(00V8/4)ローム少量含む。	
P405	V-7-16	1.18	0.57	0.44	不整形	黒褐色土・甕 土師甕(破綻) P27.29古	P27.29古P27.29古	P432	V-7-19	0.68	0.52	0.22	不明	黒褐色土 土師甕	P431.29古 にじみ・黄褐色土(00V8/3)	
P406	V-7-16	0.80	(0.67)	0.21	不明	黒褐色土・甕 土師甕 P27.29古	黒褐色土(00V8/2) 炭化物含む。	P433	V-7-30	0.45	0.42	0.29	楕円形		にじみ・黄褐色土(00V8/2) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム・砂粒含む。	
P407	V-7-16	0.52	(0.49)	0.35	不明	黒褐色土 P28.29古	黒褐色土(00V8/2)	P434	V-7-17	0.60	(0.42)	0.30	不明	P23.29古	黒褐色土(00V8/2) 小石多い。	
P408	V-7-16	1.10	0.82	0.56	楕円形	黒褐色土 P28.29古	黒褐色土(00V8/2) 炭化物含む。	P435	P28P21に変更							
P409	V-7-16-16	(1.67)	0.80	0.56	不明	黒褐色土・甕 土師甕 P14.29古	P14.29古P24.29古 暗褐色土(00V8/4)	P436	V-7-15-16	1.26	0.62	0.57	楕円形	黒褐色土・甕・ 土師甕 P29.29古	黒褐色土(00V8/2) 炭化物多量。	
P410	V-7-16-17	0.50	(0.26)	0.29	不明	土師甕 P23.29古	黒褐色土(00V8/2)	P437	V-7-17	0.56	0.50	0.42	円形	H26.29古	黒褐色土(00V8/2)	
P411	V-7-16	0.41	(0.19)	0.25	不明	P22.29古	黒褐色土(00V8/2)	P438	P28P21に変更							
P412	V-7-16	0.34	0.29	0.29	円形		黒褐色土(00V8/2)	P439	IV-7-17	0.50	0.45	0.22	円形	黒土甕 H30.29古	黒褐色土(00V8/2) 炭化物含む。	
P413	V-7-16	0.56	(0.50)	0.22	不明	P22.29古	黒褐色土(00V8/2)	P440	IV-7-17	0.93	0.60	0.48	楕円形	土師甕 土師甕 H30.29古	暗灰色土(00V8/1)	
P414	V-7-15-16	1.18	0.73	0.39	不明	土師片・甕 土師甕 P23.29古	黒褐色土(00V8/2)	P441	V-7-18	0.54	0.51	0.34	円形	土師内帯片 P19.29古	H20.29古 暗灰色土(00V8/1)	
P415	V-7-16	0.36	0.30	0.23	不明	P28.29古	黒褐色土(00V8/2)	P442	V-7-17	0.47	0.45	0.32	円形	H30.29古	暗灰色土(00V8/1)	
P416	P28P21に変更								P443	V-7-18	0.43	0.29	0.23	円形	H11.29古	暗灰色土(00V8/1)
P417	V-7-16	(0.70)	0.30	0.51	方形	黒褐色土・甕 土師片	P418-P420.29古 黒褐色土(00V8/3) 炭化物多量。	P444	V-7-18	0.32	0.30	0.29	円形		暗灰色土(00V8/1)	
P418	V-7-16	1.01	0.95	0.38	円形	黒褐色土・甕 土師甕 P417.29古	黒褐色土(00V8/3)	P445	V-7-19	2.55	0.75	0.43	不整形	黒褐色土・甕 土師片・甕	黄褐色土(00V8/2) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム少量含む。	
P419	V-7-16	0.61	(0.57)	0.54	不明	黒褐色土・甕 土師甕 P36.29古	黒褐色土(00V8/1) 炭化物多量。	P446	V-7-19	0.42	0.40	0.32	円形	黒土甕 H20.29古	黒褐色土(00V8/2) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム少量含む。	
P420	V-7-16	-	-	0.48	不明	黒褐色土・甕	P20-P417.29古 黒褐色土(00V8/1)	P447	V-7-19	2.23	1.10	0.42	不整形		黒褐色土(00V8/2) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム少量含む。	
P421	V-7-18	0.26	0.35	0.22	円形	黒褐色土 土師片	にじみ・黄褐色土(00V8/3) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム・砂粒含む。	P448	V-7-19	2.50	0.85	0.53	不整形	黒褐色土・甕 土師片	にじみ・黄褐色土(00V8/3) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム多量含む。	
P422	V-7-18	0.56	0.52	0.42	円形	土師片	にじみ・黄褐色土(00V8/3) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム・砂粒含む。	P449	Ⅷ-7-1	0.40	0.33	0.31	円形	黒土甕 P16.29古	にじみ・黄褐色土(00V8/3) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム多量含む。	
P423	V-7-18	0.42	0.30	0.11	楕円形	H24.29古	にじみ・黄褐色土(00V8/3) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム・砂粒含む。	P450	V-7-19	0.30	0.26	0.18	円形		黒褐色土(00V8/2) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム少量含む。	
P424	V-7-18	0.44	0.32	0.18	楕円形		黒褐色土(00V8/2) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム少量含む。	P451	V-7-17	0.48	0.44	0.18	楕円形	土師内帯片 P19.29古	にじみ・黄褐色土(00V8/3) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム多量含む。	
P425	V-7-18	0.22	0.30	0.11	円形		にじみ・黄褐色土(00V8/3) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム少量含む。	P452	V-7-16	0.69	(0.28)	0.25	不明	黒土甕 P46.29古	黒褐色土(00V8/2) 砂粒・ にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム含む。	
P426	V-7-18	0.65	0.52	0.48	楕円形	黒褐色土・甕	黒褐色土(00V8/2) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム少量含む。	P453	P25P21に変更							
P427	V-7-18	0.42	0.31	0.28	楕円形		黒褐色土(00V8/2) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム少量含む。	P454	P25P21に変更							
P428	V-7-17	0.80	0.58	0.42	楕円形	黒褐色土	にじみ・黄褐色土(00V8/3) にじみ・黄褐色土(00V8/4) ローム・砂粒多量含む。	P455	V-7-18	0.68	0.51	0.27	楕円形	土師甕 H8.29古		
								P456	V-7-17	0.68	0.45	0.15	楕円形	H8.29古		
								P457	V-7-18	0.36	0.50	0.36	不整形	H8.29古		
								P458	V-7-17	0.55	0.54	0.48	円形		黒褐色土(00V8/2) 小石多い。	

第14表 ピット計測表(9)

()推定 < > 残存 単位m

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物 遺構関係	備 考	遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物 遺構関係	備 考
P459	V-7-16	0.86	0.43	0.24	円形	黒褐色土(0V93/2)	小石多。	P491	V-7-15-16	0.77	0.71	0.54	円形	黒色土 土師製	黒褐色土(0V93/1) 炭化物少量含む。
P460	V-7-17	0.61	0.46	0.22	楕円形	黒褐色土(0V94/1)		P492	V-7-16	0.47	0.43	0.49	円形		黒褐色土(0V93/1) 炭化物少量含む。
P461	F239に発見							P493	IV-7-16	0.42	0.55	0.16	楕円形		黒褐色土(0V93/1) 小石含む。
P462	V-7-16	0.97	0.85	0.49	方形	黒色土・灰・焼 土師製 F462.29古	に灰・黄褐色土(0V95/2) に灰・黄褐色土(0V92/0) ローム・砂粒多含む。	P494	IV-7-16	0.53	0.41	0.13	不整形		黒褐色土(0V93/0) 小石含む。
P463	V-7-16	0.78	(0.52)	0.52	不明	黒色土 赤土層 F429古	に灰・黄褐色土(0V95/2) に灰・黄褐色土(0V92/0) ローム・砂粒多含む。	P495	IV-7-16	0.95	0.70	0.49	不整形	土師製	黒褐色土(0V93/2)
P464	V-7-17	0.86	(0.33)	0.46	不明	F429古	に灰・黄褐色土(0V95/2) に灰・黄褐色土(0V92/0) ローム・砂粒多含む。	P496	V-7-17	0.92	0.55	0.42	不整形	土師内(古)	黒褐色土(0V93/2)
P465	V-7-17	0.41	0.31	0.13	楕円形		に灰・黄褐色土(0V95/2) に灰・黄褐色土(0V92/0) ローム・砂粒多含む。	P497	V-7-17	0.36	0.32	0.23	円形	土師製	黒褐色土(0V93/1) 小石含む。
P466	F239に発見							P498	V-7-16	0.72	(0.65)	0.58	楕円形		黒褐色土(0V93/2) 炭化物多含む。
P467	V-7-18	0.47	0.39	0.51	楕円形	H21.29新	黒褐色土(0V94/1) 小石多。	P499	V-7-16- 17 IV-7- 16-17	0.92	0.60	0.45	不明	土師製(瓦 含む)	黒褐色土(0V94/1)
P468	V-7-18	0.62	(0.50)	0.43	楕円形	H21.29新	黒褐色土(0V94/1) 小石多。	P500	IV-7-16	1.22	0.70	0.36	不明	黒土層 土師製	黒褐色土(0V93/2)
P469	V-7-16	0.43	0.41	0.49	円形	F462・F462.29 新	黒褐色土(0V93/2)	P501	IV-7-17	0.53	0.44	-	楕円形	土師製 H20.29古	黒褐色土(0V94/1)
P470	IV-7-15	0.48	0.43	0.24	円形	土師製	黒褐色土(0V94/1) 小石多。	P502	IV-7-16- 16-17	1.13	0.71	0.38	不明	黒土層 土師内・変	黒褐色土(0V94/1) 小石多。
P471	IV-7-14-15	0.48	0.42	0.43	円形	土師内黒土 (古)	黒褐色土(0V94/1) 小石多。	P503	IV-7-16	0.66	0.58	0.29	円形	黒土層 土師製	黒褐色土(0V94/1) 小石多。
P472	V-7-17	0.47	0.43	0.49	円形	H20.29新	黒褐色土(0V94/1) 小石多。	P504	V-7-16	0.30	0.27	0.21	円形		黒褐色土(0V94/1) 小石多。
P473	V-7-17	0.41	0.39	0.32	円形		黒褐色土(0V93/2)	P505	V-7-19	0.94	(0.42)	0.43	不明	黒土層 H20・H42.29古	黒褐色土(0V93/2) に灰・黄褐色土(0V97/0) ローム少量含む。
P474	V-7-16- 16-17	0.55	0.49	0.32	楕円形		黒褐色土(0V93/2)	P506	V-7-19	0.74	0.60	0.22	円形	黒色土 土師製 H20.29古	黒褐色土(0V93/2) に灰・黄褐色土(0V97/0) ローム少量含む。
P475	IV-7-1	0.71	(0.50)	0.43	不明	M6.29古	黒褐色土(0V93/2) に灰・黄褐色土(0V92/0) ローム少量含む。	P507	IV-7-17	0.80	0.64	0.42	楕円形	ME・M2.29古	黒褐色土(0V93/2) 小石多。
P476	IV-7-1	(0.66)	0.63	0.42	楕円形	土師製(瓦 含む) M6.29古	黒褐色土(0V93/2) に灰・黄褐色土(0V97/0) ローム少量含む。	P508	IV-7-17	0.63	0.58	0.35	円形	ME・M2.29古	
P477	IV-7-1	(1.30)	0.70	0.44	不整形	黒土層 土師製	に灰・黄褐色土(0V95/2) に灰・黄褐色土(0V92/0) ローム含む。	P509	V-7-20	0.57	0.50	0.26	円形		に灰・黄褐色土(0V95/2) に灰・黄褐色土(0V97/0) ローム・砂粒少量含む。
P478	V-7-17-18 V-7-17	2.06	(0.34)	0.67	不明	黒色土・赤 土師製 H2.29新	黒褐色土(0V93/2) に灰・黄褐色土(0V97/0) ローム・砂粒含む。	P510	V-7-20	0.52	0.50	0.29	円形	黒色土 土師内 黒土(平造) H26.29新	に灰・黄褐色土(0V94/3) 砂粒含む。
P479	V-7-18	0.96	(0.30)	0.40	不明	黒土層 H2.29新	黒褐色土(0V93/2) に灰・黄褐色土(0V97/0) ローム・砂粒含む。	P511	V-7-19	0.94	0.60	0.23	楕円形	黒色土・灰 土師製(瓦 含む)	に灰・黄褐色土(0V95/2) に灰・黄褐色土(0V97/0) ローム・砂粒少量含む。
P480	V-7-18	0.51	0.48	0.29	円形	土師製	黒褐色土(0V93/2) 小石多。	P512	V-7-16	(0.63)	0.56	0.53	不明	F14.29古	
P481	V-7-18	0.43	(0.26)	0.16	不明	土師製	黒褐色土(0V93/2) 小石多。	P513	V-7-15	0.46	(0.44)	0.27	不明	H6・F18.19古	
P482	IV-7-18	0.60	(0.47)	0.38	不明	H20.29古	黒褐色土(0V93/2)	P514	V-7-16-17 V-7-17	0.86	0.83	0.56	円形	F2.29新	
P483	IV-7-18	1.06	0.50	0.25	不整形		黒褐色土(0V93/2)	P515	IV-7-1	1.23	1.16	0.33	楕円形	H27・H28 2.29古	セウロン・磁中に土混れ。
P484	IV-7-17	(0.98)	0.70	0.61	不整形	土師製(瓦 含む) H20.29古	黒褐色土(0V93/2) 小石多。	P516	IV-7-15	0.61	0.57	0.30	円形	M2.29古	
P485	IV-7-17	0.55	0.48	0.40	楕円形		黒褐色土(0V93/2)	P517	V-7-16	0.85	(0.28)	0.36	不明		セウロン・磁中に土混れ。
P486	IV-7-17	0.95	0.58	0.39	楕円形	黒色土・灰 土師内黒土 土師製	黒褐色土(0V93/2)	P518	V-7-15	0.28	0.27	0.14	円形		
P487	IV-7-17	0.65	(0.40)	0.53	不整形	黒色土 ME.29古	黒褐色土(0V93/2)	P519	VI-7-5	0.50	0.44	0.32	円形		暗褐色土(0V93/3) しまりやあり。炭化物含む。
P488	IV-7-17	0.95	0.58	0.12	楕円形		黒褐色土(0V93/2) 炭化物多含む。	P520	VI-7-5	0.36	0.35	0.29	楕円形		暗褐色土(0V93/3) しまりやあり。炭化物含む。
P489	IV-7-16	0.21	0.28	0.24	円形		黒褐色土(0V93/2)	P521	VI-7-1	0.25	0.22	0.24	楕円形		暗褐色土(0V93/3) しまりやあり。炭化物含む。
P490	IV-7-16	0.96	0.52	0.27	楕円形	土師製	黒褐色土(0V93/2)	P522	VI-7-1	0.22	0.19	0.15	楕円形		暗褐色土(0V93/3) しまりやあり。炭化物含む。
								P523	VI-7-2	0.74	0.68	0.30	不明		暗褐色土(0V93/3) しまりやあり。炭化物含む。

第15表 ピット計測表(10)

()推定 < > 残存 単位m

遺構名	出土位置	長さ	幅	高さ	形状	出土遺物 発掘時期	備 考	遺構名	出土位置	長さ	幅	高さ	形状	出土遺物 発掘時期	備 考	
P524	V-1-2	0.43	0.41	0.36	円形	M10,29古	黒褐色土(0)VR2/3 しまりや中あり, 炭化物含む。	P561	V-1-5	0.99	0.81	0.34	不明	黒色土(0)VR4/4 しまりあり, 小石多い。		
P525	V-1-3	0.60	0.48	0.38	楕円形	土師壺 H46,29新	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり, 炭化物含む。	P562	V-1-5	0.93	0.43	0.23	不明	黒色土(0)VR4/4 しまりあり, 小石多い。		
P526	V-1-3	0.30	0.40	0.27	不整形	土師壺(古墳) H46,29新 養生鉢	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり。	P563	V-1-4-5	0.72	0.57	0.45	楕円形	土師壺 H45,29新	黒色土(0)VR2/1	
P527	V-1-2	0.70	0.46	0.27	楕円形	土師壺(古墳)	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり。	P564	V-1-4	0.87	0.76	0.54	円形	黒褐色土(0)VR4/1 しまりあり。		
P528	V-1-2-3	0.70	0.58	0.17	楕円形	不明	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり。	P565	V-1-4-5	0.72	0.33	0.31	不整形	H45,29新	黒褐色土(0)VR4/1 しまり-炭 性強い, 小石多量含む。	
P529	V-1-2	0.94	0.53	0.31	不明	H44,29古	黒褐色土(0)VR2/1 しまりや中あり。	P566	V-1-4	0.34	0.22	0.36	円形	H45,29新	黒褐色土(0)VR4/1 しまり-炭 性強い, 小石多量含む。	
P530	V-1-6	0.30	0.27	0.13	円形	土師内黒坪+ 養生鉢 H46,29新	黒褐色土(0)VR2/1 しまりや中あり。 赤色粘土多い。	P567	V-1-3	0.20	0.40	0.21	楕円形	H42,29新		
P531	V-1-6	0.80	0.76	0.15	楕円形	H44,29新		P568	II-1-13	0.40	0.36	0.29	円形	セクション図中に土塊あり。		
P532	V-1-6	1.36	0.92	0.29	不整形	H44,29新		P569	II-1-13	0.57	0.55	0.37	円形	セクション図中に土塊あり。		
P533	V-1-4	0.90	0.46	0.29	楕円形	M11,29新	黒褐色土(0)VR4/4 しまり-炭性 強い, 小石多量含む。	P570	II-1-13	0.54	0.53	0.27	不明	H42,29古		
P534	V-1-4	0.94	0.58	0.62	不整形	土師坪+壺	黒褐色土(0)VR4/4 しまり-炭性 強い, 小石多量含む。	P571	II-1-13	0.72	0.57	0.32	楕円形	H42,29古		
P535	V-1-2-4	0.60	0.31	0.23	不明	黒色壺 H41,29新	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり。	P572	I-1-11	1.30	0.75	0.36	不明	不明	黒色土(0)VR2/1	
P536	V-1-4	0.34	0.28	0.39	楕円形	H45,29古	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり。	P573	I-1-11	1.20	0.24	0.11	円形	H42,29新	黒色土(0)VR4/4	
P537	II-1-11	0.90	0.40	0.19	不明	土師内黒坪+ 壺	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり, 黄色粘土含む。	P574	I-1-14	0.33	0.36	0.14	円形	H54+H57 上層	黒色土(0)VR4/4	
P538	II-1-11	0.54	0.20	0.16	不明	土師壺	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり, 黄色粘土含む。	P575	I-1-10-11	0.60	0.41	0.11	不明	土師坪+壺	黒色土(0)VR4/4	
P539	II-5-4-11	0.52	0.49	0.25	不整形	不明	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり, 黄色粘土含む。	P576	I-1-11	0.89	0.80	0.57	楕円形	H40,29新	黒色土(0)VR4/4	
P540	II-5-11	0.54	0.53	0.38	円形	不明	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり, 黄色粘土含む。	P577	I-1-14	0.57	0.50	0.33	円形	不明	黒色土(0)VR4/4	
P541	II-5-11	1.55	0.54	0.36	不整形	土師坪(古墳) 養生鉢	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり, 黄色粘土含む。	P578	IV-1-16-17	0.26	0.34	0.32	不明	H47,29新	黒色土(0)VR2/1	
P542	V-1-5	0.62	0.43	0.22	不明	土師坪(古墳)	黒褐色土(0)VR2/1 しまりあり, 黄色粘土含む。	P579	IV-1-16-17	0.60	0.13	0.31	不明	H47,29新	黒色土(0)VR2/1	
P543	V-1-5	0.42	0.18	0.39	不明	H44,29古	黒褐色土(0)VR2/1 しまり-炭性あり。	P580	IV-1-16-17	0.44	0.24	0.28	不明	土師壺	黒色土(0)VR2/1	
P544	V-1-5	0.62	0.34	0.27	不明	土師壺 H44,29古	黒褐色土(0)VR2/1 しまり-炭性あり。	P581	IV-1-15	0.35	0.30	0.30	楕円形	土師壺	黒色土(0)VR2/1	
P545	V-1-7-5	0.25	0.24	0.17	円形	不明	黒色土(0)VR2/1	P582	IV-1-16	0.64	0.51	0.34	楕円形	養生鉢+土師坪 養生	黒色土(0)VR2/1	
P546	V-1-5	0.46	0.43	0.33	円形	土師壺	黒褐色土(0)VR2/1 しまり強い, やや白→黒。	P583	IV-1-16	0.87	0.76	0.42	円形	土師坪+壺 養生	黒色土(0)VR2/1	
P547	V-1-7-5	0.40	0.33	0.17	楕円形	不明	黒褐色土(0)VR2/1 しまり強い, やや白→黒。	P584	IV-1-17	0.46	0.20	0.35	不明	土師壺+養生	黒色土(0)VR2/1	
P548	V-1-5-6	0.33	0.29	0.16	円形	不明	黒褐色土(0)VR2/1 しまり強い, やや白→黒。	P585	IV-1-16	1.04	0.42	0.24	不明	養生鉢 養生	黒色土(0)VR4/4 ローム-粘土多い。	
P549	V-1-6	0.58	0.42	0.34	不整形	不明	黒褐色土(0)VR2/1 しまり強い, やや白→黒。	P586	IV-1-16	0.60	0.43	0.29	不明	養生鉢+壺	黒色土(0)VR4/4 ローム-粘土多い。	
P550	V-1-6	0.36	0.34	0.26	楕円形	不明	黒褐色土(0)VR2/1 しまり強い, やや白→黒。	P587	IV-1-16	1.09	1.00	0.41	円形	土師壺+養生	黒色土(0)VR2/1	

第16表 出土遺物観察表(1)

単位 cm・g

H1	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		調査方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面			
1	葉形器	有台形	15.0	9.2	6.5	コロンナデ	コロンナデ 底部凹部へラケズ	有台形器	IV区	
H2	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		調査方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面			
1	葉形器	蓋	13.0	-	<2.0	コロンナデ	コロンナデ→天井部凹部へラケズ	凹部あり	II区 カラシ ケン	
2	葉形器	有台形	13.0	9.0	3.3	コロンナデ	コロンナデ→底部へラケズ	凹部あり	完全実測	
3	葉形器	有台形	11.4	6.5	4.4	コロンナデ	自然縁付蓋	コロンナデ→蓋有縁付	凹部あり	II区 カラシ ケン
4	葉形器	杯	14.5	7.2	4.2	コロンナデ	丸だすき縁	コロンナデ→底部へラケズ	丸だすき縁	完全実測
5	葉形器	杯	13.3	6.9	3.7	コロンナデ	コロンナデ→前縁へラケズ	底部外縁へラケズ	完全実測	I区3号 II区
6	葉形器	杯	15.0	-	<3.0	コロンナデ	コロンナデ	丸だすき縁	凹部あり	I・IV区
7	葉形器	壺	26.0	-	<9.1	コロンナデ	コロンナデ	コロンナデ	凹部あり	II・IV区 ケン
8	土師器	杯	12.7	7.0	4.5	埴文	七ギキ	七ギキ	凹部あり	II区
9	土師器	杯	-	8.0	<1.0	埴文	七ギキ	七ギキ	凹部あり	II区
10	土師器	杯	14.0	8.0	<3.0	埴文	七ギキ	七ギキ	凹部あり	IV区
11	土師器	鉢	21.0	15.2	8.2	埴文	七ギキ	七ギキ	凹部あり	I・III区
12	土師器	蓋	-	7.0	<3.0	七ギキ	七ギキ	七ギキ	凹部あり	IV区
13	土師器	壺	-	5.6	<6.0	コロンナデ	コロンナデ	コロンナデ	凹部あり	I区
14	土師器	壺	-	4.8	<7.1	へラケズ	へラケズ	へラケズ	凹部あり	I区
15	土師器	壺	20.8	-	<9.2	へラケズ	へラケズ	へラケズ	凹部あり	P1 I・III区
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置	
16	白玉	滑石	1.30	1.25	1.20	3.2	被熱なし。孔径0.25 側面に磨痕 両端面は磨痕なし。		上層	
17	磨り石	輝石安山岩	12.8	11.4	2.2	67.0	被熱なし。正面すり面		IV区	
18	砥石	霞石砂岩	21.5	15.7	6.8	2,99g	被熱なし。正面は細打伏の使用痕顯著 裏面に凹みのある砥面 全面に磨痕あり		I区	
19	磨り石	輝石安山岩	29.0	25.3	7.0	8,66g	被熱なし。正面に磨面 磨痕のこぼ			
20	長円鏡	鉄製品	<14.0	2.0	<0.5	<17.2g	先端欠損 側面 台形面			
21	長円鏡	鉄製品	<13.0	1.4	<0.5	<5.0g	先端・基部欠損 片刃		II区	
22	短円鏡	鉄製品	<7.7	2.4	<0.6	<18.47g	基部欠損		II区 庫裏	
23	刀子	鉄製品	<1.8	<0.8	<0.3	<2.50	刃部欠損		II区	
24	不明	金属製品	<6.5	<0.9	<0.2	<6.51g	両端欠損		II区 中層	
H3	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		調査方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面			
1	土師器	杯	13.2	13.2	<6.0	七ギキ→黒色地埋	ナデ	底部へラケズ	凹部あり	II区
2	土師器	杯	14.0	12.0	<3.8	七ギキ→黒色地埋	ナデ	底部へラケズ	凹部あり	IV区
3	土師器	杯	14.0	11.0	<3.2	七ギキ	ナデ	底部へラケズ	凹部あり	I・III区 1号II区
4	土師器	鉢	16.0	-	<9.0	ナデ→黒色地埋	へラケズ	七ギキ	凹部あり	II・IV区
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置	
5	白玉	滑石	1.25	1.20	0.50	1.36	被熱なし。孔径0.25 側面に磨痕あり 上下端面は磨痕なし。		IV区	
6	砥石製品	白色輝石	12.0	11.0	4.2	27.0	被熱なし			
7	磨り石	輝石安山岩	46.2	23.4	7.6	12,69g	被熱あり 正面にすり面 磨痕あり 裏面中央の割痕は被熱割れか?		カッ?	
H4	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		調査方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面			
1	葉形器	蓋	13.1	-	<6.0	コロンナデ	コロンナデ 底部あり	コロンナデ 天井部凹部へラケズ	凹部あり	完全実測
2	土師器	杯	12.8	11.7	4.7	ナデ	口縁部コロンナデ→底部へラケズ	口縁部コロンナデ→底部へラケズ	凹部あり	完全実測
3	土師器	杯	13.0	11.0	<4.0	七ギキ	七ギキ	七ギキ	凹部あり	I・II・III区
4	土師器	杯	12.9	11.8	5.3	七ギキ	七ギキ	七ギキ	凹部あり	完全実測
5	土師器	杯	14.0	11.0	4.5	七ギキ	七ギキ	七ギキ	凹部あり	完全実測
6	土師器	杯	14.0	8.0	3.0	七ギキ	七ギキ	七ギキ	凹部あり	I区 H18II区
7	土師器	杯	13.2	5.9	3.9	七ギキ→黒色地埋	へラケズ	へラケズ	凹部あり	完全実測
8	土師器	壺	24.0	8.0	24.0	七ギキ→黒色地埋	へラケズ	七ギキ	凹部あり	II区 H5 I・II・III区
9	土師器	壺	21.0	-	<10.0	ハケ目	ハケ目	へラケズ	凹部あり	完全実測
10	土師器	壺	19.0	-	<6.5	七ギキ	七ギキ	七ギキ	凹部あり	II区
11	土師器	壺	17.4	6.5	17.3	へラケズ	へラケズ	へラケズ	凹部あり	完全実測
12	土師器	壺	15.2	8.5	14.9	へラケズ	へラケズ	へラケズ	凹部あり	完全実測
13	土師器	壺	24.2	7.9	24.6	七ギキ	七ギキ	七ギキ	凹部あり	完全実測
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置	
14	碧玉	白色輝石	<16.4	<8.4	<0.2	<280.0	被熱なし。直径10.0 長さ13.7 約1/2の欠		II区	
15	磨り石	輝石安山岩	7.4	4.9	1.7	81.69	被熱なし。全体にすり 磨痕あり		II区	
16	礎	鉄製品	3.0	3.2	0.7	17.72			I区	
17	不明	鉄製品	<9.7	<1.3	<0.2	<9.40	上部欠損 溝面にこぼ		II区	

第17表 出土遺物観察表(2)

単位 cm・g

H5	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様 ・ 備 考		実測方法	出土位置		
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面				
1	土師器	蓋	-	-	(1.1)	コクロナデ	大井部凹輪ヘラケツグ→底面付	完全実測			
2	土師器	甕	02.0	-	(4.2)	コクロナデ	自然輪付着	コクロナデ	自然輪付着	判別実測	I IC
3	土師器	甕	06.0	-	(4.0)	七ヶキ→黒色地埋	七ヶキ→黒色地埋	七ヶキ	黒色地埋	判別実測	I IC
4	土師器	高杯	07.0	-	(6.2)	七ヶキ→黒色地埋	七ヶキ	七ヶキ	黒色地埋	判別実測	I・IV IC H1B IC
5	土師器	高杯	-	(11.0)	(8.8)	ヘラナデ	ヘラナデ	七ヶキ	七ヶキ	完全実測	I IC H1B IC
6	土師器	鉢	03.0	-	(11.2)	ナデ	ナデ	ヘラケツグ	ヘラケツグ	判別実測	I・IV IC D2
7	土師器	鉢	07.0	04.0	8.0	ナデ	ナデ	ヘラケツグ	ヘラケツグ	判別実測	I・IV IC
8	土師器	甕	16.4	8.4	14.7	七ヶキ	縦文状の七ヶキ	ヘラケツグ	ヘラケツグ	完全実測	H1B IC
9	土師器	甕	15.6	9.4	17.0	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケツグ	ヘラケツグ	完全実測	
10	土師器	甕	15.2	-	(12.0)	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケツグ	ヘラケツグ	完全実測	
11	土師器	甕	13.3	7.4	12.9	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケツグ	ヘラケツグ	完全実測	II・IV IC
12	土師器	甕	15.2	8.0	14.2	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケツグ→ヘラナデ	ヘラケツグ	完全実測	I・II・IV IC IV1C9 F4
13	土師器	甕	22.8	-	(26.0)	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケツグ	ヘラケツグ	完全実測	カマツ H1B IC D6
14	土師器	甕	22.9	6.4	26.5	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケツグ	底部に木葉文	完全実測	
15	土師器	甕	21.8	-	(20.7)	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケツグ	ヘラケツグ	完全実測	I・II・IV IC F4 H1B IC
16	土師器	甕	13.7	6.6	13.8	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケツグ	ヘラケツグ	完全実測	II・III・IV IC
17	土師器	底	14.8	8.0	9.3	ナデ→黒色地埋	ナデ	黒色地埋	黒色地埋	完全実測	H1B IC
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考		出土位置		
18	磁石	花崗岩	5.8	5.5	2.2	86.59	縦横なし。正面に縦打痕				
19	磁石	輝石安山岩	10.3	4.1	3.8	219.6	縦横なし。下端面に縦打痕		I IC		
20	磨り石	輝石安山岩	(7.2)	(5.8)	(3.0)	(16.8)	縦横なし。左側欠損。正面にすり面		I IC		
21	白玉未製品	滑石	2.5	2.0	0.7	4.55	縦横なし。孔径6.2。中央に穿孔。下部に磨痕。切り取り痕あり?				
22	石鏝	チャート	2.2	1.3	0.25	1.13	縦横なし。		I IC		
H6	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様 ・ 備 考		実測方法	出土位置		
口径(長)			底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面					
1	土師器	杯	04.0	05.0	4.4	コクロナデ	コクロナデ→底部に凹輪あり	器蓋あり	判別実測	カマツ	
2	土師器	杯	05.0	-	(3.5)	コクロナデ	黒染あり	コクロナデ	器蓋あり	判別実測	カマツホリ
3	土師器	杯	-	-	(1.1)	コクロナデ	コクロナデ	器蓋あり	磁片実測	II IC	
4	土師器	杯	13.6	5.3	4.4	コクロナデ	黒染あり	コクロナデ→底部に凹輪あり	コクロナデ	完全実測	F2
5	土師器	杯	03.0	5.1	4.9	コクロナデ	黒染あり	コクロナデ→底部に凹輪あり	黒染あり	完全実測	I IC
6	土師器	杯	03.7	6.9	3.0	コクロナデ	黒染あり	コクロナデ→底部に凹輪あり	コクロナデ	完全実測	II・IV IC
7	土師器	短輪甕	04.0	-	(7.2)	コクロナデ	コクロナデ	コクロナデ	コクロナデ	判別実測	II IC カマツ
8	土師器	杯	12.8	5.6	4.8	コクロナデ	コクロナデ→底部に凹輪あり	コクロナデ	コクロナデ	完全実測	II・III IC
9	土師器	杯	13.2	7.3	3.2	コクロナデ→七ヶキ	コクロナデ→底部に凹輪あり	器蓋あり	コクロナデ	完全実測	
10	土師器	杯	03.0	-	(3.0)	七ヶキ→黒色地埋	コクロナデ	器蓋あり	コクロナデ	判別実測	II IC
11	土師器	杯	-	-	(3.2)	七ヶキ→黒色地埋	コクロナデ	器蓋あり	コクロナデ	磁片実測	IV IC 庫
12	土師器	杯	-	-	-	七ヶキ→黒色地埋	コクロナデ	器蓋あり	コクロナデ	磁片実測	II IC
13	土師器	杯	-	-	-	七ヶキ→黒色地埋	コクロナデ	器蓋あり	コクロナデ	磁片実測	III IC
14	土師器	杯	-	-	-	七ヶキ→黒色地埋	コクロナデ	器蓋あり	コクロナデ	磁片実測	I IC
15	土師器	杯	-	-	-	七ヶキ→黒色地埋	コクロナデ	器蓋あり	コクロナデ	磁片実測	カマツ
16	土師器	杯	12.8	4.8	4.2	七ヶキ→黒色地埋	コクロナデ→底部に凹輪あり	コクロナデ	コクロナデ	完全実測	
17	土師器	杯	12.5	6.3	3.8	縦文→黒色地埋	コクロナデ→底部に凹輪あり	コクロナデ	コクロナデ	完全実測	
18	土師器	杯	06.2	8.1	6.0	七ヶキ→黒色地埋	コクロナデ→底部に凹輪あり	コクロナデ	コクロナデ	完全実測	カマツ カマツホリ
19	土師器	鉢	05.7	-	(5.1)	七ヶキ→黒色地埋	コクロナデ→底部に凹輪あり	黒色地埋	黒色地埋	完全実測	カマツ
20	土師器	甕	04.7	8.0	14.5	コクロナデ	コクロナデ→底部に凹輪あり	底面外周にすり面	コクロナデ	判別実測	I・IV IC カマツ 庫
21	土師器	甕	-	-	(19.7)	黒染ヘラナデ	黒染ヘラケツグ→口縁コナデ	黒染ヘラケツグ	黒染ヘラケツグ	完全実測	I・III IC カマツ 庫
22	土師器	甕	-	4.3	(12.4)	黒染ヘラケツグ	黒染ヘラケツグ	黒染ヘラケツグ	黒染ヘラケツグ	完全実測	II・IV IC カマツホリ 庫
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考		出土位置		
23	磁石	輝石安山岩	12.9	11.3	4.2	805.9	縦横なし。縦横に縦打痕		I IC		
24	磁石	石英安山岩	11.0	10.9	3.7	605.0	縦横なし。下部の両面に縦打痕		I IC		
25	磁石	輝石安山岩	12.7	5.6	4.1	326.76	縦横なし。上部・左側・正面に縦打痕		I IC		
26	磁石	輝石安山岩	(11.6)	(8.2)	(4.7)	(665.0)	縦横なし。下部欠損。右側に縦打痕		II IC		
27	磨り石	石英安山岩	8.4	7.7	2.1	218.3	縦横なし。正・背面にすり面		II IC		
28	磨り石	石英安山岩	7.3	5.8	2.3	188.05	縦横なし。正・背面にすり面		IV IC		
29	柱状棒の軸	鉄製品	(25.0)	(0.7)	(0.5)	(26.81)	上部欠損。上部の丸形				
30	馬具?	鉄製品	(4.7)	(4.0)	(2.2)	(61.61)	右→下部欠損		IV IC 庫		
31	古銭	銅製品	2.3	2.3	0.2	3.52	?富壽神寶(元暦 818年(平治))				

第18表 出土遺物観察表(3)

単位 cm・g

H7	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面		
1	土師器	杯	11.2	10.4	5.5	シガキ	シガキ	回転実測	
2	土師器	杯	13.6	11.6	5.5	シガキ→黒色地埋	コナナデ→ヘラケツ	回転実測	1・B・IV区
3	土師器	杯	12.8	-	4.6	シガキ	コナナデ→シガキ 直器→ヘラケツ	完全実測	
4	土師器	杯	14.0	12.4	3.9	コナナデ ナデ	コナナデ→ヘラケツ	回転実測	
5	土師器	杯	12.5	10.7	4.6	シガキ	コナナデ→ヘラケツ	完全実測	1区
6	土師器	杯	13.4	11.4	4.4	シガキ	コナナデ→ヘラケツ	回転実測	Ⅱ区
7	土師器	杯	14.2	11.9	4.8	縄文	コナナデ→ヘラケツ	完全実測	1区
8	土師器	杯	14.0	11.0	4.7	ナデ	コナナデ→ヘラケツ	回転実測	P6
9	土師器	杯	14.0	13.0	4.8	シガキ	コナナデ→ヘラケツ	回転実測	P6
10	土師器	壺	26.0	9.0	20.6	山縁部にヘケ目 →ヘラケツ→シガキ	ヘケ目→ヘラケツ→シガキ 底部に本葉模	完全実測	1・Ⅱ区
11	土師器	壺	17.4	16.3	27.2	ヘケ目	シガキ	完全実測	IV区 V区Ⅱ P4
12	土師器	壺	16.5	-	<21.9>	→ヘラケツ	→ヘラケツ	完全実測	
13	土師器	壺	15.4	7.0	15.3	→ヘラケツ	→ヘラケツ	完全実測	ⅡIC区 IV区
14	土師器	壺	20.6	6.0	35.0	→ヘラケツ	→ヘラケツ	完全実測	ⅡIC区 ⅡIC区
15	土師器	壺	21.7	6.0	35.6	ヘケ目	→ヘラケツ	完全実測	Ⅱ・ⅡIC区
16	土師器	瓶	18.4	16.2	11.0	ヘケ目	→ヘラケツ 底部に本葉模 貫孔	回転実測	
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考	出 土 位 置	
17	ガラス小玉	ガラス製品	6.8	0.7	6.45	0.54	孔径0.2～0.25 転ガラス	ⅡIC区	
18	磁石	黒磁石	3.5	3.2	3.0	30.38	被熱なし 削れた面(4)面	ⅡIC区	
19	刀子	鉄製品	(4.5)	(1.3)	(0.5)	(4.4)	両端欠損 木質残存	ⅢIC区	
20	不明	鉄製品	(4.1)	(2.4)	(0.2)	(0.27)	下部欠損 両側に削り面加工	ⅡIC区	
H8	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面		
1	黒土器	蓋	18.6	-	4.0	コナナデ	コナナデ→天井部回転→ヘラケツ	回転実測	1・ⅡIC区
2	黒土器	杯	14.0	12.1	4.6	コナナデ 火打すき模	コナナデ 底部に転→外側及び縁部下部回転→ヘラケツ 火打すき模	回転実測	IV区
3	黒土器	杯	14.2	12.0	3.9	コナナデ	コナナデ	回転実測	1区 P 478
4	土師器	杯	12.8	10.6	4.2	ナデ	山縁コナナデ 底部→ヘラケツ	回転実測	Ⅱ・ⅡIC区
5	土師器	杯	13.0	12.0	3.7	シガキ	山縁コナナデ 底部→ヘラケツ	回転実測	1区
6	土師器	杯	13.4	12.2	4.2	→ヘラケツ	山縁コナナデ 底部→ヘラケツ	回転実測	1区 ホリ
7	土師器	杯	13.0	11.0	3.9	シガキ 縄文→黒色地埋	山縁コナナデ 底部→ヘラケツ	回転実測	ⅡIC区
8	土師器	杯	14.0	11.0	3.9	縄文	山縁コナナデ 底部→ヘラケツ	回転実測	カケ
9	土師器	杯	13.4	11.8	4.4	縄文	山縁コナナデ 底部→ヘラケツ	回転実測	カケ
10	土師器	壺	22.0	-	<21.8>	→ヘラケツ	→ヘラケツ	完全実測	1区
11	土師器	壺	20.9	-	<20.3>	→ヘラケツ	→ヘラケツ	完全実測	1区
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考	出 土 位 置	
12	磁石	黒色多孔質安山岩	(15.7)	(8.3)	(3.8)	(395.0)	被熱なし 下部欠損 縦面(4) 正面と右側に条痕	IV区	
13	磁石	磁石岩	(5.6)	(3.7)	(2.5)	(84.8)	被熱なし 下部欠損 縦面(4) 右側角状の条痕		
14	磁石	花崗岩	(9.2)	(4.4)	(4.5)	(143.0)	被熱なし 上部欠損 下部部に縦行痕		
15	磁石	花崗岩	16.2	6.3	4.4	335.0	被熱なし 正面に割線痕		
16	磨り石	黒色多孔質安山岩	4.0	3.7	2.8	29.17	被熱なし 全体にすり	ケン	
17	磨り石	安山岩	12.6	6.2	4.0	430.0	被熱なし 両側にすり面		
18	磨り石	角閃石安山岩	15.3	7.7	5.8	780.0	被熱なし 正面(2)面と左側にすり面		
19	磨り石	多孔質安山岩	9.4	6.3	5.0	250.0	被熱なし 正・裏面にすり面		
20	磨物石	紫輝輝石安山岩	9.4	7.0	4.7	265.0	被熱なし		
21	磨物石	石英安山岩	9.3	7.2	4.2	290.0	被熱なし		
22	磨物石	安山岩	11.8	7.2	3.3	350.0	被熱なし 右側に下部部に割線痕		
23	磨物石	輝石安山岩	8.6	6.7	4.5	265.0	被熱なし		
24	磨物石	輝石安山岩	16.8	5.5	4.4	290.0	被熱なし		
25	磨物石	輝石安山岩	11.2	6.5	4.0	390.0	被熱なし		
26	磨物石	角閃石安山岩	11.2	7.5	2.6	265.0	被熱なし 上部部に割線痕		
27	磨物石	石英安山岩	16.1	6.7	3.6	335.0	被熱なし		
28	磨物石	輝石安山岩	11.8	8.3	3.3	275.0	被熱なし 2面に割線痕		
29	鉄器	鉄製品	27.8	1.7	0.7	43.93	孔径0.3		
H9	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面		
1	黒土器	蓋	(5.7)	-	3.0	コナナデ 自然磨り付	コナナデ→天井部回転→ヘラケツ→つまみこみ取り磨付 自然磨り付	完全実測	IV区
2	黒土器	杯	(4.3)	12.1	4.6	コナナデ 火打すき模	コナナデ→底器部回転→ヘラケツ 火打すき模	回転実測	1・ⅡIC区
3	黒土器	杯	-	6.5)	(3.0)	コナナデ 火打すき模	コナナデ→底器部回転→ヘラケツ 火打すき模	回転実測	1区 ケン

第19表 出土遺物観察表(4)

単位 cm・g

H9	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考			実測方法	出土位置
			口徑(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面		
						最大長	最大幅			
4	葉形器	葉	(33.2)	-	(17.1)	ロクロナデ 片で片断	ロクロナデ 片で片断あり	回転実測	Ⅱ区 ケン	
5	土師器	蓋	(20.0)	-	(7.0)	横割ヘラナデ	横割ヘラナデ	回転実測	カマツ	
6	土師器	葉	8.0	7.6	16.2	横割ヘラナデ 器底ロクロナデ	横割ヘラナデ 器底ヘラナデ→横割ロクロナデ	完全実測	カマツ	
7	土師器	葉	-	-	(5.3)	ヘラナデ	ヘラナデ→ロクロナデ ナデ	完全実測	Ⅰ区 カマツ	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置	
8	磨り石	輝石安山岩	(12.2)	(6.0)	(2.8)	(31.6)	被熱なし 左側欠損 3箇所にすり面 上面と正面に磨り痕		Ⅱ区	
9	白石	輝石安山岩	36.4	32.4	7.2	15.5g	被熱なし 正面に使用面 すりと磨り痕あり			
10	短頸鉄鍋	鉄製品	6.0	1.9	6.7	6.8g				
11	不明	鉄製品	(7.5)	(2.0)	(0.2)	(10.97)	下部欠損		Ⅰ区	
H10	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考			実測方法	出土位置
			口徑(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面		
						最大長	最大幅			
1	葉形器	蓋	(3.6)	-	2.8	ロクロナデ 火だすき板	ロクロナデ 天井部回転ヘラナデ 火だすき板	回転実測	ケン	
2	葉形器	蓋	-	-	(2.5)	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部回転ヘラナデ	完全実測	ケン	
3	葉形器	有台杯	-	8.2	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラナデ→有台板付	完全実測	ケン V/F60c	
4	土師器	杯	12.5	12.1	4.9	ヒゲキ→黒色処理	口縁ロクロナデ 器底ヘラナデ→ヒゲキ	完全実測	Ⅰ区	
5	土師器	杯	13.1	11.4	4.6	ヒゲキ	口縁ロクロナデ 器底ヘラナデ	完全実測	Ⅰ区	
6	土師器	杯	13.3	10.5	6.1	ヒゲキ	口縁ロクロナデ→ヒゲキ 器底ヘラナデ→ヒゲキ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区	
7	土師器	杯	-	-	-	ヒゲキ→黒色処理	底部回転糸切刃 蓋痕	破片実測	Ⅰ区	
8	土師器	杯	12.0	10.7	4.2	ヒゲキ	口縁ロクロナデ 器底ヘラナデ	完全実測	Ⅰ区	
9	土師器	葉	22.0	-	(9.8)	ヘラナデ ヒゲキ	ハケ目	完全実測	Ⅰ区	
10	土師器	葉	14.8	-	(10.3)	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測	Ⅰ区	
11	土師器	葉	-	8.6	(17.2)	ハケ目	ハケ目	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区	
12	土師器	葉	(20.0)	-	(7.6)	ハケ目	ハケ目→ヘラナデ	回転実測	Ⅰ区	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置	
13	白玉	滑石	(1.0)	(0.75)	(0.80)	(1.32)	被熱なし 孔径0.300 正面にも磨痕あり 約1/2残存		Ⅱ区	
14	砥石	凝灰岩	(10.2)	(2.7)	(2.8)	(100.0)	被熱なし 上部欠損 砥面粗 正面・左側・下部に表痕			
15	磨り石	輝石安山岩	23.0	21.5	7.0	5.5g	被熱なし 正面の一面にすり面			
H11	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考			実測方法	出土位置
			口徑(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面		
						最大長	最大幅			
1	土師器	杯	(14.1)	12.2	4.9	ヒゲキ 緑文	口縁ロクロナデ→器底ヘラナデ→ヒゲキ	完全実測	Ⅱ区	
2	土師器	葉	(20.0)	-	(11.8)	口縁ヒゲキ→横割ヘラナデ	横割ヘラナデ→ヒゲキ	回転実測	Ⅰ・Ⅱ区	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置	
3	磨り石	赤褐色チャート	1.6	1.5	0.7	2.87	被熱なし 全体にすり		Ⅱ区	
4	磨り石	輝石安山岩	12.1	6.1	3.4	200.0	被熱なし 正面にすり面		Ⅱ区	
H13	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考			実測方法	出土位置
			口徑(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面		
						最大長	最大幅			
1	土師器	杯	-	(11.0)	(3.8)	ロクロナデ→ヒゲキ→黒色処理	ロクロナデ→ヒゲキ→黒色処理	回転実測	Ⅰ区	
2	土師器	葉	(20.0)	-	(8.5)	横割ヘラナデ→ヒゲキ	横割ヘラナデ→ヒゲキ	回転実測	Ⅰ区	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置	
3	磨り石	結晶質石灰岩	6.9	4.5	2.8	110.0	被熱なし		Ⅱ区	
4	磨り石	輝石安山岩	9.9	5.0	2.7	240.0	被熱なし 正面にすり面 上下端部磨り痕		Ⅰ区	
5	打割石斧	輝石安山岩	15.7	7.5	2.0	330.0	被熱なし 両側に割痕あり 未製成のみ		Ⅳ区	
6	砥石	黒色多孔質安山岩	14.2	10.4	6.8	710.0	被熱なし 前後5.0×6.0 両面7.2 正面に目		Ⅰ区	
H14	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考			実測方法	出土位置
			口徑(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面		
						最大長	最大幅			
1	葉形器	蓋	-	-	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部回転ヘラナデ→つまみ足付	完全実測		
2	葉形器	蓋	14.2	6.6	3.7	ロクロナデ 火だすき板	ロクロナデ→器底有回転糸切刃 火だすき板	完全実測		
3	葉形器	杯	(3.0)	5.2	3.4	ロクロナデ 火だすき板	ロクロナデ→器底有回転糸切刃 火だすき板	完全実測		
4	葉形器	杯	-	6.8)	(2.1)	ロクロナデ 火だすき板	ロクロナデ→器底有回転糸切刃 火だすき板	回転実測		
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置	
5	防凍車	滑石	5.2	4.2	1.4	62.45	被熱なし 孔径0.8 正面の孔周辺に磨痕の跡			
6	刀子	鉄製品	(17)	(12.4)	(1.6)	(0.4)	(18.25)	基部欠損 基部に本質残存		
			(3.0)	(0.7)	(0.3)	(1.76)				
H15	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考			実測方法	出土位置
			口徑(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面		
						最大長	最大幅			
1	葉形器	蓋	(16.0)	-	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部回転ヘラナデ 自然剥離付	回転実測	中1	
2	土師器	杯	(14.0)	7.2	5.1	ヒゲキ→黒色処理	ヒゲキ	完全実測	Ⅰ区 カマツ	
3	土師器	葉	(22.0)	-	(10.5)	横割ヘラナデ	横割ヘラナデ	回転実測	Ⅱ区 V/F90c	

第20表 出土遺物観察表(5)

単位 cm・g

H06	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		調査方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	葉志器	杯	14.7	8.5	3.7	コワナデ	コワナデ-底部す持ちヘラケズリ	完全実施	
2	葉志器	杯	04.0	07.0	4.7	コワナデ 火だす木櫃	コワナデ-底部す持ちヘラケズリ 火だす木櫃	回転実施	
3	葉志器	甕	-	10.0	4.0	ヘラナデ	底部内周す持ちヘラケズリ-平行タタキ目	回転実施	
4	葉志器	甕	04.0	-	23.4	当て具載ヘラナデ	平行タタキ目	回転実施	
5	葉志器	焼瓶	-	-	-	ヘラナデ	平行タタキ目	破片実施	
6	土師器	甕	-	-	23.3	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実施	
H07	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		調査方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	葉志器	蓋	-	-	03.6	コワナデ 自然輪付着	コワナデ-大井部回転ヘラケズリ-つまみ取付	完全実施	
2	葉志器	杯-鉢?	10.0	-	06.0	コワナデ	コワナデ 口縁上部に沈線あり	回転実施	B-IV区 D34 表層
3	葉志器	杯	14.0	7.1	3.9	コワナデ 火だす木櫃	コワナデ-底部右回転木取付 火だす木櫃	完全実施	
4	葉志器	杯	03.2	7.7	3.9	コワナデ 火だす木櫃	コワナデ-底部右回転木取付 火だす木櫃	完全実施	
5	葉志器	杯	03.2	06.0	03.0	コワナデ	コワナデ-底部回転ヘラケズリ	回転実施	1区B区 D34
6	葉志器	蓋	-	06.0	09.3	コワナデ	コワナデ-底部部取離し→ 胴す平部から底部部回転ヘラケズリ-蓋台取付	回転実施	B-IV区
7	葉志器	蓋	-	06.0	02.7	コワナデ 自然輪付着	コワナデ-底部部取離し→蓋台付 自然輪付着	完全実施	1区 V列30g
8	土師器	杯	05.0	09.0	6.4	コワナデ-増文	口縁コワナデ→体部と底部ヘラケズリ	回転実施	B-IV区 F7-F1+P3 P35 V#14G
9	土師器	甕	00.0	-	13.4	回転ヘラナデ	胴部ヘラケズリ	回転実施	B区 V列30g
10	土師器	甕	09.0	-	06.0	回転ヘラナデ	胴部ヘラケズリ	回転実施	B区 V列30g
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
11	壺石	板板石	6.4	4.8	1.2	65.96	天然なし 全体にすり		B区
12	下土舍利	数製品	03.0	03.1	00.6	0.903	毎部3個出土 欠損		
H08	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		調査方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	土師器	杯	12.9	8.7	2.8	シガキ	口縁シガキ 底部ヘラケズリ	完全実施	B区
2	土師器	杯	03.0	02.1	4.2	シガキ	口縁コワナデ 底部ヘラナデ	完全実施	
3	土師器	杯	02.0	01.0	05.0	シガキ	口縁シガキ 底部取落	回転実施	B区
4	土師器	杯	02.0	01.0	4.1	シガキ	ヘラケズリ→シガキ	回転実施	B区 V区100g
5	土師器	杯	12.5	11.6	3.7	シガキ	口縁コワナデ 底部ヘラケズリ	完全実施	
6	土師器	杯	12.4	10.7	3.9	増文	口縁コワナデ 底部ヘラケズリ	完全実施	B区
7	土師器	高杯	17.7	12.2	15.1	片部1つあり-黒色焦層 胴部ヘラナデ→コワナデ	ヘラケズリ→シガキ	完全実施	IV区
8	土師器	高杯	-	02.0	09.3	片部1つあり 胴部ヘラケズリ→コワナデ	ヘラケズリ→シガキ	完全実施	
9	土師器	鉢	00.0	0.5	09.4	シガキ	ヘラケズリ	完全実施	1・B区
10	土師器	蓋	-	10.4	05.4	ヘラナデ	ヘラケズリ→シガキ	完全実施	B区
11	土師器	甕	04.0	-	08.1	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実施	B区
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
12	円蓋	土製品	3.5	3.7	0.7	12.03	土器片 内外面シガキ		IV区
13	煎り-磁石	角筒石笠山前	11.0	7.5	4.9	020.0	被熱あり 上部欠損 正面黒化 正面にすり面 下部部に磁行痕		B区
14	煎り-磁石	石笠山山前	12.9	8.3	3.5	205.0	被熱なし 正面・左側にすり面 下部部に磁行痕		クワツ
15	煎り-磁石	硬質砂岩	12.7	8.0	2.7	200.0	被熱なし 左側に下部部に磁行痕 上部に正翼にすり面		B区
16	磁石	斑紋岩	8.1	5.0	3.6	240.0	被熱なし 底面黒化 4つ穴に磨痕あり		P2
17	磁石	黒色多孔質斑紋岩	37.3	17.7	15.2	730g	被熱なし 底面黒化 2個以上全角あり		
18	磁石	斑石笠山山前	13.2	8.0	4.7	375.0	被熱なし 上下両面に右側に磁行痕		B区
19	磁石	斑石笠山山前	17.7	12.0	4.7	1,240g	被熱なし 周縁に磁行痕		B区
20	石鏡	黒曜石	02.7	01.7	00.25	0.04	被熱なし 片部・表面欠損		1区
21	石鏡	黒曜石	2.2	1.6	0.35	0.97	被熱なし		B区
22	刀子	数製品	08.6	01.3	00.3	0.25	表面欠損		
23	土舍利	数製品	2.9	3.0	0.7	10.89	形状の異なる5個 表面に貫通孔		
24	不明	銅製品	00.85	01.0	00.1	00.70	表面欠損あり 若干のたまりあり		
H09	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		調査方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	葉志器	杯	13.0	6.7	3.9	コワナデ 火だす木櫃	コワナデ-底部回転木取付 火だす木櫃	完全実施	
2	葉志器	蓋	-	-	10.0	コワナデ	コワナデ-胴す平部回転ヘラケズリ 肩面沈線あり 自然輪付着	回転実施	1・B区 VE7130g
3	葉志器	甕	-	-	23.0	当て具載	タタキ目 自然輪付着	回転実施	1・B区 ME-7 VE7130g
4	葉志器	甕	07.0	-	10.0	コワナデ	輪縁波状文	破片実施	1・B-IV区
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
5	鉢	数製品	12.2	2.0	0.2	10.00	両面に2孔		
6	長頸瓶	数製品	06.3	01.1	00.35	05.30	方部・頸部欠損 片方		

第21表 出土遺物観察表(6)

単位 cm・g

H20	種別	器種	量 量			成形・調整・文様・備考		調査方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面		
1	甌形器	蓋	14.8	-	4.7	コ罗纳デ 火だすき類 自然輪付蓋	コ罗纳デ→天部系右回り・折縁ヘラケツリ→ つまみ金 蓋付 火だすき類	完全実態	Ⅱ区
2	甌形器	蓋	13.4	-	3.6	コ罗纳デ 火だすき類 ヘラ記号あり(後成前)	コ罗纳デ→天部系右回り・折縁ヘラケツリ→ つまみ金 蓋付 火だすき類	完全実態	Ⅰ区 Ⅰ区ホリ
3	甌形器	蓋	12.6	-	3.4	コ罗纳デ 自然輪付蓋 転用縁	コ罗纳デ→天部系右回り・折縁ヘラケツリ→ つまみ金 蓋付	完全実態	Ⅰ区 カマド
4	甌形器	蓋	13.6	-	2.9	コ罗纳デ 転用縁 蓋のみ 蓋付	コ罗纳デ→つまみ金 蓋付 自然輪付蓋	判断実態	Ⅱ区
5	甌形器	蓋	13.4	-	3.5	コ罗纳デ 自然輪付蓋 転用縁	コ罗纳デ→つまみ金 蓋付	判断実態	Ⅱ区
7	甌形器	有台坪	14.8	8.3	3.8	コ罗纳デ 自然輪付蓋	コ罗纳デ→底縁糸切り→高台付付 自然輪付蓋	完全実態	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区 カマド
8	甌形器	有台坪	-	7.6	2.7	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁糸切り→高台付付	完全実態	Ⅳ区
9	甌形器	有台坪	12.7	6.6	3.1	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁糸切り→高台付付	判断実態	Ⅰ・Ⅱ区 ケン
10	甌形器	有台坪	-	9.2	1.4	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁折縁ヘラケツリ→折縁ヘラケツリ→高台付付	完全実態	Ⅱ区
10	甌形器	有台坪	-	8.2	2.2	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁糸切り→高台付付	完全実態	Ⅱ区
11	甌形器	有台坪	-	9.4	1.4	コ罗纳デ 火だすき類	コ罗纳デ→底縁糸切り→折縁ヘラケツリ→ 高台付付 火だすき類	完全実態	Ⅲ区
12	甌形器	有台坪	-	-	1.1	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁糸切り→折縁ヘラケツリ	判断実態	Ⅳ区
13	甌形器	坪	13.7	6.3	3.3	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り 火だすき類	判断実態	Ⅱ区
14	甌形器	坪	13.8	7.2	3.5	コ罗纳デ 火だすき類	コ罗纳デ→底縁糸切り→折縁ヘラケツリ 火だすき類	完全実態	Ⅱ区 Ⅱ区ホリ
15	甌形器	坪	13.5	6.2	4.1	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り	完全実態	Ⅰ区
16	甌形器	坪	13.2	6.6	4.1	コ罗纳デ 火だすき類	コ罗纳デ→底縁折縁糸切り 火だすき類	判断実態	Ⅱ区 Ⅱ区ホリ
17	甌形器	坪	14.0	7.2	4.2	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁糸切り 自然輪付蓋	判断実態	Ⅱ区
18	甌形器	坪	15.6	7.5	4.2	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁と外周折縁ヘラケツリ 火だすき類	判断実態	Ⅲ区
19	甌形器	坪	14.8	7.0	4.1	コ罗纳デ 火だすき類	コ罗纳デ→底縁と外周折縁ヘラケツリ 火だすき類	判断実態	Ⅲ区 H25
20	甌形器	坪	13.8	6.2	4.1	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り	判断実態	Ⅰ・Ⅱ区
21	甌形器	坪	13.8	6.9	3.6	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り 火だすき類	判断実態	Ⅳ区
22	甌形器	坪	13.2	6.1	3.4	コ罗纳デ 自然輪付蓋	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り 火だすき類	判断実態	Ⅱ・Ⅳ区
23	甌形器	坪	13.2	-	2.6	コ罗纳デ 火だすき類	コ罗纳デ	判断実態	Ⅰ区
24	甌形器	坪	-	6.3	2.4	コ罗纳デ 火だすき類	コ罗纳デ 底縁折縁糸切り 火だすき類	完全実態	Ⅲ区 ケン
25	甌形器	坪	-	6.2	2.6	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り	完全実態	Ⅰ区
26	甌形器	坪	-	6.6	1.6	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り	完全実態	Ⅲ区
27	甌形器	坪	-	6.8	1.2	コ罗纳デ 火だすき類	コ罗纳デ→底縁折縁ヘラケツリ 火だすき類	判断実態	Ⅱ区ホリ
28	甌形器	坪	-	7.5	2.1	コ罗纳デ 火だすき類	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り 火だすき類	完全実態	Ⅲ区 H24Ⅱ区
29	甌形器	坪	13.5	6.8	4.6	コ罗纳デ 火だすき類 自然輪付蓋	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り 火だすき類 蓋裏あり(西)	完全実態	Ⅱ・Ⅲ区
30	甌形器	坪	13.2	6.4	3.9	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り 蓋裏あり(西)	判断実態	Ⅱ・Ⅲ区
31	甌形器	坪	14.0	7.0	3.5	コ罗纳デ 覆付蓋	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り 蓋裏あり(西)	判断実態	Ⅱ区
32	甌形器	坪	-	6.0	2.0	コ罗纳デ 火だすき類	コ罗纳デ→底縁糸切り 底縁に蓋裏あり(西)	判断実態	ケマド
33	甌形器	坪	12.2	-	2.4	コ罗纳デ	コ罗纳デ 蓋裏あり	判断実態	Ⅲ区
34	甌形器	坪	-	-	-	コ罗纳デ	コ罗纳デ 蓋裏あり	Ⅰ区	
35	甌形器	坪	-	-	-	コ罗纳デ	コ罗纳デ 蓋裏あり	破片実態	Ⅲ区
36	甌形器	坪	-	-	-	コ罗纳デ	コ罗纳デ 蓋裏あり	破片実態	Ⅳ区
37	甌形器	坪	-	-	-	コ罗纳デ	コ罗纳デ 蓋裏あり	破片実態	Ⅰ区
38	甌形器	坪	-	-	-	コ罗纳デ	コ罗纳デ 蓋裏あり	破片実態	Ⅲ区
39	甌形器	坪	-	-	-	コ罗纳デ	コ罗纳デ 蓋裏あり	破片実態	Ⅰ区
40	甌形器	坪	-	2.7	1.0	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁折縁糸切り 底縁にヘラ記号あり(後成前)	判断実態	Ⅱ区
41	甌形器	坪	-	2.8	1.4	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁折縁糸切り 底縁にヘラ記号あり(後成前)	判断実態	Ⅰ区
42	甌形器	有台坪	-	-	1.2	コ罗纳デ	コ罗纳デ→底縁糸切り→高台付付(裏有文様) 底縁にヘラ記号あり	判断実態	ケン
43	甌形器	坪	-	-	-	コ罗纳デ	コ罗纳デ 蓋裏あり(後成前) 火だすき類	破片実態	Ⅰ区
44	甌形器	坪	-	-	-	コ罗纳デ	ナデ 底縁にヘラ記号あり(後成前)	破片実態	Ⅲ区
45	甌形器	坪	-	-	-	コ罗纳デ	ナデ 底縁にヘラ記号あり(後成前)	破片実態	Ⅳ区
46	甌形器	坪	-	6.0	1.7	コ罗纳デ みこみ蓋に支付蓋	コ罗纳デ→底縁右折縁糸切り	判断実態	Ⅱ区
47	甌形器	坪	-	6.1	1.0	コ罗纳デ みこみ蓋転用縁	コ罗纳デ→底縁折縁ヘラケツリ	判断実態	Ⅰ区
48	甌形器	円蓋	-	-	-	コ罗纳デ	コ罗纳デ 蓋に「あ」形(後成前)あり 転用あり 自然輪付蓋	破片実態	Ⅰ区
49	甌形器	高坪	-	-	14.3	コ罗纳デ みこみ蓋自然輪付蓋	コ罗纳デ	完全実態	Ⅰ・Ⅱ区
50	甌形器	蓋	-	-	2.7	コ罗纳デ	コ罗纳デ→浅縁 縄文	判断実態	Ⅳ区
51	甌形器	蓋	14.5	-	3.3	コ罗纳デ 自然輪付蓋	コ罗纳デ 自然輪付蓋	判断実態	Ⅳ区
52	甌形器	蓋	-	7.0	3.6	コ罗纳デ 自然輪付蓋	コ罗纳デ→底縁糸切り→ナデ→高台付付 自然輪付蓋	判断実態	Ⅱ区
53	甌形器	蓋	-	6.4	7.6	コ罗纳デ 底縁に自然輪付蓋	コ罗纳デ→折下ヘラケツリ→底縁糸切り→ 高台付付 底縁にヘラ記号あり(後成前)	判断実態	Ⅰ・Ⅱ区

第22表 出土遺物観察表(7)

単位 cm・g

H20	種別	器種	量 量			成形・調整・文様・備考		調査方法	出土位置
			口縁径)	底径(幅)	器高(深)	内 蓋	外 蓋		
54	須恵器	蓋	-	-	-	コ罗纳デ	コ罗纳デ-器下手-ヘラズリナデ-高台版付	鏡片実照	Ⅱ区 ケン
55	須恵器	蓋	-	6.30	0.50	コ罗纳デ	コ罗纳デ-高台版付 自然釉付着	鏡片実照	Ⅱ区
56	須恵器	蓋	-	7.00	0.70	コ罗纳デ	銅鍍ナデ 底蓋ナデ	鏡片実照	Ⅱ区
57	須恵器	短頸瓶	10.40	-	17.80	コ罗纳デ 自然釉付着	コ罗纳デ 自然釉付着	鏡片実照	ⅡB・ⅡVC H25
58	須恵器	短頸瓶	16.00	-	54.10	コ罗纳デ 自然釉付着	コ罗纳デ 自然釉付着	鏡片実照	Ⅱ区
59	須恵器	壺	26.40	-	46.10	コ罗纳デ	コ罗纳デ	鏡片実照	Ⅱ区 ケン
60	須恵器	壺	-	-	-	ヘラ記号焼成前	沈積 銅鍍黄次文	鏡片実照	Ⅱ区
61	須恵器	壺	30.40	-	49.80	コ罗纳デ	白緑コ罗纳デ-銅鍍ナデ付	鏡片実照	Ⅱ区 Ⅱ区ホリ
62	須恵器	壺	-	-	13.80	コ罗纳デ	コ罗纳デ-銅鍍黄次文(2本)	鏡片実照	Ⅱ区ホリ ホリ
63	須恵器	壺	-	13.00	49.40	当て具組 自然釉付着 筋浮付着	999年目 自然釉付着	鏡片実照	Ⅱ区
64	須恵器	横瓶	-	-	49.10	当て具組	999年目	鏡片実照	Ⅱ区 ケン
65	土師器	蓋	17.50	-	6.30	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-天井部銅鍍ヘラズリ-つまみ版付	完全実照	Ⅱ区
66	土師器	蓋	18.80	-	6.50	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-天井部銅鍍ヘラズリ	鏡片実照	Ⅰ・Ⅱ区
67	土師器	蓋	-	-	0.90	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-天井部銅鍍ヘラズリ-つまみ版付	鏡片実照	Ⅱ区
68	土師器	蓋	12.70	6.20	3.00	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋赤切-高台版付 器蓋あり	完全実照	Ⅱ区
69	土師器	蓋	13.60	-	1.20	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
70	土師器	蓋	12.00	5.70	3.00	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋赤切-高台版付	完全実照	Ⅱ区
71	土師器	蓋	-	-	1.80	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
72	土師器	杯	-	-	-	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
73	土師器	杯	-	-	-	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
74	土師器	杯	-	-	-	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	ケン
75	土師器	杯	-	-	0.20	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり ヘラ記号あり	鏡片実照	Ⅱ区
76	土師器	杯	-	-	-	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
77	土師器	杯	-	-	-	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
78	土師器	杯	-	-	-	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	ケン
79	土師器	杯	-	-	-	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
80	土師器	杯	-	0.50	1.80	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋ヘラズリ) 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
81	土師器	杯	-	-	-	シガキ-黒色処理	ヘラズリ) ヘラ記号あり	鏡片実照	ケン
82	土師器	杯	-	-	-	シガキ	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
83	土師器	杯	14.70	6.20	4.30	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋銅鍍赤切- 底縁外周手持ち-ヘラズリ) 器蓋あり	完全実照	Ⅰ・Ⅱ区
84	土師器	杯	14.80	6.80	3.70	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋ヘラズリ) 器蓋あり	鏡片実照	Ⅰ・Ⅱ区
85	土師器	杯	14.20	5.30	4.40	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋銅鍍赤切- 外周手持ち-ヘラズリ) 器蓋あり 別蓋(あり)焼成前	完全実照	Ⅰ・Ⅱ・Ⅱ区
86	土師器	杯	13.90	6.80	4.20	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋赤切-ヘラズリ) 器蓋あり	完全実照	Ⅱ区
87	土師器	杯	17.80	-	0.50	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
88	土師器	杯	13.40	6.00	3.40	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋銅鍍赤切) 器蓋あり	鏡片実照	ⅡB・Ⅱ区
89	土師器	杯	14.40	6.40	3.80	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋ヘラズリ) 器蓋あり	完全実照	Ⅱ区
90	土師器	杯	-	0.20	1.30	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ 底蓋赤切) 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区 ケン
91	土師器	杯	-	0.60	1.80	コ罗纳デ-褐文	ヘラズリ) 器蓋あり	完全実照	ケン
92	土師器	杯	-	-	0.50	コ罗纳デ-褐文	ヘラズリ) 器蓋あり	鏡片実照	ケン
93	土師器	杯	12.80	11.80	3.90	小こみ器ナデ-口縁コ罗纳デ-褐文	白緑コ罗纳デ 底蓋ヘラズリ)	完全実照	Ⅱ区 ケン
94	土師器	杯	-	6.00	0.40	シガキ-褐文	コ罗纳デ	完全実照	Ⅱ区
95	土師器	杯	18.60	8.80	5.80	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋ヘラズリ)	鏡片実照	Ⅱ区
96	土師器	杯	15.80	8.20	6.40	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋銅鍍赤切) 器蓋あり	鏡片実照	Ⅱ区
97	土師器	杯	14.80	7.00	4.10	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋赤切(器口)- 底縁外周手持ち-ヘラズリ)	完全実照	Ⅱ区 ケン
98	土師器	杯	13.70	7.20	3.30	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋赤切)	鏡片実照	Ⅱ区
99	土師器	杯	12.30	6.60	4.00	シガキ-黒色処理	コ罗纳デ-底蓋赤切)	鏡片実照	ケン
100	土師器	壺	11.20	-	0.50	コ罗纳デ	コ罗纳デ	鏡片実照	ケン
101	土師器	壺	18.60	-	17.20	銅鍍ヘラナデ	銅鍍ヘラズリ)	鏡片実照	ケン
102	土師器	壺	19.20	-	19.10	銅鍍ヘラナデ	銅鍍ヘラズリ)	鏡片実照	Ⅰ・Ⅱ区
103	土師器	壺	-	14.00	11.40	ヘラナデ	銅鍍ヘラズリ) 底縁ヘラズリ)	鏡片実照	Ⅱ区 ケン
104	土師器	壺	-	18.80	16.40	ヘラナデ	ヘラズリ)	鏡片実照	Ⅰ・Ⅱ区
105	土師器	壺	21.60	-	23.90	銅鍍ヘラナデ	銅鍍ヘラズリ)	完全実照	Ⅱ区 H25
106	土師器	壺	16.20	-	11.40	銅鍍ヘラナデ 磨滅	銅鍍ヘラズリ)	鏡片実照	Ⅱ区
107	土師器	壺	-	5.60	12.80	コ罗纳デ	銅鍍-底蓋ヘラズリ) -ヘラ記号あり(焼成前)	完全実照	ケン
108	土師器	壺	-	-	13.30	ナデ ヌコナデ	コ罗纳デ 付着跡あり	完全実照	Ⅱ区
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考		出 土 位 置
109	口玉	滑石	2.5	2.6	0.9	9.27	磨熟なし。花江石。土・器・物類に馴染みあり		
110	彫刻雑品	滑石	3.0	2.3	0.6	4.47	磨熟なし。右側・土質に劣る		Ⅱ区

第23表 出土遺物観察表(8)

単位 cm・g

H20	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
111	未製煉土品	泥石	7.1	5.8	0.6	22.7	被熱なし。上・下にすり面	IV区
112	石核	ナモト	2.9	2.8	1.7	15.0	被熱なし。自然面のみ	Ⅲ区カタラン
113	砥石	凝灰岩	(18.1)	(3.6)	(2.2)	(146.96)	被熱あり。裏面敷4	Ⅲ区カタラン
114	砥石	千枚岩	24.2	6.9	(2.7)	(585.0)	被熱なし。裏面欠損 両面敷3 正面に糸痕 両面に被熱。上下端面に削りかけ加工痕	Ⅲ区カタラン
115	砥石	角閃石安山岩	13.6	3.4	3.5	280.0	被熱なし。下端面に縦打痕	Ⅲ区
116	砥石	角閃石安山岩	9.3	4.6	3.6	186.0	被熱なし。上下端面に縦打痕	IV区
117	砥石	輝石安山岩	10.6	4.5	2.2	142.97	被熱なし。上下端面に縦打痕	Ⅲ区
118	砥石	凝灰岩	8.8	9.3	1.9	240.37	被熱なし。両端面に縦打痕	Ⅲ区
119	磨り石	安山岩	3.7	3.7	1.0	14.89	被熱なし。正・背にすり面	I区
120	磨り石	凝灰岩	4.9	3.7	0.7	19.73	被熱なし。正・背にすり面	ケン
121	磨り石	輝石安山岩	8.9	4.1	3.8	212.07	被熱なし。正面にすり面	Ⅲ区
122	磨り石	輝石安山岩	6.8	5.8	3.7	215.0	被熱なし。全体にすり	Ⅲ区
123	台石	輝石安山岩	23.4	19.7	10.8	7.694	被熱なし。正面にすり有り	Ⅲ区
124	台石	安山岩	(16.1)	(14.4)	(12.0)	(37.6)	被熱なし。一部欠損 正面にすりと糸痕	Ⅲ区
125	台石	輝石安山岩	29.2	24.6	11.0	14.284	被熱なし。正面にすり有り	
126	刀子	鉄製品	(18.9)	1.6	(0.6)	(29.3)	基部欠損 未貫通	
127	刀子	鉄製品	(9.1)	1.2	(0.3)	(8.09)	基部欠損	Ⅲ区
128	短柄鍬	鉄製品	5.4	4.6	0.8	23.47	柳葉 角削	
129	短柄鍬	鉄製品	(7.0)	3.1	(0.5)	(16.71)	基部欠損 三角形 台形削	
130	短柄鍬	鉄製品	(7.6)	(4.0)	(0.5)	(22.95)	基部欠損 三角形 台形削	
131	短柄鍬	鉄製品	(10.2)	(5.0)	(0.6)	(19.74)	刀部・基部欠損 三角形 台形削	
132	短柄鍬	鉄製品	(6.0)	(2.7)	0.4	(11.30)	先端欠損 斧首	Ⅲ区
133	角釘	鉄製品	(7.7)	1.2	0.7	(15.06)	先端欠損	Ⅲ区
134	角釘	鉄製品	(11.5)	(0.8)	(0.7)	(19.98)	上下欠損	I区
135	角釘	鉄製品	(6.5)	(0.6)	(0.4)	(7.66)	上下欠損	カッパ
136	角釘	鉄製品	8.8	1.4	0.8	18.88	上下欠損	Ⅲ区
137	角釘	鉄製品	(5.6)	(0.8)	(0.6)	(7.85)	上下欠損	I区
138	角釘?	鉄製品	上(4.4) 下(3.5)	(1.2) (1.3)	(0.8) (0.8)	8.24 8.13	上下欠損 同一個体 1字に曲がる	Ⅲ区
139	紐	鉄製品	(4.0)	6.2	0.8	(23.05)	両端欠損	Ⅲ区ケン
140	角輪	鉄製品	長(10.0)幅 (6.3)	(0.4) (0.4)	(0.4) (0.4)	(14.91) (12.38)	上下欠損 同一個体	Ⅲ区
141	角輪	鉄製品	(2.1)	(0.4)	(0.4)	(1.68)	上下欠損	Ⅲ区
142	角釘	鉄製品	(8.2)	0.9	0.5	(7.54)	先端欠損	1124
143	不明	鉄製品	(6.6)	(2.0)	(1.0)	(7.95)	下部欠損 素材厚(0.1)	1124
144	刀子	鉄製品	(12.4)	2.3	(0.5)	(42.03)	両端欠損	1124
145	鋸歯	銅製品	1.4	3.1	0.7	9.46	厚さ0.7の鋸歯加工 φ0.15の棒	Ⅲ区
146	不明	銅製品	2.9	2.7	(2.5)	(34.82)	「西」の印?	Ⅲ区

H21	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様 ・ 備 考		実測方法	出 土 位 置
			口径(径)	底径(径)	器高(寸)	内 面	外 面		
1	土師器	埴	12.0	11.2	4.3	六み部ナデ→口縁コナデ	口縁コナデ→底部ヘナデ	片取欠損	Ⅲ区 Ⅱ509
2	土師器	埴	14.0	11.8	4.8	七字キ	口縁コナデ→底部ヘナデ→七字キ 磨削	完全実測	Ⅲ区 Ⅲ区69
3	土師器	埴	13.5	11.5	4.7	六み部ナデ→口縁コナデ→短文	口縁コナデ→底部ヘナデ 磨削	完全実測	I区
4	土師器	埴	13.2	10.9	4.0	ヘナデ→短文	七字キ 磨削	完全実測	Ⅲ区
5	土師器	埴・鉢?	10.2	11.8	8.5	口縁コナデ 底部ヘナデ→七字キ	口縁コナデ 底部ヘナデ→七字キ	完全実測	Ⅲ区
6	土師器	壺	12.0	-	(10.3)	製部ヘナデ	製部ヘナデ	片取欠損	Ⅲ区 H17-Ⅲ区
7	土師器	壺	12.0	7.2	13.9	製部心口底部ヘナデ→七字キ→黒色処理	製部ヘナデ ヘナデズ 底部ヘナデ→七字キ	完全実測	
8	土師器	壺	12.1	6.2	13.0	製部心口底部ヘナデ	製部ヘナデ ヘナデズ 底部ヘナデ	完全実測	
9	土師器	壺	-	6.6	(9.6)	ヘナデ	製部ヘナデヘナデ 底部に木葉痕	完全実測	IV区 F17-96
10	土師器	瓶	19.4	5.7	12.8	製部心口底部ハケ目状のナデ	製部心口底部ハケ目状のナデ→磨成前管口(口)	完全実測	
11	土師器	鉢	20.2	8.3	12.9	口縁コナデ→製部心口底部ヘナデ	口縁コナデ→製部ヘナデ 底部ヘナデ	完全実測	
12	土師器	壺	18.5	4.1	24.4	製部心口底部ハケ目状のナデ	製部ヘナデ 底部に木葉痕	完全実測	
13	土師器	壺	20.6	5.1	36.9	製部心口底部ヘナデ	製部ナデ→ヘナデズ 底部に木葉痕	完全実測	I区 カッド H10
14	土師器	壺	21.9	5.1	35.5	製部心口底部ハケ目状のナデ	製部ヘナデヘナデ 底部に木葉痕	完全実測	IV区 H4 P209
15	土師器	壺	20.0	5.9	32.1	製部心口底部ヘナデ	製部ヘナデ 底部に木葉痕	完全実測	Ⅲ・IV区 F17 P200
16	土師器	壺	20.9	5.0	33.7	製部心口底部ヘナデ目状のナデ	製部心口底部ヘナデヘナデ 底部ナデ	完全実測	I区 カッド H4 H10 F1 F14
17	土師器	壺	18.3	-	(12.8)	製部ナデ	製部ヘナデ	完全実測	I・Ⅲ区 カッパ

No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
118	磨り石	安山岩	10.8	7.1	3.0	275.0	被熱なし。正面にすり面	Ⅲ区
119	磨り石	安山岩	12.3	6.5	4.7	520.0	被熱なし。正面にすり面	カッパ

第24表 出土遺物観察表(9)

単位 cm・g

H22	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	葉形器	葉形	18.25	-	5.80	コウコナデ	コウコナデ	約転実測	Ⅱ区 D31
2	土師器	葉形	-	-	18.75	厚底コナデ→黒色地処理 器底へラケズリ ナデ	厚底→器底へラケズリ	完全実測	Ⅰ区 P235
3	土師器	葉	26.1	-	13.55	ナデ	へラケズリ	完全実測	
4	土師器	葉	25.80	丸底	13.80	ハケ目の残存ナデ	へラケズリ	約転実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区 カマド H17 P315 V913G+
5	土師器	葉	23.0	-	-	ナデ	へラケズリ	約転実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区 カマド V913G+
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
6	磨り石	輝石安山岩	7.3	6.1	0.7	360.6	磨熟なし。全体にナデ		Ⅱ区
7	磨り石	輝石安山岩	16.1	3.7	0.6	694.6	磨熟なし。下部面に磨行痕		
H23	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	土師器	杯	9.30	10.80	4.2	シガキ 口縁コナデ→黒色地処理	シガキ 口縁コナデ→黒色地処理	完全実測	Ⅰ区
2	土師器	杯	12.2	10.8	4.5	シガキ	底面へラケズリ→シガキ	完全実測	
3	土師器	杯	12.80	丸底	9.20	シガキ	へラケズリ→シガキ	完全実測	
4	土師器	杯	13.0	11.7	5.80	シガキ 口縁コナデ	底面へラケズリ 口縁コナデ	完全実測	Ⅱ区 H22 V-15G+
5	土師器	杯	14.0	11.0	4.80	ナデ 口縁コナデ	底面へラケズリ 口縁コナデ	約転実測	Ⅰ・Ⅱ区
6	土師器	杯	13.8	10.9	4.8	ナデ 楕文	底面へラケズリ 口縁コナデ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区 Ⅱ区のみ
7	土師器	葉	15.85	丸底	11.47	ハケ目の残存ナデ	へラケズリ	完全実測	Ⅱ区
8	土師器	葉	-	6.60	12.73	ハケ目の残存ナデ	上部ハケ目 体部→器底へラケズリ	約転実測	Ⅱ・Ⅲ区 Ⅱ区 H22 H28
9	土師器	葉	19.5	10.0	12.81	ハケ目 ナデ→口縁コナデ	シガキ底面へラケズリ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区 カマド P230
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
10	磨り石	滑石	3.9×4.2	粒小径1.9	1.9	39.91	磨熟なし。孔縁のみ 側面に磨行痕の磨り痕		Ⅱ区
11	石核	硬質砂岩	14.0	7.0	3.4	855.6	磨熟なし。上部中心の磨削の跡あり		Ⅱ区
12	磨り石	石英安山岩	15.6	10.0	6.5	1,175.6g	磨熟なし。下部面に磨行痕		
13	磨り石	輝石安山岩	15.9	8.4	5.1	1,375g	磨熟なし。正面にナデ		Ⅱ区
H25	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	葉形器	杯	13.0	17.60	13.5	コウコナデ	コウコナデ 底面に約転実測	約転実測	
2	葉形器	杯	13.60	5.8	13.90	コウコナデ	コウコナデ 底面に約転実測	完全実測	Ⅱ区 V2G+ カマド
3	葉形器	葉	10.60	-	12.4	コウコナデ	コウコナデ タタキ	約転実測	
4	土師器	杯	12.0	9.7	4.1	へラケズリ 口縁コナデ	底面へラケズリ 口縁コナデ	完全実測	P2
5	土師器	杯	-	-	12.5	コウコナデ シガキ→黒色地処理	コウコナデ 器蓋あり	鏡片実測	
H26	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	土師器	杯	12.80	10.4	4.2	ナデ 口縁コナデ	底面へラケズリ 口縁コナデ	約転実測	ケン
2	土師器	葉形	-	-	14.80	へラケズリ	シガキ	完全実測	Ⅰ区
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
3	石核	硬質砂岩	13.9	11.60	6.35	2.02	磨熟なし。片割れあり		Ⅰ区
H27	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	葉形器	杯	13.60	8.60	14.6	コウコナデ	コウコナデ 底面に約転実測	約転実測	Ⅱ・Ⅲ区
2	葉形器	杯	13.8	7.2	4.1	コウコナデ	コウコナデ 底面に約転実測	完全実測	Ⅱ区 Ⅱ区のみ
3	葉形器	杯	13.7	6.0	14.6	コウコナデ	コウコナデ 底面に約転実測	完全実測	カマド
4	葉形器	杯	14.3	6.0	12.7	コウコナデ	コウコナデ 底面に約転実測	完全実測	Ⅱ区
5	葉形器	杯	14.4	6.25	14.5	コウコナデ	コウコナデ 底面に約転実測	約転実測	Ⅰ区のみ
6	葉形器	杯	15.25	-	12.80	コウコナデ	コウコナデ 器蓋あり	約転実測	Ⅱ区
7	葉形器	杯	15.80	-	13.4	コウコナデ	コウコナデ 器蓋あり(蓋ナシ)	約転実測	カマド
8	葉形器	杯	-	-	12.3	コウコナデ	コウコナデ 器蓋あり	鏡片実測	
9	葉形器	杯	-	-	11.5	コウコナデ	コウコナデ 器蓋あり	鏡片実測	Ⅱ区
10	葉形器	杯	-	-	-	コウコナデ	コウコナデ 器蓋あり	鏡片実測	
11	葉形器	杯	-	-	-	コウコナデ	コウコナデ 器蓋あり	鏡片実測	Ⅱ区
12	葉形器	杯	-	-	13.0	コウコナデ	コウコナデ 器蓋あり	鏡片実測	Ⅱ区
13	葉形器	有台杯	-	6.1	12.0	コウコナデ	コウコナデ 底面に約転実測→高台部分	約転実測	Ⅱ区
14	葉形器	有台杯	-	6.90	12.0	コウコナデ	コウコナデ 底面に約転実測→高台部分	完全実測	Ⅱ区のみ
15	葉形器	盤	-	-	14.0	コウコナデ 絞	コウコナデ	完全実測	Ⅱ区のみ
16	葉形器	葉	-	-	10.0	コウコナデ ナデ 当て具痕	コウコナデ 自然熱付着	約転実測	Ⅰ・Ⅱ区
17	葉形器	葉	-	-	-	コウコナデ ナデ 当て具痕	コウコナデ タタキ	鏡片実測	Ⅰ区
18	葉形器	葉	-	-	12.00	当て具痕 へラケズリ	タタキ目	約転実測	Ⅱ区 カマド カマドのみ
19	葉形器	葉	12.70	10.80	コウコナデ ナデ	コウコナデ タタキ 底面に熱付着	約転実測	Ⅱ区	
20	土師器	皿	13.60	6.60	12.80	コウコナデ 体部コナデ→黒色地処理	コウコナデ 底面に約転実測→高台部分	約転実測	Ⅱ区
21	土師器	皿	15.5	7.8	6.1	コウコナデ シガキ→黒色地処理	コウコナデ 底面に約転実測→高台部分 器蓋あり(蓋ナシ)?	完全実測	Ⅰ区

第25表 出土遺物観察表(10)

単位 cm・g

H07	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		測定方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面		
22	土師器	瓶	-	0.0	0.0	ロクロナデ	体部(口縁)→口縁→ラケズリ→高直付	完全実測	カマツ
23	土師器	杯	03.0	-	0.2	ロクロナデ	器蓋あり「古」上口」?	ロクロナデ	目尺
24	土師器	杯	-	-	0.0	ロクロナデ	器蓋あり「古」?	ロクロナデ	目尺
25	土師器	杯	-	-	0.0	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
26	土師器	杯	-	-	0.2	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
27	土師器	杯	-	-	0.2	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
28	土師器	杯	-	-	0.2	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
29	土師器	杯	-	-	0.2	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
30	土師器	杯	-	-	-	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
31	土師器	杯	-	-	-	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
32	土師器	杯	-	-	-	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
33	土師器	杯	12.2	6.0	4.4	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
34	土師器	杯	13.0	5.0	4.2	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
35	土師器	杯	14.0	6.0	0.8	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
36	土師器	杯	14.0	5.0	0.1	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
37	土師器	杯	15.0	7.0	4.8	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
38	土師器	杯	13.1	6.0	0.7	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
39	土師器	杯	12.0	6.0	0.5	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
40	土師器	杯	12.0	5.0	0.0	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
41	土師器	約灰杯	14.0	5.5	4.5	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
42	土師器	壺	03.0	-	0.8	ロクロナデ	ハケ目状のナデ	ロクロナデ	目尺
43	土師器	壺	19.6	-	0.8	ロクロナデ	ハケ目の内面ナデ	ロクロナデ	目尺
44	土師器	壺	-	4.1	0.1	ロクロナデ	体部→底面→ラケズリ	ロクロナデ	目尺
45	土師器	壺	12.0	-	0.2	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
46	土師器	壺	16.0	0.0	0.0	ロクロナデ	体部下→底面→ラケズリ	ロクロナデ	目尺
47	土師器	壺	20.0	-	0.2	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
48	土師器	壺	20.0	-	0.2	ロクロナデ	器蓋あり	ロクロナデ	目尺
49	土師器	壺	-	0.0	0.2	ナデ	ナデ	ロクロナデ	目尺
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考	測 定 方 法	出 土 位 置
50	不明	鉄製品	4.1	0.6	0.6	0.6	上下欠損 木質に貫通した状態	IV区	
51	不明	鉄製品	5.6	2.9	0.2	12.5	2枚が重なっている A)最大長(5.4) 最大幅(2.6) 最大厚(0.1) B)最大長(5.3) 最大幅(1.6) 最大厚(0.1)	IV区	
52	不明	鉄製品	8.8	2.2	0.8	25.56			
53	不明	鉄製品	4.2	1.5	0.9	0.8	一部欠損か	I区	
54	長厚輪	鉄製品	5.8	1.1	0.35	4.80	環状欠損 片方	カマツ	
55	長輪	鉄製品	13.0	1.0	1.0	23.10	環状欠損	IV区	
56	不明	銅製品	7.0	1.1	0.2	1.62	素材厚(0.05) 片断欠損		
H08	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		測定方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面		
1	土師器	壺	09.0	-	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	目尺
2	土師器	杯	11.7	11.4	4.8	ヘラナデ	口縁コナデ	口縁コナデ	目尺
3	土師器	高杯	-	-	0.2	伴部(口縁)→器蓋あり	器蓋あり	器蓋あり	目尺
4	土師器	合付鉢	10.8	-	0.7	鉢蓋ハケ目 合部ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	目尺
5	土師器	壺	20.5	9.0	3.2	ヘラナデ	ヘラケズリ→器蓋	ヘラケズリ	目尺
H09	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		測定方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面		
1	土師器	杯	-	0.4	0.0	ロクロナデ	ロクロナデ	器蓋あり	カマツ
2	土師器	杯	15.9	6.7	0.0	ロクロナデ	器蓋あり	器蓋あり	目尺
3	土師器	壺	04.0	-	0.8	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	カマツ
H00	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		測定方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面		
1	土師器	杯	13.6	11.6	4.9	ろくろナデ	口縁コナデ	口縁コナデ	目尺
2	土師器	杯	13.5	11.3	4.4	ろくろナデ	口縁コナデ	口縁コナデ	目尺
3	土師器	杯	12.0	11.0	4.0	ろくろナデ	口縁コナデ	口縁コナデ	目尺
4	土師器	瓶	13.0	7.0	0.4	胴部→底面→ヘラナデ	胴部→ヘラケズリ	胴部→ヘラケズリ	目尺
5	土師器	壺	17.7	-	0.9	胴部→口縁のナデ	胴部→ヘラケズリ	胴部→ヘラケズリ	目尺
6	土師器	壺	19.6	7.3	3.9	胴部→口縁のナデ	胴部→ヘラケズリ	胴部→ヘラケズリ	目尺
7	土師器	壺	20.6	6.7	3.5	胴部→底面→口縁のナデ	胴部→ヘラケズリ	胴部→ヘラケズリ	目尺
8	土師器	壺	25.7	-	0.1	胴部→ヘラナデ	胴部→口縁のナデ	胴部→口縁のナデ	目尺

第26表 出土遺物観察表(11)

単位 cm・g

H00	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
								内 部	外 部
9	圓石	白色粒石	22.3	23.8	10.0	1.87kg	被熱なし。印跡7.5 頂部1.7 正面に磨いての跡あり		
10	磨り石	石高安山節	11.5	7.2	5.3	560.0	被熱なし。正面と右側にすり面		IV区
11	扁物石	石高安山節	8.9	5.4	3.5	202.0	被熱なし。		
12	扁物石	石高安山節	9.5	4.7	4.0	225.0	被熱なし。		
13	扁物石	石高安山節	9.0	5.3	3.5	230.0	被熱なし。		
14	扁物石	安山岩	9.2	4.5	3.6	180.0	被熱なし。中央に断面		
15	扁物石	石高安山節	8.9	5.1	4.7	235.0	被熱なし。正面に磨り面		
16	扁物石	輝石安山節	10.8	4.9	4.1	232.0	被熱なし。		
17	扁物石	輝石安山節	9.9	4.6	3.8	218.0	被熱なし。		
18	扁物石	輝石安山節	9.5	4.9	4.5	282.0	被熱なし。		
19	扁物石	安山岩	10.0	5.9	2.7	215.0	被熱なし。		
20	扁物石	石高安山節	10.3	4.4	4.7	262.0	被熱なし。		
21	扁物石	安山岩	11.1	4.6	3.7	284.0	被熱なし。		
22	扁物石	輝石安山節	11.2	5.7	3.8	320.0	被熱なし。		
23	扁物石	石高安山節	11.1	5.8	3.2	308.0	被熱なし。		
24	扁物石	輝石安山節	8.7	4.0	4.4	200.0	被熱なし。筆突跡の傍の中央から出土		
25	扁物石	輝石安山節	10.6	4.0	2.7	202.0	被熱なし。下部跡の文様は使用痕か。		
26	扁物石	石高安山節	8.2	4.1	4.8	318.0	被熱なし。下部跡の文様は使用痕か。		
27	扁物石	角閃石安山節	12.2	5.2	4.0	280.0	被熱なし。裏面の磨跡は使用痕か。		
28	扁物石	輝石安山節	12.3	4.5	5.1	590.0	被熱なし。筆突跡の傍の中央から出土		
29	扁物石	輝石安山節	11.1	4.2	4.8	400.0	被熱なし。		
H01	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 部	外 部		
1	土師器	甕	25.6	9.2	29.4	ハケ目状のナデ→ヒガキ	ハケ目状のナデ→穿孔(環状) 底面寄りに向かい合う一対の穴あり	完全実測	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
2	磨り石	安山岩	13.0	13.4	12.5	132.0g	被熱なし。上下両面 すり有り?		I区
H02	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 部	外 部		
1	土師器	甕	19.0	-	27.3	ハケ目状のナデ	ハケ目状のナデ	完全実測	I区 H2 H20 M2 VI-16G
H03	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 部	外 部		
1	須恵器	杯蓋	-	-	13.7	コナコナデ	コナコナデ→天井部跡のヘラケズリ	印触実測	I区 H8HIV区
2	土師器	杯	13.8	12.7	4.2	ヒガキ	口縁コナデ→底面ヘラケズリ	完全実測	
3	土師器	杯	11.0	10.0	4.0	みこみ部ナデ→口縁コナデ	口縁コナデ→底面ヘラケズリ	印触実測	II区
4	土師器	杯	16.8	16.1	2.1	ハケ目状のナデ 備付着	口縁コナデ→底面ヘラケズリ	完全実測	
5	土師器	杯	18.6	17.3	8.7	みこみ部ナデ→口縁コナデ	口縁コナデ→底面ヘラケズリ 備付着	完全実測	
6	土師器	杯	-	-	-	みこみ部ナデ→口縁コナデ→磨文	口縁コナデ→底面ヘラケズリ	薄片実測	III区
7	土師器	甕	14.0	-	17.2	胴部ナデ→ヘラナデ	胴部ヘラケズリ	印触実測	IV区
8	土師器	甕	13.0	-	17.0	胴部ハケ目状のナデ	胴部ヘラケズリ	印触実測	IV区
9	土師器	甕	13.3	6.3	13.8	ヘラナデ	ヘラナデ 底面あり	完全実測	
10	土師器	鉢	27.2	-	13.6	ヒガキ	胴部ヘラケズリ→ヒガキ	完全実測	IV区・ホリ M2 VI-16G
11	土師器	甕	-	5.4	19.9	ヘラナデ ハケ目状のナデ	胴部ヘラケズリ 底面に本蓋痕	完全実測	IV区
12	土師器	甕	-	40.0	12.9	ナデ ハケ目状のナデ	胴部ヘラケズリ 底面に本蓋痕	印触実測	I区
13	土師器	甕	-	-	18.0	ハケ目状のナデ	ヘラケズリ	完全実測	III・IV区 IV区ホリ
14	土師器	甕	23.3	-	18.0	胴部ハケ目状のナデ	胴部ヘラケズリ	完全実測	II・III区 I区ホリ カマド H30
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
15	輝石製品	輝石	9.4	4.6	4.1	110.0	被熱なし。全体にすり 下部跡に断面		I区
16	磨り石	石高安山節	12.3	7.2	5.0	570.0	被熱なし。下部跡に磨り面		II区
17	磨り石	安山岩	18.5	16.2	2.8	1,300g	被熱なし。正面にすり面		カマド
H04	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 部	外 部		
1	土師器	杯	10.0	11.5	4.1	ヒガキ	ヒガキ 磨跡	完全実測	
2	土師器	杯	12.0	11.0	4.0	みこみ部ナデ→口縁コナデ →磨文 備付着	口縁コナデ 底面ヘラケズリ→ヒガキ 備付着	印触実測	I・II区 H25
3	土師器	杯	13.0	11.0	4.7	みこみ部ナデ→口縁コナデ	口縁コナデ→底面ヘラケズリ 備付着	印触実測	III区 III区ホリ H30
4	土師器	甕	-	10.0	12.7	ナデ ヘラケズリ→ヒガキ	ヘラケズリ	印触実測	III区
5	土師器	盃・甕?	-	8.0	14.3	ヘラナデ	胴部ヘラケズリ→ヒガキ→磨跡 底面にナデ 磨跡	完全実測	I区ホリ
6	土師器	甕	30.9	11.4	32.2	胴部ハケ目状のナデ	胴部ヘラケズリ	完全実測	II・III・IV区 ケン H30
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
7	辻金具	銅製品	12.7	12.4	10.4	15.9g	片側欠損 銅製の突起(銅製面に磨跡)		IV区

第27表 出土遺物観察表(12)

単位 cm・g

H05	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				観察方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面				
1	須恵器	杯	15.0	6.0	5.8	コロンナデ	コロンナデ 底縁土曜丸付付→両縁までヘラナデ	回転実施	Ⅰ区		
2	須恵器	有台杯	-	01.0	7.2	コロンナデ	コロンナデ 底縁回転ヘラクス付→高台付付	回転実施	Ⅱ区		
3	須恵器	アリスコ瓶	6.3	-	(12.3)	コロンナデ 自然釉付着	コロンナデ 頸部に土曜丸 自然釉付着	完全実施	Ⅱ区		
4	須恵器	壺	28.0	-	(3.8)	コロンナデ	コロンナデ タタキ	回転実施	Ⅲ区		
5	土師器	埴	14.1	6.2	5.2	コロンナデ	コロンナデ 土曜丸付付→両縁ヘラクス付 墨書あり	完全実施	Ⅲ区		
6	土師器	杯	-	6.0	(1.5)	ナデ	体部→両縁ヘラクス付	完全実施	Ⅲ区		
7	土師器	壺	13.8	-	(6.9)	ヘラナデ	ヘラクス付	完全実施	Ⅰ区		
8	土師器	壺	22.0	-	(6.4)	ヘラナデ	ヘラクス付	完全実施	Ⅰ・Ⅱ区 カマド		
9	土師器	壺	-	4.8	(6.6)	ヘラナデ	体部→両縁ヘラクス付	完全実施	Ⅱ区 カマド		
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
10	不明	土製品	5.3	3.5	(1.6)		正面割溝 裏面に割付あり 縁部窪位小		Ⅲ区		
11	不明	土製品	3.4	3.7	(1.6)		正面割溝 裏面に土曜丸あり		Ⅲ区		
12	礎石	角閃石(安山岩)	9.0	4.0	2.6	330.0	被熱なし。上下両面に縦行溝		Ⅳ区		
13	礎石	輝石(安山岩)	20.7	8.8	4.8	1,280g	被熱なし。両面に縦行溝				
14	刀子	鉄製品	(13.6)	(2.8)	(0.7)	(99.94)	両端欠損				
15	平小金具	鉄製品	(11.5)	(3.4)	0.3	(24.42)	片端欠損		Ⅱ区		
H06	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				観察方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面				
1	須恵器	有蓋	19.8	-	(3.8)	コロンナデ	コロンナデ 天目縁回転ヘラクス付 土曜丸あり	完全実施			
2	須恵器	有蓋	11.0	-	(2.7)	コロンナデ	コロンナデ 天目縁回転ヘラクス付 土曜丸の部み	回転実施	Ⅱ区		
3	須恵器	杯	-	-	-	コロンナデ	コロンナデ 墨書あり	破片実施	Ⅲ区		
4	土師器	杯	14.2	0.3	(3.8)	シガキ	シガキ	回転実施	Ⅰ区 Ⅰ区北		
5	土師器	杯	15.0	0.6	(3.1)	ナデ	底縁ヘラクス付 口縁コロンナデ	回転実施	カマド		
6	土師器	高杯	13.8	11.0	(12.7)	厚縁シガキ→黒色処理 胴縁シガキ	シガキ	完全実施			
7	土師器	壺	13.1	-	(2.5)	ヘラクス付→シガキ	ヘラクス付→シガキ	回転実施	Ⅱ区		
8	土師器	壺	17.0	-	(3.8)	ヘラナデ	ヘラクス付→シガキ	回転実施	カマド		
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
9	角軸	鉄製品	上(5.1) 下(4.8)	(1.0) (0.7)	(1.0) (0.7)	(5.07) (2.44)	上 両端欠損 下 片端欠損 上下同一個体		Ⅲ区		
H07	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				観察方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面				
1	須恵器	杯	14.1	6.3	3.9	コロンナデ 黒底あり	コロンナデ→底縁土曜丸付付 黒底あり	完全実施			
2	須恵器	杯	14.3	5.9	4.7	コロンナデ 黒底あり	コロンナデ→底縁土曜丸付付 黒底あり	完全実施	カマド		
3	須恵器	杯	13.1	5.4	5.2	コロンナデ 火付ナキ瓶	コロンナデ→底縁土曜丸付付 火付ナキ瓶	完全実施			
4	須恵器	杯	14.1	6.6	4.5	コロンナデ 黒底あり	コロンナデ→底縁土曜丸付付 黒底あり	完全実施			
5	須恵器	杯	14.5	6.7	4.3	コロンナデ 黒底あり	コロンナデ→底縁土曜丸付付 黒底あり 覆付着	完全実施	Ⅱ区		
6	須恵器	杯	14.2	6.2	4.5	コロンナデ 黒底あり	コロンナデ→底縁土曜丸付付 墨書あり 黒底あり	完全実施			
7	須恵器	杯	14.0	6.1	4.0	コロンナデ 黒底あり	コロンナデ→底縁土曜丸付付 黒底あり 覆付着	完全実施			
8	須恵器	杯	13.8	6.4	4.2	コロンナデ	コロンナデ→底縁土曜丸付付 黒底あり 覆付着	完全実施			
9	須恵器	長頸壺	-	-	(6.4)	コロンナデ 自然釉付着	コロンナデ 自然釉付着	回転実施			
10	須恵器	長頸壺	-	-	(38.3)	コロンナデ	コロンナデ→胴下半部回転ヘラクス付→高台付付	完全実施			
11	土師器	杯	13.0	6.0	4.1	シガキ→黒色処理	コロンナデ→底縁土曜丸付付 墨書あり(付)	完全実施			
12	土師器	杯	15.4	6.4	4.6	シガキ→黒色処理	コロンナデ 墨書あり 底縁土曜丸縁部	完全実施	ケン		
13	土師器	杯	13.0	6.4	4.1	シガキ→黒色処理	コロンナデ→底縁土曜丸付付 墨書あり(付)	完全実施			
14	土師器	杯	13.8	5.8	4.2	シガキ→黒色処理	コロンナデ→底縁土曜丸付付 墨書あり	完全実施	Ⅱ区		
15	土師器	杯	13.0	5.8	3.9	シガキ→黒色処理	コロンナデ→底縁土曜丸付付	完全実施	Ⅱ区		
16	土師器	杯	-	-	(3.2)	シガキ→黒色処理	コロンナデ 墨書あり	破片実施	Ⅱ区		
17	土師器	杯	-	-	-	シガキ→黒色処理	コロンナデ 墨書あり	破片実施	Ⅱ区		
18	土師器	瓶	15.0	7.1	5.4	シガキ→黒色処理	コロンナデ→底縁土曜丸付付→高台付付 墨書あり	完全実施	Ⅱ区		
19	土師器	瓶	15.3	7.7	5.5	シガキ→黒色処理	コロンナデ→底縁土曜丸付付→高台付付 墨書あり 覆付着	完全実施	Ⅱ区 カマド		
20	土師器	瓶	14.8	7.8	5.8	シガキ→黒色処理	コロンナデ→底縁土曜丸付付→高台付付 覆付着	完全実施			
21	土師器	杯	14.0	5.8	4.2	シガキ	コロンナデ 底縁縁部	完全実施	ケン		
22	土師器	壺	13.9	-	(9.2)	コロンナデ	コロンナデ 24回同一個体か?	回転実施	Ⅱ区 カマド		
23	土師器	壺	13.7	-	(6.4)	コロンナデ	コロンナデ	回転実施	Ⅱ区		
24	土師器	壺	-	6.8	(5.4)	コロンナデ	コロンナデ→底縁土曜丸付付 22回同一個体か?	完全実施	Ⅱ区 カマド		
25	土師器	壺	19.5	9.3	26.9	胴縁付ヘラナデ	胴縁付ヘラナデ	完全実施	カマド		
26	土師器	壺	21.0	10.0	24.6	胴縁付ヘラナデ	胴縁付ヘラナデ	回転実施	Ⅱ区 カマド		
27	土師器	壺	28.0	-	(20.3)	胴縁付ヘラナデ	胴縁付ヘラナデ	回転実施	Ⅱ区 カマド		
28	土師器	壺	21.0	-	(14.6)	胴縁付ヘラナデ	口縁部ヘラナデ	回転実施	カマド		

第28表 出土遺物観察表(13)

単位 cm・g

H07	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面			
29	土師器	甕	09.2	-	02.6	縦筋ヘラナデ	縦筋ヘラケツ		同転実測	Ⅱ区 カマツ	
30	土師器	甕	19.6	-	05.0	縦筋ヘラナデ	縦筋ヘラケツ		同転実測	Ⅱ区	
31	土師器	甕	19.6	-	05.0	縦筋ヘラナデ(縦目)	縦筋ヘラケツ		同転実測		
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
22	磁石	砂岩	14.1	8.0	2.3	336.99	被熱なし。磁面数2。正面に凸痕				
33	打石	輝石安山岩	26.3	26.5	11.0	16.5g	被熱なし。正面に使用面。磨痕あり				
34	磨石	輝石安山岩	5.8	4.8	1.9	90.91	被熱なし。平ら面				
35	磨石	輝石安山岩	14.0	11.9	3.7	971.66	被熱なし。すり面				
H08	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面			
1	煮炊器	埴	13.6	7.6	4.3	コクロナデ	火だすき板		コクロナデ→底面同転帯切り。火だすき板	同転実測	
2	煮炊器	埴	13.2	6.0	3.7	コクロナデ	火だすき板		コクロナデ→底面同転帯切り。火だすき板	同転実測	
3	煮炊器	埴	-	6.1	0.4	コクロナデ	火だすき板		コクロナデ→底面同転帯切り。火だすき板	同転実測	
4	煮炊器	有台埴	16.5	9.2	4.7	コクロナデ			コクロナデ→底面帯切り→底台貼付	完全実測	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
5	磨石	内野石安山岩	12.4	6.6	3.5	201.08	被熱なし。端部に磨打痕			ホリ	
6	磨石	輝石安山岩	17.5	16.2	3.8	1.96g	被熱なし。すり面			ホリ	
H09	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面			
1	煮炊器	埴蓋	12.6	-	5.3	コクロナデ			コクロナデ→文井蓋ナデ	完全実測	カマツ
2	煮炊器	埴	11.1	-	0.8	コクロナデ			コクロナデ→下部同転ヘラケツ →底り貼付。北側一側係り?	同転実測	Ⅰ区 ケン
3	煮炊器	埴	11.5	-	0.5	コクロナデ			コクロナデ→下部同転ヘラケツ →底り貼付。北側一側係り?	同転実測	Ⅰ区
4	土師器	埴	12.8	-	0.2	コクロナデ			底筋ヘラケツ→口縁コクロナデ	同転実測	Ⅱ区
5	土師器	甕	02.6	-	0.8	縦筋ヘラナデ	縦筋ヘラケツ		同転実測	Ⅰ区 ケン	
6	土師器	甕	02.6	-	0.8	縦筋ヘラナデ	縦筋ヘラケツ		完全実測	Ⅰ・Ⅱ区 カマツ	
7	煮炊器	蓋	-	-	-	ナデ			3本の凸筋。底付文あり	同転実測	Ⅰ区
H10	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面			
1	煮炊器	平底	6.2	-	0.7	コクロナデ			コクロナデ。2.5側一側係り	完全実測	
2	煮炊器	平底	-	5.0	0.4	コクロナデ			コクロナデ。底面近く同転ヘラケツ。北側一側係り	同転実測	
3	土師器	埴	9.8	-	0.2	口縁コクロナデ	ヘラナデ		口縁コクロナデ。ヘラケツ	同転実測	Ⅱ区
4	土師器	埴	13.7	-	4.7	口縁コクロナデ	ナデ→ヒギキ(ヒノミカ)		口縁コクロナデ。ヘラケツ	同転実測	Ⅰ区
5	土師器	甕	19.0	-	0.4	ヘラナデ→ヒギキ	ヘラケツ		ヘラケツ→ヒギキ	同転実測	Ⅰ区
6	土師器	甕	21.2	-	0.3	ヘラナデ	ヘラケツ		ヘラケツ	完全実測	Ⅰ区
7	土師器	甕	07.6	-	0.6	ヘラナデ	口縁コクロナデ		底筋コクロナデ→ヒギキ	同転実測	Ⅰ区
H11	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面			
1	煮炊器	有台埴	11.3	10.2	7.1	コクロナデ			コクロナデ→底面帯切り→同転ヘラケツ→底台貼付	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区
2	煮炊器	埴	11.6	9.2	3.8	コクロナデ	火だすき板		コクロナデ→底面帯切り→ヘラケツ。火だすき板	完全実測	
3	煮炊器	埴	12.8	0.2	3.6	コクロナデ	火だすき板		コクロナデ→底面帯切り。火だすき板	同転実測	Ⅱ区 カマツ
4	煮炊器	埴	-	9.0	0.2	コクロナデ			コクロナデ→底面同転ヘラケツ。底筋にヘラケツあり	同転実測	Ⅲ区
5	煮炊器	甕	03.0	03.0	08.2	コクロナデ			縦筋タタキ目→口縁コクロナデ コクロナデ→底筋と底面外周ヘラケツ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区 カマツ
6	煮炊器	甕	-	11.3	0.7	コクロナデ	縦筋タタキ目→コクロナデ		底筋ナデ。底面外周ヘラケツ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区 ケン
7	土師器	埴	11.6	8.0	6.1	ヒギキ→顔色処理			コクロナデ→底面帯切りヘラケツ	同転実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区
8	土師器	埴	15.8	-	0.1	ヒギキ→顔色処理			コクロナデ	同転実測	Ⅰ区 カマツ
9	土師器	埴	-	8.8	0.4	ヒギキ→顔色処理			コクロナデ→底面ヘラケツ→ヒギキ。磨痕	同転実測	Ⅰ区
10	土師器	甕	21.2	6.0	0.3	縦筋コクロナデ	縦筋コクロナデ		縦筋コクロナデ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区 カマツ
11	土師器	甕	05.0	-	0.2	縦筋ヘラナデ	縦筋ヘラケツ		同転実測	Ⅱ区	
12	土師器	甕	06.8	-	0.1	縦筋ヘラナデ	縦筋ヘラケツ		同転実測	Ⅱ区	
13	土師器	甕	06.4	0.1	8.8	縦筋ヘラナデ	縦筋ヘラケツ		同転実測	Ⅱ区	
14	土師器	台付甕	-	10.3	0.3	コクロナデ	コクロナデ		完全実測	Ⅲ区	
15	土師器	埴	12.6	9.6	4.3	ヒギキ→顔色処理			口縁コクロナデ。底筋ヘラケツ→ヒギキ	完全実測	Ⅱ区 116 Ⅰ区
16	土師器	埴	11.8	11.7	0.8	コクロナデ			口縁コクロナデ→底筋ヘラケツ	同転実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区 ホリ
17	土師器	埴	16.1	16.0	0.2	コクロナデ			口縁コクロナデ→底筋ヘラケツ	同転実測	Ⅲ区
18	土師器	鉢	16.4	8.1	8.8	縦筋ヘラナデ	縦筋ヘラケツ		縦筋ヘラケツ。底筋ヘラケツ→側下ヘラナデ	完全実測	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
14	望め共	陶製品	11.9	0.4	0.05	0.79	一孔あり。孔径0.1。全周欠損			Ⅰ区	
15	磁石	輝石安山岩	19.5	6.6	1.5	1.69g	被熱なし。端部に磨打痕			Ⅳ区	

第29表 出土遺物観察表(14)

単位 cm・g

H42	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	須恵器	杯	15.3	7.3	4.6	ロウナデ 火だすき痕	ロウナデ 底面斜転糸切り 火だすき痕	完全実測	
2	須恵器	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	破片実測	IV区
3	土師器	杯	14.4	6.8	5.1	七がり→黒色処理 覆行巻	ロウナデ	完全実測	
4	土師器	壺	22.2	4.1	27.5	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測	
5	土師器	台付壺	-	9.2	3.3	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測	
H6	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
6	硬石製品	硬石	9.3	7.5	4.7	227.18	複雑なし 全体にナデ 使用痕あり		IV区
7	打割石片	輝石安山岩	(3.9)	(6.1)	(0.8)	(30.23)	複雑なし 刃部のみ残存 使用痕あり		IV区
8	貝類(陶)	鉄製品	(5.1)	(9.6)	(0.2)	(3.10)	類似小刀 両面欠損		
H43	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	須恵器	台付杯	-	6.4	(2.6)	ロウナデ	ロウナデ ヘラナデ→高台付	円転実測	
2	須恵器	杯	(13.6)	6.0	(3.6)	ロウナデ	ロウナデ 底面斜転糸切り	円転実測	
3	須恵器	杯	(12.9)	6.0	(3.3)	ロウナデ	ロウナデ	円転実測	
4	須恵器	杯	(14.2)	(5.8)	(4.1)	ロウナデ	ロウナデ 底面斜転糸切り 火だすき痕	円転実測	H44
5	須恵器	杯	-	-	(2.5)	ロウナデ	ロウナデ 墨書あり	破片実測	
6	須恵器	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	破片実測	
7	土師器	壺	(19.1)	-	(6.4)	ヘラナデ	ヘラナデ	円転実測	
H45	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	須恵器	杯	(13.4)	6.0	4.5	ロウナデ	ロウナデ 底面斜転糸切り	完全実測	
2	須恵器	杯	(13.6)	6.3	(4.2)	ロウナデ	ロウナデ 底面斜転糸切り	円転実測	Ⅱ区 1区ホリ
3	須恵器	杯	13.8	6.3	4.3	ロウナデ	ロウナデ 底面斜転糸切り	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区
4	須恵器	杯	(13.7)	6.4	4.1	ロウナデ	ロウナデ 底面斜転糸切り	円転実測	Ⅰ・Ⅱ区
5	須恵器	杯	(14.1)	(7.4)	(4.8)	ロウナデ	ロウナデ 底面斜転糸切り	円転実測	Ⅱ区
6	土師器	杯	(14.0)	6.2	4.2	七がり→黒色処理	ロウナデ 底面斜転糸切り	完全実測	IV区ホリ
7	土師器	杯	(14.0)	6.0	(3.8)	七がり→黒色処理	ロウナデ 底面斜転糸切り	円転実測	Ⅰ区ホリ
8	土師器	杯	(13.3)	6.0	(4.4)	七がり→黒色処理	ロウナデ 底面斜転糸切り	円転実測	Ⅰ・Ⅱ区
9	土師器	杯	(13.6)	-	(3.8)	七がり→黒色処理	ロウナデ	円転実測	Ⅰ区
10	土師器	杯	(16.2)	-	(4.6)	七がり→黒色処理	ロウナデ	円転実測	Ⅱ区
11	土師器	杯	(13.1)	6.0	(4.0)	七がり	ロウナデ 底面斜転糸切り	円転実測	Ⅰ区ホリ
12	土師器	杯	(13.4)	6.0	(4.1)	七がり→黒色処理	ロウナデ 底面斜転糸切り	円転実測	Ⅱ・IV区 IV区ホリ
13	土師器	碗	14.5	-	(2.7)	七がり→黒色処理	ロウナデ 底面斜転糸切り→高台付 高台内面黒色処理 墨書あり	完全実測	ケン
14	土師器	杯	-	-	(2.9)	七がり→黒色処理	墨書あり	破片実測	Ⅰ区ホリ
15	土師器	杯	-	-	(2.3)	七がり→黒色処理	ロウナデ 墨書あり	破片実測	Ⅰ区
16	土師器	杯	-	-	(1.7)	七がり→黒色処理	ロウナデ 墨書あり	破片実測	Ⅱ区
17	土師器	杯	-	-	(3.1)	ロウナデ	ロウナデ 墨書あり	破片実測	Ⅱ区
18	土師器	杯	-	6.3	(1.7)	七がり→黒色処理	ロウナデ 底面斜転糸切り 墨書あり	円転実測	Ⅰ区ホリ
19	土師器	碗	-	(7.6)	(2.7)	七がり→黒色処理	底面斜転糸切り→高台付 高台内面 墨書あり	円転実測	Ⅱ区
20	土師器	碗	(14.7)	(7.1)	(3.7)	七がり 緑文→黒色処理	ロウナデ 底面斜転糸切り	完全実測	IV区
21	土師器	碗	15.4	6.9	5.4	七がり 緑文→黒色処理	ロウナデ 底面斜転糸切り→高台付	完全実測	Ⅱ区 ケン
22	土師器	壺	(23.8)	-	(4.7)	ヘラナデ	ヘラナデ	円転実測	Ⅱ区
23	土師器	壺	(18.2)	-	(6.8)	ヘラナデ	ヘラナデ	円転実測	Ⅰ区ホリ
24	土師器	壺	(18.8)	-	(23.6)	ヘラナデ	ヘラナデ	円転実測	Ⅰ・Ⅱ区
H6	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
25	硬石	砂岩	(8.7)	(4.6)	(5.6)	(293.63)	複雑なし 上下大端 両面欠損		IV区ホリ
26	硬石	輝石安山岩	12.8	6.2	4.6	522.62	複雑なし 正面→磨行痕		IV区
27	鎌	鉄製品	23.5	3.2	0.3	(73.67)	一部欠損 左鎌		
28	刀子	鉄製品	(12.6)	1.3	0.5	(15.99)	刃先欠損		
29	刀子	鉄製品	(6.9)	(1.1)	(0.4)	(8.48)	両面欠損		
30	短冊鏡	鉄製品	11.4	(3.1)	1.6	(26.49)	鏡身片側欠損		
31	残片	鉄製品	(3.0)	(6.3)	(0.3)	(1.64)	土師瓦		ケン
H46	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面		
1	土師器	杯	14.4	11.5	4.9	ホニカ部ナデ→口縁コナデ→埋文	口縁コナデ→底面ヘラナデ 不明しナデ	完全実測	
2	土師器	杯	10.7	8.6	3.6	ホニカ部ナデ→口縁コナデ	口縁コナデ→底面ヘラナデ	完全実測	
3	土師器	鉢	13.4	10.0	10.5	口縁コナデ→胴部中心底面ヘラナデ	口縁コナデ→底面ヘラナデ 底面→木葉	完全実測	
4	土師器	鉢	12.9	-	11.7	口縁コナデ→胴部中心底面ヘラナデ	口縁コナデ→底面ヘラナデ	完全実測	
5	土師器	壺	20.1	5.8	23.2	胴部中心底面ヘラナデ	胴部ヘラナデ→ナデ 底面ヘラナデ	完全実測	
6	土師器	壺	(21.4)	-	(25.7)	胴部ヘラナデ	胴部ヘラナデ	円転実測	Ⅰ区

第30表 出土遺物観察表(15)

単位 cm・g

H40	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(径)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面				
7	土師器	甕	21.8	3.5	36.1	胴部から底部へラナデ	胴部へラケツヨ 底部へラケツヨ	完全実測	1区		
8	土師器	甕	14.0	0.0	23.4	ヒガキ 胴部から底部へラナデ	胴部へラケツヨ 底部へラケツヨ	計軸実測	1・B区		
9	土師器	甕	17.6	-	(11.0)	胴部へラナデ	胴部へラケツヨ 胴部へラケツヨ→ヒガキ	完全実測	1・B・西区		
10	土師器	甕	20.8	-	(11.0)	胴部へラケツヨ	胴部へラケツヨ 胴部へラケツヨ→ヒガキ	完全実測	1区		
11	土師器	甕	03.7	-	(28.8)	胴部へラナデ	胴部へラケツヨ→ヒガキ	完全実測	1・B区・カマド 1942		
12	土師器	甕	22.0	10.0	32.0	胴部上半へラナデ 胴部下半から 底部へラケツヨ	胴部上半へラケツヨ 胴部下半へラナデ 底部へラケツヨ	完全実測			
13	土師器	甕	-	8.6	(28.5)	ヘラケツヨ	ヘラケツヨ→ヒガキ	完全実測	1・B・西区		
14	土師器	甕	-	8.1	(8.0)	へラナデ	へラケツヨ	完全実測	1区		
20	縄文	図録	-	-	-	縄文(中期後半)	-	破片実測	B区		
21	図録	図録	-	-	-	ヨコナデ→廻り目 自然輪付蓋	ヨコナデ→へラケツヨ 自然輪付蓋	破片実測	B区		
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考	出 土 位 置			
15	磨石	燧石	14.0	7.0	3.8	09.21	被熱丸。すや面2 海面に磨行直	1区			
16	磨石	燧石(安山岩)	14.0	5.7	3.6	05.91	被熱丸。海面に磨行直	1区			
17	磨石	角閃石(安山岩)	7.8	3.0	1.5	43.71	被熱丸。全体にすり	1区			
18	磨石	角閃石(安山岩)	14.1	7.3	4.1	86.46	被熱丸。下部被熱化。すや面2 海面に磨行直	B区			
19	磨石	燧石(安山岩)	15.7	8.5	5.5	765.16	被熱丸。すや面1	1区			
H47	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
口径(径)			底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面					
1	土師器	杯	6.6	-	(3.0)	ヨコナデ 自然輪付蓋	ヨコナデ 自然輪付蓋	計軸実測	B区		
2	土師器	杯	13.0	-	(3.0)	白線ヨコナデ ヨコナデ	白線ヨコナデ へラケツヨ	計軸実測	B区 1区B区		
3	土師器	杯	13.0	-	(4.0)	白線ヨコナデ へラナデ	白線ヨコナデ へラケツヨ	計軸実測	B区		
4	土師器	甕	02.0	-	(0.0)	へラナデ	へラケツヨ	計軸実測			
H48	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
口径(径)			底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面					
1	土師器	埴輪	(11.0)	-	(3.0)	ヨコナデ	ヨコナデ 丸井部へラケツヨ へラ記号あり(巻成前)	完全実測	1区		
2	土師器	埴輪	(12.7)	-	(3.0)	ヒガキ	ヒガキ	完全実測	1区		
3	土師器	埴輪	12.6	-	5.1	ヒガキ	白線ヨコナデ へラケツヨ	完全実測	1区		
4	土師器	鉢	13.0	-	(10.0)	ヒガキ	へラケツヨ→ヒガキ	完全実測			
5	土師器	蓋(附)	-	-	(4.6)	黒色処理	-	完全実測	1区		
6	土師器	甕	19.3	-	35.2	へラナデ	へラケツヨ	完全実測			
7	土師器	甕	00.0	-	(20.7)	へラナデ	へラケツヨ	完全実測	1区		
8	土師器	甕	-	(5.0)	(18.2)	へラナデ	へラケツヨ	計軸実測	カマド		
9	土師器	甕	-	9.1	(2.4)	へラナデ	へラケツヨ	完全実測	1区 ケン		
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考	出 土 位 置			
10	磨石	硬質砂岩	21.0	8.2	2.2	07.17	被熱丸。西海面に磨行直	B区			
11	磨石	花崗岩	13.2	11.2	6.6	1.15kg	被熱丸。すや面1 海面に磨行直				
12	磨石	燧石(安山岩)	12.6	10.5	4.2	79.02	被熱丸。すや面2				
13	磨石	石英(安山岩)	14.2	9.6	3.9	63.50	被熱丸。海面に磨行直	1区			
14	磨石	燧石(安山岩)	5.5	4.1	3.4	95.10	被熱丸。全体にすり	1区			
H49	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
口径(径)			底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面					
1	土師器	埴輪	13.6	11.6	5.0	丸こみ器ナデ→白線ヨコナデ→ヒガキ	白線ヨコナデ→底部へラケツヨ→ヒガキ 備付直	完全実測	1区		
2	土師器	埴輪	(4.3)	(3.2)	(5.3)	ヨコナデ→ヒガキ	白線ヨコナデ→底部へラケツヨ→ヒガキ	計軸実測	カマド		
3	土師器	埴輪	(15.0)	(11.0)	4.4	ヨコナデ へラナデ→黒色処理	白線ヨコナデ→底部へラケツヨ	計軸実測	B区		
4	土師器	甕	(15.2)	-	(4.4)	ヨコナデ→ヒガキ	ヨコナデ→黒文	計軸実測	B区		
5	土師器	甕	-	3.8	(6.2)	ナデ	胴部へラケツヨ 底部へラケツヨ	完全実測			
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考	出 土 位 置			
6	磨石	燧石(安山岩)	15.4	8.3	4.4	627.77	被熱丸。海面に磨行直	カマド			
7	図録	鉄製品	(6.9)	(2.3)	(0.5)	(12.13)	表面 磨身被熱丸				
H50	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
口径(径)			底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面					
1	土師器	埴輪	07.0	-	(3.0)	ヒガキ→黒色処理	ヒガキ	計軸実測	B区		
2	土師器	埴輪	(16.0)	-	(3.3)	ヒガキ→黒色処理	ヒガキ	計軸実測	B区		
3	土師器	短冊蓋	(10.0)	-	(6.0)	胴部へラナデ	胴部へラケツヨ	計軸実測	B区 ケン		
4	土師器	甕	-	8.0	(2.7)	ナデ	胴部へラケツヨ 底部へラケツヨ	計軸実測	1区		
5	土師器	甕	(25.2)	-	(6.0)	胴部へラナデ 磨丸	胴部へラケツヨ 磨丸	計軸実測	B区		
6	土師器	甕	-	(5.0)	(15.2)	へラナデ	胴部へラケツヨ 底部へラケツヨ	計軸実測	B区		
H51	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考	出 土 位 置			
1	磨石	硬質砂岩	11.3	13.5	3.1	963.42	被熱丸。下に磨行直				

第31表 出土遺物観察表(16)

単位 cm・g

H02	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様 ・ 備 考		実測方法	出 土 位 置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面			
1	壺形器	埴	15.00	10.20	3.7	ロクロナデ 大径ナデ	ロクロナデ→底面回転→平切り 大径ナデ	回転実測		
2	壺形器	埴	13.40	9.20	4.2	ロクロナデ 自然輪付着	ロクロナデ→底面回転→平切り	回転実測		
3	壺形器	埴	-	-	-	ナデ 当て具	999年目 自然輪付着		B区	
4	壺形器	埴	-	-	-	ナデ 当て具	999年目→ヘラナデ	破片実測		
5	壺形器	埴	-	-	(12.6)	当て具 ナデ 自然輪付着	999年目 ナデ	完全実測	B区 B区中	
6	土師器	埴	12.4	-	(4.8)	製造ヘラナデ	製造ヘラナデ	完全実測	B区	
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量		備 考	出 土 位 置	
7	磨り石	硬質砂岩	9.2	7.7	1.7	200.7g	被熱なし。平巾		I区B中	
8	磨り石	白色砂石	8.1	6.9	2.8	35.04	被熱なし。全体に平巾		B区B中	
9	不明	鉄製品	5.1	1.8	1.1	8.02	欠損状況不明 銅あり		B区B中	
H04	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様 ・ 備 考		実測方法	出 土 位 置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面			
1	緑釉陶器	瓶	14.2	-	(3.6)	ロクロナデ 旋輪	ロクロナデ 旋輪	回転実測		
2	緑釉陶器	瓶	13.00	-	(4.0)	ロクロナデ 旋輪	ロクロナデ 旋輪	回転実測		
3	壺形器	高	16.00	-	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部回転ヘラナデ	回転実測	タン	
4	壺形器	埴	13.20	9.00	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ→回転ヘラナデ	回転実測	I区	
5	壺形器	焼瓶	-	-	-	曹海宮文	999年目	破片実測	I区	
6	土師器	壺	23.20	-	(10.3)	ナデ	ヘラナデ	回転実測		
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量		備 考	出 土 位 置	
7	磨り石	石英安山岩	7.0	5.0	2.4	99.15	被熱なし。平巾		B区	
8	磨り石	凝灰岩	(12.4)	(5.5)	(5.2)	(670.88)	被熱なし。被熱なし。下縁欠損 正面に磨り痕			
9	磨り石	花崗岩	16.8	5.7	3.6	80.29	被熱なし。両面 磨削に磨り痕 正面に磨り痕		IV区	
10	磨り石	安山岩	23.5	13.8	7.8	2,732g	被熱なし。左側に磨り痕		II区	
11	磨り石	角閃石安山岩	17.1	7.2	5.0	612.25	被熱なし。下縁部に磨り痕			
12	不明	安山岩	11.7	7.5	6.8	616.20	被熱なし。			
13	磨り石	安山岩	12.0	6.5	3.9	378.62	被熱なし。下縁部に磨り痕		II区	
14	磨り石	角閃石安山岩	11.4	5.5	2.8	254.53	被熱なし。縁部に磨り痕			
15	磨り石	花崗岩	9.8	3.2	2.3	95.85	被熱なし。上下両部に正面に磨り痕		I区	
16	角輪	鉄製品	(7.1)	(6.7)	(6.7)	(34.53)	両端欠損		IV区	
17	鎌	鉄製品	(13.2)	2.6	0.2	(27.40)	刀先欠損			
18	刀子	鉄製品	(2.5)	(0.7)	(0.2)	(1.30)	刀端のみ残存			
19	碧玉	碧玉	0.5	0.5	1.8	0.61	被熱なし。			
H06	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量		備 考	出 土 位 置	
1	磨り石	輝石安山岩	9.9	9.7	1.6	255.51	被熱なし。平巾		B区	
H07	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量		備 考	出 土 位 置	
1	磨り石	安山岩	15.7	6.8	4.5	396.46	被熱なし。上下両部に磨り痕			
H09	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量		備 考	出 土 位 置	
1	磨り石	黄岩	(7.4)	(5.0)	(0.2)	(81.68)	大熱なし。上部欠損 下縁部に磨り痕			
H00	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様 ・ 備 考		実測方法	出 土 位 置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面			
1	壺形器	埴	-	-	(3.3)	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部回転ヘラナデ	回転実測	B区	
2	土師器	埴	12.3	-	3.4	シガキ	シガキ	完全実測		
3	土師器	埴	12.8	-	3.7	シガキ 褐色地埋	シガキ	完全実測		
4	土師器	埴	14.4	12.1	4.1	ナデ	臼羅コナデ 底面ヘラナデ	回転実測	I区	
5	土師器	埴	18.00	-	(20.3)	ハケ目	ヘラナデ→ヘラナデ	完全実測	I区	
6	土師器	埴	18.6	4.8	29.2	ハケ目→ヘラナデ	ハケ目→ヘラナデ 底面に木炭痕	完全実測	1・B区 カボ	
H02	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様 ・ 備 考		実測方法	出 土 位 置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面			
1	土師器	埴	13.00	10.60	6.7	シガキ	臼羅コナデ 底面ヘラナデ	回転実測		
2	土師器	壺	21.0	-	(10.4)	ヘラナデ	ヘラナデ→ヘラナデ	回転実測	MS4 M2	
3	土師器	壺	-	9.0	(5.4)	シガキ	ヘラナデ→ヘラナデ	回転実測		
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量		備 考	出 土 位 置	
4	磨り石	安山岩	9.4	7.5	6.9	361.15	被熱なし。縁部に磨り痕		B区	
5	磨り石	石英安山岩	10.2	7.3	6.1	982.06	被熱なし。上下両部に正面に磨り痕		B区	
H03	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様 ・ 備 考		実測方法	出 土 位 置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面			
1	土師器	壺	21.7	7.3	36.8	ハケ目 ハケ目の残存ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ ヘラナデ 底面ヘラナデ	完全実測	
2	土師器	壺	23.2	-	(22.6)	ヘラナデ ハケ目の残存ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測	ホリ
3	土師器	壺	22.1	-	(18.8)	ハケ目 ハケ目の残存ナデ	ヘラナデ	ハケ目→ヘラナデ	完全実測	
4	土師器	壺	14.80	6.0	14.2	ヘラナデ	製造→底面ヘラナデ	完全実測		

第32表 出土遺物観察表(17)

単位 cm・g

H03	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面				
1	土師器	甕	04.0	-	(12.0)	ヘラ目地の焼成ナデ ヘラ目 ヘラナデ				ヘラナデ	印転実測	M13
2	土師器	不明	02.0	-	(5.0)	コブナデ ヘラナデ				コブナデ ヘラナデ	印転実測	ホリ
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考				出土位置	
7	磁石	輝石安山岩	12.9	8.0	0.3	742.17	焼物なし。縁部に磨行痕					
8	磁石	安山岩	12.8	7.9	4.2	55.82	焼物なし。上下両面に磨行痕					
9	磁石	安山岩	13.4	6.9	4.3	552.71	焼物なし。下両面に磨行痕					
10	不明	石英安山岩	12.4	8.7	3.3	506.62	焼物なし。					
11	燧石	石英安山岩	12.1	5.6	2.5	247.33	焼物なし。片割れあり					
H04	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面				
1	埴輪器	埴	-	02.0	(2.1)	コブナデ 火打すき板		コブナデ 底縁に印転痕あり 火打すき板		印転実測		
2	土師器	埴	06.0	-	(5.6)	コブナデ 七ギキ 黄色地埋		コブナデ		印転実測		
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考				出土位置	
3	粘土	粉製品	08(15.3)	08(9.7)	08(0.7)	(54.95)	円板径5.9 円板厚0.2 両面文様					
H05	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面				
1	土師器	埴	00.0	01.0	3.4	ナデ		底縁ヘラナデ		完全実測		
2	土師器	埴	00.0	-	(3.5)	コブナデ		コブナデ		印転実測	ケン	
3	土師器	埴	07.1	-	12.8	七ギキ		ヘラナデ 七ギキ		完全実測		
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考				出土位置	
4	磁石	安山岩	(11.0)	(8.1)	(3.6)	(307.11)	焼物なし。縁部に磨行痕				I区	
5	燧石	燧製品	(4.9)	(3.6)	(0.4)	(10.12)	素材厚0.1 新刃たまえる					
H06	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面				
1	土師器	埴	02.0	09.0	3.6	ナデ		底縁ヘラナデ		印転実測	II区	
2	土師器	埴	02.0	10.5	3.6	七ギキ		七ギキ 底縁ヘラナデ→七ギキ		完全実測	I区 P2	
3	土師器	埴	03.0	01.0	(4.3)	七ギキ		七ギキ 底縁ヘラナデ→七ギキ		印転実測	I・II区	
4	土師器	埴	02.0	09.0	4.1	七ギキ 磨削		七ギキ 底縁ヘラナデ		完全実測	I・II区	
5	土師器	埴	10.0	5.2	4.5	ナデ 黄色地埋		ヘラナデ 底縁ヘラナデ		完全実測		
6	土師器	埴	13.9	11.6	4.6	七ギキ→黄色地埋		七ギキ 底縁ヘラナデ→七ギキ		完全実測	II区	
7	土師器	甕	07.2	-	(6.0)	ナデ		ナデ		印転実測	II区	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考				出土位置	
8	燧石	輝石安山岩	14.8	10.6	3.4	288.29	焼物なし。すき面2					
9	磁石	輝石安山岩	13.0	6.9	3.1	357.18	焼物なし。縁部に磨行痕					
10	刀子	燧製品	(7.6)	(9.9)	(0.3)	(4.50)	茶葉文様 木質改良				II区	
F1	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面				
1	埴輪器	甕	03.0	2.3	2.6	コブナデ		コブナデ→文部部ヘラナデ→つまみ取付		完全実測	P3	
2	埴輪器	甕	03.0	7.0	4.0	コブナデ 火打すき板		コブナデ→底縁印転痕あり 火打すき板		完全実測	P1 F2-F4	
3	埴輪器	甕	04.0	6.6	4.6	コブナデ		コブナデ→底縁印転痕あり ヘラ目あり		完全実測	P3	
4	埴輪器	瓶	03.0	-	(18.0)	コブナデ		コブナデ 自然磨行着		印転実測	P1 F264 F23-P3 F28-P1	
5	埴輪器	甕	02.0	-	(4.1)	コブナデ		コブナデ		印転実測	P3 F6 F203	
F4	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面				
1	埴輪器	埴	03.0	07.0	3.8	コブナデ 火打すき板		コブナデ→底縁印転ヘラナデ 火打すき板		印転実測	P6	
F7	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面				
1	埴輪器	埴	04.0	00.0	4.2	コブナデ		コブナデ→底縁印転ヘラナデ		印転実測	P11 V7 18G+	
2	埴輪器	埴	-	07.0	(2.4)	コブナデ 磨削		コブナデ→底縁ナデ		印転実測	P2	
3	土師器	埴	03.0	-	(3.7)	コブナデ→磨文 縁付着 磨削		口縁コブナデ→ヘラナデ		印転実測	P3	
4	土師器	埴	-	-	(2.1)	ふこみ部ナデ		口縁コブナデ→器内磨文		口縁コブナデ 底縁ヘラナデ→一部のみ	複合実測	P2
F8	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面		外面				
1	埴輪器	甕	-	(3.7)	(2.2)	コブナデ		コブナデ→つまみ取付		印転実測	P9 F10	
2	埴輪器	甕	-	06.0	(3.3)	コブナデ		コブナデ 自然磨行着		印転実測	P3	
3	埴輪器	甕	-	04.0	00.1	コブナデ		コブナデ→底縁印転ヘラナデ 自然磨行着		印転実測	P5	
4	土師器	埴	07.0	02.0	5.5	ふこみ部ナデ		口縁コブナデ→器内磨文 タール塗付着		コブナデ→底縁印転ヘラナデ 自然磨行着	印転実測	P4
F9	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考				出土位置	
1	長細筒	粉製品	12.3	6.8	0.3	7.22	断面 片方 内開				P9	

第33表 出土遺物観察表(18)

単位 cm・g

F10	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色処理		コウナダ 墨書あり		鏡片実測	P2
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考				出 土 位 置
2	台石	湖沼層灰岩	24.6	25.4	6.6	3.7kg	被熱なし、正面に十字彫刻				P4
F11	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色処理		コウナダ 墨書あり		鏡片実測	P4
2	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色処理		コウナダ 墨書あり		鏡片実測	P4
1	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色処理		コウナダ 墨書あり		鏡片実測	P4
2	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色処理		コウナダ 墨書あり		鏡片実測	P4
F12	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	須恵器	杯	-	-	-	コウナダ		コウナダ 墨書あり		鏡片実測	P7
2	土師器	杯	11.6	-	12.4	コウナダ ナール付書		コウナダ 墨書あり		印刷実測	P7
F13	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色処理		コウナダ 墨書あり		鏡片実測	P4
2	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色処理		コウナダ 墨書あり		鏡片実測	P4
F16	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	須恵器	有台杯	12.4	8.4	5.3	コウナダ		コウナダ→底面印転→高台彫付		印刷実測	P2
2	須恵器	壺	-	17.8	16.4	ナダ →コウナダ		被熱ナシ全周 底部にナダ 自然輪付書		完全実測	P6
F17	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	須恵器	壺	18.2	-	12.8	コウナダ		コウナダ		印刷実測	P7
2	須恵器	有台杯	-	8.1	12.5	コウナダ		コウナダ→高台彫付		印刷実測	P5
3	土師器	杯	13.4	-	13.3	口縁コウナダ		口縁コウナダ→ヘラケツ		印刷実測	P4
F20	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	須恵器	杯	15.4	7.3	4.1	コウナダ 大だすき痕		コウナダ→底面印転→ヘラケツ→印刷ヘラケツ 大だすき痕		完全実測	P9
2	須恵器	壺	-	-	18.0	コウナダ 底面に自然輪付書		コウナダ→高台彫付 自然輪付書		印刷実測	P8
F22	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	須恵器	壺	20.6	-	14.8	コウナダ		コウナダ		印刷実測	P1
2	須恵器	壺	29.8	-	11.8	コウナダ		コウナダ 自然輪付書		印刷実測	P8、V915G
F23	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	須恵器	有台杯	-	10.0	13.5	コウナダ		コウナダ→底面印転→ヘラケツ→高台彫付		印刷実測	P3 F28-P2
F25	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	須恵器	坏蓋	9.4	-	3.7	コウナダ		コウナダ→天井部印刷ヘラケツ 墨みあり		完全実測	P7
2	須恵器	壺	7.4	-	12.2	コウナダ		コウナダ→天井部印刷ヘラケツ(ヘラミみ彫付) 自然輪付書		印刷実測	P1
3	須恵器	杯	13.4	8.3	4.8	コウナダ 大だすき痕		コウナダ→底面印転→大だすき痕		印刷実測	P9
4	土師器	杯	12.8	10.7	4.8	ミガキ→暗文→黒色処理		口縁コウナダ→底面ヘラケツ→黒色処理 面転		完全実測	P5
F27	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	土師器	壺	21.2	-	18.7	ヘラケツ		ヘラケツ		印刷実測	P1 H13-B1C
F28	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	須恵器	高杯	-	10.4	12.4	コウナダ		コウナダ		印刷実測	P3
2	須恵器	高杯	-	8.3	15.4	コウナダ		コウナダ 磨面彫付		完全実測	P3
D1	種別	器種	法 量			成 形・調 整・文 様・備 考				実測方法	備 考
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面		外 面			
1	陶器	灯明蓋	8.8	-	18.0	磁輪		磁輪		印刷実測	前山後 18C末～19C前半
2	陶器	灯明蓋	-	14.1	18.7	コウナダ→磁輪		コウナダ→底面彫付→印刷ヘラケツ		印刷実測	前山後 18C末～19C前半
3	陶器	壺	-	-	-	コウナダ→磁輪		コウナダ→6年目→磁輪		鏡片実測	前山後 18C末～19C前半
4	土師質	土師	-	-	-	ナダ		ナダ		鏡片実測	
5	土師質	土師	-	-	-	ナダ		コウナダ→6年目→磁輪		鏡片実測	

第34表 出土遺物観察表(19)

単位 cm・g

D1	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
6	角釘	鉄製品	(2.4)	(0.3)	(0.3)	(1.22)	内堀穴				
D3	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
1	墓石	安山岩	10.7	5.9	4.9	465.0	被熱丸。正面と下面部に磨打痕				
D11	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	須恵器	甕	-	(3.0)	(4.6)	コクロナデ→ハケ目ナデ		コクロナデ→タタキ 底縁周縁に底縁ヘラケ目		回転実測	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
2	角釘	鉄製品	(7.0)	(0.5)	(0.5)	(5.17)	環頭欠損				
D14	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	備考
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	陶器	磁鉢	-	-	-	磁鉢(鉄胎)		磁鉢(鉄胎)		破片実測	約山境 18C末～19C前半
2	陶器	陶製瓶	-	-	(2.7)	磁鉢		磁鉢 塗付?		破片実測	平戸 18C後半
D18	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	備考
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	陶器	灯明蓋	-	(5.2)	(1.4)	コクロナデ→磁鉢(鉄胎)		コクロナデ→底縁を切った磁鉢(鉄胎)		回転実測	
2	陶器	鈴戸蓋	-	-	-			破片実測		鹿内庫 18C末～19C前半	
D20	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	土師器	甕	(20.0)	-	(7.5)	コクロナデ		コクロナデ		回転実測	
D32	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	須恵器	甕	-	-	-	コクロナデ→ナデ		コクロナデ→ハケ目		破片実測	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
2	不明	銅製品	1.5	1.9	0.7	3.70					
3	不明	銅製品	(1.3)	(1.1)	(0.2)	(0.67)	破片と思われ				
4	支脚石	白色軽石	(18.0)	(14.6)	(11.7)	(805.0)	被熱丸。下部欠損				
D34	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	須恵器	埴	(3.0)	(7.0)	(3.8)	コクロナデ		コクロナデ 底縁割れヘラケ目 火打キ金		回転実測	
2	須恵器	埴	(3.0)	(6.0)	(3.3)	コクロナデ 研磨		コクロナデ 底縁割れヘラケ目		回転実測	
3	須恵器	埴	-	(6.0)	(1.6)	コクロナデ 研磨		コクロナデ 底縁ヘラケ目→ヘラケ目あり		回転実測	
4	須恵器	埴	(3.7)	7.7	(4.5)	コクロナデ		コクロナデ 底縁割れヘラケ目→ヘラケ目あり(焼成前)		完全実測	
5	須恵器	埴	(4.0)	-	(3.1)	コクロナデ		コクロナデ		回転実測	
6	土師器	埴	(15.0)	(6.2)	(3.6)	ナデ 縮文		口縁コクロナデ→ヘラケ目 底縁ヘラケ目		回転実測	
7	土師器	埴	-	(7.0)	(0.5)	ナデ		体部～底縁ヘラケ目		完全実測	117・B区
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
8	墓石	角閃石安山岩	11.7	6.1	4.7	479.0	被熱丸。上面部に磨打痕				
9	墓石	ホムンフェルス	16.8	6.6	4.1	578.0	被熱丸。上面部に磨打痕				
D35	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	須恵器	埴	-	(6.0)	(2.3)	コクロナデ 火打キ金		コクロナデ 底縁周縁ヘラケ目 底縁割れヘラケ目 火打キ金		回転実測	
2	須恵器	甕	-	-	(6.1)	コクロナデ		コクロナデ 側縁割れ攷文		破片実測	
3	須恵器	甕	-	-	(3.4)	コクロナデ		コクロナデ		破片実測	
4	須恵器	甕	-	-	-	コクロナデ		コクロナデ 側縁周縁着目付		破片実測	
5	須恵器	甕	(5.0)	-	(7.4)	コクロナデ		コクロナデ 側縁割れ攷文(3本)		回転実測	MS-2C
6	須恵器	甕	-	-	(10.4)	コクロナデ 側縁ナデ 体部当て具		コクロナデ→タタキ 側縁周縁着目付		回転実測	
7	須恵器	甕	-	-	(8.1)	コクロナデ 当て具		コクロナデ→タタキ		回転実測	
8	須恵器	甕	-	-	-	コクロナデ→ハケ目ナデ		コクロナデ→タタキ		破片実測	
9	須恵器	甕	-	-	-	コクロナデ 当て具		コクロナデ→タタキ		破片実測	
10	須恵器	甕	-	-	-	コクロナデ 当て具		コクロナデ→タタキ		破片実測	
D36	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	須恵器	甕	-	-	(8.5)	コクロナデ		コクロナデ 側縁割れ攷文		破片実測	
2	須恵器	甕	-	-	-	コクロナデ→ナデ		コクロナデ→タタキ		破片実測	

第35表 出土遺物観察表(20)

単位 cm・g

D36	種別	器種	法量			内面		外面		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内面	外面				
	葉形器	葉	-	-	-	コウナダ ナデ 当て具類		コウナダ ナデ 自然発行着			破片実測
D41	種別	器種	成形・調整・文様・備考								
			法量			内面		外面		実測方法	出土位置
1	瓦輪肉部	輪	0.3.0	0.6.0	0.8.0	コウナダ		コウナダ→割取→ヘラケツ→施輪(コウナダ) 輪花あり			
2	葉形器	杯	0.4.0	0.7.0	3.8	コウナダ		コウナダ→底割取(糸切) 大底平巻			割取実測
3	葉形器	杯	0.3.0	0.6.0	3.9	コウナダ		コウナダ→底割取(糸切)			割取実測 150-II区
4	土師器	杯	12.9	5.8	3.5	コウナダ		コウナダ→底割取(糸切) 器蓋あり			完全実測
5	土師器	杯	0.3.0	0.7.0	3.9	コウナダ→黒色処理		コウナダ→底割取(糸切) 器蓋あり			完全実測 150-II区
6	土師器	杯	-	-	-	土器→黒色処理		コウナダ 器蓋あり			破片実測 150-II区
D43	種別	器種	成形・調整・文様・備考								
			法量			内面		外面		実測方法	出土位置
1	葉形器	蓋	-	0.4.0	0.8.0	コウナダ 自然発行着		コウナダ 底割取(ヘラケツ→歯付) 自然発行着			
2	弥生	高坪	-	-	0.3.0	押製(古キ 赤銅 銅コナダ)		押製(古キ 赤銅 銅コナダ)			完全実測
D45	種別	器種	成形・調整・文様・備考								
			法量			内面		外面		実測方法	出土位置
1	陶器	こね鉢	-	-	-	ナデ		ナデ			
D46	種別	器種	成形・調整・文様・備考								
			法量			内面		外面		実測方法	出土位置
1	土師器	杯	10.0	4.7	3.8	コウナダ		コウナダ 底割取(糸切) 器発行着			
D48	種別	器種	成形・調整・文様・備考								
			法量			内面		外面		実測方法	出土位置
1	弥生	高坪	22.4	-	0.2.0	土器 赤銅		土器 赤銅 口唇部突起(内)			
M1	種別	器種	成形・調整・文様・備考								
			法量			内面		外面		実測方法	出土位置
1	土師器	杯	17.2	7.5	4.2	土器→黒色処理		口縁コウナダ 底割取(糸切) 割取(コウナダ)			
2	弥生	蓋	08.3	-	0.5.0	土器→赤銅 割取		土器→赤銅 割取(糸切) 割取(コウナダ)			完全実測
3	弥生	壺	18.9	8.3	20.4	土器		土器 割取(糸切) 割取(コウナダ)			完全実測
4	弥生	壺	26.1	-	0.2.0	土器		土器 割取(糸切) 割取(コウナダ)			完全実測
M2	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
							備考				
1	長形	鉄製品	0.7.0	0.1.0	0.0.3	0.20g	片先 無部欠損 片打				
M4	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
							備考				
1	角打	鉄製品	0.3.0	0.6.0	0.6.0	0.10g	下部欠損 本質残る				
M6	種別	器種	成形・調整・文様・備考								
			法量			内面		外面		実測方法	出土位置
1	葉形器	杯	0.3.0	0.5.0	4.8	コウナダ 大底平巻		コウナダ 底割取(ヘラケツ) 底割取(ヘラケツ)			
2	土師器	壺	0.1.0	-	0.7.0	ヘラケツ		ヘラケツ			割取実測 NSC
3	瓦質土師	椀鉢	-	0.1.0	0.5.0	コウナダ		コウナダ→底割取			割取実測 SIC
M7	種別	器種	成形・調整・文様・備考								
			法量			内面		外面		実測方法	出土位置
1	有部	漆文文房	-	-	0.4.0	コウナダ→板文→施輪		コウナダ→漆文文房→ハケケツ→施輪			
2	陶器	こね鉢	02.0	-	0.5.0	コウナダ 自然発行着		コウナダ			割取実測 中津川 山南遺跡 13C後半
3	陶器	新緑鉢	-	-	-	施輪		コウナダ→施輪			破片実測 土層 古部Y13C→14C
4	土師器	か+い+は+?	-	0.6.0	0.8.0	コウナダ		コウナダ→底割取(糸切)			割取実測 Y198Gz 在池 15C後半
5	土師器	か+い+は+?	-	0.6.0	0.2.0	コウナダ		コウナダ→底割取(糸切)→底割取(糸切)			割取実測 Y198Gz 在池
6	土師器	か+い+は+?	-	0.6.0	0.1.0	コウナダ		コウナダ→底割取(糸切)			割取実測 Y198Gz 在池 15C後半
7	土師器	か+い+は+?	-	0.6.0	0.2.0	コウナダ 割取		コウナダ→底割取(糸切)→底割取(糸切)			割取実測 Y198Gz 在池 15C後半
8	土師器	か+い+は+?	-	0.6.0	0.2.0	コウナダ		コウナダ→底割取(糸切)→底割取(糸切)			割取実測 Y198Gz 在池
9	土師器	か+い+は+?	-	0.6.0	0.2.0	コウナダ		コウナダ→底割取(糸切)→底割取(糸切)			割取実測 Y198Gz 在池
10	土師器	か+い+は+?	-	0.6.0	0.1.5	コウナダ 発行着		コウナダ→底割取(糸切)			割取実測 土層 在池
11	土師器	壺+蓋?	-	8.8	0.5.0	ハケケツのナデ→ヘラケツ		土器 発行着			完全実測 Y198Gz
%2	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
							備考				
1	日本	漆石	1.2	1.1	0.6	1.17	複製品、孔径0.3 正置にも磨痕あり				
13	約物(LEF)	雲山石	0.3.4	0.6.4	0.3	0.4	0.35kg	複製品、芯径0.6 約1/2残存			

第36表 出土遺物観察表(21)

単位 cm・g

M9	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様 ・ 備 考				実測方法	出 土 位 置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面					
1	青磁	碗	-	-	-	無輪	無輪			破片実測		
2	青磁	蓮弁文碗	-	-	(3.7)	無輪	蓮弁文-無輪			破片実測	陸奥国 13C	
3	陶器	不明	-	-	-	ココナデ 自然輪付着	ナデ(ハナ状工具)			破片実測	宮澤	
4	土師質	かたむしげ	(10.3)	(7.2)	2.3	ココナデ	ココナデ→底縁彫刻糸切			折斷実測	在埋 15C	
5	土師質	かたむしげ	(12.3)	(8.0)	2.7	ココナデ	ココナデ→底縁彫刻糸切			折斷実測	在埋 15C	
6	土師質	かたむしげ	(8.8)	(5.2)	1.8	ココナデ	ココナデ→底縁糸切			折斷実測	在埋 鎌倉	
7	土師質	かたむしげ	(10.1)	(6.1)	(3.0)	ココナデ	ココナデ→底縁彫刻糸切			折斷実測	在埋	
8	土師質	かたむしげ	(10.6)	(6.0)	2.3	ココナデ	ココナデ→底縁糸切			折斷実測	在埋 15C後半	
9	土師質	かたむしげ	(11.6)	(6.4)	2.3	ココナデ	ココナデ→底縁ヘラズリ 覆付着			折斷実測	在埋 15C後半	
10	土師質	かたむしげ	-	-	-	ココナデ→みこみ器ナデ	覆けている	ココナデ→底縁糸切		完全実測	下層 在埋 15C	
11	土師質	かたむしげ	-	-	-	ココナデ	ココナデ→底縁糸切			破片実測	在埋	
12	土師質	かたむしげ	-	(7.0)	(3.4)	ココナデ→黒色地用ナ	ココナデ→底縁糸切→黒色地用ナ			折斷実測	在埋	
13	土師質	かたむしげ	-	(7.0)	(3.2)	ココナデ→みこみ器ナデ	ココナデ→底縁糸切→ナデ			折斷実測	下層 在埋 15C後半	
14	土師質	かたむしげ	-	(6.0)	(3.1)	ココナデ	ココナデ→底縁糸切			折斷実測	在埋 15C後半	
15	土師質	かたむしげ	-	(6.2)	(3.0)	ココナデ	ココナデ→底縁彫刻糸切			折斷実測	在埋	
16	土師質	かたむしげ	-	(7.2)	(3.3)	ココナデ	ココナデ→底縁彫刻糸切			折斷実測	在埋 15C後半～16C前半	
17	土師質	かたむしげ	-	8.5	(3.7)	ココナデ→みこみ器ナデ	覆付着	ココナデ→底縁彫刻糸切	覆付着	完全実測	在埋 15世紀	
18	土師質	かたむしげ	-	-	-	ココナデ	覆付着	ココナデ→底縁糸切		破片実測	在埋 15C後半～16C前半	
19	土師質	かたむしげ	-	-	-	ココナデ	覆付着	ココナデ→底縁糸切→底縁外周に3条の沈線	覆付着	破片実測	在埋	
20	土師質	かたむしげ	-	-	-	ココナデ	ココナデ→底縁糸切	底縁に付着物あり		破片実測	在埋	
21	瓦質	水鉢	-	-	-	ココナデ	覆けている	ココナデ→2条の沈線あり	底縁に透き入り(成焼)	覆けている	破片実測	中世
22	土師質	土鍋	-	-	(4.4)	ココナデ	ココナデ			破片実測	15世紀中ごろ	
23	土師質	土鍋	-	-	-	ナデ	覆けている			破片実測		
24	土師質	土鍋	-	-	-	ココナデ	ナデ	覆けている		破片実測		
25	土師質	土鍋	-	-	-	ナデ	ナデ			破片実測		
26	陶器	埴	-	-	(3.2)	彫刻している	自然輪付着			破片実測	埴場に転用	
27	黒点器	有台伴	(9.4)	-	(7.2)	ココナデ	ココナデ→底縁切離し	底縁外周彫刻ヘラズリ→系台伴付		折斷実測	下層	
28	黒点器	壺	-	-	-	当て具載→器ナデ	タタ目			破片実測		
29	土師器	埴	14.6	10.2	4.4	みこみ器ナデ	口縁ココナデ→取文(放射・縦線)	口縁ココナデ→底縁・口縁部ヘラズリ		破片実測		
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考			出 土 位 置		
30	磁石	陶瓦器	(5.0)	(2.0)	(1.6)	(24.87)	披懸なし	磁面数4	正裏に鎌倉の使用痕	高橋と下層欠損あり		
31	白玉	滑石	1.6	1.6	1.1	4.71	披懸なし	2孔あり	49.2 一方は彫刻している		下層	
32	石鏝	黒曜石	1.85	1.85	0.3	0.96	披懸なし	未製品小				
33	磨石	輝石安山岩	6.6	3.2	1.7	36.29	披懸なし	すり面2			下層	
34	磨り磁石	安山岩	8.9	6.5	2.3	221.26	披懸なし	すり面と磨面に磨行痕				
35	磨石	輝石砂岩	11.0	5.7	3.4	294.17	披懸なし	両面に磨行痕				
36	角釘?	鉄製品	(5.0)	(6.5)	(0.4)	(2.20)	下部欠損	「銅金」の一部とも考えられる			下層	
37	角釘	鉄製品	(4.4)	(6.3)	(0.4)	(1.73)	下部欠損					
38	角釘	鉄製品	(4.4)	6.8	0.6	(3.89)	先端欠損					
39	角釘	鉄製品	(4.7)	6.8	0.5	(3.18)	先端欠損					
40	古銭	銅製品	2.45			2.70	「金末通貨」1030年(北本) 良書					
41	古銭	銅製品	2.45			2.50	「新泉元寶」1068年(北本) 良書					
M10	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様 ・ 備 考				実測方法	出 土 位 置	
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面					
1	黒点器	壺	-	-	-	ナデ	タタ目 自然輪付着			破片実測	中層	
2	黒点器	葵・盛?	-	-	-	自然輪付着	輪郭状文 沈線 自然輪付着			破片実測	ケン	
3	陶器	碗	-	-	-	無輪	無輪			破片実測	中層	
4	土師質	かたむしげ	(8.1)	(6.0)	2.3	ココナデ	ココナデ→底縁左折断糸切			完全実測	中層	
5	土師質	かたむしげ	(6.0)	(6.0)	1.8	ココナデ	ココナデ→底縁彫刻糸切			折斷実測	中層	
6	土師質	かたむしげ	(8.2)	(5.7)	2.8	ココナデ	ココナデ→底縁彫刻糸切			折斷実測	中層	
7	土師質	かたむしげ	-	(6.2)	(2.6)	ココナデ	ココナデ→底縁糸切	覆付着		折斷実測	中層	
8	土師質	かたむしげ	-	(5.0)	(3.0)	ココナデ	ココナデ→底縁彫刻糸切	覆けている		折斷実測	中層	

第37表 出土遺物観察表(22)

単位 cm・g

M10	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
9	磁石	磁灰岩	7.2	4.8	(2.5)	(75.7)	披懸丸、裏面割線 両面取33面以上、糸痕・磨痕あり				
10	磁石	硬質砂岩	4.5	1.7	0.9	11.87	披懸丸、全体に十字		ケン		
11	磨り磁石	石高灰山岩	12.8	10.7	5.0	776.77	披懸丸、十字形 縁辺に磨痕		下層		
M11	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	弥生	鉢	13.0	-	(5.7)	ミガキ一赤彩	ミガキ一赤彩			回転実測	上層
2	弥生	高坪	13.0	-	(5.0)	ミガキ一赤彩	ミガキ一赤彩			回転実測	下層
3	弥生	鉢	-	4.4	(4.1)	ミガキ一赤彩	ミガキ一赤彩			回転実測	上層
4	弥生	高坪脚	-	16.0	(5.0)	ミガキ一部赤彩	ミガキ一赤彩			回転実測	上層
5	弥生	蓋	13.0	-	(4.0)	ハク目の残心ナデ	ミガキ一赤彩 縹磁模文一縹磁垂下文			完全実測	上層・下層
6	弥生	蓋	-	16.0	(2.5)	ハク目の残心ナデ	ミガキ一赤彩 底面全面ミガキ 5:1同一全体			完全実測	上層・下層
7	弥生	蓋	-	-	(19.7)	ハク目の残心ナデ 磨耗	ミガキ一赤彩	調整は回転実測 磨耗は完全実測			上層・下層
8	弥生	蓋	-	8.7	(17.2)	ハク目の残心ナデ	ミガキ一赤彩 覆付 断面磨ってある			完全実測	二次利用か?
9	弥生	蓋	-	-	(18.5)	ハク目の残心ナデ	ハク目の残心ナデ一ミガキ			回転実測	下層
10	弥生	甕	16.8	5.7	20.3	ミガキ	ミガキ ハク目の残心ナデ 縹磁模文 磨耗			完全実測	
11	弥生	甕	16.8	-	(16.9)	ミガキ	ミガキ 縹磁模文 縹磁模文 覆付			回転実測	上層
12	弥生	甕	16.8	-	(16.1)	ミガキ	縹磁模文 縹磁模文(口縁上) 磨耗			回転実測	上層
13	弥生	甕	-	4.4	(5.0)	ミガキ	縹磁ミガキ 底面ミガキ 縹磁模文			完全実測	下層
14	弥生	付付甕	-	8.7	(7.1)	ミガキ 磨耗	ヘラナデ			完全実測	下層
15	縄文	図鉢	-	-	-	ナデ	ナデ (中期後半)			破片実測	下層
M12	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	磁器	発付物	-	-	-	発輪	発輪			破片実測	
2	陶器	灰輪脚	-	-	-	発輪	発輪			破片実測	
3	青磁	蓋	-	-	-	発輪	発輪			破片実測	
4	瓦質土器	土鍋	-	-	-	ナデ	ナデ			破片実測	
5	瓦質土器	土鍋	-	-	-	ナデ	ナデ			破片実測	ケン
6	磁器器	坪	13.25	17.0	3.8	コクロナデ 火打ナデ	コクロナデ一底面赤彩あり			回転実測	
7	磁器器	蓋	-	-	-	コクロナデ 自然輪付	コクロナデ一縹磁模文 口管部自然輪付			破片実測	
8	土器器	甕	-	8.1	(1.3)	コクロナデ	コクロナデ一底面赤彩一底面外周ヘラナデ			回転実測	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
9	磁石	磁灰岩	(5.7)	(4.1)	(2.2)	(80.06)	披懸丸、上下文様 両面取				
10	角釘	鉄製品	(2.8)	(1.2)	(0.6)	(4.12)	先端欠損				
M13	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	甕	甕	26.0	-	(7.7)	ナデ	ナデ 自然輪付			回転実測	
2	甕	甕	-	-	-	ナデ	ナデ 自然輪付			破片実測	
3	土師器	甕	26.0	-	(15.1)	ハク目	ヘラケツリ一ミガキ			回転実測	
4	土師器	カニカマ	-	(4.0)	(2.1)	コクロナデ 褐色磨耗	コクロナデ一底面赤彩あり			回転実測	
5	土師器	カニカマ	10.0	10.0	1.8	コクロナデ	コクロナデ一右面赤彩あり			回転実測	
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
6	不明	鉄製品	(2.8)	(1.3)	(0.5)	(2.83)	先端欠損				
7	不明	鉄製品	(4.8)	(2.2)	(0.5)	(6.99)	欠損あり				
OT1	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	土師器	カニカマ	14.0	10.0	3.1	コクロナデ	コクロナデ一底面赤彩あり			回転実測	在庫 15cm後半
OT2	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面		外面			
1	土師器	カニカマ	17.0	15.0	1.8	コクロナデ	コクロナデ一底面赤彩あり			回転実測	在庫 15cm後半
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置		
2	古銭	銅製品	2.4			3.4	「開元元寶」1009年(北宋) 漢書				
3	古銭	銅製品	2.4			3.9	「天聖元寶」1022年(北宋) 漢書				
4	古銭	銅製品	2.46			3.7	「元豊通寶」1079年(北宋) 漢書				
5	古銭	銅製品	2.5			3.1	「開元通寶」?				

第38表 出土遺物観察表(23)

単位 cm・g

OT4	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品				10.7	2枚が熱で歪んで付いている。(写真のみ)		
OT5	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品	2.4			2.8	「景徳元寶」1094年(北宋) 行書		
OT6	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品	2.4			4.2	「洪武通寶」1368年(明)		
2	古銭	銅製品	2.4			3.1	「元豊通寶」1079年(北宋) 行書		
3	古銭	銅製品	2.4			3.3	「景徳元寶」1004年(北宋) 真書		
4	古銭	銅製品	2.4			3.8	「景徳元寶」1004年(北宋) 真書		
5	古銭	銅製品	2.4			3.0	「景徳元寶」1004年(北宋) 真書		
6	古銭	銅製品	2.4			3.0	「開元通寶」960年(南唐) 真書		
7	角打	鉄製品	(2.3)	(0.25)	(0.2)	(0.36)	両端欠損		
OT7	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品	2.4			3.0	「元符通寶」1098年(北宋) 行書 少し欠ける		
OT9	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品	2.4			3.0	「元豊通寶」1079年(北宋) 行書		
2	古銭	銅製品	-			(1.2)	「乾和通寶」1111年(北宋) 真書 1/5欠ける		
3	古銭	銅製品	2.4			3.0	「阜家通寶」1038年(北宋) 真書 4つに割れる。(写真のみ)		
OT10	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品	2.5			2.7	「永通通寶」1108年(明)		
2	古銭	銅製品	2.4			2.5	「元豊通寶」1079年(北宋) 篆書		
3	古銭	銅製品	2.36			2.8	「元〇通寶」1086年(北宋) 篆書		
4	古銭	銅製品	(2.35)			3.4	「元豊通寶」1079年(北宋) 篆書		
5	古銭	銅製品	2.4			3.5	「開元通寶」960年(南唐) 真書		
6	古銭	銅製品	2.4			3.0	「太平通寶」976年(北宋)		
7	古銭	銅製品	-			(1.0)	割れて1/3残存。(写真のみ)		
OT11	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品	2.45			2.7	「正隆元寶」1157年(金)		
2	古銭	銅製品	2.4			3.4	「阜家通寶」1038年(北宋) 真書		
3	古銭	銅製品	2.4			4.8	「聖宗元寶」1068年(北宋) 真書		
4	古銭	銅製品	-			7.2	2枚が熱で歪んで付いている。(写真のみ)		
5	古銭	銅製品	-			(1.5)	熱で曲がり、2枚に割れている。(写真のみ)		
OT12	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品	2.4			2.8	「聖宗元寶」?		
2	古銭	銅製品	-			7.7	「〇〇元寶」篆書 2枚が歪んで付いている。(写真のみ)		
3	古銭	銅製品	-			4.0	2枚に割れる。(写真のみ)		
OT13	種別	器 種	法 量			成 形・図 案・文 様・備 考		実測方法	出 土 位 置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面		備 考
1	土師器	ふちろび	8.3	5.0	2.1	〇70ナデ	〇70ナデ一底面刻み取付一ツナデ	完全実測	在層 17C(5)ナ
2	土師器	ふちろび	-	(7.2)	(1.2)	〇70ナデ	〇70ナデ一底面刻み取	四角実測	在層 中世
No	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
3	古銭	銅製品	-			3.5	「〇〇通寶」熱で曲がる。(写真のみ)		
OT14	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品	2.5			3.3	「阜家通寶」1038年(明)		
2	古銭	銅製品	2.4			3.0			
3	古銭	銅製品	-			3.3	「元〇通寶」行書 2枚に割れる		
4	古銭	銅製品	2.4			3.4	「元豊通寶」1079年(北宋) 篆書 熱で曲がる		
5	古銭	銅製品	-			(1.0)	1/3残存。(写真のみ)		
OT15	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品	-			10.9	何枚も歪んで付いている。(写真のみ)		
2	古銭	銅製品	-			(1.5)	1/4残存。(写真のみ)		
OT16	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置	
1	古銭	銅製品	2.4			3.4	「阜家通寶」?		
2	古銭	銅製品	2.4			3.3	「元〇通寶」1086年(北宋) 篆書		
3	古銭	銅製品	2.4			4.1	「天聖元寶」? 熱で曲がる		

第39表 出土遺物観察表(24)

単位 cm・g

OT16	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
4	古銭	銅製品	-			3.8	「漢武通寶」1309年(明) 熱で曲がる		
5	古銭	銅製品	-			3.5	「漢武通寶」1309年(明) 熱で曲がる		
6	古銭	銅製品	2.5			3.9	「元祐通寶」1085年(北宋) 行書 熱で曲がる		
OT17	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置 備考
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	土師甕	かわらけ	8.9	5.6	3.2	0.770ナデ→ふこみ器ナデ	0.770ナデ→道師陶車削り	完全天開	DCC64イ?
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
2	古銭	銅製品	2.45			3.9	「永業通寶」1409年(明)		
3	古銭	銅製品	2.8			3.4	「漢武通寶」1309年(明) 郡江若狭州		
4	古銭	銅製品	2.45			3.3	「皇宋通寶」1029年(北宋) 真書		
5	古銭	銅製品	2.8			3.4	「天聖元寶」1029年(北宋) 篆書		
OT18	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
1	不明	銅製品	<1.7>	<0.3>	<0.15>	<0.29>	両端欠損		
OT19	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
1	古銭	銅製品	-			<2.8>	割れて熱で曲がる(写真のみ)		
2	古銭	銅製品	-			<3.1>	割れて熱で曲がる(写真のみ)		
OT21	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
1	古銭	銅製品	2.45			3.2	「永業通寶」1409年(明) 熱で曲がる		
OT22	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
1	古銭	銅製品	2.8			2.8	「開元通宝」K.C.715年(唐末) K.C.717年(文宗皇帝半開元の重寶を四銭(三分錢とも言ふ))		
2	古銭	銅製品	2.8			3.2	「淳熙元寶」1174年(南宋) 真書 熱で曲がる		
3	古銭	銅製品	-			2.7	「紹定通寶」1229年(南宋) 3つに割れる		
4	古銭	銅製品	2.5			2.8	「〇〇通寶」2つに割れる		
5	古銭	銅製品	2.5			6.8	「〇〇通寶」3枚が重な		
OT23	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
1	佛印	安山岩	<11.3>	<18.8>	<11.5>	<264>kg	複製品、図経 約11.0cm 約11.2枚存		
2	古銭	銅製品	-			<0.80>	1/4枚存(写真のみ)		
OT24	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
1	古銭	銅製品	2.8			3.6	「皇宋通寶」1029年(北宋) 真書		
2	古銭	銅製品	2.6			3.6	「治平元寶」1064年(北宋) 真書 曲がって2つに割れる		
3	古銭	銅製品	2.8			3.8	「皇宋通寶」1029年(北宋) 真書 熱で曲がる		
4	古銭	銅製品	-			<1.50>	「元豊通寶」1079年(北宋) 行書 熱で曲がる 3/4枚存		
5	古銭	銅製品	-			<1.1>	(写真のみ)		
6	古銭	銅製品	-			<0.35>	1/7枚存(写真のみ)		
OT26	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
1	織子	銅製品	<9.0>	<1.7>	<0.8>	<9.05>	一方の先端欠損		
2	古銭	銅製品	-			3.0	「〇〇通寶」熱で曲がる(写真のみ)		
3	古銭	銅製品	-			4.3	「〇〇通寶」熱で曲がる、2つに割れている(写真のみ)		
4	古銭	銅製品	-			4.3	「永業通寶」1409年(明) 熱で曲がる(写真のみ)		
5	古銭	銅製品	-			5.6	熱で曲がる(写真のみ) 熱で曲がる		
OT27	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
1	古銭	銅製品	2.35			3.7	「聖宗元寶」1085年(北宋) 真書		
OT29	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
1	古銭	銅製品	2.35			3.2	「淳熙元寶」1174年(南宋) 真書 割・染 熱で曲がる		
2	古銭	銅製品	2.3			3.3	「紹聖元寶」1099年(北宋) 行書 熱で曲がる		
OT31	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置 備考
1	有磁	銅	-	-	-	0.770ナデ→板焼	0.770ナデ→板焼		
OT34	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置 備考
1	土師甕	赤イ	0.125	-	<1.7>	ナデ	ナデ→スリノゾ紋		
No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
2	古銭	銅製品	2.8			3.9	「永業通寶」1409年(明)		

第40表 出土遺物観察表(25)

単位 cm・g

QT4	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置			
3	古銭	銅製品	2.3			3.1	「元患通寶」1079年(北宋) 行書				
4	古銭	銅製品	-			9.3	熟で曲がる。2枚が重なっている(写真のみ)				
5	古銭	銅製品	-			<2.0	熟で曲がる(写真のみ)				
QT5	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置			
1	古銭	銅製品	2.45			3.5	「永樂通寶」1409年(明)				
2	古銭	銅製品	2.5			4.0	「永樂通寶」1409年(明)				
3	古銭	銅製品	2.4			3.3	「順聖元寶」1064年(北宋) 行書				
QT6	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置			
1	古銭	銅製品	2.3			3.3	「洪武通寶」1368年(明)				
2	古銭	銅製品	2.4			3.2	「後和通寶」1111年(北宋) 篆書				
3	古銭	銅製品	2.45			5.3	「永樂通寶」1409年(明)				
4	古銭	銅製品	2.4			3.0	「開元通寶」960年(唐) 真書				
5	古銭	銅製品	2.35			3.1	「聖道元寶」995年(北宋) 篆書				
QT8	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置			
1	古銭	銅製品	-			2.2	「〇〇通寶」				
QT43	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置			
1	古銭	銅製品	2.5			2.2	「元患通寶」?				
2	古銭	銅製品	-			1.0	細かく割れている(写真のみ)				
解P	種別	器種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様 ・ 備 考				実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面			
1	土師器	壺	-	5.8	42.6	コロンナデ→みこみ器ナデ		コロンナデ→底面回転糸切り→底面外周へラケズリ		完全実測	F385
3	土師器	杯	08.0	7.9	4.5	みこみ器ナデ→口縁コナナデ→黒色処理		口縁コナナデ→底面へラケズリ→黒色処理		完全実測	F301
4	埴土器	短頸壺	06.0	-	48.1	コロンナデ		コロンナデ 沈澱あり(東海式)		回転実測	F262
5	土師器	杯	13.3	15.0	4.1	【ガキ→黒色処理		コロンナデ		回転実測	F245
6	埴土器	蓋	17.0	-	11.9	コロンナデ 自然釉付着		コロンナデ→天井面回転へラケズリ		回転実測	F268
7	埴土器	蓋	-	-	12.7	コロンナデ		コロンナデ→天井面回転糸切り→回転へラケズリ→つまみ器付		回転実測	F268 264
8	埴土器	杯	13.0	12.0	3.9	コロンナデ 火だすき痕		コロンナデ→底面糸切り 火だすき痕		回転実測	F388 261
10	埴土器	蓋	-	-	12.6	コロンナデ 火だすき痕		コロンナデ 天井面回転へラケズリ→つまみ器付 火だすき痕		完全実測	F283
11	縄文	鉢	-	-	12.7	ナデ		ナデ 口縁に器付文		鏡片実測	F289
12	土師器	壺	-	-	14.4	ナデ→筒文(放射状)		へラケズリ ナデ→放射状の縄文(甲斐型)		完全実測	F404
13	土師器	杯	15.7	8.9	15.8	コロンナデ 【ガキ→黒色処理		コロンナデ 底面回転糸切り→底面→底面外縁へラケズリ		完全実測	F267
14	埴土器	杯	-	15.0	11.8	コロンナデ		コロンナデ 底面回転へラケズリ→へラケズリあり		完全実測	F215
15	埴土器	杯	14.2	10.2	13.9	コロンナデ 火だすき痕		コロンナデ 底面へラケズリ →へラケズリあり		回転実測	F223
16	埴土器	蓋	15.0	-	13.1	コロンナデ		コロンナデ 天井面回転へラケズリ→つまみ器付		完全実測	F226
18	埴土器	蓋	15.0	-	12.3	コロンナデ 火だすき痕		コロンナデ 天井面回転へラケズリ 火だすき痕		回転実測	F228
19	埴土器	杯	-	-	15.3	コロンナデ		コロンナデ		鏡片実測	F335
20	埴土器	杯	13.2	15.7	14.7	コロンナデ		コロンナデ 底面回転糸切り		回転実測	F345
21	埴土器	壺	-	10.0	13.1	コロンナデ		コロンナデ→底面糸切り		回転実測	F347
22	土師器	壺	12.0	12.2	13.1	ナデ 口縁コナナデ		ナデ 口縁コナナデ 底面へラケズリ		回転実測	F353
23	土師器	蓋	12.0	-	11.1	コロンナデ 【ガキ→黒色処理		コロンナデ 器蓋あり		回転実測	F358
25	埴土器	高杯	-	16.0	12.6	コロンナデ		コロンナデ		回転実測	F403
26	土師器	杯	-	-	12.3	コロンナデ →【ガキ→黒色処理		コロンナデ 器蓋あり		鏡片実測	F409
28	埴土器	壺	17.2	-	16.2	コロンナデ		コロンナデ		回転実測	F419
30	埴土器	有台杯	13.0	16.0	13.6	コロンナデ 火だすき痕		コロンナデ 底面へラケズリ→高台器付 火だすき痕		回転実測	F486
31	土師器	壺	128.2	-	18.3	へラケズリ		へラケズリ		回転実測	F532
32	赤土	壺	-	-	-	【ガキ		磨蝕痕状文 【ガキ		鏡片実測	F533
33	埴土器	蓋	14.2	-	13.2	コロンナデ 火だすき痕		コロンナデ 天井面へラケズリ→つまみ器付 火だすき痕		完全実測	F371
34	埴土器	壺	16.0	-	19.8	コロンナデ		コロンナデ 沈澱 磨蝕痕状文(6枚) 刺点文		回転実測	F371
35	埴土器	壺	-	-	17.0	コロンナデ 当て黒痕		コロンナデ タタキ		鏡片実測	F371
36	埴土器	壺	12.0	-	11.9	コロンナデ		コロンナデ 磨蝕タタキ		回転実測	F371
37	埴土器	壺	-	-	19.7	コロンナデ 当て黒痕→ハケ目状ナデ		コロンナデ タタキ		回転実測	F371
38	埴土器	高杯	-	14.0	13.1	コロンナデ		コロンナデ		回転実測	F372
39	埴土器	壺	-	-	<8.6>	コロンナデ		コロンナデ 沈澱 磨蝕痕状文		鏡片実測	F372
40	埴土器	壺	15.0	-	12.3	コロンナデ		コロンナデ		回転実測	F372

第41表 出土遺物観察表(26)

単位 cm・g

種P	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
									外径
2	羽口	粘土製品	11.2×10.1	～2.1	4.1 (10.3)	520g	破断あり 下部欠損	F131	
9	角釘	鉄製品	0.60	0.6	0.5	0.40	先端欠損	F206	
17	環	銅製品	2.3	2.2	0.4	0.93	φ8.40の円板状付+	F236	
24	不明	鉄製品	8.1	4.0	1.3	55.7g		F336	
27	長脚鍬	鉄製品	0.35	0.90	0.40	0.250	両端欠損	F414	
29	槍頭	鉄製品	0.52	0.20	0.30	0.560	両端欠損 槍頭小径には鉄釘	F481	
土器	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置 備考
			口径(高)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	土師器	罎	-	-	-	コクロナデ	コクロナデ 遺書あり	破片実測	Ⅱ710Gr
2	土師器	かわらけ	15.20	09.00	0.80	コクロナデ	コクロナデ 底面脚転名切り	脚転実測	Ⅱ710Gr下層
3	土師器	かわらけ	-	-	-	コクロナデ	コクロナデ 底面脚転名切り	破片実測	Ⅱ710Gr
4	土師器	かわらけ	-	-	-	コクロナデ	コクロナデ 底面脚転名切り	破片実測	Ⅱ710Gr下層
5	土師器	磁器	-	-	-	ナデ→黄色処理 内耳あり	ナデ	破片実測	Ⅱ710Gr
6	磁器	染付蓋	0.80	天弁4.21	0.27	陶輪	陶輪	脚転実測	Ⅱ710Gr 瀬戸瓦器 近代
7	磁器	染付盆	0.60	天弁0.80	0.18	陶輪	陶輪	脚転実測	Ⅱ710Gr 瀬戸瓦器 近代
8	磁器	染付鉢	-	-	0.25	陶輪	陶輪	破片実測	Ⅱ710Gr 伊万里V期 IBC-E～19C前半
9	磁器	染付小瓶	0.71	2.8	4.4	陶輪	陶輪	完全実測	Ⅱ710Gr 瀬戸瓦器 19C～20C 近代
10	磁器	染付小瓶	0.70	0.80	0.7	陶輪	陶輪	脚転実測	Ⅱ710Gr 瀬戸瓦器 近代
11	磁器	染付碗	-	0.30	0.27	陶輪	陶輪	脚転実測	Ⅱ710Gr中区 瀬戸瓦器 19C中頃
12	磁器	染付小瓶	-	3.3	0.20	陶輪	陶輪	完全実測	Ⅱ710Gr 瀬戸瓦器 19C後半 明治
13	磁器	染付小瓶	-	2.8	0.16	陶輪	陶輪	完全実測	Ⅱ710Gr 瀬戸瓦器 19C後半
14	陶器	甕	-	-	-	陶輪 (灰輪-鉄輪)	陶輪 (灰輪-鉄輪)	破片実測	Ⅱ710Gr 前山径 18C末～19C前半
15	瓦質土器	火鉢	-	-	0.40	コクロナデ	陶輪	破片実測	Ⅱ710Gr 在座 時期不明
16	瓦質土器	火鉢	-	-	0.13	土器手	土器手	破片実測	Ⅱ710Gr 産地不明 時期不明
17	瓦質土器	不明	0.40	-	0.18	ナデ	ナデ	脚転実測	Ⅱ710Gr 産地不明 明治期
18	瓦質土器	不明	0.40	-	0.21	コクロナデ	コクロナデ	脚転実測	Ⅱ710Gr 産地不明 明治期
19	土製品	不明	-	-	-	陶輪		破片実測	Ⅱ710Gr
20	土師器	不明	-	-	-	ナデ	ナデ 穴あり	破片実測	Ⅱ710Gr
27	灰輪陶器	不明	-	-	-	陶輪	陶輪	破片実測	1714Gr 灰土
28	磁器	染付蓋	-	-	0.20	コクロナデ→陶輪	コクロナデ→つまみ足付→陶輪	完全実測	1711Gr 7.0土
29	磁器	染付皿	0.60	-	0.23	コクロナデ→陶輪	コクロナデ→高台足付→陶輪	脚転実測	1714Gr 7.0土
30	磁器	染付皿	-	0.40	0.17	コクロナデ→陶輪	コクロナデ→陶輪	脚転実測	1714Gr 7.0土
31	磁器	皿	-	0.40	0.18	陶輪	陶輪	脚転実測	1711Gr 7.0土
32	陶器	甕	-	0.40	0.28	陶輪 (鉄輪)	陶輪 (鉄輪)	脚転実測	1714Gr 灰土
33	磁器	染付皿	-	0.70	0.29	コクロナデ→陶輪	コクロナデ→陶輪	脚転実測	1714Gr 7.0土
34	磁器	鉢	-	0.40	0.19	陶輪	コクロナデ→高台足付→陶輪	脚転実測	1714Gr 7.0土
35	瓦質土器	火鉢	-	-	-	コクロナデ 灰付着	コクロナデ	破片実測	
36	ガラス	瓶	1.7	2.7	4.0			完全実測	1711Gr 酒波土
37	ガラス	瓶	-	1.6	0.20			完全実測	1711Gr 酒波土
38	瓦	軒平瓦	-	-	0.18	ナデ	唐草文 丁寧なナデ	破片実測	1713Gr 7.0土
39	瓦	瓦瓦	-	-	1.6	へう押文	丁寧なナデ	破片実測	1711Gr 7.0土
40	瓦	瓦瓦	-	-	1.6	和瓦→へう押文→ナデ	丁寧なナデ	破片実測	1713Gr 7.0土
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置	
21	基石	硬質砂岩	2.9	2.3	0.65	7.80	破断なし	Ⅱ710Gr	
22	排管	銅製品	8.6	1.2	1.2	23.52	竹管が透る	Ⅱ710Gr	
23	角釘	鉄製品	0.33	0.50	0.41	0.150	上部欠損	Ⅱ710Gr	
24	角釘	鉄製品	0.60	0.60	0.60	0.600	片端欠損	Ⅱ710Gr	
25	不明	銅製品	0.23	0.23	0.055	0.750	全周欠損 文字あり	Ⅱ710Gr	
26	鏡	アルミ青銅	2.1			3.82	10鏡複製(昭和33年調査)	Ⅱ710Gr	
銅器	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置
			口径(高)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	銅表面	杯蓋	11.00	-	3.0	コクロナデ	コクロナデ→天井部脚転→ラケ文?	脚転実測	V.15Gr
2	銅表面	蓋	-	-	0.26	コクロナデ	コクロナデ→天井部脚転→ラケ文?→つまみ足付 天井部に遺書あり	脚転実測	V.15Gr

第42表 出土遺物観察表(27)

単位 cm・g

第100 図	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置 備考
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面		
3	須恵器	杯	(14.7)	6.7	3.8	コロンナデ 縁だけいり	コロンナデ→底縁を削断垂切り 器蓋あり 縁だけいり	完全実測	溝中2G
4	須恵器	杯	(14.0)	6.0	3.7	コロンナデ	コロンナデ→底縁を削断垂切り 器蓋あり	削断実測	溝中2G
5	須恵器	杯	14.4	8.2	4.1	コロンナデ	コロンナデ→底縁を削断垂切り 火だすき痕	完全実測	V中18G
6	須恵器	壺	-	-	-	コロンナデ	コロンナデ→縁部貼付	破片実測	V中16G
7	土師器	杯	(14.1)	5.5	4.7	七がけ→黒色処理	コロンナデ→底縁を削断垂切り→底縁外周へラケズ	完全実測	V中20G
8	土師器	杯	-	8.0	(1.8)	七がけ→黒色処理	コロンナデ→底縁垂切ヘラケズ	完全実測	V中11G
9	土師器	杯	(12.0)	6.0	4.6	コロンナデ	コロンナデ→底縁垂切ヘラケズ	削断実測	V中18G
10	土師器	杯	(13.6)	-	(3.8)	コロンナデ	コロンナデ	削断実測	V中18G
11	土師器	壺	(13.0)	9.4	3.9	ふこみ器ナゲ→口縁コナデ→幅文	口縁コナデ→底縁に底縁外周へラケズ	削断実測	V中18G
12	土師器	壺	(17.4)	-	(23.6)	柳屋ヘラケズ	柳屋ヘラケズ	削断実測	溝中2G
13	土師器	鉢	(25.8)	-	(8.7)	口縁コナデ ヘラケズ	口縁コナデ ヘラケズ	削断実測	溝中11G
14	須恵器	壺	(20.6)	-	(2.8)	コロンナデ 蓋のみを削断垂切	コロンナデ 刃部削断ヘラケズ	削断実測	1 Gケン
15	土師器	杯	(11.4)	(8.6)	3.6	七がけ	七がけ	削断実測	1 Gケン
16	土師器	壺	(22.4)	-	(7.4)	ナゲ ヘラケ目	ヘラケズ	削断実測	1 Gケン
第101 図	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出 土 位 置 備 考
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面		
1	青磁	蓋形文箱	-	-	(3.2)	箱輪	蓋形文→箱輪	破片実測	ケン 中層 15C末
2	青磁	蓋形文箱	-	-	-	箱輪	蓋形文→箱輪	破片実測	
3	土師質	かへらけ	9.6	5.9	2.6	ふこみ器ナゲ→口縁コナデ 付巻	口縁コナデ→口縁部 縁部下平ケツ 底縁ケツ	完全実測	V中19G 江戸 平づくね土師 打明通に転用
4	土師質	かへらけ	9.6	4.8	2.8	コロンナデ 縁付巻	コロンナデ→底縁削断垂切り →底縁外周へラケズ	完全実測	V中19G 在座 17C中～19
5	土師質	かへらけ	(12.2)	(8.7)	2.5	コロンナデ 縁付巻	コロンナデ→底縁垂切	削断実測	V中15G
6	土師質	かへらけ	-	(8.7)	(2.6)	コロンナデ 縁付巻	コロンナデ→底縁垂切	削断実測	18G 在座 15C後半
7	土師質	かへらけ	9.2	6.2	2.8	コロンナデ	コロンナデ→底縁削断垂切	削断実測	V中16G
第102 図	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出 土 位 置 備 考
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面		
1	陶器	角皿	-	-	-	箱輪(発行)	箱輪	破片実測	溝中1G 瀬戸実測 18C前半～中頃
2	陶器	灯明皿	-	(5.6)	(2.6)	コロンナデ	コロンナデ→底縁削断ヘラケズ→箱輪	削断実測	V中18G 瀬戸実測 江戸後期 18C末～19C前半
3	陶器	皿	-	-	-	箱輪	コロンナデ→蓋付巻	破片実測	18G 前山後 18C末～19C
4	白磁	角皿	-	→(13.7)	(1.1)	柳屋文→箱輪	箱輪	完全実測	V中18G 瀬戸実測 19C前半～中頃
5	磁器	発行蓋	-	-	-	箱輪	箱輪	破片実測	溝中1G 瀬戸実測 19C前半
6	陶器	皿	-	(6.1)	(1.1)	箱輪	箱輪	削断実測	18G 前山後
7	磁器	皿	(10.2)	-	(1.9)	蓋形文→箱輪	蓋形文→箱輪	削断実測	溝中1G カタシ 瀬戸実測 19C
8	青磁	瓶	-	-	-	コロンナデ	箱輪	破片実測	V中18G 瀬戸実測 近代
9	磁器	小皿	5.8	(5.6)	3.2	箱輪	箱輪	完全実測	V中20G カタシ 瀬戸実測 近代
10	青磁	皿	-	(7.0)	(2.0)	箱輪	コロンナデ→箱輪	削断実測	溝中1G 瀬戸実測 近代
11	磁器	小皿	(12.0)	(8.6)	2.2	箱輪	箱輪	削断実測	溝中1G 瀬戸実測 明治
12	磁器	瓶	13.6	7.8	4.6	箱輪	箱輪	完全実測	溝中1G 伊方実測
13	磁器	瓶	(16.4)	(4.4)	5.6	箱輪	箱輪	削断実測	溝中2G 伊方実測 18C末～19C前半
14	磁器	小瓶	9.4	(6.2)	4.8	箱輪	箱輪	削断実測	溝中1G 伊方実測 江戸後期
15	磁器	瓶	(11.4)	-	(2.1)	箱輪	箱輪	削断実測	溝中1G 京屋小浜 18C末～19C前半
16	磁器	小瓶	(11.2)	-	(2.8)	箱輪	箱輪	削断実測	V中15G 瀬戸実測 近代
17	陶器	瓶	-	-	-	箱輪	コロンナデ→平部削断ヘラケズ→箱輪	破片実測	18G 前山後
18	陶器	角形平皿	-	-	-	箱輪	箱輪	破片実測	V中15G 津彦後 18C代
19	陶器	丸皿	-	-	-	箱輪	箱輪	破片実測	V中18G 前山後 18C末～19C前半
20	磁器	発行瓶	-	-	-	箱輪	箱輪	破片実測	18G 瀬戸実測 18C前半～中頃
21	陶器	長輪瓶	-	4.2	(1.4)	箱輪	コロンナデ→底縁垂切ヘラケズ→箱輪	完全実測	V中18G 前山後 18C末～19C前半
22	磁器	発行小瓶	(10.6)	(8.6)	4.8	箱輪	箱輪	削断実測	V中18G 瀬戸実測 18C前半～中頃
23	磁器	発行茶碗	11.6	4.0	5.1	箱輪	箱輪	完全実測	溝中1G 瀬戸実測 近代
24	磁器	発行茶碗	(11.9)	(3.7)	4.9	箱輪	箱輪	完全実測	溝中1G 瀬戸実測 近代
25	磁器	瓶	(11.0)	(4.1)	4.8	箱輪	箱輪	削断実測	18G 瀬戸実測 近代

第43表 出土遺物観察表(28)

単位 cm・g

第1組 順	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 査 ・ 文 様 ・ 備 考		調査方法	出 土 位 置 備 考
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面		
26	磁器	壺付前	-	-	-	無輪	無輪(壺付 7ヶ所)	破片実測	V-26G? 瀬戸実測 近代
27	磁器	酒杯	6.1	2.5	2.7	無輪	無輪	完全実測	V2119G? 瀬戸実測 近代
28	陶器	粉引酒罎	-	0.22	0.22	無輪(底)	無輪	折断面実測	V1718G? 長尾実測 18C末~19C前半
29	磁器	壺付酒罎	-	0.71	0.81	無輪	無輪	折断面実測	V511G? 瀬戸実測 近代
30	磁器	仏瓶	5.3	3.4	5.8	厚底無輪	厚底コウノザ	完全実測	V511G? 瀬戸実測 近代
31	磁器	湯呑	01.80	-	0.51	無輪	無輪	折断面実測	V511G? 瀬戸実測 近代
32	磁器	湯呑	6.2	4.4	7.3	無輪(壺付あり)	無輪	折断面実測	V511G? 瀬戸実測 近代
33	陶器	湯呑	07.30	7.1	8.1	コクロナデー 高ナデー→無輪 みこみ部に給(筋)あり	コクロナデー→高ナデー→無輪 底面に印あり	完全実測	V511G? 地方実?
34	陶器	徳利	-	06.0	02.6	コクロナデー	コクロナデー→高台貼付→無輪(底無)	折断面実測	V1226G? 前山健 18C末~19C前半
35	白磁	徳利	-	07.11	03.3	コクロナデー	コクロナデー→高台貼付→無輪	折断面実測	V511G? 瀬戸実測 18C以降
36	磁器	壺付酒罎	-	4.3	05.3	コクロナデー	コクロナデー→無輪	完全実測	V511G? 瀬戸実測 近代
37	陶器	徳利	-	06.2	02.9	コクロナデー	無輪	折断面実測	V1718G? 産地不明 時代不明
38	陶器	徳利	-	7.6	07.8	コクロナデー 厚底無輪	コクロナデー→高台貼付→コウノザ→無輪	完全実測	V511G? 瀬内実 幕末
39	白磁	徳利	-	8.1	02.1	コクロナデー 厚底無輪	コクロナデー→高台貼付→高台貼付→無輪	完全実測	V511G? 産地? 幕末
40	陶器	片断直	5.8	4.1	6.0	コクロナデー→無輪	コクロナデー→高台貼付→高台貼付→コウノザ→ →高台貼付→上平に無輪	完全実測	V1226G? 瀬戸実測 江戸
41	陶器	打明し	-	-	-	無輪	無輪	破片実測	V511G? 前山健 18C末
42	磁器	一輪押し	-	-	-	コクロナデー	無輪	破片実測	V1226G? 伊方型V期
43	陶器	しんがや	-	-	01.2	コクロナデー→無輪	コクロナデー→無輪	折断面実測	V1718G? 瀬戸実測 18C末~19C前半
第3組 順	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 査 ・ 文 様 ・ 備 考		調査方法	出 土 位 置 備 考
			口径(長)	底径(幅)	器高(深)	内 面	外 面		
44	陶器	急須蓋	4.2	-	01.3	コクロナデー	コクロナデー→無輪	完全実測	V511G? 前山健? 19C前半
45	陶器	急須蓋	06.02	-	01.7	コクロナデー	無輪	折断面実測	V511G? 前山健 18C末~19C前半
46	磁器	急須	6.8	6.2	6.4	無輪	無輪 底面に墨書あり	完全実測	V1718G? 瀬戸実測 近代
47	陶器	急須	06.22	-	02.7	コクロナデー→無輪	無輪(壺付)	折断面実測	V1226G? 瀬戸実測 近代
48	陶器	急須	-	-	-	-	無輪	破片実測	V1718G? 瀬戸実測 近代
49	陶器	土瓶	09.0	-	06.5	無輪(鉄輪)	カキ目→無輪(鉄輪)	折断面実測	V511G? 地方実 18C末~19C前半
50	陶器	磁鉢	-	-	-	コクロナデー→9日全刻付→無輪(鉄輪)	コクロナデー→無輪(鉄輪)	破片実測	V511G? 前山健
51	陶器	土鍋	06.00	-	04.1	コクロナデー→無輪	コクロナデー→ハク目→把手貼付→無輪	折断面実測	V方18G? 前山健 江戸後期 18C末~19C前半
52	陶器	土鍋	06.80	06.21	7.5	コクロナデー→無輪	コクロナデー→把手貼付→無輪	折断面実測	V511G? 産地不明 近代
53	陶器	土瓶蓋	5.2	-	2.4	コクロナデー	コクロナデー→つみろ→高台貼付 →天井蓋→つみろ無輪	完全実測	V511G? 前山健? 18C末~19C前半
54	陶器	土瓶蓋	-	-	-	無輪(鉄輪)	コクロナデー	破片実測	V511G? 瀬戸実測 18C末~19C
55	陶器	行平鍋	05.22	-	06.1	コクロナデー→無輪(鉄輪)	折断面実測	V1226G? 産地不明 19C前半	
56	陶器	行平鍋	07.80	-	05.0	コクロナデー→無輪(鉄輪)	コクロナデー→ハク目→ →注ぎ口貼付→無輪(鉄輪)	折断面実測	V1226G? 瀬内? 18C末~19C
57	陶器	行平鍋	17.0	09.0	8.3	コクロナデー→無輪(鉄輪)	コクロナデー→高台貼付→高台貼付→コウノザ→ →注ぎ口貼付→無輪(鉄輪)	完全実測	V511G? 産地不明 19C以降
58	陶器	鉄輪鉢	-	-	03.0	コクロナデー→無輪(鉄輪)	コクロナデー→無輪(鉄輪)	破片実測	V511G? 瀬内実 18C代
59	陶器	鉢	06.80	-	07.1	コクロナデー→無輪	コクロナデー→無輪	折断面実測	V511G? 前山健 18C前半
60	陶器	鉢	-	05.0	03.0	コクロナデー→無輪(鉄輪) カマタ蓋具あり	コクロナデー→高台貼付→コウノザ→ →高台貼付→無輪(鉄輪)	折断面実測	V511G? 前山健? 近代
61	陶器	鉄輪鉢	08.22	-	05.1	コクロナデー→無輪(鉄輪)	コクロナデー→無輪(鉄輪)	折断面実測	V511G? 瀬内実 18C代
62	磁器	鉢	-	-	-	無輪(壺付)	無輪(壺付)	破片実測	V1226G? 伊方型V期
63	有釉	上絵付鉢	-	06.0	03.6	コクロナデー→高台貼付→無輪	コクロナデー→高台貼付→無輪	折断面実測	V511G? 瀬戸実測 近代
64	磁器	鉢	07.80	-	05.5	無輪	無輪	折断面実測	V511G? 瀬戸実測 近代
65	磁器	鉢	-	06.0	02.1	無輪	無輪	折断面実測	V511G? 瀬戸実測 明治 紙筆刷
66	陶器	二枚鉢	-	-	-	無輪	無輪	破片実測	V1226G? 瀬戸実測 18C以降
67	陶器	鉢	35.8	-	07.1	無輪(鉄輪)	コクロナデー→高台貼付→コウノザ→無輪	折断面実測	具ヶ12G?
68	陶器	壺	02.13	-	09.8	コクロナデー→カキ目(厚部)→無輪(鉄輪)	コクロナデー→カキ目(厚部)→無輪(鉄輪)	折断面実測	V1226G? 産地不明 時代不明
69	陶器	壺	-	-	-	コクロナデー	無輪(鉄輪)	破片実測	V1226G? 産地 近代

第44表 出土遺物観察表(29)

単位 cm・g

第184 図	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置 備考	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面			
70	土師質	磁器	28.0	28.0	(4.1)	ナデ	白線ナデ 底面ヘラナデ	回転実測	罐中1G	
71	土師質	磁器	29.0	29.0	3.0	コクロナデ	コクロナデ→器底面ヘラナデ	回転実測	罐中1G 器内 葦束 18C末→19C後半	
72	土師質	磁器	28.0	27.0	3.0	コクロナデ	コクロナデ→器底面ヘラナデ	回転実測	V20G 器内 葦束	
73	土師質	六絛	34.0	-	(13.1)	コクロナデ ナデ	コクロナデ ナデ 付着物あり	縦片実測	罐中2G	
74	土師質	不明	34.0	(11.0)	15.0			回転実測	罐中1G	
75	瓦質土器	六絛	-	-	(1.6)	ナデ	ナデ	縦片実測	V15G	
76	土師質	六絛類	-	-	(3.1)	ナデ	ナデ	縦片実測	罐中1G	
77	土師質	七輪	径28.0		3.7	黒ヘラナデ	表 ナデ 穿孔(焼成前)	縦片実測	試験	
第185 図	種別	器種	法 量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置 備考	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面			
78	土師質	七輪	22.0	-	(1.5)	七弦	七弦	回転実測	罐中1G 時代不明	
79	瓦質土器	六角蓋	-	38.0	2.8	コクロナデ	コクロナデ→器底面切り→黒台輪付→押さえても切りをつくる(七弦)	回転実測	罐中1G 葦束	
80	土師質	七輪	-	39.2	(12.0)	ナデ	ナデ 穿孔(焼成前)	縦片実測	罐中1G 時代不明	
81	土師質	六絛類	(9.1)	(5.7)	(2.5)		七弦→黒漆色処理	縦片実測	罐中1G 時代不明	
82	瓦質土器	榎木鉢	(14.0)	10.7	10.3	穴1.7	コクロナデ	コクロナデ→器底面面切り→穿孔(焼成前)	完全実測	V15G 産地不明 近代ではない
83	瓦質土器	榎木鉢	(15.0)	10.7	10.2	穴2.1	コクロナデ	コクロナデ→器底面面切り→穿孔(焼成前)	完全実測	罐中1G 産地不明 近代ではない
84	瓦質土器	榎木鉢	(14.0)	11.1	10.4	穴1.2	コクロナデ	コクロナデ→器底面面切り→穿孔(焼成前)	完全実測	罐中1G 産地不明 近代ではない
85	陶器	榎木鉢	-	18.2	(1.8)	コクロナデ	コクロナデ→器底	回転実測	V15G 産地不明 近代	
86	陶器	榎木鉢	-	(1.0)	(1.7)	器輪	器底面ヘラナデ→器底面→器輪付→器輪	回転実測	V17G 瀬戸光造 近代	
87	磁器	染付皿	-	39.0	(3.0)	器輪	器輪	回転実測	皿中1G	
88	磁器	染付皿	36.2	(3.2)	4.5	器輪	器輪	回転実測	皿中1G	
186図	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考	出 土 位 置		
1	磁石	白色輝石	16.9	15.6	8.7	632.0	披懸なし 器径19.8×8.7 器厚2.6	V15G		
2	磁石	白色輝石	17.3	15.0	9.7	813.0	披懸なし 器径13.2×8.6 器厚3.0	罐中1G		
3	漆器	黒曜石	9.3	5.9	3.7	189.85	披懸なし	IVG		
4	角釘	鉄製品	(7.1)	1.0	0.5	(8.90)	先端欠損			
5	角釘	鉄製品	(8.4)	1.0	0.8	(13.30)	先端欠損	V15G		
6	角釘	鉄製品	(5.8)	0.6	(0.5)	(3.40)	先端欠損	V171G		
7	角釘	鉄製品	(6.0)	(0.6)	(0.6)	(5.70)	先端欠損	V170G		
8	古銭	銅製品	2.45			2.9	「寛永通寶」(江戸)	V190G		
9	古銭	銅製品	2.25			2.6	「寛永通寶」(江戸)	IVG		
10	角釘	鉄製品	(5.8)	(0.5)	(0.5)	(4.20)	先端欠損			
11	白玉	滑石	(1.2)	1.65	(0.3)	(1.05)	披懸なし 孔径0.3 一部欠損			
12	磁石	黒灰色チャート	2.9	1.9	0.6	5.15	披懸なし 全長19.0	1G		
13	角釘	鉄製品	(8.0)	(0.8)	(0.5)	4.21	先端欠損	1G		
第187 図	種別	器種	厚み	成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置 備考			
				内 面	外 面					
1	瓦	丸瓦	1.6	ケズリナ	丁字ナデ	縦片実測	F336			
2	瓦	丸瓦	1.5	ケズリナ	丁字ナデ	縦片実測	F222			
3	瓦	丸瓦	(1.9~2.2)	棒状圧痕あり 布痕あり	丁字ナデ	縦片実測	V120G			
4	瓦	丸瓦	2.8	棒状圧痕あり 布痕あり	丁字ナデ	縦片実測	罐中1G			
5	瓦	丸瓦	1.8	棒状圧痕あり 布痕あり	丁字ナデ	縦片実測	V172G			
6	瓦	丸瓦	1.8	棒状圧痕あり	丁字ナデ	縦片実測	罐中1G			
7	瓦	丸瓦	1.8	ケズリナ	丁字ナデ 接合痕あり	縦片実測	罐中1G			
8	瓦	丸瓦	1.8	ケズリナ	丁字ナデ	縦片実測	罐中1G			
9	瓦	軒平瓦	1.6~1.8	ナデ	唐草文 丁字ナデ	縦片実測	F222			
10	瓦	軒平瓦	(1.8)	ナデ	唐草文 丁字ナデ	縦片実測	F222			
11	瓦	平瓦	1.4	ケズリナ	丁字ナデ	縦片実測	F222 焼成前外面から内面への穿孔あり			
12	瓦	軒平瓦		ナデ	唐草文 丁字ナデ	縦片実測	F222			
13	瓦	軒平瓦		ナデ	唐草文 丁字ナデ	縦片実測	F222			
14	瓦	丸瓦	1.8	ナデ	丁字ナデ	縦片実測	F222			
15	瓦	平瓦	1.7~2.8	ナデ	丁字ナデ	縦片実測	F222 焼成前外面から内面への穿孔あり 瓦底あり			

第45表 出土遺物観察表(30)

単位 cm

第187図	種別	器種	厚み	成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置 備考						
				内面	外面								
16	瓦	軒平瓦	ナゲ		基・唐草文 丁字ナゲ	鏡片実測	P222						
17	瓦	軒平瓦	1.6	ナゲ	基・唐草文 丁字ナゲ	鏡片実測	■9×1G+						
18	瓦	軒平瓦	1.8	ナゲ	唐草文 丁字ナゲ	鏡片実測							
19	瓦	軒平瓦	1.6	ナゲ	唐草文? 丁字ナゲ	鏡片実測	P222						
20	瓦	丸瓦	1.7	ナゲク	丁字ナゲ	鏡片実測	P222 接合痕あり						
21	瓦	軒平瓦	1.9	ナゲ	基・唐草文 丁字ナゲ	鏡片実測	■9×7G+						
22	瓦	軒平瓦	1.7	ナゲ	唐草文 丁字ナゲ	鏡片実測	P222						
23	瓦	軒平瓦	1.6	ナゲ	唐草文 丁字ナゲ	鏡片実測	1G+						
24	瓦	軒平瓦	1.3~1.6	ナゲ	唐草文 丁字ナゲ	鏡片実測	P222						
25	瓦	軒平瓦	1.6	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	P222 成形時の接合痕あり						
26	瓦	軒平瓦?	1.7	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	■9+						
27	瓦	平瓦	1.6	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×7G+						
28	瓦	丸瓦	1.8	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	P222						
29	瓦	平瓦	1.5	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	P222 接合前外面から内面への穿孔あり(2ヶ所)						
30	瓦	鬼瓦?	1.6~1.9	ナゲ	丁字ナゲ? 別個による文様	鏡片実測	P105						
第188図	種別	器種	厚み	成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置 備考						
				内面	外面								
31	瓦	平瓦(丸瓦)	1.1	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×1G+						
32	瓦	平瓦(丸瓦)	1.9	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×1G+ 荒欠あり(化粧?)						
33	瓦	平瓦(丸瓦)	1.9	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×1G+						
34	瓦	平瓦	1.6	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×7G+						
35	瓦	平瓦?	1.7	ナゲ 榫状圧痕 刻印あり	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×1G+ 荒欠あり(化粧)						
36	瓦	平瓦	1.9	クズク ハケ目状の痕跡あり	丁字ナゲ	鏡片実測	化粧?						
37	瓦	軒平瓦	1.6	ナゲ	基・唐草文 丁字ナゲ	鏡片実測	D1 二次焼成? 他の基・唐草文と色が異なる						
38	瓦	平瓦(丸瓦)	1.9	ナゲク	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×7G+						
39	瓦	平瓦(丸瓦)	1.8	ナゲク	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×1G+						
40	瓦	飾のし瓦	(1.5~1.3)	ナゲ 榫状圧痕 刻印あり	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×2G+ 化粧						
41	瓦	のし瓦?	1.7	ナゲク	丁字ナゲ	鏡片実測	(榫状) 二次焼成						
42	瓦	平瓦(狭角右)	1.6	ナゲ	丁字ナゲ	鏡片実測	D1						
43	瓦	のし瓦?	1.5	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	D1 粘土付着 工具痕あり						
44	瓦	平瓦(丸瓦)	1.6	クズク	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×2G+ 接合前外面から内面への穿孔あり						
45	瓦	のし瓦	1.8	ナゲク	丁字ナゲ	鏡片実測							
46	瓦	のし瓦	1.7	ナゲク	丁字ナゲ	鏡片実測	M6 内面に割線あり						
47	瓦	平瓦	0.7	ナゲ	丁字ナゲ	鏡片実測							
48	瓦	平瓦	(1.7~1.8)	ナゲク	丁字ナゲ	鏡片実測	■9×1G+ 外面に割線あり						
49	瓦	のし瓦?	1.2	ナゲ 網目目痕(?)あり	丁字ナゲ	鏡片実測	V9×12G+ (榫状)						
189図	器種	素材	規格	重量(%)	A	B	C	D	E	F	G	H	備考
1	空風輪	褐色多孔質安山岩	約1/1	1.79	10.2	0.3	6.6	3.4	13.2	9.3	5.8	20.4	
2	空風輪	褐色多孔質安山岩	約1/1	(1.52)	8.0	0.2	7.7	(1.2)	13.1	5.9	5.7	(17.1)	断面にV字状の条痕あり
3	空風輪	褐色多孔質安山岩	4/5	(1.37)	(6.3)	0.5	8.0	2.9	(12.8)	9.4	6.1	(17.7)	
4	空風輪	褐色多孔質安山岩	1/1	1.58	11.5	0.6	6.3	3.5	14.5	10.3	7.5	21.7	
5	空風輪	褐色多孔質安山岩	約1/1	(1.20)	(6.3)	0.3	7.4	4.9	(11.2)	7.8	5.3	(18.9)	
6	空風輪	褐色多孔質安山岩	約1/1	(0.80)	(4.3)	0.4	7.1	5.0	(10.4)	8.1	5.5	(15.9)	
7	空風輪	褐色多孔質安山岩	3/4	(1.56)	(6.2)	0.4	8.5	(6.2)	14.7	10.0	7.0	(20.4)	
8	空風輪	褐色多孔質安山岩	約1/1	(1.94)	9.7	0.5	(10.4)	(1.1)	13.3	9.3	5.3	(19.6)	
9	空風輪	褐色多孔質安山岩	4/5	(1.46)	(7.8)	0.6	8.3	(0.5)	14.0	10.3	(7.0)	(17.1)	
10	空風輪	褐色多孔質安山岩	約1/1	(4.50)	(10.2)	0.7	6.3	3.0	17.7	13.6	7.1	(20.2)	
11	空風輪	褐色多孔質安山岩	約1/1	(3.74)	(6.6)	1.3	12.0	4.6	17.9	12.1	7.7	24.5	
12	空風輪	褐色多孔質安山岩	1/1	2.99	6.6	0.8	11.0	4.2	17.0	11.0	9.5	23.0	正面に条痕あり
13	空風輪	褐色多孔質安山岩	3/4	(2.26)	5.4	0.0	11.7	4.7	(17.2)	12.2	7.0	22.8	
14	空風輪	褐色多孔質安山岩	3/4	(4.00)	(7.2)	0.8	13.2	(5.3)	(19.1)	12.6	8.4	(25.7)	
15	空風輪	褐色多孔質安山岩	1/1	1.57	9.6	0.7	6.7	4.5	14.1	9.3	4.7	21.5	
16	空風輪	褐色多孔質安山岩	4/5	(2.60)	5.5	0.5	9.4	3.4	(12.2)	9.3	5.2	19.6	

第46表 出土遺物観察表(31)

単位 cm

189段	器種	素材	残存	重量(Kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	備考			
17	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	4/5	<1.29>	0.9	0.4	6.8	<1.4>	14.2	9.1	4.3		(18.5)			
18	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	4/5	<1.90>	0.9	0.8	7.5	<1.0>	12.8	9.3	6.1		(16.2)			
19	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	約1/1	<1.49>	9.0	0.4	6.3	<0.4>	13.6	9.6	5.0		(16.0)			
20	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	約1/1	<2.85>	11.0	0.8	6.6	-	15.2	10.2	-		16.6			
21	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	1/1	4.3	11.0	0.7	3.6	-	13.1	8.8	-		13.7			
22	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	2/3	<0.81>	<14.4>	-	-	-	<12.8>	-	-		<14.4>			
23	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	約1/1	<1.25>	8.3	0.4	7.8	<0.4>	12.5	9.0	-		(18.0)			
24	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	3/4	<1.86>	5.0	0.6	11.8	<0.7>	13.6	9.22	-		(18.3)			
25	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	4/5	<2.18>	8.7	0.6	8.9	<3.3>	13.8	11.0	10.23		(21.4)			
190段	器種	素材	残存	重量(Kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	備考			
26	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	4/5	<2.26>	5.4	1.1	11.5	<0.5>	16.9	9.22	-		(18.5)			
27	空瓶輪	黒色多孔質安山岩	2/3	<2.87>	8.8	0.5	6.1	-	20.4	-	-		(15.4)			
No	器種	素材	重量(Kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	L	M	
28	火輪	黒色多孔質安山岩	5.0	8.3	3.0	1.8	3.8	1.0	11.7	1.6	21.2	19.2	6.1	0.5	13.6	
29	火輪	黒色多孔質安山岩	2.70	6.5	3.5	0.4	5.0	0.4	30.8	7.1	19.8	36.2	5.7	-	11.5	
30	火輪	黒色多孔質安山岩	4.00	11.0	1.7	0.3	2.0	1.0	9.1	2.7	20.7	17.2	12.0	-	14.0	
31	火輪	黒色多孔質安山岩	5.10	10.4	4.0	1.0	3.0	0.8	7.0	3.2	24.5	23.0	5.4	1.5	10.3	
32	火輪	黒色多孔質安山岩	<4.80>	8.0	-	-	2.9	2.0	12.6	4.8	24.5	<19.0>	-	-	13.3	
33	火輪	黒色多孔質安山岩	<4.10>	7.4	2.7	0.8	4.7	0.4	10.5	4.5	25.3	23.7	10.0	0.6	13.6	
34	火輪	黒色多孔質安山岩	<8.30>	8.2	3.0	1.2	4.6	1.5	12.4	4.9	29.6	36.7	12.7	0.8	17.2	
No	器種	素材	残存	重量(Kg)	A	B	C	D	E	備考						
35	水輪	黒色多孔質安山岩	1/1	3.15	13.7	-	18.9	14.0	11.4							
36	水輪	黒色多孔質安山岩	1/1	3.23	14.7	-	23.0	16.5	11.8							
37	水輪	黒色多孔質安山岩	1/1	2.83	14.9	-	20.0	17.5	11.2							
38	水輪	黒色多孔質安山岩	1/1	5.50	12.9	-	23.2	15.5	15.2							
39	水輪	黒色多孔質安山岩	約1/1	<9.90>	<20.2>	-	<28.7>	<20.8>	19.5							
40	水輪	黒色多孔質安山岩	1/1	8.90	22.9	-	30.8	25.5	17.4							
41	地輪	黒色多孔質安山岩	1/1	3.60	18.1	13.5	-	-	-							
42	地輪	黒色多孔質安山岩	1/2	<6.70>	23.0	16.8	-	-	-							
43	地輪	黒色多孔質安山岩	1/1	6.40	21.5	16.3	-	-	-							
44	地輪	黒色多孔質安山岩	1/1	7.90	23.0	16.8	-	-	-							
No	器種	素材	残存	重量(Kg)	最大長	最大幅	最大高	備考								
45	宝篋印塔	基壇	1/1	19.40	28.1	27.8	23.4									
192段	器種	素材	残存	重量(Kg)	A	B	C	D	E	備考						
46	約物口(上口)	安山岩	1/2	<4.86>	<16.5>	29.0	5.5	2.8	5.8	既焼否。						
47	約物口(上口)	安山岩	1/2	<8.56>	<12.8>	<28.7>	<3.3>	<0.8>	0.6	既焼否。 襷子丸 縦2.5横1.8 深さ1.6						
No	器種	素材	重量(Kg)	最大長	最大幅	最大高	備考									
48	平盤	黒色多孔質安山岩	1.8	<17.8>	<14.2>	<12.5>	既焼否。正面の丸縁部分に縁取輪									
134 写真の み	器種	器種	出土位置			産地	時代	備考	器種	器種	出土位置 産地 時代 備考					
	1	磁器	磁付網	D5	伊万里	18C後半		16	陶器	土鍋	V120Gr	黒内産	18C末～19C前半			
	2	陶器	瓦輪桶	D5	前山産	18C末		17	陶器	土鍋	V199Gr	黒内産	18C末～19C前半			
	3	陶器	?	D5	京橋本番	18C末～19C前半		18	陶器	德利	V191Gr	黒内産	近代			
	4	陶器	土鍋	M6	黒内	18C末～19C前半		19	陶器	土鍋	V191Gr	黒内産	18C末～19C前半			
	5	陶器	甕	V1910Gr	伊万里	V期 1780～1850		20	陶器	土鍋	樽11Gr	地方産	18C末			
	6	陶器	網	V1910Gr	伊万里	18C		21	陶器	土瓶	樽11Gr	黒内産	18C末～19C			
	7	陶器	土瓶蓋	V1918Gr	瀬戸美濃	江戸後期	18C末～19C前半	22	陶器	磁器	樽11Gr	黒内産	江戸			
	8	陶器	德利	V1910Gr	瀬戸美濃	江戸後期	18C末～19C前半	23	陶器	瓦輪桶	V1915Gr	前山産	18C末			
	9	陶器	網	V1913Gr	瀬戸美濃	江戸後期	18C末～19C前半	24	陶器	壺	V1913Gr	前山産	江戸後期	18C末～19C前半		
	10	陶器	こしきび網	V125Gr	瀬戸美濃	江戸後期	18C末～19C前半	25	陶器	鉢	V199Gr	前山産	18C末～19C前半			
	11	陶器	德利	V1918Gr	瀬戸美濃	近代		26	陶器	鉢	V1915Gr	前山産	18C末～19C前半			
	12	陶器	瓦輪九輪	M192Gr	瀬戸美濃	18C末～19C前半		27	陶器	瓦輪九輪	M1915Gr	前山産	18C末～19C前半			
	13	陶器	德利	M110Gr	京橋本番	18C末～19C前半		28	陶器	土瓶・土鍋?	M1910Gr	前山産	18C末～19C前半			
	14	陶器	網	M192Gr	京橋本番	18C末～19C前半		29	陶器	瓦輪德利	YG1	前山産	18C末～19C前半			
15	陶器	約物口	M1915Gr	津波産	18C前半		30	陶器	行平鍋	樽11Gr	黒内産?	18C末～19C前半				

第47表 人骨検出状況表(1)

		QT 1			重複もしくは別個体		
性別	推定年齢	成人					
	左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	前頭骨		3				
	側頭骨		7				
	後頭骨		6				
	頂骨		23				
	上顎骨		1				
	下顎骨	2		1			
歯牙	遊離歯牙		2				
椎骨	胸椎		20				
	仙骨		3				
肋骨	肋骨		6				
肩甲骨		1					
上腕骨				5			
肘骨		1		1			
手根骨	腕骨	1					
中手骨			4				
指骨	基節骨		1				
	中節骨		1				
趾骨		3	7	1			
大腿骨		5		2			
膝蓋骨			2				
脛骨		1					
	腓骨	1		1			
	踵骨	1					
	種子骨		1				
足指骨	趾骨		2				
第1中手骨			2				
趾骨	第1趾基節骨			1			
	末節骨		1				
四肢骨			93				
骨片 (a)			108.9				
全体重量 (g)			720				
備考	歯牙あり						
		QT 2			重複もしくは別個体		
性別	推定年齢	M可能性-F					
	左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	前頭骨		3/6				
	側頭骨		23				
	後頭骨		9				
	頂骨		71				
	上顎骨	1		1			
	下顎骨		中欠損1	1			2
歯牙	第1臼歯		1				
	臼歯		2				
	前歯		3				
肋骨	肋骨		63				
肩甲骨	破片		35				
肩甲骨		1	2	2	1		1
上腕骨		3		1			
肘骨		1	1				
尺骨		1		1			
手根骨	腕骨		2				
中手骨	破片		1				
	腕骨		4				
	中節骨		4				
	末節骨		3				
趾骨		6	6	4			
大腿骨		1		1			
膝蓋骨		1					
脛骨			102				
骨片 (a)			118.64				
全体重量 (g)			750				
備考	加齢女性-頭-頸椎に歯あり、臼歯は歯痕あり (3人測、F2)			同一個体			
		QT 3			重複もしくは別個体		
性別	推定年齢	F-不明					
	左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	前頭骨		3				
	側頭骨	前部	3		2		
	後頭骨		17				
	頂骨		6				
	上顎骨		49				
下顎骨		4		1			
歯牙	遊離歯牙		10				
椎骨	破片		15				
肋骨	肋骨		6				
肩甲骨		2		3			
上腕骨			3				
肘骨			2	1			
尺骨		1					
手根骨	舟状骨			1			

第48表 人骨検出状況表(2)

QT 3				遺埋もしくは別個体			
性別	F 不明						
推定年齢	成人						
左右	L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	前頭骨		1				
	側頭骨		1				
	頂骨		1				
	大脳蓋	2		2			
	側蓋骨	1		1			
	顔骨		2				
	正視蓋	1					
	顎1中蓋骨			1			
	四肢骨		133				
	骨片(a)		122.80				
骨片重量(b)		700					
灰化物	動物骨		有				
備考	3人						
QT 4				遺埋もしくは別個体			
性別	M						
推定年齢	成人						
左右	L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	前頭骨		2				
	側頭骨		2				
	頂骨		1				
	大脳蓋		26				
	側蓋骨		2				
	上顎蓋						
	下顎蓋		2				
	永久歯	0 7 6 5 4 3 2 1 1 2 3 4 5 6 7 8	0 7 6 5 4 3 2 1 1 2 3 4 5 6 7 8				
	上顎	1					
	下顎			1			
歯牙	遊離歯牙		11				
	頤骨		1				
	胸骨		2				
	椎骨		1				
	肋骨		1				
	腕骨		1				
	上肢骨			1			
	骨片		1				
	頭蓋骨						
	四肢骨						
骨片(a)		1					
骨片重量(b)		4					
頭蓋骨		2					
側頭骨		4					
大脳蓋	1		1				
正視蓋	1						
側蓋骨		1					
上顎蓋		2					
下顎蓋		2					
顎1中蓋骨		1					
顎2中蓋骨							
四肢骨		58					
骨片(a)		18.23					
骨片重量(b)		280					
灰化物	動物骨		有				
備考	歯牙類・歯の生前喪失						
QT 5				遺埋もしくは別個体			
性別	F						
推定年齢	成人						
左右	L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	側頭骨		11				
	頂骨		29				
	大脳蓋		2				
	側蓋骨			1			
	下顎蓋						
	頤骨		1				
	胸骨		1				
	椎骨		11				
	肋骨		10				
	腕骨		3		1		
上肢骨			2				
骨片		1					
肋骨		1					
腕骨		2					
大脳蓋		2		1			
側蓋骨		1		1			
四肢骨		88					
骨片(a)		34.88					
骨片重量(b)		410					
灰化物							
備考	歯牙類・歯の生前喪失						
QT 6				遺埋もしくは別個体			
性別	不明						
推定年齢	成人・子ども			10代			
左右	L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	前頭骨		1				
	側頭骨		13				
	頂骨		2				
	大脳蓋		94				
	側蓋骨			1			
	骨片						
	上顎蓋		1				
	下顎蓋		1				
	歯牙	遊離歯牙		1			
		頤骨		12			
椎骨	椎骨		1				
	肋骨		2				

第49表 人骨検出状況表(3)

QT 6				重複もしくは別個体		
性別	年齢			10代		
検定年齢	成人・子ども					
左右	L	不明	R	L	不明	R
脛骨	破片		2			
肋骨		17				
胸骨	2		3			
上腕骨				1		
手根骨	小指指骨		1			
中手骨		1				
指骨	中指骨	1				
	中指骨	1				
跗骨		11				
大趾骨			1			
足根骨	距骨	1		1		
足指骨	破片	1				
中足骨		1				
跗骨	第1趾基節骨		1			
	中指骨	1				
跗跖骨		22				
骨片 (a)		104.81				
全体重量 (a)		410				
備考	2人			上腕骨10代		
QT 7				重複もしくは別個体		
性別	年齢					
検定年齢	成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R
股骨	股頭骨	25				
	破片	1				
脛骨	第1指線	1				
	趾骨	2				
脛骨	破片	7				
肋骨		1				
胸骨			1			
手根骨	豆状骨		1			
	大掌指骨		1			
指骨	中指骨	1				
跗骨		6				
大趾骨		2				
跗跖骨	1		1			
跗骨			1			
足根骨	距骨		1			
	踵骨	1				
	立方骨		1			
跗跖骨		112				
骨片 (a)		84.12				
全体重量 (a)		470				
共同物	動物骨	南(シカ大趾骨等)				
備考						
QT 8				重複もしくは別個体		
性別	F・年齢					
検定年齢	成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R
股骨	股頭骨	9				
	股骨	7				
脛骨	股骨	14				
	上腕骨	1				
脛骨	破片	15				
肋骨		29				
胸骨		1				
胸骨		4				
腕骨			1			
上腕骨			1			1
指骨		2	2			
尺骨		1	1			
手根骨	小指指骨					
中手骨	破片	1				
中手骨		4				
指骨	中指骨	2				
跗骨		1	4			
大趾骨			1			
中足骨		1				
跗跖骨		91				
骨片 (a)		41.37				
全体重量 (a)		270				
備考	2人					
QT 9				重複もしくは別個体		
性別	年齢					
検定年齢	成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R
股骨	構成要素が低く、定数するための計数不可					
肋骨			2			
大趾骨						
跗跖骨	1					
跗骨			1			
骨片 (a)		85.55				
全体重量 (a)		242.43				
備考						

第50表 人骨検出状況表(4)

		QT0			遺棄もしくは別個体		
性別	F: 不明(成人・子供・幼児)	F: 不明(成人・子供・幼児)			子供・幼児		
推定年齢	左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	額頭骨		3				
	側頭骨		15				
	頂頭骨		15				
	顔面骨		59				
	眼窩			1			
	上顎骨		3				
	下顎骨	2(遺棄)	2(遺棄)	1			
歯牙	冠層歯牙	49					
椎骨	第1腰椎	1					
	腰椎	1					
肋骨	破片	72					
		24					
胸骨		1					
	肩甲骨	5	1	1	1		
上肢骨	上腕骨		5	1			1
	腕骨	1					
尺骨		1					
	舟状骨	1					
手根骨	舟状骨			1		1	
	月状骨					1	
	豆状骨			1		1	
	基底骨					1	
掌指骨	破片	2					
	中手骨	5					
指骨	基節骨	4					
	中節骨	4					
	末節骨	1					
		7					
跗骨	大趾骨	1		2			
	跗骨	2		2			
跖骨		2	1				
			2				
跰骨	舟状骨			1			
	立方骨	1					
跰骨	跰骨	2					
	跰骨	5					
中足骨		1		1			
趾骨	末節骨			1(遺棄)			
趾骨		114					
骨片 (g)		185.73					
身体重量 (g)		741					
生物物	骨質付着	肋骨(2付着)			長管骨12、短の骨7		
備考		下顎骨、肩甲骨、上腕骨遺留-遺棄物 4人					
		QT1			遺棄もしくは別個体		
性別	F	F			遺棄もしくは別個体		
推定年齢	20歳代前後	20歳代前後			子供・幼児		
左右	L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	額頭骨		3				
	側頭骨		12				
	頂頭骨		2				
	顔面骨		83				
	眼窩	1		2			
	上顎骨		4				
	下顎骨		1			1	
歯牙	冠層歯牙	26					
椎骨	第1腰椎	1					
	腰椎	6					
肋骨	破片	23					
		22					
胸骨		1		1			
	肩甲骨	2		2			
上肢骨	上腕骨	1					
	腕骨	1		1			
尺骨		1		1			
	舟状骨	5	16	5			
手根骨	舟状骨		1				
	基底骨			1			
掌指骨		1					
	中手骨	123					
指骨		143.7					
趾骨		607					
骨片 (g)		143.7					
身体重量 (g)		607					
備考		耳輪出露後有					
		QT2			遺棄もしくは別個体		
性別	男・不明	男・不明			遺棄もしくは別個体		
推定年齢	成人	成人			子供・幼児		
左右	L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	額頭骨		1				
	側頭骨		10				
	頂頭骨		5				
	顔面骨		87				
	眼窩			1			
	上顎骨						
	下顎骨						
歯牙	冠層歯牙	21					
椎骨	第1腰椎	4					
	腰椎	3					
肋骨	破片	29					
		38					
胸骨		2					
	肩甲骨						

第51表 人骨検出状況表(5)

性別		※不明			重複もしくは別個体		
推定年齢		成人					
左右		L	不明	R	L	不明	R
頭骨		5		2			
顔骨		1					
上顎骨				3			
頬骨		2		1			1
片骨		1		1			
手根骨	舟状骨 小指手根骨	1		1			
肋骨			4				
第1肋骨				1			
肩骨	肩胛骨		5				
肘骨	肘骨		3				
腕骨		14		4		2	
大指骨		1	1	1		1	
中指骨				3			
指骨				1			
足骨	距骨	2		1			
足指骨	舟状骨	1					
足指骨	趾骨		12				
中足骨			4				
跗骨			110				
骨片(L)			190.67				
骨片重量(g)			1040				
骨片物	動物骨		有				
備考		1人					
性別		※不明			重複もしくは別個体		
推定年齢		成人					
左右		L	不明	R	L	不明	R
頭骨	額頂骨		4				
	額頂骨		5				
	額頂骨		10				
	下顎骨		1				
歯牙	歯根歯牙		1				
脛骨	第2脛骨		1				
脛骨	趾骨		15				
肋骨			3		1		
腕骨		1					
	肩胛骨		4				
	中腕骨		1				
	末腕骨		1				
腕骨		3	5	1			
大指骨			2				
中指骨		1		1			
指骨			1				
足指骨	距骨		1	1			
跗骨			49				
中足骨			72.29				
骨片(L)			345				
骨片重量(g)			345				
骨片物	動物骨		有(鹿角)				
備考							
性別		※不明			重複もしくは別個体		
推定年齢		成人					
左右		L	不明	R	L	不明	R
頭骨	額頂骨		4				
	額頂骨		10				
	額頂骨		7				
	額頂骨		48				
	上顎骨		1				
	下顎骨	5		1			
脛骨	第1脛骨		1				
	趾骨		7				
脛骨	趾骨		20				
肋骨			19				
肋骨		1		2			
上腕骨		1	4	2			1
腕骨		2		1			
片骨				2			
肋骨	趾骨		3				
肋骨			7				
肩骨	肩胛骨		1				
腕骨		4		3			
大指骨		1	6	1			
中指骨				1			
指骨		2	2	1			
足骨			4	1			
足指骨	距骨	1		1			1
	舟状骨		1				
中足骨			4				
趾骨	第1趾基節骨		4	1			
	基節骨		4				
跗骨			66				
骨片(L)			196.36				
骨片重量(g)			720				
備考		1人					

第52表 人骨検出状況表(6)

		0115			重複もしくは別個体			
性別	検定年齢	男						
		30歳代後半						
		左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	額骨			9				
	側頭骨			5				
	頂骨			47				
	上顎骨			2				
	下顎骨			5				
歯牙	遊離歯牙			4				
椎骨	第1頹椎			1				
	第2頹椎			1				
	胸椎			3				
	腰椎			4				
	仙骨			1				
椎骨	破片			50				
肋骨				25				
肩胛骨				4				
鎖骨				3				
上腕骨				1				
前腕骨				1				
手骨				1				
足骨				4				
跗骨				1				
跖骨				4				
趾骨				1				
足指骨	趾骨			1				
	蹄状骨			1				
中足骨				2				
跗跖骨				121				
骨片 (a)				75, 37				
全体重量 (g)				500				
共伴物	動物骨			骨、歯肉(1(生))				
	炭化物			骨				
備考	破壊有、歯肉有							
		0116			重複もしくは別個体			
性別	検定年齢	疑わぬ性						
		成人						
		左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	額骨			1				
	側頭骨			5				
	頂骨			4				
	上顎骨			66				
	下顎骨			2		1		
歯牙	遊離歯牙			4				
椎骨	破片			44				
肋骨				8				
肩胛骨				2				
鎖骨				3				
上腕骨				1				
前腕骨				10				
手骨				1				
足指骨	趾骨			1				
	蹄状骨			2				
中足骨				7				
跗跖骨				97				
骨片 (a)				169, 2				
全体重量 (g)				319, 54				
共伴物	骨質付着			骨(四肢骨に付着)				
備考	歯肉有							
		0117			重複もしくは別個体			
性別	検定年齢	不明						
		成人						
		左右	L	不明	R	L	不明	R
骨片 (a)								
全体重量 (g)								
備考								
		0118			重複もしくは別個体			
性別	検定年齢	疑わぬ性						
		成人						
		左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	額骨							
	側頭骨			9				
	頂骨			5				
	上顎骨			20				
	下顎骨			3				
歯牙	遊離歯牙			3				
椎骨	仙骨			5				
椎骨	破片			11				
肋骨				3				
肩胛骨				1				
鎖骨				2				
上腕骨				1				

第53表 人骨検出状況表(7)

0718				遺体もしくは骨格体			
性別	推定年齢	骨格性					
	姓名	成人			L	不明	R
	左右	L	不明	R			
頭蓋	前頭蓋	1	1				
	側頭蓋	1					
手鏡骨	大鏡骨	1					
	小鏡骨						
肋骨	肋骨	8					
	前肋骨	2					
	中肋骨	1					
肩胛骨	肩胛骨	1(1個)					
	肩胛骨						
腕骨		4					
大趾骨		2	1		1		1
趾骨			1		1		1
趾骨			1		1		
足鏡骨	趾骨	1					
	趾骨			1			
中足骨		5					
趾骨	趾骨	2					
趾骨	趾骨	2					
骨片(a)		251.25					
全体重量(g)		740					
骨伴物	動物骨	鹿角1					
	炭化材	有					
備考		2人					同一個体

0719				遺体もしくは骨格体			
性別	推定年齢	骨格性					
	姓名	成人・幼児			L	不明	R
	左右	L	不明	R			
頭蓋	前頭蓋	4					
	側頭蓋	6					
	後頭蓋	9					
	頂頭蓋	11					
	上顎骨	1					
	側鼻骨・蝶骨	32					
	下顎骨	1					
歯牙	歯槽歯牙	46					
椎骨	蝶骨	63					
肋骨		12					
腕骨		1					
手鏡骨		3		6			
上腕骨		1		1			
腕骨		2		3			
尺骨		2		1			1
手鏡骨	舟状骨	1				1	
	月状骨			1		1	
手鏡骨	豆状骨			1			
	三角骨	2					
中手骨	蝶状	7					
	基節骨	7					
肋骨	肋骨	10					
	前肋骨	2					
	中肋骨	1(1個)					
肩胛骨	肩胛骨	4	1	2			
	肩胛骨						
大趾骨		1	2				
趾骨		1	1				
趾骨		1	3				
趾骨			2				
足鏡骨	趾骨	1		3			
	趾骨	1		1			
中足骨	趾骨	1		1			
	趾骨	1		2			
趾骨	趾骨	3					
趾骨	趾骨	3					
骨片(a)		340					
全体重量(g)		1390					
備考		3人(成人2, 子ども1)					
		子ども骨(肋骨・肩胛骨・腕骨)					

0720				遺体もしくは骨格体			
性別	推定年齢	骨格性					
	姓名	成人			L	不明	R
	左右	L	不明	R			
頭蓋	頭頂蓋						
骨片(a)		1.91					
全体重量(g)		9.11					
備考							

0721				遺体もしくは骨格体			
性別	推定年齢	骨格性					
	姓名	成人			L	不明	R
	左右	L	不明	R			
頭蓋	前頭蓋	1					
	側頭蓋	6					
	後頭蓋	6					
	頂頭蓋	1					
	上顎骨	15					
	側鼻骨	1					
	下顎骨	2	2	4			1

第 54表 人骨検出状況表(8)

0721				登録もしくは別個体		
性別	検定年齢	不詳		成人		
		L	R	L	不詳	R
歯牙	磨蝕歯牙		20			
骨質	第1頰骨		1			
	脛骨		10			
	腰骨		4			
	肋骨		5			
	骨片		95			
肋骨		40				
胸骨		4	2			
鎖骨		1				
上肢骨		2				
腕骨		3	2			
尺骨		2	1			
手根骨	舟状骨		2			
	月状骨		1			
	豆状骨		1			
	大槓骨		1			
	腕骨			1		
	有鈎骨		1			
中手骨			6			
	基部骨		3			
	中部骨		6			
指骨	基部骨		3			
	中部骨		3			
腕骨		3	6	2		
大指骨		1	1			1
膝蓋骨			2		1	2
足骨	距骨		1			
	距状骨		不詳	2		
中足骨			6			
趾骨	基部骨		1(第1)			
四肢骨			215			
骨片(計)			242/33			
全体重量(g)			1370			
内臓物	動物骨		無			
	炭化材		無			
	炭化物		無			
備考		2人				大腸骨成人男性

0722				登録もしくは別個体		
性別	検定年齢	不詳		成人		
		L	R	L	不詳	R
頭蓋骨	前頭骨		2			
	前額		6			
	側頭骨		6			
	後頭骨		11			
	顔面骨		25			
	上顎骨		1			
	顎骨		10			
歯牙	磨蝕歯牙		15			
骨質	第1頰骨		3			
	第2頰骨		1			
	脛骨		3			
	腰骨		6			
	腰骨		3			
	肋骨		2			
	肋骨		2			
骨質	骨片		191			
肋骨			51			
胸骨		5	2	1		
鎖骨		1				
腕骨		1				
尺骨		1				
手根骨	骨片		2			
			4			
中手骨			4			
指骨	基部骨		4			
	中部骨		5			
腕骨		6	6			
大指骨		43				
膝蓋骨		1	1			
足骨		2				
足骨	距骨			1		
	距状骨			1		
足骨	骨片		11			
中足骨			5			
第1中足骨						
趾骨	第1趾基部骨		1		1	
四肢骨			98			
骨片(g)			228/27			
全体重量(g)			990			
内臓物	動物骨		有(シカ骨)			
	炭化材		無			
	炭化物		無			
備考		第1頰骨3同一個体炭化した骨確認				

第55表 人骨検出状況表(9)

QT3					遺骨もしくは別個体		
性別	推定年齢	年齢					
	左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	側頭骨		6				
	頂骨		4				
	顔面骨		18				
	頰骨		2				
椎骨	胸椎		3				
	腰椎		2				
肋骨	肋骨		3				
	肋骨		26				
肋骨	肋骨		19				
	肋骨	1		1			
腕骨	腕骨		1				
	腕骨		2				
指骨	指骨		1				
	指骨	2	5				
足指骨	足指骨	1		1			
	足指骨	1		1			
手足指骨	手足指骨		1				
	手足指骨		98				
骨片 (g)		81.75					
全体重量 (g)		300					
共伴物	青銅付着	有					
備考							
QT4					遺骨もしくは別個体		
性別	推定年齢	年齢					
	左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	側頭骨		5				
	頂骨		6				
	顔面骨		28				
	頰骨		23				
椎骨	下頷骨		4				
	胸椎		7				
肋骨	肋骨		5				
	肋骨		2				
肋骨	肋骨		22				
	肋骨		14				
腕骨	腕骨		1				
	腕骨	1		1			
指骨	指骨		1				
	指骨		2				
足指骨	足指骨		1				
	足指骨	1		1			
手足指骨	手足指骨		1				
	手足指骨		1				
骨片 (g)		213.92					
全体重量 (g)		840					
共伴物	動物骨	有					
	炭化物	有					
	炭化物	有					
備考							
QT5					遺骨もしくは別個体		
性別	推定年齢	年齢					
	左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	側頭骨		1				
	頂骨		10				
	顔面骨		6				
	頰骨	1					
椎骨	上頷骨		2				
	下頷骨		3				
肋骨	肋骨		5				
	肋骨		12				
肋骨	肋骨		5				
	肋骨		1				
腕骨	腕骨		25				
	腕骨	4		1			
指骨	指骨	3		1			
	指骨	1		2			
足指骨	足指骨		1				
	足指骨		3	1			
手足指骨	手足指骨		6				
	手足指骨	1		1			
骨片 (g)		345.2					
全体重量 (g)		870					
備考	頭蓋の骨質が薄い 好焼出土産物						

第56表 人骨検出状況表(10)

		0126				量程もしくは別個体		
性別		♀-不明						
推定年齢		成人						
左右		L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	額頭骨		10					
	側頭骨		2					
	頂頭骨		10					
	顔面骨		67					
	蝶形骨		1					
	上顎骨	1	3	1				
歯	頤蓋骨 破片		3					
	下顎骨	3	5	1				
歯牙	遊離歯牙		7					
	第1頰椎		1					
椎骨	第2頰椎		1					
	第7頰椎		3			2		
	胸椎		32					
	腰椎		18			1		
椎骨	仙骨		5					
	破片		28					
肋骨		8		10				
肩胛骨		2		2	2			
上腕骨		5	1	2				
前腕骨		3		4				
尺骨		2		2				
手根骨	舟状骨		1	1				
	月状骨		1	1				
	大掌骨	1						
手根骨	小掌骨	1						
	破片		2					
中手骨		2						
指骨	基節骨		1					
	中節骨		1					
	末節骨		3					
跗骨		9	10	14				
跖骨		10	1	8				
跰骨		2		1				
趾骨		4		2				
趾骨		3	1		2			
足脛骨	脛骨			1				
中足骨			3					
趾骨	基節骨		1					
骨片(g)			370					
全体重量(g)			1560					
骨伴物	動物骨		無					
	炭化材		無					
	貨幣行書		無					
備考		3人(♀、不明) 遺失(未収)			加群(熟少者)			

		0128				量程もしくは別個体		
性別		♀-不明						
推定年齢		成人						
左右		L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	額頭骨		28					
	側頭骨		15					
	頂頭骨		13					
	顔面骨		1	1				
	蝶形骨				1			
	上顎骨		1		1			
歯	頤蓋骨		1					
	下顎骨		1					
手根骨	舟状骨		1	1				
	月状骨		1	1				
手根骨	大掌骨		1					
	小掌骨		1	1				
中手骨			1	1				
指骨	基節骨		2					
	中節骨		1					
趾骨		1		1				
足脛骨	脛骨		1	1				
中足骨	楔状骨(中間)		1					
中足骨			4					
趾骨			41					
骨片(g)			105.36					
全体重量(g)			218					
備考								

		0129				量程もしくは別個体		
性別		♀-不明						
推定年齢		成人						
左右		L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	額頭骨		1					
	側頭骨		8					
	頂頭骨		1					
	顔面骨		61					
	蝶形骨		1					
	上顎骨		1					
歯	頤蓋骨		1					
	下顎骨		2					
歯牙	遊離歯牙		8					
椎骨	破片		8					
肋骨			3					
肩胛骨			1					

第57表 人骨検出状況表(11)

性別		F 可動性			量種もしくは別個体		
検定年齢		成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R	
歯骨	1						
尺骨			1				
手根骨	有頭骨	1		1			
	近側骨	1					
中手骨		3					
指骨	基底骨	4					
	中節骨	6					
	末節骨	3					
大趾骨			3(同一)				
四指骨	1		1				
趾骨			1				
趾骨	1						
趾骨	基底骨	1					
四指骨		41					
骨片 (g)		179.2					
全体重量 (g)		440					
備考							
性別		F 可動性			量種もしくは別個体		
検定年齢		成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	前頭骨	4					
	側頭骨	3					
	頂頭骨	58					
	顔骨	1					
	篩骨						
前牙	近側前牙	3					
椎骨	短骨	1					
椎骨	破片	23					
肋骨		8					
肩甲骨	1						
中手骨		2					
尺骨		2					
大趾骨	1						
中足骨		1					
四指骨		119					
骨片 (g)		64.68					
全体重量 (g)		200					
其他物	動物骨	無					
備考							
性別		F 可動性			量種もしくは別個体		
検定年齢		成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	前頭骨	4					
	側頭骨	13					
	後頭骨	6					
	頂頭骨	58					
	顔骨	1					
	上顎骨		8				
前牙	下顎骨		2				
	近側前牙	20					
椎骨	第1腰椎	2					
	第7腰椎	1					
	頸椎	5					
	短骨	7					
	椎骨	破片	40				
肋骨		8					
肩甲骨	1		2				
上腕骨	1		1				
手根骨	月骨		1				
	豆状骨	1					
中手骨		5					
指骨	中節骨	3					
尺骨		5					
大趾骨		11	5				
四指骨	1						
趾骨		4	1				
趾骨		1					
趾骨	趾骨		1				
	趾骨		1				
趾骨	舟状骨		1				
趾骨	破片	1					
中足骨		3					
趾骨	基底骨	5					
趾骨	中節骨	1					
四指骨		125					
骨片 (g)		126.79					
全体重量 (g)		590					
備考							
骨箱底裏(色つ)							

第58表 人骨検出状況表(1/2)

0132						量種もしくは別個体		
性別		年齢						
検定年齢		成人		未成年				
左右		L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	前頭骨 前面		1(1名)					
	前頭骨		5					
	側頭骨		6					
	額骨		98					
	顔骨	1						
	上顎骨		5					
	下顎骨		2					
歯牙	歯根歯牙		27					
脛骨	脛骨		3					
脛骨	破片		29					
肋骨			16					
肩胛骨		1	2					
上肢骨			3					
肋骨			1					
手続骨	肩甲骨			1				
	肘骨	1						
	小指骨			1				
	指骨	1		1				
中手骨			1					
			6					
指骨	中指骨		7					
	薬指骨	1(兼1)	3	1(兼1)				
		3	19	1				
脛骨		3						
肋骨		1		1				
肋骨			2					
足指骨	踵骨			1				
	第1趾骨		1					
	第2趾骨		1					
中足骨			3					
趾骨			316					
骨片(片)			169, 18					
全体重量(kg)			740					
内作物	動物骨		無					
備考								
0133						量種もしくは別個体		
性別		年齢						
検定年齢		成人		未成年				
左右		L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	前頭骨		3					
	前頭骨		5					
	側頭骨		5					
	額骨		20					
	上顎骨		2					
		下顎骨		3				
歯牙	歯根歯牙		3					
脛骨	破片		10					
肋骨			1					
指骨	基節骨		1					
	中指骨		1					
	薬指骨		1					
骨片(片)			37, 07					
全体重量(kg)			85, 13					
備考	メトヒズム1							
0134						量種もしくは別個体		
性別		年齢						
検定年齢		成人		未成年				
左右		L	不明	R	L	不明	R	
頭蓋骨	前頭骨		2					
	前頭骨 前面		1(1名)					
	前頭骨		3					
	側頭骨		6			1		
	額骨		74			2		
	上顎骨	1		2				
	下顎骨		7(前-)					
歯牙	歯根歯牙		5					
脛骨	破片		12					
肋骨			3					
肩胛骨		1		1				
上肢骨				2				
肋骨			2					
手続骨	破片		2					
中手骨			7					
指骨	基節骨		6					
	中指骨		3					
	薬指骨		1					
肋骨			1					
肋骨				1				
足指骨	趾骨		3					
足指骨	踵骨		2					
趾骨	破片		3					
中足骨			4					

第59表 人骨検出状況表(13)

QT34							
性別		不明					
推定年齢		成人					
左右		L	不明	R	L	不明	R
趾骨	基底骨		3				
	中節骨		3				
跗骨			123				
骨長 (cm)			170.60				
全長重量 (g)			560				
元素物	炭化物		有				
備考							線筒骨、趾骨骨質実在 線筒骨線筒
QT35							
性別		不明					
推定年齢		成人					
左右		L	不明	R	L	不明	R
趾骨	跗骨		2				
	趾骨		11				
趾骨	下頷骨		10				
	歯牙	遊離歯牙	6				
椎骨	椎骨		1				
椎骨	椎片		5				
肋骨	肋骨	1		1			
肋骨	肋骨	1					
大腸骨		1					
肋骨	肋骨	3		1			
足指骨	趾骨			1			
足指骨	趾状骨 (中間)	1					
足指骨	椎片		3				
中足骨			5				
趾骨	第1趾基節骨				1		
趾骨	基底骨		6				
趾骨	基底骨			1 (薬1)	1 (薬1)		
跗骨			35				
骨長 (cm)			95.70				
全長重量 (g)			228.00				
元素物	動物骨		有				
備考							同一
QT36							
性別		不明					
推定年齢		成人					
左右		L	不明	R	L	不明	R
趾骨	跗骨		9				
	趾骨		10				
趾骨	趾骨		11				
	趾骨		34				
趾骨	趾骨		4				
	趾骨		1				
趾骨	上頷骨		1	1			
	趾骨		14				
趾骨	下頷骨	3	1	1			
	歯牙	遊離歯牙		11			
椎骨	第2頸椎		2				
椎骨	椎片		47				
肋骨			21				
肋骨		2		2			
上頷骨			14	1			
肋骨			6	1			
肋骨		1	2	1			
足指骨	趾骨		1				
中足骨			3				
趾骨			4				
大腸骨			7				
趾骨			5				
趾骨			5				
足指骨	趾骨	1		1			
足指骨	趾状骨			1			
中足骨			2				
趾骨	趾骨		2				
跗骨			108				
骨長 (cm)			580				
全長重量 (g)			1310				
元素物	炭化物		有				
元素物	炭化物		有				
備考			適用無?				
QT37							
性別		F可能性					
推定年齢		20歳代の可能性					
左右		L	不明	R	L	不明	R
趾骨	跗骨		1				
	趾骨		9				
趾骨	趾骨		3				
	趾骨		89				
趾骨	趾骨		4				
	趾骨		2				

第60表 人骨検出状況表(14)

性別		F可能性			量値もしくは割合		
検定年齢		20歳代の可能性					
	左右	L	不明	R	L	不明	R
椎骨	仙骨		1				
椎骨	椎片		20				
	肋骨		70				
頭骨		2					
	上顎骨		9				
	歯骨		1	1			
	中手骨		1				
指骨	基底骨		3				
	中節骨		6				
	末節骨		4				
	跗骨		1				
	大趾骨		13				
	趾蓋骨		1				
	跗骨		6				
	趾骨		6				
	趾骨	種子骨	1				
	中足骨		2				
	趾骨	第1趾基底骨	1				
	趾骨	末節骨	1				
	跗骨		40				
	骨片 (g)		182.00				
	全体重量 (g)		400				
	共存物		炭化物				
	備考						
性別		F可能性			0738		
検定年齢		成人					
	左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	前頭骨		6				
	側頭骨		10			3	
	後頭骨		7				
	頂骨		46				
	顔骨		1				
	上顎骨		1				1
歯牙	流離歯牙						8
椎骨	仙骨		1				
椎骨	椎片		10				
	肋骨		32				
頭骨		1					
	上顎骨		4	2	3		
	歯骨		1				
	尺骨		1		2		
	掌骨	月状骨			1		
	中手骨		3				
指骨	第1指基底骨		1				
	基底骨					2	
	跗骨		3				
	趾骨	趾骨	1		1		
	中足骨		5				
	跗骨		23				
	骨片 (g)		144.09			2.30 (炭化)	
	全体重量 (g)		420			31.37	
	共存物		炭化物				
	備考						
性別		F可能性			量値もしくは割合		
検定年齢		成人					
	左右	L	不明	R	L	不明	R
歯牙	流離歯牙			5			
椎骨	胸椎		1				
	肋骨		11				
	上顎骨		10		2		
指骨	基底骨	2		1			
	末節骨			1			
	跗骨			1			
	大趾骨		24				
	趾蓋骨	1		1			
	跗骨	4		8	3		
	趾骨	3		3			
	中手骨	1		1			
	第1中足骨	1		1			
	趾骨	第1趾基底骨	1		1		
	趾骨	中節骨			1 (炭化)		
	跗骨		12				
	骨片 (g)		82.41				
	全体重量 (g)		300				
	共存物		炭化物				
	備考						

第61表 人骨検出状況表(15)

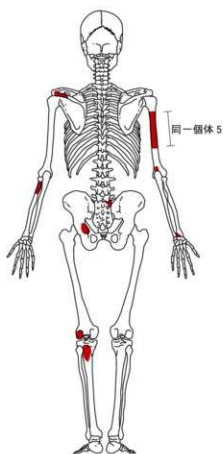
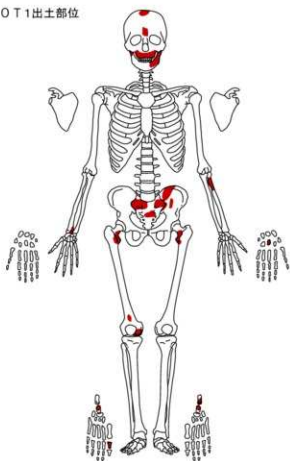
QT40				登録もしくは別個体		
性別	年齢					
推定年齢	成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	頭蓋骨	破片	10			
歯牙	遊離歯牙		2			
椎骨	破片		3			
肋骨		1				
大腿骨			5			
脛骨			4			
膝骨			1			
足骨	中足骨		1			
骨片 (g)			40.92			
全体重量 (g)			62.7			
備考						
QT41				登録もしくは別個体		
性別	年齢					
推定年齢	成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	頭蓋骨	破片	8			
歯牙	遊離歯牙		2			
椎骨	頸椎骨		1			
骨片 (g)			23.87			
全体重量 (g)			33.96			
備考						
QT42				登録もしくは別個体		
性別	年齢					
推定年齢	成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨			2			
上脛骨			12			
大腿骨			1			
骨片			1			
骨片 (g)			48.73			
全体重量 (g)			152.82			
備考						
QT43				登録もしくは別個体		
性別	F 不明性別					
推定年齢	成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	前頭骨		16			
	後頭骨		9			
	側頭骨		106			
	篩骨	破片	4			
	下顎骨			1		
歯牙	遊離歯牙		8			
椎骨	破片		1			
肋骨			24			
胸甲骨		2				
上脛骨			7			
尺骨				1		
手根骨	破片		5			
中手骨			1			
指骨	基節骨		1			
	中足骨		5			
跗骨			6			
大腿骨			2	2		
脛骨				1		
距骨	種子骨		2			
跗骨	破片		3			
趾骨	第1趾基節骨	1		1		
足骨	中足骨		3			
	基節骨	1 (第1)	3			
四肢骨			99			
骨片 (g)			191.47			
全体重量 (g)			1529			
共存物	動物骨		高			
	炭化物		高			
備考	歯垢痕跡					
QT44				登録もしくは別個体		
性別	M・F 不明性別					
推定年齢	成人					
左右	L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	前頭骨		4			
	側頭骨		9			
	後頭骨		4			
	篩骨		15			
	篩骨	破片	11			
椎骨	破片		9			
肋骨			16			
上脛骨			3			
腕骨			4			
尺骨			5 (M), F2)			

第62表 人骨検出状況表(16)

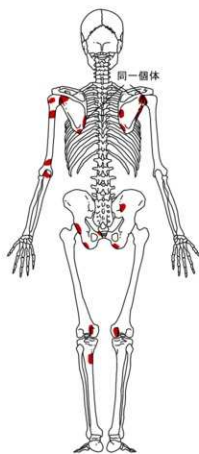
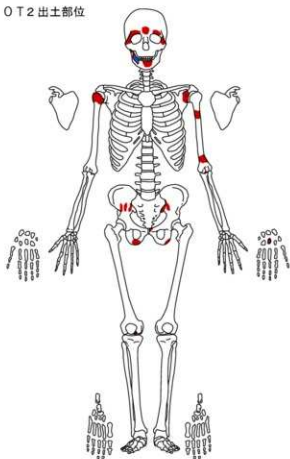
性別		M・F可能性			重複もしくは別個体		
特定年齢		M・F可能性					
左右		L	不明	R	L	不明	R
手塚骨	肩甲骨	1					
	大骨節骨	1					
	小骨節骨			1			
手塚骨	破片		1				
中足骨			5				
跗骨	基節骨		4				
	中節骨		3				
	末節骨		2	1(裏)			
大趾骨		1	12				
跗骨			14				
跗骨			2				
趾骨	近骨			1			
	中骨	1		1			
	遠骨			1			
	趾状骨【内側】	1			1		
種子骨			2				
中足骨			8				
跗骨	基節骨		2				
	中節骨		2			1	
	末節骨		2	1(裏)		1	
跗骨			26				
跗骨【左】			115.79				
全体重量【左】			340				
其他物	動物骨		骨(鳥類)				
備考		2人				両室有(色つき)	
性別		M可能性			重複もしくは別個体		
特定年齢		20代後半から40代					
左右		L	不明	R	L	不明	R
頭蓋骨	前頭骨		2				
	側頭骨		9				
	頂頭骨		7				
	顔面骨		108				
	頬骨		8				
	下顎骨		1				
脛骨	脛骨		9				
	脛骨		3				
	仙骨		1				
跗骨			5				
跗骨		1					
跗骨			3				
跗骨			2				
手塚骨	肩甲骨			1			
手塚骨	破片		1				
中足骨			9				
跗骨	基節骨		2				
	中節骨		2				
	末節骨		1				
跗骨		1					
跗骨		15	1	4			
跗骨				6			
趾骨	近骨		1				
中足骨			2				
跗骨	基節骨		2				
跗骨			56				
跗骨【左】			112.7				
全体重量【左】			320				
備考		同一個体(色つき)					

注1) M→男性、F→女性

OT1出土部位

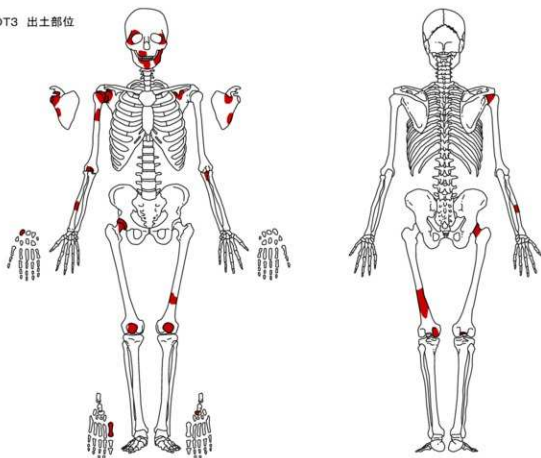


OT2出土部位

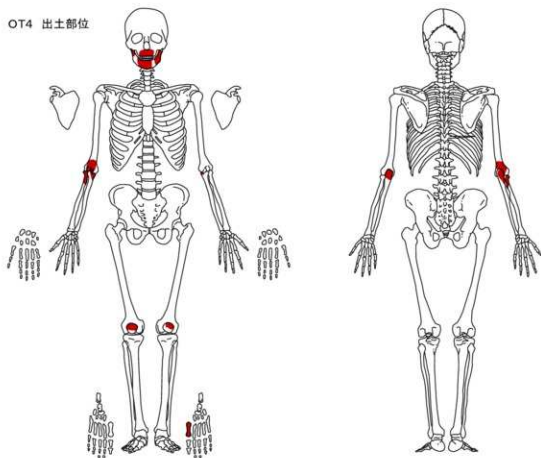


第1图 OT1、2号火葬墓出土人骨部位(1)

OT3 出土部位

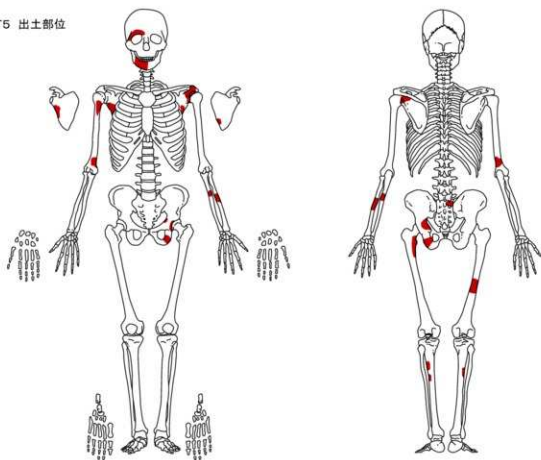


OT4 出土部位

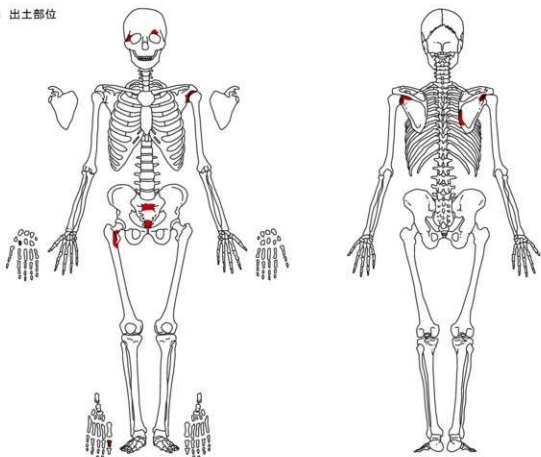


第2图 OT3, 4号火葬墓出土人骨部位(2)

OT5 出土部位

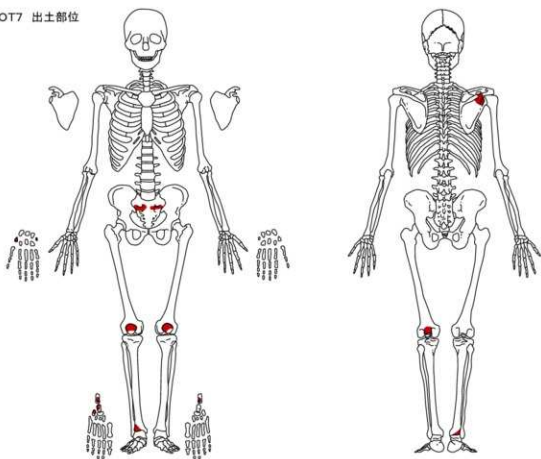


OT6 出土部位

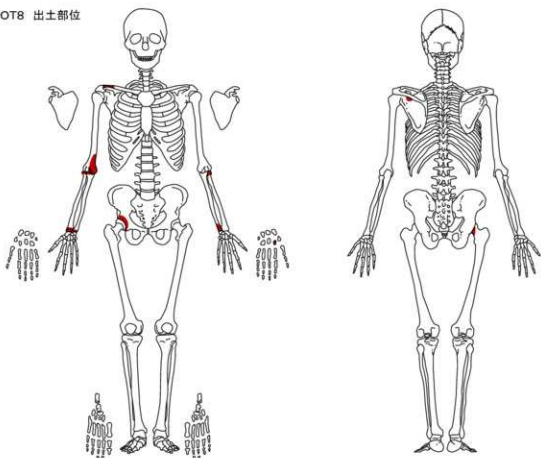


第3图 OT5. 6号火葬墓出土人骨部位(3)

OT7 出土部位

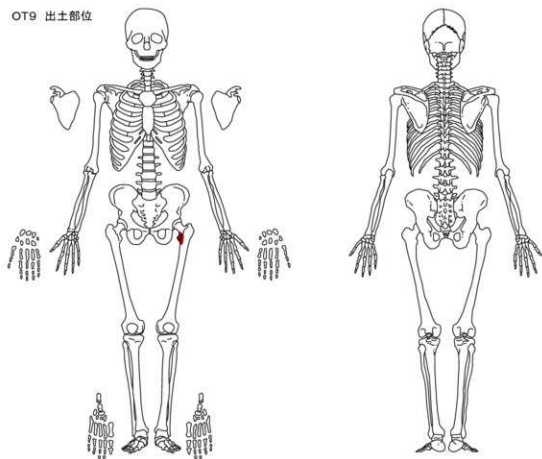


OT8 出土部位

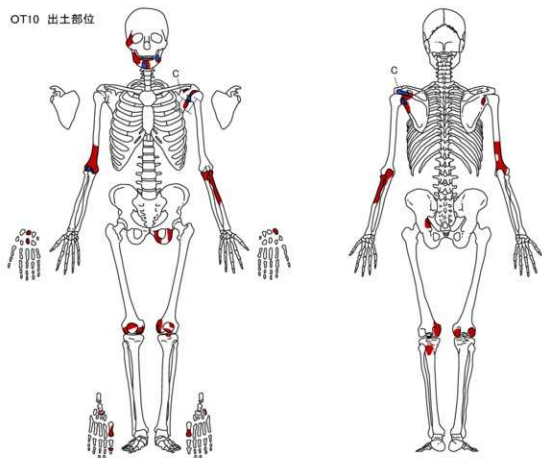


第4图 OT7、8号火葬墓出土人骨部位(4)

OT9 出土部位

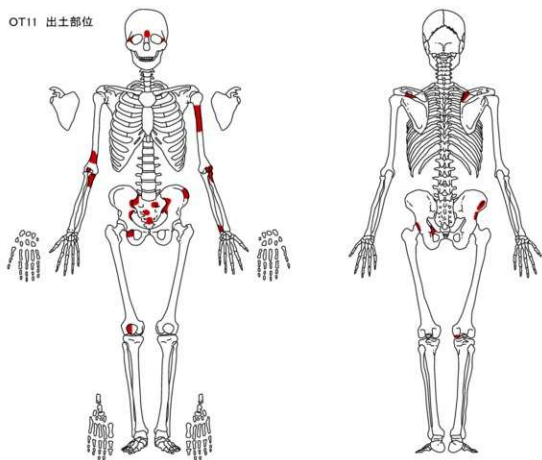


OT10 出土部位

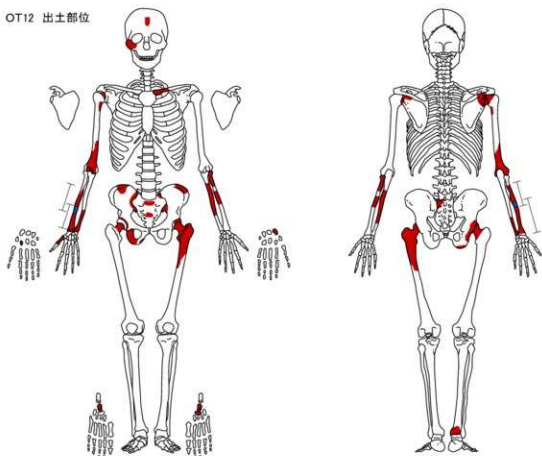


第5图 OT9土坟墓, 10号火葬墓出土人骨部位(5)

OT11 出土部位

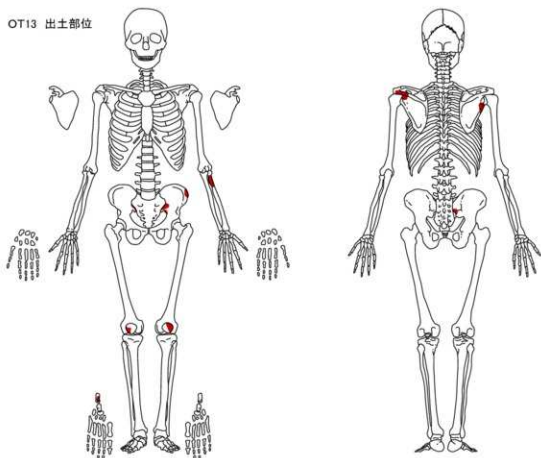


OT12 出土部位

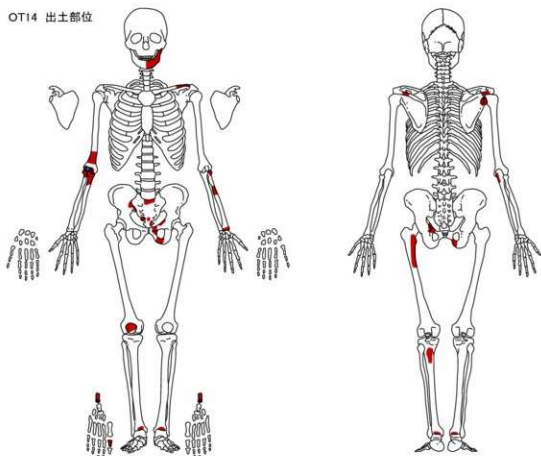


第6图 O T11. 12号火葬墓出土人骨部位(6)

OT13 出土部位

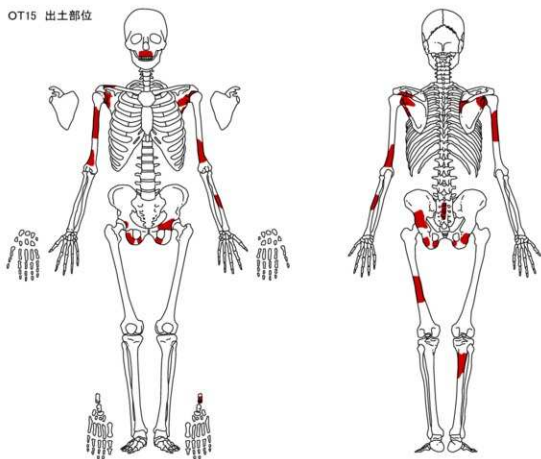


OT14 出土部位

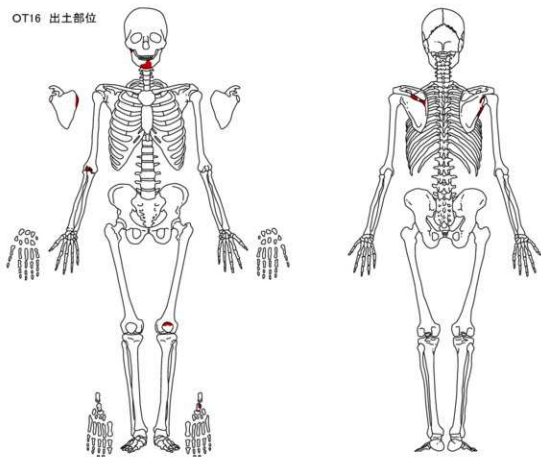


第7图 O T 13. 14号火葬墓出土人骨部位(7)

OT15 出土部位

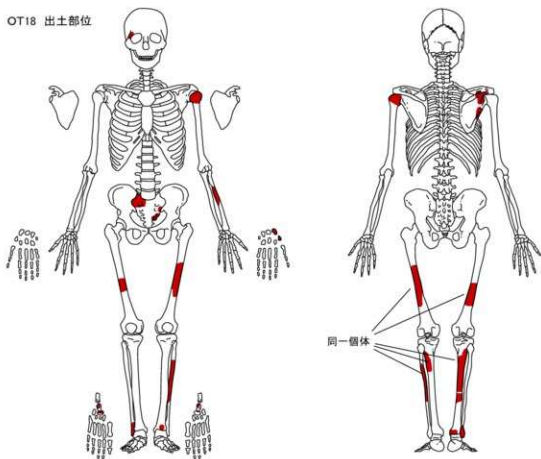


OT16 出土部位

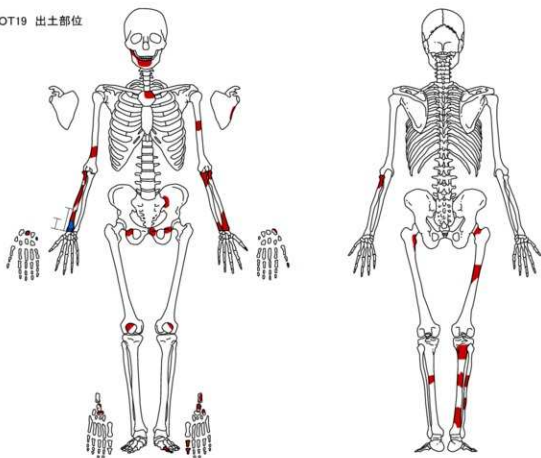


第8图 OT15、16号火葬墓出土人骨部位(8)

OT18 出土部位

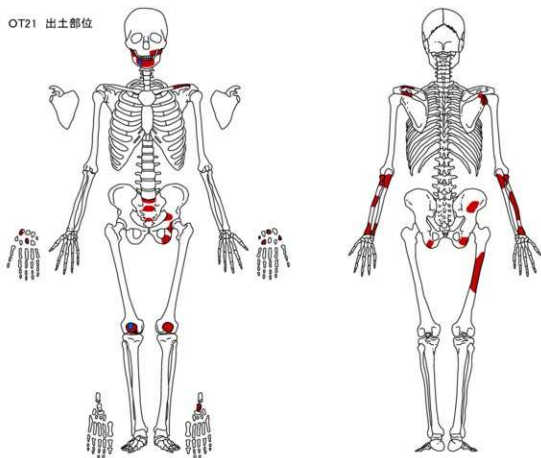


OT19 出土部位

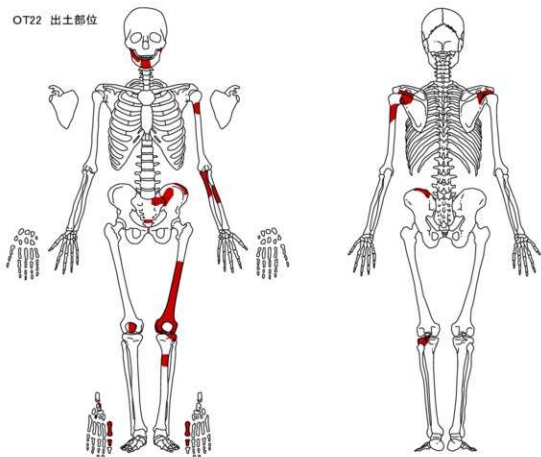


第9图 O T 18. 19号火葬墓出土人骨部位(9)

OT21 出土部位

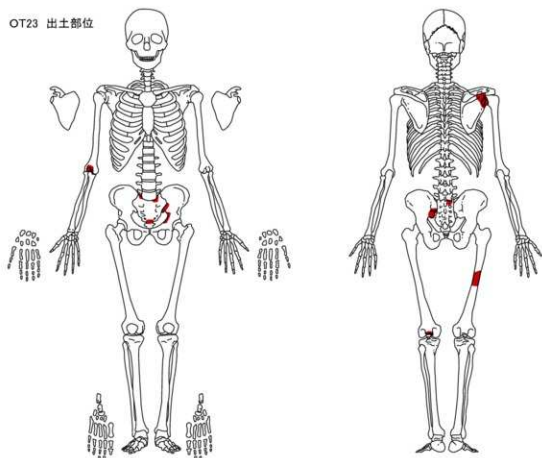


OT22 出土部位

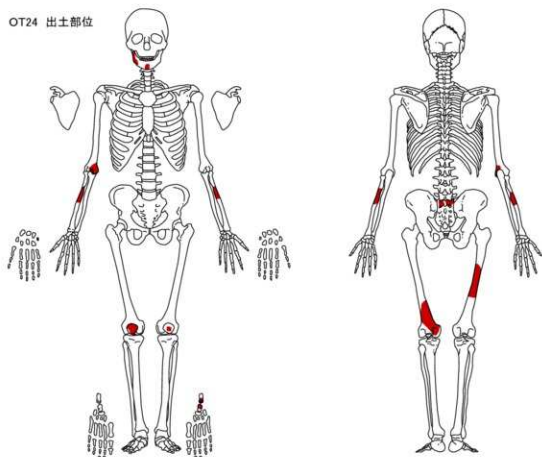


第10图 OT21、22号火葬墓出土人骨部位(10)

OT23 出土部位

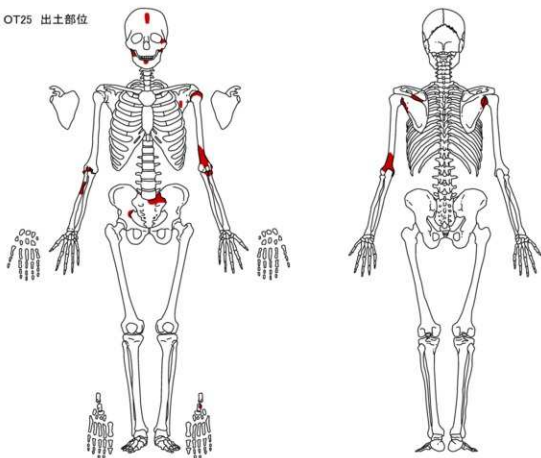


OT24 出土部位

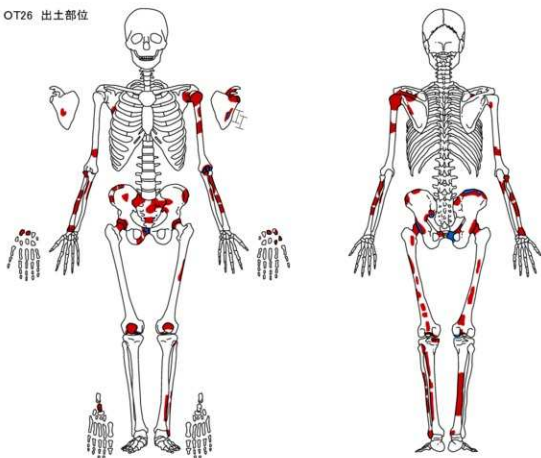


第11图 OT23. 24号火葬墓出土人骨部位(11)

OT25 出土部位

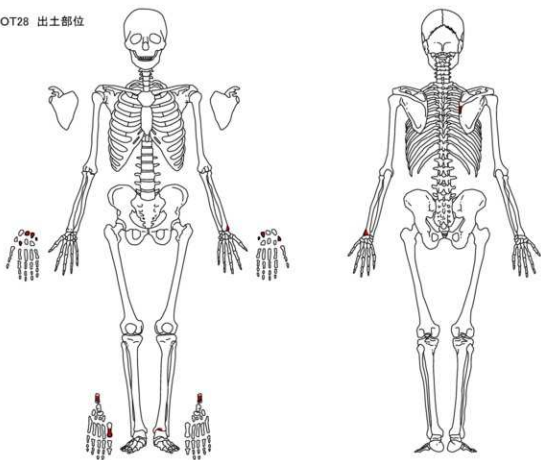


OT26 出土部位

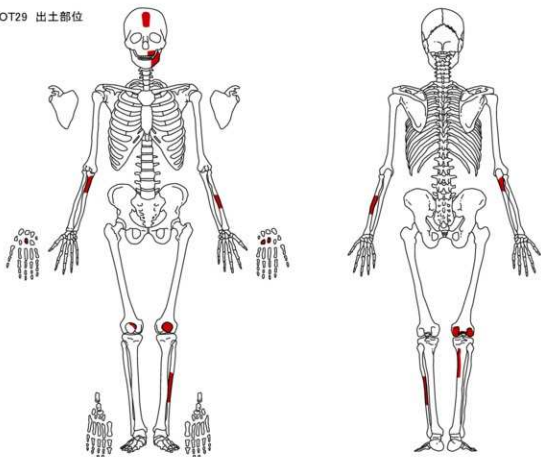


第12图 OT25、26号火葬墓出土人骨部位(12)

OT28 出土部位

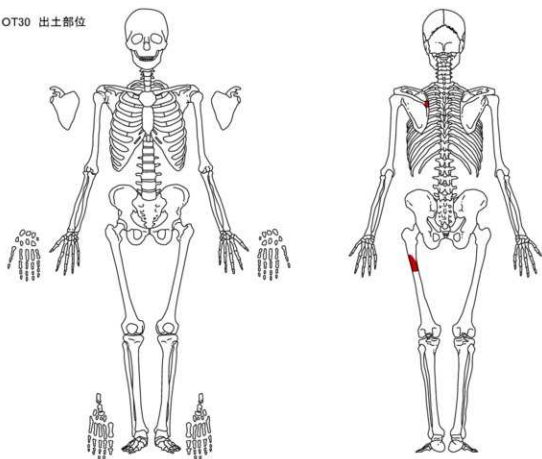


OT29 出土部位

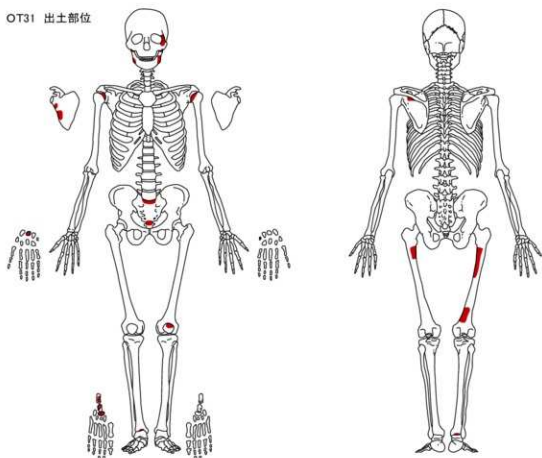


第13图 OT28、29号火葬墓出土人骨部位(13)

OT30 出土部位

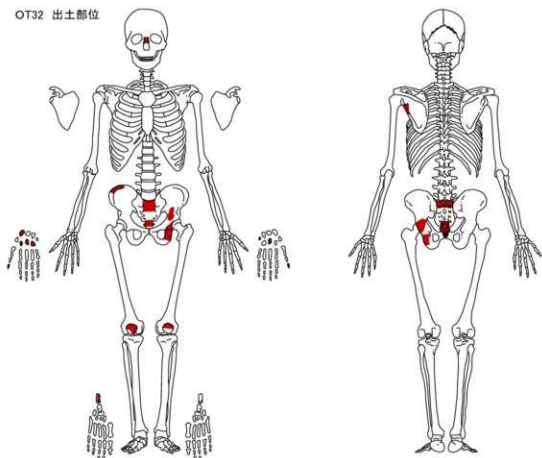


OT31 出土部位

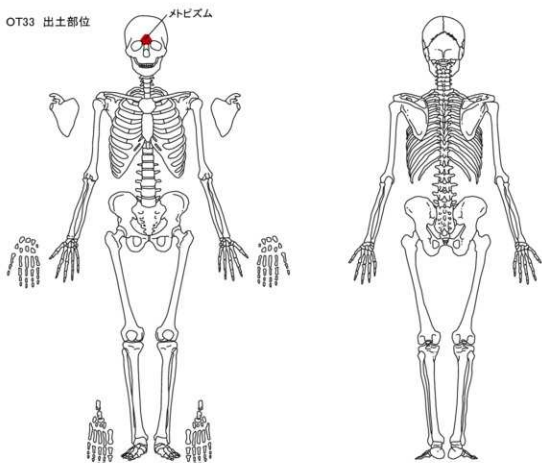


第14图 OT30、31号火葬墓出土人骨部位(14)

OT32 出土部位

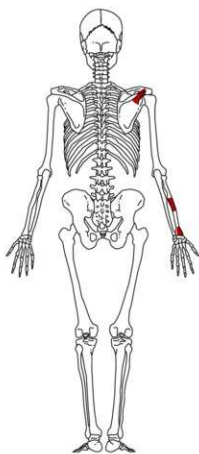
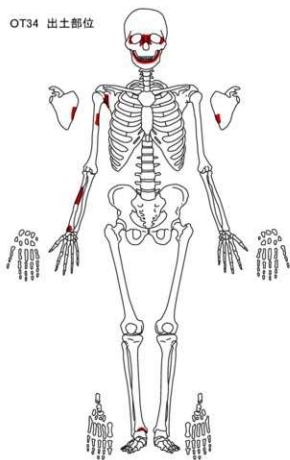


OT33 出土部位

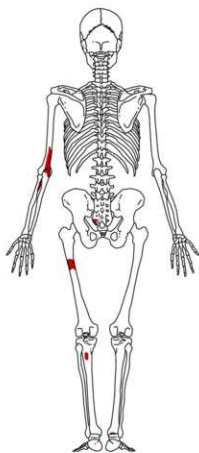
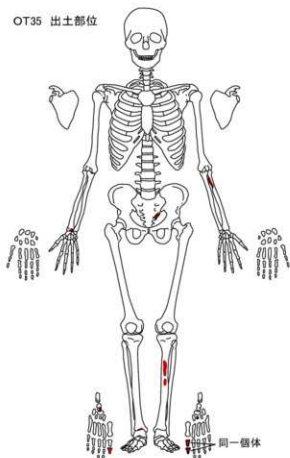


第15図 OT32. 33号火葬墓出土人骨部位(15)

OT34 出土部位



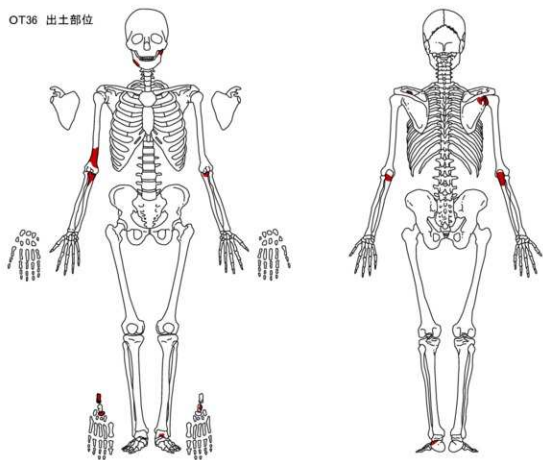
OT35 出土部位



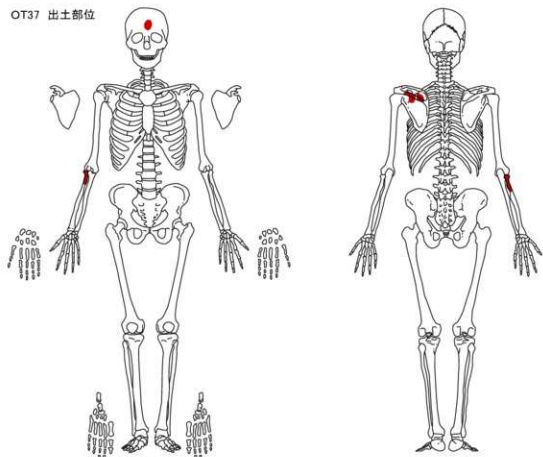
同一體

第16圖 OT34、35号火葬墓出土人骨部位(16)

OT36 出土部位

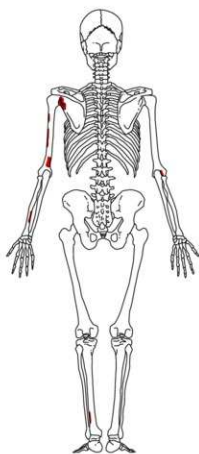
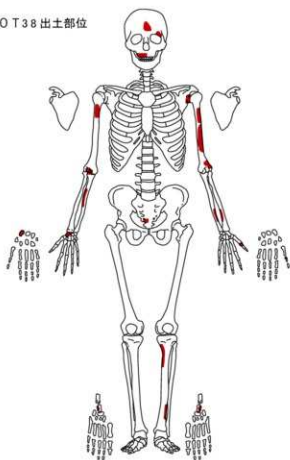


OT37 出土部位

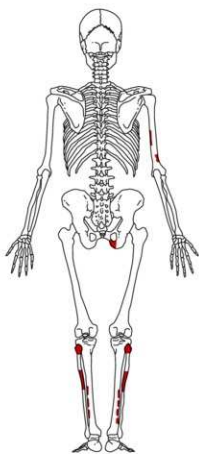
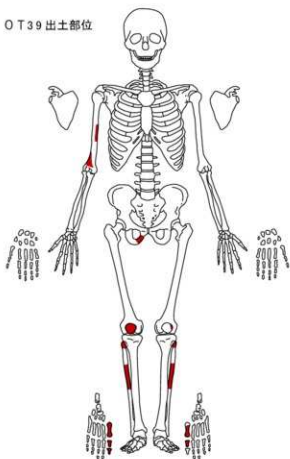


第17图 OT36、37号火葬墓出土人骨部位(17)

OT38 出土部位

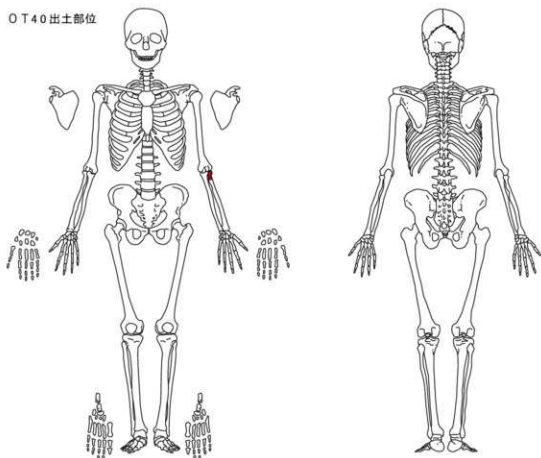


OT39 出土部位

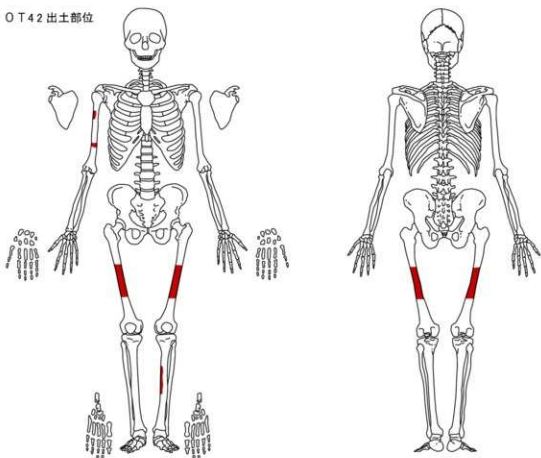


第18图 OT38. 39号火葬墓出土人骨部位(18)

O T 40 出土部位

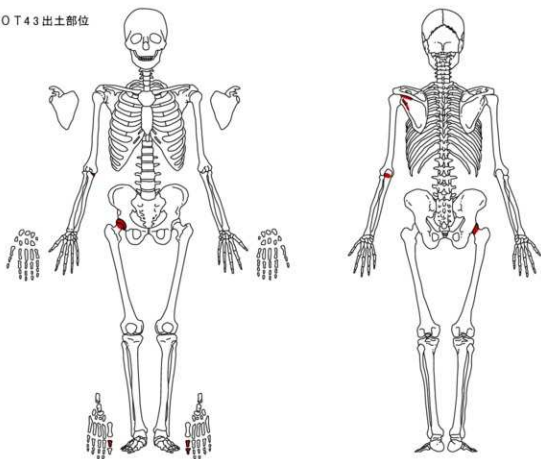


O T 42 出土部位

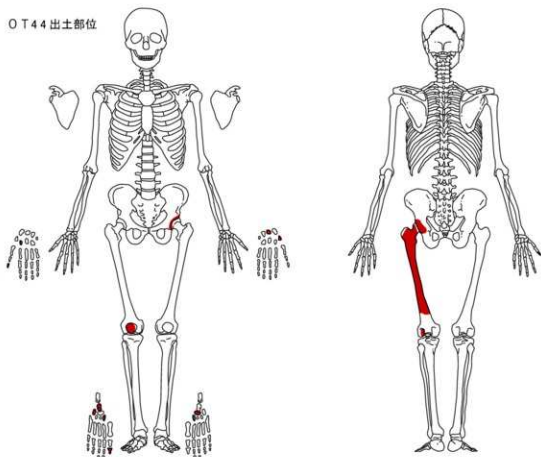


第19图 O T 40火葬墓. 42号土坑墓出土人骨部位(19)

O T 43 出土部位

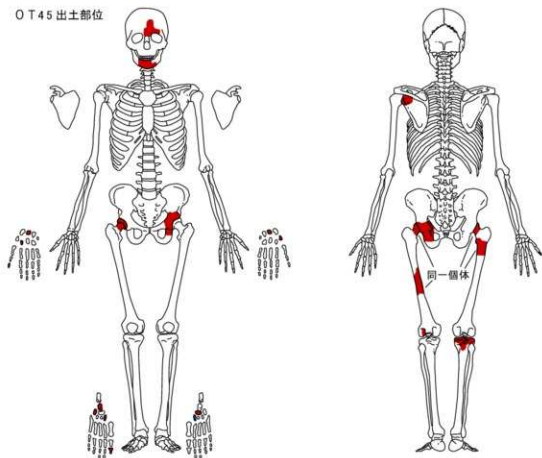


O T 44 出土部位



第20图 O T 43. 44号火葬墓出土人骨部位(20)

OT45 出土部位



第21图 OT45号火葬墓出土人骨部位(21)

報告書抄録

ふりがな	ふじがじょうあと							
書名	藤ヶ城跡							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第293集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	2023年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		東経	北緯	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ふじがじょうあと 藤ヶ城跡	さくしいわむらだ あざうえのじょう 佐久市岩村田 字上の城 2641-2 外	20217	542	36° 16.01	138° 28.57	20150424 ～ 20191129	6324	学校改築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
藤ヶ城跡	城跡	弥生 ～ 近世	住居跡 64軒 土坑 44基 掘立柱建物跡 31棟 溝状遺構 13本 火葬墓・土壇墓 45基	弥生土器 土師器 須恵器 石製品 金属製品 五輪塔 陶磁器類 瓦				
要約	湯川を望む台地上に展開する古代の集落の一部分を調査した。また、その存在が不明であった小字「上ノ城」が示すと考えられる中世城館の堀の一部が発見され、その存在が確かめられた。近世「藤ヶ城」は土塁や南門の礎石と考えられる遺構を調査できたが、本丸部分については後世の既存建物建設により遺構等は検出できなかった。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第293集

藤ヶ城址

2023年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

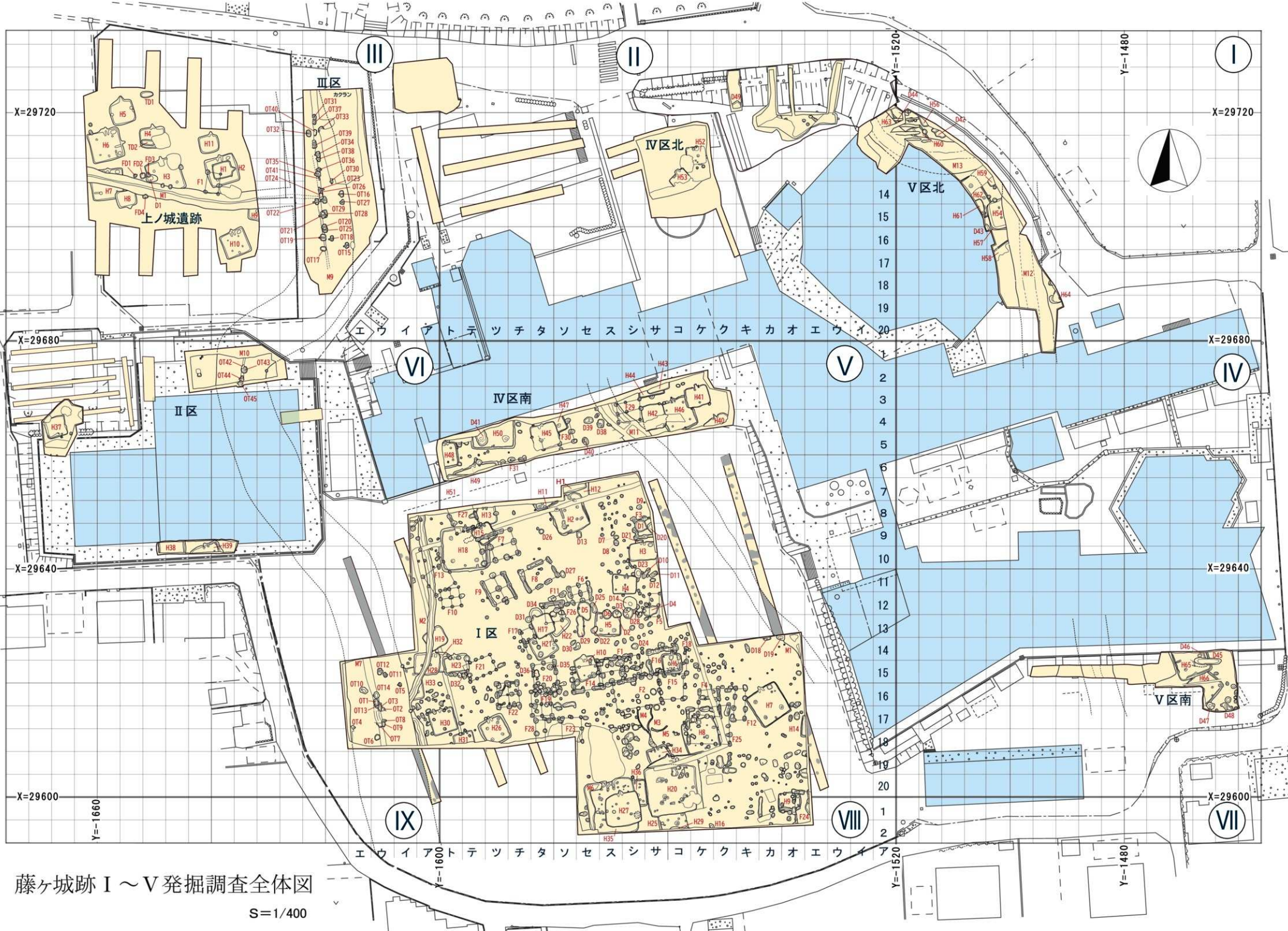
〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所 キクハラインク有限会社



藤ヶ城跡 I ~ V 発掘調査全体図

S=1/400